

個性「メ化」

カフェイン中毒

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

身体の半分が機械で出来た異形型個性を持つ、ヒーロー志望生のお話。

※ただし主人公はクソデカロマンウエポンを振り回す身長240cmのメカクレロングヘアなむちむちメカ少女とする

【最近Fate読み始めt（以下略）様より支援絵をいただきました。

目次

入学編

1話

1

2話

9

3話

16

4話

24

5話

31

6話

38

7話

45

8話

52

U  
S  
J  
編

9話

59

体育祭編

12話

82

11話

75

10話

67

13話

89

14話

96

15話

103

16話

110

17話

117

18話

124

19話

131

20話

139

21話

146

4  
3  
話

4  
2  
話

4  
1  
話

4  
0  
話

3  
9  
話

I・アイランド編

3  
8  
話

3  
7  
話

3  
6  
話

3  
5  
話

3  
4  
話

3  
3  
話

期末試験編

3  
2  
話

3  
1  
話

3  
0  
話

2  
9  
話

2  
8  
話

2  
7  
話

2  
6  
話

職場体験編

2  
5  
話

2  
4  
話

2  
3  
話

2  
2  
話

309

302

295

287

279

272

265

257

249

242

234

227

220

212

204

197

190

182

174

167

160

153

6 4 話	6 3 話	6 2 話	6 1 話	6 0 話	仮 免 許 編	5 9 話	5 8 話	5 7 話	5 6 話	5 5 話	5 4 話	神 野 編	5 3 話	5 2 話	5 1 話	5 0 話	4 9 話	4 8 話	夏 合 宿 編	番 外 編	4 7 話	4 6 話	4 5 話	4 4 話	
472	465	458	450	443		436	429	422	415	408	400		392	385	378	370	362	355		ミニミニパニック!	347	339	332	324	316

8 6 話	8 5 話	文化祭編	8 4 話	8 3 話	8 2 話	8 1 話	切島銳児郎 アンブレイカブル	8 0 話	7 9 話	7 8 話	7 7 話	7 6 話	7 5 話	7 4 話	7 3 話	7 2 話	7 1 話	インターン編	7 0 話	6 9 話	6 8 話	6 7 話	6 6 話	6 5 話
643	636		629	621	614	606	599	591	584	577	570	562	555	548	540	533	525		518	510	503	495	488	480

1  
1  
0  
話

1  
0  
9  
話

1  
0  
8  
話

1  
0  
7  
話

1  
0  
6  
話

1  
0  
5  
話

1  
0  
4  
話

1  
0  
3  
話

1  
0  
2  
話

1  
0  
1  
話

1  
0  
0  
話

9  
9  
話

後  
期  
授  
業  
編

9  
8  
話

9  
7  
話

9  
6  
話

9  
5  
話

9  
4  
話

9  
3  
話

9  
2  
話

9  
1  
話

9  
0  
話

8  
9  
話

8  
8  
話

8  
7  
話

820

812

805

797

790

782

775

767

760

753

745

738

731

724

717

710

703

696

689

681

673

665

658

650

1 1 6 話	1 1 5 話	1 1 4 話	1 1 3 話	1 1 2 話	那 步 島 編	1 1 1 話
863	856	848	841	834		827



## 入学編

### 1話

うおおおっ！という隣の家から聞こえる気合の雄たけびで目を覚ました。今日も幼馴染の男の子が朝の鍛錬をしているのだろうか、と思っただけどまさか今日という大事な大事な受験の日に根性とか、漢とかそういう暑苦しい気合の声をあげてトレーニングに励むということはない、と思う。断定じゃないのはもしかしたらあり得るんじゃないかなって思っっちゃうからだ。

部屋のほとんどを埋める特注サイズの巨大ベッドから足を下ろすとフローリングに足が付いた瞬間ゴトツと硬質なものが落ちたかのような音がした。当然だ、私の足は機械なのだから。異形型の個性を持って生まれた私の手と足は硬質で、冷たくて、金属質な機械のもの。鈍色に輝く尖った自分の指を確認してベッドのそばにある分厚い長手袋に手を通した。これがないと、ものを傷つけずに触れないもの。立ち上がると、高い筈の天井スレスレに頭が来る。そばにあるベッド以外のなにかも小さい、だって私が大きいから。重い重い機械の体を自由に動かすため、対抗するように私の体は勝手に大きく成長していったんだ。中学3年生にして、身長240cm、個性豊かはこの個性社会においてはあまり珍しくないけど、人目は引いちゃう。おまけに手足がごついメカだもの。

人目を引いちゃうのが恥ずかしくて顔を隠すために伸ばしたガラスのようなファイバー形質の前髪越しに見る部屋の時計は、何時も起きる時間ちようどを指し示していた。体内時計、機械だから正確なのが自慢、勉強も理数系は大得意だし、覚えるだけの科目も得意だけど、国語は苦手。だって機械だから、人の気持ちは分かりかねます、って言えたらいいんだけど私は人間なのだ、個性で機械になっただけで。

自己紹介が遅れた。私は「樫ゆずりは 希き械かい」自他共に認める引っ込み思案で、体が大きいのがちよつとイヤで、ヒーロー志望のカッチカチな幼

馴染がいて、自分も全身カツチカチの15歳の女の子。個性は「メ化」ダジャレじゃないよ？自分の体を機械に変えて自在に操れる、ミサイル、機関銃、戦車にロボット何でもござれな自分というのもなんだけど強い個性。

そんな私は今日、幼馴染と共に大事な大事な受験の日を迎えている。 雄英……国立雄英高校ヒーロー科の受験日は、今日なのだ。

パキツ、と音を立てて釘を噛み砕きながら結田付中学校の制服に着替える。朝ごはんはさつきすまして歯も磨いたけどこっちは個性の補給用。摂取したものを材料として私は個性を使うのでコンクリだろうが鉄だろうがガソリンだろうが食べることはできる。味覚的な意味では全く嬉しくないのですが死んでるけど。鉄臭いんだよね、おしくない。緊急時なら口以外でやれるんだけどどうるさいのでちよつと……。

お母さんに行つてきますと挨拶をして玄関を出る。私にとっては小さな標準サイズの玄関を何とかがんで通つて外に出る。ひんやりとした空気の2月の26日、滑り止めの受験は終わり、残りはこの試験のみとなった。深呼吸して、吸った空気が耳近くにあるアクセサリの排気孔から水蒸気と一緒にぶしゅつと出てくる。どんな体の中心身してるんだろね、私。

「おー希械！おはよう！」

「お、おはよう。えーくん……」

「おう！今日は頑張ろうな！」

玄関前で深呼吸してたら隣の家の前で立っていた男の子が話しかけてきた。突然だったので首をすくめつつ何とかおはようと返す。黒髪のギザギザの歯が特徴的でも快活な男の子。えーくんはあだ名で、本名は切島鋭児郎、私よりも背は小さいけど同年代の男の子の中では大きい方だと思う。というか私が大きすぎるだけなんだけどね……私の胸までしかない。

「もしかしてさつき、部屋で叫んでたりしたの？」

「ん？もしかして聞こえてたのか!？」

「うん、ばつちり。私、もしかしてトレーニングしたんじゃないかってビツクリしちゃった」

「いやいや、さすがの俺も今朝練する勇氣はないぜ!」

「いやでもほら、えーくんなら……」

「やらねーからー!」

「がーっ!と大口を開けて否定するえーくんに一安心した私。アスファルトをガツガツと音を立てて歩く、靴は履いてない、意味ないから。靴より私の足の方が堅いよ!嬉しくない!だってさ、去年の同じくらいの頃かな?えーくんの顔つきが何となく変わったの。元から雄英高校に行きたいっていうのは知ってたけど、そこから毎日の自主トレがハードになっていったりとか変化していった。雄たけび上げるのもそこから。もう日常だったからそういうもんだって思っちゃって。」

「雄英かく、楽しみだな!先輩とかヒーローとかに会えるのかな!」

「パワーローダーに会えたらいいかな……」

「そもそもなんで私とえーくんが国立雄英高校を目指しているのか、それは「ヒーロー」になりたいからだ。私の身体が機械なようにこの世界ではみな人間は特殊能力を備えていることが多い。例えばえーくんなら体を硬くする「硬化」他にも目からビームを出せたりとか、火を吹いたりとかそういうの。それは当然、悪いことをする犯罪者も持っている。」

「それを取り締まるのが「ヒーロー」だ。個性を法律で封じられた警察の代わりに個性を使って犯罪者「ヴィラン」を捕まえる職業。いい方を変えれば戦う国家公務員?とかそんな感じ。個性社会になつてからそれなりに世代を重ねた私たち中学生とさえ、進学先はとりあえずヒーローになれるヒーロー科!という風潮で私も例に漏れず。大きくなったのはしようがないので有効利用するならヒーロー、という感じなんだ。」

「えーちゃんと私は話しながら、電車に乗り込んで雄英高校を目指して進むのだった。」

「うおっ……」

「でつか……」

「ひう……」

「あー、大丈夫か？希械」

「うん、大丈夫……覚えたことメモリから飛びそう」

「シヤレにならねーだろ受験だぞ!!」

「大丈夫、メカジョーク」

受験会場、と書かれた立て札、巨大な雄英高校の校門前で私は大きな体をできる限り縮こめようと努力していた。無駄な努力だけど。というのも視線が悪いのだ。他の背の高い人よりも頭二つ分は高い私の背は無駄に目立つし、年不相応に育ってしまった肉体に視線が集まるのはしようがないとしても男の子の視線はどうしてこうも分かりやすいのだろうか。えーくんはそんなことないのに。喉からか細い悲鳴を上げた私の背中をさすってくれるえーくんのおかげで何とか大丈夫だ、今の所。

「おっ!?切島に希械ちゃんじゃん!やつほー奇遇だね!」

「みっ、三奈ちゃん!よかった受験前に会えないかと……」

「おう、芦戸!今日はガンバローゼ!」

「もちもち!むっ!こらそこー!希械ちゃんは見世物じゃないぞー!しっしっ!!」

そんなことをしていると私たちの前にいた女の子が振り返って駆け寄ってきた。彼女は同じ中学校の芦戸三奈ちゃん、同じくヒーロー志望で明るくてよく笑う、今時の女の子って感じ。私と同じ異形型の個性が混じってて、肌の色はピンクで、角が生えてて白目が黒目になってる。異形型個性はまだまだ周りから奇異の視線にさらされるのに私と違ってそれを気にせず誰とでも友達になれる凄い女の子だ。

両手を振り回した三奈ちゃんが私を物珍し気に見ていた他校生たちを追っ払ってくれた。ホントなら自分でできないといけないとか、見られても堂々としてるべきっていうのは分かっているんだけど……興奮して熱が籠ってしまったのでまた耳の排気口から熱を水蒸気と

一緒に捨てる。その湯気を見た三奈ちゃんがだきつと熱烈に抱き着いてくる。

「ん〜やっぱ希械ちゃんあったかい！冬場は一家に一台欲しいよお」

「わ、私でよければ……」

「いやいいのかそれで」

欲しいって言うてくれてるならあげようかなと思ったただけなのにびみよーな顔したえーくんの突っ込みで正気に戻る。3人で一緒に雄英高校の登校口に入るとまず驚いた。入口が低くない、天井も高い。いつもだったら私の学校みたいに屈んでくぐらないといけないうのにそんなことない！すごい、雄英高校って私たちみたいな異形型の個性にも理解あるんだ！

そんなことを考えながら校舎内に入って靴に履き替える下駄箱あたりで脚の構造を組み替えて地面を歩いて汚くなった脚を変形させる。設地面積を小さくしたくてハイヒールみたいな形をした私の足がカチャカチャと音を立てて組変わり、室内を傷つけないように普通の靴みたいなゴムを底面に敷き詰めたうち履き用のものに変形する。靴、脚が金属だとすぐ破れちゃうんだよね……2日持たないから、脚を変形させて対処してるの。ゴムは古タイヤを食べて確保した、美味しくなかった……。

とりあえず私は個性への補充がてら粗大ごみの処分のアルバイトをしてたりする。こっちでは限定的に個性を使っていいって許可も出たから片っ端から危険物も含めて相当な量の金属やら何やらを体の中に蓄えて個性の大本にしているのだ。質量保存の法則は異次元に吹っ飛んだらしい。じゃなきや今頃私の体重は何トンもあることだろう、個性万歳。

「エヴィバディハンスアップ！セエエエイ……ヨウコソー！」

「無理だと思うな」

「無理だろ」

「無理じゃん」

おつきなおつきな会場に詰め込まれた受験生全員、今は午後だ。午前中に学力試験は終わってしまった。勉強が苦手な三奈ちゃんと普通だけど好きじゃないえーくんのために頑張ってプリント作ったりして勉強会をした成果を二人は発揮してくれた……と信じている。一応私と答え合わせしていい結果を出してるからいけるハズ。私の個性は手足どころか骨や脳みそまで影響が及んでるので個性禁止と言われても禁止にできない部分があり、勉強もそれに入る。意図してメモリを消去しない限り私は忘れないし、計算能力も電卓とは比較にならない。

ずるい、と三奈ちゃんには言われるけれども、私にはどうしようもないのだ。ごめんなさいとしか言えません。そして今、教壇に立っている金髪を物凄い逆立てて首元に機械を付けたサングラスの先生、プロヒーロー「プレゼントマイク」さんだ。人気商売なヒーローは副業が許されているので彼は人気ラジオDJでもある。で、いまそのセリフを言っただだ滑りしているのだ。私たちは3人そろって今盛り上がるのは無理だっと思ってるけど。

シヴィー、とけたけた笑ってからプレゼントマイク先生は受験の実技についての内容を説明しだした。3種類の敵がいて、それぞれポイントが違うその敵役のロボットを倒してポイントを稼ぐルール。さらにはゼロポイントの回避推奨な大型お邪魔ギミックが存在する、ふむむ。えっ……これ……

「受験場所……みんな違うの……？」

「あっほんとだ。切島は？」

「俺もちげえや。なんでだ？」

私の半分絶望にまみれた声に三奈ちゃんは暢気に受験場所の書かれた紙を見て、えーくんは首をかしげる。そんな、一緒に行けると思ってたのに……いや、3人バラバラなのはいいのかもしれない。同会場だとライバルになっちゃうけど別会場なら敵のポイントを取り合わなくて済む。3人が同時に合格できる可能性も高まる！そういうことならやる気出てきた！頑張ろう！

「おっしー……こっからはバラバラだし、3人合格を祈って気合い入れ

てこうぜ！よし！希械！」

「う、うん！」

移動と準備の時間になった途端、拳を硬化させてガツンと打ち合わせたえーくんがそのまま硬化したままの拳を差し出してきた。硬いもの同士しかできない何時ものやつだ。私は手袋を取って、同じように拳を握ってえーくんの拳にぶつける。硬いものをぶつける気持ちいい音が鳴った。それを見た三奈ちゃんがむーっ!!とほっぺをパンパンにした。

「なにそれ切島ずるい！じゃあ私も希械ちゃん！ぎゅつてして！」

「えっ、えつと……それでいいなら……」

私とえーくんのやり取りをみてなにそれー！となったらしい三奈ちゃんは両手を広げて抱っこ！と言わんばかりの態勢を取り、私に突っ込んできた。私もそれでいいなら、と彼女を受け止めて少しだけ力をこめて抱きしめる。むっふー！と息を吐いた三奈ちゃんが私から離れた。顔にエネルギー満点！と書いてあるので大丈夫だと思う。

「うわー、ホントにそれでやるの？その、凄いや？」

「だ、だって……こうしなきゃ破れちゃう……」

更衣室から出て、雄英高校専属のバスに乗り別れる寸前で大胆だあと言った三奈ちゃんからそんな言葉を貰う。今現在の私の恰好は、タクトトップとスパッツ、これだけ。だってほかに服を着ると体を変形させられないし、燃えたりとかするし……ならそうならないように最初から布面積の少ない服を着るしかないのだ。だから、これはしようがないの！コラテラルダメージ！旅の恥は掻き捨て！受験のためなら羞恥心の一つや二つ！と思いつつながら私は身を縮こめながらバスに揺られるのだった。

開始まで準備してもいい。と広い広い演習場に到着した私たちにプレゼントマイク先生の連絡が入る。それじゃあ、開始まで私も準備しないと、私は集団から少し離れたところで個性をフル稼働させる。

「チャージジャベリン&スラストハンマー、形成開始<sup>デ</sup>！」

使う武器をイメージして言葉を使ってより鮮明にする。私の両手

が機械音を立てて変形、拡張して大きな武器を形作っていく。機械音が止んだ時には、大きくぶつとくなくなった私の手足と、3mを超える大型のバーニアが付いた槍とハンマーが両手に握られていた。ぶんぶんとそれを軽く素振りして感触を確かめる。これなら機械でも問題なくつぶせると思う！槍だけで100kgはあるし、ハンマーは驚異の500kg超え！質量は大正義だって物理の教科書が言ってた！

「バーニア、余熱開始<sup>レ</sup>」

バックリ背中を開けてあるタンクトップの素肌の部分から金属片が積み重なって変形してバーニアを形作っていく。廃材から得られた化学物質を混合して作った推進剤を吹かしてあったため、これでヨシ！ふふん、とちよつと得意げになっていると他の人たちがじつと私を見る。試験前だけど大丈夫なのかな？

「はいスタート」

……えっ？



## 2話

スタート？スタートって言ったよね？今先生絶対スタートって言ったよね？よいいドンの合図だったの？もつとこう、あるんじゃないかな!?と予想外の事態で処理落ちした私、当然ながら他の受験生たちもえっ?という感じで固まってしまっている。

「ほらどうしたあ!?実戦じゃカウントなんてねえんだぜ?!走れ走れ！賽は投げられてんぞ!」

その言葉でようやく、本当にスタートしていることに気づく。重い私は瞬発力に劣る、それは個性でカバーできるけど、こんなところで高熱のブーストを全開にしたら周りに迷惑だ。しょうがないので、一旦待つ。ようやく気付いた他の人たちが慌てて走り出す、団子のように押し合いへし合いしながら皆いなくなつたところでようやく私は個性に燃料をくべた。

「ブースト！フル！」

爆炎と爆音を立てて背中中のバーニアが推進剤を吐き出して、私を浮かせるどころか飛ばした。演習場のビル群を一瞬で飛び越えて最前列に躍り出た私が片手で巨大なスラストハンマーを振り上げて、なんか物騒な言葉を発しながらこちらに迫ってくるロボット数体に向けて振り下ろす。振り下ろした瞬間にスラストハンマーのブースターが起動して振り下ろしに更なる加速を加えた。

「やあっ!!!」

振り下ろされたスラストハンマーは豪快に数体巻き込んでアスファルトの地面に見事なクレーターを作った。飛び散った鉄の欠片やコードやガラスなどをなんかもつたいたいな、と思いつつチャージジャベリンを横に振るってこちらに来ていた3体ほどの敵マシンを両断する。えーとこれで……10点くらい？

「うえ、うえい……」

「あ、あああ、危ないっ！」

ちやうど私の間近に居て、私の攻撃に驚いてしまったらしい金髪の男子生徒。私に気を取られてしまったせいで動きが止まり周囲の敵

マシンの攻撃が当たりそうになる。吃りながらジャベリンを手放してその男子生徒を片手で抱き寄せて背中で割り込んだ。背中に敵マシンの攻撃が直撃する、が私はメカで今の背中は機械になっている、痛くもかゆくもない。胸の内でもごもご言っている男子生徒を解放しつつ、横薙ぎのスラストハンマーでビルの壁の染みにしてやる。

「ご、ごめんなさい！私のせいで！あの、お互い頑張ろうね！」

早口でいろんなことをないませにしながら謝り、ジャンプしてビル壁を蹴った私はまた飛んだ。もうちよつと前線の先に行った方がいいかもしれない、さつきみたいに私のせいで危ない目に会っちゃう人いるかもしれないし。咄嗟だったけど思いつきり胸を押し付けちゃって申し訳ないし、恥ずかしいし……。早く忘れよう、メモリから消去消去……。

「もう！お前らのせいだあああああああ！」

周りに誰もいないのをいいことに、普段はないくらい思いつきり叫んで力んだ私のジャベリンを構えた突撃は数体纏めて串刺しにしてビルを貫通してようやく止まる。あ、まずい演習場壊したらヤバいかも!?!?!し、試験だし事故だしまさか弁償なんて……ないよね？

途中で見かける人が危なかったりしたりしたらとりあえず割って入って助けたり、他個性の流れ弾が当たったりしながら暴れていると、残り2分だというプレゼントマイク先生の放送と同時に地面が揺れる。オイルを吹き出しながらジャベリンに貫かれた敵マシンからジャベリンを引き抜いていると、どこに仕舞ってあってどうやって出てきたのか分からないけど……ビルよりもずっと大きいゼロポイントの敵マシンが、こちらに迫ってきていた。

「すっご、おっきい……!！」

「でかすぎだろ！逃げろ！」

「あんなのに巻き込まれたら死んじまうよ！」

いつも言われる大きいという言葉を私は自分以外に久しぶりに使った。だって、そのくらいに大きい。身長240cmの私がまるで小人のようだ。そいつはまるでドミノ倒しのようにビルをなぎ倒してこちらにやってくる。動きはゆっくりではあるが、歩幅が大きいので

すぐにこちらにやってくるだろう。このままじゃ私も巻き込まれる。

「逃げないと……っ!？」

自分から出てきたその言葉にハツとなる。私はここに何しに来たんだ？ 思いつきり力を振るうため？ ……違う。じゃあ有名な雄英高校を記念に受験しておくため？ ……もつと違う。

「私は……私はヒーローになりたいに来たんだっ!？」

自分への発破、そうだ。私はヒーローになりたい、大きな体、人から離れた機械の手足、そんな私でも人を守れると。誰かの手をこの冷たい機械の手で取って、守ることが出来ると証明するために！ 私は今ここにいるんだ！ 私のこの大きくて、硬い機械の体は、誰かの前に立って守るためにあるって！ 証明するために！

「レールキャノン！ 形成開始<sup>デ</sup>!

チャージジャベリンを持っている左手を変形させる。カチャカチャと金属音や何かが合わさる音を立てながら私の体積を越えて巨大な砲身が完成する。2本のレールの間に弾頭としてチャージジャベリンをセット、まるで戦艦にある砲台をそのまま持ってきたかのような長大なレールキャノンを持ち上げて、こちらに向かうお邪魔口ポットに向ける。

同時に杭打機のように変形した私の足が地面に杭を打ち込んで体を固定し、腰から伸びた支えを利用してレールキャノンを発射態勢に持っていく。ブースターの中で燃やした推進剤の熱で発電、体内に元から作ってある不要物を分解してエネルギーに変える炉心をフル稼働させて必要な電気を急速にチャージしていく。

排熱が間に合わない、体の各部に排熱口と吸気口を増設、空気を取り込んで急速に冷却を開始。オーバーヒートして行動できなくなる前にかたをつけないと、残り1分、十分だ。チャージ終了、右目の網膜に映るレティクルのど真ん中にやつを収めてロックオン。発射まで残り3秒、2秒、1秒……!？」

「レールキャノン、発射<sup>ファイア</sup>!

2本のレールの間に紫電が走り、一筋の光となったチャージジャベリンが轟音を立てて発射される。すさまじい反動が私の左手ごと



人には言つてなかったけど、再生できるのは理解してた。ロケットパンチを試した時に出来たのでできるとは思ってたんだ。

今もすでに再生が始まっていてバチバチと電気やらが漏れてた肩口の所も既に漏れてたあれこれも止まっている。片手で凄い着替えにくかったけど三奈ちゃんに手伝ってもらう。熱が抜けるまでは個性の使用は出来ないので帰るまではそのままでもいいや。ああ、それにしても……

「お腹空いたよう……」

「思いつきり動いて確かに腹減ったなあ〜」

「ファミレスいこファミレス！ご飯食べてこー！」

またしても大きな音を立てるエネルギー切れのお腹の音を二人に聞かれる。耳から蒸気を吹き出しながらゆでだこのようになる私に便乗するように腹が減ったというえーくんの助け舟とそれを察してくれた三奈ちゃんのおかげで私のエネルギー補給のめどは立ったのだった。落ち込んだり、喜んでたり、受験生の数だけ反応があるのだ。この中から上位の37人、今回は定員が一人多い形で選ばれる。

制服の左袖がプラプラしてて落ち着かないな、とまだまだ体内の熱が冷める気配はなく個性もうんともすんとも言わない状態で歩く、気合で脚と手は普段モードに変形させたけどまだ腕が生えない。強制的に放熱できなくもないけど服燃えて全裸になるからヤダ。しようがないのでそのままだなあ……三奈ちゃんのお話に気を取られて立ち止まってしまい、ちようど腰あたりにぽすん、と誰かがぶつかってきた。あ、しまった！

「ごごごごめんなさい急に立ち止まったりして！怪我してない!?大丈夫!?!」

「い、いいいいい僕こそぶつぷつボケっとしててごめんなさい!」

「いいいいいえこちらこそ……」

私の油断が招いたことなので振り返って謝る。やっぱり私よりもだいぶ小さい男の子だ、赤い大きな靴ともさもさの頭が印象的、彼はぶんぶんと頭を下げて謝ると私の言葉を待たずして足早に去っていつてしまった、何となく落ち込んでるように見えたのは気のせいな

のだろうか。彼も受験生だったし、もしかしたら結果が芳しくないのかもしれない。みんながみんな受かればいいのにな、とありえないことを考えながらも……私も変なこととして失格とかになってないかって心配になるのだった。特に最後のレールキャンオンやり過ぎじゃないよね？あんなデカブツ出しといて、それはないと信じたい。

「あ~~~~っ!!そこ違ったの~~~~!!」

「う、うん。でも私が間違ってるかもしれないし……」

「やっべえ俺もここちげえわ。あー、ギリギリかこれ……?」

「ううん、私が正しければだけど、二人とも合格ラインは上回ってると思うよ。私はその、国語が……」

「希械ちゃん漢字とかそういうのは覚えられるけど作者の心情を読み取れ〜とか苦手だもんねえ」

「気持ちに分かれれば戦争なんて起こらないだよ!」

「すっげえ極論だぜそれ」

私は多分国語とか漢文とかとは一生仲良くなれないと思うのだ、と帰りの道で個性が使えるようになり新しく生やした新品の左腕でファミレスの昇天ペガサスマックスハンバーグセットをかきこむ。多少お行儀が悪いけどお腹が空いているから見逃して欲しい。何せ私は個性を使うと頗る燃費が悪くなる。不要物を分解する廃棄炉のエネルギーはあれど結局私の摂取したエネルギーで個性を使うのでご飯がそのままパワーになるのだ。個性使わなければ普通だけだ。

えーくんはミックスグリルとドリアのセット、三奈ちゃんはパスタとケーキ。私たちはご飯を食べながら今日の学科試験の答え合わせをしているのだ。と言っても答えが配布されてるわけじゃないので私のメモリ頼りになるんだけど、多分正答率は結構高い筈だ。自己採点の域は出ないけど、自信はある。つまりそれは二人の合格ライン越えを保証するものでもあるから。

「あとは~~~~実技だねえ~~~~」

「芦戸は自信ねえの?」

「いやさー、ヴィラン壊すよりも人助け優先しちゃって……ヒー

ロー志望だから、見捨てるのは変かなくて」

「私……街凄い壊しちゃった……失格になってないかな」

「あー、確かに俺もどっちゃかつつたら人助けの方だなあ。だって俺の個性って守る方が適してるわけだしよ」

「まーこれであとは結果を待つだけよ！何とかなるなる！この後カラオケ行こー！久しぶりに希械ちゃんのアレみたい！」

「こ、これ？」

「うおっ!?それどうなってんだ!?!」

「ゲーミングに光ってるだけなんだけど……」

アレ、と言われてあたりを付けたのは私のお尻まである長い髪の毛。ファイバー形質のこの髪の毛は武装につながればエネルギー供給できる優れものなんだけど副次機能として、いろんな色に光らせることが出来る。私の数少ない隠し芸で、ゲーミングな1680万色に発光させることが出来るのだ。カラオケで立った状態で歌えばセルファミラーボールである。一瞬で虹色になった私の髪に驚くえーくんに見せたことなかったかな？と疑問を持つ。

この後、ご飯を食べ終えた私たちはカラオケ屋にフリータイムで入室し、受験のストレスから解放されるように思いつきり歌うのだった。あとセルファミラーボールはえーくん結構ウケた、うれしい。

### 3話

『私が投影されたあ!』

「ふおっ!」

「おおお! オールマイトじゃん!」

「つか〜! やっぱ画風が違うなあ!」

受験日から約1週間、私たちは今までの受験勉強の鬱憤を晴らすかのように遊びまくり、ついでに自主トレをしていた。やっぱり思ったけどえーくん硬すぎるよ、金属の私より硬いつて何? 300kgある私を持ち上げたりするしさあ……ホントに個性硬いだけ? ビックリしちゃう。

それはともかく、やっと雄英高校からの合否通知が届いたのだ。それで、三奈ちゃんとえーくんと3人で集まって一緒に合否通知を開けようと私の部屋に集まって頂いたのだ。そんなわけで3人同時に封筒を開けたら、入ったのはなんか機械だった。よくわからないそれを3人で弄り倒していると、唐突にパツと空間に画面が投影された。そこに映っているのは、日本の平和の象徴、No.1ヒーローのオールマイトだ。

筋骨隆々で常に笑顔を絶やさない超強いヒーロー、えーくんと三奈ちゃんの機械にも同じようにオールマイトが投影されて、H A H A H A 驚いただろうと笑っている。この日本にオールマイトを知らない人間はいないので、実は私も含め3人ともテンションが上がりまくっている。

『なぜ私が雄英の合格発表をしてるつて!?! それはね、今年度から私も雄英に入るからさ! 教師としてね! ええ? 巻きで? しようがないなあ……んっん! では、嬉し恥ずかし合格発表だ!』

「き、きた!」

「やっべなんか心臓飛び出しそう」

「わかるよ〜」

同時に起動したせいか、同じセリフを同じ速度で読み上げるオールマイト。というか春から教師になるつてすごくない!?! オールマイト



に教えてもらおう……これは是非とも合格であってほしい！高鳴る心臓の音を聞きながら遂にみんなで押し黙って続きを唾飲んで待つ。

『では、樫少女！筆記は国語が若干低いけど文句なしの大合格だ！続いて実技だが、敵ポイント33！結構頑張ったね！そしてもう一つ！この試験には裏のポイントがある！』

「裏の、ポイント？」

「あー、俺は敵ポイント43点かあ」

「あたしの倍じゃん。ちよつと分けてよ」

「できるか！」

『それはレスキューポイント！他を蹴落とす試験の場でどれだけ他人のために動けたか！審査制の特別ポイントだ！樫希械！レスキューポイント45点！総合78点で同率2位で合格だ！おめでとう！ここが君のヒーローアカデミアさ！』

レスキューポイント、なんだそれ。思わず笑ってしまった、ヒーローならこの場でどうするかの資質を先に見ていたなんて。そして、同率2位、一位はもつとすごかったんだろうか。

「お、希械、俺と同じ同率2位だったよ。って合格!?マジで!?やった！」

「あたしも合格だ〜!!ふええええん！勉強教えてくれてありがとう希械ちゃん〜!!」

「み、皆合格……!やったあ！」

えーくんと同じだったのか、と飛び上がって喜んだ三奈ちゃんが胸の中に飛び込んできたので抱き留めながらそう考える。えーくんすごいな、私はあの大きいお邪魔メカを倒して得た30点のレスキューポイントが大きいんだけどえーくんはそれなしで人を助けて助けて助けまくった証拠だ。やっぱりえーくんは凄いなあ、自覚あるけど私は力こそパワーなので人助け、上手にできないもの。

とりあえず盛り上げようとスピーカー作ってファンファーレ鳴らしまくったらしつこいと怒られてしまった。とりあえず頭に作った猫耳型スピーカーを解体して体の中にしまい込み、そこでようやく3人ともへたと力が抜けて座り込んだ。ここの1週間、遊びながらもど

うも緊張感とか不安感に襲われてたけど、最高の形で終わることが出来た！

「ねー、春からまたよろしくね」

「おう、クラス一緒だといいなー！」

「切島だけクラス違うもんねー」

「う、うん。一緒だと嬉しいな……」

「お、希槭！おはよう！」

「うん、おはようえー……くん……？」

「どうした？」

「えーくんが……グレちゃった……！」

「ちっげーよー！」

そんなことがあって今は4月某日、入学手続きを済ませた私とえーくんと三奈ちゃん。制服も届いて見せ合いっこしたりもした、私の特大サイズの制服、なんと特注ではなく普通にサイズ表にあったのだ。雄英すごい、異形型の個性で普通の人より大きいっていうこともあると理解してくれているというのを完全に確信した。合格してよかった。

それで今日が雄英の入学式、なんだけど。家の前でえーくんと合流したら、思わず鞆を地面に落としちゃうくらいにびっくりしてしまった。というのもえーくんの髪の毛、黒髪だった髪の毛が目に鮮やかな真っ赤に染まって滅茶苦茶尖って逆立ってたのだ。えーくんがグレちゃった!?!と混乱したら違う!と突っ込まれる。

「えっと、悩みがあるなら聞くよ?幼馴染だし……?」

「だからちっげーって!これはだな……ちよつと色々あるんだよ。戒めつつーかなんつーか……」

「……似合ってる。カツコイイよ、えーくん」

「お、おうーさんきゅなー！」

何となく、歯切れが悪い。多分、私に知られたくない理由がえーくんの中にあるんだろう。何が原因で、どうしてそうなったかという理

由に心当たりがないわけじゃないけどそれを無理やり聞き出すとはとても思えないので、実際似合ってたかっこよかったので素直に褒めることにした。気持ちには素直に伝えるべし、それが誉め言葉なら猶更。お母さんの教えに従って褒めるとえーくんははにかみながら返事をしてくれる。

「あーっ！切島それなに!?高校デビュー!?!」

「まあ、そんなところ。お前はやらねーの?」

「アタシはすでにインパクトの塊だからね!」

「……ちよつとこのえーくんも新鮮かも」

「ねー、深くは聞かないけどさ。話せるようになったら教えてよ。高校デビューマンってみんなに言うから!」

雄英の校門前で、家の方向が違う三奈ちゃんと合流する、やつぱり三奈ちゃんもえーくんの変貌っぷりには驚いたみたいだけど、何となく察するものはあるみたいで茶化しながらもあまり突っ込む様子はない。下駄箱前のクラス分け表を見る、3人一緒だといいなあ。えーつと、ヒーロー科ヒーロー科……2クラスしかないんだ。A組から、三奈ちゃん、えーくんはあった。私はゆだから最後の方……あった!A組だ!

「やったね希械ちゃん!切島も!みんな揃ってA組じゃん!」

「うん、よかった……電源切れるかと思った……」

「お前のジョークはいちいちこえーわ!電源切れるとどうなるんだ!?!」

「……切ってみる?」

「やめろ」

いつものように足をうち履き用に変形させて、校舎の中に入る。うーん、一回でいいからサンダルとか履いてみたいなあ。足元おしやれってやつを体験してみたい。まあ生足じゃないから魅力はないかもしれないけど気分的に?私だって女の子なのでおしやれというやつをやってみたいんだ。可愛い服はサイズがないし、あったらあったで手足のせいでコレジャナイ感出ちゃうし。三奈ちゃんのぼでーが羨ましい。

校舎内も大きくて歩きやすいなあ、中学校の時はドアとかは必ずくぐらないといけなかったから凄く楽しんだ。3人でこれからのことにわくわくしながら1-Aの教室を目指す。私は歩幅が大きいので二人に合わせてゆっくり目に歩く。

「よし、開けるぞ……」

「う、うん！」

「いけ、切島くー！」

私が先陣を切って知らない人ばかりの教室の中に飛び込むとか考えただけでフリーズしてしまうので二人が一緒でホントに良かった。多分別クラスだったら本当に機能停止して教室前で止まってたに違いない。内心ほっと息をつきつつ勢いよくスライドドアを開けて中に入るえーくと三奈ちゃんに便乗して私も中に入る。

「おはよー！こっから1年よろしく頼むぜ！俺は切島鋭児郎！仲良くしてくれよな！」

「アタシ、芦戸三奈！こっちが樗希械ちゃん！みんな同中なんだ！よろしくね〜！」

「ゆ、樗希械です……えっと、その……仲良くしてくれると嬉しいデス……」

シーン、と一瞬教室が静かになる。まあ、今までもそうだった。教室にいる人たちの視線が集まるのは私、中学校の入学式もこうだったな、懐かしい。私は大概の高身長と呼ばれる人でも見降ろすくらい的身長を持っているので初めて見る人はみんな私に視線をやってしまったのだ。それも一瞬で、同じクラスの人たちはそういう個性なのだとな納得したのか、各々視線を元に戻したり、ノリのいい人はよろしく！と返事をしてくれた。嬉しいな、皆優しそうで。

とりあえず教卓の座席表に従って席に座ろう、名前順みたいだからいったんここで二人とはお別れだ。と言っても同じ教室だから一緒は一緒か。ぽふ、と三奈ちゃんに背中を叩かれてからばらせる。衝撃で手足をばらけさせて一発芸を、と思ったけど絶対引かれるのでやめよう。奇抜なことすると後に響くし。

「……初めまして、よろしくお願ひします……」

「ええ、よろしくお願いいたしますわ。随分大きな机だと思っ  
たら、そういうことですね」

「ご、ごめんなさい大きくて!」

「あ、その……謝罪させたかったわけでは……ごほん、八百万百です  
わ。仲良くしてくださいね」

「ゆ、樫希械です!その、お友達になつてくれると、嬉しいな」

「勿論、喜んで」

八百万さん、私の前の席にいるポニーテールの女の子と自己紹介を  
する。凄く落ち着いてて、でも優しそうな女の子。座高から推測する  
に女の子にしては背が高いかもしれない。私?私はほら、例外とい  
うか測定外というか……私が座るために私の机は他のみんなの机より  
大きいし頑丈そうだ。だつて私重いから、中学校の時椅子をいくつ  
潰しちやつたりとか……アハハ……

二人の方を見ると既に他の男子や女子と話していて私も負けてら  
れないと思つた。折角新しい環境にいるんだから二人に頼つてば  
かりじゃダメだ、えーくんじゃないけど高校デビュー、頑張っちゃ  
うぞ!初めに八百万さんともつと仲良くなりたいな、どんな話題が  
いいんだろう。やつぱり入試の話かな?

「八百万さんは、入試どうだった?私その、街をたくさん壊しちやつ  
て減点貰つちやつて……」

「まあ、私実は推薦入学でして……皆さんと同じ入試は受けていま  
せん」

「推薦!八百万さん凄いなだねえ。頼りになりそう」

「え、ええ!頼つて頂いて構いませんわ!」

ふおっ!?なんか褒めたらすごい嬉しそう。プリプリとしててなん  
か可愛い。早速新しいクラスメイトの意外な一面を知れてホクホク  
かもしれない。そう思つてると前の席から女子制服が歩いてきた。  
んんっ?!いや待つてこれもしかして……視界を切り替える。サーモ  
グラフィ……ダメ。紫外線、ダメ……通常の光学観測に頼つてちや見  
えないのかな?じゃあ反響定位……見えた!一応超音波を調整して  
……よし!

「おっはよー！初めまして！私葉隠透って言うんだ！前の席で寂しかったから私も仲間に入れてよ〜〜！」

「勿論ですよ、八百万百です、仲良くしてくださいませね」

「初めまして、樺希械っていいいます。葉隠さんでいい？」

「うん！透でもいいよ〜！……？……?!？」

「どうしましたの？」

反響定位で視界を作っているので彼女の顔形がはっきり見える。だから前髪越しに彼女に目を合わせて自己紹介したら目線があったことに疑問を覚えてしまったらしく、私の机の周りをまわってみる葉隠さん、とりあえず何してるの？という八百万さんの疑問をよそに目を合わせ続けていると彼女の表情が疑問から確信に変わる。

「もしかして……私の事見えてる!？」

「見えてる……っっていうのは正確には違うんだけど葉隠さんの顔は分かるよ。凄い美人さんだねえ」

「ふえっ!?!……私そんなこと言われたの初めて。だって誰にも見えないから……」

「あ、もしかして見られるの嫌だった？だったらやめるけど」

「ううん！凄い、人と目線が合うのってこんななんだ……」

「どうやって彼女を見えますの？」

「ソナー……反響定位っていうやつなんだけど、わかる？超音波を出して跳ね返ってきた音の反響を映像にして右目の網膜に映してるの」

こんな感じ、と前髪を書き上げて目を露出する。私の右目は生身じゃなくて機械だ。真っ赤な色でレティクルの照準補正用の目盛が常に浮いている。左目は両親から継いだマリンプル、オッドアイなんだ。覗き込めばわかるけど今は葉隠さんの顔が白黒で映ってるのが網膜にあるだろう。

「へーっ！」

「反響定位……音に関する個性でしょうか？」

「えーっとな、違うんだ。私の個性はこういの」

カチャカチャ、と音を立てて私の頭に機械で出来たうさぎの耳の力

チューシャが組みあがる。うさぎ耳型集音機&ヘッドセットだ。片耳が折れてるのがこだわり、重量約100gの軽量合金製の逸品である。すぽんと頭からとって机の上に置くと八百万さんがガタツと席から立った。

「創造系の個性ですよ!?!」

「うーん、ちょっと違うかも。私の個性は「メ化」って言って機械に關することなら大体できるんだ」

「へー、なんか音楽鳴ってるって思ったらアンタだったんだ?」

「ふえ?」

私たちの会話に割って入ってきたのは、耳たぶからイヤホンジャックが伸びてる女の子だった。

## 4話

イヤホンジャックが耳から伸びてる女の子が私から聞こえてるといふ音に言及してきた。なんか音楽鳴ってる……音楽鳴ってる!?!聞こえてた!?!万が一聞こえても不快じゃないように反響定位に使う音を一定のリズムを持つ音楽にしてただけだけど普通に聞こえてたんだ!?!凄いな、人の可聴域じゃないんだよ?」

「ぶ、ごめんなさい!もしかしてうるさかった!?!」

「いや、ウチも言い方悪かったかな?結構ノリいいリズムだったから気になってさ。ウチ、耳郎響香。よろしく」

よ、よかったあ。可聴域を超えてるとはいえ今回は超音波と超低周波を組み合わせたものだから、人によつてはうるつせえぶつ殺すぞ!と言われてもおかしくないと思うのだ。だからとりあえず一安心、耳郎さんかあ、凄いクールっぽくてかっこいい人だなあ。

「アンタ、すごかったよね入試。あのゼロポイントのやつぶつ壊したの」

「えっ!?!一緒の会場だったの!?!」

「そうそう、手大丈夫だった?」

「えー!?!?樫ちゃんあのお邪魔ロボット倒しちゃったの!?!」

「う、うん。ヒーロー志望だし、逃げるってなんか違うかなって思ってた……」

「ゼロポイントのお邪魔ロボット……」

「えーと、こんな感じのロボット」

うさぎ耳型集音機をまたまた変形させて空間投影モニターに作り替える。そこで私の右目に映ったゼロポイントのロボットの画像が表示される。八百万さんはそれを見てまあ、と口に手を当てて驚いている。空間投影モニターの電源を落としてバッグの中に仕舞う。いったん切り離しちゃうと作り替えることはできても体の中に再吸収するには食べるか体を変形させたシュレッダーに入れるしかないから、あとで食べよう。美味しくないけど。

「そう、最初はでっけーハンマーと槍持ってたと思ったら手が変形



してよー。びっくりしたぜ」

「あ、入試の時の」

「覚えててくれたんだな！俺あ上鳴電気、入試の時は悪かったな」

「いや、あれはその……私が悪いと申しますか、忘れて頂けるとありがたいと言いますか」

「腹が鳴るのは元気な証拠だぜ？」

「はうっ」

「ちよ、アンタ遠慮なさすぎでしょ！ほら真っ赤になってるじゃん！」

「わ、忘れてください……」

む、蒸し返されちゃった！入試の時のアレを！思いつきりお腹が鳴ったアレを！耳郎さんが知ってるってことは聞いてたんだ！上鳴くんの武士の情けなのか抱きかかえちゃったことに関しては何も言ってこないけど、その気遣いをこっちにも欲しかったよお！

「だ、だって個性全開で使ってエネルギーが切れちゃったんであつていつもあんな風にお腹鳴らしてるわけじゃ……あうあうあう……」

「いやあんなことしたらそうなるつて。ロツクだったよ」

凄いな、皆フレンドリーだ。なんか前の席で金髪の男の子とメガネの男の子が凄いい言い合ってるけどそれ以外はいたって平和、そう思つてるとドアが開いてまた新しいクラスメイトが入ってきてきた。もさもさ頭の……あ！入試の時私のお尻にぶつかってきちゃった人だ！ほんと、邪魔くさい体してて申し訳ない……でもここであえて嬉しいな、ちゃんと名前聞かないと。

「お友達ごっこがしたいなら他へ行け。ここは……ヒーロー科だぞ」

……なんか、寝袋の化身みたいな人がゼリー吸ってる……

「個性把握テストお？」

寝袋の化身（暫定）は何と私たちA組の担任の先生だった。相澤消太先生、本名だから分からないけどこの人もきつとプロヒーロー、な

んだらうけどメディアで見た覚えがない。合理性に欠くね、というセリフと共に差し出されたのは体操服、これを着てグラウンドに出ろ、とのことだった。ガイダンスは？という疑問をよそにとりあえず着替えた、着替えたんだけど……

「いやその、ごめんって」

「すっごいおつきいから、つい……」

「お、お気になさらず……」

「すっごいでしょー！これでまだ成長途中なんだよ希械ちゃん！」

「な、なあ!?何やったんだ!?何やったんだよお!?オイラも詳しく！」

着替えに女子更衣室に行つて、服を脱いだ……まではよかつたんだけど……葉隠さんと耳郎さんといいでに三奈ちゃんに盛大に胸を揉まれた。そりやその、身長分ひとよりおつきい自覚はあるんだけど、そんな激しく揉まれるだなんて思ってもなかったから……熱がひかないよお。あと葡萄頭の凄い小さな男の子が私に両手を合わせて拝みつつ詳細を聞こうとしてくる。えーくんがなんか凄い怖い顔して連れてつちやった。

「はい静かに」

ぴたっつと音がしたようにクラス全員が静かになる。正直この先生結構怖い、コントローラーがともうまい恐怖の与え方をしてくるのが酷く合理的だ。だからみんな素直に言うことを聞いている。

「個性無しの体力テスト、やったことあるだろ。あれを個性ありで行う、そうだな……爆豪、ボール投げ……個性ありでやってみろ。何してもいい」

ぱしっ、とボールを受け取った金髪の男の子……さつき眼鏡の男の子と言いつつ合ってた子だ。彼は思いつきり振りかぶり、死ねという掛け声と手から発する大爆発でボールを彼方へぶつ飛ばした。右目の測距測角で飛距離を計算するどぎつと700m、かなりの破壊力の持ち主と見ていいだろう。

「自分の最大限を知ることがヒーローの素地を作るための第一歩だ」

「なんだこれ、すげー面白そうじゃん！」

あ、と思った。面白そう、という誰かの声で先生の雰囲気が変わる、右目を通さなくても分かる重苦しい雰囲気。声紋もかなり低くなった、よくない証だ。きつと今の遊び半分な言葉が導火線だった。

「面白そう、ね。よし、ならトータル最下位のものは見込みなしとして……ヒーロー科を除籍処分とする。普通科には行けるから安心していい」

うわあ……としか言いようがない。自由な校風ということは最初に知っていたけれどもそこまで自由だとは。多分訴えたら勝てそうなくらい横暴だと思う。それでもまあ、納得し飲み込んでしまえばやることは決まってるんだ。私はここで除籍されるわけにはいかない。えーくんもそうだし三奈ちゃんもそう。ならあとやることは本気で取り組むことだけだ。声紋のブレがないから、多分本気で除籍される。

「50m走からだ。始めろ」

準備をしよう、まずは足から、と私は体操服のジャージのすそを捲り上げる。露になった鈍色の機械の足、物珍しそうに見える人もいるけど今は関係ないや。足を組み替える、歩行から移動へ、空気を噴き上げて浮かすホバークラフトがいいだろう。足にジェットエンジンを増設、空気供給用の管を増設して……うん、歩きにくいけどこれでいいや。次は手、最近作れるようになった水素プラズマジエツトを試してみよう。手のひらから出るようにして、うん、これでいいや。

「次！ 樫！」

「……はいっ！」

うう、緊張して声が裏返っちゃった……スタート位置について足のジェットエンジンを稼働させて浮く。そのまま手を後ろにやって、プラズマジエツトを待機状態でアイドリング。クラスメイトのみんなは私の足からなる凄い音にわくわくと興味津々な様子。今まで二人一組だったのが私だけあぶれて一人だったから余計に視線がづらい。

「スタート……3秒7」

プラズマの光の尾を連れた私が爆音と一緒にゴールする。爆豪君

がいたあたりから「パクんな！クソが！」という恐ろしい声が聞こえたので今後は別の手段を模索していきたいと思います。あのその……確かにパクりましたごめんなさい。だってほかの手段は服が破けて……それと多分こっちの方が瞬間的には速いから……ひっ!? 凄い顔で睨んでる怖い。

第二種目の握力、私の手足は機械なのは再三言ってるので、当然ながらセーブしなければそりゃ強い。油圧と電気モーターの組み合わせの握力で3トン、なんか握力計から変な音鳴ったけど……大丈夫だよな？ 立ち幅跳びは、手を変形させてヘリコプターのローターを形成、結果は測定不能。最大値らしい、飛べるからね私。そして反復横跳び、手段が思いつかず普通に敢行したらみんなよりも少ない、だって私重いから動きも遅いもの。30回、がちやがちやうるさくてごめんなさい。そして次、ボール投げ。

「なあ、今度はどうなるんだろな」

「手と足が変形するのかもしれないよな」

「え、え、あう……あう……ろ、ロケットパンチ！」

「男のロマンきたああああ!!!」

周りの期待の視線と緊張で喉からエネルギー炉が出そうになった私はてんぱってしまい、やろうとしてたりニアカタパルトによる発射ではなく腕をボールごと飛ばしてしまう。結果周りは大盛り上がり、男の子からの興奮の視線のおかげでなんだか自分がびっくり箱か何かになった気分だ。戻ってきた手がガツチョン！と合体するとさらに歓声が沸く。男の子ってこういうの好きだよな。

すでに順番は前種目が終わった順になってるので、私の後ろはもさもさ頭の彼。名前は確か……緑谷くん。入れ替わりで私のいたところに立った彼の表情は非常に暗い。だって今までの記録、全部合わせても最下位だから。もしかして応用できない凄い限定的な個性か何かなのかな？ そう思っただけの様子を見ると、右目に突如としてすさまじいエネルギー源が発生したという警告と脳内にアラート音が。緑谷君からだ、けどそれは投げる瞬間で一瞬で消失してしまう。

やったのは相澤先生、彼の個性は個性の消失というとても強いもの

で、緑谷君の個性は莫大なパワーの代わりに自損をしてしまうというもの、らしい。眼鏡君……飯田君が言うには私と同じようにゼロポイントのロボットを壊してしまつたらしいからそれは相当なものだろう。だけど行動不能になることと引き換えで。

相澤先生から何か注意を受けた彼は一層追い詰められた顔になつてすさまじい速さで何かを呟いている。私の後ろにいる爆豪君は除籍勧告だろ、と面白くもなさそうに言っている。彼が投げる瞬間、もう一度右目にアラート、けど規模が小さい……指だけ？なるほど！腕全体に個性を発動するんじゃないやなくて指一本だけを犠牲にして最大限の効果を引き出したんだ！凄いな、でも痛そう……そう思つてると後ろの爆豪君が両手に小爆発を起こして緑谷君に跳びかかった！

「どういうわけだ！デクてめえわけをい……んがっ!？」

「だ、だめ！」

明らかに緑谷君に襲い掛かろうとしてたので咄嗟に彼の前に出て真正面から抱き留めて動きを封じる。ほんとにヒーロー志望？クラスメイト、多分知り合いなんだろうけどその人に明らかに危害を加えに行くなんて！私の胸の中でもごもご言いながら暴れてた爆豪君の顔を覗き込む。

「何しようとしたの？人に個性で危害を加えちゃダメ……！」

「放せモブメカ女！」

「櫟、放している。爆豪、次緑谷に何かしようとしたら強制的に最下位だ」

「チツ……！」

諦めて掌を下ろした彼を解放する。舌打ち一つして彼は踵を返して別の場所に行く。途中で葡萄頭の男の子に何かしら絡まれてたけど完全無視だ。私は呆然としている緑谷君の前に立って彼を見下ろす。右目のレントゲンでは……うわ、指凄いことになつてる。これは痛い、色もひどいし……

「えっと、その……指、見せてもらっても大丈夫？」

「え、う、うん」

そう言つて差し出された指をしゃがんだ私の手で覆う、ちよつと重

いけど許して欲しい、手の中で緑谷君の指を小さな金属片が覆って即席のギプスが完成する、最近研究途中の液化冷却ジェルを組み込んで患部を冷やしつつ痛みを麻痺させ固定させた。一応曲げることもできるように電気モーターと1時間分のミニバッテリーを搭載して、完成。

「ギプスだ……」

「う、うん。あんまりにも痛そうだから……でも無理したら指が動かなくなっちゃうからね？先生、これくらいならいいですよね？」

「競技中は外せ。それ以外なら好きにしろ」

緑谷君の手を放して私は立ち上がり離れる。彼はポカンとして追いついてないけど私はやりたいことをやれて非常に満足してる。三奈ちゃんがやさしくと言いながら抱き着いてきたりしたけどみんな多分助ける手段があったら助けようって思ってたんじゃないかな？救急箱を持った八百万さんとかもそうだし。

「ではパッと結果発表だ。口頭では非合理的なので一括で表示する。あと最下位除籍は嘘な」

最後にボソツと呟いた相澤先生の合理的虚偽という一言のおかげで緑谷君の魂からの驚きの叫びが響き渡った。というか全員大なり小なり驚いてる、だって声紋からして本気だったから。八百万さんは嘘に決まっていますわ、って言ってるけど違う。嘘をつき慣れているか嘘にしたかのどっちかだと思う。凄いな雄英、こんなのもありなんだ。

ちなみに結果は1位だった。反復横跳びがアレだったから心配だったけど、私の研究を重ねた最新鋭の変形のおかげで記録は物凄く伸びたし。フィジカルなら負ける気はありません、素早さを除いて。

## 5話

「えーくん、帰ろー」

「おう、しかしまあやっぱまだ勝てねーかあ」

「えーくんの強みは私とは別じゃないかな？私ほら、便利なものだけ」

「……待て！切島アお前、樫さんとどういう関係なんだ!?きりきり吐けオラア！」

「何って……家が隣で幼馴染」

「はあああああ!?!」

体力テストが終わって着替えも済んで、相澤先生から解散の命令を貰った私たちA組はガイダンスそっちのけでもう帰ってしまった他クラスの後を追うように帰宅準備をして、今帰るところだった。私とえーくんは家が隣同士なので帰り道も一緒、じゃあ別々に帰る理由はないので一緒に帰ろうと誘って、えーくんも了承してくれた。

そこに待ったをかけたのはえーくんのコミュ力ですぐに仲良くなったらしい男子たち、えーと上鳴くと瀬呂くん。彼らは私が当たり前のようにえーくんと一緒に帰ろうとするのが不思議でしょうがなかったらしく、えーくんの制服の胸倉を掴んですごい剣幕でいろいろ言ってる。

「お前こんな美女と幼馴染とかどうなってるんだ!?もしかして付き合ってるのか!?!」

「いや別に付き合っていないぜ?そういう感情とか、もうお互いないよな?」

「……そう、かも?でもお付き合いするんだったらえーくんが基準になっちゃうかも」

「おう、俺をぶっ倒さねえと認めねえかな」

「私、誰ともお付き合い出来なさそう……」

すでにえーくんは私がぶっ叩いても堪えないくらいにはガツガツに硬いの。倒せる人なんているのだろうか?葡萄頭の子……峰田くんの怨嗟の表情が結構迫真で怖い、思わず縮こまってえーくんを

盾にしたら余計怖くなった。私は縮こまってもえーくんには隠れられないけど、怖いものは怖い。これもいずれ克服しないとヒーローにはなれないだろうなあ。

「……こんな関係の幼馴染って存在したんだな」

「俺はある意味感動を覚えてるぜ瀬呂」

「オイラも、ワンチャンあるかな」

「多分ないだろうなあ」

「えーくん、明日お弁当何食べたい？」

「やっぱ肉だろ」

「二弁当作ってもらうの!?!」

「あー！希械ちゃんあたしもー!」

明日からは通常授業が始まるらしいのでお昼ご飯が必要になる。一応ランチラッシュというヒーローがやっている学食があるんだけど、なにせ私は目立つうえに邪魔くさいし椅子も壊しちゃうかもしれない。だから、自分でご飯を作ってくるのだ。料理の腕にはそれなりに自信がある、というか鉄とかゴムとかのまづいものを食べたあとどうしても口直しに美味しいものが食べたいという理由で料理をする様になりました。でもいつか学食にも行ってみたいな。

えーくんも学食に行きたいなら学食でいいと思うんだけど、一つ作るのも二つ作るのも一緒なので中学でお弁当になってからは私がよくえーくんのお弁当も一緒に作ってた。学食に行きたいなら断ってくれると思うし、三奈ちゃんもお弁当食べたいみたいだから作ってあげないと。

「じゃあ、帰りにお買い物行かないとね。お肉……唐揚げでいいかな?」

「いいな！荷物持ちは任せとけ!」

「希械ちゃんのから揚げ私好きー!」

翌日のこと、雄英の普通の授業ってどんなだろうと思ってたけど案外普通だったなあ。DJやってるプレゼントマイク先生の授業とかどんなとんでも授業かと思ってたけど進む速度以外は普通に中学校



と一緒に学生授業って感じだった。三奈ちゃんはお勉強は苦手なので助けを求められたら教えてあげられるようにしとかなないと。

「はい、えーくんの分のお弁当。こっちは三奈ちゃんのだよ」

「お、さんきゅな！あー腹減ったぜ！」

「わーありがとう希械ちゃん！」

「お三方ー、俺たちも入れてくんね？」

「おう、一緒に食おうぜ！」

「私も、いいかしら？」

「いいよー！蛙吹さんだっけ？」

「ええ、蛙吹梅雨よ。梅雨ちゃんと呼んで」

今は昼時、クラスのみんなはお弁当派と学食派、購買派に分かれてそれぞれご飯を食べているところ。お弁当組の私とえーくんと三奈ちゃん、購買組の瀬呂くんと上鳴くん、あとえーくんが引つ張ってきた不満げな爆豪くん、お弁当らしい蛙吹梅雨さんで机を寄せた。

というわけで今日のお弁当！えーくんリクエストのから揚げ、三奈ちゃんリクエストの甘い卵焼き、お新香とプチトマト、ブロッコリー。ご飯の上には鶏そぼろ。ちよつと茶色いけど普通のお弁当だと思う。あ、これも。朝のうちに作ったタルタルソースの蓋を開けて置いておく。私唐揚げはタルタルソースが好きなんだよね。レモンもいけど、素でもいい。

「にしても、量よ」

「しようがないよ、希械ちゃん体大きいんだもん」

「あと午後動くからその分の補給も兼ねてんだよね？」

「うん、午後のヒーロー基礎学、実技って聞いたから」

言えない、実は気合を入れて作り過ぎちゃったからお重になった。なんて。成長期だし動くからえーくんも三奈ちゃんも大きめのお弁当だけど私は3段のお重、唐揚げがほとんどを占めている。だって昨日鶏もも肉が安くて……

「美味しそうね、樫ちゃんが作ったのかしら？」

「うん、良かったら食べていいよ。たくさんあるから、上鳴くんも瀬呂くんもどうぞ。爆豪くんも、良かったら」



オールマイト先生が大袈裟なほどの手ぶりでその手に持った小さなリモコンを操作するとクラスの壁がせりだしてきて、そこには学籍番号が降られたアタツシケースが収められていた。私の番号も、ある。皆と同じ大きさで、私からしたら結構小さいけど、要望が通つてればそんなにかさばるものじゃないから。

オールマイト先生からアタツシケースを受け取って胸に抱く。これが、私のコスチューム……私の力からすればかなり軽い筈なのに、とてもとても重い物を持ったような感じがした。

「ぶっ!？」

「ヒーロー科最高……」

「ああ……」

今回の女の子たちはみんな自分のコスチュームに夢中だったので私は特に揉まれたりすることもなく着替えを終えて早めにグラウンドβに到着した。私の姿を確認した男子たちは噴き出して驚いたり、サムズアップしたり、同意したりと予想通りな反応をしている。だって今の私、かなり露出がすごいことになってるから……

私のヒーロースーツはまず短いタンクトップ、スパッツを身に着けてて色はスカイブルー、へそ出しのデザイン、タンクトップのすそを結んでるのがポイントでさらに上からマリンブルーに銀色の線が一本入ったぶかぶかのフード付きジャンパー。実はお願いの段階ではジャンパーじゃなかったんだけど法に引つかかるから追加されたみたい。私は肌からメカを出すので服を着ると破けちゃうんだけど、このジャンパーとタンクトップにスパッツは再生機能が付いてるらしいの! すっごいね技術の進歩!

私自身はヒーロースーツに合わせてちょっとおしゃれしてるんだ。鉄の色だった手足を真っ白にして、髪の毛も光らせることができるのを利用して青のメッシュを入れて、私の体で一番好きどころ、蒼い左目を出している。右目は引き続き隠してるけど、あんまり関係ないから。青と白で統一された、私の印象はどうだろう……? ?

ちなみに追加されたジャンパーには大事な意味があつて、なんと私の体の放熱を助けてくれる機能があるらしいの！オーバーヒートすると個性が使えなくなるから、排熱の手助けになる機能があるのは嬉しいなあ……

「おおー！希械それかつけえじゃん！似合ってるぜ！」

「あ、えーくん。えーくんも凄いい似合ってるね！」

私に声をかけてくれたのはえーくん、彼のヒーロースーツは個性を活かすために上半身はほとんど裸だ。でも顔を防護しているプロテクターとか、凄いかっこいいと思う。まあ、生半可な防具や服だとえーくんのほうが丈夫なので着る意味がないというのは実に理にかなってる、と思う。私にも一応羞恥心というものはあるにはあるんだけど、私みたいな大きくて体の半分が機械の人間に興奮するような人はいないので、私自身はそんなに気にならない。直接接触られたりしなければ平気だ。

「んんんみな似合ってるぜ有精卵ども！では本日の訓練は、入試のもう二歩先！屋内戦闘訓練だ！君らにはこれから2対2の屋内戦を行ってもらおう！」

「基礎訓練もなしにですか!？」

「基礎を知るための訓練さ！いいかい!?設定はこうだ！ヴィランが核爆弾と共にビルに籠城している！ヒーローは核爆弾を回収するかヴィランを捕まえねばならない！制限時間は10分だ！過ぎれば核爆弾が起爆する！」

おお、ドラマとかで見るアメリカンな設定……核爆弾かあ……それが機械の範囲なら私がかでできるんだけど。重水素での核融合炉も作ったことあるし、割と核への対策はばっちり出来てるのだ。両親には滅茶苦茶怒られたけど、もう安全対策ばっちりだもんね。イエローケーキだって食べる女の子なのだ私は、食べたことないけど。

「そしてコンビの決め方は……くじだ！現場でのチームアップということを念頭に入れて欲しい！では引いてみよう！」

なるほど、誰とコンビかなあ。出来ればえーくんか三奈ちゃんが気心知れててやりやすいな、って思うんだけど。逆に爆豪くんとかはダ

メかも、連携取れる気がしないよ。あと希望を言うなら……八百万さんとは組んでみたい。彼女の個性の創造は私より作れるものの範囲が広い。弱点かどうかわからないけど構造を知らない物は作れないというものも私が機械化してしまえばどうとでもなる、あと上鳴くん！大容量の電気を帯電させることができるらしいので夢のガトリングレールガンを作れるかもしれない！火力過剰だからこの訓練では使えないけど！

仮に爆豪くんと組んだらどうなるんだろう……スタンドプレーしか見えないし、私に合わせるといふこともしないだろうな……それはそれで私も好き勝手出来るということではあるんだけど、訓練の趣旨とは違うし……あとは誰と組んだらいいだろう……緑谷君は正直心配になっちゃう。あの0か100かしかない超パワーは魅力的ではあるけど屋内戦には適さないし、ついでに行動不能のデメリットが結構いたい。あと、怪我ばかりしてたらいずれ体が追い付かなくて壊れちゃうよ。うーん、うーん……

「Jチーム！樅少女！切島少年！」

「……やった！えーくんと一緒だ！」

「だー！気持ちには分かったから抱き着いて持ち上げないでくれ！ハズい！」

「……ごめん」

オールマイト先生のくじの結果を聞いて、嬉しくなった私はえーくんを抱き上げて嬉しさを表現してしまった。えーくんに言われてシユンとなつて下ろしたけど、オールマイト先生の微笑ましいものを見る視線と、クラスの大多数からみる何か可愛いものを見たという感じの緩い視線に私は、蒸気を吹き出して黙り込んでしまうのであった。

## 6話

「では最初の組み合わせだ！Aコンビがヒーロー！Dコンビがヴィラン！ヴィランは先に入って準備をして、5分後にヒーローが突入する！」

雄英に入ってから初めての戦闘訓練、初っ端の組み合わせは爆豪さんとメガネが特徴的な飯田くん、緑谷さんと全体的にほわほわしてる麗日さん。どうしよう、すごく心配だ。なぜか知らないけど爆豪くんは緑谷くんを目の敵にしてるように感じる。昨日の個性把握テストの時に抱き留めて無理やり止めた時、本気で爆豪くんは緑谷くんに攻撃するつもりだった。

まるでそれが当然のように躊躇いがないほど自然体、普通なら個性で人を攻撃するのはいけないことだと習う。特に、私みたいなやろうと思えば人を殺せてしまう個性だと特にそうだ。それがあんなに躊躇なく攻撃しにかかるなんて……とてもとても心配だ。緑谷くんが大怪我しないといいけど……

「では開始だ！ヒーローは突入！」

始まった。観戦用の監視カメラを確認するに飯田くんは最後まで作戦会議をしようとしていたみたいだけど始まった瞬間にすべて無視した爆豪くんが勝手に飛び出してしまった。麗日さんと緑谷くんを動物的としか言えないほどの直感で見つけ出してすぐに奇襲をかける。

「爆豪、奇襲か！俺あ正面からの方が好きだけどやるじゃねえか！」

「うん、曲がり角の死角から速攻で攻撃したのかな。緑谷くんよく気付けたね」

爆豪くん、個性把握テストの時から思ってたけど、色々とうまい。自分の個性をどう使えばいいのかというセンスがすごく突出してるように思える。爆発で空を飛んだりとか、そういう柔軟な発想にシンブルかつ応用性が高い個性、性格に目をつぶればヒーロー候補生として満点ではないだろうか。

その初撃を麗日さんを抱えて躲した緑谷くんも、すごい。それと同

時に、やられ慣れてるから避けられたという事実に気づいてしまった。何とも言えない気分になった。右目が勝手に攻撃がかすってマスクが破損した緑谷くんの口元の動きから言葉を割り出した。最初は右の大振り、つまりそれを理解するほどやられてたんだ。あんまりいい印象じゃなかったけど、爆豪くん……君は彼に何をしていたの？

私心丸出しの緑谷くん狙い、麗日さんは眼中に入っていないだろう。麗日さんがその場を離れて核を確保しに向かっても無視している。これ以上は知るべきじゃないと思つて、意図して右目の機能を抑える。確保テープを巻こうとする緑谷くんを苛烈に攻める爆豪くん。逃げるヒーロー側を負うヴィラン側。その追いかっこは、私にとつて一線を越える形で終息した。

オールマイト先生がストップをかけたにもかかわらずビルの壁が吹っ飛ぶ。やったのは爆豪くん、コスチュームの機能なのだろうか今までにないほどの規模の大爆発だ。当然当たれば人は死ぬほどの……クラスメイトがざわつく。だって、明らかに殺しにかかっているように見えるから。しかも訓練の趣旨である核があるという前提を無視してまで。私はオールマイト先生に駆け寄って止めるように催促する。

「お、オールマイト先生……これ、だめです。止めないと、緑谷くん大怪我じゃすまないですよ！」

「……双方中止、これ以上は……むっ!？」

オールマイト先生が画面を注視する。するとそこには、初めて右腕に個性を発動した緑谷くんが爆豪くんに反撃……してない？する様に見せて上に放った超パワーは直上の部屋を粉碎して核の部屋の床を抜いた。そのがれきを麗日さんが柱をフルスイングして散弾のように発射、飯田くんが避けた隙に核に抱き着いて回収してしまった。

無傷のヴィランと満身創痍のヒーロー、特に緑谷くんの腕は……おそらく複雑骨折以上の怪我をしている。はちゃめちゃだ、こんなの訓練じゃない。チームを迎えに行ったオールマイト先生の後ろ姿を見ながら、私は授業続行できるかなと一人心配になるのだった。

「では次はヒーローチームB！ヴィランチームはJだ！」

「お！次は俺たちだけ希械！俺たちで空気変えてこうぜ。勝つぞ！」

「……うん！頑張ろうえーくん！」

帰ってきた爆豪くんは講評の時間ずっとさっきまでの苛烈さが嘘のように静かだった。八百万さんの分析はなるほどと頷けるものでオールマイト先生も太鼓判を押す程。なんか若干震えてるけどどうしたんだろう？それはともかく緑谷くんは保健室へ搬送され、気を取り直して別のビルを使って訓練を再開することになった。そしてその順番が来たのは、私たち。

相手は轟焦凍くん、障子目蔵くん、お昼を一緒した瀬呂くんの3人チームだ。私たちは先にビルに入って準備&作戦会議タイム。さて、どうしようかな……

「しかしまあ、ヴィラン役ってどういう風にやったらいいんだ？希械はどう思う？」

「えっと、ね。多分ヒーロー側がやられたらいやなことやればいいんだと思う。えーくんは苦手だと思うけど、協力してくれる？」

「あー……しゃーねーな！何せ俺たちや今ヴィランだ！嫌がらせ、やってやろうぜ！」

「じゃ、じゃあ頑張ろうね。まずは核なんだけど……私に取り込んじゃおうかなって」

「おおー希械ならできるもんなー！」

作戦会議、私は崩れた正座で、えーくんは胡坐をかいて向かい合い、ハリボテの核を前にして考えてた作戦を説明する。ハリボテだけど、核爆弾なら機械だ。つまり私の個性の範疇内、利用しない手は一切ない。オールマイト先生はビル内に隠せばいいって言ってたから、私がビル外に出なければルール違反じゃないし、意表も付ける。

そんなわけで私は真っ白の機械腕をハリボテの核に当てる。私の手から広がって蠢く微細な鉄片やチューブなどが核爆弾を覆う。一応オールマイト先生に何か言われても大丈夫なように大きさから予



想される構造の爆弾の起爆解除処理を並行して行った後に思いつき  
り力を込めて、ぐしゃりと核を圧縮。私の顔くらいになった核をバリ  
ボリと音を立てて平らげる。

「美味しくない……」

「あー、帰りになんか奢ってやるよ。ラーメンでも行こうぜ」

「……ラーメン……元気出た!」

座った状態で美味しくないハリボテを食べ切って、率直な感想を漏  
らす私。美味しい昼食の後にこれでテンションが下がってしまった。  
しょうがないなあという顔をして立ち上がったえーくんが私の頭を  
軽く叩いてそんなことを言ってくれるお陰で元気を取り戻し、すくつ  
と立ち上がる。えーくんと一緒なら負ける気がしない!

えーくんに向かって手を差し出す。入試の時と同じだけど今度は  
私から。えーくんはそれに笑顔で硬化した拳を合わせてくれる。気  
合いのグータッチはここぞという時こそ。よし、頑張るぞ!

『では、2試合目スタートだ!』

オールマイト先生の宣言、それと同時に私たちのいる部屋が凍り付  
いた。いや、多分違う。ビルごと凍り付いたんだ。それは私たちの足  
もそう、なるほどこれは凄い個性だ。誰だろう、轟くんかな?ビルご  
と凍らせて核兵器を無力化しつつ私たちも無力化かあ……でもなあ。

「じゃ、行くか希械。真正面から男らしく正面突破だ!」

「あーだめえーくん。守勢なのに攻めに行ったら本末転倒だよ。そ  
れに、折角だからこのまま利用しちゃおうよ。嫌がらせ第2弾、油断  
させて奇襲しよ」

「だー……やっぱこういうの性に合わねえわ。男らしくねえ。でも  
負けるのも男らしくねえしなあ」

暢気に会話する私たちにはあまり関係ない。私の機械の足なら凍  
り付いても強引に砕けるし、脚を硬化してるえーくんも同じ。動けな  
いと思せかけてだまし討ちしたほうがいいと思う、えーくんのやりた  
いことからは遠ざかっちゃうけど私たちは今ヴィランなので飯田く  
んがなりきっていたように私たちも真剣に徹するべきだ。ヴィラン  
はヴィランらしく、相手の嫌がることを徹底的に。

「……核が見当たらない。轟、どうする」

「関係ねえ、無理やり動いても脚の皮？がれちゃ満足に動けねえだろ。確保して終わりだ」

「ひえ〜なんだこれ、轟お前も才能マンかよ」

来た！どうやら私たちが完全に動けないという前提でいるらしく、3人も少し気が緩んでいる様子。部屋に入ってくる前にえーくんとアイコンタクトして頷きあう。作戦開始だ。部屋の中に入ってきた3人に対してえーくんががつくしと肩を落とす。

「んだよこれ、こんな反則じゃねえかよ。動けねえ！」

「えーこれで終わりかよ。俺のテープ出番ゼロじゃねえか！」

「すさまじいな。個性テスト1位を張り付けか」

「わりいな。レベルが違い過ぎた」

確保テープを持った瀬呂くんと障子くんがこちらに近づいてテープを巻こうとしてくる。あと少し、ちらりとえーくんに合図を送る。頷いたえーくんと私は同時にバキン！と足元の氷を割って、動き出す。突然のことに3人は動きを一瞬止めた。

「えーくん！障子くんをおねがい！」

「任されたー！うらああああ!!」

えーくんは私の声に大きく返して障子くんにタツクル、全身を硬化させて障子くんと壁を突き破り隣の部屋に消えていった。私は近くにいた瀬呂くんに加減しつつもぶつかって壁に押し付ける。そのままホツチキスの芯を大きくしたような拘束具を作りバスバス！と手足を壁に縫い付ける。そこで拘束具が起動して微量の電撃を流して瀬呂くんの筋肉を麻痺させて固定し無力化した。

「……っー」

そこまでやってようやく事態を飲み込んだらしい轟くんが私に向かって氷結を放ち、私の左半身が凍り付く。けど私は左手と左足の油圧システムを思いつきり加圧して手足を動かして氷を砕き、轟くんに向かつて手を向ける。ガシャコンと音を立てて左手が変形、前腕から手の甲までが上にせりあがって前腕内部から機関砲が姿を現した。

もちろん中身はゴム弾で火薬で発射するんじゃないやなくて空気圧を利

用した威力調整版、バシユシユシユ！と音を立てて連射されたゴム弾を轟くんは前に氷の壁を作って防御する。目の前に氷つくっちゃったら相手が見えない！好都合！私は全力でダツシユして右手で思いつき氷を殴り砕いて轟くんに接近する。

「効かないよ！」

「……ちい！」

「おらあっ!!」

「なに!？」

私の平手をスウエーで回避して距離を取ろうとする轟くんの横の壁をまたタツクルでぶち抜いてきたえーくんが奇襲をかける。どうやら障子くんの無力化に成功したみたい！流石はえーくん！まあえーくんが負けるってことは私の全力パンチより強いってことなのでそうそうないとは思ってたけど！それでもナイスタイミングで戻ってきてくれて最高にうれしい！大きくバックステップを取って躲した轟くん、仕切り直しかな。

「形勢逆転だぜ、轟」

「えへへ、作戦成功だね。えーくん」

「おう、ちなみに核の場所なんだけどな。希械が核を取り込んでるんだ、だから俺たちを確保しない限り終わらねーぜ」

「どつちが反則だ」

「だって私たち、いまヴァイランだから」

「まあこっからは男らしく真正面からガチンコだぜ。やるんだろ、轟」

返答は攻撃だった。そう来なくっちゃと笑った。私に向かって迫る氷の柱を割って入ったえーくんが受けてくれる。その隙に私は腕の側面を開いて、小型徹甲ミサイルを3発、氷に向かって打ち込んだ。全身氷漬けになったえーくんの周りの氷が吹き飛んで彼の自由を取り戻す。雄たけびを上げたえーくんの突進をもう一度いなす轟くんだけ、動きが鈍い。右目の視界を切り替える、サーモグラフィーで理解した、轟くんの体温がどんどん下がっていった。個性を使用しすぎると体温が下がってしまうのか！それで身体機能に障害が出て

る。

「希械！なんかアイツ動きが鈍いぜ！速攻だ！逃げ道塞いでくれ！」

「わかった！クアドラプルガトリング！形成開始！」

両手を変形させる。機械音が積み重なり、6連装の大型ガトリング砲を上下くつつけた重火器二門が両手に出現する。耳をつんざく金切り声をあげて弾丸を吐き出すガトリング砲が轟くんの逃げ場を奪う。当てても大丈夫、死ぬほど痛いけど。まあ当てないよう外して、えーくんなら当たっても全然平気。私は轟くんの逃げ場を奪えばいい。

両目で行き場がないことを確認した轟くんは真正面から突っ込むえーくんに向かって今一度の氷結を見舞う、が正面突破をするえーくんはまさに重戦車、硬化して氷漬けになっても私のガトリング砲が氷を砕いてしまい、その歩みを止められない。逃げ場を失った轟くんをえーくんは片腕で壁に押し付け、硬化した貫手を突き付ける。

「今回は俺たちの勝ちだぜ、轟」

「……ああ」

『ヴィランチーム、WIIIIIIIN!!!』

「よっしやあああああ！」

「やった！」

轟君を解放したえーくんは両手をあげて喜んで、こっちに走ってくる。私も手を元に戻してえーくんに走り寄る。そのままどちらともなくガチン！と私の機械の手とえーくんの硬化した手をハイタッチでぶつけて、私たちは勝利の喜びを共有したのであった。

「あのく、お二人さん。喜ぶのはいいんだけど、これ外して……」

「あっ!!!ごめん瀬呂くん！すぐ外すから！」

若干締まらなかったけど、これはこれで私らしいかも。

## 7話

「では、講評だ！まず今回のベストは樫少女と切島少年の二人だな！理由はわかるかな!？」

「あれ？樫さんだけやないんや」

「はい、オールマイト先生！」

「うむ、では飯田少年！」

瀬呂くんを拘束していた拘束具を引っかいて回収し、帰りながらぼりぼりと口に収めながらモニタールームに帰ってきた。轟くんは一人でさっさと帰っちゃったし、どうやら壁を2枚突き破ったせいで気絶しちゃった障子くんに肩を貸しながらにやり過ぎたわと謝ってるえーくん。瀬呂くんは私がかじってる拘束具を見てうまいのか？と聞いてきたけど驚くほどまずいよと返したら食わなきやいいのって言うってた。こういうのをケチらなきやいけないの。食べなきや材料が底をつくんだよお……。

そんな感じで講評タイムに入る。私より目線がちよつと低いオールマイト先生の隣に並ぶ、凄いなオールマイト先生、おっきい。身長の高さで言えば私の方が高いんだけど、筋肉とか溢れる力強さとか安心感とか……人としての大きさが全身からにじみ出てる。それに対して私は注目されてるのが恥ずかしくてぷしゅ、と耳あたりから放熱してしまう始末だ。でも私の隣に並んだえーくんが誇らしげなのを見て少しうれしくなる。初訓練にして初勝利、これは嬉しい。

そして私たち二人がベストだった理由、正直私にはわかんないや。ヒーロー側の勝利条件を一つ潰したっていうのだったら私だけになるはずだし、無力化数だったら障子くんと轟くんを拘束したえーくんになるはず。だからどうして、二人なのか。是非とも気になる。手を挙げたのは八百万さんと飯田くんの二人、八百万さんはさつき答えたのでオールマイト先生は飯田くんを指名した。

「二人がベストな理由、それはチームワークの巧みさであると思います。轟君の個性による制圧を逆利用して油断を突き、身体能力が一番高かった障子君を別の部屋に分断して拘束、残った瀬呂君を同時に

拘束することで瞬時に形勢を逆転させました。また轟君の個性を受けても問題ない樫さんが残ることで障子君を拘束する時間を稼ぎ、さらにはもう一度奇襲をかける隙を作る。完成されたコンビネーションだと思われまます」

「むう、またしても思ってたより……ごほん！飯田少年の言う通りだ！もつと言えば轟少年への対処も素晴らしい！切島少年の個性をうまく利用して切島少年に当たっても問題ないが轟少年が当たったらずい攻撃で逃げ場を塞ぎ、状況判断を鈍らせたうえでの拘束！初めての訓練とは思えないほど素晴らしいぞ！高得点だな！ところで樫少女、核爆弾の起爆解除なんてどこで知ったんだ？」

「今時爆弾の起爆装置の構造なんてネットの深いところに転がってますよ」

「現代社会の闇！」

「……冗談です、メカジョーク」

「だからお前の冗談は冗談じゃねーってば」

実はアルバイト先の粗大ごみ回収危険物回収の人がヒーロー免許持っていて色々扱いを教えてくれてるだけなだけで。人気が出なかってヒーローからは引退した人だけど持ってる知識だけは本当だし……雄英を目指すって言ったら必要になるかもって教えてくれたのだ。ありがとう社長さん。でもなんで核ミサイルとかの図解を持ってるの？

はちやめちやだった緑谷くんたちの時とは違いある程度まともだった私たちの試合を見て他の人たちもやる気をあらわにしたみたい。皆ああすればいいのか、こんな感じで行こうかと他のチームの人たちにも火が入った様子。でもやっぱり、私は対人戦が苦手かもしれない。使える火力に上限が出ちゃうから、対ロボットにやったレベルキヤノンなんて使えるわけないし……課題、かなあ。

「樫さん、お疲れさまでしたわ。素晴らしいコンビネーションでした、切島さんも」

「うん、ありがとう八百万さん。八百万さんは……峰田くんとかだよね？大丈夫そう？」

「ま、まあ峰田も訓練になったらまじめにやるだろ。何で入学2日目で頓珍漢なキャラになってるのかはしんねーけどよ」

「時々視線が怖いですわ……」

話題になってる峰田くん、どうにも男子から見てもその、えっちな方面にいろいろ傾きすぎてるらしい。昨日1日でそこまで知られちゃってるってことはそういうお話をしちゃったのかな？もしかしてヒーロー科ってみんな濃ゆいのかなあ？私は自分を柵に上げてそんなことを考えつつも、次の試合を観戦するのであった。あ！次三奈ちゃんだ！がんばれー！

「ん、希械どこに行くんだ？反省会やってこうぜ」

「あ、うん。ちよつと相澤先生に用があるから職員室に行くの。アルバイトの事、出来ないと私の個性弱くなっちゃうし」

「あー、そういうことかあ。オツケー教室で待ってるわ」

授業を終えて、ヒーロースーツから制服に着替えた私たち。教室の中ではそれぞれが今のヒーロー基礎学の反省会を行っていた。私もそうしようと思っただけで、相澤先生にアルバイトを続けていいか確認しないとイケなかったので一旦教室を出ることにする。クラス全体でやろうと飯田くんが張り切ってたんだけど轟くと爆豪くんは帰っちゃった。

引き止めたえーくんは残念そうで、私も爆発のこととか聞きたかったからちよつと残念。とりあえず行こうかなと教室のドアを開けるとぼふり、と胸に衝撃が。別に痛くもかゆくもないけど相手はそうかもわからない、首を下ろして見下ろすと私の胸に激突したのは緑谷くんのような。彼の手はやはり重傷だったらしくギプスで固定されて吊られている。うわあ、痛そう……

「ゆゆゆゆ樫さん!?!ごめんなさい悪気はなかったんです!」

「あ、だめだよ腕動かしちゃ!私こそ確認不足でごめんね。腕は痛くない?私鈍くさいし痛覚も鈍いからぶつかっても気づけなくて……」

私の胸に顔を突っ込んだことの情報がようやく処理出来たらしい  
緑谷くんが飛びのいて腕をぶんぶん振って謝ろうとするもんだから  
私は逆に距離を詰めて彼の手をできる限り優しく抑える。骨折して  
る腕を動かさしちゃだめだ、うんでも元氣そうでよかったなあ。緑谷く  
んが帰ってきたことに気づいたえーくんや三奈ちゃん、麗日さんに飯  
田くんが団子のようになって彼に口々に色々いう。そこでようやく  
再起動した緑谷くんは爆豪くんの事を尋ねる。帰っていつてしまっ  
たことを言うと言と緑谷くんは一言謝って駆けだしていった。

緑谷くんと爆豪くん、この二人にはどうやら私たちの考える以上に  
複雑な事情があるのかもしれない。深入りするべきではないかもし  
れないけど、心配だ。とりあえず私は走っていつてしまった緑谷くん  
に続いて教室を後にする。本来の目的である相澤先生の所に行かな  
いと。

雄英高校は大きい、普通科、ヒーロー科、サポート科、経営戦略科  
などのたくさん科がある、よって校舎も大きい。私たちのクラスか  
ら職員室までもそれなりの距離がある、私は速く用事を済ませて反省  
会に参加したかったので少し早歩きで通り道である下駄箱前を横切  
ろうとしたら、緑谷くんが何かを話しているのが聞こえた。その内容  
の衝撃具合に、思わず足が止まってしまふ。

「この、個性は……人から授かった個性なんだ」

えっ？息をのむ。だって、個性は自分のものだから、他人に渡した  
り奪ったりできるものじゃない。ましてや自分の力を渡すだなんて、  
もつとあり得ない。そもそも個性の譲渡なんて夢物語のはずだ、極め  
て不可能そのもの。ひゅつと息をのむ、繋がった、繋がってしまった。

緑谷くんの個性発動時に観測したエネルギーとオールマイイト先生  
が纏ってるエネルギーの同一性にすぐ行きあたってしまった。緑谷  
くんと爆豪くんはまだ何かを言い合っているようだけでもう私には  
聞こえない。下駄箱を背にずるずると座り込む、幸い誰もいない。  
ヒーロー科以外の下校時間はとっくに過ぎてるから。これを聞いて  
しまった、聞かれてしまったらとんでもないことになる。

いつの間にか爆豪くんはいなくて、代わりにオールマイイト先生が緑



谷くんと話し合っていた。話したのか、とオールマイト先生が言ったとたんに私の推論が真実だということに行きついて、もう耐えられなくなった。音を立てないように立ち上がって二人に気づかれないうに私は足早に職員室に向かう。この話は絶対誰にも話せない。緑谷くんの個性がオールマイト先生のものだったなんて、誰にも言えるもんか。

「失礼します……」

「お！なんだA組のリスナーじゃねえか！どうした？なんか元気ないな！」

「あ、いえ……今日初めての訓練でオールマイト先生と一緒にだったと思うと……なんかどつと疲れちゃつて。機械だから疲れ知らずが自慢なんですけど」

「精神面っていうのは馬鹿にできないもんだぞリスナー。体と心のバランスだ、今日は帰ってゆっくり休むといいぜ？それで職員室に何の用だ？サインなら明日にしてやるから」

「あ、いえ相澤先生に用がありました……いらつしやいますか？」

同級生と平和の象徴のともでもない秘密を知ってしまった私がほぼ満身創痍で当初の目的を果たそうと職員室のドアを開ける。流石にあんなことをほとんど盗み聞きに近い形で知ってしまった直後なので動揺が顔に出てたらしい、背の高い私を下からのぞき込むような形で明るく心配してくれたプレゼントマイク先生にお願いして相澤先生を呼んでもらう。

「おいイレイザー！お前のクラスのビューティーなリスナーがご指名だぞー」

「マイク、声がでかい。なんだ樫、下校時間は過ぎてるぞ」

「えっと、その……少し相談がありました、お時間頂けたらなと」

「……少し待て。談話室の3番で待ってろ」

「え、あの別にそこまで大事な話じゃ」

「いいから待ってろリスナー。俺たちはヒーローだが教師なんだ

よ。相談って言われたら本腰入れるのが仕事だ」

「その、はい……」

どうしよう、ただのアルバイトの許可が欲しいだなんてとても言いづらい。他の先生方も私が大きくて目立つものだし、さらには入学2日で相談なんて持ちかけるものだから何かあったのかととても心配そうにこつちを見ていて思わずいたたまれなくなってしまふ。違うんです、アルバイトを続けたいだけなんです。個性に使う素材を取り込みたいだけなんです、口を使わずに。さつきとは別の意味で緊張してきた、どうしよう。

言われた通りに職員室の近くにある談話室、複数あるうちの3番の部屋の中に入って待つ。えーくんたちに時間かかるかもしれないから先帰っててメールうつとかなきや。と自分の携帯を個性で電子的に操作してメールを二人に送信する。既読着いたから多分大丈夫。少しして相澤先生と、なぜかプレゼントマイク先生と一緒に入ってきた。どうして？

「マイク、お前は別の仕事が入ってるだろ。すまん樫、待たせたな」

「目の前で相談だの言われたら聞いてやるのがヒーローだろ？ ああ、聞かれたくないなら出てくぜ？」

「ごめんなさい、お騒がせして。その、相談というのは……アルバイトを続けたくて……」

「アルバイトお!!?リスナーお前中学の時から働いてたのか!？」

「バイトか、理由は？」

「先生方は、私の個性ご存じですよ？ 私は素材を取り込んで、機械に変えます。だから、素材を集める為に粗大ごみや危険ゴミの処理のアルバイトをしているんです」

私は八百万さんみたいに脂肪から何かを作るとかそういう器用な個性じゃない。鉄が必要ななら鉄を取り込まないといけないし、絶縁体に半導体など機械に必要なあらゆる素材がないと私の個性は一気に弱体化する。武器を作った後使い終わったら出来るだけ回収して食べるのもそういう理由からだ。体内で合金を作ったりは出来ても元の元素は作れない。酸素があってもそれを鉄にしたりなんてのは不

可能だ。

私がアルバイトをしている、というプレゼントマイク先生は驚いたようで素っ頓狂な声をあげている。確かに国立の雄英に通う生徒、偏差値79という圧倒的な数値を持つこの進学校で苦学生は中々見ないのかもしれないがそんなに驚くことなのだろうか。それとも理由が理由だからなのだろうか？

「基本的に雄英がアルバイト厳禁なのは分かっているな？特にヒーロー科はそんな時間一切ないぞ」

「はい、実感してます。ですけど素材がないと私の個性は弱くなるばかりです。リサイクルにも限度が……」

「だろうな……金が目的なわけではないんだな？」

中学3年間で貯めた素材貯金は膨大だけど、それこそ湯水のように使うわけにはいかない。特に今日のガトリングでゴムの在庫は目減りしてしまっている。ゴムは特にまずいので好き嫌いしてたらこれだ、だめだね選り好みしてたら……。ただ、お金目的ではないのはそうだ。お金は全額お母さんに預けてるし私はお小遣いだけでやりくりしてる。お弁当とかの食費もお母さんに申請して買ってるくらいだから、アルバイト代は使ったことない。

「お金目的ではないです。というかアルバイト代は全部両親に預けてるので使ったことなくて……」

「そうか……わかった。結論だが、アルバイトを続けることは許可できない」

えーっ!?流れ的に許可をするべきでしょうそれは!と思っってしまったが何か続きがあるようだ。マイク先生が内線でどこかに連絡しているので続きがあるのだろう。マイク先生の連絡が終わってぐっつとサムズアップをしている。それを見て頷いた相澤先生が続けて口を開いた。

「代わりに、もっといい素材を提供してやる。サポート科にいくぞ」

## 8話

サポート科、それはヒーローを支えるコスチューム、サポートアイテムを開発する技術者を養成する雄英の隠れた屋台骨の学科。私の好きなヒーローである掘削ヒーロー、パワーローダー先生が受け持つ学科である。アルバイトの続行を却下された私であるが内線でどっかに連絡したプレゼントマイク先生といきなりサポート科に行くと言った相澤先生に私は困惑してしまふ。

「サポート科に、ですか？でも私サポートアイテムはあまり……」

「行けば分かる、時間は有限だ。いくぞ」

「は、はいー！」

あ、これ反省会いけないやつだ。と私は悟る。けど、私の個性の弾切れ問題は滅茶苦茶に重要なのでここは大人しく相澤先生たちについていくことにしよう。談話室の扉を開けた相澤先生とプレゼントマイク先生の後ろについて廊下を歩く。途中で凄いガリガリの金髪でスーツの男の人と校長室近くですれ違ったけど、あんなヒーローの先生いたかな？プレゼントマイク先生が冷や汗だらだらで体調でも悪いのかと思ってしまう。

そうしてサポート科に行くと、なんかすごいことになってる。いやその、爆発跡がいくつもあるのだ。まるで爆豪くんがあたりかまわず個性を使ったみたいになってるけど、爆豪くんはそういうことをむやみやたらにしないと切り切れないのが怖い所だけど多分違うと思う、思いたい。まさか負けたのが悔しくてサポート科で暴れたなんて、ないよね？ないはずだ、さすがに、うん。

「アローパワーローダー！お悩み解決の手段を持ってきたぜ〜！」

「くけけ、待ってたよ。初めまして樫希械、僕はパワーローダーだ、よろしくね」

「ゆ、樫希械です！あの、私まだ何も聞いてなくて……」

「ああ、そうなんだ。君ここに来るまでの爆発跡、見たよね？元凶は今もまだ作業中だけど……」

「え、はい！いろんなところが黒焦げで……」

「その元凶が発明した失敗作が、ここにあるんだ。サポートアイテムの場合機能しないようにばらしてから廃棄しないとダメなんだけど、この量ではね……君は大概のものを取り込んで個性の材料にできるとレーザーヘッドから聞いてるよ」

「えと、つまりこのアイテムたちを私が使っているということですか？」

教室の中に入ると、山積みになった大きささまざまな機械が置いてあり、そこでガシガシと鉄爪で頭を搔くパワーローダー先生の姿があった。どのアイテムもピッカピカでここ最近に作られたことが分かるがどれも破損しているようだ。だけど見る限り素材は一級品ばかり、私がいつも摂り込んでいるさびた鉄、古びたステンレス、ボロボロになったゴムやショートした跡がある銅線などもうリサイクルできないものとはけた違いにものがいい。

「そうだ。パワーローダーもどうやら倉庫がパンクする前にどうにかしたいと思ってたみたいだな。サポート科の後処理、やってみないか？代替手段がなかったらアルバイトを許可してたが、こっちの方がゴミより物がいいだろう」

「入試の映像と残骸を見せてもらったけど、ごみからあのレールガンを作りだすなんてね、大したものだよ。今からでもサポート科に来る気はないかい？掛け持ちも歓迎するよ」

「私はその、ヒーロー科でいっぱい……でも、後処理は任せてくださいー」

「うん、それでいいよ。ただでやらせるのも心苦しいから、欲しい素材があれば言ってくれ。報酬として君に渡そう」

「いいんですか!?それならその、ゴムが余ってたなら欲しいです。これからたくさん使うので……」

「ゴム？いったい何に使うんだ？」

「え、と重火器の非致死弾で大量に必要で……金属系は割と沢山貯金が残ってるんですけど今日ゴムをたくさん消費したので」

「ああ、あのガトリングか。演習見せてもらったがお前と切島が今の所一番点数が高いな。そのくらいならすぐだろう」

重火器を使わない、という選択肢もあるにはあるんだけど、そうすると私の場合素手か近接武器に頼ることになる。でも私のパンチもハンマーも銃より明らかに威力があるので本気では人に使えない。そういう意味で銃は私にとって手加減しやすい武器なのだ。ゴム弾なら当たっても大丈夫だし、意図的に外せるし……あと相澤先生にも褒めてもらえてちよつと鼻高々。嬉しいな。中学校の先生は私と話すとき、皆目を逸らしたりして怖がってたけど、雄英の先生はみんな私の顔を見て目を見て話してくれてとても嬉しい。私頑張っちゃうぞ！

「とりあえず今日はこれを処理すればいいんですか？」

「ああ、好きなタイミングでサポート科に来てくれれば都度処理できるようにためておくよ。来るときはイレイザーヘッドか僕に声をかけてくれればいい」

「わかりました。相澤先生、プレゼントマイク先生、パワーローダー先生。ありがとうございます」

「気にするな」

「お悩み解決だなりスナー！」

「くけけ。助かってるのは僕らのほうさ」

「じゃあ、始めますね」

制服のすそを捲り上げて、腰あたりから機械のアームが伸びてくる。それが見る見るうちに変形、拡張して金属粉碎機を作り上げた。シュレッダーのようなそれに私が次々ぽいぽいと失敗作アイテムを放り入れていく、金属が砕けたり拉げたりする不快な騒音が響いてアイテムが粉碎され私の中に入っていく。私は大雑把に金属、非金属、有機物その他に分けた後体内で元素に変えて貯蔵、貯金が増えてうれしいなあ。

「パワーローダー先生、ここなんですけどあーっ！っ！私のベイビーに何してるんですか貴方！」

「ひっ!? ベイビー!? 何の事ですか!?!」

「発目……君の失敗作の後処理をしてもらってるんだからそんなに突っかかるな」

私がホクホク顔で粉碎機を詰まらせる勢いで両手いっぱい抱えた失敗アイテムを処理していると、パワーローダー先生に用があったらしい女の子の生徒が私がやってる処理を見て悲鳴を上げて私に詰め寄ってきた。びっくりして何の事かと思っただけどベイビー……赤ちゃん、つまりこのアイテムたちの開発者で爆発の元凶は彼女ということなのだろう、うん。なるほど

「発目、作った方がいいが興味をなくして部屋の片隅に放置するなら有効利用したほうがいいだろう。それにその子は君がご執心のレールガンの制作者だ」

「えーあのロボインフェルノを消し飛ばしたレールガンですか!? っことは貴方がヒーロー科のメカの女の子! 聞きたいことが山ほどあるんです今時間ありますかありますよねじやあ私の工房へあいた!

「却下だ。すまないな、こいつは発目、入試で合格が決まった途端に雄英に潜り込んで開発ばかりしてる変わり者だ。だが腕は確かな方だから、頼れるときは頼ると良い」

「え、あ、はい……?」

ズガガガガという粉碎機が奏でるBGMに負けないくらいの大きな声で私に詰め寄る女の子、発目さんの頭を小突いて止めてくれる。うんと、私が言うのも何かあれかもしれないけど変わった子だなあ。でも後片付けしないのはダメだと思うよ、でも個性の産物で庭が埋まったことがある私としては親近感が湧く。お話くらいならしたいかな、なんか分解とかされそうになったら抵抗するけど。このタイプは多分、やるから。

「ああ、そうだ。君が入試で置いていったものはこっちで保管してるよ。ただまあ、興味を抑えられなかったそのアホとか上級生が分解してしまってるけど……回収するならごめんだけど保管場所に来てね。あれオールマイト先生くらいしか動かせないから」

「あ、いえ置いていってしまったのは私なので……でも回収はさせてもらいます、ご迷惑おかけしました」

「いや、結構みんな勉強になったみたいだよ」

「それとその……発目さん？そのドライバーとレンチはなにかなの私の足をどうするつもり？」

「いえ、中身が気になるので分解しようかと」

「見せてあげるから分解しないで……」

いつの間にか私の足をしげしげとみてる発目さん、やっぱり分解しようとするのね……。しようがないので外部カバーを開いて内部機構を露出するとなぜかパワーローダー先生もふむふむと私の足の中身を見てる。憧れのヒーローにそんなことをされて一気に恥ずかしくなった私は……相澤先生に目線で助けを求めた。ため息について、相澤先生は私を助けてくれるのであった。

「あの！すいません！オールマイイトが教師をしているそうなのですが、授業の様子はどうですか!？」

「意外と普通ですよ。でもやっぱり所々で強さとか風格ってやつがにじみ出てるっすね」

「そうなんですか！ではそっちの……でかつ!？」

「あう……すいません大きくて」

「ばかお前それ個性差別だぞ！雄英の生徒に何やってんだ！」

「あの、いっていいですか。いやもう行きます、行こうぜ希械」

「あ、うん」

翌日の事、今まで手に入らなかった素材やら貴重な元素やらを補給出来てホクホク……。まあいろいろ恥ずかしい思いもしなかったわけではないけど……。私は結局反省会には間に合わなかったのである。皆と仲良くなるチャンスが……。しようがないんだけどさ。とにかく私のアルバイト問題は解決、アルバイト先の社長さんにも昨日の内に挨拶してきた。饑別に、となんか色々な先端技術の資料を貰ったけどホントに何者なんだろう……。個性の特訓で敷地を使わせてもらった時「後ろにも目を付けるんだ!」という凄いアドバイスをくれた元ヒーロー社長さん……

まあそんなことが昨日あって、すっきり眠った私は元氣100倍な



わけで。えーくと一緒に登校していると、雄英の前で張っているマスコミの皆さんにカメラとマイクを向けられてインタビューをされているところなんだ。正確にはえーくんが私を引っ張って雄英の敷地内に入ったところなんだけど。

オールマイト先生が雄英の教師として就任したというビツクニュースは当然マスコミにとって格好の特ダネタ。なら生徒だろうと情報は引き出したい、なので登校途中の生徒へ手当たり次第にインタビューを行ってるんだと思う。最初は普通にインタビューを受けてたえーくんだけど、私にマイクを向けた途端若い記者がでかい、と言ったせいで少し機嫌が悪くなったみたい。

私が大きい、大きいって言われるのはしょうがないから諦めてるんだけど、個性への差別って表向きはダメだからいくら思ってもマスコミみたいな人たちがやっちゃだめなんだよね。ツーマンセルの相方らしい中年の記者さんは私に大きいっていった若い記者さんを叱りつけてくれるけど、えーくんは怒っちゃったみたい。事実だから気にしてないんだけどな、おっきいのが私だから。

後ろで雄英バリアーなる防御機構が発動して地面から障壁がせり立っていくのをしり目に、私たちは教室に入って行くのであった。

「ええ……すつごい……なにこれ……」

「全く、いくらかかったと思ってるんだか……悪いね樫、昨日の今日で」

「いえ！私がお役に立てるなら！ね、えーくん！」

「ウツス！時間あるしトレーニングにもなりそうだな！緑谷、お前腕大丈夫なのか？」

「うん。すっかり治してもらったよ。ヒーローは本来奉仕活動ってオールマイトも言ってたし、これもヒーロー活動だよね！」

「おし！委員長！号令くれ！」

「任せたまえ！ではーA諸君！これより破損した雄英バリアーの残骸の撤去作業を行う！各自がれきは樫さんの所へ持っていくんだ！」

授業が終わって夕方、実は日中、お昼ぐらいに少し事件があつてマスコミが敷地内に侵入するというアクシデントが発生、一時期パニックになったみたいなんだけど飯田くんの活躍で収めることが出来たみたい。ホームルームで委員長決めを行った後の出来事で、それを見た緑谷くんは自分に決定してた委員長職を飯田くんに譲渡したのだとか。これにて委員長決め問題はめでたしめでたし、で終われたらよかつたんだけどねえ……

目の前にあるのは雄英バリアー、だったもの。扉がまるで崩壊したかのようにバラバラに壊れてしまっている。やったのはマスコミだっていうけど……よくわからない。明日以降も雄英バリアーがないと困るので突貫作業でパワーローダー先生が直すのだけど、がれきが邪魔だから私に残骸をプレゼントしてくれるのだから！私はそれにホイホイ乗つかったらあれよあれよとクラスのみんなが集まつてがれき撤去のお手伝いをしてくれるっていうの！

昨日は帰った爆豪くんも轟くんもいるし、みんないい人なんだなあ。と私はここ外していいよというパワーローダー先生の指示で持ち前のパワーを活かし、何百キロとある金属塊を引っぺがして粉砕機に入れる作業を始めた。分解できるところは分解してゴミは私の個性いき。警察の捜査も証拠が出なくて迷宮入りだから半分諦めてるみたい。

飯田くんも委員長の初仕事で非常に張り切っている。凄いカクカク動いてる、おお、麗日さんすごい。替えの雄英バリアーを無重量にして浮かせて持ってきてる！みんなが手伝ってくれるお陰で1―Aとサポート科総出の雄英バリアー交換作業は日の沈まないうちに終わってしまうのだった。流石に全部はもらえないので扉の金属を延べ棒に変えて後で半分くらいお返ししないとなあ……

## USJ編

### 9話

「今日のヒーロー基礎学だが、俺とオールマイトともう一人の3人体制で見る事になった」

「何するんですかー!？」

「地震雷災害何でもござれ、レスキュー訓練だ」

雄英バリエーを修復した翌日の午後、授業開始前にやってきた相澤先生が今日のヒーロー基礎学の内容を説明してくれる。レスキュー、つまりは人命救助。ヒーローと切って切り離せない超重要な訓練内容だと思う。今は屋外の派手な個性戦が人気でワイドショーでもヒーローの戦闘シーンの切り抜きが流れるほど。人を救助する姿がテレビに映るなんてオールマイト先生くらいじゃないかな？

クラスの間みんなもやっぱり雄英に入学するエリート揃いなだけあってみんなそこら辺をきちんと理解しているみたい。にわかにはスキューこそがヒーローの本分であるというざわつきがクラスに広がっていく、けど相澤先生のひと睨みで一瞬で沈静してしまった。流石は相澤先生、この短い期間の中で私たちを完全に掌握してると思う。怖いけど、頼りになる先生だ。

「今回コスチュームの着用は各自の判断にゆだねる。訓練場はバスに乗っていくからきびきび動け、以上。準備を始めろ」

それだけ言って壁のコスチューム保管ボックスを動かした相澤先生はそのまま出ていってしまう。私は立ち上がって上の方にある人たちのコスチュームを取ってみんなに渡してから自分の分のコスチュームを取った。こういう時おつきいと便利だね。長手袋を外して、ついでに手足を白に変えてしまう。髪の毛に青メッシュを入れて準備完了。着替えよーっと。

「は〜、樫さんコスチュームを付けた時とそうじゃない時だいぶ印象変わるやね〜。アニメのヒロインみたい」

「そう、かな?こんな大きいヒロインはお断りだと思うけど……で

も、自分の好きな色を纏えるのはテンション上がるかも」

「青が好きなん？」

「うん、私の目の色。私の右目は機械だからみんなと見てる色も景色も違うけど、左目はみんなと同じものが見れる。だから私はこの目が好きなんだ」

「めっちゃいい話や！」

「そうかな？」

同時に着替え終わった麗日さんと話しながら集合場所に向かう。途中で麗日さんにいろいろ褒められたので少し赤くなりつつも私はコスチュームの色の由来を言うと、すごくいい反応してくれた。ジャンパーの銀のラインはデザイナーさんの趣味みただけで、色はえーくんとかアルバイト先の人と相談して決めた。アルバイト先のある人曰く「エレガントな配色」らしいんだけど、エレガントってごつい私と対極にある言葉だと思うんだ……

「あ、デクくん体操服なんや」

「あ、うん。戦闘訓練で壊れちゃったから修復待ちなんだ」

「デク？もうあだ名で呼んでるんだ」

「あ、うん。もともとはかっちゃんかバカにして付けてたんだけど……麗日さんがコペルニクスの転回をしてくれたから……今は気に入ってるんだ」

「……じゃあ私もそう呼ぼうかな。よろしくねデクくん、個性の制御手伝えそうだったら手伝うから遠慮なく言ってね。あんまりこういうこと言いたくないんだけど、一人にしたらすんごい怪我しそうだから」

「うっ……キヲツケマス……」

緑谷出久くん、下の名前を読み方変えてデクくんかあ。私が知ってしまった彼の秘密、個性の制御が上手くいかないのも他人の個性だから、ということなんだろう。もし彼の個性がサポートアイテムで解決できる類のものなら私がいっぱい捨てる籠手とか作って数を撃たせて制御するっていう方法もあるんだろうけど……知ってしまった罪悪感と怪我ばかりする心配が混ざって思わずちくりと言ってしまふ。

これが例えばえーくんみたいにカッチカチだったら反動も無視できるとは反動に耐える体なら大丈夫ってことじゃないかな……うーん、オールマイト先生みたいな体したデクくん……私の脳内画像で勝手にカラージュされたデクくんの顔をしたオールマイト先生の画像が完成して思わずコレジャナイと顔に出してしまう。会ったばかりだけどこんなゴツイデクくんは違うのだ、うん。

「みんな！バスの席順はスムーズに出席番号でいこう！2列に並ぶんだ！」

「飯田くんフルスロットル……」

「凄く輝いてるね。ある意味で天職かも……流石にバスの天井とか入り口は高くないよねえ」

「普段は不便なん？」

「うーん、慣れちゃったから不便ではないかも」

「こういうタイプだった！くそう！」

「あはは……」

私はバスに乗る機会はそんなになかったので飯田くんと同じ想像をしてたかは分からないけど彼が想像してたであろう学校でよく乗る長距離移動用のバスではなく市営バスみたいな椅子の並びで自由に選んで座ってねという感じだった。まあ私にとってはありがたい限りなんだけど。ずっと腰をかがめてるのはアレなので気を利かせて入り口近くの横並びの椅子を譲ってくれた砂糖くんにお礼を言う。天井低いとつらいよねえ……

「ねえ緑谷ちゃん、いいかしら」

「あ！なに!?蛙吹さん!!」

「梅雨ちゃんと呼んで」

これから実技だし、エネルギーを補給しとかなないとダメだということではお昼ご飯を追加して持ってきていたカロリーバーをもつさもつさと頬張る。一口で一本、釘とかゴムとかより100倍美味しい

けど口が乾くなあ。ごくりと喉を動かして食べ切った私、隣で梅雨ちゃんとデクくんが話してるのを聞いていると

「私思ったことは何でも言っちゃうの。あなたの個性ってオールマイトに似てるわね」

「ぶっ!!?!」

「げほっ!!」

「希械どうした!?!」

「ごめん、喉に釘が刺さっただけ」

「一大事じゃねーか!?!」

「大丈夫、抜けたし治った」

「そそそそうかなー!?!でも僕の個性はえーっと」

梅雨ちゃんが話題にしたのはデクくんの個性の話、あまりにもデクくんと私にとつてタイムリー過ぎて思わずせき込んでしまった。私がせき込んだせいでえーくんが話に入ってきてしまった……ごめんねデクくん。というかえーくん流石に今の慌てた誤魔化し方で納得されるのは少し私としても来るものがあるぞ。実際刺さったら魚の小骨くらい面倒なだけだし。

というかデクくん誤魔化し方がすごいへたくそだ。嘘が付けられない性格なんだろうなあ……頑張って誤魔化して欲しい、私も誰にも言わないように頑張るから、盗み聞きしてごめんね……いやいや、と私を心配するついでに会話に入ってきたえーくんが否定してくれる。ありがとうえーくん信じてた!

「でもよ、オールマイトは怪我しねえだろ?似て非なるってやつだぜきつと。でもま、派手で羨ましいけどなあ。ま、俺の硬化は負けねえけど」

「派手つつつたらこのクラスだと、爆豪と轟、あと樫ちゃんか。樫ちゃんはロマン詰まってるから人気出るだろなあ」

「そう、かな?男の子はみんな変形とか合体とか好きだよね。私もそういう方面で売るべきかな」

「爆豪ちゃんは怒ってばっかりだから人気でなさそ」

「んだとコラ!出すに決まってるだろ!」

「ほら」

話題が逸れてくれて一安心だあ……それはそうと私の個性って派手？というよりはゴツイというか実用重視で見た目気にしてないんだよね。使えればよし！みたいなデザインばかりしてる、私がそうだから。今度は見た目も考えてみるべきかな？それはそうと梅雨ちゃん爆豪くんを弄るなんてなかなかクレイジーだねえ。だってほら、爆発されたら怖い……というか今も顔が怖い、目をそらしておこう。ひっ!? 掌ぱちぱちいってる!?

「希械ちゃんは……お色気路線でも売れると思うよ！可愛いしね〜?」

「うーん、それは……無理じゃないかな？三奈ちゃんくらいのスタイルの方が人気出そう」

「デビューしたら二人でその路線やってみる?」

「オイラは応援するぜ!」

「やっぱやめとこうか希械ちゃん。アタシ峰田に推されたくない」

「ひでええええ!! 上鳴オイラなんかしたか!」

「俺に聞くなよ。日頃の行いじゃね?」

「そんなに日数経ってねえじゃねえかよおお!」

「上鳴もなんかヤダ」

「えっ?」

上鳴くんはともかく、峰田くんは私もちよつとイヤかも。胸、見すぎだよ。女子のみんなそう言うてるから、こんな扱いされちゃうんだよ。

「おつきい……」

「すっげ〜! USJかよ!」

雄英に入学してから何度も使ったこの言葉。言われる側から言う側に回ったことで分かるのは、本当にぼろっと出てきてしまうということだ。それは如何でもいい話なんだけど、私たちの前に広がる演習場……ホントに演習場かと疑うほど広いしまるでテーマパークのよ

うに入り口がある。右目でズームしてみると台風だったり雷だったり火事に地震、災害のオンパレードがそこかしこで起こってる。ナニコレ滅茶苦茶ヤバいんだけど……

「この演習場はあらゆる事故や災害を想定して僕が中心となり作成しました。名づけてウソの災害や事故ルーム!!」

それ権利的に大丈夫なんだろうか?と私は心配になってしまおう。USJは別に商標に登録されてたりはしないけど連想してしまうものがあるから……それはともかく、籠ったような声で演習場の紹介をしてくれたのは宇宙服のような重厚かつ分厚いコスチュームに身を包んだヒーロー、災害救助を専門とするスペースヒーロー「13号」だ。

「スペースヒーロー13号だ!災害救助で目覚ましい活躍をしている紳士的なヒーロー!」

「わー……!私好きなの13号!」

「うん、女の人だったんだね。初めて知った……」

「……「そうなの!?!」……」

「え、うん。声紋が女の人のものだから……」

「僕が女だと初見で見破るなんてやりますね樫さん」

デジタル的な分析は私が最も得意とするものの一つだ。声が籠つても変声機を使われない限りは基本的に声紋分析は可能なもの。13号先生の素顔はヒーロー界限だと割と謎に包まれてるわけだけど、どれ透視でも試してみようか……と思ったが流石に失礼なのでやめよう。デクくんが13号先生の性別が女性だとわかった途端すさまじい勢いでノートを取り出して書き込み始めた。ああ、爆豪くんが言ってたナード、ってそういうことなんだ。ヒーローが好きなんだねデクくんは。

そういえばオールマイト先生が見えないな?さつき相澤先生と一緒に見るって言ってたもんだからここにいてるって思ってたんだけど……後で来るのかな?

「では始める前にお小言を一つ、二つ、三つ、四つ……」  
めつちやお小言増える……



「皆さんご存じかもしれませんが、僕の個性「ブラックホール」はあらゆるものを吸い込んで塵にしてしまいます」

「それでどんな災害からでも人を救い出すんですよね！」

「ええ、しかし一歩間違えれば人を殺すことができます。皆の中にもそういう個性の人がいるでしょう」

耳がとても痛い。私の個性はまさにそれ、というか人を殺すことに特化してると言ってもいいほど攻撃力が高い。作るものによっては大量虐殺すら可能だから。この世界で一番メカが発達してる分野はなに？と聞かれれば医療でも福祉でもなく……軍事方面。そこから漏れた技術が民間に伝わるんだ。リーダー技術の応用をした電子レンジのように。だから私は力の責任を自分に問わないといけない。

「超人社会の現代が成り立っているのは貴方たちの個性を行き過ぎないように管理しているからです。体力テストで上限を、対人戦闘で人に向ける怖さを体験したと思います」

そう、そうだ。体力テストで何ができるかを工夫して、対人戦闘でどうすればできるだけ傷つけずに無力化できるか頭をひねった。まともに向ければ殺せてしまうから、遠慮呵責なしにぶっぱなした入試の時とは全く違って冷や汗だらだらだったんだよ実はね。

「君たちの力は人を傷つけるためにあるのではなく、人を助けるためにあるのだと心得て帰ってくださいな。以上！ご清聴ありがとうございました！」

「カッコイイ！」

13号先生の言葉に誰かがそう漏らした。うん、カッコイイ。力はまだ力だけど、それをどう使うかという方向性を考えさせられるお話だった。お説教？とんでもない。これは激励だ。私たち、オールマイト先生が言うには有精卵がこれからどう孵化するかの指針の一つを示してくれたことに感謝しなくちゃ。

13号先生のお言葉に感動しながらUSJの中に入り、相澤先生がまずはと声をあげたところで……私の右目が広場に黒い靄があふれ出すのを捉えた。ズームして観測、正体不明……？でも微かな空間のゆがみがある。周り景色が微妙にずれてるから空間自体がおかし

いのかも……？誰かの個性？じつとそれを見つめると……何かが出てくる。人だ、人の手をたくさん付けた人間に続いて……たくさん人間。……だれ？

「一塊になって動くな！」

相澤先生が怒鳴った。思わず背筋が伸びる。演習の一環か何かだと思っただけらしいクラスメイト達も異常事態に気づいたみたい。ざわざわと少しづつ声が広がっていく。

「あれは……ヴィランだ！」

## 10話

ヴィラン、私たちが目指すヒーローとは対極にある存在。自らの欲望のために個性を行使し人を傷つけ、迷惑をかける犯罪者。真つ黒の霧の中から現れた人物たちを相沢先生はそう評した。右目のズームをフル稼働させて観察する。ほとんどは……チンピラ？統率感が一切ない。ただ……黒い霧の塊みたいな人と、黒い大柄で脳みそがむき出しの人、それに手を一杯つけている人……異様に落ち着いてて逆にそれが怖い。

「先生、侵入者用のセンサーは!？」

「当然ありますが……反応しなかったということとは」

「センサーが反応しねえなら向こうにそういう個性持ちがいるってことだな。周到に用意された計画、バカだがアホじゃねえ」

轟くんの言う通り、時間割が向こうに漏れてたとしか思えない。校舎から離れた演習場で、これだけの人数を連絡を封じつつ奇襲をかける……これが本物のヴィラン……! 相澤先生が13号先生に避難を開始するように言って戦闘準備を整えている。この人数差で一人で戦うつもりなの……?」

「電波妨害系の個性持ちがいる可能性がある。上鳴、樫は個性を使って通報できるか試せ」

「ウツスー!」

「……衛星通信、携帯電波共にエラー。通信は無理だと思います……」

「……そうか。13号!生徒たちを任せる!」

「わかりました」

相沢先生に言われて上鳴くんと一緒に通報できるか試す。衛星通信に携帯電波、アマチュア無線に至るまで全ての通信手段が遮断されている。いくらなんでも用意周到が過ぎるよ……ホントに全部の通信手段を封じられているみたい。アンテナがあっても意味ないくらいだ。階段前に捕縛布を持って立つ相澤先生、イレイザーヘッドを緑谷くんが止める。

「相澤先生、一人で戦うんですか!? イレイザーヘッドの戦闘は個性を消しての捕縛で……多対一じゃ……」

「二芸だけじゃヒーローは務まらない」

ゴーグルを被った相沢先生は階段を飛び降りてヴィランのど真ん中に向かう。射撃系の個性を持ったヴィランが撃とうとするが発射のタイミングでそれぞれ個性を消されて不発、さらには捕縛布でぶつけあわされて無力化されてしまう。あれが、相澤先生の戦い方……誰の個性を消しているのか、消していないのか……目線を隠すことで分からないようにして相手の焦燥感を煽ってるんだ。

「すごい、あれがイレイザーヘッド……」

「デクくん、分析してる場合じゃないよ。私たちがうだうだしてたら格好の的——」

「その通り。逃がしませんよ」

うそっ!? 目を離れたつもりはなかったのに一瞬で私たちのそばに!? 黒い霧の人物……敵ヴィラン連合の黒霧と名乗った男の人は私たちに前にして余裕たっぷりな様子で自己紹介をした。固まる私たちに彼が告げたのは……目的がオールマイルト先生を殺すことだということだ。あの、オールマイルト先生の、平和の象徴の抹殺……!? 無理だ、そんな手段があるならとつくの昔にあの人は負けてるんだ。最強だから、平和の象徴だって言われてるんだ。

「まあ、平和の象徴がいなくとも私のやることは変わらず……ここです、散らして殺す」

「その前に俺たちにやられるって……希械!?!」

「死ねえクソ霧野郎!」

「だめ! 爆豪くん! 13号先生が個性を使えない!」

黒霧は私たちに向かって自身の黒い霧を向ける。私たちを覆いくそうとするその霧が覆いつくす前に黒霧を攻撃して止めようとしたえーくんの腕を掴んで無理やり止める。どうして、という顔で私を見るえーくんだけど私はそれよりも止められず攻撃に入って爆発を見舞った爆豪くんにどくように叫んだ。私が止めた意図を悟った二人がハツとするが既に13号先生の射線上に入ってしまった爆豪く

んが邪魔で13号先生はブラックホールを使えない。

「流星は、雄英……生徒さん方も優秀だ。その優秀さが、今回の命取りだったわけですが」

黒い霧が私たちを覆いつくす。えーくんの手を離さないように強めに握る、足元の地面が消えて体が浮くと同時に、音もなく私の手首から先がなくなった。これ、霧と接触したところをワープさせる個性……！空間を閉じることで引きちぎられたんだ。なんで空間系なんて珍しい個性がヴィラン側に……！

空に放りだされた。周りは倒壊した建物ばかり……！ここは多分地震災害用の演習場所……？どさり、と尻もちをついて放り出された私は周りを見る。手首から先はやっぱりなくなっていた。ショートしてバチバチいう左手に意識を集中して組みなおす。それと同時に回りの状況把握、音響探知……いる。クラスメイトじゃない、大人の人間が。他にも霧に巻き込まれたクラスメイトがないか探してみるけど……どうやらここには私一人みたいだ。

「ひゅ〜！こら随分な上玉が出てきたなあ！ちよつとでかいけどまたそれがそるじゃねえの！」

「敵連合様様だぜえ！おい嬢ちゃん、俺たちと楽しいことしようぜ？」

「まあ、断る権利はないけどなあ！ぎやはははは！」

私がやってきたのを見つけた男の人はげらげらと下品なことを言いながら私を取り囲んでにやにやと笑っている。でも、さっきの黒霧ほど怖くもないし強そうでもない。町にいるチンピラレベル、解析してみても素人の域を越えない。そうか、ここにきてやっとわかった。主犯格は黒霧とあの手が沢山ついたやつなんだ。それ以外は、足止め以下の三流ヴィラン……！やることは単純、戦って生き残ること。迷う理由は、ない。

「いろいろ、気になることがあります。なので……遊んであげられません。あしからず！」

「ぐあつ!?!」

真後ろから下卑た顔で私のお尻に手を伸ばしたヴィランの手を掴んで強引に片手で振り回し、投げつける。背中から倒壊したビル群に突っ込んだヴィランはこぶ、と口から咳と一緒に血を吐いて気絶した。それに向かつて私は腕の内部で作り出した拘束具を発射、ヴィランの足首、腰と手、肩に巻き付いた拘束具は電磁石で強烈に締め付けて彼を行動不能にした。

今私がやることは、このヴィランたちから生き残ること。そして広場に戻って先生たちと合流すること。正当防衛が効くかは分からなけれど、抵抗しなければ私は好き放題されてしまうのが自明の理。それはその、いやなので全力で抵抗させてもらうことにする。チャリチャリと腕が変形して、戦闘形態に移行する。足も装甲とバーニアを追加すればいい。

「……」

「二人でよかった……巻き込みを考えなくていいから。あの、ヴィランの皆さん。私、まだヒーローの入り口に立ったばかりで……その、手加減の具合を分かってないんです。ですから……腕や足が飛んでも怒らないでくださいね」

「舐めるなあ!」

「やっちまえ!」

向かってくるヴィランたちに。遠距離系の個性はとりあえず無視して、飛び込んできた腕が高速振動してるヴィランの男の拳に合わせ、私も拳で対抗する。がきいっ!と音がして私の手に一方的に負けた男の手が変な方向に曲がった。多分普通の金属相手だと高をくくったのかもしれないけど、私の戦闘形態の腕と足は私が合成した超硬質の合金だ。10トン以上の圧力を受けないとまず変形しないのが自慢。特に指先は極めて硬くしてある自信作なんです。

声にならない悲鳴を上げて崩れ落ちたヴィラン私は指先からの電気ショックで気絶させて拘束具で拘束する。ここでようやく、周りのヴィランが私が学生でも戦闘ができるということに気づいたようであり……と後ずさりを始めた。私はその隙に武装を構成する。

「スラストハンマー、グレートメイス、テイルブレード、形成開始<sup>デレ</sup>」  
バーニア付きハンマー、大型のメイス、そして背中から伸びたワイヤー付きの大型ブレードが完成する。ジャージの裾から伸びたワイヤーで自在に動くブレードが後ろのヴィランを薙ぎ払った。遠距離個性が放つてくる硬化した指や髪の毛、生体ミサイルが私に直撃するが、無視して脹脛に作ったバーニアを吹かして飛び上がる。スラストハンマーのスラストを思いっきり吹かして地面を殴りつけると、音速を越えたハンマーの衝撃波が周りのヴィランたちを直撃して吹き飛ばし、壁にたたきつける。

「ば、ばけもの……！ひぎやつ!」

「うん、機械だから。でも、殺さないから安心してください。ちゃんと生かして警察に届けます」

一撃で大多数を戦闘不能にした私に恐れをなしたらしいヴィランが私にそんなことを言うてくる。化け物、うんその通り。だって私は機械だから。ヴィランになんて思われようと関係ない、私が私だってわかってくれる人がいるんだから、敵になんて思われても平気、へっちゃら。巨大な金属バットのような形をしたグレートメイスを軽く振るって3人ほど巻き込んで壁にたたきつける。手加減って難しいな、力を籠め過ぎたら死んじゃうし……怪我はさせちゃったけど致命的な怪我はないかな、と気絶したヴィランを拘束して私はそう判断する。

「さて……」

「ひつ!?ゆ、ゆるして……!」

「うん、じゃあ……目的とか話してください」

テイルブレードでこかしたヴィランの最後の一人の上立って、顔面横を思いっきり踏みつけて脅す。顔の真横が私の足で陥没したのを見て唾を飲み込んだヴィランは震える声で作戦を話してくれる。まず、私たちを分断して各個撃破し、中央に残った主犯格がここにいるはずだったオールマイトを殺す、なんとも用意周到な割には稚拙な作戦だ。もう何も無い、というヴィランを拘束具で拘束して私はその場を後にする。

「ここから広場までは少し距離があるから……メガ・ブースター、  
形成開始」

テイルブレードを再変形させて、ロケットブースターを作り出す。  
ロケットを何本も束ねたようなブースターが私の後ろに伸びて白煙  
と炎を吹き出し始める。一回使えば壊れて使用不能になるものだけ  
ど、今の私の状態だとこれが一番速い。アイドリングが終わり、爆炎  
を発したブースターが私を打ち出した。

一瞬で音速を越えた私が、広間を目指して空を駆ける。発射だけで  
燃料が切れたブースターを腰からパージして残った速度を維持しつ  
つ、脚のバーニアで方向を調整する。そして広間と水難エリアのちよ  
うど境目あたりに私は着弾、というか墜落した。着地方法が雑なのが  
一番あれだなあこの飛び方……

「あ！ 樫さん……！」

「樫ちゃん、無事だったのね……」

「樫！ おめえが戻ってきてオイラ嬉しいよ！ これで一安心だ！」

「3人とも無事でよかったけど……デクくんはまた、使っちゃった  
んだね。それ以上その指動かささないでね？」

私がクレーターの中から出てくると水の中から上がってきたデク  
くん、梅雨ちゃんに峰田くんが駆け寄ってくる。デクくんが手を抑え  
てるのを見てまた、無茶したんだと心配してしまう。私が派手に墜落  
したのは向こうの手が沢山ついたヴィランも分かってるし相澤先生  
も分かっている。相澤先生が私に戻ってきたことを好機ととらえて大  
声で指示を出した。

「樫！ 全員抱えて13号の所まで戻れ！」

「はいっ！ みんな掴まっ——っ！」

「だめだ。君たちは観客だ。いてくれないと困るなあ……平和の象  
徴が死ぬところを見ないとダメじゃないか。脳無」

反応できたのは奇跡だった。全員を一纏めにして脚のバーニアで  
離脱しようとした私を脳無と呼ばれた私と同身長くらいの脳みそ丸  
出しのヴィランが一瞬で移動して私にパンチを放ってきたのだ。私  
は咄嗟に3人を水難エリアに投げ飛ばして、右手を曲げた状態の右肩



で脳無のパンチを受ける。踏ん張った足が足の甲まで陥没して体験したことの無い力が私を襲った。ミシミシメリメリと私の骨格が悲鳴を上げる。

「樫さんっ!?!」

「樫ちゃん!?!」

「おいおい、なんだよあれ……!?!」

「樫! 貴様……!」

「おいおい、あれを耐えるのかよ。どいつもこいつもチートだなあおい!だがこれで分かっただろ?本命は俺じゃない」

喋る余裕がない。こいつ、瞬間的な出力なら私より強い!まるで体のリミッターをすべて無視してるようなそんな力だ。反動はどうなってるの?けど、持続力なら負けない。押し合いなら私が有利!ぐぐ、と腕のパワーを最大に高めてもう片手のパンチを掌で受け止めて、右手も捕まえる。手四つの押し合いだ。ずり、ずりと少しづつ私が脳無を押ししていく。戦闘形態で個性テスト時よりもパワーをあげた握力が脳無の手を握りつぶした。手のヴィランがガリガリと顔を搔いている。

「おいおいおい!なにしてんだよ!さっさとそのでかい女を殺せ!」

「えっ!?!きゃあああっ!?!」

もう少しで地面に膝をつかせられる!と私があらんばかりの力を籠めたところで、手のヴィランが他のヴィランと一緒に相澤先生に襲い掛かりつつ脳無に命令をした。途端に脳無は一気に私以上のパワーを発揮して私の手を掴んだまま振り回し、投げ飛ばした。私はきりもみ回転をしながらエリアを跨いで市街地演習場のビルに突き刺さる。痛い、こんなに痛いのは初めてだ。脳無の握力で右ひじを潰されたのかうまく動かない。何とか立ち上がって私が開けた穴から外を見る。

息をのむ、その一瞬で形勢が逆転していた。相澤先生が、脳無に……手を……

「なに、してるの……!」

自分でも驚くほど低い声が出た。私たちの先生に何してるんだ、私の大事なクラスメイト、友達に何してるんだ。個性をフル稼働、強制全冷却。体から空いた穴から爆風と一緒に熱が放出される。熱に強いはずのジャンパーが燃えてしまう。冷却終了……全力で、皆を守るんだ。

「構成<sup>オーバード</sup>拡張、重装近接格闘型強化外骨格『ゴリアテ』機能<sup>スタンバイ</sup>更新・  
形<sup>レ</sup>成<sup>デ</sup>開始」

## 11話

「構成拡張、重装近接格闘型強化外骨格『ゴリアテ』機能更新・  
形成開始」  
オーバード  
ディ  
スタンバイ

私の身体を機械が覆っていく。今まで腕や足のみだった変形を体全体に使う、奥の手中の奥の手だ。分厚い丸太のような手、巖のような足、外骨格が私を覆う。身長も元の私を逸脱して3メートルと50センチを超えた、人外の姿。幾重にも重ねられた特殊合金の装甲と背部の大型バーニア、全身に配置された姿勢制御スラスターに胸部を覆う増加装甲内部に重水素核融合炉を設置してエネルギー源にする。体内の水分を分解して重水素へ変換しスターターを入れて融合炉をアクティブへ。ヘルメットが形成されて頭に被さる。

「ううっ!!」

歯を食いしばってから穴から飛び出す。背中のバーニアが殺人的な加速を生み出し私を発射した。外骨格に包まれてもなお生身の部分が悲鳴を上げる。再びの墜落、だけど今回は脳無を巻き込むように墜落する。相澤先生に覆いかぶさって打ち下ろしのスレッズジハンマーを放とうとしていた脳無を片手で掴んで連れて、私は地面に突っ込んだ。

「おいおいおい今度は何だっただよ……脳無!」

「相澤先生……! 樫さん、なの……?」

「まさか、あれ……樫ちゃんだわ!」

「さつきと全然ちげーじゃねーかよ……あれじゃまるで……ロボットそのものじゃねーか……」

動きを止めた脳無からいったん離れて、相澤先生の前に仁王立ちする。相澤先生の意識はあるみたい、けど片腕を潰されちゃってる。無事な方の腕で体を起こして私を見る相澤先生、ごめんなさい。私、戦います。逃げたら……相澤先生が死んじゃうから。あの脳無ついでにヴィラン、本当にすごく強い。勝てるか分からないけど、戦わなきゃ。

「相澤先生、私戦います。命令無視で除籍していただいても構いま

せん。今だけは私がみんなを守ります」

「樫、ダメだ。いいから逃げろ……!」

「みんなから離れろ! S M A A A S H !!!」

「脳無」

恐怖に耐えかねたのか、デクくんが個性を纏って飛び出した。比較的冷静だと思ってたけど、まずい! 行動不能になる……! 手のヴィランは脳無を呼び寄せて、脳無は無防備でそのままデクくんの右ストレートをもろに食らう、けど堪えてない。脳無もデクくんの手もだ。個性の制御に成功した? この土壇場で? いや、関係ない。けど脳無の方もおかしい、デクくんの超パワーが効いてない?

「すげえだろ? ショック吸収の個性さ。脳無は対オールマイト用の改造人間、君程度の力じゃビクともしない」

「そう、じゃあ……私なら?」

「樫さんっ!」

「うん、ナイスガッツだよデクくん。あとは任せて、ね? 私がみんなを助けるから」

怖い、怖いけどそれよりもみんなの方が大事だ。デクくんを握りつぶそうと手を伸ばす脳無の手を私の手が掴んで止める。ぎゃあぎゃあ言って暴れる脳無を振り回して投げつける。壁を突き破って脳無が消えた。私は目に涙をいっぱいにためたデクくんを見下ろしてにつこり笑う。安心できるように、勇気づけられるように。そのまま本気で戦う態勢に入った。ヘルメットの上からマスクがスライドしてガチンと音を立てて私の顔を覆う。内部のディスプレイが起動して私の右目とリンクして、ゴリアテの機能を全てフルに稼働させていく。

「お前いったいなんなんだよ……! いいところで邪魔ばっかしてさあ! 脳無う!」

「邪魔でいいよ! 貴方たちの邪魔をするのが私が目指してるヒーローだもの!」

背中のパニアに火が灯る。流星のように飛び出した私の拳がこちらに向かってくる脳無の拳と衝突した。肘部のブースターがパン

チを加速させ、さらに前腕内部で火薬が炸裂、インパクトと同時に拳を杭のように打ち出すことで威力を増加させる。そこまでやってやっと、脳無のパンチと拮抗した。脳無に与えた衝撃はすべて吸収された、ゴリアテの方は脳無のパンチで腕部に亀裂が入った。反則だよそんなの……！

ガランと右腕から廃莢された葉莢が音を立てる。次弾装填、左手で同じように拳をぶつける。結果は変わらず、なら……！私は突撃して脳無の肩を掴んで拘束、ゴリアテの両肩から顔を出した連装徹甲ミサイルが脳無を打ち据えるが、効いてない。爆発で抉られた肉は再生してるし、爆発の衝撃は吸収されてる。焼いて塞いでも再生するのか……！

吠えた脳無のパンチがゴリアテを打ち据える。10層構造の装甲が一撃で半分持ってかれた……！パンチにパンチをぶつけて防御し続けるけど、追いつかない。漏れた脳無の拳がゴリアテをどんどんボロボロにしていく。まだ、まだ頑張れる。私はまだ戦える！

「やあああああつ！」

右腕部、全損。脳無の拳でぐしやりと潰れ、それをチャンスとした脳無に腕を引っ張られて引きちぎられる。鈍い痛み、無視する。残った左手を盾にしてラツシュに耐える。無理やり左手で跳ね上げて、顔を左手で掴んで後頭部を地面にたたきつける。これでも無傷、ずるい。左手の掌に穴をあけて、内部爆破用の葉莢を転用。連続で爆破を顔面に浴びせる。これも駄目。なら次は……っ！

脳無の手がゴリアテの左手前腕を掴んで握りつぶした。これで左手も駄目、捕まったらまずい、自切する。両手がなくなつた。踏みつけて動きを防いでた脳無がゴリアテのど真ん中にストレートパンチをぶち込んだ。すさまじい衝撃が装甲をひん曲げる。核融合炉に異常発生、シャットダウン。核爆発防止のため体の中へ再結合。エネルギー源まで絶たれた……！

「あれだけやって……ダメなのかよ……！」

「ちい！数が多い……樫！下がれ！死ぬ気か！」

マイクに片手で他のヴィランを相手しながらテクくんたちを守る

相澤先生の声と絶望的という色を乗せた峰田くんの声が拾われる。大丈夫、まだ大丈夫。私は機械だから、壊れたって直せるんだ。人より頑丈なんだ。私を私としてみてくれる友達を見捨てるもんか、放り出すもんか。

「まあ、よく頑張ったんじゃない？それでもここまでだけどさあ……！脳無、やつちまえよ！」

「まだまだ……！」

脳無が迫る。私はあえて、やつの攻撃をそのまま受けた。左肩がオシヤカだ。脳無が私を捕まえて引き裂こうとする。その瞬間をついて私はゴリアテを放棄し、前面装甲を開けて飛び出した。脳無の胸のど真ん中に、ドロップキックの体勢で両足を当てる。腕がないからこれしかないや。そのまま足の裏から赤熱する杭が打ち出される。両足の耐久を無視した一撃は、私の足を吹き飛ばして、やつと脳無のショック吸収を越えてやつを真向かいのビルまで吹っ飛ばすことに成功した。

両手両足を失った私は、そのままぐんぐんと水難エリアに落ちる。完全にオーバーヒートした私の周りの水がじゅうとうと音を立てて蒸発して、私の熱を下げる。そのまま水底に行くかと思ったら近くに誰かが来る。左目で見たそれは、梅雨ちゃんだった。少し表情が分かりづらい子かなと思つてたけど今はなんだか泣きそうな顔してる。

梅雨ちゃんは手足を失ったとはいえそれなりの重さの私を抱えると泳いで水面に向かった。待つてたデクくんと峰田くんが私を引っ張り上げてくれる。腹筋、というのが私にあるかどうかは微妙かもしれないけどお腹に力を入れて起き上がり座り込む。

「ごめんなさい、やっぱり勝てなかったみたい……！」

「いや、すごかったよ！あそこまで……！」

「そうよ、それに手と足が……」

「ごめんね、変なもの見せちゃって。個性が使えるようになったら作り直すから……」

流石に個性はうんともすんとも言わないか。でも、脳無との距離は離れた。あそこまでやって倒せない、そして再生して無傷になるとい

うのは正直悔しいけど、時間稼ぎは十分できたはずだ。手のヴィランは何度も脳無の名を呼んでいる。そこでようやつとこちらに来ようとしていた雑魚ヴィランを倒し切った相澤先生が捕縛布で潰された手を固定しながらやってくる。

「全員無事か!?!」

「私たちは大丈夫よ、相澤先生。それよりも樫ちゃんが……」

「大丈夫です。けど動けないので逃げるなら水に沈めて置いていってください。個性が使えるようになったら今度こそ脱出しますから」「バカを言うな! つち、状況が悪い……」

私の状態を見た相澤先生が歯噛みする。そういえば私、今個性把握テストでデクくんが言われたことと全く同じミスを犯してるんだ。その場から動けないお荷物が増えた結果が、ヴィラン一人の一時戦線離脱。なんだ、それ。悔しい、私にもつと力があつて頑丈だったならそんなこと起こさなくて済んだのに。どうするべきか、を考えた時、USJの正面玄関が吹っ飛んで……希望の光が見えた。

「全員……よく頑張った! もう大丈夫だ……私が来た!」

「オールマイトオ!」

「待ってたよヒーロー……社会のごみめ。脳無う! ぐずぐずするな! コンティニユーだ!」

ビルからボコボコと体を蠢かせて再生しつつある脳無が飛び出してくる。どてっばらに大穴を開けたはずなのに気絶もせずにあっさり……オールマイト先生はそれをギリリと見ると私の右目でも捉えることができない速度で踏み出したかと思うと、さらに加速して脳無と手のヴィランに一撃見舞うついでに私たち全員を担いで階段近くまで戻った。一瞬のことでみんな状況を理解できてない、相澤先生以外は。

「助かりました。オールマイト」

「遅れて済まなかった。すぐに片を付ける。子供たちを頼んだぞ」

「オールマイト先生! あの脳無っていう黒いやつ……複数個性を持つてる改造人間だそうです。シヨック吸収と超再生、それに私を上

回る超パワー……」

「大丈夫だ樗少女！その程度のヴィラン、いくらでも相手にしてきたさー！」

グツと右手をサムズアップして突っ込むオールマイルト先生、SMA SHの掛け声とともに脳無に叩き込んだクロスチョップが脳無にたたらを踏ませる。ショック吸収が通用してない？いや、ちがう。ショック無効じゃなくて吸収、限度があるのかもしれない。散々私が叩き込んでやったゴリアテの拳も、ミサイルも、最後のヒートパイルも意味があつたんだ。

「ショック吸収が……あのメカの女のせいかあ……！」

「どうやら樗少女が私に繋いでくれたようだね……！ありがたいつ！」

オールマイルト先生の鉄拳が脳無の顔面を捉えて地面に埋める。拳の風圧がここまで届いた。植えてある木が盛大に揺れている……なんてパワー……だけどなんだかおかしい。オールマイルト先生の個性のエネルギーが戦闘訓練の時より小さいし、断続的に減ってきている。右目の解析が、彼の口の端から吐血しているのを捉えた。デクくんがそわそわしている。

「クソ、んだこの状況はよお！」

「あれが……オールマイルト……平和の象徴か……」

「わり、遅くな……希械っ!?お前それ、誰にやられたんだよ!」

「落ち着いて、えーくん。大丈夫、半分自爆だから。それよりも担いでくれると嬉しいな」

「お、おう。すいませんっす相澤先生。俺なら持てますから」

突風が吹き荒れる広間に戻ってきたのは爆豪くん、轟くんそしてえーくん。えーくんは両手足がなくなつて捕縛布ぐるぐる巻き状態で相澤先生に背負われてる状態で見ているのを見てカツと頭に血が上つたらしく珍しく声を荒げた。私が落ち着くように言う私本体が目立った怪我がないことが分かってほつと息をついた。そして相澤先生の手の状態に気づいて私を横抱きで抱き上げてくれる。

「あああぁーっ！何してんだよ切島おまへぶっ!」



「この状況でそれを言えるのはある意味尊敬しちゃうわ峰田ちゃん」

なんか梅雨ちゃんが過激な突っ込みをしたような気がしたけど知らないふりをしておこう。オールマイト先生が殴り、脳無は後ずさる。不完全とはいえシヨック吸収が機能してるせいで再生がそれを補完して押しきれてないんだ！エネルギーの総量が来たときの半分を切った。これ、もしかしたらまずいやつじゃ……！

「よく見ておきなさい青少年少女たち……プロの本気がどういふものかを！」

私たちに安心させるような笑顔を残してオールマイト先生が突風と共に突っ込んだ。脳無も応えるように突っ込んでまるで台風のような暴風が吹き荒れるほどの威力のパンチのラッシュがお互いに始まる。私が相殺に失敗したそれをオールマイト先生は全て相殺するどころか逆に脳無に攻撃を当てている。一撃が、ビル一つを倒壊させて余りあるほどの威力の鉄拳の乱舞。次第に脳無はただただ打たれるだけのサンドバックのようになってしまった。

「私たちヒーローは、常にピンチを打開し切り拓いていくもの！  
ヴイランよ、この言葉を知っているか!!!」

脳無のラッシュが完全に止まり、抵抗できなくなったのを確認したオールマイト先生は拳を強く握りしめる。右目の解析で残ったすべてのエネルギーが握った拳に移動した。拳に円錐型の衝撃波が纏い始め、オールマイト先生の渾身の一撃が放たれた。

「更に向こうへ！Plus Ultra!!!」

音が後から聞こえるほどの威力の拳が、USJの天井を破って脳無を天高くに飛ばした。

## 12話

「さてとヴィラン。お互い早めに決着をつけたいね」

「チートが……!」

オールマイト先生の剛拳が脳無を天空高くにぶっ飛ばしてしまった。拳を握ってヴィランに最後通告を出すオールマイト先生に、私は驚きしかない。私があれば必死に攻撃してやっとな数分動きを封じた脳無をああもあっさり……これがトップ、プロの世界なんだ……きゅ、と思わず口に力が入ってしまったけど、私を持ち上げるえーくんも傍で見るみんな、爆豪くんさえもその光景に言葉が出ない様子だ。

「あんな天変地異みてえな動き……」

「でたらめな力だ……何発撃ったんだ……?」

「わかんない……私の目でも見えなかったし……」

もそもぞとえーくんの抱つこの状態で体の態勢を変えた私が右目を使ってオールマイト先生を改めて観察する。戦闘訓練の時はまるで燃え立つ聖火のようにたぎっていたエネルギーが影も形もない。まるで吹けば飛びそうな風前の灯火だ。デクくんは個性を渡したから……? 焦った顔をして今にも飛び出しそうなデクくんは私を声をかける。

「だめだよデクくん、行っちゃだめ。オールマイト先生を信じて待たないよ」

「……緑谷、あの人が負けるなんてそうそうない。俺も含め、今あの人の邪魔になるようなことは非合理的だ」

相澤先生に個性を消された状態で釘を刺されたデクくんはそれでもハラハラとオールマイト先生を見ている。デクくんはオールマイト先生の何を知ってるんだろうか? そう考えていると状況が動いた。黒霧が動いたのだ、オールマイト先生に向かって靄を飛ばして攻撃しようとしている。オールマイト先生は……動かない? なんで?

私の疑問をよそに、手のヴィランはオールマイト先生に走り寄って手を伸ばす。あの人の個性が何なのかは知らないけど、攻撃だ。何で

オールマイト先生は動かないの!?危ない、と口に出す寸前で聞き慣れない銃声が響き渡り、手のヴィランと黒霧に銃弾が降り注ぎ動きを封じた。

「――A委員長飯田天哉!只今戻りました!」

その声で私たちは振り向いてUSJの入り口を見る。するとそこには、雄英に所属しているプロヒーローが勢ぞろいしてこちらを見下ろしていた。銃弾を浴びせたのはスナイプ先生、彼は2丁のリボルバーを見事なほどの早撃ちかつ正確な精密狙撃で次々と黒霧と手のヴィランに攻撃を当てている。別の所にも撃っているが、おそらく他のクラスメイトを助けたんだらうか。

「つち。ゲームオーバーだ……おい、平和の象徴。次は殺してやる」  
「逃がすと思う?僕なら捕まえられる……!」

黒霧の靄の中に入ってワープで逃げる主犯たちをコスチュームが半壊している13号先生の個性が捉える。靄を吸い込み続けるブラックホールだけど、今一步遅く……主犯たちは逃げていつてしまった。私は脅威が去ったことを確認して改めてオールマイト先生を見る……煙でうまく見えないから、右目で透視状態でじつと彼を見る。やっぱり、おかしい。何でこんなに急激にエネルギーが減っているのか……?

「えっ……!?!」

「希械、どうした?」

「ううん、何でもない。ちよつと、疲れちゃったみたい」

口から驚きの声が漏れてしまった。煙に包まれて見えない状態だったオールマイト先生の身体が縮んでいったのだ。それは、昨日にサポート科に行く途中に見たスーツの人の容貌と同じ……!?!プレゼントマイク先生が冷や汗をかいていたのは彼がオールマイト先生だったからなんだ……!幸いなのかセメントス先生がセメントを操って私たち生徒から見えないようにオールマイト先生を隔離してしまう。私は、また一つ増えた秘密をどうするべきか、どう処理すればいいのか分からなかった。

「ちよ、ちよつと櫟……それ」

「櫟さん、それは……!?」

「ああ、えへへ……ちよつと頑張り過ぎちゃった。大丈夫だよ、ちゃんと生えるから」

警察が捜査になだれ込む中、えーくんにおんぶされた状態の私がU SJに入り口に行くと、先に戻ってきてたらしい別の場所に飛ばされたクラスメイトのみんなが絶句してしまった。そりやそうだ、だって私今手と足がないから、体重マイナス230キロくらい?大幅ダイエツトだわーい、なんて言ってる場合じゃないのだけれども。

八百万さんに耳郎さん、葉隠さん麗日さんはもう何も言えないって感じだね、ごめんなさい気持ち悪いものを見せて。あとは、そこで今にも泣きそう、というか完全に泣いちゃってる三奈ちゃんにも謝らないと。

「ごめん、三奈ちゃん。変なもの見せちゃったね」

「ううん、あたし希械ちゃんが頑張ってたの……見てたから!変じゃない!もう絶対希械ちゃんを一人で戦わせないから……!今度はあたしも隣にいるから……!」

「おう!芦戸の言う通りだ!ぜってえもう無茶させねえかな!今度はぜってえ……俺が前に立って、全部受け止めてやるから!」

「うん……うん……ありがとう。ごめんね、ごめんなさい……」

私にすがって大泣きする三奈ちゃんと悔しさをにじませるえーくんの言葉に私の涙腺も決壊しちゃった。左目から熱い涙がえーくんの背中に伝っていく。暫く周りを気にせずお互いに泣いて、落ち着いたところで生徒指導のハウンドドッグ先生がやってきてえーくんから私を持ち上げて抱えなおした。

「え、あの……」

「グルルル……!バウツ!アオーン!」

「ああ、彼は君を保健室に運んでくれるそうだよ!興奮すると人語を忘れるのが玉に瑕なのさ!」

「それと緑谷くん、貴方も保健室よ。指、折れてるんでしょ。あとイレイザーも。13号はもう運ばれてったわ」

「え、はい。あの……オールマイトは……」

「彼ももう保健室に行ったわ。大丈夫、ほとんど無傷みたいなものよ」

そのあと私は、デクくんより一足先にハウンドドッグ先生によって保健室に運ばれた。手足がない私を見た雄英の屋台骨、リカバリーガールは顔をしかめたけど個性で戻るということを話したらそれを前提に無茶をするなど物凄い叱られた。うん、それはまあその通りなわけで……。診断結果は全身の疲労と多数の打ち身。脳無が遠慮なくゴリアテの上から殴ってくれたおかげで生身の部分は青タンだらけだ。それで念のため1日保健室に入院することになっちゃった。

今はリカバリーガールは席を外している。多分……デクくんオールマイト先生、相澤先生の治療をしているんだと思う。保健室に運ばれて30分ほどでようやく個性が使えるようになったので手足を再生させて、一安心。お母さんお父さんは明日になったら迎えに来てくれるって言った。今日は流石に捜査の関係上雄英には入れないからね……

私にとっては小さいベッドの上で考え事をする。隣では13号先生が眠っている。彼女も裂傷が酷いみたいだけど、命に別状はないみたいで。疲労が回復し次第治癒を受けるんだそう。初めて見る13号先生はとても美人だったけど、痛い筈なのに私のことを心配してくれて私優先でリカバリーガールに施術を頼んでたほど。まあそれは私はほぼ無傷ですでぐり押して13号先生に先に診察受けてもらったんだけど。今は麻酔が効いて静かに眠ってるみたい。

雄英に入ってからすぐにとんでもない体験と秘密を知ってしまった。ヴィランとの命のやり取りと、平和の象徴オールマイトの秘密と級友との関係。考えるだけで脳がオーバーヒートするぐらい重い内容だ。1テラバイトくらいあるんじゃないか？ いやそれ以上かもしれない。

まさか保健室に私のサイズの下着があるとは思わなかった着替えを済まして体操服でそのことについて湯気をだしながら考えているとこんこんとドアがノックされる。誰だろう、と考えながらも私以外

にいないし私に用なのかな?というところでどうぞと返事をする。ドアを開けたのは片手を吊った相澤先生だった。あー、うん。除籍してくれてもいいって命令無視したし、そのことかな?正直、後悔はないけどヒーローへの道が遠のいたのは悔しいなあ。

「樫、少しいいか」

「はい、除籍のことですよね?」

「いや、違うが。今回のことで除籍はあり得ない。安心しろ」

あら?違うんだ……………よかつた~~~~!!!!そうすると相澤先生は一体何の用なんだろう?事件直後で忙しそうだし……………私に何かあるのかな?私がベッドに座りなおすと彼は椅子を引っ張って私の前に座って、深く頭を下げた。

「樫、今回のことは済まなかった。かなり怖い思いをさせたと思う。

お前たちを預かる教師として、謝らせてくれ」

「へっ!?あ、相澤先生が謝ることなんて何もない筈です!私が勝手に戦っただけで……………」

「違う、お前にそう判断させたことがそもそもおかしいんだ。結果的には確かにお前はあの脳無とかいうヴィランに真正面から対抗してきた。だが、生徒に命を懸けて戦わせる教師がどこにいる。ヒーロー以前の問題だ。今回の件は俺たち教師側の力不足に原因がある」

誠実で、優しい人なんだな……………相澤先生。私にまっすぐ合わせてくれる目がそれを物語ってる。この人が私たちの担任でよかった。でもやっぱり、勝手に動いた私も悪いはずだから、私だって謝らないといけない。

「私も、すいませんでした。逃げろって言われたのに勝手に戦って。相澤先生の腕が折られた時に頭に血が上って……………それで考えるよりも先に、動いちゃいました」

「……………コレは受け売りだが、考えるよりも先に体が動く。ヒーローとして名を残した人物は共通してそう語ってるよ。正式な謝罪はご両親の前でさせてもらいたい。それと一つ、いいか?」

相澤先生はこれ以上は謝罪合戦になると判断したのか私の言葉をフオローする形で切ってくれた。私が何でしょうと彼に尋ねると相

澤先生は入ってくださいとドアに声をかける。すると一人の男の人が入ってきた。トレンチコートがよく似合う男の人だ。誰だろう……？

「こんにちは。警察の塚内といいます。怖い思いをした直後で申し訳ないんですけど……調書を取らせて欲しいんだ。あの黒いヴィランと直接戦ったって聞いたからね。もしも話すのが無理なら落ち着いてからで構わないよ」

「あの、個性の無断使用は……」

「それは間違いなく正当防衛になるから問題ない。全く警察も合理的じゃないな。生徒の心労も考えてくれ」

「耳が痛いよ。だけど、あのヴィランの異質さは異常だ。早期に捜査を始めないと取り返しのつかないことになるかもしれない」

「わ、分かりました。お話しします……2分だけ時間をください」

「うん、大丈夫だよ」

入ってきた男の人は警察官だった。今日の事件の捜査をするために調書を取って回っているらしい。それなら私も役立てることがある。目を閉じて深く集中し、今日あったことを脳みそに直結してるメモリから洗い出して時系列順に私が見たことを映像化する。さらに脳無との戦闘映像も私の一人称視点という話になってしまいがそれも纏める。右目が集めたあらゆるデータを封入してオールマイト先生がぶっ飛ばしたところまでを一本の動画データに出力する。オールマイト先生の秘密の所までは入れないでいいはずだ。

チーンと電子レンジのような音がなつて、私の右耳当たりのアクセサリが一部開き、USBメモリがにゅつと出てきた。集中を切つて目を開け、手袋がないので壊さないように慎重に手に取って相澤先生に渡す。

「これは……」

「今日1日、USJに入った時からオールマイト先生に助けられるまで私が見たものを映像にした動画データです。覚えていたことを話すよりずっとわかりやすいかと思って。私は機械ですから」

「なるほど、いい個性だね。必ず捜査に役立てる、約束するよ」

「すまん樫、これ英雄の方でもコピーしていいか？今度の職員会議での対策検討の時に使えるかもしれない」

「はい、構いませんよ。どんどん使ってください、私も覚えてることは全部お話ししますから」

そこから始まった調書取り、何があつたかを時系列で話して地震災害演習場でのヴィラン拘束と広間に戻つての戦闘の事を話して終わった。塚内さんはボイスレコーダーを仕舞つて席を立ちあがり、あとでUSBを取りに来ると言つて帰つていった。私はそこでようやく全部終わったんだな、と完璧に力が抜けて相澤先生の前なのにふらふらとベッドに倒れ込んでしまう。

「おい、どうした？大丈夫か？」

「全部これで終わったと思うと力が抜けちゃつて……それに」

そこでくうくうくうと私のお腹の虫の音が鳴る。相澤先生の前なのに！鳴っちゃつた！お腹減つたなあとは思つてるけどタイミングが悪いよお！蒸気を吹き出して真っ赤になった私は枕に顔をうずめながら話す。

「お腹が減りました……」

「ランチラッシュに飯を頼んでくるよ」

「通常の3倍量でお願いします……」

相澤先生は触れなかつたけど、私は恥ずかしさでいっぱいになってしまうのだった。



## 体育祭編

### 13話

ヴィラン襲撃の翌日は臨時休校だったらしい。というのも私は保健室にお泊りしたので休み？というのがいまいち実感出来なかったのだ。ただ、お母さんとお父さんに滅茶苦茶心配されたという事実が、私が無茶苦茶やったっていう証拠で何とも申し訳ない気分になった。相澤先生は私の両親に頭を下げて危険にさらしたことを謝罪してくれた。雄英高校をヴィランが襲撃というニュースはセンサーシヨナルに世間に広まってたみたいだけど、両親は先生の謝罪を受け入れて、私は家への帰路につくことができたのだ。

「皆！朝のホームルームが始まるぞ！席に着くんだ！」

「皆ついてるよ。着いてねーのおめーだけだぞ飯田」

「しまったー！」

教室内を暖かい笑いが伝播していった。臨時休校明けの朝、ホームルームの前のことだけど……私にべつたりくつついて離れない三奈ちゃんとそれを苦笑するえーくんと一緒に教室に入ると、私の姿を見たクラスメイト達はみんな一斉に安心したようなため息をついたのだ。爆豪くんは舌打ちだったけど。麗日さんと葉隠さんに至っては「樫ちゃんが立って歩いてるうう……」というなんか赤ちゃんが初めて立ったみたいな反応されてしまったし。

申し訳なさで縮こまってしまった私を前の席の八百万さんが励ましてくれて少しだけおしゃべりしているとドアが開いて手を吊った状態の相澤先生がやってきた。ホームルームが始まるということだみんながピタツと静かになる。うん、すぐ静かになるあたりみんな相澤先生に教育されちゃってるね……。

「さて、皆も知っているかもしれないが……雄英体育祭が迫っている！」

「クソ学校っぽいきたあああ!!」「」

相澤先生の言葉にクラス中が大盛り上がりした。学校行事という

やつはテンションが上がるのか？という疑問があるかもしれないけど、雄英の体育祭は別なのだ。というのも雄英体育祭は日本全体にとってもビッグイベントで、それはかつてのオリンピックと同等なのだというから驚いちゃう。だって学校のイベントで日本中がテレビにかじりついて熱狂しちゃうんだよ？すごいよねえ……

「ヴィランごときで中止するイベントじゃない。それに、うちの体育祭は年に1回しかないビッグイベント、逃す理由もない」

あんなことがあったのにこの体育祭を強行する理由は何か……それは私たちにとっても重要なことがあるからだ。雄英体育祭はヒーローも観る。けど普通の人は視点が違う、彼らプロヒーローはスカウト目的で体育祭を見るという話だ。だからプロの目に留まるために私たちも頑張る必要がある。

自分で独立しちやえばいいのでは？という話もあるけど、大抵ヒーローになったらどこかの事務所に所属してサイドキックとして活動するのがセオリー。そこからどぼっと人気が出て独立する人……例えばオールマイイト先生とかもいるけど、普通は地道に人気を稼いで実力をつけるの。だから、スカウト目的の体育祭は私たちにとってはとても大事な話なんだ。

「あ、ごめんねえーくん。私今日お弁当作れてないの。だから食堂に行ってもらっていい？私はちょっと用事があるから、今日は一緒にきかないんだ」

「おお、気にするなよ。んじやあ午後のヒーロー基礎学でな。芦戸く、希械は今日メシいっしょに行けねーって」

「ええ〜！ん、でも用事があるならしょうがないか〜。何の用事なの？」

「私の個性の関係のお話。サポート科にちよつと行こうかなって」  
「そっか〜」

4限目の現代国語という私の天敵を相手にした後の話、えーくんに手袋越しの両手を合わせてごめんなさいのポーズをして、今日はお弁当を作れなかったと謝罪する。あんなことがあった後で楽しく料理

をする気分にはちよつとなれなかったから。なので今日は学食に行ってもらおうというのが一つ、そして……このお昼で私の抱える秘密に決着をつけたのが一つ。

オールマイト先生とデクくんの関係、個性の話、小さくなったオールマイト先生……すべて私が一人で抱えるにはちよつと重すぎるし、知ってしまった申し訳なさもある。だから、オールマイト先生に全部打ち明けて沙汰を決めてもらいたいというのが一番の理由だ。

なので私はサポート科に用があるという方便を使ってクラスから離れることにした。まあ今日会えなかったら実際サポート科に行つて発目さんとお話することにしよう、お預け状態だからね今。暴走されて本格的に分解される前にちゃんと話しておきたいし、最悪手と足ワンセット置いておけばいいかなあ……？

二人に手を振つて別れてから教室を出る。目指すは職員室……ではない。というかオールマイト先生が普段どこにいるのか全く分かんない。そもそも私は入学したてでこの地理にも明るくない。仕方がないので個性を使うことにする。私は二つの手段を切り替えて音を聞いているんだけど、一つがみんなと同じ鼓膜を使ったやつ。でもう一つ私がどうやって音を聞いているかと言えば耳近くについてるアクセサリ、実はこれが私の二つ目の耳みたいなものなんだ。集音マイクが付いててこれで私は音を聞いている、メカなので。

というわけで集音機能をフル活用、職員室まで歩きながらオールマイト先生の特徴的な重い足音を探す。まあ見つからないよね……?!?普通にいた!?!しかもデクくんと一緒だ!これは何というチャンス!幸い昼休み始めでみんな学食や購買に群がって職員室周りには人がいない!私は目立つのでこそこそするには向いてないし、こんな状況はめつたにないだろうし……二人には悪いけど、ちよつと後を付けさせてもらおう。一階下からだけど。

向かう場所は職員室からさらに奥まった場所にある談話室の先、仮眠室のようだ。ばれたら一巻の終わりなので遠回りして二人が仮眠室に入ったのを確認、そして右見て、左見て、誰もいない!うああ……緊張するう……どうやって切り出したらいんだろう……?え、ええ

い！えーくんじゃないけど男は度胸！女も度胸！やってやれないことはない！覚悟を決めて仮眠室のドアをノック！

「ん？H A H A H A！樫少女じゃないか！こんなところに何か用事かい？」

「その、少しよろしいでしょうか？オールマイト先生、デクくんも一緒ですよ？大事な話があるんです、今じやなきやいけません」

「……何の話か聞いていいかな？」

「……ここで話して、誰かに聞かれても困るんです。私もう、どうしていいか……」

「随分深刻そうな顔だね。いいよ、入りなさい」

ノックした後少しドタバタして仮眠室のドアが開く。そこから顔を出したのはいつも通り人を安心させる笑顔をしている筋骨隆々のオールマイト先生、私が言葉を濁しつつ話があると伝えると彼は逡巡しながらも中へ入れてくれた。中には予想通りデクくんの姿もある。彼は私が来た事にあたふたしてる。ごめんね、大事な話かもしれないけど、私の方も大事なんだ。

「それで、樫少女。私に大事な話というのはなんだい？サインならいつでも歓迎だぞー！」

「……これ、見てください。デクくんは多分、知ってるんだよね？」  
私は手袋を外して掌を組み替えて空間投影型のディスプレイを作り、そこに捜査協力した時にあえて入れなかったオールマイト先生が縮んでいく様子を収めた映像を映し出す。オールマイト先生の笑顔が一瞬凍り付くがすぐに元に戻る、デクくんは……なんかこう凄く言い表せない凄い顔してる。

「随分と合成が上手だね樫少女。残念ながら私のこの自慢の筋肉はニセ筋ではないんだ。ドツキリかい？」

「そ、そうだよ樫さん！オールマイトがこんなガリガリになるわけないじゃないか！」

「誤魔化さないでください。オールマイト先生は私が捜査協力の際に提供した映像が私の見たものであるというのはご存じのはずです。この映像はあえて入れませんでした。それにデクくん？あんなに大

きな声で爆豪くん個性を貰ったって話してたし、そのあとオールマイト先生とも話してたよね？」

決定的な一言。まさか私が聞いていたとは思わなかったらしくデクくんが絶望的な表情になる。オールマイト先生も笑顔が消えてシリアスな顔になった。なんか、私悪いことしてるみたい……二人にとっては悪いことなのか。ごめんなさい、だけでもうこれを抱えておくのは私には難しいんです。

「そ、それは……！」

「シット……！見てたのかい……!?!」

「ええ、見えました。そのあと校長室の前ですれ違いましたよね？プレゼントマイク先生の反応も変でしたし。USJで確信しました」

「そう、なのか……」

ここまでやってようやくオールマイト先生は誤魔化すのを諦めたみたいで、ぼふんと彼が座っていた場所に煙が立ち上る。煙が晴れるとそこにはさつきまでの筋骨隆々なオールマイトとは真逆のガリガリで、眼光だけがそのまま骸骨のような人がぶかぶかのスーツ姿で座っていた。

「君は……いつから気付いてたんだい？」

「戦闘訓練の時、オールマイト先生とデクくんの個性のエネルギーが同一なのに気づいたんです。何か関係あるのかなって思ってたら……下駄箱で」

「そうか……どうしてこのタイミングで私たちに接触を？」

「端的に言えば……心苦しかったからです。脅すような形になって申し訳ないんですけど……秘密が漏れているかもしれないって知ってほしくて。デクくんバスの時も思ってたんだけど誤魔化すの下手すぎだよ」

「うっ……」

「緑谷少年……」

「フォローしときますと動揺が酷かったただで誤魔化しはまあ……」

「そんなに下手だったかなあ!?!」

「音声再生する?」

「ヤメテクダサイ……」

バスの中の動揺っぷりはひどかった。せめてその、笑いながら違うよくらいは言って良かったんじゃないかな。そしたら私は喉に釘が刺さった変な女で終われたのに……というかデクくんが一番気を付けないといけないのになんで私は気を張ってるんだ!盗み聞きした私が悪いんだった!ごめんなさい!自業自得じゃん……

「二応聞いておくけど……誰にも言っていないよね?」

「あの、言えると思います?平和の象徴の個性をクラスメイトが持つてるんだって。オールマイト先生が縮んだって……悪い冗談以下ですよ……」

「だが君は証拠を持っていた。インターネットにばらまくような真似もしてないのだろう。その判断に感謝するよ……私が弱体化しているという噂が流れたら、ヴィランが活性化してしまう」

「弱体化、ですか?失礼ですけどそのようにはとても……」

「いや、私は弱くなっている。脳無と戦った時150発以上拳を叩き込む必要があったが、全盛期なら5発で終わっていた。とあるヴィランとの戦いで呼吸器官と消化器官の半分を失ってね。それ以来私の活動時間は衰える一方なんだ」

そうだったの……?脳無を5発でノックアウト出来たという全盛期のすさまじさはともかくとして……体の中身まで勝手に見るのが気が引けてオールマイト先生が怪我の後遺症に苦しんでいるというのは気づけなかった。けど、USJの時動かなかったのには納得した。動かなかつたんじゃないやなくて限界だったから動けなかったんだ。

そこから私はオールマイト先生の事情を聴かされた。自分の後継を探しており、それがデクくんということ。譲渡可能な個性、力を蓄え次代に繋ぐ「ワンフオーオール」……デクくんの中に今はある、オールマイト先生はその残り火を使っている状態だということ。近くオールマイト先生は戦えなくなるかもしれないこと……どれもこれもが特大級のスキャンダルだ。こまいった、秘密が増えてしまった……。

「さて緑谷少年、色々しつちやかめつちやかになつてしまつたが……私からのお願いだ。体育祭……このビッグイベントにて……君が来た！というこゝとを世の中に知らしめて欲しい！」

「僕がきた……というこゝとを……あのも僕、ワンフオーオールをまだ全然……」

「そうだね、君はまだスイッチのオンオフを知つた状態だ。どうしようつか」

「でも……デクくん脳無に使つた時は折れてなかつたよね？何か違ひとかなひかな？」

「あ……人に使おうとしたから？」

「どうやらオールマイルト先生がデクくんを呼び出したのは自分の後継として世の中にアピールをしてほしいという話だつたらしい。そこに私が突撃してきたせいでぐつちやぐちやになつてしまつたのだ。うんその、ごめんなさい。私が悪いんです……でもデクくとオールマイルト先生が師弟関係というのは羨ましい話かもしれない。だつて平和の象徴のマンツーマン指導だよ？羨ましいなあ……ん？でも……」

「あのオールマイルト先生、デクくんへの指導つて週何回やつて、どういうトレーニングをしてるんですか？」

率直に伝えた私の疑問に、平和の象徴は血を噴いて固まつた。

## 14話

「あのオールマイト先生、こんなこと先生に言いたくはないんですけど……デクくんのこと大切じゃないんですか？」

「ち、違うのだ樫少女！緑谷少年のことは大切に思っている！だがそれには深い事情が……」

「事情って何ですか!?デクくん個性を託したんでしよう!?発表するのは無理でも雄英に入った途端放置ですか!?デクくん個性で何回怪我してると思ってるんですか!そのうち体動かなくなっちゃいますよ!」

「あの、樫さん……僕は別に平気だから……」

「デクくんも!貪欲に教えを請わないとダメだよ!オールマイト先生の個性だよ?一番知ってるのはオールマイト先生なんだから、分からないことは聞かないと!殴るたび怪我してたら痛いでしょ?」

「ハイ、その……ゴメンナサイ……」

仮眠室に私の興奮した声が響く。まさか平和の象徴とその弟子にお説教じみたことを言わないといけないなんて物凄い恐れ多い。だけどデクくんが雄英に入ってからオールマイト先生に個人的なレッスンを受けてないというのは流石に看過しかねるんです。物凄い余計なお世話だろうけど、個性使うたびに大怪我して、リカバリーガールに直してもらって……そんなの痛いに決まってる。苦しいに決まってる。私みたいに換えは効かないんだから、自分を大切にしてほしいな。

「……そもそもなんで個人的なレッスンをしなかったんですか?」

「忙しかったとしか……」

「……それはそうでしょうけど……例えば、個性のマニュアルを作るとかあったんじゃないですか?」

「マニュアル?」

「ええ、いわば説明書ですかね?オールマイト先生の個性の使い方を言語化して、整理するんです。いきなり渡されて使ってみろ!は難しいかと……ちなみにそのワンフォーオールのは使い方はどういった



ものなんですか？」

「うむ、ワンフォーオールを使い方はずばり……感覚だ！」

「なるほど、デクくんが苦勞するわけですね」

「なんかアタリ強くない樅少女？」

ヒーロー基礎学の授業の時からずっと思ってたけどやっと納得できた。オールマイト先生は超がつくほどの感覚派だ。自分の感覚で個性を使えてしまっているからいざ他の人にとまった時にうまく説明できない状態になっているんだと思う。端的に言えば天才という言葉、爆豪くんとかと一緒だね。

デクくんは今まで無個性だったから、個性があるという感覚そのものを知らない。オールマイト先生の元の個性がどうなのかは知らない、あるいは無個性だったかもしれないんだけど……あれこれ結構ムリゲーというやつなのでは？感覚を説明するって非常に難しいし……デクちゃんとオールマイト先生が共通でわかるものを例に挙げないと無理な奴だ。

「デクくんは、どうやって個性を使ってるのかな？スイッチの入れ方……私は回路に電気を通すイメージが一番近いかも」

「僕は……今はオールマイトに言われた通りに、力を込めてスマッシュユッて……」

「……ああ、だから0か100なんだ。調節の仕方が分からないんだね？オールマイト先生、一ついいですか？」

「なにかな？緑谷少年にアドバイスをくれるなら実にありがたいが……」

「オールマイト先生って、SMASHを打つ時、常に全力ですか？要は、個性を使う時……例えば人を巻き込むかもしれないから力を抑えようっていう場合……どうやって調節してるんです？」

「……難しい質問だ。確かに常に全力ではないね。一時的に力む、といったらいいのかな……その力の入れ具合としか言えない」

ああ、噛み合っていない。デクくんは感覚派じゃなくて思考と試行回数、分析、解析……いろんな手段を用いて物事を努力し解決していくタイプだ。数学で言うなら証明問題でちゃんと途中式を全部書くタ

イプ。対してオールマイルト先生は直感が物凄くすぐれている天才タイプ、証明問題で途中式無しにどんと答えを導き出せるんだ。そもそもタイプが違うから噛み合わずにうまく師弟関係を作れてない。

さらにはデクくんはオールマイルト先生の超超々大ファンだって聞いたし、憧れが大きすぎてよくわかってなくてもオールマイルト先生が言ってるから正しい！と妄信して本来の持ち味である分析、解析を働かせてない。分からないです、と言えてないんだ。どうしよう、じゃあそのままで頑張りましょうなんて言えないし。

「そろそろ授業が始まるだろう。私の用事は終わったし、緑谷少年も樗少女も体育祭、頑張るんだぞ」

「オールマイルト先生！今日はどのくらい活動時間が残ってますか！？」

「……そうだね、残り10分あるかないかってところかな。それがどうかしたのかな？」

「ならその時間！私に全部くれませんか!?授業の後、お時間を割いてほしいんです！そこでデクくんに個性の使い方を教えてあげてくださいー！」

「……なにか、考えがあるのかい？」

「はいっ！オールマイルト先生のご意見を、私が言葉にします！」

ヒーロー基礎学を終えて、下校時刻。オールマイルト先生に呼び出しを受けた、ということにして私とデクくんはオールマイルト先生が抑えてくれた演習場にやってきた。既に体操服に着替えていて、オールマイルト先生が来るのを待っていると、デクくんが話しかけてきた。

「あの、樗さん」

「ん、と……なに？デクくん」

「その……どうして、そこまで協力してくれるのかなって、思ってた……」

「あー……怪しいよね、ごめん」

「いやいやいや！そうじゃなくて、その……樗さんには関係のない話のはずだから……」

がっちゃんがつちゃんと音を立てて私がラジオ体操を繰り返してるとデクくんは私が何で肩入れしているのか不思議になったみたいで、質問してきた。正直に言えば、罪悪感かな……だって、私が黙ってれば終わってた話だけど、私が抱えきれない弱い女だったせいで結局オールナイト先生の秘密を暴く形で知ってしまったんだから。けど、他に理由がないわけじゃない。

「クラスメイトで、友達に協力してあげたいなって思うのっておかしいかな？」

「そ、それだけ？」

「それだけってひどいなあ。でももう一つあるよ、デクくんに自分を大切にしてほしいなって思ったから」

「僕に……僕を大切にしてほしい？」

「そう、何かあるたび怪我してき。骨折っちゃって……見てる私が痛いくらい。私だって人のこと言えないけど、デクくんには換えがないうんだから、羨ましいくらいだよ？生身の手があるのに自分でポロポロにしちゃうんだもん」

しゃがんで、彼の両手を私の手で包む。私の機械の手にはない体温、正直羨ましい。私のこの機械の手では、誰かを暖めることはできない、同じ体温を共有することはできない。私にとって生身の体というのは自分にはないもので、ちよつとした憧れ。産まれた時から手足が機械で手を繋いだ時の感覚とか、そういうものを私は知らない。触っていることはわかるけど、結局それは機械の圧点のデータが脳に送られてるだけだから。生身同士で感じる感覚みたいなものは正直分からないんだ、私。

「私も……USJで見たよね？手と足、必要なら犠牲にするよ。けど、それはまた元に戻せるからなの。でもデクくんは違うじゃない。あんな風に壊したら、本当にヒーローになる前に手が動かなくなっちゃう。私はそれが嫌なんだ」

「樫さん……」

「せっかく暖かい生身の手があるんだもの。それなら、その手で誰かを助ける前に自分を助けないと。ヒーローが自分を大事にできな

いのに他人を大事にしてたら怖がられちゃう」

ぎゅつとできるだけ優しくデクくんの手を握って立ち上がる。デクくんは自分の手を見て何か考えてるみたい。そうだそうだ、ちゃんと考えろよ若人、なんてね。手を壊すのが常態化してきたら正直まずいし、そもそもそれを躊躇なく行えるのは正直頭ぶつ飛んでるよ。私ですら腕なくなるのちよつとイヤなのに。だから早めにおかしいってことを自覚させたい。訓練で腕ぶつ壊すな！初めて見た時炉心一瞬止まったんだぞ私！

「おい緑谷少年！樫少女！待たせてごめんね！」

「オールマイト！」

「オールマイト先生！すいません、無理を言つて」

「なに、樫少女の言うことももつともだよ。私はもつと緑谷少年に寄り添わねばいかんのだ。それで、ワンフォーオールの使用方の話だね？」

「ええ、準備しますので少し待ってください」

トウルーフアーム、というらしいガリガリの姿でやってきたオールマイト先生に領いた私は体操服の上のジャージを脱いで、裾を捲り上げてお腹を露出する。なんかデクくんが異常に慌てるけど私のヒーロースーツはもつと露出してるでしょ？お腹くらいでそんな慌てられたらヒーロースーツの私はどうなっちゃうのさ。それはともかくとして

私の腰後ろあたりからいくつかのメカアームが変形しながら現れて、数台のカメラと金属を重ねた積層材のようなメカの塊を生み出した。アームからそれを切り離した私はそれをせつせと配置する。今回は暴風が想定されるので演習場の地面に挿すタイプのカメラだ。最後に重さ1トンを超える金属塊をカメラの真ん中あたりに設置して準備完了。

カメラは今回確実な動作をしてほしいので有線にした。設置するたびに有線コードを私の首後ろに直結して、とこれでよし！オールマイト先生に金属塊の前に立ってもらおう。

「準備完了です。オールマイト先生、先生は威力の調整ができると

お昼に仰ってたので、その機械に段階的に出力を上げたワンフォー  
オールの一撃を放って欲しいんです。私がそれをデジタルに解析し  
ます。まずは5%から」

「なるほど、しかし硬そうだね。緑谷少年、よく見てなさい。ムンツ  
！」

「はい！オールマイト！」

オールマイト先生が力むと何時ものムキムキマツスルなオールマ  
イト先生に変身した。これがただ力んだだけだというからよっぽど  
個性っぽいんだけどな……SMASHの掛け声とともにオールマイ  
ト先生の拳が金属塊に打ち込まれる。これで5%？すごいなワン  
フォーオール……積層材の表層にがつり拳の跡が付いてる。なる  
ほど、力み方はこういう感じね。

「どうだい、樗少女」

「はい、力の込め方が分かりました。あとワンフォーオールのエネ  
ルギーの流れもです。続けてください。10%を」

右目の上にモノクル状のHUDを増設して適当なピンで右目を露  
出する。カメラの耐久値確認、もんだいなし。情報処理能力をフル稼  
働して起きた事象を解析する。拳の内から、練り上げられた力の流れ  
を見る。ワンフォーオールはかなり観測しやすい個性だ。何せエネ  
ルギー量が大きすぎる。倍の威力のSMASH、積層材の1層目が死  
んだ。威力にして20トンはくだらない。そりゃこんな力を振るえ  
ば腕も壊れるよね……

「では、100%全力でお願いします」

「わかった。流石に危ないので少し離れてなさい……DETROI  
T……SMASH!!!」

「わあああっ!?!」

オールマイト先生の100%の打撃、15%あたりから暴風が伴う  
ようになってきたんだけど、必死にノートを取るデクくんと解析を続  
ける私は気にも留めなかった。だけどこれは違うや、吹っ飛ばされ  
る。乙女の秘密の体重が300kgを超える私がだよ？デクくんも

吹っ飛びそうだったからとりあえず抱き寄せて私が踏ん張る。1mほど暴風に押されてようやくそれが収まる。積層材のパンチングマシーンが影も形もないや。けど、情報収集はおわった。うん、これならいけそう。

「む、むむぐ……」

「あ、ごめんねデクくん。抱っこしたままだった」

「ぶ、ぶはあ!ゆ、樫さん!」

「どうしたの?顔真っ赤だよ?」

「H A H A H A!青春してるねえ緑谷少年!どうかな樫少女、何かわかったかい?」

「はい。色々。ですけどそれを全部吹っ飛ばす収穫がありました」

オールマイト先生のS M A S Hを解析しているうちにとてもとももいい収穫があった。私にとってじゃなくてデクくんにとっての話。ワンフオーオールのエネルギー移動の話とか、カみ方のデジタル的な話とか全部纏めてなかったことになってても余りあるほどの大収穫があったのだ。

デクくんは私に抱っこされたのがよっぽど恥ずかしかったのか分からないけど真っ赤な状態でブツブツ言ってる。私は首元に繋がってる有線ケーブルを纏めてぶちぶちつと引っこ抜いて、デクくんの目の前で手を打ち合わせる。ガシャアン!という音で飛び上がってびっくりしたデクくんが正気に戻ったタイミングで二人に向き直った。

「私、デクくんに100%を撃たせて怪我をさせない方法を見つけました」

「えっ!?!それほんとなの!?!」

「ブハア!?!樫少女それほんと!?!」

興奮すると吐血するらしいオールマイト先生と全く同じ反応をするデクくんを見ながら私はにっこり笑って口を開くのだった。

## 15話

デクくんはワンフォーオールで100%でのパンチを撃たせる方法を見つけた、そう言った私に二人はかなりのびっくり顔を披露してくれている。デクくんは顎が外れんばかりにポカンとしてるし。オールマイト先生は凄い勢いで吐血してる。その、病院行かなくて大丈夫なのかな？心配になってくるんだけど……

「その、樫さん……100%を打つ方法って……？」

「うん、説明するね。まずなんだけど、デクさんとオールマイト先生、個性の発動の仕方全然違うの。多分ワンフォーオールって継承者によって変わっちゃう部分があるんじゃないかな？」

「えっと、つまり？」

「オールマイト先生だと、個性は体の中のみで完結してるの。デクくんの場合、ワンフォーオールの力？そのものが腕から漏れてる。内と外両方に作用してるんだ」

私はゴリアテを着ていたことで強化されていた右目で解析してあった折れなかった時のデクくんのワンフォーオールのパンチと今見たオールマイト先生のSMASHを比べながらそう判断した。デクくんがワンフォーオールを使った時、緑色の電気のようなオーラと腕に浮き上がる赤っぽい力の流れが観測できた。これはオールマイト先生にはないものだ。オールマイト先生のエネルギー移動は体表に漏れだすことなく体内を移動し力として発動していた。

ワンフォーオールのことを説明された時、極まった身体能力の結晶という話をされた。身体能力ということは体の頑丈さも含まれてるはずなのに、デクくんは大怪我をしている。それはなぜか？器としてまだ未熟だからエネルギーが外に漏れてるのか？あるいはまた別の理由か……そもそも、腕を振って衝撃波が出る威力の拳を撃って反動がないというのも変な話。反動がないんじゃないやなくて、反動をもつものでもない頑丈さをワンフォーオールは与えているんだ。

それは体の中に作用する力で、きちんとデクくんにも作用している。じゃあなんでデクくんは大怪我するのっていうことなんだけど、

外に漏れてる方のエネルギーのせい。これは威力を高めると同時に反動も高めてるんだと思う。その反動が強烈すぎて、ワンフォーオールで頑丈になったはずのデクくんの体でも受け止めきれない。だから結果的に使ったら大怪我するんだ。

「オールマイト先生は最初からワンフォーオールを自由に扱うことが出来た。だから、外に何も漏れなかった。でもデクくんは違う、その漏れたエネルギーがデクくんを傷つけると同時に、強力な威力の増加を招いてる」

「じゃ、じゃあその漏れたエネルギーを何とかすれば……」

「いや多分それは無理じゃないかな……？器として完成すれば別かもしれないけど、今この段階でそれしたらデクくん破裂すると思うよ？安全装置みたいなものだよ、それ」

厄介なのが、ワンフォーオールという個性の性質、力を蓄えて次代に繋ぐ、つまり次代に繋がった状態の今デクくんのワンフォーオールはオールマイト先生のそれより強くなってる……んじゃないかな？エネルギーが漏れるというのがもし、収まりきらないエネルギーの有効利用みたいなものだったとすれば……蓋をした場合待ってるのは破裂だもの。エネルギーが漏れた状態のまままで何とかしなければだめ、うん。

「は、破裂？！オールマイトも未熟な状態で受け取れば四肢が爆散するって言ってたような……」

「やっぱり」

「なるほど、緑谷少年と私の違いか……確かに入試の映像や戦闘訓練の映像を見る限りそういう状態なのは理解できる。して櫛少女、緑谷少年に100%を打たせる方法とは？」

私の説明に納得してくれたオールマイト先生が口元に手を当てて記憶を思い出しながら肯定してくれた。私はそれに頷きながら、手を變形させる。デクくんのワンフォーオールで100%を打たせる方法、それは……

「外骨格、です。デクくんはこの手覚えてるよね？」

「あ、脳無と戦った時の……」



「そう、デクくんの腕が折れる原因は跳ね返ってくる衝撃とエネルギーに耐えられないから。じゃあ、耐えられるものを身に付けて打てば、大丈夫」

「サポートアイテムでの補助か！なるほど、私も一時期試したことはあるがあまり効果なくてね、盲点だったよ」

「サポートアイテムを着けたオールマイト!?なんだそれ全然知らないぞ……!?くそ、どこで見落としたんだ……?」

「わー、凄い早口」

「緑谷少年……君のことなんだぞ……」

腕部分だけゴリアテを纏った私がデクくんへの解決法、つまり衝撃とエネルギーを受け止めてくれるものを付ければ理論上100%のスマッシュを打つことができるはずなのだ。肝心のデクくんはオールマイト先生がサポートアイテムを着けていた時期があると知ってスマートフォンとにらめっこしながらとんでもない早口でブツブツ呟いている。オールマイト先生はそれに若干呆れ気味だけど、好きなことに没頭できるのはいいことだと思うよ。私相手でもかたね、爆豪くんならキレて爆破されてたと思うよ多分。

「それで……んしょつと」

「わっ!? 楨さん!?!」

「けーそくちゅーだから動かないで。うーん、と。ここ、こうして

……強度的には、構造的にもこれがいいよねえ。はい完成!」

「うわあ……凄いや楨さん。カッコいいねこれ」

「でしよ〜」

正気に戻すのもめんどくさかったので私は腕を元に戻してデクくんの後ろからもたれかかるようにして両手を緑谷くんの腕に重ねる。急に重くなったせいかわびっくりしたのかひどく慌てるデクくんをほって意識を集中。するとそこから私が即興で設計&ビルドした細かい装甲が重ね合わさったような無骨な籠手がデクくんの肩から先を覆った。

「名付けて……チョバムガントレット!というわけでデクくん一発スマッシュ!」

「え!? ええっ!? 流石に今からは少し……」

「……だめなの? ほら、オールマイト先生が見てくれるうちにやった方がいいと思うよ? 大丈夫、計算上は問題ないから!」

「緑谷少年、仮に怪我をしたらこの路線はやめて別の方法を探ろう。希望が見えている以上やった方がいいとおじさんは思うな」

「オールマイトはおじさんじゃないです!」

そこじゃないんだけど……でも正直安心した。ここで二つ返事でやります! って言われてたら私は問答無用でリカバリーガールのメンタルヘルスにデクくんを突っ込んでいたところだ。あんなひどい折れ方、痛いに決まってる。自分の体の状態に頓着してないわけじゃなくてちよつと安心した、かな? まあやってもらわないと進まないからどのみちやってもらわないと困るんだけどさ。

オールマイト先生のおじさん発言に慌てて訂正を入れたデクくん、大丈夫かな? 怖くないかな? ……? ちよつと発破かけようかな? ……挑発に乗ってくれるといいんだけど……

「正直私、デクくんがこのまま体育祭に行ってもいいと思うよ? 怖いなら怖いでしょうがないし……ただ、今のデクくんがどう逆立ちしても私に勝てるビジョンはないもの」

「うっ……」

「デクくんの100%は脅威だけど、一発きりの大砲なんて攻略手段山ほどあるもん。現時点で私、10通りくらいデクくんを何もさせずに封殺する方法思いついてる。少しでもワンフオーオールが使えたら別だけど。今のままなら確実に何とでもできるって断言してあげる」

「うん、そうだね……僕は弱いんだ」

「あ、それは違うよデクくん。デクくんは弱くない、私が胸を張っていつてあげる。あの時、脳無に向かっていたデクくんの勇氣、無謀だったかもしれないけど……強い人じゃなきゃアレはできないから」いきなりおかしいことを言いだしたデクくんには否定の言葉を返す。弱いつて何さ。弱かったらみんなを助ける為にヴィラン相手に飛び出せるわけじゃないじゃない。私は物理的な強さってすごく曖昧

なものだつて思ってるの。だって、力があつても立ち向かえなければ意味がない、逃げてしまえば力があつても何もできない。心の強さこそ、本当の強さだつて私は思ってる。

「樫さん……」

「わー、デクくん思つてたけど泣き虫さんだね。涙腺どうなってるの〜?」

どばあ、とまるでコミックの表現のようにデクくんの両目から滝のように溢れる涙、そんなに私おかしいこと言つたかなあ? オールマイト先生はにつこにこで何も言わないし、しようがないのでハンカチを取りだして優しく両目を拭いてあげるとそこでようやく覚悟が決まつたらしいデクくんが口を開いた。

「うん、やるよ。折角樫さんがここまで協力してくれたのに僕が怖気づいてたら意味ないもんね」

「よし! それでこそだ緑谷少年!」

「はいっ! じゃあいきみます! スウマアツツシユ!!!」

デクくんが気合を込めて思いつき殴るモーションを取ると、バライと私の観測通りにチョバムガンレットの上から緑色の雷みたいなエネルギーが迸つて、殴ると同時に開放される。さっきのオールマイト先生の100%並みの威力を持ったデクくんのパンチはすさまじい風圧を伴つて演習場を駆け抜けていった。

バライ、ガラガラとデクくんの腕から破損したチョバムガンレットが外れて落ちる。その下の手は……無傷。よし! 計算通り! この状態からデクくんのワンフオーオールを調節可能にする下準備が出来たとみていいはず! たぶん! 何せ私も譲渡可能な個性の使い方を考えるなんてやったことないからぶつちやけ手探りだ!

「あ、あの樫さん!、これ……!」

「あ、ガントレット? 大丈夫計算通りだよ。それ、壊れるように作つてるから。それよりもほら、腕……折れてないでしょ?」

「ほ、ホントだ……! 痛くない!」

「やったな緑谷少年! ワンフオーオールを全力で放てる機会が増えるということは力み方のパターンを試せるということだ! 調整に一

歩近づいたぞ！」

チヨバムガントレットは、壊れることで衝撃を吸収し中身を守る構造になっている。というのもさっきのオールマイルト先生のデモンストラーションで私が今作り出せる物質ではワンフォーオールを耐えきれないということが分かっていたからだ。なので、使い捨てと割り切り中身を守ることだけに専念したガントレットを作ったというわけ。喜んでる所悪いんだけど……

「まあ、私はずっと協力するっていう前提の話ですけどね」

「え」

「あの、樗少女？協力してくれる、ヨネ？」

喜ぶ二人に水を差す形になってしまった私のつぶやきにびしりと二人が固まる。オールマイルト先生がつんつんと指と指を突つきながら非常に申し訳なさそうに聞いてくるんだけど、私も私で事情があるんですよ。それこそ体育祭が近いというやつが。

「協力するのは吝かじゃないんですけど……私も体育祭に向けて準備がしたいんです。デクくんのワンフォーオールの特訓にずっと付き合っただけられる時間も場所もないわけですし……」

「あ、そうだよ。みんな体育祭頑張りたいに決まってるんだ……僕だけのために樗さんの時間を消費するのも……」

「ふむ……確かに正論だ。ならばこうしよう樗少女！雄英ではないが、私が個人的に使っている演習場を、体育祭まで授業後私の名で貸切る！そして、私も時間があれば君の特訓に付き合おうじゃないか！必要な他の生徒を連れてきても構わないよ！トゥルーフォームの時は申し訳ないけど私のことは管理人で通して欲しいが……どうかな？」

「それは……よろしいのですか？」

すごいな、言ってみるもの、という言葉があるけどまさにそれだ。実際私も体育祭ではかなり本腰を入れて頑張りたいので個性が使える広い場所を探していた。雄英の演習場には限りがあるし取り合いになるので望むべくもなかったけど、オールマイルト先生が持っている演習場を使えるというのは物凄い魅力的な響きだ。まあ元からこの

まま放置なんてする気は一切なかったけど、棚から牡丹餅かも。

「そこまで言っていただけなのなら、協力させてもらいますけど……いいんですか？ 鼻屑とかそういうの」

「まあ……そういうやつかみはあるかもね。だけど、緑谷少年は私の弟子なんだから多少は鼻屑したって許されるはずだ。世間一般に公表できないから、こういうところでは師匠面をさせて欲しいな」

「お、オールマイトオ……」

「わー、また泣いちちゃって……デクくん水分補給しなよ？ 脱水症状出ちゃう」

大丈夫なんですか？ という私の問いにオールマイト先生はぽりぽりと痩せた手でガリガリの頬を搔いて、デクくんの頭にポンと手を置いた。直接弟子、と言われたことがそんなに嬉しかったのかデクくんはまた滝のような滂沱の涙を流して喜んでいる。いいな、デクくん。No.1ヒーローがお師匠様なんて、でもそれだけその身にかかる期待と重圧は重い物だと思うから、少しでも早く背負えるように私も手伝うことにしよう。もしも、許されるのならその重荷を少し分けてもらえたらなど私はまた考えて、今度はタオルでデクくんの顔を拭いてあげるのがあった。

## 16話

「希械ちゃん一緒に帰ろ〜」

「あ、ごめんね。今日は用事があるの」

「またか？最近お前え忙しすぎだろ。今度はなんだ？サポート科か？オールマイトか？」

「うーん、どっちも違って。特訓？」

「特訓？」

デクくんのワンフォーオールを怪我させずに打たせる方法を発見した翌日の事、ヒーロー基礎学を終えて帰宅時間になった私と一緒に帰ろうと誘ってくれる三奈ちゃんとかえーくんにもまた手を合わせてごめんなさいする。ここから毎日夕方はデクくんのワンフォーオールの特訓をすることになってるんだ。あとついでに私が構想中の新兵器その他もろもろの特訓も！体育祭に向けてplus ultraしなきゃいけないし。脳無にかなわなかったゴリアテをバージョン2にもしたいし。

「えっと、ね？デクくんの個性あるでしょ？私が協力すれば骨折無しで撃てるのが分かったの。だから、威力の調整の練習でこれから毎日デクくと個性のトレーニングするの」

「なにそれ緑谷ずっこい！」

「え、ええっ?!いやまあ確かに樅さんに協力させてるのはその……」「ず〜〜る〜〜い〜!!あたしも希械ちゃんと特訓する〜〜!」

デクくと特訓するんだあと私が告げた瞬間三奈ちゃんは脱兎のごとくデクくんの席まで走って机をバン！と叩き抗議する。その音に飛び上がったデクくんがあたふたしてブツブツ言ってるけど、それよりも三奈ちゃんだ。戻ってきて私に抱き着いてかまって〜〜とお願ひしてくる三奈ちゃん。確かに最近はあるまり一緒にいないもね。よしよし、と抱きしめて頭を撫でてあげて、と。

「じゃあ、一緒に特訓する？デクくんも、いいよね？」

「あ、希械それ俺も入っていいか？体育祭ちけえし」

「うん、いいよ。いこっか」

「勿論だよ！切島君と芦戸さんに聞きたいこともあるし……」  
「べつ々に今聞いたっていんだぜ緑谷。クラスメイトだしよ」

オールマイト先生に他の人を連れてきても構わないっていう話もされてるので二人を連れて行っても大丈夫なはずだ。二人の参加を決定したところでデクくんは特訓するんだといつも一緒に帰ってる飯田くんと麗日さんに謝ってるけど二人はむしろ応援モードだ。二人とも今日は別の用事があるっていう話で不参加だけど時間があつたら参加させて欲しいっていうし、今後は人数増えそうだなあ。

オールマイト先生が持つてる演習場、雄英から結構近いし……オールマイト先生もしかして雄英の出身なのかな？本拠地は東京だけどこっちにも家あるって言ってたし……もしかして今はそこに住んでるのかも。やったくくと背中を抱き着く三奈ちゃんをおんぶして私はえーくとデクくんと一緒に学校を出るのだった。

「そういえば特訓でどこするんだ？」

「オールマイト先生が個人的に持つてる演習場を貸してくれるらしいの」

「「オールマイトの演習場っ!?!」」

「声が大きいよ！秘密だよ?！」

演習場までの道すがら、行き先が気になつたらしいえーくんが三奈ちゃんをおんぶ状態で歩く私に尋ねる。素直にオールマイト先生から借りたんだよと言えばそれは驚くよね。流石は平和の象徴、名前のビッグさでは他の追隨を許さない有名人だ。二人はオールマイト先生が使っている場所と聞いて俄然ワクワクしている様子。だけだよっぱり気になるのは……

「なあ、どうしてそこ貸してもらえたんだ？オールマイトってそういう鼻屑みたいな嫌いそうじゃねえか」

「んー、端的に言えばデクくんがあまりにもヤバいからかな」

「あゝ……」

「確かに緑谷、いろんな意味でヤバいかも」

「ヤバいつてなに?!いや確かに遅れてるって意味ではヤバいかもしれないけど……」

「いやだってよ。訓練で腕ぶっ壊したり、USJでも指個性で折ってたじゃねえか。ありや流石にヤベえってなるって。良かったじゃねえか緑谷、オールマイトは個人をちゃんと見ててくれたってことだよ」

なんでオールマイト先生が演習場を貸してくれたのかっていう言い訳、それはデクくんの個性の発動の仕方に危機感を感じて、解決手段があるなら早急に身に着けたほうがいいと判断したから、という理由になる。簡単に言えばテレビに映る行事で骨折カーニバルを開催されたらコンプラ的にもやばいし学校的にもやばい、じゃあ特訓するしかないよね？っていう理由だ。さっきからヤバいがゲシユタルト崩壊しそう。

すடன்、と三奈ちゃんが背中から降りて私は猫背だった背中を伸ばした。にししと笑う三奈ちゃんに緑谷くんはたじたじだ。三奈ちゃんは距離近いもんねえ、えーくんも最初のころはタジタジだったよ。雄英に入る前のえーくんはちよっぴり内気だったからね、でも困った人は見捨てなかつたらしいじめも率先して割って入って解決してた。根本は全く変わってないんだけど。

「お〜、おっきい〜」

「希械ちゃん最近それよく言うようになったよね」

「うん、皆が私をおっきいっていう理由が分かったよ。ポロっと出ちゃうね」

「確かにでけえなあ。雄英にあるのとそんな変わんねえんじゃないやねえの？」

「お、来たね少年少女！」

「オールマイト!？」

「H A H A H A！実は今日は非番でね！少しだけ様子を見に来たってわけさ！」

雄英のグラウンドくらい大きな演習場、郊外にあるから人家の距離も結構離れてるぽつんとした演習場から、私たちが来た事を察したらしいマッスルフォームのオールマイト先生が出てきた。彼の今のマッスルフォームの維持時間は2時間ほど、活動時間は1時間と15



分らしい。この後用事があるから管理人とバトンタッチするけどねと笑っているから、今日の活動時間を使い切り、マッスルフォームの時間も残りわずかなんだろう。

「あ、それと樗少女、これここの鍵ね。体育祭終わったらかえして頂戴な。緑谷少年もハイ」

「見たこともないオールライトキーホルダーだ……!」

「そこ気にするんだデクくん……お借りします」

「いいな」

「H A H A H A! メインで使うのはこの二人だからね! 使いたかったらこの二人と一緒にくるんだぞ! 着替える場所はあそこだ! 鍵はかかるから安心したまえ!」

頑丈そうな金属製の高い扉で囲まれてる演習場の機密扉を開けたオールライト先生が私たちを中に入れてくれる。中には、更衣室と思われるプレハブ小屋と、ただ広いだけの演習場があった。正直十分すぎるんだけど、個性を自由に使っている場所というのはものすごく貴重なの。だって危険だから。遠慮会釈なしに個性を使えるなら大丈夫、必要なものは私が作っちゃえばいいので! 便利でしょ。

「じゃあ、さっそく始めようかデクくん。はい、手だして〜」

「う、うん」

「緑谷少年、君のパワーは非常に有用だが抑え方に難がある。少し力を抜いてみるイメージを持つといい。USJで使った時の感覚を思い出すんだ」

「はいっ! スマアツツシュ!!!」

「うおおお緑谷やべえええええ!?!」

「やっぱパワーあるねえ!」

プレハブ小屋は一室しかないのでえーくんは女子は中で着替えろよっていつってデクくんと一緒に外で着替えてくれた。私は三奈ちゃんと一緒に中で着替えて荷物を置いて雄英のジャージ姿で演習場にコンニチハする。オールライト先生が最初の一発だけは見てくれるというのでデクくんの手にはチョバムガンレットを装着、デクくんは

もう自損しないのを知ってるので躊躇なく空に向かってアッパーをぶちかました。右目のデータを見ると、昨日よりもちよつと抑え気味。

「うん、デクくん昨日より抑えられてるよ。100%が98%くらいになってるだけだけど……」

「み、道は遠いね……」

「やっぱりデクくんの個性発動のイメージを捉えないとだめかなあ。出来れば出力が調整出来て自分で分かりやすいもの……」

「僕のイメージ、何があるんだろううでも今のやり方だとまずい言う通り何かかんがえないとえーと」

「でた、緑谷ブツブツ」

バラバラになったガントレットを金属製の熊手を作って一塊にしながら右目のデータと合わせてデクくんに伝える。ワンフォーオールは上限がかなり大きいので僅かな出力の低下が威力を格段に減らす結果につながる。簡単に言えばとても分かりやすいのだ。あとは数を打って試行回数を増やし、その中でデクくんにイメージを掴んでもらうしかない。

「うむ、では私はこれから用事があるので失礼するよ。管理人がいるから彼よろしくね」

「あ、オールマイト先生！帰る前に一つお願いいいですか!？」

「うん、何かな切島少年！サインかな!？」

「サインも欲しいっすけど！俺を一発殴ってほしいんす！」

「バイオレンス！何か理由があるのかい?！」

「今の俺の硬さがどれだけのものなのか、知りてえんすよ。いざ前に出た時防御力が足りねえなんて男らしくないんで、上を知りたいんす」

ガツン、と硬化した手を打ち合わせながらえーくんはそんなことを言った。えーくん、カッコいいな。私の全力パンチをものもしない時点で十分にすごいことだと思っただけ……いつちやなんだけど私そこの重機くらいには馬力あるんだよ？メカだから。あ、でも戦闘形態でのパンチは試してないかも……

「ふむ、そういうことならいいだろう。構えなさい切島少年」

「ウツスー！ありがとうございます！」

そう言つてえーくんは全身を硬化して防御の構えに入る。いくよ、と声をかけたオールマイルト先生が力を込めた拳をぶつける。えーくんは地面を抉りながら後ろに押されて扉に背中をぶつけてようやく止まった。肩で息をするえーくんに駆け寄つて無事を確かめる。

「ぐう……つて……全然耐えられねえ、やっぱすげえわオールマイルト先生！」

「H A H A H A！だが今の無傷でしのぐとはすばらしい硬さだ切島少年！正直私の拳もヒリヒリしてるよ……ではな少年少女！頑張りなさいよ！」

目をキラキラさせてオールマイルト先生を褒めるえーくんを褒め返したオールマイルト先生はぐつとサムズアップした後大ジャンプをして去つていつてしまった。えーくんは今ので頗るやる気が迸つたみたいでよしやるぞオラアアア！と叫んでいる。三奈ちゃんは私も頑張る！とふんすと鼻息荒く準備運動を始めた。

「オールマイルト先生、全く本気じゃなかったけどあの威力……デクくんとは何が違うんだらうな……」

「緑谷のパワーもやべえけどやっぱオールマイルト先生の年季が違わなあ。緑谷は個性使いまくつて調整の練習か？」

「うん、樫さんが大変になつちゃうけど……」

「いーよー。何かイメージを探すことを優先して打つてみよ？スイッチ、レバー、電化製品でも何でもイメージしやすいものを」

「うーん、あたしのイメージってなんだろう？……手汗？なんか汚くてヤダー！あっ！手洗いだ！多分！」

「俺が多分一番緑谷とちけーんじゃねえかな。ホレ、俺これ腕力んでるだけなんだぜ？」

「そっか！切島君がかなり僕と近いんだ！ごめんだけど詳しく話聞いてもいいかな？」

「おお、いいぜ！」

ガキンと片腕だけ硬化した状態の手をデクくんに見せて自分の個

性の発動のイメージを語るえーくに食いついたデクくんが矢継ぎ早に質問していくのを見ながら、私はがらがらと音を立ててチヨバムガントレットを量産していく。三奈ちゃんがみてみると言うのでそっちに目を向けるとぶおんぶおんとトーマスフレアを決める三奈ちゃんの姿が！そういえばダンスが趣味なんだったね、凄いパワフル……

「じゃあ、デクくんはひたすらスマッシュしまくってイメージのきっかけをつかもつか」

「うん！頑張るよ！ありがとう樫さん！」

「俺は……どうすつか。希械さ、何時もみたいに俺殴ってくれね？」

「いいけど、そしたら三奈ちゃんにする？」

「うえ〜あたしだけ仲間外れにしないでよく寂しいじゃーん」

「あー、んならあれだな！組手！授業でやったやつ3人でやろうぜ！緑谷も疲れたら混ざって来いよー！」

「うん！ありがと切島君！スマアツツシユ!!!」

演習場の隅に私が作った台車の上に山積みになったチヨバムガンレットと一緒に移動したデクくんはそこでひたすらスマッシュを上に向かって打ち始める。一発ごとにばらばらになるチヨバムガンレットを見つめつつも口はブツブツと何かを呟いていて一発ごとに自分の中でイメージを固めつつあるみたい。

私とえーくん、三奈ちゃんはそのまま3人で授業で習いだした近接格闘術の訓練を始める。これがなかなか面白くて、投げ方によっては私だって投げ飛ばされたりするのだ。体育祭の例年の目玉であるトーナメント式のガチバトル。それは個性ありの対人戦なのでこういう練習も超大事、私たちは日が暮れるまで、特訓に明け暮れるのだった。

## 17話

「今日の特訓は二人とも来るの？デクくんは引き続き頑張ろうね」

「うん！今日もよろしくね、樫さん」

「当然！次こそは希械のハンマーを止めてやるよ！」

「あたしもー！仲間外れは寂しいよー！」

「4人とも、何のお話をしてるのかしら？」

「あ、梅雨ちゃん」

デクくんの特訓二日目、今日の特訓にくるの？と二人に聞いたら当然行く！というお返事が。まあ当たり前だよ、昨日の進捗としてはデクくんのワンフオーオールが発動速度が速くなるという結果に終わった。本題の威力の調節は95%までで止まってしまったけど、なんと今日デクくん朝聞いたらイメージを見つけたって聞いたからちよつと楽しみなんだ！

そんな話を4人でしているとこのメンバーで固まってるのが珍しいのか口元に指を当てた梅雨ちゃんが会話に入ってきた。実は、演習場を借り切ってデクくんの個性の特訓してるんだ。ついでに私とかの個性の特訓もしてるの、という話をする。梅雨ちゃんは遠慮がちに手をツンツンとしながら

「あの、それって私も邪魔したらダメかしら……？」

「来てくれるなら全然大丈夫だよ。お家とかに連絡しなくて大丈夫？」

「ちよつと確認してみるわね」

「すまない、昨日聞いて気になってはいたんだが……俺たちも参加していいだろうか？」

「私も！参加させて欲しいですっ！」

「あ、飯田くんに麗日さん。いいよいよおいで〜」

飯田くんに麗日さんも参加だね。家族に確認し終わったらしい梅雨ちゃんがホクホク顔で大丈夫だったわ、と戻ってきたので今日はまた増えたなあ、と思いつつもドアを開けて出ようとすると……なん

かめつちや人がいる!?え?なにこれ……外に出れない、と困惑していると  
同じ状況らしい後ろ側のドアを開けた峰田くんが

「んだよこれ!?外出れねえじゃん!」

「敵情視察だろザコ。意味ねえからどけモブども」

「あの、人の事モブっていうのよくない……」

「ああん!」

「ひっ!」

「希械ちゃん爆豪みたいなタイプに弱いよね。よしよし怖かったね  
」

教室の外にいたのは別クラスであろう人達の山で、廊下一杯に埋め  
尽くされるほどの数が集まっていた。爆豪くんは前から思ってたけ  
ど人の事モブって言っちゃダメって注意したんだけどあまりにも怖  
すぎて結局尻すぼみになってしまい、さらに睨みつけられて私は三奈  
ちゃんに慰められる始末、情けない。うう、爆豪くん怖すぎない?目  
の吊り上がり方がえげつないよお……

「ヒーロー科にいるやつってみんなこんなのかい?ちよつと幻滅  
しちゃうなあ。知ってる?体育祭のリザルトの話。結果によつては  
……ヒーロー科編入も検討してくれるって話を」

「知ってるわんなもん。んだけど今この時点で入試の時のためえと  
どれだけ違う?体育祭で下克上できんなら最初つからヒーロー科に  
おるわクソ隈野郎」

「っ……悪いけど、宣戦布告しに来たんだよ。調子乗つてると足元  
掬つちやうぞ……つてさ」

な、なんて大胆不敵な宣戦布告を……それに眉を動かさずに答える  
爆豪くんも豪胆だなあ……でも確かに爆豪くんの言うことにも一理  
ある。入試は確かに戦闘できる個性が有利なのは間違いないだけ  
ど、例えば葉隠さんとかがいい例で、ただ透明なだけでも素手でメカ  
は破壊できたし、何なら人助けという隠れた手段もあった。入学から  
ひと月立たないこの時点でヒーロー科に編入できるポテンシャルが  
あるなら、最初からヒーロー科にいるハズなんだ。

失礼ながら、大胆不敵な彼を右目で捉えると……うん、あまり運動

能力は高くないと思う。多分、このクラスの誰よりも体は鍛えられてはいない。だけどこんなな自信があるのだとするならば何かあるはず、例えば個性とか。使えば問答無用で相手をどうにかできる個性だからここまで余裕なのかも……？

「おいおいおいおい！隣のB組のもんだけどよお！ヴィランと戦ったつーからちつと話しようかと思ったら随分調子乗ってるじゃねーか！本番で恥ずかしいことになんぞー！」

「ちよー希械ちゃん急にどうしたの？」

「……さつきから聞いてたら、なんで私たちが調子に乗ってるだなんて決めつけてるの？力不足を痛感したばかりなんだよ、私たち」

「お、おお……!?!」

2連続で調子づいてるなんて言われたら流石に私としても言いたいことがある。調子に乗ってる？とんでもないよ。外から見たらヴィラン相手に誰も欠けることなく生き残った優秀なクラスに見えるかもしれない。でも、私は全力を尽くしても勝てなかったし、デクくんは怪我をした。他の人たちもヴィラン相手に大なり小なり戦って、思うところはみんなある。プロの世界を間近でみて、今の自分がどれだけ足りないかを頭を殴られた衝撃くらい、ガツンと知ったんだ。

近づいて、B組の男子生徒を見下ろす。いきなり私が出てきて見下ろされたもんだからB組の人は少し引き気味だ。私は確かに引つ込み思案であんまり自己主張が得意じゃないけど……言うべきことは言わないといけないというのはよくわかってるつもり。だから、彼にも言いたいことを言わせてもらう。

「調子に乗ってないよ、私たち全員。私たちはヴィラン相手に生き残って、自分の力のなさを知った。ヴィランの怖さを知った。だから、強くなる。体育祭に向けてみんな必死にやってるよ。あなたも、そうじゃないの？」

「確かに、そうだ。悪い、廊下で聞こえた言葉でついカツとなっちまった。すまん！謝らせてくれ！体育祭じゃお互い正々堂々力比べしようぜー！」

「うん、私も強い言葉使っちゃってごめんね」

B組の人は勢い良く頭を下げて、帰っていった。何となくえーくんと同じ感じの性格っぽかったからちゃんと言せば伝わるんじゃないかなって思ったし、その通りだった。爆豪くんは舌打ち一つして帰っちゃったけど、どうも普通科や他の人たちにも火を付けちゃったみたいで敵情視察らしい人たちはまばらに解散してしまった。

「樫ちゃん、かつこよかったわよ」

「……私大分調子に乗ったこと言ったんじゃないかな……？」

「さつき調子に乗ってねーって言ってたろ希槭。言いてーこと言ってくれてすつきりしたぜ俺は」

「違うの……みんなをバカにされた気がしてつい……」

全部終わった後で私は自分がとんでもない宣戦布告を逆にし返したんじゃないかと思いつき、顔が真っ赤になった後真っ青になるというムーヴをかましてえーくんに泣きついた。慰めてくれる梅雨ちゃんとかえーくんがあつたかいよお……他のみんなも私を慰めてくれるし、みんないい人だ……。特訓頑張らないと……。

「おお〜〜！ひろーい！」

「僕、ごほん。俺が思いつきり走っても問題ない広さだな……流石はオールマイトの演習場……」

「飯田ちゃんはインゲンニウムの使っているところを使えたりしないのかしら？」

「それは流石にフェアじゃないだろう」

「そう？使えるものは何でも使っているのよ。それも含めて実力だって、相澤先生なら言うわ」

ところ変わってオールマイト先生の演習場、ここに来るのは昨日ぶりだけどやっぱり広い、それは飯田くんに麗日さんも同じ感想なわけで、両手を広げて海だー！みたいになやってる麗日さんと感心しきりの飯田くんの対比がちよっと面白いかもしれない。それはともかくとして、これを聞かなきゃ始まらないや。

「それで、デクくんが固めたイメージってなにかな？」



「あ、うん。その、電子レンジに入れた卵……なんだ」

「……なるほど？電子レンジが個性で、卵がデクくん？」

「うん！そう！だから、卵が爆発しないイメージ！」

で、デクくんって感性が独特なのかな？それとも家にある電子レンジで思いついたのをそのままイメージしてきちゃったのかなあ？そんなわけで私は電子レンジを作ってゴトンと地面に落とす。卵はなけれど実物があればより分かりやすくなるはずなのだ。腕にコンセントの穴を作ってそこに電子レンジのケーブルを繋ぐ。

「電子レンジだと、一番わかりやすいのはワット数を減らすことだよな。デクくんのイメージの電子レンジ、どんな感じ？私が作ったこれであってる？」

「うん、こんな感じだよ。出力を減らすつてことは……」

「この摘まみ、ちよつと古い型にしたんだけどスイッチ操作よりわかりやすいかなって思っつて。個性を使う時に、この摘まみを思いつきり弱い方に入れるイメージでどうかな？」

「うん、やってみるよ」

「そうそう、その調子だよ。じゃあ頑張ろうね！みんなー！デクくんが使うから注意してねー！」

演習場の片隅で、しゃがみ込んだ私とデクくんがイメージについてあーでもないこーでもないと話しながら相談を済ませる。昨日と同じでチョバムガントレットをデクくんに着した私はHUDを右目に増設して全力解析でイメージを固めたデクくんを観察。スマッシュの気合の雄たけびと共に放たれた一撃は、かなりいいセンをついていたようで、私は喜んで飛びあがる。

「デクくんデクくん！凄いよ！昨日と全然違う！40%！大幅削減だよ！このまま行けばすぐに怪我しないレベルに持っていけるよ！」

「うん！今のは僕もかなり手応え感じたよ！これで行けるのなら……あとは……」

「あ、ブツブツ始まった。あとは試行回数だね！ガントレット置いておくから足りなくなつたら言つてね」

昨日は95%までしか下げられなかつたのに昨日の今日で40%

まで一気に減った。やはりイメージを掴むのはかなり大事なようだ。というのも私の個性も設計図とかそういうのをきちんと覚えて何を作るかイメージしないと変なものができるからね。メモリのおかげで設計図とかは詳細に覚えられるからあんまり気にしてないんだけど。よそ事に気を取られると愉快的なオブジェができる。GANRI KINEKOが出来た時はどうしようかと思っただよ。

「おーい希械。今日はアレやってくれ。次のステップに行きてえ」

「ホントにやるの？ハンマーで叩いてほしいだなんて」

「おう！オールマイトのアレ食らった後だと俺ももつと頑張らねえとツツ思っただよ！」

「うーん、そもそも私えーくんをぶつのも嫌なんだけど……」

「何するん？」

「えーくんの個性の特訓。見てれば分かるよ」

そして私はグレートメイスを作り出して構える。通常形態だから戦闘形態ほど威力はないけど全力パンチよりは威力あるよ？上半身を脱いだえーくんに相対した私が思いつき横に振りかぶつてえーくんにメイスをぶつける。全身硬化したえーくんにぶつけるとすさまじい音がして火花と一緒にえーくんが地面を擦って吹っ飛ぶ。10mくらい吹っ飛んでようやく止まった。

「ぶはっつっ！どうだ！行けるじゃねえか俺！」

「切島ちゃん、凄いわね。希械ちゃんいつもこんなことしてるのかしら？」

「うん、えーくんの個性って打たれば打たただけ硬くなってるの。今までは木刀とか、鎖とか、私が叩いてただけどついには私に満足できなくなったみたいで……」

「切島君、最低や」

「なんでだよ！いい方が悪いだらいまのは！」

「??何の話？」

「希械ちゃんはそのままでいてねー？」

「???」

なんだかよくわからないけどえーくんがめっちゃ責められてる。

えーくん何も悪くないのに。それはともかくとして、えーくんが遂に私のパンチを越えて武器の領域に足を踏み入れ始めちゃった。カチカチやくと硬化したえーくんをペしペし叩いて遊んでる麗日さんが癒しなんだけど、これ体育祭でえーくんに当たったらヤバいんじゃないかな？本当に戦闘形態で全力パンチすることになりそうで怖いと、私は若干戦々恐々としつつ特訓に精を出すのだった。

翌日以降も、八百万さんや耳郎さんをはじめとした人たちが特訓の話聞きつけて参加していき、いつの間にかクラスの半数がオールマイト先生の特訓場に集まって各々個性の特訓に励むようになっていた。ヒーロー基礎学の復習も兼ねた反省会も開かれるようになって益々みんな盛り上がっていた。そんな中、デクくんのワンフォーオール制御特訓もかなりいいとこまで行き、1週間でかなり集中する必要はあれども体が壊れない上限、5%でワンフォーオールを使えるようになってしまったのだ。凄いなデクくん、個性初めてってほんとかな？

そして2週間で制御能力はかなり上がったと思う。連続して別の部位に発動することができるようになり、チョバムガントレットなしでも手が折れるようなことはなくなった。初めて成功した時は涙の圧で地面に足が埋まるほど泣いてたんだよねデクくん。それがあまりにもヤバくて私珍しくおろおろして久しぶりに変なオブジェを作っちゃったよ。

2週間はあっという間に過ぎて、雄英体育祭の日がやってくるのだった。

## 18話

「緑谷、お前……オールマイトに目かけられてるよな」

「轟くん……？」

「別にそこ詮索するつもりはねエが……お前には勝つぞ」

体育祭の控室、開会式を間近に控えて飯田くんが全員に準備は終わったか尋ねていると、深呼吸したデクくんがいきなり、デクくんに向かってそう言ったのだ。私はエネルギー補給のために頬張ってたおにぎりを啜えた態勢のまま固まってしまったけど、どうやら言われたデクくんも思うところはあった様子で

「皆……他の科の人も本気で取り組んでるんだ……言われるまでもないよ、轟くん。僕も本気で勝ちに行く」

「……おお」

喉に詰まりそうだったおにぎりを何とか飲み下してバチバチに変な空気になるのか心配してた胸をなでおろす。体育祭前に変な空気になるのはちよつとごめんかな……そう思っていると今度は私の方にやってくる轟くん。ちよつと待って今私おにぎり頬張っててめっちゃかつこ悪いから！30秒待って！ごっくんするから！

「樫、お前もだ。今度は負けねえ」

「う、うん……もうちよつとタイミングとかない？」

「なんか問題あったか？」

ないと言えばないんだけど、私の口の中がいつぱいな問題とかがあったんだ。クラスのみんなからの生暖かい視線がいろんな意味で恥ずかしい。ええい、やけ食いで誤魔化そう……え？もう出番？そんな……私の3合おにぎり……。

『雄英体育祭1年ステージい！入場行進だぜエヴィバディ！どーせ目的はこいつらだろ!?ヴィランの襲撃をしのいだ超新星！1年A組だろお!』

「ま、マイク先生そんな他のクラスにケンカ売するような紹介しないでよお……」

「な、なあ？なんか緊張するぜ爆豪……」

「しねえよ。ただただアガるわ」

確かに私たちには話題になるものがあるというのは理解するけど、この体育祭は学校行事なので一クラスだけに肩入れするような紹介はやめて欲しいんだよプレゼントマイク先生……ひい……！他クラスからの視線が怖い……あと客席からちらほらとうお、でかい子だな、とか。パワーありそうでいいな、指名入れてみるかとか私に向かつての声が聞こえる。ひい、でかすぎて悪目立ちしてるよ私……！

「では！選手宣誓！選手代表！1—A爆豪勝己！」

他のクラスと一緒に入場した私たちが中央で整列すると今年の体育祭の1年ステージを担当するらしいとんでもない薄い煽情的なヒーロースーツを身にまとった先生、18禁ヒーロー、ミッドナイト先生が選手宣誓を宣言して爆豪くんを指名した。あれ？爆豪くん宣誓の練習してるの見たことないけど大丈夫なのかな……？

「爆豪なのか、あいつ入試1位だったしなあ」

「ヒーロー科の、入試な」

爆豪くんが壇上にかかる時に吐き捨てるように言われてポケットに手を入れて壇上まで上がる。その時にぼろっとでた瀬呂くんの言葉に目ざとく反応した隣の普通科の人の言葉が妙に引っかかった。何でこんなに敵意むき出しなんだろう、別に私たち貴方たちに何かやったわけじゃないよね？爆豪くんのこととは別にしても。なんだか気分悪いぞ……。

「せんせー、俺が一位になる」

「やると思った！」

「かつちゃん……」

「ふざけんなA組コラあ！」

「ヘドロヤロー！」

「せめて跳ねのいい踏み台になってくれや」

訂正、これなら嫌われるのかもしれないよね。とても納得できなかった、私はこの1年きつと別クラスのお友達は出来ないんだろうなあ、くすん。なーんで爆豪くんは自分から嫌われるようなことしちゃ

うかなあ！私たちまで巻き込んでもう！しらないよどうなっても！むー、これはちよつとこまったぞ。首を搔つ切るジェスチャーをして列に戻った爆豪くんといいでに私たちに強烈なヘイトが向いてるのを感じる。

「では早速第一種目よ！それはこれ！障害物競走！」

きよ、競争!?!どうしよう私そんなに早くない！いやその、早くする手段は沢山あるんだけど大体周りに場所がないと無理だよ！この人数で密着して競争するのはとっても不利だ！こ、こまった倍にこまった！うーん、あ！いいこと思いついた！

「ルールは単純！このスタジアムの外周4kmを走って先着順で決めるわ！当然わが校の売り文句の自由さを存分に発揮して、コースを守れば何したってかまわない！」

その言葉に私は、にんまりと笑った。コースさえ守ればルール違反がないというのは私にとって物凄く有難いルールだからだ。何してもいいということは、手段の豊富さが売りの私の独壇場……と言いたいところなんだけどこの種目と出来れば次の種目までは順位を抑えたい、んだよね。ただでさえ目立つ私がさらに目立てば対策を取られちゃうかもしれない。今回と次回は出来れば情報収集に徹したいかな。

位置につきまくりなさい、というミッドナイト先生のお言葉で、皆が正面のゲートに我先に殺到する中私は逆に最後尾に向かって逆走する。正直やる気がないらしい他の普通科の奇異の視線に少しだけ顔を隠して恥ずかしく思いつつも狙い通りの場所、最後尾から少し先に着くことが出来た。

『スターートオ!!!』

わあっ！と我先に入り口に殺到する1年生たち、A組のみんなはあつという間に消えちやつた。それに対して私は、動かない。動かさない。レースとはいえ強引に特攻できなくもないんだけど、まづ間違いなく誰かにけがをさせてしまう。なので密集地点は出来るだけ避けてみんながいなくなった時に一気にごぼう抜きする予定。

『おーつと注目の1ーA樫あ!!動かないぞどういことだあ!』

「もう、マイク先生も視野が広いんだな……もういいや。ホバーバイク、形成開始<sup>デイ</sup>」

私の下半身が変形して宙に浮き続ける流線型のバイクのような乗り物を作り出した。これはホバーバイク、I・アイランドというところで最近発見された反重力発生装置の理論を組み込んで私が作り出した空を飛ぶバイク、の試作品である。当然サポートアイテムの許可は取ってないし私には取れないので私専用です。足と切り離してそれに乗った私、アクセルを捻ってホバーバイクを加速させてゲートに突っ込んだ。

おそらく轟くんあたりに凍らせられたであろう足が凍り付いて進めない人たちの上空を飛んで、なんかドンパチ聞こえるエリアに到着する。目の前にあるのは……うわー、懐かしい。入試の時の大型ロボットが沢山！どんだけお金かけてるんだろう、というかお金ありませんぎじゃないかな？

『あーっ！そのバイクイカすな樫！今度の授業で乗せてくれよ！動かなかつたのは場所を確保するためか！』

『マイク、私情を入れるな。樫の強みは豊富な手段と圧倒的な科学力。そして、入試のロボ・インフェルノを木っ端微塵にした一人だ。障害が障害にならんぞ』

あ、相澤先生いるんだ……？解説？それはその、ぜったいマイク先生が引き込んだに違いない。だって相澤先生こういうの自分からやるわけがないって短い付き合いでもよくわかるもん。普通なら多分だけど、寝袋にくるまって寝てたんじゃないかな……？それはともかく、私はホバーバイクについてる機銃を連射して、ロボ・インフェルノを穴だらけにするけど……流石に数が多いし、他の人も危ないし……消し飛ばしちやおうかな。入試の時みたいに。

「ギガランチャー、形成開始<sup>デイ</sup>」

相澤先生に個性発動の邪魔になるので、と入れさせてもらったジャージの背中のファスナーを下ろす。背中から出たメカアームが巨大な2丁のバズーカに変わり、ホバーバイクを手放し運転した私がそれを両手に背負う。さらにメカアームは背中で大きな弾倉を形成

してそこから伸びたベルトリンクがバズーカにつながる。ギガラン  
チャー、端的に言えばベルト給弾式ロケット砲弾発射装置。その威力  
は押し知るべし、毎分100発のロケット弾のカーニバルなのだ。  
弾頭は破碎しないで燃焼して溶ける仕様になってるから爆発しても  
破片手榴弾みたいにはならない。

『うおおおおおっ!? 楪やり過ぎだろお!?』

『よく見るマイク、当ててるのはロボ・インフェルノの上部だけだ、  
下に被害がいかないようにしている。爆発半径を完全に知っていな  
いと不可能な行為、自分で武器を作る楪ならではの策だ』

ひよえ、なんか相澤先生がめっちゃ褒めてくれる嬉しい。それはと  
もなく、絨毯爆撃で目の前のロボットを粉碎した私はそのままギガラ  
ンチャーを投げ捨て、空っぽの弾倉を誰もいないところに放り捨てて  
ホバーバイクを唸らせる。上空10mほどを人の足よりも速く進む  
ホバーバイクのおかげで第二の障害、マイク先生の説明曰く、ザ・  
フォールにたどり着いた……んだけど……

「これ、今の私意味ないよね……」

空を飛んでる私には全く関係ない。どうやって掘ったんだらうと  
思えるほど深い円状の谷の中に足場とロープが張り巡らされている  
けど今の私はホバーバイクで地上から浮いている状態、これ便利だ  
な。通常の移動手段として候補に入れてもいいかも。少なくともメ  
ガ・ブースターで墜落するよりはまし。膝が悪くなるよ……私の膝は  
機械だけど、太ももまでは生身だからちよつと考えた方がいいのかな  
あ？

みんながロープに苦戦する中私は悠々と一直線に横切つてザ・  
フォールを抜ける。先頭集団が見えてきたかな……狙いは10位か  
ら20位の間。上位何組が上に行くつていうのは聞いてないんだけ  
ど流星に30人くらいは上に進むことができるだろうというやつだ。

『さあラストの障害！怒りのアフガン！一面の地雷原だああ!!』

「じ、地雷!? 流星にこれじゃ安定性に欠けるし……! そうだ! プー  
マバギー! 形成開始!」

地雷と相対するにはホバーバイクだと不安だ。というのもこのバ



イクは反重力を使って浮いているので早い話が麗日さんの個性を使っていい状態、まともに攻撃や爆風に当たるとひっくり返ったりするかもしれないんだ！だから私は誰もいない地面に突っ込んで再変形、どんな悪辣な地面でも進めてさらに横転にも備えたバギー、プーマバギーに変える。当然これも無許可！武装は機銃と連装ミサイル！使わないけど！

ブルウウロロオオン！と甲高いエンジン音をあげると同時に、私がいる前で大爆発が起こった、咄嗟に右目を出して爆発の先を見ると……デクくん！地雷を集めて大爆発させて……さらに使えるようになったワンフォーオールの5%で空中を蹴って加速させて、転がり込むように一番にスタジアムに戻った！

『誰が予想したあ！今一番にスタジアムに帰ってきた男！緑谷出久の存在をお！』

「すごいや、デクくん。本当に勝ち取ったね……！負けられないけど！」

クラッチを放してフルスロットル。アフガンを一文字に突っ切る。みんなは誰かが通った後があつて地雷が少ないエリアを選んでるけど私には関係ない。地雷原のど真ん中に突っ込んで、爆発で時折浮きながらもバギーをフルスロットルで動かし、誰かを轢かないように激しくハンドル操作をしながら怒りのアフガンを突っ切る。

『最後尾からごぼう抜きイイイ！1ーA樅希械！インテリジェンスを見せて9着でゴールだあ!!!』

『周りを気にしすぎるくらいがあるが、そのくらいがちょうどいい個性かもしれん。何にせよ、個性の使い方はうまい方だ……が、危険な運転は厳禁、あとで説教だ』

「そ、そんなあ……！だから最後まで残って巻き込まないように頑張ったのに……！」

「だーくっそギリギリ負けたか……希械おめー、後続爆発でビビりまくって一瞬止まったぞ」

「……素直にお説教受けます。ごめんなさい……」

私の後ろでゴールしたらしいえーくんにずびしと運転席の上から

チョップを貰って反省の弁を述べることにします。あ、先生これどこに置いたらいい？え？セメントス先生乗りたいの？いいですけど……はい、キーです。クラッチ重いんで気を付けてふあっ!?何という運転スキル!?すごい、ドリフトで別のゲートから出ていっちゃった……。

それはそうと、ぐいつと立ち上がって背中ofファスナーを閉じる。これでよし、ギガランチャー作った時から開けっ放しで背中丸見えだったもんね。うわ、峰田くんが八百万さんの背中に引っ付いて入って来た。これはわかるよ、サイテーだ。もう、しょうがないなあ峰田くんは。

「みーねーたくーん。今すぐ離れるのと私が引きはがすのどっちがいい？」

「いや、俺がやった方が早い」

「いぎやぎやぎや頭潰れる！潰れるから！離れるからやめうぎやあああああつ!？」

「あ、樫さん切島さん……ありがとうございます……」

よっほど不快だったのかぶんぷんと怒ってる八百万さん、私が選択肢を与えたんだけどそれよりも早くえーくんが手を硬化させて峰田くんをアイアンクロー、あまりの痛さに峰田くんは悲鳴を上げて八百万さんから離れた。その隙に私は金属板を作って八百万さんの周りに突き立てる。簡易的な更衣室の完成。天井作って中に電球付けて、よし。

「八百万さん、もぎもぎ引っ付いただろうし着替えちやいなよ。周りに見えないようにしたからね、服は作れるでしょ？」

「はい！ありがとうございます樫さん、何から何まで……」

「お友達だもん、ライブルでもこういうことはさせて欲しいな」

「はいっ！」

簡易更衣室の中からの元気なお返事に、ぷりぷりとしてる可愛い八百万さんを想像してしまって、私も笑顔になってしまおうのだった。

## 19話

「ようやく全員戻ってきたわね！予選通過は上位42人よ！落ちちゃった人も見せ場は残ってるから安心ね！」

『喜ベマスメディア！こっからが本選！お前らごのみの番狂わせオンパレードだぜえ！』

全員が戻ってきて、ミッドナイト先生が通過者の人数を発表する。それ以外の人たちは終わったなどと言いながらため息をついて退出してそれぞれクラスに用意された席まで行くために競技場を出ていく。上位42人はヒーロー科で……いや違う。青山くんが43位で脱落だ。お腹を押さえながらとぼとぼと出ていく青山くんを見送って私たちはミッドナイト先生に向き直る。

「本選の競技はこれ！騎馬戦よ！」

「騎馬戦……あれ？個人競技じゃないんだ」

「はいそこオダマリ！参加者は二人から四人のチームを組んでもらうわ！それで騎馬を作って頂戴！基本の騎馬戦とルールは一緒！ただし個性使用は自由！そして予選の順位に応じた持ちポイントがチームの合計点になる！ポイントの取り合いよ！」

ミッドナイト先生がビシツと鞭を鳴らすと後ろの投影画面に騎馬戦の文字が表示される。なるほど騎馬戦……また私不利だよお！だってさ！だってさ！いろんな意味で大きい私のこの大きさだともともに騎馬組めない！かといって上になんてなれるわけない！潰れるの必至！ふ、ふぐううう！こうなったら誰かをおんぶして私が全部やれば……！それじゃあ相方の子が可愛そう……あれ？私終わった？そんなあ……

「わ、樫さんどうしたん!?急にふにやふにやになって……」

「私……終わったかも……」

「え、ええ!？」

ぐんにやあくとその場に折りたたむように崩れ落ちる私を心配したお茶子ちゃんに弱音を漏らす。こ、このままでは誰も騎馬を組んでくれないかもしれない……！ノー！それだけは絶対にノー！仲間外

れになつて戦えもしないだなんて情けない真似できないよ！ふわ  
〜と心配して思わず触ってしまったらしいお茶子ちゃんの個性で  
浮く私、すぐに降ろしてくれたけど……

「そして1位の子に与えられるポイントは……1000万よ！」

「あ、これデクくんヤバイやつだ」

「上位の奴ほど狙われちゃう……下克上サバイバルよ！」

サーーツと絶望的な顔でたらたらと冷や汗を流すデクくとそれ  
を見つめる私含めた参加者全員、これ実質1位の奪い合いだあ……デ  
クくと目が合う……悲痛なくらいいっぱい飽和した涙が浮かぶ  
目に書いてあるのは「助けて」の文字。私は微笑んで……目を逸らし  
た。デクくんが驚愕する空気が伝わってくる。うん、私も組んであげ  
ても大丈夫だと思っただけ……むしろ私でいいのだろうか？バラ  
ンス酷いけど……

「あう……あう……どうしよ」

「ねえ」

「あ、はい!？」

声をかけられたので返事をして振り返る。そこにいたのは確か宣  
戦布告をしに来た普通科の人……？なんだか頭が霧がかかったよう  
な感じがする。意識が落ちる、瞬間に脳内にバチンと衝撃が走って元  
に戻った。……？あれ？どうして意識が急に落ちそうになった時の  
セーフティーが働いたんだろう？頭を振って向き直る。

「……??なにかな？」

「つ!?いや、アンタじゃない。悪かったね」

「えっ!?!ええ〜〜!?!」

普通科の人は何かに驚くような雰囲気を出したけどプイッと顔を  
背けて別の場所に行ってしまった。もう！なんなの〜！あつ!?!  
ちやんと騎馬組まなきや！えつと！誰かいなか〜!?!

「おい！クソメカ女！組め！」

「ば、爆豪くん!?!私でいいの!?!」

「何度も言わせんな！クソ髪のご指名だバアカ！俺の爆発に揺るが  
ねえ騎馬がいるんだよ！」

あたふたしてるとどうしたもんかどうしたもんかと焦りまくった私に後ろから爆発的なボイスが、片手をパチパチ言わせながら私に声をかけたのはなんとなんと爆豪くん。一番声をかけてこないと思ってた人なのであまりに驚いてしまった。後ろにはグツと親指を立てるえーくんと三奈ちゃんの姿が！ふ、ふたりとも……！

「ケツ！当然俺が騎手だ。文句あるか！後は好きにやれ！」

「あ、ありがとう3人ともくくく！私頑張るよくく！」

「ま、このメンバーなら一番互いの事知ってるからな！一番やりやすいだろ！」

「希械ちゃんかなり強いからねくく！爆豪が上なら勝ち確定だよ！」

「あたりめえだろ！俺が目指すのは完膚なきまでの1位だ！足引つ張つたらぶつ殺してやるからな！」

き、騎馬が組めた！持つべきものはやっぱり幼馴染と親友とクラスの爆発才能マン！……語呂がちよつと悪いけど割と完璧な布陣だと思う。基本的に爆豪くんは接近戦、一部中距離戦でかなりの実力がある、と思う。戦闘訓練の様子を見る限り好みなのは接近戦だ、なら私たちがそうできるように調整すればいい。

「とりあえず俺が前だな！どう組む？」

「私、背が高いから背中から別のアーム出して両手フリーにするよ。遠距離攻撃は私が防ぐから」

「私はトラップかな！酸で地面を転ばない程度に滑りやすくすればチャンス出るよね！」

「勝手にしろ！んだけど……まずは1000万取ってからだ」

「15分経過よ！騎馬を組みなさい！」

ミッドナイト先生の宣言で私たちは騎馬を組み始める。前がえーくん、右後ろが三奈ちゃん。左後ろが私。私は背の関係上騎馬がいびつになってしまうので二人の身長に合わせた位置にアームを増設してそれで騎馬を組んだ。ついでにそこから金属製の鎧も作って爆豪くんが踏ん張りやすいように努める。私の両手はフリー、銃器を腕に作って遠距離攻撃への防御を行う予定だ。あと万が一爆豪くんの

フォローが必要になった時のために開けといたほうがよさそう。

「爆豪くん調整必要なら今言つて！すぐ対応するから！」

「左もつと下げる、んで踵部分に角度つけやがれ」

「ん、これでいい？」

「赤点だクソメカ女」

「……これ合格つてことでいいんだよね？」

「爆豪ツンデレ〜」

「るっせえてめえらから死にてえか！」

爆豪くんの言葉を理解するのはちよつと大変だけど、指示は割と的確に改善点を指摘してくれるのでかなり頼りになりそうだ。騎馬戦開始のカウントダウンが始まる。ちよつと緊張して来たけど、大丈夫。なぜならえーくんと三奈ちゃんの二人がいるから。この3人チームなら私たちは……無敵だ。

「スターート!!!」

「クソメカ女！クソデクの動き止めろ！」

「櫟つて呼んでよお……」

開幕から飛んだ指示にすぐに対応する。スタングレネードを体内で製造して腕に発射口を設置、ポンツ！ポンツ！と若干間抜けな音を立てて発射されたスタングレネードがデクくんどころか全ての騎馬の周りに転がって、炸裂する。一瞬の閃光、それに完璧に対応したのは私が発射してすぐ狙いが自分だと気づいたデクくん、常闇くん、発目さん、麗日さんの騎馬、轟くん、ものを見て創造を始めた八百万さん、飯田くん、上鳴くんの二つの騎馬だけ。そして爆豪くんは、腕から爆破を発して空を飛び、デクくんに襲い掛かった！

「死ねえクソデクウ！んなっ!？」

「防げ！ダークシャドウ！」

「やつぱり櫟さんの万能性は八百万さんと並んで脅威……！早く離れないと！」

デクくんの前騎馬にいる常闇くんのお腹から出てきた黒い闇の塊みたいな生き物が、爆豪くんの攻撃を防いだ。私はワイヤーを発射して爆豪くんを巻き付けて巻き戻し、騎馬の上に戻す。あれはありなの

かと文句が出るがミッドナイト先生はテクニカルだからありとの声。じゃあもうちよつと踏み込んでも大丈夫そうかな……？

「んだありや……！」

「……常闇くんの個性、もう一人敵が増えたと思った方がいいかも。あの騎馬の誰よりも手強い……」

「関係ねえ！取りに行くだけだ！」

「単純なんだよ、A組っ!？」

「……私いるのに後ろからとりに来てよかったの？」

三奈ちゃんの横からかすめ取る様に爆豪くんのハチマキに手を伸ばしたB組の人の手首を掴んで止める。途中で空気が固まった壁みたいなものがあつたから力を強めてたたき壊した。当然掴む力はかなり力加減に気を付けたけど。確かに爆豪くんはデクくんで頭がいつぱいかもしれないけど、下の騎馬の私たちはそうでもない。少なくとも、爆豪くんがハチマキを守り切れば上位に行けるからね。

「ぐっ！放しなよ！見た目通り随分と力が強いね、まるでゴリラだ！」

「おい！てめえ！それは」

「いいよ、放してあげる」

カッチーンときた。B組の人の余りの言い草にちよつと、私は怒つた。言うに事欠いてゴリラって！みてよ私の手機械じゃん！あんなに毛深くないもん！三奈ちゃんもえーくんも私がそう言われたのが腹に据えかねたらしく言い返してくれるけど私が怒ってるのを察して黙った。私は肩から腕を自切してその人を解放する。自切した手はその子の手についたままだ。手の部分はサークル状に変形して手錠のようになり、そのB組の人は片手に70kgを超えるおもりを付ける形になった。

「ほら、放したよ？爆豪くん……取りやすいでしょ？」

「ああ、よくやったメカ女あ！」

「楪だつてば！」

自分のハチマキを取ろうとした、というのがかなり怒りポイントだったらしい爆豪くんは特徴的な三白眼をさらに釣り上げてヒート

アップする。私たちの上から飛んだ爆豪くんは途中の空気の壁を全て爆破でたたき割って、挑発してきたB組の男の子は死ねえといういつもの爆豪くんの叫びと共にポイントが入った鉢巻を全てぶんどられる。今一度ワイヤーで回収した爆豪くんの目の先にあるのは……デクくんだけだ。

「全員、飛ぶよ！上鳴くんから放電が来る！」

「爆豪！掴まってるよ！」

「希械ちゃんおねがいっ！」

「指図すんじゃねえ！」

右目からのデータで高電圧の気配がある。ここで固められたら厄介だ、私は増えたアームで全員をひつつかんで持ちあげる。さらに足にジェットエンジンを増設してジャンプと同時にブーストして空中に浮かんだ。意外なことに爆豪くんが爆発でバランスを取ってアシストしてくれる。その隙にとろうとしてくる人もいるけど甘い、噴射熱が邪魔になって近づけないからだ。そして、上鳴くんの電撃が来た。

「このままタイムアップまで耐えるって方法もあるぜ爆豪!？」

「クソ下らねえ冗談はやめろクソ髪！俺がとるのは完膚なきまでの一位だ！」

「だって、希械ちゃん」

「じゃ、取りに行こう！」

「だから指図するんじゃねえ！」

既に時間は3分の1を切ってしまった。マイク先生のちよつとだけやかましい実況を頭の隅に追いやってどうやったらかこの状況からデクくんが持つてる1000万を奪えるか思案する。言うまでもないけど、私と一緒に特訓したワンフォーオール、たとえそれが一瞬でもどの部位で使ってくるかわからない以上迂闊に近寄れない。麗日さんのゼログラビティも常闇くんのダークシャドウも、そして発目さんのサポートアイテムも厄介だ。何をしてくるかが分からない。

「悪いが、あとは引かねえ。他は我慢しろ」

「しまっ!?!着地を！」



やられた。轟くんは私たちが電撃を避けることは予想してたんだ。避けた上で、氷結を打ってきた。私とえーくんはすぐに足の氷結を砕いたけど、パワー型じゃない三奈ちゃんはそうはいかない。凍り付いてしまった足を動かさずにいる。酸で水を溶かさなきゃまずい。強引に砕いたら三奈ちゃんの足も大変なことになる。それを理解してるのか爆豪くんは無茶なことには言わずに歯ぎしりだけして待ちの体勢に入った。

『あーっつと残り1分にしてえ！轟氷結でサシの状態を作ったあ!!』

「ごめん溶けた!どうする!?!」

「時間がねえ!おいクソ髪!あのクソ氷突っ込んで割れるよなあ!?!」

「当然!3人でやるぞ!希槭、芦戸!」

「まっかせて〜!酸で道を作る!」

「私が推進力っ!」

「俺が!破壊力う!」

時間がないので、突貫作業だけど!足が自由になった三奈ちゃんが名誉挽回とばかりに前方のフィールドを酸で溶かして滑りやすくしてくれる。私はそこで背中にはバーニアを作って点火し、轟くんが作った氷結に向かって一直線に加速して突っ込む。えーくんは全身を硬化して推進力をそのまま破壊力に転換して氷結に突っ込む。爆豪くんはまた意外にも突入のタイミングに合わせて両手で爆破を放っていきすぎないように勢いを殺しつつ氷結を破碎してくれる。

『あく!ここで爆豪チーム!氷結ぶっ壊して侵入だあ!』

「クソデク!1000万よこしやがれ!」

「違う!爆豪くん1000万は轟くんが!」

電光掲示板をチラ見するとポイントが変動している。両手にワンフォーオールを纏ったデクくとデクくんに飛びかかろうとして途中で爆破で向きを変えた爆豪くんが同時に空中で轟くんに飛びかかる。八百万さんが創造しようとした何かを私は腕を変形させた機関銃で潰した。この攻防で終わりだ、どうなる!?!

『しゅ~~~~りよ~~~~!! 1位は轟チーーム!!』

……! やられた。爆豪くんが轟くんを奪われた瞬間に、デクくんは標的を爆豪くんに変更して、ハチマキを一つ奪っていった。爆豪くんはそれに気づいて片手で防御しながらも、轟くんが持ってたハチマキの内二つをもぎ取った。だけど轟くんの方が一枚上手で、1000万は一番下に隠されており、爆豪くんの手は今一步届かなかったのだ。

クソが、という爆豪くんが地面を殴りつける音を聞きながらも、2位通過ということを知った私たち3人は、笑って頷くのであった。あ、B組の人につけた手を回収しないと

## 20話

「午後の応援合戦だけだよ、みんなあの格好でチアリーダーするらしいぜ」

「……そうなんだ？私の入る服あるかな？」

「いや樫さ、こいつらの言ってることあつさり信じすぎでしょ」

騎馬戦が終わってお昼休憩、さすがに今日は体力を温存したかったのでお弁当はなし。おにぎりはおかあさんが握ってくれたものだけ。そんなわけでなんと今日は女子全員で集まって女子会的なお昼を楽しんでいるのだ。私のお盆の上に載った特大のかつ丼が目を引きかもしれないけど、今回は私、恥を捨てるのでがつつり食べます！例年通りならここからガチバトルがあるはずなので！

実は初体験の学食なんだよね。オールマイト先生に突撃した時はお昼食べ損ねたし。午後の基礎学大変だったなあ……パクつとスプーンでかつ丼を食べてみると、すっごい美味しい！流石はランチラッシュ！災害現場での炊き出しが主な活動だけど、逆にその料理が食べたいと被災者以外まで集まっちゃうだけあるなあ。それはそうと、上鳴さんと峰田くん言葉、本当かな？

「まー信じるも信じねえも自由だけどよ、相澤先生の言伝だからな」  
「オイラたちも飯食うからこれでなく」

「……相澤先生からの連絡なんだ？」

「じゃ、じゃあチアやらないとダメなん？」

「えー！ヤダよウチ！」

「いーじゃん！おもしろそー！私透明だから目立てるの好き！」

「チア服ないのかな？ヤオモモだせる？あれ」

「え、ええ。出せはしますけど……」

「ケロ、しょうがないわね。学校行事だもの」

上鳴さんと峰田くんが生真面目な顔で手短に応援合戦はチアの服でという相澤先生の言伝を伝えてくれる。伝えてきたのがこの二人だというのがいまち信用できないんだけど、相澤先生だったらたまま通りがかった二人に言伝を頼む可能性は十分にある。さらには

峰田くんが一切セクハラじみたことをしないで去っていったのが情報  
の信ぴょう性を高めてるし……着なきやだめなのかあ。チア

「私、手足機械だからあんまりこういう場で出したくないんだ……  
誰も見てうれしくないと思うんだけど……」

「その発育の大敗北があつてその言い草は看過できないんじゃないんじやよ  
械ちゃん！」

「ひやつ!?も、揉まないで……」

「ほんと……すごいよね……」

な、なんか耳郎さんの顔というか目が怖い!?ち、違うんです手足と  
いう生身と一緒に成長していく部分がない私の体は何故かそこを成  
長させただけなんです!あれ?そう考えたらこれって贅肉なのかな  
……?だ、ダイエツトしなきや!明日から!私は半分平らげた特大カ  
ツ井を見ながらそう決意するのだった。

『へいーA組イ!!!なんだそのサービスはあ!!!』

「上鳴くんと峰田くん!騙したんだね!きらい!」

「上鳴さんに峰田さん!騙したのですね!!」

「うわ、希械ちゃんからきらいって言葉がでた。しばらく口聞いて  
もらえないねあの二人」

お昼休憩を終えた私たちは応援合戦のためにチア服に着替えて競  
技場に戻ってきた。けど、全員でポンポン持って並んだタイミングで  
騙されたことを知った。折角八百万さんがわざわざ創造でチア服出  
して、着替えて、それでやらなきやダメなのッて言いながら出てきた  
らこれだよ!もう私体育祭の間二人と口きかないから!もう!

「デッツ!?!」

「でつつつか」

「キタコレ」

『へい観客う!うちの生徒を邪な目でみるのは厳禁だぜえ!!』

ほら〜、ヒーロースーツなら必要だから別に出していいんだけど、  
必要じゃないならこんな大きいもの出してもしょうがないんだ  
よ!変に悪目立ちしちゃうし注目だつて集めちゃう!は、恥ずかし〜

く！恥は捨てたっていうけどこの類の恥はまだ持ってないといけな  
いやつだと思おうの！

「どうしてあの二人の策略にまんまと騙されてしまいますの私……  
！」

「アホだろあいつら……そこまでしてみたいの？」

「まあ本選まで時間開いちやうし……いいんじゃないやつたろ！」

「透ちゃん好きね」

葉隠さんと三奈ちゃんは割と乗り気みたい。私はぼんぼんで顔を  
隠しつつ小さくふりふりと動かすしかできない。みんなやるから恥  
ずかしくないと思ってたけどそれが私たちだけなら恥ずかしさを忘  
れるなんて無理だよーう、うーうー！！

「や、やつたろうじゃないの！」

「お、希械ちゃんがヤケクソだ」

「むおおおおー！！」

色々メーカーが振り切れた私は葉隠さんと三奈ちゃんに習って大  
きく手を振りながら観客の前に飛び出すのだった。あつ!? 下着の  
ホックが……！跳ねすぎたあ……！

「わ、忘れてください……」

「無理やねえ」

「無理ですわ」

「無理かなー！」

「か、かくなるうえはこの頭を吹き飛ばして全てに片を……」

「わーちよつとストップストップ！体育祭でスプラッタはだめ！」

えー、懺悔します。わたくしこと樫希械は恥ずかしさを忘れる為に  
全力でチアリーダーイングを行い、結果的に後になってから激しく後悔  
をして黒歴史を作りました。誰かレクリエーション前の私の手足を  
吹き飛ばしてでも止めて欲しかったです。意外と私みたいな体にも  
ニツチな需要があると知りました。知りたくなかったです助けて。  
あと峰田くんと上鳴くんはきらい。

「いつそ自爆を……」

「もう怖いことばっかいわないの！ほら！本選始まるんだから頑張る！ね!？」

「それよりもほら！試合始まるから！」

「えう……デクくんの出番だあ……」

「半泣きだ……どんだけ恥ずかしがってるのよ……」

ほぼ泣いてる私がクラスに用意された客席からタイムマン用にセメントス先生が作ったステージを見る。黒歴史の前に引いたくじにより体育祭の最大注目競技であるガチバトルの組み合わせが決まっている。尾白くんとB組の庄田くんの二人は辞退をするって決めたらしいけど、同じく心操くんのチームだった瀬呂くんは出るつもりみたい。

組み合わせとしては1試合目からデクくんと心操くん、轟くんと瀬呂くん、上鳴くんと三奈ちゃん、飯田くんと発目さん、私とB組の塩崎さん、えーくんとB組の鉄哲くん、常闇くんと八百万さん、麗日さんと爆豪くんの順番。私、勝つたらえーくんと戦うかもしれないんだ……えーくんが負ける、という可能性もあるけど。えーくんを真正面から倒せる人はなかないと思う。爆豪くんの持久戦、デクくんの30%以上、轟くんの全身凍結……少なくともこれくらいはいると思う。

「心操……頼むよ緑谷……」

「尾白くん、その……辞退したのって心操くんと関係あるの？」

「あ、樫さん……うん、あいつの声に答えたら意識が飛んで、気づいたら結果発表の所だった。洗脳、されたとしか思えないんだ」

「精神系の個性なんだ……道理で私に声をかけた後に驚いたわけだね。かかってなかったから驚いたんだ」

「樫さんはどうやって彼の個性から抜け出したの？」

「えっと、ほぼ偶然なんだけど……私、大きくて重いでしょう？変なタイミングで気絶とかしちゃうと危ないから……急に意識が落ちると再起動がかかる様になってるの。意識が覚醒したから効かなかったんじゃないかな？」

「へえ……不便じゃないのかい？」

「オンオフは効くんだよ。意識的にやつてることだから。授業中とかはずっとオンだけどね、今回みたいな行事でも。私が倒れた時運べるのは……えーくんぐらいだから」

これは、中学校の時に炎天下での体育でオーバーヒートを起こして倒れてしまった時、私を誰も運ばなくて救急車が来るまで放置されざるを得なくなったことがあった時にこれから必要かもと思って作ったプログラムなんだ。結局そのあとからは自分でも気を付けるようになって同じことは起こってないけど……人生何があるか分からないね。

『さあ結局これだぜガチンコ勝負！成績の割になんだその顔！ヒーロー科緑谷出久！ヴァアアアアサス！どこからやってきたダークホース！普通科心操人使い！』

「うそっ……デクくん、かかっちゃった……！」

「ああ、もう！言ったのに！」

壇上上がった二人、試合開始のゴングと同時に一步前に進んだデクくんが完全に動きを止めた。ここからじや遠すぎて読唇は難しいんだけど心操くんの口元が動いてたから何かしらの言葉がトリガーになってデクくんの精神に作用した、んだと思う。尾白くん曰くおそらく言葉に返答することが条件……凄い個性だ。その気になれば戦闘全てを無血で終わらせられるし、ヴィラン相手にはめっぽう頼りになる個性、宣戦布告だってしたくなるわけだよ。

一步、また一步と自分から外に歩いて行ってしまおうデクくん、このままじゃ場外アウトで負けちゃう……！最後の一步、というところでデクくんを中心にすさまじい衝撃波と突風が駆け抜けた。思わず立ち上がって手すりまで走ってしまう。デクくん、ワンフオーオールを暴発させた……！手段がない、とは言ってもあれじゃ指が……！

そこからは速攻だった。デクくんは反転するとワンフオーオールを両脚に発動して一足飛びにジャンプ、爆豪くんの動きを参考したらしい飛び膝蹴りを心操くんの胸ど真ん中に叩き込んだのだ。何かを言おうとする心操くんの顔に必死な色が色濃く出てくる。そこで分

かった、言いたくないんだきつと。どんなことを言ってるかは分からないけど、挑発して返事を言わせようとしているんだと思う。

その挑発にはきつと、ひどい言葉も含まれているんだろう。心操くんはそれを言いたくない、だけど勝つためにはひどい言葉を使わなければいけない。それでも彼は、勝ちたいんだ。ヒーロー科に入つてヒーローになるために。だからデクくんも、彼を真正面から打ち倒すために、今できる全力のワンフォーオールを使うことにしたらしい。

せき込んで膝をついた心操くんが何とか立ち上がる。けどデクくんは既に準備を終えて、折れてない右腕でのスマッシュを彼の顔に思いつきりぶつけた。それが決定打となり、吹き飛んだ心操くんは場外に落ちる。意識が飛ぶほどじゃなかったらしい心操くんが呆然と座り込む中、デクくんはステージから駆け降りて、彼に手を差し伸べた。

心操くんは一瞬だけ悔しそうな顔になったけど、すぐにそれを引つ込めてデクくんの手を借りて立ち上がる。そして、普通科を中心として拍手が彼に降り注いだ。プロヒーローからの賞賛の言葉もちらほらとあるが、それよりも大きいのは普通科の人たちから心操くんへの誉め言葉とエールの量。きつと彼がヒーロー科に行きたいということとはクラスメイトにとつては周知の事実で、みんな応援してたんだと思う。ひどい言葉は上っ面だけで、本当はみんなに慕われているいい人なんだね、心操くんは。

『第二試合！強すぎイケメンプリンス！轟焦凍！ヴァアアアサス！優秀だけど地味！地味だけど優秀！瀬呂範太！』

二試合目、デクくんとか心操くんがフィールドを入れ替わる様に同じクラスの二人が姿を現した。轟くんの氷結と炎……炎の方は授業でも氷を溶かす以外で使ったのは見たことないけどかなり強い人だ。特に熱は私の天敵なので戦うなら対策必須だけど……なんで彼は氷結ばかりこだわるんだろう……？

一方瀬呂くんの個性、テープは遠距離向けの個性で、肘からテープを射出し、巻き戻したりもできる便利な個性だ。直接的な攻撃力はないけど拘束力に非常に長けている。もしも私が彼の個性で轟くんに挑むとしたら速攻をかけての場外狙いが一番可能性が高いとおもっ



ているけど……。

『試合開始い!』

パキイン……と音がして観客席の眼前に巨大な氷山が出現した。轟くんの氷結だ……試合は一瞬だったけど、やっぱりテープで拘束したのちに場外に出そうとした瀬呂くん、轟くんは拘束されつつも氷結ですべて凍り付かせて終わらせた。ビル一棟丸ごと凍らせた時に思ったけどなんて出力なんだろう。

会場はドームだ。そのドームの半分を埋め尽くす氷山、もしもあれが最大規模じゃないとしたらいくら私でも強引に真正面から迎撃するのは難しい。入試でも実践したけど、質量は正義なんだ。私の馬力がいくら強かろうと馬力以上の重さを被せられたらどうしようもない。流石に氷山は動かすことは……このサイズならできなくもないけどちよつときついのは変わらない。

「すごいね、轟くんは」

「あーやだやだ、才能マンだねこりゃ」

「……」

「え!?なに無視!?!」

「上鳴、希械ちゃんホントに怒ってるから暫く口きいてもらえないと思うよ?」

「えっ!?ちよつと待つて無視は流石に心にくる!樫みてーな奴だと特に!」

「樫ちゃん、優しいから怒らせたら多分その分怖いと思うわ。無視だけでよかったわね上鳴ちゃん」

謝ってくれないから許してあげないもんね。峰田くんにもベーッと舌を出して私は次の試合の準備に向かうために席を立った三奈ちゃんを応援するのだった。上鳴くんも同じ試合だけど、私は三奈ちゃんの親友なので三奈ちゃんを鼻肩することになります。でも、クラスメイトとしてちよつぴりは応援してあげる。三奈ちゃんの次あたり。

## 21話

『第4試合！見事なアッパーカットを決めて芦戸が勝利だあ！』

「三奈ちゃんさすが！」

「樫ちゃん、嬉しそうね」

「嬉しいよ！上鳴くんは残念だったけど……あ、そろそろ行かないきゃ」

三奈ちゃんと上鳴くんの試合は一瞬だった。開幕の上鳴くんの全力放電を、前方に酸を噴射し続けて防いだ三奈ちゃんがアホになってしまった上鳴くんにアッパーカットを決めて勝利したんだ！三奈ちゃんの勝利に飛びあがって梅雨ちゃんと喜んだ私も、出番が近いので試合に備える為に控室に向かった。

控室のテレビに映される映像だと、発目さんのペースに振り回される飯田くんが、彼女が自分から負けを認めたので勝利したところだった。どうも釈然としない顔をしている飯田くんに苦笑いしながら私は控室を出て、会場に向かう。途中ですれ違った飯田くんは無言のサムズアップをしたら微妙な顔をされたので急いですれ違いました。バッドコミュニケーション……

『さあ第5試合！男のロマン詰め合わせ欲張りセット！樫希械！ヴアアアアサス！B組からの刺客！キレイな顔して棘があるかあ！？塩崎茨！』

「申し立て失礼します。刺客とはどういう意味でしょうか？私はここに勝利を目指してきただけであり……」

『あ、ああごめん！』

「え、と塩崎さん？よろしくお願いします」

「はい、樫さんですね。お互い正々堂々と良い試合をしましょう」

マイク先生のキャッチコピーに訥々と突っ込んで謝らせた塩崎さん。か、変わった人なのかな？まあ、マイク先生に好き勝手言われるのは今に始まったことじゃないと思うから私とか全然気にしなくなっちゃった。普段の手足の私だけど、これは舐めるとかそんなんじゃないで、単純に膂力過剰だから。ヒーロースーツみたいな防護服

を着てない状態で、指先がナイフより鋭い戦闘形態の手があたりでもしたら……割とマジでスプラッタになっちゃう。こっちの方がまだまし。何だったら小回りはこっちの方が効くくらい。

『試合開始い!!!』

「先手必勝!」

「アロンダイト、形成開始<sup>レ</sup>デ<sup>イ</sup>」

塩崎さんの文字通り茨のような髪が伸びて四方八方から私に迫る。私は腕を変形させて、大型の刀剣型兵器を作り出し、薙ぎ払った。アロンダイト、私の身の丈ほどの大剣で、一番の特徴は刀身の刃部分にレーザーが走っていて、ものを熱量で焼き切るという構造になっていること。レーザー兵器はすでに実用化されているので、話には聞いているかもしれないけど。

巨大な金属の塊をレーザー付きで振り回す私。どうやら塩崎さんの茨は切り離しても動くらしい。なので脅威にならないよう振る速度を速めて短くしてしまう。水分が含まれてるからか燃え上がりはしないらしい。だけど、物量で勝負するなら私もそういうの沢山あるんだよね。

「くっ……流石に一筋縄ではいきませんね」

「貴方も、強いね」

お互いに短く褒め合って、私は一旦距離を取る。場所はラインぎりぎりだけど、これを使う時は広範囲攻撃だから、相手が離れれば離れるほどいい。ガチャガチャ、チャリチャリと音を立てて私の手がジャージを破って変形し、出来たそれを迫る茨をアロンダイトで薙ぎ払いつつ肩に担いで構える。

「ナンバーナツシング! 形成開始<sup>レ</sup>デ<sup>イ</sup>」

出来たのは超大型のミサイルランチャー、に見える物体。実際は別物なんだけど。狙いは塩崎さんの周り全て! 絶対に当てないようにコントロールする! ガチャン! とトリガーを引くとナンバーナツシングから無数の砲台型衛星端末が飛び出て地面をターゲットイングする。20数個が全て私と塩崎さん以外の地面にガイドレーザーでターゲットイングを済ませる。塩崎さんは何があるか分からないので

迂闊に動けない。

『あああああゝゝゝ！これは流石にやり過ぎだろ樫ア！派手過ぎだぜ！』

『よく見ろ、外してる。動きを止めるのが目的だ。当てに行ったら除籍したがな』

上空から降り注ぐのは極太のレーザーの雨、塩崎さんは襲い掛かってくる熱を茨で防ぐ。予想通り！視界がふさがった！ステージが熱で溶けて移動もできない。私はアロンドイトとナンバーナツシングを捨てて、全力で壁を作り出す。ステージを横に横断する金属製の大壁。そこにある取っ手を掴んで私はパワーを最大限に高めて、その壁を押し前へ移動する。

『おっと逃げ場が消えたあ！迫りくる壁！これを攻略するには……押し合いで勝つしかねええええ！』

『なるほどな、樫の一番得意なこと……真っ向からの力比べに相手を落とした』

「く、つくう！なんと、力……！」

壁越しに伝わる塩崎さんの抵抗、あの茨はかなりのパワーがあるとみていい。なら……私はここで初めて手足を戦闘形態に変形させる。たまった熱を戦闘形態の手足から放熱させて、さらに力を籠める。取っ手を握りつぶす程のパワーを受けた塩崎さんは、一気に後ろに押されて、場外のラインを超える。私の勝ちだ。

『ヒロイン対決！勝利したのはメカヒロイン！樫希械だああ!!!』

「……おめでとうございます。貴方の次の勝利を応援してますね」

「ありがとう、塩崎さん。とつても強かったね」

「ふふ、あなたこそ」

メカアームで繋げてたので壁を再吸収し終えて塩崎さんと相対する。すつと手を出してくれた塩崎さんに少しかがんで普段状態に戻した手で答える。いつの間にか会場にやってきていた発目さんを始めとしたサポート科の面々が私がポイしたアロンドイトとナンバーナツシングを掲げて喜んでただけど……あの、返して？え？だからその、返してください……パワーローダー先生？暫く貸して欲し

い？私の秘蔵技術なんです……ダメですう……返してええ……

「ひどい目に会いましたあ……」

「大丈夫です。これはきつと試練ですから……」

涙目になって全部取り返して破砕機に放り込んだ私を不憫に思ったのか慰めてくれる塩崎さん、いい人だ……観客席の位置はA組とB組で隣同士なので一緒に帰って少しだけ仲良くなれた気がする。そして私の次の試合は、えーくんと鉄哲くんのはずだ。えーくんに勝つて欲しいから思いつきり応援しないと……！

『さあ行ってみようぜ第6試合！硬化の男！個性だだ被り！切島鋭児郎！ヴァアアアサス！鋼の男！こつちも個性だだ被り！鉄哲徹鐵！硬い男同士の対決だあ！』

「えーくーん！頑張つてー！」

「切島さあ……応援されちゃつてさあ……！」

「峰田ちゃん、顔がすごいことになってるわよ」

「だつてよお！なんなんだよこの扱いの違い！」

「日頃の行い……」

「常闇はいてえところついてくるな！」

えーくんが壇上上がった時に大声出して応援する。三奈ちゃんに行くまえに思いつきりハグして応援したけどえーくんとはすれ違いになつちやつたからここで思いつきり！心操くんの例もあるから一応何言ってるか聞こえるようにうさ耳型の收音機を頭の上に作つて八百万さんがチアの時作つたぽんぽんを振り回して応援する。

えーくんは私の声が聞こえたのか分かんないけど、こつちの観客席をちらりと見て、グツと腕をあげてガツポーズだけした。気合いが乗ってるんだね、えーくん……！峰田くんはそのしぐさにさらに文句を言い募ってるけどとりあえず一発頭をはいたら黙つたのでよしとする。間違えて椅子殴つて潰しちやつたのが効いたかな？えーくんを悪く言うのは許しません。

「ただ被りだつてよ。マイク先生もうまいこと言うもんだぜ、な？」

「お前は硬化、俺は鋼……方向性は同じなのはそうだろうけどな」

「んじやあよ……やることは決まつてるよな？」

「わかってるじゃねえか！」

二人の会話を收音機が拾う。多分私も分かった、二人とも真正面から行く気だ。マイク先生の試合開始の言葉と共に、二人が同時に個性を使う。全身鈍色になる鉄哲くんに対して、色は変わらずとも岩のような質感に変わったことが分かるえーくん、二人が同時に硬く拳を握った。

「先手は譲るぜ、鉄哲」

「お言葉に甘えさせてもらわあ！ウラアツ!!!」

硬いもの同士が激しくぶつかる音を立てて鉄哲の鋼の拳がえーくんの顔ど真ん中を捉える。が、硬化したえーくんは全く身じろぎすることなくノーガードで受け切った。たたらすら踏んでいない、鉄哲くんはどうやらそこで一気に警戒度を引き上げたらしい。首をゴキリと動かしたえーくんは

「次は俺の番だぜ。顔面だ、ガードしろよ」

「来おい！」

「フンツ!!!」

『き、切島ワンパンで鉄哲をリングに沈めたああ!!』

宣言通り、えーくんは顔面ど真ん中に向かって硬化した拳をぶち当てた。鉄哲くんのガードをもともせず……いや、ガードの上からねじ込まれたえーくんのパンチは鉄哲くんの鋼の腕に罅を入れるだけに飽き足らず。振りぬかれた拳が彼をコンクリートに沈め、蜘蛛の巣状の罅が鉄哲くんを中心に広がるほどの威力を見せた。会場にはパワー差へのどよめきが静かに広がっていく……やっぱりえーくんは強いね。

「こいつ……一撃で俺のスタイルを……!?!」

「悪いな。いっつも俺と特訓してるやつは……お前の比じゃねえくらのパワーで打ち込んでくれるんだよ。俺は、そいつに勝ちてえんだ。だからお前を、超えていかせてもらうぜ」

「切島……!?!」

「どこからでもこいや鉄哲う！俺の硬化を破ってみろ！」

『鉄哲立ち上がったく！切島は迎撃かあ!?!』

鉄哲くんは何か立ち上がるが、すでに膝が笑っている。えーくん、ほんとに遠慮なしで鉄哲くんの事殴ったんだ……私以外にそんなことできなかっただろうから嬉しいだろうな、えーくん。硬化した自分を真正面から受け止めてくれる相手なんてきつとなかなかいなかっただろうし……。

今一度の顔面への右ストレートに対して、えーくんが選択したのは硬化した頭を使ったヘッドバット。鉄哲くんの右拳にカウンターを入れる形で迎撃したそれは、彼の拳の罅をさらに広げる結果に終わる。右手を抑えて後ずさる鉄哲くんに、えーくんは見せつけるように拳を握る。硬く、一塊の岩塊のようになったえーくんの拳はまともに鉄哲くんの頬に入って彼の意識を刈り取り、ステージ上に沈めた。

『個性だだ被り対決！圧倒的なパワー差を見せつけたのは切島だあああ！いい殴り合いだったぜ！』

えーくんは、判定を聞くと気絶しちやつた鉄哲くんを担ぎ上げて一緒にステージを降りる、二人の健闘をたたえる拍手が会場中から響いた。それは勿論私も。えーくん、さすが。次の試合で当たることにはなつちやつたけど……手加減は一切しないからね。

「ねえ、樫さん」

「ん？何かな、デクくん」

「切島君って、いつもどれだけトレーニングしてるの？」

「あー、弱点しりたいんだあ？」

「ちちち違うよーいやでも違わないけどそれはそのあれで」

「ふふっ、冗談だよ。メカジョーク、メカ要素ないけどね」

鉄哲くんの形に陥没しているステージをセメントス先生がセメントを流し込んで修復してるのをぼーっと眺めてた私にデクくんが話しかけてくる。さつき麗日さんを追うように出ていったと思ったらもう戻ってきて、こんどは私にえーくんの話を聞こうだなんて、すごい熱心だね。

「えーくんはね、私を持ち上げられるの。USJの時みたいに手足がない私じゃないよ？今こうやって手と足がちやんとある私を、えーくんは軽々と抱き上げられるの」

「樫さんを、軽々と？えっと、その」

「私の体重、手足の状態です上下するんだけど……だいたい300kgくらいかな。えーくんって根性とか男らしいとかそういうスポ根系のワード大好きなんだよ。だから、私で筋トレしたりするの。上に載って腕立て伏せとか」

「そ、それってすごいことなんじゃ……？」

「そうだよ？個性テストの記録、えーくんほとんど素なんだから。もしえーくんが私に勝ってデクくんとかえーくんと戦うことになったら……デクくんも覚悟した方がいいかも」

えーくんって影響されやすいから、漫画で読んだ人に乗せた状態での腕立て伏せとか、スクワットとかそういうのをやりたがるんだよ。私は重いから危ないって言ってもお前がいいんだっていうから付き合ってるけど……：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：？単純に重いからか、ちよつと傷ついたけど事実だししょうがないよね。

「よく知ってるんだね……切島君のこと」

「知ってるよ。デクくんだって、爆豪くんの事よく知ってるでしょ？えーくんが強いことは、私が一番よく知ってるの」

噛み締めるようにデクくんがそう聞いてくるので私は肯定する。えーくんのことならそりゃあよく知ってますとも。逆にえーくんも私のことをよく知ってる。幼馴染だもん。次試合のためにステージに出てきた八百万さんと常闇くんの試合が始まるので、私はそこで会話を打ち切るのだった。



## 22話

『えー……第8試合勝者、爆豪勝己……』

『マイク、やるならちゃんとやれ。いい試合だった、二人ともだ』

……シン、と会場中が静かになっている。1試合前のそれとは大違いだ。というのも今の試合、爆豪くと麗日さんの試合は……一方的なワンサイドゲームのようなものだったからだ。轟くんのように一瞬で勝負を付けず……えーくんの時のように抵抗を許したわけじゃない。麗日さんの策を一つ一つ真正面から粉碎し、蟻の足をもいでいくように詰みまで持っていた。

私たちはそれが爆豪くんが油断せず、麗日さんの全てを警戒しているからだとわかってたけど、分かってない会場からのブーイングが響いてしまう始末。そのブーイングは相澤先生が黙らせたけど、やはり思うところはあったみたい。倒れ伏した麗日さんに背を向ける爆豪くんには賞賛に交じって一部批判的な視線もある。

「次、デクくんと轟くんだね……」

「ああ、2週間特訓しただけでだいぶあいつ変わったよな。骨折克服したしよ」

「うん、問題は……氷結の攻略法。今のデクくんには……自損での打消ししかない」

せめて……20%を使えば……と思う。デクくんの許容上限は5%、風圧も出なければ……すさまじい威力は持たない。訂正、威力はそれなりにある。氷の表面を多少砕く程度はできるだろう。はつきり言えば焼け石に水ってやつだとおもうんだ。そして、それ以上は出せない。生身の彼の身体が追い付かない、肉体を完成させなければワンフォーオールの上限をあげていけない。オールマイト先生が筋トレばかりを教えたのも分かる。

『さあああいつてみようぜ！2回戦第1試合！轟ヴァアサス！緑谷ああああ!!!』

マイク先生の文字通りのマイクパフォーマンスで轟くとデクくんの二人が修復されたステージ上に並び立つ。スタートの号令がか

かると同時に、やはり轟くんは範囲を強めた氷結をデクくんに向けて思いつきり放った。それに対してデクくんはやはり自損での打ち消し……じゃない!? ワンフォーオールを両脚に纏ってジャンプして飛び越えた……? そうか、考えたねデクくん!

「脚の力は腕の3倍って言うけれど……デクくんの個性なら凄く有効だよ! 氷を直接砕くより、よっぽど合理的だもん!」

「やるじゃねえか緑谷! 回数打たせる度に手前エが有利になるぜ!」

脚の力は腕の3倍、つまりワンフォーオールを腕に使った場合の3倍、一時的に15%……どんぶり勘定だけどね? 実際は別だけど……ワンフォーオールの場合少し違う、なにせ……強化倍率が圧倒的すぎる。脚の5%でも轟くんの氷結より先に逃げられるうえに、残った氷を足場にして逃げ場すら確保できてしまう。緑谷くん、私の初めての戦闘訓練の動画が欲しいって言ってたけど……この攻略法、いつ考えたんだろう。

多分、最初から轟くんが最大威力で短期決戦に挑んでいたらデクくんは負けていた。だけど、轟くんはデクくんが自損覚悟で打ち消しに来ると思ってたから、打ち消されるの前提で数を打てるように氷結の威力を抑えた。それが、デクくんの狙い。自分がどれだけ動けるかを、隠してた。そしてそれを今全開にして、轟くんを仕留めにかかっているんだ……。

そして轟くんも、デクくんがここまで動けるようになっていたというの少し予想外だったに違いない。だって彼は……あの2週間の特訓に入っていなかったから。それに氷結は体温が下がって身体機能に異常をきたすので使用回数に制限がある個性だ、左側の燃焼を使えば解決できる、っていうのは少しわからないけど……彼が使わない理由があつて実際使わないのであればそれは強力なアドバンテージ。そしてデクくんの立ち回り、常に轟くんから見て左側にいる。轟くんの個性は右で凍らせて左で燃やすもの。逆はできないはずだ。というかできたら左でも凍らせてるはず。左に回り続けるデクくんのせいで、轟くんの氷結は一瞬遅れる、その隙にワンフォーオールで飛

んで逃げる……凄いな、特訓でやった鬼ごっこを活かしてるんだ。

そして、轟くんが氷結を使うたびに、デクくんには上の逃げ場が増える。この場合、轟くんができるのはやっぱり、最大出力の一撃で逃げ場を完全に封じること！私の予想通り、業を煮やした轟くんは最大出力の氷結を出そうとして一旦力んだ。そこで私は気づく、デクくんの狙いがそれだったことに。

『緑谷ボディブロー!!えげつないのが入ったぞ!』

「デクくん、全身に個性を……!?!」

「マジか緑谷、それありなのか!?!」

轟くんが力んだ瞬間だった。その隙にデクくんはワンフオーオールを全身に纏って飛び出し、氷結が出る前に轟くんのボディに一撃入れた。轟くんは正直、個性の使い方が大雑把なきらいがある。ビルごと凍らせたり、瀬呂くんを閉じ込めた氷山も狙いすました一撃というよりも当たればいいという広範囲攻撃……。デクくんはその癖を見つけたんだ。この体育祭の間で……!?!

全身にワンフオーオールを纏うのは一瞬しかできないみたいだけど、回避と攻撃を両立できるその使い方は非常に厄介だ。轟くんもここまでやられるとは少し意外だったんだろう。いつも無表情な顔が驚愕に歪んでいる。非常にうまいと言わざるを得ない。だって、これで轟くんは氷結がデクくんに通じないと理解してしまった。残るは個性無しの接近戦か……炎熱を使うか。

「轟のやつ……!?!接近戦もできるのか!?!」

「何でもできるって思ってたけど……!?!デクくんの勝ちの目が薄くなっちゃった……!?!」

轟くんは聞くところによると、現在のNo.2ヒーロー、エンデヴァアの息子らしい。エンデヴァアは事件解決数だけで言えばオールマイト先生を超えるスーパーマンだ。当然それは荒事も含まれる。個性無しの接近戦ができないわけがなかった。攻撃を入れたタイミングでカウンターを返され、蹴り飛ばされたデクくんは氷結が迫る。デクくんはまたも全身にワンフオーオールを纏って飛びあがって回避、その氷結の上に着地する。

「震えてるよ、轟くん。君の戦闘映像、見れるものは全部見た。君の個性は使うたびに体温が下がって動きが鈍くなるんだ。でもそれって、左側を使えば解決できるもんじゃないのか?」

「俺は戦闘で左はつかわねえ。言っただろ」

「ふざけないでよ!」

收音機に二人の会話が届くと同時だった。爆風が轟くんの周りの氷ごと全て吹き飛ばす衝撃波と一緒に襲い掛かったのだ。発生源はデクくん……紫色に腫れあがった右の人差し指が彼が制御を捨てて全力でワンフオーオールを使ったことを現している。なんで、使ったの……? 戦えてたじゃない……! その爆風を耐える為に自分の後ろに氷結の壁を張った轟くんの体には霜が降りている。戦闘訓練の時よりもひどい状態だ、相当苦しいと思う。

「君は僕を見てないね……! 僕を通して誰を見てる!? エンデヴァー!? オールマイト!? そうじゃないだろ! 君の前にいるのは僕だ! 僕を見る!」

「緑谷……!」

「皆、本気でやってるんだ……! 君が半分の力で1番になりたいのは勝手だ。だけど僕はふざけんなって今は思う! 君の氷結は僕には通じないぞ! 君が完全に動けなくなっても僕は当たらない……! 使えよ! 炎!」

「うるせえ……!」

「全力で、かかってこい!」

……デクくん……。貴方って人は、とんでもないね。勝てるかもしれないのに、勝てたかもしれないのに……それをあつさり捨ててしまうなんて。多分デクくんしか知らない轟くんの事情があるんだ。それが轟くんが左を絶対に使わない理由。その理由はデクくんにとって納得できるものであっても、受け入れられるものじゃなかった。

だから、彼はいま……。己を捨てた。お前が全力じゃないなら僕が勝つ、たとえ何をしてでもと。それを現すために本当の全力……制御を捨てたワンフオーオールで指を壊して見せた。全力を出さなければ

負けるんだぞと轟くんに示したんだ。A組の観客席が静まり返る。沸く会場とは真逆、皆試合に夢中になって成り行きを見守ってる。

「僕はヒーローになりたい……!笑って皆を助けられるオールマイトあみたいに!だから僕は君に勝つ!君を超える!」

レバー打ち、そして頭突き。動きの鈍った轟くんに最早ワンフオールを纏っていないデクくんの攻撃が突き刺さる。かなり生々しいのが入った。レバー打ちを教えたのは確かえーくんのはずだ。お腹を押さえて立ち上がる轟くんの体の霜はかなり広がっている。明らかに使い過ぎだ、凍傷が出始めてもおおかしくないはず……!

「俺は……親父の力なんて……」

「その力は君の力だ!氷結も炎熱も!全部!君の力じゃないか!」

その叫びが発端だった。ゴウ、と轟くんの左半身から炎が噴き出した。使わせた……左の炎!いろんな感情がない交ぜになった顔で炎を噴きさせ続ける轟くん。彼の心境はどんなものなんだろうか、デクくんの必死さが、真摯さが彼に伝わったのだろうか。それとも心の柔らかな部分を無遠慮につき回されて怒ってしまったのだろうか……いずれにせよ……

「デクくん、自分で不利な状況に持ち込んだじゃった……」

「何がしてーんだ?緑谷……」

炎の噴出音がひどすぎて最早二人が何を言ってるかは分からない。ただ、分かるのは……やっぱり左を使えば轟くんの個性の弱点は消えるということ。体中においてた霜は蒸発し、体温は正常に戻ってしまった。落ちてた運動能力も元に戻ってしまったに違いない。

それを見たデクくんは凄絶に笑った。無事な左手、そして両脚にワンフオールを発動させる。腕の方はエネルギー量からして、100%だ。轟くんも右の氷結と左の炎熱を同時に全開にしている。これ……かなりまずいやつじゃ……!?!その威力の程を察したのかセメントス先生とミッドナイト先生が動く。

それよりも早く二人の緊張の糸が切れた。最大威力の氷結を放った轟くんとワンフオールで踏切り、飛び越えたデクくん、轟くんはそこで白く見えるほど炎の威力を高め、デクくんは全力のスマツ

シユを近くでぶち込んだ。何枚もショック吸収のためセメントス先生が出したセメントの壁を豆腐のように壊した二人の攻撃が、凄まじい衝撃波を伴って炸裂する。

「緑谷……ありがとな」

攻撃の刹那、轟くんのそんな声が聞こえた気がした。崩落したステージ、こちらに来る爆風が私たちを叩く。吹っ飛んだ峰田くんの足をひつつかんで椅子に戻して結果を確認する……勝ったのは……!?

「緑谷君場外! よって轟君の勝利!」

「デクくん!」

「あっ! バカ希械どこ行くんだよ!」

崩落したステージの上に立つ轟くんと、場外の壁にたたきつけられた左手の折れたデクくん、勝敗は決したけど……私は観客席から飛び降り、脚にスラスターを付けてデクくんの所まで一直線に向かう。言ったのに、もうやっちゃダメって約束したのに……! もう! ずり、と崩れ落ちる気絶した彼を抱き留めて、横抱きにする。色々言いたいことが山ほどできた。それよりも先にリカバリーガールの所へ……!

「樫、さん……?」

「あ、おきた? もう、デクくん私との約束破ったよね? 頑張ったね、お疲れ様」

「ごめん、悔しくて……つい……」

「いいの、やっちゃったんだし。轟くんと何かあったんだよね? でも全部ひっくるめてマイナス50点だよ。途中まで100点満点だったけど、腕壊しちゃったからマイナス50点」

「……少年」

「オールマイト……!」

デクくんの口から出た言葉に私はあつとなってリカバリーガールを見るけど彼女は驚いた様子はない、知ってたんだ……! 当然か。U SJの時、トゥルーフォームのオールマイト先生は保健室に行ったんだから。気絶から目覚めたデクくんを見下ろすオールマイト先生は

デクくんの頭にポンと手を置いた。

「君は……彼に何かをもたらそうとして、実際に彼に何かを与えることができた。結果は残念だったかもしれないがそこに関して私は胸を張って君を誇りに思いたい」

「でも僕は……果たせなかった……!」

「やり方はよくなかった。もっと別のやり方もあった……!だが君はヒーローの本質の一つを違えなかった」

「……本、質?」

「余計なお世話つてやつさ。ヒーローはそこから始まったんだから。お疲れ様だ緑谷少年。よく頑張った!でも、身を滅ぼす戦い方はもうやめような。一緒に違うやり方を考えよう」

「はいっ……!」

デクくんのやり方は褒められちゃいけないものだった。リカバリーガールも褒めるなど言っただし、今後はもう身を滅ぼした結果の怪我は治癒しないとまで言い切られてしまった。だけど、オールマイト先生とデクくんだけが知ってる轟くんの闇に少しだけ罅を入れることができた。誰かの手を取り助けること、余計なお世話でもデクくんはそれを果たした。ヒーローとしてのそれを。

心配した皆が出張保健室になだれ込んできて、私の思考はそこで打ち切られたけど、デクくんの分まで頑張らないと、次の相手のえーくんを見てそう思ったんだ。

## 23話

そういえば、まだ話してなかったと思う。何の話かっっていえば、私  
がどうしてヒーローを目指そうと思ったかって話。まあ、ありきたり  
で、よくある話かもしれないし、珍しい部類の話かもしれない。私に  
とっては少しだけ苦い思い出はあるけど、この際だから思いだして  
みようかな。これは、私がヒーローに出会ったお話だ。

当時、私は幼稚園児で4歳だった。今と同じで両手両足は機械で、  
重くって硬かった。今と違う点と言えば、そのころの私は今ほど大き  
くなくて、皆と同じくらい身の長だったこと、体が出来上がってな  
かったから重い重い手足のおかげでまともに立つことすら出来な  
かったこと、あとは……両目がちゃんと青かったってところくらい。

今みたいに髪の毛で目を隠してなかった私は当時はヒーローなん  
てほとんど興味がなかった。他のみんなみたいにお外で遊ぶなんて  
こともできなかったから、教室の中で座って絵本ばかり読んでい  
る、そんな感じだったと思う。何分10年以上前のことだからそんな  
に覚えてないし、ここで話すのも少し恥ずかしいくらい。

さて、4歳と言えばなんだけど……個性が発現する年齢ってことは  
知ってると思う。個人差あれど、大体4歳。私みたいな異形型はとも  
かくとして、発動型や変形型、まあその他もろもろの個性は大体4歳  
までに発現する。そして、当時はオールマイイト先生の絶頂期だった。  
1000人を同時に救った動画はとて有名で、ヒーローっていえば  
テレビの中の人っていう認識だった私でも知ってるくらい。

えーくんとは産まれた時から一緒に、幼稚園も一緒だった。私は自  
分では遠くへ行けないし、先生でも持ち上げるのに苦労するくらい重  
かった。もうすでに成人男性くらいの重さはあったみたいだから。  
それで私はどこへ行くにも台車に乗っていて、その台車を押して移動  
するのは専らえーくんの役目だった。俺が連れてってやるからな  
！って言って、私が乗った台車を一生懸命押してくれたのを覚えて  
る。

前置きが長くなったけど、ここからが本題。当時はオールマイイト先



生の絶頂期で、みんながみんなヒーローについて熱く語っていた。幼稚園にいる子みんなしてヒーローになるって言って、ヒーローごっこがそこかしこで行われてたくらい。そんな時期に、自分だけの超凄い特殊能力である個性が発現したらどうなる？ 答えは……何とかして使ってみたくなる、だと思っ。

人間ってというのは自分より違うものを受け入れがたいものだった。というのは15年の人生の中で学んできたことの一つかな。当時もそうだったから。手足が機械っていう異形の個性、おまけのその手足は積み木を握りつぶせるときたら……排斥したくなるのはしょうがないと思う。当時の私はえーくん以外まともにお話してもらった記憶はない。

いじめかと言えば違う。単純に、どうしたらいいか分からないから、話さない。ずっと台車に乗って動かない私よりも、一緒に遊ぶお友達の方が大事になるのは当然の話。そんな時期に個性が出て、何人かの男の子が俺の個性は凄いだって自慢してたところにえーくんに連れられてきた私が、来てしまった。

人に向かって個性を撃つてはいけません、って教えてもらってはいたけど分別のつかない子供の時期、魔が差しちゃうこともある。そこちよほどよく動けなくて、それなりに全身が硬くて、仲間外れにされてる私があった。ここまで言えばわかると思うけど、私は的になった。ちよつと驚かせてやるつもりだったって後から聞いたけど、当時の私には関係なかった。

子供だから狙いも甘くってほとんど私には当たらなかった……ただ本当に運が悪かった。そこでサイコキネシスの個性を持つ子が私に向かって撃った石が……私の右目を抉っていった。私の悲鳴に驚いたのか、私に向かって個性を向けていた子たちの個性は制御を誤って暴走して、一気に私に向かってきた。

教室の中にいた先生が慌てて駆け寄ってくるけど間に合わない。私はまた痛いのが来ると思って泣き喚きながらぎゅっと縮こまった。そんな私の前に立ったのが、えーくんだった。当時のえーくんもすでに個性は出てたけど、少し硬くなるだけで全然派手じゃなかったし、

どちらかと言えば地味な部類だった。

だけど、えーくんは私が攻撃を受けた時点で私と一緒に遊んでくれる他のお友達を誘っていた場所から駆け出して、迷いなく私の前に割って入ってくれた。幸い制御を失った個性は私にもえーくんにも当たらなかつたし、そのあとに走って来た先生によって事態は沈静化した。

それが、私のオリジン。動けない私を一切迷うことなく守るために立ちほだかってくれたえーくんの小さいけど大きな背中。右目が見えないパニックの中でその後ろ姿だけが酷く輝かしく脳裏に焼き付いている。今でも鮮明に思いだせるほどに。私にとってヒーローっていうのは、オールマイト先生でもパワーローダー先生でもなくて、えーくんだった。

えーくんが私にやってくれたように、私も同じように誰かを迷いなく守れるように強くなりたい。誰かのために考えるより先に体が動いたえーくんのようになりたいと心からそう思って、ヒーローに興味を持ったんだ。まあ、あとは色々あつて、個性が右目を補つて、色が違う目と、日増しに大きくなる体が恥ずかしくなって目を隠し、今に至るというわけ。

『2回戦第3試合！ガチャガチャメカガール！樫希械VSカチコチハードボーイ！切島鋭児郎！』

「やるか、希械」

「うん。本気でやるのって、初めてだよね？」

「そりゃあなあ……お前が本気で個性使える場所なんてなかったし、俺が本気でお前を殴るつてのもなかったしな。つーか俺お前殴りたくねえ」

「私には自分殴らせてるくせに」

「俺はいいんだよ俺は、男だからな！」

「男女差別だー」

体育祭のステージ上で、私はそのヒーローと相對する。私とえーくんは特訓で模擬戦じみたことをやったことはあつたけど、お互いどうしても本気は出せなかつた。危なかつたし、心理的にもブレーキがか

かった。だから今この瞬間お互い本気で戦うのは初めて。手は抜かないっていう無言の約束通りにお互いを叩き潰すつもりで戦う。にい、いつもの太陽のような笑顔と好戦的な顔を混ぜたように笑う。えーくんに私も応える。きつと私も同じ顔をしているのかな。

『スタートオ！』

「おらあああっ!!!」

「やああああっ!!!」

同じタイミングで駆けだした私とえーくんが鏡像のように同じ態勢で振りかぶってお互いに向かつて拳を発射する。何の打ち合わせもしてないのに拳同士がぶつかって……力負けしたえーくんが吹っ飛ばされる。だけど、力負けしただけだ。私の右拳は……手首まで潰れてしまっている。えーくんの硬さに手が負けたんだ。

「そりゃ、普通の手じゃこうなるよね……!」

「効かねえぞ希械い!」

「知ってる!」

チャリチャリ、と音を立てて私の手足が戦闘形態に変形する。肩から先、膝から下のジャージが破れて見るからに攻撃的な手足が露になる。当然のように無傷のえーくんが突進してくるのを、私は避けずに受け止めた。ドガガガ!とコンクリの床を削って押される私。流石えーくん、私の重い体をタツクルで押して移動できるなんて!私は思いつきり踏ん張ってタツクルを止める。えーくんの手を掴んで、脳無にもやったように手四つの力比べの体勢になった。

「ふんぎぎぎぎぎ……!!」

「くううう……!」

押し込めない。上から圧殺するように力を籠める私だけど、えーくんは関節を硬化させて固めることによって私の超膂力に対抗してる。それより進めないけど、それより後退もしない状態。えーくんの足元が私のパワーを現すように陥没して沈んでいく。えーくんの弱点は全身の硬化が永続しないこと。いつかは息を入れる必要がある。その時に……っ!?

『切島巴投げーっ!?マウントポジションだあああ!!』

やられた。えーくんは息を入れるタイミングで後ろに倒れ込んで私を巴投げして、仰向けになった私に馬乗りになった。そしてえーくんは、思いつきり拳を握って振りかぶる。

「守れよ」

「うん」

『切島容赦ねえええ！女子の顔面に思いつきり!?!』

手でガードするけど、えーくんの力は鉄哲くんの試合で見た通り。押し込まれた私の後頭部が地面にめり込んで罅が周りに浮かび上がる。会場からはどよめきと驚愕の声。違うんだよ皆、えーくんは私にこれが効かないって知ってるからやってるの。全力を受け止めてくれるって信頼してくれてるから本気で殴ってくれるんだよ。

「つば効かねえかあ！もう一発……ぐあつ!?!」

「お返し！」

上と下が入れ替わる。ガードに使ってなかった逆の手でえーくんの腰を掴んで引き倒し、今度は私が上になる。今ここで拘束してもいいんだけど、それじゃ味気ないし物足りないもんね。えーくんに習って私も思いつきり振りかぶって彼の顔面に振り下ろす。すさまじい音がしてえーくんのガードごと彼をコンクリのクレーターの中に沈めた。

「つかくく！今度は効いた！」

「嘘つき、全然元気そうだもん」

マウントポジションを解くと、ガラガラと音を立ててがれきの中からえーくんが無傷で立ち上がる。んもう、半分私のせいとは言えカッチカチなんだから……！正攻法だとまず効かないしやつぱりこうしかないよね……！

「スラストハンマー、形成開始<sup>レ</sup><sub>デイ</sub>」

「そう来るよなあ……！」

大質量で、えーくんを場外に吹っ飛ばす。大きなブースター付きハンマーを構えた私、ブースターから断続的にボ、ボと噴出する炎が私を照らす。えーくんも最終的にそう来るのは予測してたみたいで、完全に受け止めてくれる構えだ。ゴオオオオツ!!とスラストハンマー

のブースターから爆炎が上がる。

「いくよ……！」

「こおいー！」

『切島が樫の特大ハンマーを止めたああああ!!』

スラストハンマーに引つ張られるようにえーくんに突撃した私が搦り上げるように鉄塊をえーくんにぶつける。ワンフォーオールほどじゃないにしろ衝撃波があたりを叩く。えーくんはハンマーが接触する瞬間にコンクリの地面に片足を挿しこんで飛ばされるのを防いだようで、ハンマーとの押し合い勝負になってる。でも、力押しなら私の有利……！

「ぐぬおおお……！」

「えーくん、負けないから……！」

内蔵燃料が切れたスラストハンマーのブーストが切れる。瞬間、えーくんは潜り込むようにハンマーの柄をくぐって私の懐に入ってくる。私もハンマーから手を放して拳を握ってえーくんを迎撃しにかかった。私より早く攻撃の準備を終えたえーくんの鉄より硬い拳が私のお腹に突き刺さる。けふ、と息が漏れたけど攻撃の瞬間にゆるんだえーくんの意識の隙間を縫って、私の全力の拳が彼のこめかみを見事にとらえる。

そこからさらに、肘にスラストを作って瞬間的に噴射し、地面に向けて思いっきり降りぬいた。潰されるように地面に突き刺さったえーくんの体から力が抜ける。くたり、と脱力したのをミッドナイト先生が確認して勝敗が決する。

「切島君気絶のため、樫さんの勝利！」

『ガチガチの殴り合いを制したのは樫希械！ナイスファイトだぜ！』

「いったあ……脳無にやられた時より痛いかも……」

痛覚が鈍い私なものにもかかわらず響くような痛みを訴えてくるお腹をさすってから、私はえーくんを抱っこして出張保健室に向かった。何とか、今回も負けなくて済んだ。えーくんより弱かったら、いざって時にえーくんの前に立つことができない。えーくんはシヨツ

クが強すぎたみたいで当時のことは覚えてないけれど、幼稚園の時のように……今度は私が、えーくんを守ってあげたいから。色んな人の盾になる彼を、私が支える為に。

「すまねえ!!!」

土下座だった!。それはもう見事な土下座だった。真っ赤なつんつん頭をベッドの上にこすりつけて土下座を敢行してるのは、さっきまで私と本気で殴り合いを繰り返していたえーくんである。私はリカバリーガールにお腹をめくって見せていて、これから治癒を受けるところだったんだけどえーくんが目を覚まして私のお腹を見た瞬間に、赤くなったり青くなったり忙しい忙い反応を見せて、これだもの。ビツクリしちゃう。

「試合だったとはいえ本気で殴った!跡が残っちゃうだなんて……」

「いやいや、えーくんだったたんごぶ……」

「俺はいいんだ!男にとつちや傷は勲章みてえなもんだろ!けどよお……」

「熱くなってる所悪いけどねえ、ひどめの内出血だよ。治癒ですぐに良くなる、安心しなさい。にしてもあんたら二人とも頑丈だねえ、樫は普通の人間だったら内臓爆発してるし、切島に至っては頭が取れてただろうに」

「まあ、私は機械ですから」

「俺は硬い事が取り柄っすから!」

どうも、えーくんは青紫色に染まった私のお腹に責任を感じてみたいけどそんなのお互い様だし、私は結構嬉しかった。えーくんと本気で殴り合いするなんて今後なかなかないと思うから。正直気持ちよかったなあ……えーくん、私の想定を超えた強さだったしうかうかしてられないね。はんせーかい、とえーくんに声をかけて彼の隣に腰掛ける。あーだこーだと言いつつ合いつながら、幸せだと私はそつと感じるのだった。

## 24話

『無敵かと思われた個性、ダークシャドウを真正面から粉碎！爆豪  
勝己勝利イイ！』

「すごいね、爆豪くんって。戦闘だけじゃなくて洞察力も秀でてる……」

2回戦第4試合、内出血を治してもらった私と、たんこぶを治してもらったえーくんが観客席に戻ると、飯田くんに負けちゃった三奈ちゃんがおめでとうと駆け寄ってきてくれたと同時に切島も頑張ったねと褒めてくれた。どっち応援したらいいかわかなかったよ。という三奈ちゃんに膝の上を占拠されて胸を枕にされた状態で観戦した最後の試合は、遠中距離でかなりの強さをもつダークシャドウを有する常闇くんとクラスの爆発才能マン爆豪くんとの戦いだった。

圧倒的、と言葉にするしかなかった。ダークシャドウによる攻撃を全て爆破によるカウンターで防ぎ、ダークシャドウはダメージを受けないという既知の情報からどうにかして接近戦に持ち込むしかないと思ってたけど、あえて爆豪くんは中距離戦でダークシャドウに爆破を当てまくった。ダークシャドウに攻撃は効かないにしろ怯みはする、意思と痛覚はあるのだ。

そして暴いた。ダークシャドウの弱点である……強い光を。思えば騎馬戦の時私が放ったフラッシュバンの後、ダークシャドウはなんだか弱弱しかったけど、そこから辺から既にあたりはつけていたのかもしれない。最終的に爆豪くんは両手を使って閃光のように光に特化した爆発を選択し、ダークシャドウを完全に弱めて常闇くんを撃破してしまった。

「次は、轟くん対飯田くんだね……」

「飯田、すごい早くてさー！私、何にもできんかった……」

「いや、芦戸さんすごいきれいにカウンター入れてたよね……？」

「でもー！飯田の眼鏡割れなかったんだもんー！」

私の前の試合だった三奈ちゃんの試合、私はモニターでしか見てなかったけど、飯田くんが速攻勝負にくるとみて三奈ちゃんの初撃は力

ウンターによる右ストレートだった。飯田くんの顔面に見事に入っただけで飯田くんは止まらなかつた、歪んだ眼鏡をかけたまま三奈ちゃんを場外に引つ張り出してしまったのだ。予備の眼鏡沢山持ってるんだね飯田くん……

左手の骨折と右人差し指の骨折を治癒してもらったデクくんは毎試合毎試合物凄いスピードでブツブツ言いながらノートを取っているけどすごく気持ちわかるなー。データとそれの分析してとつても大事だからさー私も右目をガンガン使い倒して今データ蓄積してるんだ。今度ノートの中身見せてもらおうかな、私のページとかとても気になるし。

『3回戦第1試合！氷結のプリンス轟VSハイパースピードエンジン飯田ア！』

きた、轟くん。デクくんは炎を使わされたからこの試合でどうなるか……前と同じように氷だけなのか、炎も使いだすのか……はつきり言つて読めない。炎側は正直言つて情報が少なすぎるから……最大何度の炎を出せるのか、持続時間は？体への負担は？全ての情報が足りない。だからこの試合は私にとつても大事、爆豪くんは勝てたら次は彼と戦わなきゃいけないもの。

試合開始、飯田くんの選択は……やっぱり速攻！レシプロバーストと聞いた飯田くん曰く誤つたエンジンの使い方です。途轍もなく加速した飯田くんは轟君が氷結を出す前に彼の脳天に蹴りを入れて地面に打ち倒すと、そのまま服を掴んで場外に向かって走りだした。やっぱり場外狙い、そうなるよね。レシプロバーストの時間は約10秒、このペースなら……

「レシプロバーストが止まった……!?」

「あ、マフラーが凍ってる……！詰まらせたんだ、排気できないとエンジンが止まっちゃう……！」

デクくんの驚愕の声に私は右目をズームさせて二人を見ると、飯田くんのエンジンのマフラーが轟くんの氷結で凍り付いて詰まっているのが見て取れた。ヤバいなあれ、飯田くんのエンジンが私を知ってるエンジンと同一の構造をしてるか知らないけど最悪爆発する止め



方だ。あ、でも飯田くんのエンジンの燃料はオレレンジユースなんだっけ。可燃物じゃないから爆発しないのかなるほど……？

大技ばっかり見せてきた轟くんの小技、止まってしまった飯田くんは轟くんの氷結の餌食になり、行動不能になってしまふ。結局、炎熱は見せなかつた轟くんだけでもまずいかも……私の体って精密機械の塊だから、体の内部まで凍らせられるのだとすれば結構厄介この上ない。対処法としては極限まで隙間を小さくするしかないかな……？それだと排熱に支障が……？うーん、どうしよう……？

「行ってくるね……！爆豪くん、よろしくお願いします」

「……ケツ」

試合が終わったので準備時間に入る。私と爆豪くんは試合に出る為に控室に行かなきゃいけない。けどステージの補修がないからすぐ呼ばれそう……みんなから応援の言葉を貰って観客席を後にする。爆豪くんの個性は爆発、威力は私が作る爆発物と同等、いや面積規模で言うなら彼の方が繊細で威力が高いかもしれない。拡散する爆発をピンポイントで最大威力で当ててくるだろうから……色々対策しておかないと。

『3回戦第2試合！爆豪勝己VS樫希械！行ってみよー！！』

『キャッチコピー考えるの面倒くさくなったのか、マイク』

『盛り下がること言うのやめない？』

爆豪くんと向かい合う。向かい合って初めて分かった、ポケットに両手を突っ込んでこつちを痛いほど睨みつける彼は少し汗をかいている。体、あつためてきたんだ。デクくん曰く、爆豪くんは個性の都合上動けば動くほど汗が分泌されて爆破の威力が上がるらしい。つまり、試合前に動いて個性を最大限使えるように高めてきたんだ。傲慢に見られがちだけど抜け目ない、爆豪くんの一面を新たに発見した気分。

「試合開始！」

「おい、樫」

「だから櫟……あれ？」

ミッドナイト先生が試合開始を告げると同時に、動き出そうとした私を爆豪くんの声が止める。しかもクソメカ女とかじゃなくてちゃんと名字で呼んでくれた、なんという青天の霹靂、何事だ!?ば、爆豪くん変なものでも食べたの? いやでも拾い食いする性格じゃないだろうし……そもそも私爆豪くんがまともに人の名前呼んだの初めて聞いたよ? 幼馴染のデクくんだってクソデク呼ばわりだし……

「な、なに?」

「てめえ、本気出してねえな? 舐めプしやがって。使えよ、USJであの脳みそクソヴィランに使ったやつ。しようゆ顔から聞いた、てめえの全てをねじ伏せて、俺が勝ってやるからよ」

「……ダメだよ。ゴリアテは使えない、人に使うものじゃない。ましてや試合でなんて」

本気を出していない、というちょっと腹が立つ指摘は置いておきしろ、ゴリアテをクラスメイト相手に使うだなんてとんでもないもいところだ。そもそもアレは救助用の用途が大部分、倒壊した建物を持ち上げることやがれきを支えるなどの重機じや器用さが足りないところを補うために開発したもので、戦闘もできるように最低限の武装を付けただけ。目指すのは救助をするオールマイイト先生のトレーズでしかない。

それに、威力過剰が過ぎるし加減が効かない。当たれば100%殺してしまう。マイク先生曰くクソの攻撃になってしまいう上に、反則に近いんだ。攻撃を当てないようにして戦うのは私にとつては難しい。えーくんですらゴリアテのパンチを受け止めるのは絶対に不可能なのだ、いくら爆豪くんでも死んでしまう。

「ダメ、絶対にダメだから」

「関係あるか、俺が勝つ。いいから使え! 舐めてんのか!」

やっぱり聞いてくれないよね……主審のミッドナイト先生に目を向けると、私の提供した動画でゴリアテのことを知ってるらしく、無言で首を横に振られた。そこで改めて爆豪くんを見ると……盛大に舌打ちをして一言

「なら使わせてやるよ……！」

「使わないってば！」

とびかかってくる爆豪くんに対して私は手足を変形させつつそう答える。いつもの戦闘形態じゃない、普段使う手足に近い状態だけど材質が違う。爆豪くんは速いうえに動きが細かい、若干大雑把なきらいがある戦闘形態だと後れを取ってしまう、だから組み上げた。対爆豪くん専用の手足だ。

開幕の爆破を腕で受ける。初っ端から顔面狙いとは容赦がないね、それでこそ爆豪くんかな。爆発が腕に触れた瞬間に、腕の装甲が逆に爆発を起こして爆豪くんの爆破の威力を完全に殺した。その隙に腕を掴もうと手を伸ばすけど流石の反応速度で腕から爆発を起こしてバックステップ、そりゃこんな簡単にいかないか。

「てめえまた。パクリやがって……！」

「一発ネタだよ？爆発反応装甲、知ってるよね？あ、知らないか」

「知ってるわ舐めんな！戦車についてるやつだろうが！」

「……あ、ホントに知ってるんだ。爆豪くんも男の子なんだね」

「俺のどこを見たら女に見えるんだクソが！」

「そういう意味じゃないんだけど……！」

まあ、爆発反応装甲は一発ネタ、これ以降は使わないし意味はないと思う。本命はこの手足、普段は油圧と電気モーターで動かしてる私の手足だけど、今回は別物。何と部品の全てが電磁石接合されており、さらには球体関節という仕様になっているんだ。端的に言えば、爆発の衝撃をインパクトに合わせて一旦接合を解き、衝撃を逃がしたうえで再接合するという構造になっている。パワーは少し落ちるけど十分！

「レアアロイシールド、スタンバトン、ホーダインクラブ、形成開始<sup>デ</sup>」

左手に高硬度の希少金属で来た円形のシールド、バチバチと音が鳴る電気の流れる大型警棒、手のひら部分を変形させた自動砲台設置システムを一気に作成する。シールドが付いた手のひらから丸い機械の塊を次々投げる。爆豪くんはそれを手榴弾あるいは閃光弾だと思っただのかさらに距離を取った……だけど、これは違うんだよ。機械

音を立てて一気に変形した玉は……自動砲台へと姿を変えて爆豪くんに向かって圧搾空気を利用したゴム弾を発射する。

爆豪くんが逃げたのは当然だけど上、地面にいたら格好の的だもんね。そして私の真上を取る、そのまま両手の爆破で高速回転を始めて突っ込んできた。多分これ超大技だ！避けられないし耐えるしかない！

ハウザーインパクト  
「榴弾砲着弾オー！」

「くう！」

シールドを上にかざして攻撃に備える。彼の最大威力に加速が加わった大爆発が、私を襲った。設置した砲台は一瞬で壊されてしまった。シールドの上からの爆発の圧力で私の足が地面に埋まる。閃光と煙で視界が悪い……！

「殺った……!!」

「とってない！」

煙に紛れて私の背後を取った爆豪くんが至近距離から爆破を放とうと手を向ける。だけど私は前を向いたまま腕を人体の関節を無視した動きで動かして彼の手をシールドで叩いて逸らした。電磁式球体関節はどんな方向でも曲げられるのが強み、爆破を逸らされた爆豪くんが離脱しようとするより一瞬早く振り向いた私は電磁バトンを彼に向かって叩きつける！

「があああああっ!？」

人体に影響がない程度だけど十分に高圧の電気が爆豪くんを襲う。全身が硬直してしまった彼の隙について私は武装を投棄して、彼の肩を腋から掬い上げるようにを両手でつかむ。じたばたと暴れる爆豪くんを軽く持ち上げて拘束状態に持っていくけど……どうやらこの状態では勝利判定ではないみたい。暴れる爆豪くんが遠慮なしに爆破を私の顔にたたきつける。

「ねえ、爆豪くん」

「離しやがれえ！」

「ロケットパンチって、知ってるかな？」

前髪が焦げて、鼻血を出した状態の私の問いかけに、爆豪くんは一

層暴れだして四方八方やたらめつたらに爆破を打ち出すが、腐っても機械の手、そう簡単に拘束からは逃れられない。そして私は肘部分にロケットエンジンを作り出して、腕ごと爆豪くんを発射する。手を何とか後ろに回して爆破を連続して勢いを殺そうとする爆豪くんだけど……その手、最大出力で30分は飛ぶんだ。

「爆豪くん場外！樫さんの勝利！」

爆豪くんの身体が抵抗むなく壁に接触した瞬間にミッドナイト先生の宣言が響いた。私はそこで腕を呼び戻して再接合する。ずり落ちるように壁から落ちて座り込んだ状態の爆豪くんは、こちらにも聞こえるほどの大きな歯ぎしりをして、無言で立ち上がり歩いて会場から去っていった。

『決勝進出はあ！ヒーロー科轟焦凍と同じくヒーロー科の樫希械だあああ!!!小休憩を挟んで決勝だぜ！リスナーたちよ！盛り上げれえええ!』

会場が爆発するように沸く。私は焦げてしまった前髪を弄りながら、鼻血を啜って出張保健室に向かう。治癒は受けなくていいけど、女の子的にはこの焦げちゃって癒着しちゃった髪の毛はどうにかしたいし、鼻血も止めたい。爆豪くんホントに遠慮しなかったけど、逆にそれが嬉しかった。爆豪くんにとって私は全力を出さない嫌な奴かもしれないけど、私は今までの爆豪くんのデータから導き出した一番勝率が高い装備を選んで本気で相手をした。それだけはきちん和理解して欲しいと私はそう願っている。……無理かもしれないけど。折角苗字を覚えてくれたのに、舐めプメカ女とか呼ばれだしたら私泣いちやうかも……。

## 25話

『さあよいよ決まるとマスメディア！雄英の1年生の頂点がここで決まる！轟VS櫛！』

「……目、出したんだな。初めて見た、両目」

「そう……だっけ？爆豪くんのおかげで前髪滅茶苦茶になっちゃって……」

「そうか」

「お揃いだね、オッドアイ」

決勝の舞台で向かい合う、私と轟くん。轟くんとの交流は爆豪くんより薄いし、私は授業でも右目を余りだしたことはない。でも恥ずかしくはあっても見られて不快ってわけじゃないから露出したことは何度かあったはず……？多分それだけ周りに興味がなかったのかそれ以上に何かを強く追い求めて周りの情報をシャットアウトしたのか……。

轟くんが言う通り私は爆豪くんの爆発で前髪が見事に溶けて癒着しちゃったのでぱつぱつと切って露出してる。個性使って伸ばせなくもないけど、余計な出費は後で響く。僅かな差で勝利が決まることもあるんだから全部終わらせてから余分を考えるべきだ。お揃いだね、と轟くんの左右で色が違う目を見ながら言うと、彼は少しだけ目を見開いてそのまま黙ってしまおう。

「轟くんってさ、どうしてヒーローになりたいの？」

「お前に、関係あるか？」

「ないかもね。だけどクラスメイトだから……あなたの事知りたいの。だって轟くん、誰とも話さないから」

「仲良しごっこするつもりはねえ」

「……私はね、誰かを守りたいからヒーローになりたいの。なりたい自分になりたいから。轟くんもそうでしょ？なりたい自分になるためにヒーロー科に来た、そうじゃない？」

『決勝戦、スタートオ！』

「うるせえ……」

「お節介かもしれないけど、それがヒーローだから！本気を出せない理由があるなら、それでいい！でも、私は……全力の轟くと戦いたい！」

スタートの合図とともに轟くんの右側から規模の大きい氷結が襲ってくる。左の炎はうんともすんとも出してこない。しつかりと両目を捉えた彼の目は、揺れに揺れていて、私を見ていない。遠いどこかを憎むようなそんな目をしてる。どこ見てるの？誰を思ってるの？上の空で勝てると思われてるほど……私って弱く見えるのかな……？

「リヴァイアサンテイル、形成開始<sup>デ</sup>」

右手からの断続的な機械音、形成されたのは青いエネルギーの棘が生えた鉄球を備えた武装。リヴァイアサンテイル、端的に言えば衝撃波発生装置を内蔵した棘付き鉄球、要は力押しの特徴みたいな武装だ。いわゆるモーニングスターっていう可愛くない武装。金属製の鎖でつながってる鉄球を柄から伸ばして、思いつきり眼前の氷壁に叩き付ける。

『樫氷結を一蹴ううう!!!』

「氷は私に通用しないって、知ってるよね？」

音を立てて私の手足が変形する。戦闘形態、バーニア増設。脹脛のスラスターを噴射して飛び上がり、轟くんの近くの地面に向けて思いつきり叩き付ける。ステージに叩き付けられた鉄球の中にある衝撃波発生装置が起動して、周りにショックを振りまいていく。それに押された轟くんは背後に氷の壁を出して吹き飛ばされるのを耐える。

炎はでない。どうも轟くんは私と接近戦をするのがお気に召さないみたいで、距離を取って氷結を連打してくる。けど私は都度それを丁寧に砕いていく。振り回される鉄球がステージを穴だらけに変えていく。別に轟くんが本気を出さないなら出さないでもいいと、私は思うけど……でもさ、自分に嘘をつくのは良くないと思う。

多分轟くんは、勝ちたい。勝ちたいはずなんだ、だけどデクくんは無理やり心の柔らかい所をつつかれて、炎を使って……分からなくなってる。自分がどうしてここに立ってるのか、流されてるだけなの

か、目標があつたのか……いろいろ全部ぐちゃぐちゃになっちゃつてる。本来の目的を見失つてる。みんな、勝つためにここにいる。それだけは間違いない筈なんだ。

「勝ちに來ないよ！本当に何もできずにこのまま私に譲っていいの!?じゃあなんで勝ち上がってきたのっ!?」

「っ……………」

「デクくんととの試合で言つてたよね!?俺だつてっ！ヒーローになりたいって！なりたいたいんならなければいいんだよ！なりたいたい自分になつていいんだよ！」

あとから録画で見返した時に気づいた轟くんの言葉、音声では聞こえなかつたけど、口元の動きで分かつた。轟くんの底の底にあつた本音が。ヒーローになりたいって言つたんだ、氷結だけっていう縛りを取つ払つたその先にもあつたその言葉が本音！

「負けるな！頑張れ！二人とも！」

「……………緑谷」

「デクくん……………」

観客席から届いた、応援。私たち両方に届いたエール、その流れは会場の全てに伝播して……………私たち二人を応援してくれる。降り注ぐエールの雨に、少しだけ顔がほころんだ。

「二回さ、全部忘れちゃおうよ。全力つて出したらすすきりするよ。考えるのはそのあとでもできる。今は、今できることを本気で取り組むのが一番だと私は思うな」

「……………緑谷も、お前も……………変な奴だ。なんも知らねえのに俺の中かきまわして……………どうなつても知らねえからな」

「望むところ！」

パキパキ、ゴウゴウと轟くんの左右から氷結と炎が顔を出した。リヴァイアサンテイルを作り変えてスラストハンマーに、そしてもう一方、チャージジャベリンを新しく作り出す。大型の武器を二つ両手で構えて、背中のジャージを破つてゴリアテの背中についてるブースターが生成される。

襲い掛かる氷結に恐れず突っ込む。バカみたいな加速を生み出す



ブースターの勢いに乗せてチャージジャベリンを構えて氷結に突っ込んだ。最大威力の氷結の中をジャベリンの突破力だけを頼りに掘り進む。氷結を突破した私が勢いに負けて折れ曲がったジャベリンを捨てる。そのままスラストハンマーの噴射口から思いつき噴射炎を吹かして大上段に構えて轟くんに向けて流星のように突っ込んだ。

「あっ!?!」

炎での迎撃が来ると思ったけど、無視して一撃くらいは行ける、そう考えて迫る熱に向けて覚悟を決めた私と反比例するように、轟くんの左から出てた赤い炎は収まってしまった。私は迎撃される前提だった攻撃を無理やり逸らして轟くんの手前の地面に無理やり軌道変更する。勢いは殺せず、そのまま轟くんの近くに着弾した私の攻撃は、轟くんを吹き飛ばして……場外に押しやってしまった。

「……私じゃ、足りなかったんだね」

『試合終了!!今年の一年生のトップを飾ったのは……メカガール! 樫希械だああ!!』

ぽつりと呟く私の言葉をかき消すように、マイク先生の絶叫と健闘をたたえる拍手が降り注ぐ。私は腕と足を元に戻して、焦げちやった背中丸出し状態のジャージ一枚のままステージを降りて轟くんの元に向かう。座り込んで私を見た轟くんは、ずっと目を逸らした。

「はい、お疲れ様轟くん。ごめんね、勝手に色々好き勝手言って。嫌だったよね」

「……いや、俺の方こそ……悪かった。最後の最後でまた……迷っちゃった」

ちやうどよく背中が開いてたので排気口を作って排熱した私は、轟くんに謝りつつ手を差し出した。戦ってる最中とか気が高ぶっていつもより饒舌になっちゃうのが私の悪いところかもしれない。目をそらしていた轟くんだったけど、差し出された私の手を見て、ついで私を見てくれた。うーん、結局私は轟くんが抱えてる事情を知らずに好き勝手やっただけなんだよね。迷惑千万極まりない。

「なりてえ自分、か……小せえ頃、おかあさんにも同じこと言われ

た」

「おかあさんが、私と？優しいお母さんなんだね」

「……そうだな。そうだった。ずっと忘れてたんだ、俺のおかあさん……優しかったんだ」

「……」

「どうした？」

「轟くん、イケメンってよく言われない……？」

「……何の話だ？」

咄嗟に出た照れ隠しに轟くんが首をかしげる。おかあさんの事を思い出して語る轟くん、その微笑みはまさに絵画のようで思わず見惚れそうになってしまいうくらい絵になっていた。半分機械でビツクサイズな私だけど一応、女の子なんです。そういうのを直視しちゃうとその、こう……言葉にできない気持ちになる。しかも私、今日を隠してないからその爆撃を直視してダイレクトアタックを貰った。そういうえば三奈ちゃんが轟って顔がいいよねって言ったのを思い出した。超納得した、うん。

「ねえ、轟くん」

「何だ？」

「仲良しごっこ、するつもりはない？」

「……いや」

「私と友達になってほしいの、オッドアイ仲間、初めて見つけたし」私の手を取ろうか迷っているらしい轟くんの手を掴んで強引に立ち上がらせながらそう尋ねる。轟くん、何となく体育祭前と雰囲気が違う。氷のようだった拒絶の色が、今はない。その原因は私じゃなくてデクくんだろうけど、折角雰囲気柔らかくなったし、クラスメイトになったんだからずっと一人でいるのも寂しくないかな？それこそ余計なお世話だけど、まあ私の欲望だ。轟くんとお友達になりたい、それだけ。

「……俺で、いいなら」

「轟くんがいいんだよ。きっと私以外も、轟くんと友達になりたいてって思ってる」

「……そう、か」

「だから反則だつてそれ……」

またまたイケメンフェイスを緩やかに微笑みの形にした轟くんからダメージを貰いつつ、私は一緒に出張保健室に向かうのだった。

「それではこれより！表彰式を行います！」

「ん~~~~~!!!」

「爆豪くんどうしちゃったの……?!」

ミッドナイト先生の音頭で上空にぽんぽんと花火が撃ちあがる、表彰式、保健室で新品のジャージに着替えて個性を使つてまた目を隠せるくらいに髪を伸ばした私と、何となくそれを残念そうに見る轟くんが会場に戻つてくるとセメントス先生の個性によつて作られた表彰台の3位の場所がありとあらゆる方法で雁字搦めにされた爆豪くんがご丁寧に猿轡を噛み砕く勢いで暴れていた。

「あいつ……顔すげえな」

「否定できないけど出る感想それなんだ……」

ひい……もともと怖いと思つてたけどより怖さが倍増してるよ爆豪くん……。目の血走り方と吊り上がり方がコミックもかくやみたいな感じ。というか手枷の中で小爆発が連続して起こってるみたい、だつてみるみる間に手枷が内側からボコボコになってるもん。大丈夫だよ？襲つてこないよね……？とびくびくしながらミッドナイト先生に促されて1位の台に上がらせてもらう。

「折角カワイイ顔してるのに、もう隠しちゃったの？もつたいないわ」

「い、いいんです。私はやっぱりこの方が落ち着きますから」

ミッドナイト先生の残念そうな言葉に私ははつきりとそう返す。やっぱり私は目が隠れてる方が落ち着くし、周りの視線も気にならなくなつてちようどいい。1位の表彰台に注がれる視線は強烈でいつもの私だったら縮こまって誰かの後ろに隠れてたかもしれないけど今だけは胸を張つてこの場所に立とう。どんな形であれ、私はこの場所を勝ち取つたなら、それにふさわしい姿であるべきだから。

「じゃ、早速表彰に移らせてもらおうわ！今年のメダル贈呈は勿論この人！」

「私がメダルを持って「我らがヒーロー！オールマイト！」……か、被っちゃった……！凄い、すごい気まずい……！表彰台に漂うこのいたたまれない空気、何時もの陰影の濃い画風の違う笑顔で無言のままミッドナイト先生を見るオールマイト先生、暴れる爆豪くん、我関せずの轟くん……なんて個人的なんだろう。どうすればいいのこの空気……助けてえーくん……。」

「本来なら3位には飯田くんもいましたが、おうちの都合で早退となりました。ご了承くださいな」

「気を取り直してメダルを授与させてもらおうよ！まずは爆豪少年……これはあんまりだな……。」

「オールマイトオ……そんなメダル要らねえからさっさと終わらせろオ……！俺は負けた！それで十分だクソが！次は絶対に1位になってやる！」

「む、上昇志向なのはいいことだ爆豪少年。有言不実行は残念だが、受け取りなさい。これは君が努力し、勝ち取った証なのだから」

「いらねンガツ!?ん”ん”ん”~~~~~!!!」

爆豪くんの猿轡を外したオールマイト先生が入れ替えるように猿轡を爆豪くんに啜えさせてメダルを授与する。授与って言うていいのかな……?めっちゃ歯がギリギリ言ってる。その、すり減って折れちやいそう……

「顔つきが変わったね轟少年！決勝で左を収めてしまったのには理由があるのかな？」

「……分からなくなっただけです。緑谷にきっかけ貰って、俺だけ吹っ切れて……それじゃダメだと思った。全部清算してからじゃな」と使えないと、思ったんです」

「そうか、今の君なら必ずできる。準優勝おめでどう轟少年！次の年も期待しているぞ！」

轟くんをぎゅっとハグしたオールマイト先生が、彼の首に銀色のメダルをかける。そのメダルを手にとって見つめた轟くんは静かに頭

を下げて前を向いた。それを満足気に見つめたオールマイト先生が今度は私の前にやってくる。私より少し背が低いオールマイト先生は、グツと右手のサムズアップをくれた。

「優勝おめでとう樗少女！頑張ったね！今君は雄英の1年生の頂点に立った！プロの目からも君を欲しがるところは沢山あることだろう！」

「はい、ありがとうございますオールマイト先生」

「多くを語る必要はないみたいだね！君の応用力の高い個性はどの現場でも必要とされる素晴らしいものだ！いつか同じ舞台上で君と肩を並べるのを楽しみにしているよ！」

オールマイト先生はそう言って、私の首に金メダルをかけてくれる。そしてそのまま、大きな暖かい手で頭を撫でてくれた。オールマイト先生に促されて、私は片手をあげる。ガッツポーズだ。その瞬間に爆発するように観客が沸く。クラスの席からもみんな、歓声を上げていた。私はそれに満面の笑みで返す。

初めての体育祭は私の優勝という結果で終わった。だけど、それだけじゃなく沢山変わったこともある。クラスメイトの新たな一面を知れたり、お友達が増えたり。つまり何を言いたいかと言えば……私にとっては考え得る限り最高の結果だったってことだ。

## 職場体験編

### 26話

「ねえ、君！樫さんだろ!? 体育祭！見てたよ！」

「ひゃ、ひゃい！あ、ありがとうございますう……」

「そっちは切島君かい!? 体育祭凄かったね！ヒーロー目指して頑張ってるね！」

「ウツス！ありがとうございます！」

あの体育祭からはや二日、体育祭の振り替え休日を挟んだ今日は登校日……なんだけどこれがすごい。歩くとそこかしこから声がかかって、体育祭のお話をされる。やれえーくんととの戦いがアツかったとか、爆豪くんの時もカツコよかったとか。メカはロマンだとか、安心感ある大きさだね、とか。

私と一緒に登校してるえーくんもそれは同じでえーくんはその圧倒的なコミュニケーション能力をいかに発揮して笑顔ですべてに対応しているんだけど、私は全然ダメダメ、どもったりいいコメントが思いつかなかったり……といふかなんで変装してるのに私だつてわかるんだろう……?」

「コー、ホー……」

「なあ希槭。ベイダー卿のマスク被っても多分背と手足で分かっちゃうぜ?」

「そんな！不気味さで曖昧にできると思ったのに！」

「逆に注目集めて見つけれられてるんだよ……ホントお前……テンパると処理能力が落ちるよなあ」

「社長さんにも言われた……慌てると反応が遅いつて」

今日はいにくの雨、この二日間で繰り返し何度かメディアに映つて武器を振り回す私の姿が放送されたかわかない。だって例年話題になるのは3年生と2年生で、1年生は新聞の隅っこにちよこんと結果が張り出されるくらいだったから。それが3年生を押しつけての主演扱いな上に、掲示板に至っては専用の実況スレッドまであった

んだ。その、中身に関しては思いだしたくない……。

私専用サイズの巨大な傘を差して、えーくと雄英に入る。雨の日はちよつとイヤ、だつてみんなと違って裸足な私は足を拭かないと校舎の中に入れないから。バスタオルを取り出して、念入りに機械でできた足を拭う。錆びたりはしない、というか錆びるまで放置はしないので私の足はいつもピカピカ、鈍色の鏡のような感じに保ってる。

「おー来たぜ優勝者！なあ樫！お前道中どうだった？声かけられただろ!？」

「あ、上鳴くんおはよう。うん、とつても……ちよつと怖かった……」

「だよなーっ!! 一気に注目的になっちまってよ! やっぱすげえな雄英つて!」

教室の中に入ると、早くに来た人がそれぞれグループに集まって雑談に興じていた。ベイダー卿のマスクを小脇に抱えた私に話しかけてくる上鳴くんに思わず返してしまう、しまったまだ私は体育祭のチアのことを許したわけじゃないんだぞ。掲示板でとんでもないこと書かれてたから恥ずかしさ倍増なんだぞ、とウエイウエイ言ってる上鳴くんは無言でマスクを被せて私は自分の席に向かう。

「え? なにこれ!？」

「上鳴ちゃん、ベイダー卿ね」

「呼吸音まで再現してすげーっ!」

話題がそれでベイダー卿マスクで遊び始める皆をしり目に、私は机に突っ伏して、失った体力の回復に努めるのだった。え? 八百万さんどうかした? 頭から湯気? 熱がこもってるんですう……。

「おはよう、体育祭お疲れ様だったな。今日の連絡事項だが若干多い、よく聞くように。上鳴はそのマスク取れ」

ガラガラ、と教室のドアを開けて寝袋を片手に持った相澤先生が入ってくる。粉砕骨折で治癒が長引いたらしい腕の包帯はすっかり取れて、私も一安心だ。ドアが開いた瞬間に自分の席について静か

にしてた皆だけどベイダー卿マスクをつけてた上鳴くんは出遅れて怒られてる。

「で、まずだが今日のヒーロー情報学。コードネームの考案だ」

胸が膨らむやつだ！と私のテンションが上がるのと同じようにみんなのテンションも上がって腕を振り上げる人もいるくらいだ。相澤先生のその言葉は私たちの興味を引くのに充分過ぎるものだった。というのもヒーローネーム、オールマイトとかパワーローダーとか……活動中に名乗る名前を自分で考える、否が応にも楽しくなってくるでしょ！

「はい、静かに。というのも体育祭前に話したプロからのドラフト指名に関する話でな。君たちには指名の有無関係なく職場体験に行ってもらおう！」

しよ、職場体験!? ってことはヒーローの事務所に行ってヒーロー活動のお手伝いをさせてもらえたり直接アドバイスを求めることができるってこと? それってとつてもすごいことだ! しかも指名無くてもいける!! 私は正直体育祭だと破壊力に長けたゴリラ女っていうB組の物間くんが言う通りの活躍をしたと思うので都市部で活動するヒーローには嫌われたかもしれない。多少は指名あればいいかな。うって思ってたけど……どうだろう?」

「で、その肝心の指名なんだが……今年は大分偏ってな。結果はこうだ」

「二〇〇〇 (さん) が7000件!」

「あの、さすがに集計ミスでは……?」

黒板に投影された集計結果、爆豪くんが3000件、轟くんも3000件と並んでいき、デクくんは1000件えーくんは3000件の指名があるみたい、なんだけど私の数字が抜きこんでいるというかダブルスコアで他を引き離してるので棒グラフがちっさい。というか7000件は流石に盛ったとしか思えない……。

「樫の場合は少し事情が違う、ヒーロー事務所が4000弱、残りはサポート会社だ」

「え、サポート会社も指名権を持つてるんですか?」



「持つてるわけじゃないが、ラブコールが山ほどきてな。お前も知ってる発目にも来ている。それで校長の判断で指名として扱うことになった。職場体験はどっちに行ってもいい、お前の場合はどっちも糧になるだろうからな」

な、なるほどサポート会社……そういうのもあるんだ……確かに私にとってはどっちに行っても糧になる。最新の技術に触れれば個性が伸びるし、ヒーロー活動は言わずもがな。最近詰まってる荷電粒子の実用化とか超圧縮技術だとかについて知れたら私はもつと強くなるから。あと新素材！頑丈で、軽くて、硬くて！そういう凄いのがあったら知りたいなあ！ああ、I・アイランドに行けたらいいのに……

「それでヒーロー名だ。プロの職場に行くんだからな、適当な名前を付けるなよ。付ければ……」

「地獄をみちやうからね！」

「ミッドナイト先生！」

「とまあ今からのヒーロー情報学、ヒーロー名のセンスなんぞ俺にはよくわかるのでそこら辺をミッドナイトさんに査定してもらおう」

「ボードを配るからそれぞれヒーロー名を考えて発表してもらおうわ！名は体を表す！なりたい自分をよくイメージしてね！」

相澤先生の言葉を遮ったのはミッドナイト先生、時計を見るともう既に1時限目に突入する寸前だった。時間をきっかり守る相澤先生にしては珍しい、というか私が延ばしちやったからか。反省しないと。ミッドナイト先生が用意した真っ白いホワイトフリップに私は手持ちの油性ペンを使ってヒーローネームを記入していく。実はもう決まってたんだ、えーくんにも内緒にしてたけど。

そして15分後……名前順で発表していくということで登壇したのは青山くん、彼はこのクラスの中でも私と話さないし誰かと一緒に何かしてるのを見たことない不思議な男の子。

「輝きヒーロー！ I can not stop twinkling！」

え？短……文……？ありなの？と私が目の前の事象にメモリと脳

みそをフリーズさせていると、ミッドナイト先生は大まじめにIを取って短縮形にした方が呼びやすいとアドバイス。なんか流れがおかしくなってきた気がする。もしかして三奈ちゃん……？大丈夫だよね？信じていいよね？

「リドリローヒーロー！エイリアンクイーン！」

ガッシャン！と音を立てて私は自分の机に沈んだ。三奈ちゃんの流れで確定してしまった、完全に大喜利めいた流れになってきてしまっているとは、発表しづらいよお……あ、机が凹んじやった……さっきの短文はオツケーだったのに三奈ちゃんのやつはミッドナイト先生のやり直しを貰っている。何がダメなんだろう？著作権とかそういうのに引っかかるからなの……？

「ケロ、私は……梅雨入りヒーローフロツピー！昔から考えてたの」か、かわいい！梅雨ちゃんらしいいい名前だと思う！ミッドナイト先生の手放しの賞賛を受けて照れ臭そうに席に戻る梅雨ちゃん、かわいい。そこで完全に流れが変わり、みんなそれぞれ自分の考えたなりたいヒーロー名を発表していく。えーくんの烈怒頼雄斗、昔から聞いてたやつ。他にはチャージズマやウラビディ、イヤホンⅡジャックとか皆らしい名前を発表していく。

本名そのままのショート、デクくんはヒーロー名も頑張れって感じのデクにしてみたみたい。爆豪くんの爆殺卿はリテイク、そつとベイダー卿マスクを見せたらすごい目をされたのでひっこめた。2回目三奈ちゃんはピンキー、クリエティ、グレイプジュース……そして今度は私の番。

「メカヒーロー、エクスマキナ。一番しつくりくるかなって思います」

「デウスⅡエクスⅡマキナからかしら？」

「はい。強引なハッピーエンドにする機械仕掛けの神様……だけど、ハッピーエンドでいいじゃないですか、神様にはなれませんがみんなを幸せにする機械でいられたらって思います」

何でもできる神様じゃないけれど、救いの手にはなれる。ハッピーエンドにする機械仕掛けのヒーローとしては中々いい名前じゃない

かなって気に入ってる。最後まで考えてた飯田くんは自分の名前で落ち着いたけど……とても悩ましい顔。お兄さんのことが関係してるのかな……連休中のニュースで飯田くんのお兄さんであるプロヒーロー、インゲニウムがヒーロー殺しなるヴィランに再起不能にされたという話を聞いた。

とても深くは聞けないし、聞くべきことでもないからクラスのみんなも察して話題にするのは避けてる。幸い、命に別状はないと聞けるけど……大丈夫かな……？

「爆殺王……！」

「違う、そうじゃないわ」

爆豪くんも違う意味で大丈夫かなあ……？

どっさあ……と私の目の前に積みあがる紙の束。ちなみに規模は違えど轟くんと爆豪くんの机にも同じ現象が起きてる。ざああっと雑に鞆に詰め込んでさっさと帰っちゃった爆豪くん、一方の轟くんはちらつと眼を通していくつもりみたい。私は流石に多いので情報学の授業の後データでくださいとUSBメモリを作って渡して、帰りのホームルームでメモリを受け取っている。

ぶすつと右耳のアクセサリにメモリをぶつ刺して中身を閲覧する。うわ、ほんとに7000件近くある……ヒーロー事務所は……有名どころが沢山……!?リユークュウ事務所に、ファットガム事務所、クラスト事務所、ギャングオルカ事務所……!!サー・ナイトアイの事務所まで!

「えっ……エンデヴァー事務所まである……！」

「それ、ほんとか？」

「え、轟くん？」

「クソ親父は俺に入れるとは思ってたが……もう一つをお前に入れたのか。何を考えてやがる……！」

「どうしたの？」

「何でもねえ。俺はクソ親父の所に行くから……一緒にになったら俺が守るからな」

「……轟くん、凄いこと言ってるよ今……」

「友達守るのは当然だろ。なんか問題あること言ったか？」

クラス中がシン、と静まり返っている。轟くんが私のことを友達って言ってくれたのは嬉しいけど、これ女の子が選ぶイケメンに言われたいセリフ堂々1位に燦然と輝くやつじゃない？轟くん、ド天然なんだね……デクさんと話してたえーくんは轟なら安心だな！って言ってるけどそうだけじゃないの。女子のみんなはイケメンだから……って言ってるし、峰田くんは血の涙を流してる。

だめだカオスだ。こうなれば他の情報はシャットアウトして真剣に選ぶほかないよね、と思考の海に沈む前に教室に独特な体勢でやってきたオールマイイト先生によって教室の空気は一変した。ありがとうNo.1ヒーロー！でもデクくんを呼び出したってことはワンフオーオール絡みなのかな？気になるなあ……。

サポート会社の方は……なんか偏ってる。主に色々、というか半分軍需産業もやってる会社ばかり！スプーンから宇宙ロケットまでのキャッチコピーでお馴染アナハイム・エレクトロニクスの日本支社、圧縮技術に秀でたサナリイ、センサーのアクアビットに火薬庫と有澤重工、うわ、海外だけでもメガコープに謎が多くて有名なフアクトリーまで……！どうしよう、サポート会社のほう行きたくなってきた。最新技術が沢山ありそう……！このコジマっていう企業は聞いたことないけどどんな会社なんだろう……？

「だめだ。かえって考えなきゃ……」

「そーだよねー。希械ちゃん沢山指名貰ってるし！私はゼロだよおかしくない!？」

「え、三奈ちゃん飯田くんにキレイにカウンター入れたしいところまで行ったのに……」

「うわーん、慰めて希械ちゃん〜!」

半泣きで飛び込んでくる三奈ちゃんを受け止めて、私は三奈ちゃんの魅力が分からないなんて案外プロは見る目がないのかとちょっと怒るのだった。



## 27話

「オイラはMテレデイの所に行くぜ!」

「峰田ちゃんいやらしい事考えてるのね、不潔だわ」

「梅雨ちゃん……オイラなんもしてないんだけど!」

「アンタ樫に謝った? ウチらは制裁したけど、樫はなんもしなかったじゃん?」

「オイラはそれに関して謝る口は持たねえ!」

「上鳴さんはきちんと謝罪いたしましたのに……」

職場体験の行き先の話でクラス中が持ちきりだ。明日までに希望の体験先を記した書類を先生に出さないといけないので割と急ぎでもある。もう体育祭のチアの件に関しては諦めの域に入ったのでいいや、だけど峰田くんは私じゃなくてえーくんからお話があるみたいだよ? あ、連れてかれちゃった。えーくん騙すとかそういうの嫌いだからね、合掌。

かくいう私も迷いに迷ってる最中で、だって時代を時めく最先端の技術の集まりである企業に体験に行くか、本分であるヒーロー事務所に体験に行くか……これほど悩ましいことがあるだろうか!?! いやない! なので私は脳内CPUのクロック数を極限まで増幅して悩みに悩みぬいてる最中なんだ。こういう時に頼りになるのは……

「ねえ、デクくん。デクくんは職場体験行くところ決めた?」

「あ、樫さん。うん、僕はもう決めたよ……昨日オールナイトから勧められたところなんだけど」

「そうなんだ……私と一緒に最後までうんうん唸ってるかと思っただのに……うらぎりもの」

「う、裏切り者!?! いや別にそういうつもりはなくてその」

「冗談だよ。デクくんはからかい甲斐があるね。それでなんだけど……エンデヴァー事務所とアナハイムエレクトロニクス社で迷ってるんだ。どっちいけばいいと思う?」

「どっちも超大手じゃないか……! エンデヴァー事務所は確かにNo.2で事件解決数に至っては間違いなくトップ、それでいて人命救助も

怠らないがエンデヴァー本人は……」

でた、デクくんの超速ブツブツ情報整理。デクくんはどうやらヒーローオタクというやつみたいでそれはヒーロー本人じゃなくてサポート会社にも及んでる。端的に言えばこのヒーローが付けてるスーツはこの会社で作ったものでどういう機能が付いているかを把握してるんだ。ぶっちゃけヒーロー関連で言えばこのクラスの誰よりも頼りになると思う。ナードって爆豪くんはいうけどヒーロー科ならそれは武器だ、それに私は凄と思うから。

で、デクくんからの情報を整理するとエンデヴァー事務所は間違いなくトップクラスだけどエンデヴァー本人がファンサービスを一切しないお陰でそういう内情の情報がほとんどないみたい。幸いサイドキックの人たちはファンサービスに厚いみたいだから雰囲気的には悪い事務所じゃないと思うそうだ。

打って変わってアナハイムエレクトロニクスはヒーロー業界では大手に位置にするけど作ってるのはスーツじゃなくて汎用サポートアイテムが多いらしい。そこまでは私でも知ってるけど、最近の傾向としては一気にお金が取れるサポートアイテムの中でも大型のもの、要は私のホバーバイクみたいなサポートビークルを主力に位置付け始めてるのだとか。ふうむ、それは知らなかった……。

「なるほどなるほど……デクくん詳しいね。そうするとやっぱり私はエンデヴァー事務所かなあ」

「す、好きだから自然に……あの、聞いていいかな？」

「ん、なあに？」

「どうしてエンデヴァー事務所がいいって思ったの？ 樫さんならこれこそリユークュウ事務所とかホークスとか……飛べるし個人的に合ってる場所からも指名きてたんじゃ……」

「ああ、それは私の弱点が関係してるの」

「弱点って……オーバーヒート？」

そう、私の弱点である個性のオーバーヒート問題。私の個性は使えば使うだけ熱がたまっていつて最終的に許容量をオーバーすると個性が使えなくなっちゃう。これは外からの熱も関係していて、例えば

轟くんの炎や爆豪くんの爆発の熱は私にとってはウィークポイント。ばれてたら体育祭負けてたかもしれない。一応ある程度は排熱とかで補うことができるんだけど……

「裸になっちゃうから強制排熱は現実的じゃないし……エンデヴァー本人の弱点もそうでしょ？体に熱がこもって身体機能が下がる」

「……確かにそうだね……轟くんは氷結が相互補完してるけどエンデヴァー本人はどう対策してるのかってことだよな？」

「うん、そう」

裸、というワードで死に体の峰田くんがガタツと椅子から立ち上がったけど耳郎さんにジャックを刺されてドックンと心音を聞かされて沈黙した。流石に色々と敏感だね……あとは私本人の熱耐性をあげられたらなって思う。それはそうとエンデヴァー事務所って炎系のヒーローがサイドキックとして沢山いるけど……なんで私にも指名を入れたのかな？

「そういえば、切島君はどこに行くか決めたの？」

「お？俺か？俺あB M Iヒーロー、ファットガムの所に行くぜ！指名来てたしな！」

「えーくんにびったりだよな。ファットガムって防御系のヒーローだし……でもクラストからも来てなかった？」

「ああ……考えたんだけどなあ、クラストはシールド出して守るだろ？んでファットガムは体で受けるだろ？ファットガムの方が俺にちけーかなって」

「ファットガム事務所は対都市犯罪のスペシャリストだし、切島君の個性は魅力的に映ったんだね！すごくいい選択だと思うよ！」

デクくんのお話を参考にしつつ、私はやっぱりヒーロー事務所に行きたいから、記入用紙にエンデヴァー事務所と書いて、相澤先生に提出に行くことにした。

「いきました!!」



「へうっ!?!は、発目さん!?!」

「はい!発目明です!というわけでサポート科に行きましようすぐ行きましよう!」

「いや、行かないけど……」

「どうしていかないんですか……!」

相澤先生に職場体験の紙を提出したすぐ後で、職員室前にて作業服姿でオイルと煤にまみれた発目さんに見つかった。次のサポート科に行く日は職場体験が終了してからなので私としては用がないと言いますか……まあいろいろ我慢させたのはそうだけど、気になるんだね私の技術……うーん、やろうと思えば公開されてる技術だけしか使つてないから再現は出来るハズなんだけど……

私の腕を引つ張つたり、背中を押しくらまじゅうのように押して私を移動させようとする発目さんだけど残念ながら私は常人の力では移動させることは不可能なんだ。何キロあると思ってる?成長したぜ主に肉体部分が。嬉しくないです。

「樫さんは……樫さんは私がきらいなんですかあ……?」

「いやきらいってわけじゃうっ……」

私を見上げる発目さんのスコープのような十字が入った目からぼろり、ぼろりと涙がこぼれ出る。うえ、まさか泣かれるだなんて思つてなかった!どうしようヒーロー科のくせして他クラスの一応優秀な女の子を傷つけたとあつてはどんなおしばきが待ってるか分からない……ん?あれ?」

「目薬じゃん!」

「あーだめですよねえ……なので普通をお願いします。分解とかそういうことは一切しませんので、少しだけお話しして欲しいのです」

「最初からそう言えばいいのに……」

「フフ、あわよくばということもあるじゃないですか」

「あつたら困るのは私です、もう」

じつと彼女の顔を伝う涙……よく見たらっていうか隠すつもりもなく右手に目薬が握られていた。危ない危ない、峰田くんたちと同じようにまたまた騙されるところだった。まあずつと私がほつたらか

しにしたせいというのものもあるし、今回ばかりはちゃんとお話を聞いてあげようじゃない。分解しないって言ってるし……

「さー着きましたよ！私の3代目研究室です！」

「3代目……？」

「前二つは爆発で木っ端みじんになりました」

「良く生きてたね……」

何度かサポート科にはお邪魔してるのでまあ顔見知りの人はそれなりに。一番強烈だったのは3年生の人かなあ、根掘り葉掘り聞いてきてパワーローダー先生から締め出されたりとか。パワーローダー先生も私のことをよく助けてくれるんだけど根は発目さんたちと一緒になようで私の武器が気になるというのは変わらないみたい。

3代目らしい研究室のドアを開けると、腕を組んだパワーローダー先生が指をトントンと動かして若干いら立っている様子。せ、先生怒らせるなんて発目さん何しちゃったの!?!はあ、とため息をついたパワーローダー先生は

「残念ながらここは僕の研究室で君はここを間借りしてるだけだよ。初めてだよ入学してそう経たないのに研究室をダメにした学生は」

「失敗は成功の母と昔から言います！どんなことでも恐れずチャレンジしてこそ成功への道が開けるのです！」

「言ってることは正しいがリカバリをもっと考えなさい。それで？樫まで連れてきたのはどういう理由かな？」

「はい！実はこのベイビーについて意見を聞きたくて……樫さんはヒーロー科ですけどサポート科こつち寄りでしょうし、御詳しいんじゃないですか？」

そう言っただけで発目さんが見せてくれたのは明らかに開発途中らしいパワードスーツだった。あ、もしかしてUSJで回収されたゴリアテの残りから発想を受けたのかな？ゴリアテの方はほとんどスクラップみたいなものだったけど技術的には結構最先端な方だったという自負がある。特にパワーには自信が、というかそれ目的で設計したわけ……特に自信作なのが関節に搭載されてるパワーシリンダー！

あれが無かったら間違いなく脳無に力負けしてた。

で、右目を使いつつパワードスーツを見てみると……ありや？これいかんやつだ。熱の排気どうなってる？主電源はバッテリーみたいだけど……中の人火傷しちゃうよこれ……。

「もしかして熱問題？」

「はいっ！流石樫さんこのベイビーの問題点を見抜くなんて！排熱が追いつかないのですっ！あの樫さんのおつきなパワードスーツを参考にしてみたのですが……現在の技術では排熱よりも籠る熱の方が凄いいもので……樫さんはどうやって解決したのでしょうか？」

「私の場合はこれかな。冷却ジェル……私が個性で作ったものなんだけど……熱を奪う性質があるの。これを全身に回して熱を回収して、気化させて排気と一緒に放出する。冷却専用のシステムを組み上げる必要があるけど、それを補うほど便利だと思うよ」

「……樫、君これどうやって作った？」

「え？素材の方は発表されたものの組み合わせで、あとは試行回数を踏みました。失敗しても私の個性ならすぐに別のものを組み立てられるので。この場合はざっと……600回くらい成分を変えてたと思います」

気化しやすくそれでいて熱を奪う性質を持つ液体、デクくんが個性テストで指を折ってしまった時に使った冷却ジェルはこの完成品の失敗作の一つだが、冷却効率が良くて尚且つ気化しない性質を持ったので使ったんだよね。私の個性があれば他の実験室とは比べ物にならない速度で実験を繰り返すことができるから。机の上に置いたケースになみなみ入った冷却ジェルに発目さんは目を輝かせ、パワーローダー先生はむっつりと黙ってしまふ。

「このジェルの構成は後でメモで教えてあげるね。雄英の施設ならすぐ作れると思う」

「ありがとうございますっ！いやーやはり相談してみるものですねえ。出来ればベイビーについてもっと語り合いたいものですが！」

「樫……君、免許取るつもりはない？」

「免許、ですか？」

ジェルをかがげて喜んでくれる発目さんを微笑ましく思っている  
とパワーローダー先生がそんなことを言う。免許ってヒーロー免許  
かな？でもそれはまだ無理のハズで……いや、このタイミングで言わ  
れるってことはサポートアイテムの免許のことか。

「サポートアイテムの免許のことですか？」

「そう、僕も持つてるけどね。いずれは君も必要になるだろう、例え  
ば他の人に君が作った武器を貸し出す必要が出た時とかね。持って  
おけば違法じゃなくなる」

「そんなに簡単に取れるものじゃないんじゃない？」

「いや、君の場合……まあ発目もだが取得要件は満たしているんだ  
よ。オリジナルのサポートアイテムの開発という要件をね。あとは  
法律関係を暗記すればいいが……君はそこら辺も得意だろう？」

「あ、法律なら全部覚えてます！違法実験を家でしたくなかったの  
で！」

「君、隠してるだけで実は発目とおんなじだね？」

「え、技術者ってみんな大なり小なりそういうものなんじゃ……？」  
ねえ？と発目さんをみるけど彼女は目をキラキラさせてジェルに  
夢中、ちよつとかわいい。というかパワーローダー先生だって人のこ  
と言えないのでは、だってだって私のアロンドイトとかナンバーナツ  
シング分解したかったんでしょ!?!レーザー技術は軍に持ってかれて  
るからあまり見ませんもんね！でも苦労したんですよ、特にあのナン  
バーナツシング！

技術者にしかできないトークを展開する私に当然のようについて  
くる発目さんとパワーローダー先生に突っ込んだ話を振る。理解が  
早いうえに私じゃ気付かなかったところまで突っ込んできてくれる  
！私の周りじゃそういう話ができる人はいなかったから楽しいなあ。  
用が無くてもサポート科来てもいいかもしれない。

## 28話

「コスチューム持ったな？本来公共の場じゃ着用禁止なわけだが……落としたりするなよ。特に上鳴」

「なんで俺名指し!？」

「ブフツ……アホになつたらサムズアップで落とすんじゃない……フフフ……」

職場体験当日、大きな駅に集まった私たちに学校から運んできたコスチュームを相澤先生が配ってくれる。周りにはB組の姿もあつたけど、こちらにやってくる物真くんをクラス委員長だという拳藤さんが華麗に当身で気絶させた。これから新幹線乗るのに大丈夫なのかな……あ、塩崎さんだ。手を小さく振つたら微笑んで振り返してくれる、いい人だ。

「希械、おめー結局エンデヴァー事務所にしたんだな。轟と一緒にか。轟！希械のこと頼んだぜ！」

「ああ」

「二人は私の事を自衛もできない大型犬か何かだと思ってるのかな？」

「いや、そういう意味じゃねえんだ」

「……轟くん……？」

二人は顔を見合わせて頷きあつてるんだけど多分えーくんが考えてることと轟くんが考えてることは違うような気がする。轟くんが言葉少なくてそこら辺の意思疎通がうまくいってないような、そんな感じ。でまあ、私の職場体験先であるエンデヴァー事務所に行くのは即決したらしい轟くんだ。お父さんの事務所に行くのはやっぱり個性が似通ってるからだろうか……？でも轟くん、お父さんの事嫌いなんだよねきつと。

身内がヒーローと言えば飯田くんだけ……インゲニウムの事務所所はいま活動停止状態だ。サイドキックの人たちが治安維持に努めてるんだらうけど職場体験に行く余裕はないみたい。それでも、それでも引っかかるのは飯田くんが選んだ指名先が保須市のヒーロー事

事務所だということだ。ノーマルヒーローのマニュアルが構える事務所、ビルボード圏外ではあれど堅実的な活動で知られている。

保須というのはインゲニウムがヒーロー殺し「ステイン」にやられた場所……飯田くん、変なこと考えないといけれど……。いつもルールや規則を重んじる飯田くんが法律を越えて復讐に走る、そんなことはないと思いたい。だけど私は、新幹線に入る飯田くんの硬い横顔に、いまいち不安をぬぐえないのだった。

「なあ……何でアイツの事務所を選んだ？ No.2だからか？」

「え、あ、うん……弱点の克服かな。轟くん知らなかったっけ？ 私、熱に弱い。だから轟くんの左側は私の天敵」

「……弱点なのに使うよう煽ったのか？」

「あはは、まあそうかもね。デクくんに触発されちゃった。轟くんはどうして？ お父さん、多分きらいなんですよ？」

電車の中、エンデヴァー事務所は雄英から割と近い場所にあるので快速特急に乗って移動中。実は私、あんまり電車に乗ったことないからちよつとだけワクワク。でも私のようなビックサイズはやつぱり邪魔だね、でも空いててよかったあ。ぎゅうぎゅうづめで轟くんを潰したりしたら申し訳ないし、新幹線だと相澤先生は隣の席取るから私のお尻が轟くんスペース侵略しちゃうし。快速特急でよかった……。

轟くんはお話するのはそこまで得意じゃなさそうだから積極的にお話するのと思って私は脳内でネットに接続してネットサーフィンと新装備の設計をしつつ割と嫌いじゃない沈黙の中にいたんだけどその沈黙を破ったのは轟くんだった。聞かれたのはエンデヴァー事務所を選んだ理由、確かにNo.2っていうのは大きな肩書だけど、私のはあんまり気にしないかな。自分の糧になる場所を選びたい……そういう意味ではくっ！アナハイムとサナリイにも行きかけたっ！

「俺は……確かめてえことがある。クソ親父から俺は目を背け続けてきた。でも、知らなきゃならねえこともあるっってお前らに教わった、だから」

「そうなんだ。轟くんの事情、私は全然知らないけど……知れるといいね。まあ、轟くんはエンデヴァーさんが直接見るだろうしいやでも知れるかも。私はきつとサイドキックの人と一緒にだと思おうし」

「……なんでだ？」

「いや、体育祭のとき。デクくんが左を使った時、エンデヴァーさん何か叫んでたでしょ？多分、かなり入れ込んでるように見えたから……忙しくても轟くん自体は自分で見る為に指名したんだと思う。私は……余り？」

「樫と一緒にやねえのは……嫌だな」

「イ、イケメンが発動した……絶対轟くん中学校で告白祭りとバレンタインデーで机がチョコで埋まる現象が起きてたに違いないよ！そんなストレートに嫌だつていえる!?私は言えないよ！轟くんすごいね……!?あ、でも轟くんってお友達をあまり作らないタイプだったみたいだし、距離感が分かってないのかも？そうするとちよつとかわいいかもしれない。」

「二応俺から言ってみる。呼んだんならてめえが見ろつて」

「いやいやダメだよ!?向こうはお仕事で見てくれるんだから！私情入れたらだめ！」

「とんでもないことを言う轟くんにぶんぶん腕を振って否定する。体育祭より前は全然関わりなかったんだけどこういうキャラクターだったのか轟くん……！私は目的地に着いた電車から降りるため、立ち上がる。遅れて立ち上がった轟くんの半分に分かれた髪を見ながら、心配されるのは轟くんじゃないかな？と失礼なことを考えてしまうのだった。」

「よく来た焦凍オ！それと君もよく来たな。俺がエンデヴァーだ」

「……うるせエ……！」

「え、え、とその……樫希械です。よろしくお願ひいたします」

「よし、事務所に行くぞ。そこで職場体験の内容について説明する。急いで乗り込め」

歩きかタクシーで事務所まで行くと思ってたんだけど、駅の前にヒーロースーツ姿のエンデヴァーがメラメラと髭を燃やして仁王立

ちしながら待っていた。後ろでは待っている間に捕まえたと思しき犯罪者が山積みになっていて警察が対応してる。うわあ、あつうい……！やっぱり私ついで説高いなこれ？エンデヴァーに促されて車高が高めの車に乗り込んだ。私の体重でぎしつと沈む車に真っ赤になりながらも、車はスムーズに発進する。あ、エンジン音からしてこの車アナハイム製だ。何でも作ってるなああの会社。

流石に車の中では炎を消したエンデヴァーさん、そして彼が来てから一気に不機嫌になった轟くん。気、気まずいよう……！電車の中のほわほわ轟くんじゃなくて、氷みたいは無表情になつちやつた轟くん。こ、この状態で1週間職場体験するのお……？私、耐えられるかなこの重さに……。物理的な重さなら電車一両くらい持ち上げられる私だけど精神的な重さはどうにもならないんだよお……うう、たすけてえーくん……。

「先に事務所に戻っている」

「え!?エンデヴァーさん!」

そう言うや否やドアを開けて飛び出したエンデヴァーさんが足の炎を推進力にして空を飛び、ビルの向こうへ消えてった。エンデヴァーさんがドアを開けた瞬間に、遠くから小さな女性の悲鳴がかすかに聞こえた。ま、まさか……今の車を車の中から見抜いたってこと!?私だって無理だよそんなの!?だってまだ何も起きてないんだから!すごい……ひたすらに見えない高みにいるとしか思えないよ……!

「あいつ……いつの段階で見抜いてたんだ……?」

「何も起こってない時から警戒を怠らない……凄い、これがエンデヴァー……」

運転手さんはそれが日常のように無反応で車を運転し続けている。そして私と轟くんさえもNo.2との圧倒的な差にただただ驚くしかなかったのだった。

「ようこそエンデヴァー事務所へ!案内させてもらおうよ!」

「バーニンさん」

「久しぶりシヨート君!貴方は初めましてだよね!?体育祭みてたよ



く！エンデヴァーが焦凍君以外に票を入れるなんて前代未聞！1週間みっちりヒーローを体験させてあげましょう！私たち！」

「「炎のサイドキツカーズ！」」

「あう……よろしくお願いします」

事務所の中に入るなり歓迎の言葉をくれたのはエンデヴァー事務所の筆頭サイドキツクの一人であるバーニンさん。緑色に燃える髪をした彼女はうん、おつきいねくく！と私を評してくれる。ビシ、とお決まりらしい決めポーズをサービスしてくれたサイドキツカーズに若干圧されつつもガチャガチャと拍手を返す私、見慣れてるのか無反応の轟くん。

「じゃあエンデヴァーが帰ってくる前にヒーロースーツに着替えちやいなさい！樫ちゃんは私が案内するよ！ショートくんは」

「いらねエ。知ってる」

「だよね〜！」

轟くんは何度か事務所に来たことがあるみたいで迷いなくヒーロースーツを手に部屋を出ていった。私はどうしたらいいのか全く分からないのでバーニンさんについて女性用の更衣室に案内された。流石はNo.2の事務所だけあってどこもかしこもきれいだ。ひえ、ロッカールームまである……！電子錠だ！私にはあんまり意味ないけど。機械だから。

「それじゃ、着替えたらすぐに出ておいでよ！お化粧必要なら洗面台はあそこねー！」

「お化粧!?女性ヒーローはそれもするんですか?」

「あー、する人としらない人がいるよ。私は燃えちやつてブサイクになるからしないけど！前線ヒーローはしない人が多いんじゃないかな?ただ、ヒーローがお化粧できるってことがそれくらいヒーローが暇ってことだからね！いいことなのさー！」

ぐつと背伸びをして私の頭、後頭部をポンと叩いてバーニンは部屋を出ていく。お化粧かあ……あんまり考えたことなかったんだよね……だって私、顔の上半分は髪で隠れてるし、ひどくなったら体が熱を持つちゃうからお化粧浮いてきちゃうかも。うん、私には必要ない

かな、お化粧。

ブアツと髪の毛に青いメツシユが入り、左目を露出して髪の毛を固定する。下着のラインが出ない特注の下着、授業以外で初めて袖を通すヒーロースーツ。着心地よく、私の意識を塗りかえてくれる。着ると、やるぞと勇気と自信が湧いてくる。だってこれが、小さいころからあこがれたヒーローの姿だったから。

「お待たせしました〜……」

「おお、いいデザインしてるじゃない！さ、エンデヴァー戻ってきたよ！シヨートくんももう行ってる！」

「はいっ〜」

澆刺としたバーニンに促されて広いエンデヴァー事務所の中を歩く。他の部屋とは少し豪華な扉の前で止まり、礼儀正しくノックした。入室を許可する声は部屋の中から聞こえてくる。それを確認してバーニンはドアを開けて入室する。

「失礼します、エンデヴァー。職場体験のヒーロー候補生をお連れしました」

「来たか、バーニン。ご苦労、二人は俺がみる。お前たちは俺が抜けた穴を埋めろ、いいな？」

「えっ……わたし、もっ〜」

No.2 ヒーローの言葉に私は驚きの言葉を返し、轟くんの視線は一層鋭くなる。バーニンはおお〜という顔をして頑張れと私の背中をはたいてから部屋を出ていった。今にも飛びかかろうとする轟くん、すでに個性が出そうだ。私はオロオロするしかない、こんなに確執があるものなの？エンデヴァーと轟くんって……！

「てめえ！今になって何を企んでやがる！おかあさんと同じことを櫛にするってんなら俺が……！」

「どうやら勘違いしているようだな、焦凍。俺は今貴様の父親であると同時に、この事務所のトップヒーローだ。事務所を成長させ得る強さを持つ候補生を指名して何がおかしい」

「なっ……!?!」

「貴様に勝った候補生だぞ。くだらん反抗期に入ってるとはいえ、

俺が訓練を施した貴様にだ。俺はこの責任者として、30人を超えるサイドキック、事務、受付、管理人、警備員……全ての人間を養う責任がある。事務所を構えるなら当然以前の話だ、よく覚えておけ」  
そう言っつて話を切ったエンデヴァーに轟くんは、まさか自分の父親にこんな一面があつたのか、という顔で口を開け驚いている。私は正直、全くついていけなくてあたふたしてる状態の私は会話のワードを拾ってさらに混乱を深める。おかあさんにしたことつてなに!? エンデヴァーさんは轟くんのおかあさんに何をしちやつたの!? 唇をかみしめた轟くんはぽつりと。

「そう、かよ……」

「納得したようだな。では樫希械、所属とヒーロー名を言え」

「は、はい！雄英高校ヒーロー科1年A組！樫希械です！ヒーロー名はエクスマキナ！よろしくお願いします！」

「ふむ、ではエクスマキナ。貴様は何を求めて俺の事務所にやってきた？ただビルボードチャートが高いからか？」

「……いえ！私はここに弱点を克服しに来ました！体にたまる熱が許容量を超えれば私は個性を使えなくなります！炎熱系の事務所で、弱点をカバーする方法を探しに来ました！」

それを伝えるとエンデヴァーはピクリと目を動かしたが、私の理由は合格点を越えていたようで、それを塗りつぶすようににやりと笑う。彼は勢いよく椅子から立ち上がり、私たちを通り過ぎてドアへ向かう。

「では初日は訓練をする。俺が直々に貴様らの練度を測る！俺に一撃入れてみる！」

「……はいっ！」

「……おう」

ドアを開けて出ていったエンデヴァーを慌てて追いかける私たち、轟くんの思いつめた顔に、私は不安を感じるのだった。

## 29話

「うむ、こんなものか。小休止ののちに講評を行う。倒れてもいいが、10分後に俺の部屋へ来い」

「こ、こんなな差があるなんて……」

「……クソ、分かってたはずなのに……」

エンデヴァー事務所の滅茶苦茶おつきいトレーニングルームにてボロボロの私は仰向けに倒れ込んで、轟くんはうつぶせになって倒れ込んでる。エンデヴァーとの戦闘訓練は本当にかすりもできないほどに圧倒的で、考え抜いて作った筈の戦闘形態の手足が両腕共にドロドロ、ギリギリ形を取り繕ってる感じだ。それでいて生身の方はほぼ無傷。完全に遊ばれていなされてしまった。

熔けてそこかしこに落ちてる私の武器たち、そして熱耐性が高いタングステンを主軸にしたシールドが赤熱して形が変わっている。ヤバいな、エンデヴァーのヘルフレーム……炎熱系で間違いなく地上最強……だけどすさまじく洗練された使用だった。最小限の準備で最大限の効果を。エンデヴァーの代名詞である赫灼を浴びたそれは一瞬で形を失ってしまった。熱対策があまり……！

「しかも……私の個性の排熱のタイミングを把握して待ってくれてこれ……」

「腐ってもNo.2ってことかよ……ああ、よくわかった……」

うつ伏せだった轟くんがゴロンと仰向けに代わる。彼の右側からひんやりとした空気が漂ってきて私の手を冷やしてくれるんだけど……ああ、待つて轟くん！今熔けてるから！地面とくっついちゃう……！ああ、くっついちゃう……まあ、いいか。どうせ生やすものだからと個性が使えないのでバキンと無理やり切り離す……ガタツと轟くんが起きた。

「う、うで、お前……」

「え、ああうん。生えるのは知ってるでしょ？ここまでバキバキだと作り直すより生やした方が早いんだ。冷やしてくれたのは嬉しかったよ、ありがとう」

「お、おお……心臓に悪いな」

「お互い様〜」

それで私もなんとか起き上がって、エンデヴァーの部屋に向かう。スーツの再生機能は凄くて、腕ごと熔けてしまったジャンパーの腕部分はもうすでに再生し終わって私の手があつた部分をひらひらして。まあ基本的に肘までしかないんだけどねジャンパー。上腕部分は良く変形させて機関銃とかだすし。

氷と炎で凄いいことになっている部屋を抜ける。壁にある無数の傷がここのヒーローたちの努力の跡だ。私の銃器も、剣も、ハンマーも槍もすべて溶かしてしまったエンデヴァー。私は絶対に熱に対する対策を考えなければならぬ。それはつまり、私の生存に直結することだから。

「来たな。予想より3分早い。では講評を始める！焦凍！」

「……ああ」

「右は及第点だ、だが左の操作が甘い。ただ放出するだけではない。さらに被害が広がる。炎熱系の二次災害のことは何度も話したはずだ。操作を訓練しろ、無意識レベルで擦りこめ」

私の腕については雄英からの資料で生やすことができるというのを知っていたからか特に言及せずエンデヴァーは講評を始める。つらつらと並べる問題点は正論かつ強めの口調ではあるが確実に轟くんの問題点だ。特に二次災害、遠中距離で戦う轟くと前衛を任せられた私、轟くんの炎が何度かかすりかけた。というかエンデヴァーが射線に私を誘導するのがとてもなくうまかった。それで轟くんの攻撃タイミングで私が割り込むというのが何度か。フレンドリーファイア……私も気にしないとダメだ。

「次は樫……初動が遅い。バーニアを噴射して移動するようだが、初速に難がある。一撃の威力は並のプロを超える、個性にも努力の跡が見える……よく研鑽を積んでいるようだ。特に終盤の挟み撃ちは見事だった」

うぐつ、それを突いてくるか……！私の移動は専ら足につけたバーニアだ。噴射してから移動できるまで一瞬の隙がある、それを遅いと

エンデヴァーは言っている。確かにエンデヴァーの移動は足から噴射する炎だ。そしてそれは噴射された瞬間に移動してしまうほど素早い。褒めてくれた終盤の挟み撃ち、ミサイルを回り込ませて、正面から私がスラストハンマーで突撃、轟くんが氷結で追い打ちという二段構えの作戦の事だろう。結局ハンマー溶かされて、ミサイルは全部迎撃されて、優しく投げられて終わったんだけど。強いなあ……。

あと気付いた。エンデヴァー、教えるの凄い上手。簡潔にまとめた要点、解決法の提案、あるいは思考の促し……エンデヴァー事務所に入るサイドキックたちもこうやって鍛えてもらってたんだ……！そりゃ強くなるわけだよ、炎系なら地上最強の人だもん。

「で、問題の排熱問題だが……はつきり言うが貴様の排熱効率は俺以上だ。能動的に排熱できる貴様に対し、俺は自然に熱が抜けるのを待つしかない。故に貴様が行うべきことは……」

「熱耐性の向上、ですか」

「そうだ。炎熱系の個性の特徴として、非常識な体温に耐えることができる。俺や焦凍、サイドキックたちも同様。貴様は違う、許容量はそこまで高くないだろう。個性を伸ばせ、熱に耐えろ」

「地道な訓練が成果を結ぶ……そういうの大好きです、私」

トライ&エラーは何回も行っている。武器開発、技術開発、私は個性を使うために科学知識を蓄え、電気回路を学び、実験を繰り返し……何度も反復して思い通りのものを作るように練習した。その焼き映し、熱耐性を高めること。でも同時に、その熱を別方面に使えないかとは思ってるけどとん挫しているのが現状だ。

「明日も訓練だが……今日はもう上がれ。宿泊設備は事務所に整っている。焦凍もだ、貴様は一時的にこのエンデヴァーのサイドキック。ここで生活しろ」

「……言われなくてもそのつもりだよ、クソ親父」

「……ふん。では解散だ。明日に疲れを残せば叩き出すぞ」

や、やっぱ仲が悪いよね……!!この、クソ重い空気が唐突に流れるから胃にずしんと来るよ……！私はそれに気圧されて赤べこのようにこくこくこくと頷くしかない。だって、その……気まずいじゃん

!?かと言って轟くんは何がどうしてそうなったのなんて聞けるわけではないから……1週間で私の胃、穴が開くかも……。

「それじゃ、ここが1週間アンタの部屋よ!食事は基本自炊!ヒーローは料理もできないといけないからね!材料は冷蔵庫の中のもの勝手に使ってよし!業者が定期的に補充していくからどれだけ使ってもいいよ!それじゃね〜」

「な、なんて大きいシステムキッチン……!何作ろうかなあ……!」  
シャワーを浴びて着替えて、轟くと合流したら待っていたのはバーニンさん、彼女に部屋に案内された後連れてきてもらったのは泊まる時に使う厨房だった。綺麗に整っていて、火力が強そうな業務用ガスコンロに、大きなオーブン、業務用冷蔵庫……!まるでお店の厨房みたい!家庭用のそれとは違うものにテンションが上がる私と反対になんだかしよんぼりしている轟くん。うーん、火力と言えばチャーハンだけど手の込んだものも作りたい!でもここは職場体験先なわけで……!

「俺、料理できねえ」

「え、そうなの?轟くん涼しい顔で何でもできると思ってた」

「……したことねえんだ」

「へー……食べられないものって何かある?あ、好きな食べ物とかは?」

「蕎麦、冷たいやつ。食べねえもんは別に……」

「流石にお蕎麦は打てないかなあ……轟くんの分も私が作ることにするよ」

冷たいお蕎麦……ざるそばとかかな?冷蔵庫の中には何が……お!めっちゃ色々あ……?見るからに高級そうなお蕎麦が……?お高そう過ぎてなんだかな……私は庶民らしく、野菜炒めとご飯といきましよう。キャベツ、ニンジン、玉ねぎ、豚肉……お豆腐あるし冷ややっこもいいね!後はお揚げのお味噌汁。カツオ出汁とって、出しガラはふりかけにしちやおう。メニュー決まった!よしやるぞ〜

！  
個性で料理用のゴム手袋を作って両手につける。よく手入れされた包丁に感嘆しつつも私は慣れている順番でお料理を開始、轟くんは私に全部やらすのがなんか申し訳ないらしくおろおろしているけど好きでやってることだからお気になさらず。るんるんと鼻歌交じりに完成した料理をお盆に乗せて食事用スペースへ。

「いただきます……うん、上出来」

「いただきます……うめえ」

「あ、ほんと？よかつた。三奈ちゃんとかえーくんとかは美味いって言ってくれるけど轟くんの口に合ってたよ」

両手を合わせて食事始めた時、野菜炒めを口に運んだ轟くんからぽつりとこぼれた言葉にちよつと嬉しくなる。お料理は好きだし、自分が美味しいものを食べたいから始めて今となっては趣味なんです。お弁当をおすそ分けすることも最近は多くなってきたから皆にも気に入ってもらえたんだと思うんだけど、改めて美味しいって言われると嬉しいなあ。

無言の食事だけど、雰囲気は別に悪くない。轟くんの食事ペースも落ちることはないし私も同様。轟くん、ものを食べる所作がきれいだ。じつと見つめてしまつて軽く首を傾げられてしまい、慌てて何でもないと訂正して私も食事に戻る。そうしてお米一つぶ残さず食べ切った私たち、あとはお片付け！

「作ってもらつたし、俺が片付ける。先部屋戻ってくれ」

「え、でも……」

「何もしなかったら据わりが悪い」

「んー、じゃあ一緒にやろ！轟くんがお皿洗つて、私はキッチンの掃除するから！」

「おお」

私が好きでやったことだし、一人分も二人分も作るの是一緒だし、特に今日みたいな簡単メニューなら負担でもない。お片付けやってくれるっていうのは嬉しかったけど、使ったものを自分で片さないのは私としてもあれなので折衷案を提案して一緒に片付けをする。



使ってたフライパン、コンロを清掃して、包丁を研ぎなおし、油汚れを掃除してこれでよし！轟くんは不慣れっぽい手つきでお皿洗い終了！お部屋戻って反省会しなきゃ……！

「なあ、少しいいか？話してえことがある」

「え、うん。大丈夫……だよ？」

背中越しにそう言われて、私は首をかしげながらもオツケの返事をする。ここじゃ何だから、と言われて轟くんが使う予定の宿泊室に入らせてもらう。私の部屋と同じ作りで、片隅に置いてある轟くんの荷物以外は変わったところはないんじゃないかな。男の子の部屋……厳密には違うけど……に入るのはえーくんの部屋以外だと初めてかも。

「正直、なんか聞いてくると思ってた。今日の事、分かんねえことだらけだっただろ」

「……私が聞いていい事かどうか分からなかったし……話したくない話でもなさそうだから、聞かない方がいいかなって」

この事務所に来るまで、来てからも何度も感じたエンデヴァーと轟くんの確執、かなり根深い話だと思うし、私がどうこうできる話ではなさそうだった。それを飛び越えていったのがデクくんなんだけど、きつと彼はすべてを轟くんから聞いてそのうえであの行動をとったに違いない。ただ、引つかかるのは……おかあさんと同じことを私にしようとしてるんじゃないかという、轟くんの心配は、気になっている。

「……そうか。個性婚って知ってるよな？2, 3世代あたりで問題になったやつだ……俺も、そうなんだ」

そこから、轟くんの家の事情を聴いた。自らの力でオールマイトを超えることは不可能だと感じたエンデヴァーは、自らの子供にその野望を託すために伴侶を選んだ。それが、轟くんのおかあさん。上に兄姉がいる轟くんとその兄弟姉妹の中で唯一、エンデヴァーの思った通りの個性を持って生まれた轟くんは、幼少期に隔離され、厳しく修行を付けられる。おかあさんはそれを止めたが、次第に精神的に追い詰められて……轟くんに煮え湯を浴びせてしまった。

おかあさんは精神を病んでしまい入院、以来轟くんはおかあさんをそこまで追い詰めたエンデヴァーを憎悪し、体育祭まで左を封印して右の……おかあさんから継いだ力だけでオールマイトを越えてエンデヴァーを否定しようとした。……なんて、壮絶な生い立ち。

「じゃあ、轟くんは私をエンデヴァーが次の個性婚の相手として選んだって思ったってこと？」

「ああ、1回やったならもう1回やるって思ってた。けど、そこまで腐ってはなかったみてえだ。そこだけは、少し安心できた」

「優しいんだね、轟くんは」

「優しい？」

轟くんの生い立ちを聞いて、私が思ったことは……彼は、えらいと、褒められるべきだと、そう思った。だって、おかあさんを父親のせいで狂わされて、それでもなりましたかたものために雄英に入学した。全部ぶちまけてエンデヴァーを墮とすことだってできたはずなのになかった。きつとそれは彼の中になりたい自分、ヒーローの姿があったからだ。

「だけど、えらいと褒めてあげるのは私の役目じゃない。えらかったね、すごかったね、頑張ったね……その言葉を口にして彼に与えてあげるべきなのはきつと、おかあさんの役目のはずだから。体育祭で言ってた意味がようやく分かった、彼は今家族と向き合いだしてるんだ。憎くて憎くて仕方がない筈の父親相手にすら、向き合おうとしている。」

「ここにきてからずっと、轟くん余裕ないように見えたんだ。エンデヴァー見た時からずっと怖い顔してたし。でも、そんな中でも私の心配してくれただね、優しいじゃん、轟くん。轟くんはきつと、おかあさんから氷の個性と一緒に優しさももらったんだね」

「おかあさんから……」

「おかあさんには、会いに行った？」

「……体育祭の振り替えの時に。歓迎、してくれた」

「うん、じゃあさ。今度会いに行った時……俺、頑張ったから誉めて！って思いつきり甘えてきなよ。絶対褒めてくれるから、だって……」

きつと轟くんのおかあさんは、轟くんのが大好きだから」  
「……考えて、おく」

私の提案に、何時ものโป๊กเกอร์フェイスをほんのりと赤くしながら、彼は私から視線を逸らした。

### 30話

「にしても、エンデヴァーがそんな人だったなんて……かなりショックかも」

「……世間が知ってるクソ親父は、ストイックなヒーローだ。表になんて出すわけない」

轟くんの部屋にて、私はちよつとだけ肩を落としてそう言う。だつて、エンデヴァーと言えば不愛想なところはあれど人を助け、守り、多くのヴィランを打ち倒してきた正真正銘のトップヒーローの一人だ。そのイメージは轟くんのお話で私の中でバグってガラガラと音を立って崩れたわけなんだけど。そりゃあ、クソ親父とか言いたくなるね。ひと様の父親にこんなこと言いたかないけどまごうことなきDV野郎だ。

タチが悪いのが、私人としてはクソオブクソでも公人としては紛れもない完璧超人であるというのがもつとやばい。普通逆じゃない？ 家族大切にしなよ。オールマイト先生を超えるっていうのは人気の面で？ それとも実力で？ 事件解決数ならもう超えてるのに。何でオールマイト先生を越えようとしてるんだろう？ 自己顕示欲が高いタイプとは思えないんだけど……。

「むむ、轟くんさ……一発くらいエンデヴァーに思いつきり文句でも言っつていいんじゃないかな？」

「……言っつたところで意味がねえ」

「そう……それじゃあ……エンデヴァーの驚く顔くらいは見たくない？」

「アイツの……驚く顔？」

私の言葉に轟くんは小首をかしげる。文句を言っても無駄ならあとはもう肉體言語しかないと思う。つまるところ意趣返し、やつあたりとかそういうたぐいのやつだ。エンデヴァーは轟くんのことをくだらない反抗期と称したけど、じゃあ反抗期らしく思いつきりぶつかつてしまえばいい。端的に言えば

「職場体験の終わりまでに、エンデヴァーに轟くんが一撃叩き込も

う。そのくらいはきつと許されると思うよ」

「おお」

言葉少なにそう返してきた轟くん。私はそれを受けて努めて明るく反省会しよ！と声を出して周りに私視点ではあるけど訓練時の映像と、轟くんと私、エンデヴァーを簡易的なCG処理で表した動きの動画などを投影してどうしたらエンデヴァーに一撃入れることができるか話し合う。轟くんは結構モチベーションは高めらしく作戦を提案しつつも私の意見も聞いてくれる。なれば明日は実践あるのみ！

「だめか〜！もう！流石No.2！強すぎ！」

「ああ、全部避けられちゃった……けど、かすらせられたな」

「クリーンヒットは無理だったけどね……」

翌日の事、同じようにトレーニングルームの床に倒れ伏した私たちは昨日と違ってボロボロ、とまではいかないがかなり善戦出来たと思う。私たちの連携力が上がったのをエンデヴァーは察したみたいで片眉をあげていたが逆にそれが火をつけたらしく昨日は守勢に回ったのが逆に攻めに来られた。そのパターンの連携も考えてはあったんだけど、攻勢に回ったエンデヴァーはそりやもう強かった。というか昨日の3倍くらい強かったと思う。何度地面に叩き付けられて腕が取れたかわかんないや。熱が伝わりにくいように自切しやすくなったのを逆にとられました。付け焼刃はアカンということではない。

最後の最後でぎりぎり、ぎりぎりエンデヴァーのコスチュームに掠る形で轟くんの氷結パンチがかすったんだけど。まさか爆豪くん式爆発カタパルトで轟く人を射出するとは夢にも思うまいふふ……でもこれで奇策も通じないとわかつちやっただよねえ……。轟くん、中距離戦が得意なのはそうなんだけど、接近戦もこなせるのはデクくんとの試合で分かってたし……。

及第点だ、と言ったエンデヴァーは午後まで休むように私たちに言いつけて自分は昨日の穴を埋めるべくパトロールに出発した。流石

に昨日の今日じゃ私の欠点である初速の遅さを補えるツールは開発できなかったし……ゴリアテのバーニアが一番それっぽいんだけどあれじゃ馬すぎてゴリアテ着てないとまともに方向転換できないんだよねえ。エンデヴァーのあの炎噴射を科学的に真似できないかな？

「お、いたいた！候補生ツインズ！エンデヴァーから連絡だよ〜！」

「ああ！すみませんバーニンさんこんなならしなかつこで！」

「お」

トレーニングルームに大の字状態でじたばたして悔しさを表すというとても女の子とは思えない状態でバーニンさんと逆さに目が合った私は急いで立ち上がって直角に腰を下げて謝る。轟くんが軽く驚いた声をあげて起き上がった。バーニンは気にしない気にしない〜とカラカラ笑ってくれたけどこれ轟くんにも見せちゃだめだったやつじゃない？変なもの見せてごめんね轟くん……。

「バーニンさん、連絡って何ですか？」

「よくぞ聞いてくれたねショートくん！アンタたち二人！夜のパトロールにエンデヴァーと一緒にに行くことになったよ！場所は保須！理由は分かるよね!？」

「……ヒーロー殺し、ですね」

「流石雄英の受精卵！ニュースはちゃんと見てるみたいね！あのインゲニウムがやられたからね、エンデヴァーも警戒してるみたいだよ。だから出張でパトロールってわけ！」

「しかも夜のパトロール、ヒーロー殺しの被害はほとんど夜に起こってるから……」

タイミング的にあるかもなんて思ってたけどホントにあった。エンデヴァーほどのヒーローが直接動くことを決断するくらいヒーロー殺しの脅威度は高いってことなんだろう。そして、そのパトロールに職場体験とはいえ圧倒的な足手纏い二人を連れて行くことができるという自信と決断力……ヒーローとしてはホントに完璧超人なんだなあ。

「そんなわけでアンタたち二人とも今から仮眠を取りなさい！午後7時にエントランスにヒーロースーツで集合だよ！返事！」

「は、はい！」

「はい」

「よろしい！サイドキックたちも別方面から行くからね！じゃ、よく眠るんだぞ候補生！」

バーニンさんが出ていってから、私はうーんと考え込む。保須はここから行くなら新幹線の距離だ。及第点、という言葉から察するに連れて行ってもいいということだと思うけど……ヴィランにギリギリ私と轟くんが達していたということだと思っただけ……ヴィランに会うかもしれないんだ。USJの時みたいに、あの時は正当防衛が通ったけど、今は違う。私たちは見るだけに徹さないといけない……できるかなあ？咄嗟に体が動いちやいそう……

「櫟、櫟……髪の毛、すげえことになってるぞ」

「ええっ!?考え事しすぎてゲーミングしてた!？」

「げーみんぐ?」

悩み事に意識を集中しすぎて髪の毛がゲーミング発光してたみたいで、轟くんは袖をクイクイ引っ張られて教えてもらった。すぐさま普段通りに戻した私とゲーミング発光そのものを知らないらしく首をかしげる轟くん、なんだろなあ。轟くんって要所要所で幼い感じがするんだよ。今みたいに知らない単語をオウム返しした時とか。思わず頭を撫でそうになってぐっところえる。同級生を幼児扱いとかやべーやつだよ……峰田くんの事笑えなくなっちゃう……

とりあえず、食事をとるために着替えましょうとなって轟くと別れて私はシャワールームに入る。エンデヴァーってほんとに強いなあ……初見のはずの武器でさえ有効範囲をあっさり見抜いちやうんだもの。跳弾まで利用したのに当たらなかつたし！これはもう私、火が付いたぞ！職場体験終了までに絶対あの人を一撃クリーンヒットをお見舞いするんだから！とボディソープで体を洗いながら決意を新たに、私は泡を流すのだった。またちよつと大きくなってるなあ……困った。

轟くと合流して何を作ろうかなと冷蔵庫を開けると、なんか蕎麦の量が増えててちよつと怖かった。怖かったのでお隣にあつた鶏肉とうどんでカレー南蛮を作った。轟くんは和食派らしいので、次は手の込んだ何かを作つてあげたいなあ。あ、明日の朝ごはんにアジの南蛮漬け作つておこうつと。ん〜、サイドキックの皆さんの分も作つておこうかな？ 沢山つくつておこう！ん？ 轟くん何かやりたい？ じゃあ玉ねぎ薄切りに……どうやったら全部つながるの……？うわああその手つきはあぶないよおっ！

手切れてない!?!よかつたあ……！えつとね、切るときははこう。猫の手！そうそう！飲み込み早いね轟くん！うん、揚げたアジを漬け込んで、これで大丈夫！明日になったら味がなじんで美味しいよ。こつちがサイドキックの皆さん用で、早い者勝ちになつちやうけど書置きも残して、完成！

「じゃ、集合までおやすみ、轟くん」

「ん、おやすみ」

部屋のベッド、作りがいいので若干小さいところ以外は私にとつては嬉しいところ。布団もふかふかで寝やすいなあ……手袋だけ外して、おやすみなさあい……。

「よし、バーニンから概要は聞いているな？道すがら説明する、駅まで行くぞ」

「はいー」

「おう」

仮眠をとつた私と轟くんはパトロール帰りだというエンデヴァーにヒーロースーツで合流した。やっぱり轟くんはエンデヴァーと一緒にだとあんまり機嫌がよろしくなくなる。もう事情を聴いた後なのでしようがないことだと思つし、向き合おうとするだけ凄いなあつて感じるだけなんだけど。

事務所に来たときと同じように車に乗って駅まで移動する、サイドキックの人たちの内バーニンを含めた5人が一緒に保須に行くみたいで、別の車で後ろについてきている。来たときのように事件は起き



なかったので今度はエンデヴァーも一緒。もしかしたらヤバそうなのパトロールで全部潰してから来たのかも……。

「おい、なんでお前と俺が隣なんだ」

「開いてる席の都合と性別の問題だ」

「ごめんなさいバーニンさん、狭いですよね……」

「健康的でいいんじゃない!? もっと胸張りなって大きいんだから！」

「そ、そんなことこんなところで……!」

実は私、新幹線は初体験。轟くんが隣の席になったエンデヴァーに噛みついてるけど、領土侵犯を犯している私のお尻についてバーニンさんに謝ると彼女は私の背中をバンバン叩きながらそんなことを言うもんだから、私は余計に蒸気を吹きながら真っ赤になっちゃう。

新幹線の中で説明されたのは、ヒーロー殺しを確保するのが目的のパトロールで、捕まらない限り体験中の夜は基本保須に行くことになるということ。ヒーロー殺しは今までヒーローを一つの都市で4人以上再起不能にしてから別の都市に現れているのでまだ保須にいる可能性が極めて高く、ここでビルボードチャートが高いエンデヴァーが行くことで囷をしつつ捕まえる作戦らしい。

「基本的にシヨートとエクスマキナは俺と行動する。小競り合いの喧嘩程度ならヒーロー活動も許可しよう。バーニン達は都市の外周に沿っていけ」

了解、とはきはき返事してバーニンとサイドキックたちはそれぞれ分散して都市の外周に向かった。私たちは都市の内部でも治安が悪めな方面を風潰しにローラー作戦するみたい。治安が悪い、と言うだけあって確かに人通りが多いわりに何となく怪しげな風体の人が多く思える。じつ、と右目を駆使して暗がりを見つめると……! うわあ……! たむろしてる、いかにも不良みたいな人たちが。爆豪くんってまだグレてはなかったんだね……。

「シヨート、エクスマキナ。あれを見ろ……おそらく万引き犯だ。先ほどバックの中に商品を隠すのを見た。店の外に出た瞬間でいい、確保しろ」

「おお」

「はい」

ギリリ、と常に鋭い瞳をさらに鋭くして私たちに指示を出したエンデヴァー。その視線の先にあるコンビニでは、やたらに焦って周りを見渡しながら別商品の会計を済ませるサラリーマン風の男の人の姿がある。右目で軽くバックを透視すると……わあ、盗んでるねワンカップのお酒……。私が直接捕まえます、とエンデヴァーに報告して背中からポンチョ型の布を生成して被る。

「メタマテリアル・ギリリ「光屈折迷彩、形成開始」デイ」

ジジツ……と蛍光灯がつくような音を立てて私の姿が透明になっていく。これは周囲の景色を布型のディスプレイに投影することで高い迷彩効果を発揮するもの。私は透明状態でコンビニの前で仁王立ち、店員さんも気づいていたようでバックヤードから出て来るのが見える。男がコンビニから出た瞬間に店員さんが声をかけるけど男はそれを無視して全力で走りだして……私にぶつかって尻もちをついた。私はそのまま男の人の肩を掴んで、迷彩を解く。

「えっと、あの……お酒、盗んでますよね？現行犯で、逮捕です」

「ふん、俺の目の前でやったのが運の尽きだったな」

「え、エンデヴァー!?!……………すいませんでした……………」

エンデヴァーを見て絶対に逃げられないことを察した男の人は肩をがっくりと落としてうなだれた。エンデヴァーは私に、ぶつかる前に確保するようにと厳しい口調でアドバイスをくれて店員さんに男の人を引き渡した。おそらくこのまま警察を呼ばれて男は引き渡されると思う。個性使ってないから重い罪にはならないだろうけど……魔が差しちゃったのかな……？

「これがヒーロー活動だ。罪の大小は関係ない。犯したのならば捕まえ、向き直らせる。確保が遅くなり、逃がせば次の犠牲者が出るぞ。最速最短で捕まえろ。エクスマキナのやり方は悪くない。ショート、貴様ならどうした」

「逃げる前に、凍らせた」

「それでもいい、が周辺被害を考慮するならば駆けだした瞬間に組

み伏せて背中を地面と凍らせて接着するのが一番いいだろう。右ならばコントロールもできるはずだ」

「……」

ヒーローとしての父親の姿を見た轟くんは、深く何かを考えているようだった。エンデヴァーはそれ以上何も言わず歩を進める。私はポンチョを折りたたんで小脇に抱えつつそれについていく。結局この後は喧嘩の仲裁や暴走族の小競り合いなどを鎮圧することはあつたけど……ついぞヒーロー殺しに遭遇することはなかった。一抹の不安を抱えつつも、一旦エンデヴァー事務所に引き返すことになるのだった。

### 31話

「では本日もパトロールとする。今日は昨日より時間を伸ばして対応を行う」

「はいー」

「……おう」

職場体験3日目、今日は夕方から深夜まで保須にいたることになってる。茜色の空に照らされる轟くん、エンデヴァアのヒーローとしての姿と自分が知る父親としてのエンデヴァアのギャップに相当打ちのめされている様子だ。だって私も轟くんの話を聞いて尚、ヒーローとしてのエンデヴァアは間違いなくトップ2だって言えちゃうから。深く色々知っている轟くんにとってはもつと衝撃的なんだろうなあ。

肩を怒らせて私と轟くんの前を歩くエンデヴァア。きつと目線は街のあらゆるところを見ていて、些細な異常も見逃さない眼力を有しているんだろう。にしても飯田くん、心配だなあ。実はここに来る前に保須でパトロールするからすれ違えるかもねくと軽くメッセージを送っておいたんだけど、既読がついても返事がないの。

飯田くん、メッセージを既読したら必ず5分以内、長文ならもうちよつとかかるけどそのくらいに必ず返信をくれるんだ。連絡事項でも雑談でも、付き合ってくれればいいひと。だから、既読スルーの現状は滅茶苦茶に心配になっちゃう。エンデヴァアに俺を見る焦凍おおお!!と叫ばれて舌打ちする轟くんという珍しいものを見つつ脳内でマップを起動して昨日と合わせてパトロールしたところを塗りつぶしていく。

そうして、私たちはノーマルヒーローマニュアルの管轄区域に被るような形でパトロールを進めていく。もうすぐ日が暮れる……というところで周りの街並みが唐突に崩れ始め、爆音が響きだした。明らかに異常にエンデヴァアは

「昨日の時点で俺がいるのを理解しただろうに。いくぞ、ヒーローとは何たるかを見せてやる」

そう言つて駆け出す。私たちはそれについていきながら、何が起こつたのか自体を把握するため情報を収集する。爆発の原因は……？右目をズームさせて煙の中を見る。明らかな異形型の人間がっ!?

「脳無!？」

「んだと……?？」

「エクスマキナ！手短に知つてることを話せ！」

「雄英を襲撃した一味が使つた改造人間に酷似してます。主犯格が一緒なら複数の個性を持つているはずです！それがどうして……？」

「なんでもいい！だが……ケータイじゃなくて俺を見ろ焦凍お！」

その爆発の中にいたのは、形は違えど脳みそがむき出しの造形をした異形……USJで遭遇した脳無に酷似したやつだった。とうるかほとんど確定で脳無でしかない。あんな脳みそむき出しの造形がヴィラン界限で流行つてるなんて考えたくないです。それを聞いてきつと向き直つたエンデヴァーがスマホとにらめっこする轟くんを叱る。だけど私も思わずスマホを見てしまう。デクくんからの全体一斉送信……？内容は場所だけ、保須だ！これは……！

「エンデヴァーさん！この場所にできるだけ多くプロを呼んでくださいー！」

「わりいけど俺はそつちの方に行かなきゃなんねえ。櫟、いこう」

「待て、意味を……!？」

「友達がピンチかもしれねえんだ」

困惑してるエンデヴァーにそう言う轟くん。エンデヴァーはそれにしたがいそう驚いた顔をしたけど無言で踵を返して足から炎を噴射して飛び立った。無言の許可に私と轟くんは走つてデクくんが送信した場所に向かう。じれつたいので誰も見てないのいいことに轟くんを抱えて足を作り変えてローラーダッシュで車レベルの速度で逃げ惑う群衆を避ける。

「櫟、あそこだー！」

「うんっー！」

ドリフト走行でブレーキをかけつつデクくん的位置情報と重なる

路地裏に入る。そこには……倒れ伏した飯田くとデクくん、それはプロヒーローの姿とニュース画像に有ったヒーロー殺し、ヴィラン名はステイン！そいつが飯田くんに向かって刃こぼれだらけの刀を振り下ろそうとするところだった。私は轟くんを下ろすよりも先に片腕を圧搾空気で射出、空中でロケットエンジンを作り出してロケットパンチをステインにお見舞いした。

ガキヤアア！と刀を犠牲にしつつそれを防御したステインがバツクステップで後ろに下がり、そこに轟くんが私に担がれたまま炎を打ち出してさらに後ろに追いやった。

「ハア……次から次へと……！」

「ごめんデクくん、遅くなった！」

「緑谷、こういうのはもつと詳しく書いてくれ。間に合わなかったかもしんねえだろ」

「樫さん……轟くんも……！」

動けないらしいデクくと奥のプロヒーローにワイヤーを伸ばしてこちらに引っぱる。ステインは妨害しようとしたけど轟くんの炎と氷結に邪魔されて未遂に終わり、そのまま私の後ろの飯田くと同じ位置に落ち着かせた。ロケットパンチが戻ってきてガチャンと私の片手と接合する。この場合、私が前かな。

「ヒートナタ、形成開始<sup>デイ</sup>」

膝の頭の装甲が開き、そこから柄が出てくる。私は両膝からその柄を引き抜く。手に握られているのは分厚い刃を持った鉞……一つただの鉞と違うところをあげるとすれば、赤熱していて物を溶断する武装だということだ。ぶおん、とヒートナタを振り下ろして構える。右目で見ると相当数の刃物で武装を済ませてるようだから、これで受けて同時に武器を破壊しよう。

「私の友達を殺させないよ、ヒーロー殺し」

「こいつらを殺せると思うなよ」

「二人とも、血を見せちゃだめだ！血を舐められると体の自由が利かなくなる！」

「それで刃物か、俺なら距離保ったまま……っ!？」

「あつつぶないー！」

デクくんからの情報提供中にほとんどノーモーションで投げられたナイフを私が弾く、甲高い音を立てて弾かれたナイフに私と轟く意識が集中した瞬間に瞬時に距離を詰めたステインはいい友達を持ったなと飯田くんにいいつつも両手にサバイバルナイフと小型のダガーを持って轟くんに振り下ろす。さっきの投げナイフのおかげで態勢が悪い、割り込むことは出来たけど受けるしかない！しようがないので腕を挿しこんで首の方のサバイバルナイフは防御、ダガーナイフの方は甘んじて受けることにした。

「てえい!!!」

ざっくりと肩口に刺さったダガーナイフを無視して私はやつに思いつきり頭突きをかました。たたらを踏んだステインに追撃のヒートナタ……は不発に終わる。身のこなしが軽いうえに戦い慣れしすぎている。これが40人のプロヒーローを殺したヴィラン……！

「楪！てめえ……！」

「楪さん!？」

「平気だから、それよりも冷静を保って。強いよ、あのヴィラン」

「ハア……悪くない。女……お前はなぜその贖物を庇う？」

「贖物って……飯田くんの事？んっ!!痛あ……。誰かを守るのに何か特別な理由なんていらないよ。しいて言うなら、お友達だから」

ぶつとダガーナイフを引き抜いて、ヒートナタの側面で傷を焼いて止血する。血を見せたままなのはまずそうだ。贖物と飯田くんが言われたことにムカツと来たが怒ればヒーロー殺しの思うつぼ、押し殺して警戒に徹する。ホーダインクラブを右手に生成して飯田くんたちが寝転んでいるあたりに落として自動砲台に防御させる。あとは私が、押しとどめればいい。

「ダメだ……二人とも……そいつは俺が、僕がやらないと……兄さんの名を継いだ僕が……！」

「名前、継いだんだ。いいじゃない、飯田くんがインゲニウム。素敵だと思う」

「ああ。俺が見たインゲニウムは、そんな顔はしてなかったけどな」

飯田くんの絞り出すような声。お兄さんの名前を弟が継ぐ……いいことだと思ふな。だけど、それが仇討のためだとしたら……悲しい。轟くんはつい最近までそう言う気持ちの中にいたから飯田くんの気持ちがかかるかもしれない。そんな顔、と言われた飯田くんはハツとしてこちらを見ている。氷結がステインを襲う。彼を覆い隠す氷結に刃物が走ってバラバラに斬り裂かれる。

「己より素早い相手にわざわざ視界を塞ぐ……愚策だ」

「私がいなければね!!」

斬り裂かれる氷結の氷の裏、ステインにカウンターを入れる為にヒートナタを振り上げて思いつき叩き付ける。サバイバルナイフを犠牲にして防御したステインは炎で追撃しようとしていた轟くんにはナイフを投げ、私はそれに防御を間に合わせることが出来ず轟くんの腕に刺さってしまった。このっつ!!

「スマアツシュ!!」

まだ持っていたらしい刀を抜いたステインが迫ってくるのに不意を突く形でデクくんの飛び蹴りが見事に突き刺さった。血を舐められて動けなかったはず……? 時間制限があるんだ! それなら飯田くんやプロの人も復帰の目がある! 私たちが耐えれば戦力は逆転する。

「緑谷!」

「なんか動けるようになった! 多分時間制限……! 摂取量なのかそれとも血液型なのか……!」

「血液型……ハア……正解だ。三対一か、甘くはないな。だが……正しき世界のために」

これで引かないんだ……! しょうがない、デクくんが前衛に行くなら私は遊撃だ。片方のヒートナタを地面に落とし、右手を変形、前腕内部から機関砲、腕側面から小型ミサイルをのぞかせてステインを威嚇する。私の戦闘スタイルが遠近両用だと知ったステインはそれでもなお、こちらへの敵意を緩めようとしな。何が彼をそこまで動かしてるの……? ?

「皆で、守ろう」

「おお」



「うん！」

ステインに向かって私の機関砲が火を噴いた。後を追うように轟くんの氷結も迫る、ステインはそれを飛び越して、こちらに距離を詰めようとするがデクくんが三角飛びで頭上に入り、そのまま踵落としを肩に叩き込んだ。ステインはそのままデクくんの手ナイフを突き刺して、その血を舐める。そのままこちらに迫ってくるので私が出た。

「やめてくれ……もう……」

「やめて欲しけりや立て！なりてえもんちゃんで見ろ！」

轟くんの叫び、ステインは私の手足が金属製でナイフが通用しないのを知っているからか胴体に狙いを絞って接近戦を仕掛けてくる。ガキン、ガキンと私は何とか腕や足で防御して血を舐められないように努める。ダメだ、私は傷ついちゃいけない守勢が得意じゃない！大抵攻撃を体で受けて反撃をするから防御のみっていう行動が不慣れなんだ。言い訳にもならない！

「このっ!!」

「初速が遅いと、言われないか？」

「しまっ!?!」

慌てて大降りになった攻撃をかわされ、掬い上げるような一撃を腹に受けてしまう。浅く斬られてしまった、ステインの刀には私の血がついている。それをやつが舐めた瞬間、体が固まったように動かなくなる。けど……それは体だけ、機械には関係ない……！

「なっ!?!」

「ハアッ!!!」

電気信号で動かした私の手が私を脅威から外したステインの足首を掴んでその場に固定する。その隙に飛び出したのは飯田くん、レシプロバーストを使って瞬時に距離を詰めた蹴りをまともに顔にクリーンヒットさせる。私は首から下に人の脊椎を模した骨格を作つて、手足に外部から接続。マリオネットのように体を動かして立ち上がる。

「これ以上、僕の学友を傷つけさせやしない……！」

「感化されても変わらん。貴様はどうせ私欲を優先させる贗物にしかならない。粛清対象だ」

「勝手なこと言わないで！そんなのあなたの物差しだよ！貴方にそんな権利も自由もない！」

私はそう叫ぶ。後ろでふらりとデクくんが立ち上がっているのをステインに悟らせないため。飯田くんが復帰してくれた今スピードで勝る彼を主軸に一撃で決める！轟くにアイコンタクトをして、頷いてくれた彼は氷結を地を這うように放つ、それに合わせて私は徹甲ミサイルを氷結を避けたステインに向かって放つ。それすらも避けたステインだけど、その上には氷結を蹴ってジャンプしたデクくんが拳を握って待ち構えていた。

「もう！お前の好きにはさせないっ！！」

「いって！委員長！」

デクくんの渾身の一撃がヒーロー殺しの脳天を捉えて叩き落す、予想外の復帰時間の速さにステインの動きが止まった。外れた私のミサイルが氷を砕く中、落ちるステインに最後の1撃を決めれるのは、飯田くん！私の声を聞いた彼は、脹脛のエンジンから爆音を、排気筒からは蒼炎を吐き、まるで飛ぶようにステインに向かって距離を詰める。

「行け！飯田！」

「僕はインゲニウム！お前を捕らえるぞ、ヒーロー殺し！レシプロ……エクステンドォー！」

ステインの胴を抉る様に叩き込まれた回し蹴りがやつを吹き飛ばして、氷を砕いて壁に激突させる。少しの間、まだ立ち上がってくるんじゃないかと心配になったけど、ステインは気絶したようでピクリとも動かない。私は拘束用のワイヤーロープを作って、ステインをぐるぐる巻きにするのだった。この体の動かし方……動きにくいなあ。

### 32話

「とりあえずこれで良し……どれだけ刃物持つてるんだらう……」

「樫、お前肩大丈夫なのか？根元までいつてたろ」

「た、たぶん、止血したし大丈夫だよ。こんな強引な止血アニメかコミックでしかお目にかかれなれないと思ってたけど、自分でやることになるなんて……」

ワイヤーで縛ったステインを引きずりながら路地裏から出る。まだ脳無の騒ぎは収まってないらしく、悲鳴こそ聞こえないものの戦闘音は聞こえている。規則やぶりに規則やぶりを重ねるわけにもいかないが、何もしないというのも歯がゆいな。ダガーが刺さった肩の違和感が酷い、触ってみると……無理な態勢で無理やりナイフを受けたもんだから鎖骨が折れてるかも、これ。認識するとずきずき痛む、確かめなきゃよかった……。

「飯田くん、お疲れ様。こんな形になっちゃったけど、インゲニウム襲名おめでどう。お兄さんも喜ぶと思うよ」

「樫君……すまない！みんな！僕の……僕のせいで傷を負わせてしまった……！何も見えなくなっていた……！」

「僕も、ごめんね。友達なのに、君がそこまで思い詰めてたなんて気づけなかった……」

「しっかりしろよ、委員長だろ」

「次からは、お兄さんが誇りに思うような形で……その名前を使つてね」

「……っ！ うんっ……！」

飯田くんは、目に涙をためて頭を下げる。私たち、少なくとも私は飯田くんが少しおかしかつたのに気づいていたのでそれを見逃してしまったことを謝らないといけない。でも、仇討か……例えば私がえーくんをヒーロー殺しにやられてたら自制できてただらうか……？あ、ダメだ。考えただけで涙出てきそう……えーくんが傷つくのは嫌だなあ。

「……か……んおっ!?座つてろっつただらうが！」

「グラントリノっ!?へぶっ!」

な、なにごと!?突如現れた小柄なヒーロースーツの老人がデクくんの顔を踏みつけるように蹴った。敵襲か!?となつてヒートナタを構えたところで、デクくんの感じからして違うということに気づく。グラントリノ……確かデクくんの職場体験先のヒーローがそんな名前だったと思う。

私がヒートナタを下ろすと同じくらいタイミングでぞろぞろと応援要請を受けた他のヒーローたちがやってきて、私たちに驚いたり拘束されたステインを見ておののいたりしてる。あの、もうちよつと早く来てほしかった……私の怪我はともかく轟くんデクくん飯田くんの怪我が結構ひどいと思う……。

「伏せろー!」

「デクくん!」

少し気を抜いた瞬間に全身にやけどを負った脳無の1体らしい個体がデクくんを足でひつつかんで空へ舞い上がった。私は持ってたステインの縄とヒートナタを捨てて脚にスラストーを作り出して飛び立つ。私より一瞬早く飛び立ったグラントリノと並んで上空へ逃げようとする脳無を追いかける。撃ち落とそうと腕から近距離誘導ミサイルをのぞかせた時だった。

いきなり脳無が硬直したように体を止める。この個性は……!落下する脳無を追って私は軌道を変えてデクくんを追いかける。その私を踏み台にしたのは……どうやってか拘束を抜け出したステイン!彼はデクくんを掴んで私に投げつけると脳無の脳天にナイフを刺して止めを刺してしまった。その右肩がダランと垂れさがってるのを見て、関節を無理やり外して脱出したのだと理解する。

「贖物蔓延るこの社会も、力を誇示し振り回す犯罪者も……ハア、肅清対象だ……ハア……」

デクくんを抱き留めて背中から地面に落ちる私に、ステインのそんな声が聞こえる。デクくんを固く抱きしめて地面に激突した私がやつの方を見るとぞつとした。背筋にまるで氷柱を挿しこまれたようなそんな感じ。USJの手のヴィランが可愛いと思えるほどの殺気

……それは私を越えて、脳無を追いかけてきたエンデヴァーに注がれている。

「全ては……正しき社会のために……」

「貴様……ヒーロー殺し！」

「待て！轟！」

赫灼熱拳の構えに入ったエンデヴァーをグラントリノが止めた。幽鬼のようにふらついて立っているステインに私は動くことができない。私の上で抱えられているデクくんも同じ。じり、とプロたちの足が一步下がる。エンデヴァーでさえもその異様な威圧感に赫灼の熱を下げて警戒し始める。

「誰かが……血に染まらねば……ヒーローを取り戻さねば……！」

冷や汗が止まらない。痛い筈の背中も、肩も感覚がなくなる。狂った使命感と狂気と思想が煮凝りのように固まったステインの目から視線を外すことができない。彼の主張から耳を背けることができない。オールマイト先生が言っていた思想犯の目がそこにあった。

「来い、来てみる贋物ども……！俺を殺していいのは……オールマイトだけだ!!」

そう言つて、にじり寄っていた足を止めたステイン。この場だけ何倍にもなったように思えた重力のような圧力がふっと消え去って、動かなかった体が動くようになる。荒くなつた呼吸を正してステインを見ると……立ったまま気を失っているみたい……？と、とてもじゃないけど生きた心地がしなかった……！あれを路地裏でやられてたら……！考えたくもない。

デクくんを立たせて私も立ち上がる。救急車のサイレンが遠くから聞こえる中、誰もがヒーロー殺しから目を離せずにいた。異様ともいえるヴィラン、こんなのもいるんだ……ヒーローへの道は、やっぱり遠いかな。

一夜明けて、朝。なんだかんだ言つて私は重傷だったらしくダガーナイフによる鎖骨の分断に深めの刺し傷、自分でやった深度熱傷というトリプルコンボで見事入院と相成ってしまった。というか鎖骨が

互い違いになってしまったので手術した。デクくん、飯田くん、轟くんもそれぞれ浅い深いの違いはあれど怪我をしてしまったので仲良く同室で入院、私だけ性別が違うので一人で隔離されてる。うゝゝ、さみしいゝゝ。三奈ちゃんさえーくんが恋しいよう……。

先ほどエンデヴァーと一緒に保須を管轄する警察署の署長だという面構さんという方がやってきて私がやった脱法行為とその責任、及びヒーロー殺しの現在について教えてくれた。轟くんの炎でヒーロー殺しは火傷を負っており、それを利用してエンデヴァーを功労者として擁立するというお話で、そうすれば私たち学生が個性でヴィランを傷つけたという違法行為を無い事にできるとお話してくださった。

何かしらのペナルティ、あるいはヒーロー科からの強制退学程度は覚悟してたんだけど……そんなことができるのか、と思つてしまった。もちろん私たち学生を管理する立場であるエンデヴァー、グラントリノそしてマニュアルたちは責任を負うことになってしまいうらしく、それに関してはエンデヴァーに思いつきり頭を下げた。

エンデヴァーは無言ながらも私の謝罪を受け取ってくれたようで、怪我をしてない方の私の肩をポンと叩き「これから期待している」とだけ言つて部屋を出ていった。面構署長もこれから男子の部屋に行つて事態を説明すると言つて帰つていつてしまった。

私はリカバリーガールが雄英から出張してくれるまでは入院だし、それは男子たちも同様。つまり私の職場体験はここで終了なんだ。仮に復帰できたとしても私たちを管理するヒーローたちは監督不行き届きでペナルティを受けるし、これ以上迷惑をかけたくない。でもゝゝゝ！悔しいゝゝ！エンデヴァーにクリーンヒット入れてない！轟くんと超協力プレイでパーフェクトな会心の一発を決めたかった！

あの余裕たつぷりなメラメラフェイスを驚きの形に変えたかった！轟くんのお話を聞いて私も思うところがないわけじゃないんだ！でも外野の私がぎゃいぎゃい言うのっておかしいじゃん！というかせめてあの移動の仕組みを解明したかった！あとできれば赫灼のや

り方盗んで私に会う形で悪用……もとい利用したかった！右目の映像で復習かなあ……そう考えてるとこんこん、とドアがノックされる。誰かな？

「え、はい！どうぞー！」

「失礼します」

「え？え？………???'」

私の頭に？マークがいつぱいになって埋め尽くされる。入ってきたのは真つ黒のスーツに身を包んだ数人の男女……私に面識は全くない。目を白黒として事態を飲み込めないでいる私がとりあえず寝た状態から立ち上がって対応しようとするが一番偉いと思われる中年の女性に手でそのままにしてなさいと制された。

「樫希械さん、でよろしいですね？」

「は、はい！樫希械と申します！あの、不躰ですけど貴方がたは一体……？」

「突然ごめんなさい。ヒーロー公安委員会のもので。少しお話よろしいかしら？」

ヒーロー公安委員会……?!名前と概要しか知らないけど、ヒーローに関するあらゆることを管轄している警察と同権限を持っているヒーローの上位組織のことだ。凶悪なヴィランの収監を行っているタルタロスという刑務所もヒーロー公安委員会の所属だったはずだけど……申し訳ないが私に一切公安のお世話になるようなことをした覚えは……思いつきり昨日しちやったね。警察からのお叱りは免れてもこつちはダメだったのかな……？

「ああ、楽にしてください。昨日の件とは全くの無関係ですが……少しお話をさせてくださいな」

「えと……その……お話とは……？」

「ええ、単刀直入に申しますと……雄英を卒業しプロになったら……公安所属のヒーローとして活動しないか、というお話です」

「公安所属のヒーローって、今何人かいる方たちですよね？ビルボードチャートに乗らなくなつて、あんまり表に出ないっていう……」

公安所属のヒーローっていうのは簡単に言えば国の有事に動く実力を認められた強者だけの称号、みたいな感じで……その存在自体は公表されてはいるものの誰で何をしているのかは全くの不明。半分都市伝説扱いでチャートのヒーローの誰かがそうなんじゃないかと言われているくらいの雲の上のお話だ。

「ええ、概ね間違っています。ヒーローが準公務員だとすれば公安所属のヒーローは公務員そのもの。国のために人を助ける、そういうお仕事です」

「その……なぜ私に？いきなりすぎてすこし……」

「体育祭の映像は私たちも拝見しています。仔細は話せませんが、私たちが熟す任務はどれも難易度が高く、戦闘、諜報、捕縛……ありとあらゆるスキルが必要です。貴方の個性の万能性、そしてあなた自身……適格者に間違いないと判断されています」

「こ、ここで体育祭の話が出てくるのっ!?ヒーロー公安委員会って雄英の体育祭みるんだ……というかますますわかりません。私は高校1年生で、まだどう転ぶか分からない。雄英風に言えば受精卵というやつで優秀かどうかも測りかねる段階だと思う。相澤先生が言ったように指名は興味であってリクルートじゃない。今この段階でリクルートしてくるのは一体どんな意図が……?」

「なぜ今ここで接触したのかですが、早い段階で私たちを知ってもらい進路の一つとして意識していただきたいからです。貴方の個性はヒーローとしても、サポート会社としても、そしてヴィラン側からも狙われやすいと自覚してください。時に科学は個性を凌駕します。その逆もしかりですが……個性と科学の両方を持つ貴方の場合はそれが顕著です」

「私の個性が……ヴィランに……?」

「レーザー兵器を個人で運用できる人間にヴィランが目を向けない理由はありません。雄英に入学して良かったと思います。普通校では……ヴィランに誘拐されていた可能性がありますから」

ぞつとした。何でもないように使っていた個性だし、危険性は重々承知してはいたけど……ヴィランに攫われて兵器工場にされる可能



性があるなんて考えもしなかった。仮に誘拐されたら……利用される前に自爆でもしよう。どうしようもなくなった時の最終手段だけど、私の武器が無実の人を傷つけるのなんて天地がひっくり返ってもごめんだ。

「はい、意識したようで結構。今回の事件を見るに、若干無鉄砲なきらいが見受けられます。貴方が誘拐され、仮に利用されれば無数の被害者が出ることを心に刻んでください。まあ……お節介なおばさんの余計なお世話というやつです」

「いえ、身に沁みました。わざわざありがとうございます」

「よい顔です。組織人としては今回の件を褒めるわけには参りませんが、いち個人としてはとても好ましく思っています。またどこかで会うと思います、卒業後か、その前か。いい形で出会えることを祈っていますよ。では、お大事に」

そう言って、ヒーロー公安委員会の方たちはドアを開けて去って行ってしまった。つまるところ、彼女たちがしたかったのは体育祭の指名、そういうことなんだろう。ヒーロー公安委員会……そういうのもあるのかと私はベッドの上で考える。そして、考え事にふけりすぎてやってきた相澤先生に目の前で柏手を打たれて正気に戻った。ごめんなさい！ノックも声かけも電話もメールもしてくれたのに気づかなくて！え？はい、一応無事……違反行為はごめんなさいいいい！

## 期末試験編

### 33話

「なあ……希械お前え……」

「どうしたの？えーくん」

「いや……何でもねえ。無事でよかったな、そんだけだ」

「うん、エンデヴァーに守ってもらえたからね。怪我はしちやったけど、元通りになったし！」

長いようで短い入院期間を終えて、私の職場体験は終了した。飯田くんの左手は私たちが来る前にステインに刺されたせいで後遺症が残ったらしいけど、彼はあえてそれをそのままにしておくことで戒めにするって言うてた。両親は私がヒーロー科に入ってから怪我ばかりしているのだから心配してくれたけど、全部ステインが悪いと丸め込んだ……というか納得してもらった。正直どうしようもないよ、ヒーロー活動に怪我は付き物だし。

意外だったのは、エンデヴァーが私の両親に頭を下げて謝ったこと。預かった娘さんに傷をつけてしまったと、何時もは燃やしている顔の炎を消して謝罪をしたことだった。思わず私が悪いんだと言っ てしまいそうになってエンデヴァーの眼光に黙らされた。これが、責任を取るといふことだと改めて知って、申し訳ない気持ちになっ てしまった。

手術した鎖骨も切創もリカバリーガールのおかげできれいさっぱり治癒して傍目には何もなかったように私は職場体験を終えて、家に帰った。そのころには既に世間はステイン……ヒーロー殺しのこと でいっぱいだった。ステインの気絶寸前の場面は誰かが動画を撮っ ていて、それはいま日本中に拡散されて悪い意味で注目を浴びてしまっている。

そして、私たち。轟くん、デクくん、飯田くん……そして私はデクくんが発信した位置情報により、クラスのみんなから何があったかを聞かれ、ヒーロー殺しに遭遇したことを説明して、エンデヴァーに助

けられたと面構署長に言われた通りのシナリオを話した。それぞれ怪我してしまったことを説明して、三奈ちゃんをまた泣かせてしまったし、えーくんはかなり暗い声を出していた。

「ヒーロー殺し、すごく強かったよ。USJの脳無とはまた違う……技術を持ったヴィランだった。でも、もういいの！ちゃんと帰ってこれたし、短かったけど職場体験できた！えーくんはファットガムの所で何してたの!？」

「お、おおーファットガムのところは大体トレーニングかパトロールだった！ファットガムってやつぱすげえや！俺とはタイプ違うのにまだぜってえ勝てねえ！ってなっちまう。もつと強くならなきゃな！」

「うん、その意気だよえーくん！私もエンデヴァーの技術を再現して強くなるんだから！」

私と朝、顔を合わせてから登校してもちよつと暗めのえーくんを元気づけるため、私は大丈夫！と明るい声を出して話題を切り替える。さすが私の数十倍のコミュ力を持つえーくんはそれを察してくれて話題に乗っかって職場体験でやってくれたことを話してくれた。そして私は最後にエンデヴァーが貴様なら理解できる、と病室の中で口頭で教えてくれた赫灼の極意の一つ「熱の凝縮」をものにして私の個性で溜まる熱の転用方法を模索することをすでに決意しているんだ！

がんばるぞー！といつもはやらないしがらでもないけど腕を突き上げて決意表明、それに乗っかって両手をあげるえーくん。そうそう、えーくんはこうやって明るくなくちゃ。ああ、1週間もえーくんがないなんて初体験だったからちよつと懐かしさすら感じるなあ、でも無事で会えてよかった。

「ええくくく!!また希械ちゃんと一緒に帰れないのくくく!!??」

「うん、また呼び出されちゃって……」

「希械お前先生たちから頼りにされ過ぎだろ。今度は誰だ？またオールマイト？それともパワーローダー先生か？」

「今度はね、なんと相澤先生」

「ええっ?! 相澤先生が?! 希械ちゃんを呼び出したの?! それって除籍宣告だったりして……」

「普通科に行ったらごめんね?」

「いやだ〜〜〜!!」

そんな朝が過ぎてあつという間に授業後。朝は爆豪くんの髪型がベストジーニストの髪型になっててそれを見たえーくんが腹筋に直撃を受けたらしく笑い転げて動けなくなって爆豪くんがめっちゃキレたり、職場体験のことをみんなで話し合ったり、そこでもやっぱり話題になったステインの話も出たけど、飯田くんがキレイに締めてくれたおかげでそんなに重くはならなかった。

そして午前中を終えて久しぶりのお弁当タイム、そのあとはこれまた久しぶりのオールマイト先生によるヒーロー基礎学の時間だった。救助訓練レースと題したそれで驚かれたのはデクくん、私たちはステインの時に知ってはいたけどワンフォーオールを全身に発動し続けるという使い方を会得したとのことで、技名はフルカウルというらしい。途中で滑って落ちて最下位になってしまったけど個性把握テストの時と比べたら雲泥の差だろう。私は普通に空飛んで1位をもぎ取った。こういう単純なものなら私は強いんです。

それで、帰りのホームルームに行く前に廊下で相澤先生に呼び止められて、授業後に時間あるかと聞かれ、あると答えたら手伝ってほしいことがあると言われてしまったのでわかりました〜と返事してホームルームを終えたところなんです。正直断つてもよかったですけど、直近で思いっきり違法行為を働いてしまった負い目がある私としては相澤先生のポイントは稼いでおいて損はないというか現状マインナスなので……。

「やだ〜〜! 最近希械ちゃん成分が不足してるの! ずっと遊べてないもん! 女子で集まっても希械ちゃんいないことの方が多いし!」

「うう……それ言われるととても弱いんだけど……」

うじゆうじゆうと言いながら私に縋り付く三奈ちゃんが私の良心にダイレクトアタックをかましてくる。そこら辺を考えるととても弱

い、だってもう既にクラスの女子のみんなは名前で呼び合ってるのに  
対し、私はそうじゃない！それはなんでかと言えば私の授業後が結構  
忙しいから。サポート科に呼び出されたり演習場のゴミ掃除に駆り  
出されたりと半ば便利道具のような扱いを受けているせいでみんな  
と一緒にいる時間が少ないの……。

「あれ……？もしかして私みんなとそんな仲良くなれてないのでは  
……？」

「そんなことあらへんよ!？」

ぼくは、ちーんと至った結論を口に出すと近くでデクくんと話し  
てた麗日さんがすさまじい勢いで振り返って否定してくれた。前の  
八百万さんや梅雨ちゃん、葉隠さんに耳郎さんも違う違おうと集まって  
言ってくれる。み、みんな……！

「でも、あんまり一緒には行動できてへんよね」

「そうだよね……」

あげて落とされた、麗日さんに。確かに私もみんなと一緒に遊びた  
い、とは思ってる。というか普通に普通の休日を通り越したいとは  
ちよつと思つた。半日どうして学校にジャージでいて粗大ごみを粉  
砕機の中に突つ込む仕事をしてるんだろうとはたまに思うけど。い  
や金属粗大ごみ出すぎじゃない雄英？リサイクルしよ？私がしてる  
んだけど。

「なら私の事、お茶子って呼んでええよ。私も希械ちゃんって呼  
ばせて欲しい！」

「え、じゃ、じゃあ……お茶子ちゃん？」

「希械ちゃん！」

ちよつと赤くなつて麗日さんのことを名前で呼ぶと、ぱあつと顔を  
かがやせたお茶子ちゃんが私の名前を呼び返してくれる。それにほ  
かぼかと温かい気持ちになると、ずるいと割り込んできた葉隠さ  
んも私も下の名前で呼んでと言ってきて、それを皮切りに八百万さん  
と耳郎さんもそう言うってくれた。なので私は3人を名前で呼んで呼  
び返してもらう。

なんだかうれしくなつてはにかんでいるとそれを見たデクくんが

何か眩しいものを見たようなすんごい顔してる。何その表情、あと轟くんは何を考えこんでいるんだろう。えーくんはいつも通りにつこにこだね、安心する。今度の休日はみんなでお出かけすると約束して、私は呼ばれた職員室へ向かう。相澤先生の呼び出しってなんだか怖いけど、何があるのかなあ。

「失礼します。相澤先生……あれ？」

「来たか、樫」

「アンタは……」

職員室の相澤先生の机のそばに立っていたのは……体育祭の本選に唯一残った普通科の星、心操くん。紫色の無造作ヘアが特徴的で、個性は洗脳。要望はヒーロー科への編入……その人がどうして相澤先生の所に？ああ、相沢先生って普通科の授業もやってるからその関係かな？じゃあ用事終わるまで待たないと。

「よし、揃ったな。心操、樫、体育館行くぞ」

「はい」

「え？私ですか？」

「そうだ。詳しくはそこで話す」

頭の上に疑問符を浮かべながら、首元を抑える心操くと一緒に相澤先生についていくことにする。体育館？何をするんだろう……？トレーニング？うーん、予想がつかない。無駄を嫌う相澤先生のことだから移動中に聞いても応えてはくれないだろうし、心操くんがいる時点でちよつと謎だ。というか心操くんジャージ姿だ、私は制服だけど……いいのかな？そうしてついた体育館で相澤先生は私たちに向き直る。

「さて、樫……詳細を話さずに悪いな。お前、定期的に1日授業後を開けられないか？サポート科と被ってもいい。少しお前の時間を貰いたい」

「えーつと……お話が見えないんですけど、心操くんが関係してるっていうことでもいいですか？」

「そうだ、ヒーロー科編入へ向けた基礎の基礎作り……お前らに追いつけるかはこいつ次第だが、相当なスパルタになる。肉体面でも個

性面でもな。まあなんだ、俺が心操を個人的に見ることにしたんだが、どうしても届かない部分があつてな。お前にそれを頼みたい」

「相澤先生が出来なくて、私ができること……？異形型への対処とかですか？」

「流石に鋭いな。それにお前、洗脳が効かなかつたそうじゃないか。個性が効かない場合どう対処するかという場合の例としても適切だ。流石にこれは強要できないしするつもりもない。断つても問題ないぞ」

むむ、なんて底意地の悪い言い方だ。敢えてそういう言い方をして私の良心を煽ってるな相澤先生。それはそうと、納得した。相澤先生が心操くんを気に入ってヒーロー科編入を果たすためにトレーニングを付ける手伝いをしてほしい、要はそういうことなんだろう。少し恥ずかしいお話だけど、私のフィジカルはそんじよそこの男の人を軽く凌駕するし、身長も大きい。今も相澤先生と心操くんを見下ろしてるからね。そしてまあ、機械だから異形だ。変形もできるし異形型っぽいことはそれなりに再現できる。

「これは相澤先生相当心操くんを気に入りましたね？え、と心操くんって呼んでいいかな？」

「別に、好きに呼んでいいよ」

「じゃあ、心操くん。心操くんはヒーローになりたい？」

私は軽くしゃがんで、彼を目線を合わせる。髪越しに見る彼は、私と視線があつたと思つたのかすつ、と目をそらしてしまつたけど。私の質問が真剣なものだと悟つて私の目を見てくれた。じつと彼を見つめる私に、何度か答えようとして、詰まる。彼の言葉を聞くまでは判断するわけにはいかない、相澤先生が見てる時点でそれは事実だけど、心操くんの口からその言葉を聞きたいんだ。

「体育祭で言ったことに嘘をつくつもりはない。俺は絶対にヒーロー科に編入してお前たちより立派にヒーローをやつてやる。だから、その……手伝つて、欲しい」

「……ん、分かつた。じゃあ相澤先生、先生に一つお願いしてもいいですか？そしたら、お受けしようと思います」

「なんだ。言ってみろ」

「私にもトレーニング付けてください。格闘術、武器だけじゃ火力過剰なんです。一芸だけじゃヒーローは務まらない、ですよね？」

「合理的だな。分かった、並行して教えよう」

「クラスのみんなには言わない方がいいですよね？多分みんな押しかけて来るでしょうし」

「ああ、そうしてくれ。今日から始める、樫はどうする？急だから今日は帰ってもいいが」

「参加していきます。お手洗いで着替えてきますね」

そう言って私は、お手洗いでジャージに着替えて戻る。するとそこには心操くんが紙を渡してメニューを説明する相澤先生の姿が。私に気づくとちよいちよいと手招きするので何かなと思っただけに近づく。

「とりあえず聞きたいんだが、樫お前、なんで心操の洗脳が効かなかったか心当たりあるか？」

「あ、はい。私急に気絶すると基本的に他人が動かさないの、意識がふいに落ちると落ちないように再起動させるみたいな機能を個性で作ってあるんです。心操くんの洗脳の内容は詳しく知らないですけど……」

「俺の洗脳は、俺の肉声を聞くことが条件。強い衝撃が加わると戻ることがある。樫さんのは多分後者、俺は前者だと思っただけど……」

「へえ、そうなんだ。じゃあ機械を通して聴けば効かないんだ。でももったいないですよね〜ヒーロー向きの個性なのに。ねえ、相澤先生」

「ああ、俺は毎年言ってるんだがあの方式の入試は非合理的だ。心操のような取りこぼしが出る」

「でも対人戦はそれこそ危ないですよね……どうしたの？心操くん」

相澤先生に流石にもったいないですよとお話すると心操くんはかなり驚いた様子で私を見ていた。顔に何かかかっている？私何か気に



障ること言っちゃった!?! どうしようどうやって謝ろう!?! たすけて  
えーくん!

### 34話

心操くんが固まってしまった。何か気に障るようなことを言ってしまったのだろうか？それとも私の余りの無神経さに絶句してしまっただろうか？こ、こういうときに頼りになるのは周りの人……えーくんも三奈ちゃんもいない！相澤先生が助け舟を出してくれる、わけもない！どどど、どうしよう？

「初めて言われた。そんなこと、ヒーロー向けの個性だつて」

「え？そう？だ、だつてさ？ヴィランに答えさせれば一発で動き止めれるんでしょ!?私が武器振り回すよりよっぽど合理的だよ？誰も傷つくことなく、事件が収束すればみんな幸せじゃないかな？」

「そういう、考えなのか。流石はヒーロー科、根本から違うんだな。大抵のやつはヴィラン向きだつていうし、洗脳されたらどうしようつて怖がるよ」

「あーああ！そういう考えが先に来ちゃうんだ。うーん、でもそれつて他の個性の人もそうじゃない？私だつてそうだったし」

「樫、さんが？」

「あ、言いにくいなら呼び捨てでいいよ？」

なるほど、心操くんは自分の個性がコンプレックスなんだ。ちよつと気持ちは分かるかもしれない、個性差別は良くないっていうのはまあ個性社会の標語としては当然の話だけどはつきり言つて無理な話つていうのが体験談。私はまだましな方だけど異形型は差別されやすい。人の形をまだしてる私でも中学校のクラスメイトや教師に陰口を叩かれることもまあ、あった。なのでそういう個性への差別にはそういうものがあるつて実感してる。

「そうだねえ、例えば……私から目を逸らす人もいれば、手が触れたら飛びのく人もいないわけじゃなかったよ。しようがないよね、私の手……鉄を握りつぶせるんだから。怖いって思うでしょ？」

「それは、違うだろ。アンタはそういうことしないで何となく俺でもわかる」

「……ん、ありがとね。だから、今言つたことそのまま返すけど、私

は心操くんが洗脳を使つて悪いことするとは思わないから、そういう考えが先に来てるの。私以外にも個性悪い事に使おうと思えばいくらでも使えるけど、そうしないって考えてそういう風に頑張ってるから外から見ても、悪いことはしないって思えるんだよ。」

「……はは、さすがは体育祭1位だな。こんな先にいるのか……」

流石に体育祭は関係ないと思うんだけど……なんで相澤先生は無言なの。もう、こういうフオーは私じゃなくて先生の仕事じゃないですか？それとも前職員室で目を合わせてくれるから嬉しいっていう話をしたせいでそういう体験があるっていうの感づいて、心操くんのメンタルヘルスに私を利用してるな!?何という合理的な先生だ……!そもそも私がそこら辺を完全に割り切つてまったく気にしてないのに気づいてる節すらある。えーくんと三奈ちゃんのおかげなんだぞそれは。

「それに、心操くんは周りにきちんと慕われてるじゃん。体育祭の時、普通科皆で応援してたし……もうちよつと個性に自信持ちなよ。あと相澤先生、私に全部投げないでください」

「お前が俺の言うこと全部言うからだろうが」

「じゃあ、もつと褒めてあげてください。同級生の私に褒められるのって多分恥ずかしいと思います」

「……ごめん、もう既に結構恥ずかしい……」

腕で顔を隠した心操くん、隙間から見える顔は真っ赤つか。ちよつとストレートに行き過ぎたか……?でも思ったこと、特に誉め言葉は必ず伝えるっていうのは両親からの教えだからやめるつもりはないし……。絶対心操くんの個性はヒーロー向きだという確信が私の中にはもう既にあるの。だって誰も傷つくことなく、物事が終わる……: 凄いいことだよ!オールマイイト先生だってそんなことできないんだから!返事一つで行動不能、即死&初見殺し!ヤバヤバ激ヤバ!私もそういうことやりたい!初見殺し(物理) しかないもん今!

「と、まあ自罰的なのは自覚あるようだから直せよ心操。じゃないとまた楯に褒めさすぞ」

「え?!何でまた私なんですかつ?」

「お前が俺より人のいいところを見つけてるのが得意そうだからだ」

「……相澤先生の方が得意じゃないですか。こそつと褒めてくれたりとか、今みたいにストリートにきてくれたりとか」

私が人のいいところを見つけるところが得意なのかどうかは置いておくとしても絶対それは相澤先生の方が得意だしやる気が出る褒め方も知ってるはず！ぶっきらぼうだけど優しいのは知ってるんだぞ相澤先生！この短いお付き合いでも！私なら10個ぐらいすぐに先生のいいところぐらい言えちゃうよ……あれ??

「……仲いいっすね」

「問題児だからな、目を付けてる」

「そんな!？」

「それはそうと心操、調子に乗らせたくはないが、今のお前に必要なのは自信だと判断して伝えておく。体育祭の職場体験の指名……おまえにも100件来ていた。ヒーロー科に入っていれば行けていた話だ。気合い入れろよ、周回遅れを巻き返すんだ、並みの努力じゃ置いて行かれるだけだぞ」

「つつはいっ!!」

ほら、やつぱり先生の方がやる気引き出すの上手い。相澤先生の言葉に頷いた心操くんは準備運動をはじめていく。私の場合準備運動は気分ではないのであんまり意味ないんだ。せいぜい太ももを動かすくらいで……柔軟でもしておこうかな。はい、開脚、べたべたと。足を180度開いて胸を地面につける。私がやれる数少ない柔軟運動です、手足がメカだと関係ないんだよね……股関節柔らかくするしかないの。

「じゃ、並行して教えるぞ。心操は基礎トレから。樫、お前はスパリングだ。ただし力は加減してくれ、全力で来られると流石に教える余裕はない」

「はい」

「はい」

腕立て、腹筋、スクワットから始める心操くんと向かい合った相沢先生とスパリングを始め私。うつ……エンデヴァー事務所でも

思ったけどプロの人たち格闘能力凄いよね……本気で手足を振り回せば私の手は人くらい簡単に殺せちゃう鈍器になるからそれはともかくとしてなんだけど、私の素人&動画でみてモーシヨンキャプチャーして取り入れた動きをあっさりいなして転ばされる。うぐぐ、強い……！

あと相澤先生、私を心操くんの競争相手にするつもりだ多分。雄英式の高すぎる壁の役割として分かりやすく体育祭1位をとった私を連れてきて一緒に訓練させて、こなくそつていう気持ちを引き出してやる気を出させる。諦めるなら途中終了、頑張ればそれはplus ultraってことなんでしょう。す、スパルタあ……!?

心操くんが熱い思いを秘めてるっていうのは体育祭で何となくわかってるんだけど相澤先生、カリキュラム外だところという風になるのか……！授業の数倍厳しいし、いわゆる除籍のハードラインも下がってそう……！私も本気で頑張らないと……!!

「それじゃ、今日はここまでだ。心操は毎日基礎トレを怠らないように。樫は力押しを何とかしろ、以上解散」

「……はい」

「わかりました」

トイレでまた制服姿に着替えた私に対して、いまだジャージ姿のまま倒れ伏す心操くんの手短に注意点を伝えた相澤先生は体育館を出ていく。相当きつかったもんね基礎トレ……でもこれ毎日やるの？ 凄いな、ヒーロー科でも結構顔をしかめそうなくらいきついメニューだけど……そういった訓練が一切ない普通科ならこのメニューは地獄そのものだろねえ……筋繊維ぶつちぶちに違いない。

「はい、心操くんこれ。私のおごり」

「……いや、払うよ」

「受け取り拒否します。これから毎日頑張らないとだから、エールの意味を込めてプレゼントね」

着替えるついでに買ってきたスポーツドリンクを心操くん handed ます。体を起こして受け取ってはくれたけど、払うって言うので受け取

りを拒否してみる。今日のトレーニングで分かったのは心操くんがとつても頑張り屋だつてこと。キツツイメニユーでも全然弱音も愚痴も吐かなかつた。ヒーロー科でもきついメニユーが来たらちよつとブーイング出たりするけど、心操くんはそんなことなかつた。

そこからさらに、彼のヒーローへの情熱というものを伺うことが出来て、私も全力でお手伝いしようと思つたんだ。まあ、なんていうかその……個人的な好き嫌いのタイプとして頑張る人、努力する人、頑張れる人っていうのは私にとってはドストライクに応援したくなるの。素敵じゃない？目標に向かつて一生懸命になれるのつて、えーくんどかデクくんとか、私の男友達はそんな人ばかりだけど、そこに心操くんが追加された感じだ。

バックを漁つて取り出された財布からお金を差し出す心操くんに「おい、と差し出されたお金をやんわり受け取り拒否する、それでようやくと諦めてくれた心操くんはペットボトルの中身を一息に開けて大きく息を吸つた。うーん、やっぱり汗沢山掻いてるし喉乾いたよね。」

「そんなあなたにもう一本！どうぞ？」

「どこから出したの……？この際ありがたく貰うけど……」

「バッグ型冷蔵庫だよ〜」

個性で作つたウエストポーチ型冷蔵庫、腰の後ろから取り出した2本目のスポーツドリンクを差し出すともう諦めたのか普通に受け取ってくれる。うんうん、素直が一番だよ。そのペットボトルを半分開けてようやく一息付いたららしい心操くんは私を見て、話しかけてくれた。

「あれだけ動いたのに全然疲れてなさそうだね、さすがヒーロー科」

「私は機械だからね、疲れないのがデフォだよ。こんな重い物付けて生活してたら体力だつてつくよう」

「……重いって？」

「はい、持ってみて」

「うわおもっ!?待って腰抜ける、つていうか腕……」

重い、の理由が理解できなかつたらしい心操くんは左手外してパス

すると成人男性より重い腕を支えきれずにすさまじいガニ股になってしまふ心操くん。私の腕が外れたことについてはもはや説明する必要もないだろう、便利でしょ？セルフロケットパンチ。最悪ジェットエンジンの変形間に合わなかつたら腕外して投げて当てればいいんじゃないかなって最近思い始めたんだ。外して投げる、2行程、何という簡略化だろうか。

「あ、でも股関節の柔軟性だけは毎日鍛えてるよ。こんな感じで」

「うわ、カンフー映画で見たやつだ」

「あ、心操くんそういうの好きなんだ、アクション映画はえーくんがよく見るから私もたまに見るよ」

脚を前後に開いてストン、と腰を地面に落とす。お風呂上がりの柔軟の成果が今ここに！柔軟これしかやれないんだけどね！ちなみに心操くん結構体固めみたい。開脚して前に倒すやつ全然できてなかったからあんまり体鍛えてなかったのかな？まあ個性鬼つよだから話術とかそういうの鍛えるほうがいい気がするけど。

そんなことを話しながらあれこれやってたけど、流星に着替えると言って心操くんは行ってしまった。私もスーパーに買い物に行つてから帰るといふ用事があるので心操くんとはここでお別れ、茜色の沈みかけの夕日に照らされていつもお世話になっているスーパーの中に入る。お野菜くちと見ているともやしの目の前で悩ましい顔をしている知り合いの顔が

「あれ、お茶子ちゃんだ。どうしたの？もやしとにらめっこなんてして」

「はえっ!?!希械ちゃん!?!ちや、ちやうねん実はおかずが家になくつて買い物に来たはいいもののお肉は予算オーバーでもやしで何作ろうかとか考えてたわけじゃ……」

「全部言ってるよ?」

「しまった!?!」

話を整理するにお茶子ちゃんは夜ご飯が家になくつておかずの材料を買いに来たはいいもの予算が足りないからなくなかもやしで我慢しようとしていたと。ふむふむ、なるほど……体育祭でお茶子

ちやんの実家はあまり裕福ではないという話は聞いたし、一人暮らしの予算も少なめなのかも。んー、余計なお世話はヒーローの本質、だよね。

「ねえ、お茶子ちゃん。今日、私のお家でお泊りしない？」

「え？」

「急かもだけど、折角会えたし……今日明日私の両親出張でいなくて、寂しいなって思ってたの。よかったらご飯食べに来てくれると嬉しいなって」

幸い今日は土曜日で、明日は学校休みだ。お茶子ちゃんに用事があつたら残念ってなるけど、私は明日暇になったのでこうしてお誘いするに至った。相澤先生にお願いして粗大ごみ回収の頻度下げてもらったのだ。スケジュール伝えたら頭抱えて「頼み過ぎだ……お前も断れ」ってなって私への手伝いについて学校でルール決めるって言った。そこまですなくてもって思ったけど有無を言わせぬ感じだったので何も言えませんでした。

「その……迷惑じゃ、ないん？」

「迷惑だったら誘ってないよ。お茶子ちゃんの事もっと知りたいし、仲良くしたいなあって。お家、ここから近いの？」

「う、うん！待って！すぐ準備して戻ってくるから！」

「やった！じゃあ私お夕飯のお買い物してるから、ゆつくりね？」

「マッハで戻ってくる！」

ぜひお家に来て！という私のプッシュが通じたのかお茶子ちゃんは物凄く嬉しそうに笑ってくれて、そのままスーパーを出て走ってお家の方に行ってしまった。私は楽しくなってきたなと人知れず気合を入れて、お夕飯の献立を考えながらお買い物にいそしむのだった。ふふふ、お腹いっぱい食べさせてくれようぞ。



### 35話

「全く勉強してね——!!!」

「……時間は結構あったんじゃない？……？」

「希械ちゃんみたく覚えたら忘れないわけじゃないんだよ私たちは！このくく!!」

「あ、ちよ、お腹揉まないで……」

時は流れて6月の最終週、7月頭の期末テストに向けてラストスパートの追い込みの時期なんだけど……三奈ちゃんと上鳴くんはどうやら全く勉強してないみたい。私は勉強するのは好き、というか知識が個性と直結しているので学ばないと強くなれない。だからとりあえず学校の勉強は欠かさずやって、それから個性の方の勉強もやってる。中間テストは2位だったけど、百ちゃん凄いなあ……。国語という不？戴天の仇がなければ私ももつと……言い訳ってかっこ悪いよね……。

体育祭に職場体験とイベントが目白押しだったせいで勉強する時間が取れなかったという二人に、お休みの日とか勉強しなかったの？と尋ねれば青春してた！と返されたので勉強はしてないんだね……と私のお腹のくびれあたりを揉みまくる三奈ちゃんをあやししながらどうしたもんかと考える。峰田くんはそのよだれ拭いてね？

「勉強するしかないよねえ……」

「うう、希械ちゃんお助け……」

「あの、それでしたら私お手伝いできると思いますわ！」

「ヤ、ヤオモモくく!!!」

受験勉強の時みたく、樫先生によるマンツーマン授業を執り行おうかと考えてたら、それよりも早く控えめに手をあげた百ちゃんが教えますわ！と言ってきて、三奈ちゃんは一も二もなくその蜘蛛の糸に縋り付いた。むむ、三奈ちゃんにお勉強を教えるのは私の役目だぞ、なんて嫉妬じみたことを言うつもりはないけど、ちよつと寂しいような、そうでないような。

「あ、ウチも二次関数躓いちやって……」

「ワリ、俺も古文不安なんだわ！」

「私も行っていいく〜?!」

「俺もいいかな？」

「良いデストモ!!!」

響香ちゃん、透ちゃんに瀬呂くん、尾白くんも百ちゃん勉強会に参加するみたい。当然それはそこで崩れ落ちている上鳴くんも。ふむう、そうなれば私はえーくんのお勉強を見てあげればよろしいのかな？えーくんも正直お勉強は得意じゃなくて、クラス内の順位は高い方じゃない。ちゃんと教えればわかるから、地頭は悪くないし、そもそも雄英に入ってる時点でお勉強は出来るハズなのだ。

「みろよ、あれが人望ってやつだぜ爆豪」

「俺にもあるわお前教え殺したろか……!」

「おお！頼む！」

どうやらえーくんにも私の手は必要ないらしい……ちよつと寂しいぞ、くすん。でも大丈夫、スタンドアローンでも私は動きます。メカなので。いいもんいいもん私はいつも通り勉強して心操くんのトレーニングに付き合っついでに新装備を設計していつも通りに期末試験に挑むもんね。あ、心操くんの時間が空いてたら心操くんとお勉強会やつてもいいかもしれない！

「ヤオモモく〜く〜！希械ちゃんも一緒にいいよね?!私ずっと希械ちゃんに勉強教えてもらってるの!とつてもわかりやすいし、教師役ヤオモモ一人だと大変でしょ?!いいよね、希械ちゃん！」

「み、三奈ちゃん……!もちろんだよ!私頑張っちゃうよ!国語以外……!」

「最後のそれで親近感湧くな」

「まあそれでも俺たちより国語の点数は高いけどね……」

「勿論構いませんわ!希械さんは文章問題で躓いてらっしやるだけですものね、少し解き方を教えて差し上げればすぐですわ」

私が予定立てていたところにブーメランのように百ちゃんの所から帰ってきた三奈ちゃんが私を引っ張って勉強会に誘ってくれる。三奈ちゃんの優しさに感動した私はぶしゅ、と気合の排気を見せつつ

むん！と頑張るぞのポーズ。国語という不倶戴天の敵も百ちゃんに教えてもらえれば大丈夫！他の教科は任せて欲しい！そこら辺なら私も役に立てますとも！

「そうでしたらお母さまにお願いして講堂を開けて頂かないと……」

ん？講堂？普通のお家にあるものだったっけ……？あれだよね？あのその、雄英の受験の時に私たちが入ったような場所。それが講堂、私の認識が間違っただけ……？

「皆さんお紅茶は御鼻負ありまして!?我が家はいつもハロツズかウエツジウッドなのでご希望があればご用意させていただきますわ！」

ハロツズ？それって確かイギリスの超老舗高級百貨店の紅茶ブランドで、ウエツジウッドは王室御用達のブランド……ぶ、ブルジョワジイ……！ナチュラルに産まれの違いを叩き込まれちゃった……みんなも同じような顔をしているけど正直ぶりぷりと嬉しそうに、楽しそうにそれを語る百ちゃんになごんでいる。あ、でも私は……

「なんだっけ？いろはす？それでいいよ？」

「ハロツズですわね！」

「あの、私コーヒー党だったりして……」

「まあ！お父様とお話がお合いになるかもしれません！もちろんご用意させていただきますわ！」

実は私、コーヒーが好きなんです。ハロツズとかウエツジウッド……最高級の茶葉を嗜んでいる人の家にあるコーヒー、ずうずうしいけど気になっちゃう。あ、当日は私もお土産作っていかなきゃ。バターたっぷりのフィナンシェとかいいかも。よし、腕がなるぞ〜！。

「え、……？」

「ウソだろ……？これどっかの公共施設とか大使館とかじゃねーの……??」

「ちよ〜豪邸！ヤオモモの家すっご〜！」

「住所はここだから、ここが百ちゃんのお家だね。すごいね〜、私ですら小さいや」

日付変わって週末、百ちゃんの勉強会に参加する人たちが駅に集合して、百ちゃんのお家に向かったんだけど……ものすごく大きい堀がずっと続いていて、それが目的地まで途切れないからまさかなくと思つてたら大正解で、ホワイトハウスとかとてい勝負の大豪邸が姿を現して、ドラマとかでしか見ない門が私たちがそこについた瞬間に自動ですつと開き、初老の燕尾服を着た人が恭しく私たちを迎えてくれた。

「耳郎様、芦戸様、葉隠様、樅様、上鳴様、尾白様、瀬呂様でございますね？ようこそお越しくございました。私八百万家の執事の内村と申します。さ、どうぞこちらへ」

「はいっ！」

はずかし、声が裏返っちゃった！だって執事だよ!?本物だよ!?私以外もみんなどう反応したらいいのか分からないって感じだよ?!す、すごいんだね百ちゃんのお家……生まれの違いとか正直どうでもよくなるくらいの格差を感じるよ……途中で百ちゃんのお母さんに、三奈ちゃんがヤオママと恐れ多いあだ名を付けちゃったりしながら、講堂に案内される。本当にあるんだねお家に講堂……。

「皆さんっ！お出迎えもできずごめんさい。実はどの参考書がよろしいか今まで迷ってまして……」

「それでは、私はこれにて。あとでお茶をお持ちするわ。百、しっかりと教えて差し上げるのよ」

「はいっ！頑張らせていただきますわ！」

うわ、百ちゃんって形から入るタイプなんだね。先生っぽいレディスーツでバツチリ決めて、眼鏡をかけた百ちゃんがお出迎えしてくれた。頬が上気してほんのり赤くなつてるところがまたカアイイなあ。多分、この日をずっと楽しみにしてたんだね。私もちよつと楽しみだったんだけど……ぷりぷりと輝く笑顔で参考書タワーを示す百ちゃんに上鳴くんがドン引きしてる。苦手そうだもんね、勉強。

「あ、こんな凄いお家に出すのは恥ずかしいんだけど……お土産にフィナンシエ焼いてきたの。休憩するときに食べてくれると嬉しいな」

「やったー！希械ちゃんのお菓子〜！」

「まじ?!やった！」

「まあ、是非とも！希械さんのお菓子とても楽しみですよ！」

「希械ちゃん、料理上手だもん！美味しいよ〜！この前のアイスクリームもおいしかった！」

自身の温度を適温に保ってくれる機械式のバスケットを見せながらそういうと、皆楽しみだ、と言ってくれる。頑張った人にはご褒美があつて然るべき、というのは私の勝手な考えだけど。美味しく食べてくれるようならそれでいいや。それはともかく勉強開始！頑張るぞ〜！

「XとYが助動詞でインカの日覚めがペルシアでメンデルの法則が……あばばば……」

「上鳴、頭破裂してるんじゃない？もうしてるか」

「若干アホ面になってきてるよね」

開始1時間ほどで、すでに限界になっている子が一人。何を隠そう、上鳴くんである。百ちゃんの勉強プランは完璧で、私たちのレベルに合わせた問題を選別、プリントまで作ってしまう力の入れようである。みんなすると自然に勉強が進む作りになっていた。私は国語以外は全然平気だから、教える側に回っていたけど……最初に集中が切れたのがやっぱりというか予想通りというか上鳴くんだった。

「うおおお……誰か俺の頭を取り換えてくれええ……」

「えつとね、上鳴くんどこが分からないか、わかる？」

「わかんねえ！」

「そこからかあ……じゃあ、分かりやすいように教えるよ？とりあえず数学から、はい注目！」

参考書に沈む上鳴くんがあまりにも悲哀に満ちているので、私はどこが分からないのか聞くと、どこが分からないかもわからない、つま

り全部わかんないとお返しされた。上鳴くん、いちおう偏差値79のヒーロー科に合格してるんだよね……?百ちゃんが心配そうに駆け寄ってきたけど、三奈ちゃんがヘルプを求めているので私が教えるよと百ちゃんに伝えて、私は空中に画面を投影する。

「二次関数の基本なんだけど、まずはここからね」

「お、おお……?」

画面の中で、計算式と公式を表示して、ヒーローのアニメーションなどを挟んでどこをどうするか、なんでこうなるのかをスライド形式で上鳴くんにも細部の細部まで噛み砕いて説明する。理解を示してくれば思いつきり褒めて、出来なかつたら躓いた部分を見つけ一緒に修正、パズルを組み立てるようにステップを踏んで一緒に問題を解いていく。そして5分後……

「と、解けた!全然わかんなかったのに!樫すげえ!」

「ゼーぜん!私は説明しただけだよ。上鳴くんが頑張ったから解けたの。それじゃあ、次はこの問題!同じやり方で解けるから、やってみて!」

「うおお!!今の俺はクソ強ええ!!」

「か、上鳴が勉強できてる……!?!」

「響香ちゃんそれは流石にひどいような……」

「流石は希械さんですわ。非常に分かりやすく、私も聞き入ってしまいましたもの」

バリバリ、とやる気を見せつつ問題を雷の勢いで解いていく上鳴くんにもみんなが驚いている。流石にひどくないかな?やつてること相澤先生とそんな変わんないよ?興味を持続させて、やる気を引き出して、出来たら自信がついてるうちに身に着けさせる。それこそが勉強を続ける秘訣なのです。私は褒めて伸ばすのが好き、だってそっちの方がお互いに幸せだから。

「皆さん、そろそろ休憩にしたらいかがでしょう?お茶をもって参りましたの」

「ヤオマママ〜!!」

そこからさらに1時間でそろそろ他の人の集中が切れ始めていた

時百ちゃんのお母さんがメイドさんと一緒にお部屋に入ってきて、私たちの前に紅茶とクッキーを置いてくれた。しかも私にはちやんとコーヒーだ……！な、なんとも申し訳ない。私に変な好奇心をうずかせたばかりに……！

紅茶はみんなの口にあつたみたいで、美味しい美味しいと声をあげてみんな飲んでる。コーヒーも香り高くて苦みのキレがいい……脳みそが覚めていくのを感じるよ……。そこで私たちは目の前にあるこんがり焼けたクッキーを何の疑いもなく口に入れた。その味は……何とも表現しがたいものだった。何だろう、何の味が近いんだろう……？いや、ゴムとか鉄とか人が食べるものじゃないのと比べ初めであれれ？となってきた。クッキーだよね、これ？

「不思議な味だね〜」

「……???!し、失礼いたしますわ！」

皆が筆舌に尽くしがたい顔をしてるのに疑問符を浮かべた百ちゃんがクッキーを食べると、口を押えて血相を変えて出ていつちやつた。それを見ながら2枚目に手を伸ばす私にみんながあり得ないものを見るような目をしているけど、まあなんだ……焦げた配線とか、そんなものよりは美味しいのでまだ食べられる部類。多分、塩と砂糖間違えて、それでクッキーに入れちゃいけないものを入れたんだと思う。もしかして百ちゃんのお母さんの手作りかな？そう思うとありがたいなあ。

「樫お前……よくぽりぽり食べれるな」

「まあその、ゴムとかよりは美味しいかなって。残すのも可哀想だしもつたないし……甘いもの食べたいよね？はい、フィナンシエどーぞ！」

紅茶で口をゆすぐ形になっちゃった皆に、私はバスケットからフィナンシエを取り出してみんなに配る。こっちは味見もちやんとしたし、美味しく焼けてるよ。漂うバターの香りにみんなは唾をのんで、フィナンシエに手を伸ばしてくる。美味しく食べてくれるみたいで嬉しいな。

「すまねえ！勉強教えてくれ!!」

あの後色々あつて友情を深めた私たちの勉強会は滞りなく終了し、私たちはそれぞれの家に帰った。私は百ちゃんから教わった文章問題の解き方を忘れないようにメモリに焼き付けて、夜ご飯の支度に精を出していた。私の両親は基本夜勤なので朝食、夕食の時間が合わない。なのでお料理は私の役目、作り置きや焼くだけなどの状態で冷蔵庫に放り込んでおいて両親が食べる。翌日感想のメモ書きがあつたりとかするとガッツポーズ！やる気が出るよ。

なのでお料理に精を出そうとしていると、玄関からピンポン、と音がして来客を知らせた。エプロン姿のままで玄関の扉を開けると、直角90度の角度で頭を下げて勉強を教えて欲しいと懇願するえーくんの姿が。あれ？爆豪くんにお勉強教えてもらつてたんじやないの？

「爆豪くんのお勉強は？」

「ああ、教えてもらつただけど……その、だな」

「……お夕飯、生姜焼きでいい？」

「すまねえ!!!」

私はえーくんを家に招きつつ、夕飯の献立を伝えるのだった



### 36話

「ヤオモモ〜！希械ちゃん〜！！おかげでペーパーテスト何とか  
なったよ〜！ありがとう〜！」

「お役に立てて光栄ですわ！上鳴さんも頑張られたようで、私も鼻  
が高いです」

「ありがとな八百万！樫も！マジで二人いなかったら赤点だった  
！」

「上鳴くん、頑張ったからね。自己採点これだけ高かったら赤点  
のラインはクリアしてるよ〜」

期末テスト当日、午前中全てを使ったペーパーテストを乗り越えた  
上鳴くんと三奈ちゃんの勉強苦手コンビが机に突っ伏して頭から湯  
気をあげながらお礼を言ってくれるので次につながるように褒めて  
おく。頑張ったならご褒美がありま〜すと朝焼いてラツピングした  
クッキーを二人にあげる。クラスのみんなの分もあるよ〜と配ると  
皆お礼を言つて受け取ってくれた。爆豪くんも受け取ってくれた、意  
外。

演習試験はデクくんたちの情報によると去年は対ロボット演習  
だったみたいだから、私の個性ぶつぱで超余裕！ロボインフェルノの  
耐久値も他のロボットの耐久値も全部頭に入ってるし、人間相手の手  
加減を考えなくていいなら破壊力重視のピンポイントレーザーライ  
フル狙撃の一撃でいける！この間社長さんにメールでもらった設計  
図の一つにあったKARASAWAっていうレーザーライフルのお  
披露目を……！！

「残念！今年から諸事情があつて内容を変更しちゃうのさ！」

そん……な……?!?余裕ぶつこいてどの兵器を試そうかうきうきで  
考えてた私ははしごを外されて絶望の淵にいた。真面目に取り組む  
つもりではあつただけど人で試せないあれこれをロボでやろうと  
してたから対策が全部丸々パーになつちやつたダメージがおつきい。  
特にこの期末テストに落ちちやうと夏休み中にある林間合宿に行く

ことができないので実は私も割と必死、50体同時に攻撃できるクラスタミサイルとか、ガトリングパイルバンカーとか用意したのに全部パーだ！対人演習だったらまずい、私の持ち味である火力が意味をなさなくなる。

あまりのことに既に林間合宿モードだった上鳴くと三奈ちゃんは天を仰いで絶望を表現してしまっている。とても分かるよその気持ち……！でも切り替えなきゃ、もしかしたら対ロボット演習より簡単……なんてことはこの学校ではありえないか。難易度があがってるんだよねきつと……。

「これからは対人戦闘・活動を見据えたより実戦に近い教えを重視することにしてね！では相澤先生！」

「……というわけで諸君にはこれから……二人一組、チームアップにてここにいる教師一人と戦ってもらおう」

た、たたたた……対人戦だあああつ!?うわああ対策のために作った武器、兵器その他もろもろ全部おじやんだああああ!あれ?二人一組?チームアップ?……一人余るのでは?ああ、一つだけ3人一組になるんだね、分かるとも。だって教師の人も10人いらつしやるからね。11組を担当するには一人足りないから、仕方ないかあ。

「ちなみに一人余るがその場合は一人になるのでそのつもりでいるように」

あれえ!?私の考えてることごとく逆行ってない!?一人かあ……大変だよね一人って。しかも先生たちと戦うのに一人、不安でしょうがなくなるよ。皆も一人で先生とやる場合があり得るということを理解したのかサーつと顔を青ざめさせるものや、好戦的な笑みを浮かべる人もいる。まあ爆豪くんのことなんだけど。

「ペアについてはこちらで決めさせてもらっている。対戦相手もだ。さて……まずは轟と八百万。お前らは俺とだ。そして……」

ペアが次々と発表される。校長先生は三奈ちゃんと上鳴くと、13号先生は青山くんとお茶子ちゃん、プレゼントマイク先生は響香ちゃんと口田くん、エクトプラズム先生は梅雨ちゃんと常闇くん、ミッドナイト先生は瀬呂くと峰田くん、スナイプ先生は透ちゃんと

障子くん、セメントス先生はえーくんと砂藤くん、パワーローダー先生は飯田くんと尾白くん……一向に名前を呼ばれなくて焦つていく私……そして

「で、緑谷と爆豪がチーム、相手は……」

「私が、する！全力で勝ちに来いよ！お二人さん！」

「わ、わわ私、一人なんですか？」

「ああ、その通りだ。相手はオールマイトさんだ」

わ、私が一人……！しかもあのオールマイト先生が相手で……！か、勝てるビジョンが一向に思いつかない。ゴリアテレベルのものを出さないと対抗すら出来ずにパンチ一発で腕とかもげちやいそうだ……！ん？ゴリアテ……そうか！オールマイト先生なら私の本気のさらに上の上だ！私の本当に全部を出さないと攻撃を当てることすら無理のハズ。だつて、エンデヴァーにだつてかすらせるのが精いっぱいだった。オールマイト先生はそれ以上だ。ゴリアテをめっちゃにした脳無を一方的に殴り倒してしまったのだから……！

つまり……ゴリアテや他の強化外骨格……タイタンシリーズを総動員して挑める……！そうか、試験だから……！私の全力を出せるように取り計らってくれたんだ……！ゴリアテ見せておいてよかった……！あれ？でもなんでわざわざチームアップなんて……？あ、なんか組み合わせの理由が分かってきた。みんなこれ、弱点突かれてる。えーくんとかが顕著だけど継続戦闘時間に難がある個性とセメントス先生の時間に左右されない個性や、音に関する個性の響香ちゃんたちとプレゼントマイク先生。なるほど、何かしらのウィークポイントを突かれてるのか。

「では、バスに乗り込め。樫以外は一齐に開始する。樫演習場近くで待機だ」

露骨に準備する時間をくれてる……？いやだとしても、組み合わせに意図があるとしたら私が一人にされたのにも意図があるはず……？まさか単純に余ったとか体育祭優勝したからとかそんなあつさい理由で組み分けをするなんて考えづらい、というか相澤先生なら非合理的だつて言つて別の方法考えて壁をぶつけてくるはず。

何かしらの意図がある、それだけ分かっている状態はもどかしい。わざわざ距離をとってバスの後ろに乗り込む爆豪さんと憧れのオールマイト先生とガチバトルすることになって緊張で顔がすごいことになっているデクくん、そして考え込む私と何故か焦り顔のオールマイト先生……そういえば、なんで二人は組まされたんだろう？ 個人的にオールマイト先生が弱点だと思えないし……むむ、わからない。

「あの、オールマイト先生……私が一人なのって、余ったとかじゃなくてきちんと理由があるんですよね？」

「そうだね、樫少女。組み合わせは意図して組まれたものだ。当然君が一人なのにも理由がある。なぜなのか、は言えないがそこだけは安心するといい」

「目の前にそびえる天を衝くバベルの塔を見て安心しろとは凄いこと言いますね。私一人ですよ？ あなた相手に。難易度ファイナルですか、ルナティックですか、大往生ですか」

「樫少女、自暴自棄はいけないよ」

「抱き着いて自爆すればいけるかな……？」

「樫さんともないこと言わないで!？」

「え、だってまともにも戦って勝てると思う？ デクくん」

「無理、かな」

「ほらね？」

「H A H A H A！ ルールについては演習場に到着したら伝えよう！ 消極的なせつかちさんめ！」

自暴自棄にもなりたくなくなるよ！ 絶対壊れない壁ですよ？ 平和の象徴ですよ？ 全盛期より弱体化してるとか正直信じられないんですよ！ でも、これが試験なら頑張らなくちゃ。プルスウルトラだ、私。目の前の壁を全力でぶち壊して乗り越える！ 試験である以上、合格できる何かがあるはず。それを見つけて出して何としてでも期末テスト演習試験を合格しなくちゃ！

不安に駆られる私がかどうかして脳内メモリからオールマイト先生に有効な武装やら何やらを超高速で探しながらバスに揺られる。でもオールマイト先生に有効な武装？ あるわけないよね。あつたら

平和の象徴とかそんなこと言われてるわけないし。やっぱり……私の強みを押し付けるしかないよねえ……

そうして雄英のバスは演習場、確かここは市街地演習場だったはず。到着してバスを降りた私たちにここで試験をするよ、と声をかけたオールマイト先生がおほん、と咳払いをしてルールを説明しだした。

「いいかな!? 制限時間は30分! 演習に合格するにはこのハンドカフスを私にかけるか指定のゲートから外に逃げることに! 私たちをヴィランと同じように考えてくれよ!」

「逃げるか……戦うか、でもそんなの逃げる一択なんじゃあ?」

「H H H H H! せっかちな緑谷少年! まだ説明の途中だぞ!」

確かにこの条件ならば確実に逃げるほうが楽だ。楽とはちよつと違う、確実に言った方がいいかな。相手は経験豊富なプロヒーローなのに対して私たちは孵化すらしていない受精卵、相対的な戦力比は明らかに負けている。その旨を口にするデクくんは指を振ってオールマイト先生は見せたのは、リストバンド。

「まあ、それじゃあ逃げ一択になるのは緑谷少年の言う通り。そこでこれ、超圧縮重り! 体重の半分の重りを付けて動きを制限するのさ!」

「戦闘を視野に入れさせるためか……舐めてるな!」

「どうかな。楳少女は逃げるためのゲート前で待機! 仮眠するもよし! 何するもよし! 楳少女の時はまたルール変わるからね!」

「変わるんですか……!」

「大丈夫! 難しくするわけじゃないよ! さ、移動して頂戴な!」

オールマイト先生のサムズアップに促されて私はゲート前で待つ。個性で適当に椅子を組み上げてそこで座り、二人の演習試験を見守ることにする。それと同時に、個性をフル稼働させる。ジャンパーを脱いで、背中に大型のラジエーターと排気口を作り、手足に冷却ジェルを回して全力冷却をしつつ、体の中で組み立てて、保持し続ける。

雑草が熱でしなびていく、私の個性の本領である組み立て、外で組み立てないのは何を組み立てているのかバレないように準備するた

め。正直このやり方つくしやみを寸前で止め続けるとか、そういうたぐいの気持ち悪さがあるからやりたくないんだけど、相手がオールマイト先生なら準備に過剰なんてものではないし、どれだけやっても無駄じゃないと思う。

オールマイト先生がゲートの目の前に陣取ると同時に時間になったのかスタートの合図が。オールマイト先生はスタートしてすぐに、その場で腕だけ動かすようなパンチを一発放つ。するとすさまじい衝撃波が通りのビルや家屋をなぎ倒して、おそらくデクくと爆豪くんがいるであろう位置まで襲い掛かる。

右目を望遠モードにして、様子を見守る。爆豪くんはやっぱりデクくんとは協力するつもりはないみたい。流石に轟音が響きすぎて音まで拾えないけど、様子からして喧嘩してるのは分かる。オールマイト先生の姿がぶれて、二人の近くに移動する。捉えられないよね、やっぱり……。

逃げようとするデクくと真正面から立ち向かおうとする爆豪くん、スタングレネードを放つたみたいだけどオールマイト先生には効かず、拘束されるがそのまま爆破を連打して抜け出そうとしている。きよ、協調性ゼロ……！爆豪くんだけじゃない、デクくんまで固まっちゃってチームワークがとれてない、叩きつけられた爆豪くとフルカウルを発動するデクくん。バックステップをしたら空中で衝突する、噛み合っていない動き。

「……もしかして、チームワークを取らせるためにこの組み合わせに……?」

オールマイト先生はガードレールでデクくんを拘束して、重いパンチを爆豪くんのお腹に入れる。強烈すぎて嘔吐してしまう爆豪くん……もうだめ、見てらんないよ……!」

「えっ?!デクくん!」

目を背けようとしたとき、拘束を解いたデクくんは爆豪くんを思いつきり殴って路地裏に姿を隠した。いきなり仲間割れ……!?!ああ、もう!路地裏なんて透視できるわけないからどういうやり取りしてるかわかんないよ!あ、出てきた!爆豪くんが後ろを取って……!デ

クくん！爆豪くんの腕のアイテム付けてる!?他人が使えるようにしてるんだ……！轟音が鳴り響いて、爆豪くんの最大威力の爆破がオールマイト先生を襲う。

応えてるか分からないけど煙幕に紛れて脱出ゲートに向かう二人、オールマイト先生もさすがに今ので吹き飛ばされたらしい……ダメージらしいダメージは入ってないけど……距離は大分離れた、今のうちに逃げ切れば……っ!?

「今ので、あんなに早く復帰を……!?!」

爆豪くんの最大威力の爆破は家一軒更地にできるレベルだ。それをほぼゼロ距離でまともに受けたはずなのに、一瞬で二人に追いつくオールマイト先生……爆豪くんがもう片方の籠手を向けるが無情にも破壊される。

『ここで最初の合格者が出たよ！八百万、轟チーム！演習合格！』

「百ちゃん！轟くん……！やったんだ……!」

でも、と私は二人に目を向ける。オールマイト先生にやられてしまった二人は、また振出しに戻ってしまった。何をしたか分からない、何かをされたとしか理解できない。そんな隔絶された力量差……!

あっ!!爆豪くん素手で最大火力を！その隙にデクくんを投げ飛ばすけど……オールマイト先生はパンチを推進力にしてデクくんにぶつかり、無力化してしまう。だけど爆豪くんは諦めず最大火力をオールマイト先生にぶつけ続ける。プライドを捨てて協力して、負けたくない。ゲート前から見える顔がそう語っていた。オールマイト先生に地面に押し付けられても必死に抵抗している。

「デクくん……！オールマイト先生を……!」

殴った、思いつきり。デクくんは素早く態勢を立て直して、今まで攻撃しようとしなかったオールマイト先生に対して思いつきり拳を振るって爆豪くんを助け出す。オールマイト先生はそれを満足そうに受け入れて、デクくんは爆豪くんを抱えてゲートを飛んでくぐる。私は慌てて立ち上がり、二人を受け止めた。その瞬間にカチリ、と私の中で全ての準備を終えた音が聞こえる。排気孔を塞ぎ、ラジエー

ターを切り離し、気絶寸前の二人に微笑む。

「お疲れ様、二人とも。次は私の番だね……よく見えて、勝ってくるから」

この頑張りを見せられたら強いとかそういうの、言ってもらえないよね。オールマイイト先生……全力でぶつからせてもらいます。



### 37話

「さて、待たせたね樅少女！君の試験概要を説明しよう！」

「ええ、お願いします。オールマイト先生」

二人が自立可動式のレスキューロボットに担架で運ばれていったのを見送った私に、予想通りというか何とかコスチュームが汚れただけにしか見えないオールマイト先生がいつも通りの人を安心させる包み込むような笑顔で私の前に現れた。あれだけ二人が必死になつて攻撃して、応えてないどころかノーダメージとしか思えない。でも、唯一の懸念点と言えば……

「時間は、大丈夫なんですか？」

「H A H A H A！大丈夫！まだまだたつぷりあるさ！終了してない組もいるからね！」

オールマイト先生の戦闘可能時間。2時間くらいだったはず、けどどうやら今日のために時間を残してくれていたみたい。試験官を心配するなんておかしいかもしれないけど、秘密を知っているのは私を含めたごく少数だから……それに、今回私はデクくんを見て武装の加減を辞めて本気で挑むつもりでいる。それこそUSJの時の脳無のように。それですら、当てられるかも分からない。

「さて、ではルールの追加についてお話しよう。君の場合、一人ということをお案して勝利条件を追加する！それは「制限時間いっぱいまで行動不能にならず生き残ること！」当然逃げてよし、私に向かってきてもよし！隠れるもよしだ！」

「それは、タイムアップの脱落と矛盾しちゃうんじゃない？……？」

「おいおい、行動不能になったらダメだぜ？」

「確かに、あなた相手に30分無傷はむりですね」

「それに、ヒーローとしての行動も期待しているぜ。私というヴィラン相手に、な」

うわ、遠回しに逃げるだけなら不合格だぜって言って来た。ルールとしては何しても生き残ればいい、だけどそれが期末テストの合格じゃない。演習に合格できても期末では赤点かもしれない、そういう

ことか。なら猶更やることは一つだよね……私は受け取った拘束用カフスをバリ、ゴリとかじって食べてしまう。ああ、美味しくない。

「……どういふつもりかな？」

「ええ、まあ……これでカフスを量産できますので」

材質、構造はこれで解析できた。ふざけてるわけじゃないんですよ。オールマイト先生。ありとあらゆる手段を使って今から私は貴方を出し抜きにかかります。オールマイト先生はそれで私が自棄になったわけじゃないということを理解してくれたみたいでうん、と頷いて位置に着くように促してくれる。その間にもリカバリーガールから演習の合格を告げる放送が響いてる。その中には、えーくんの名前もあつた。

『では、樫希械、期末演習、スタートだよ！』

「ギガ・クラスター、形成開始」

開始と同時に、私は私の何倍もある大型のコンテナ型ミサイルを背中に3つ、作り出す。これが、最初の仕込み。私が時間を貰って組み上げたすべてがそこに詰まっている。オールマイト先生が気づく前に、と打ち上げたミサイル3基は、上空に打ちあがり、うち一基から生じた白煙で姿を隠した。そして、夥しい数のミサイルが解放されて、右目でロックオンしたオールマイト先生に襲い掛かる。

幸い彼が陣取っている場所は彼自身が更地にしてしまっている。一点集中の火力、私はそのまま続けて、もう一つ体内で作り上げていたものを解放した。

「構成拡張、重装中距離殲滅型強化外骨格『ヘカトンケイル』  
機能更新・形成開始」

出し惜しみはなし、私の身体を機械が覆う、ヘッドギア、一つ目の金属製のマスク、サブアームを4本、肩にはギガランチャー、背中には動力炉を入れたミサイルランチャー兼ブースター、脚はジェットエンジン内蔵型のホバークラフト、腰にはレールランチャー、それぞれをサブアームで掴む。手にはこれ専用開発した、ミサイルラン

チャー、ガトリング砲、レーザーキャノンを一纏めにした武装「シエキナー」、もう片手には盾、レーザーガン、大型の杭を打ち出す機構、レーザーブレードを複合した兵装「トリケロス」を装備。前腕にトリケロスを固定して両手でシエキナーを持ち、私は滑る様にその場から離れて、オールマイト先生の所に向かった。

50発はくだらないマイクロミサイルがオールマイト先生を襲う、彼は両手を構えて、クロスチョップをミサイルたちに放った。その途端、ありえないほどの衝撃が既に更地だったはずの場所を広げるほどの威力をもってミサイルを全て叩き落してしまった。当たるとは思ってたなかったけど……！当然だよね！

「H A H A H A！その程度かい樅少女！」

「いいえ！ここからです！」

「むっ！それは……！」

ドリフト走行をしながらオールマイト先生の前に現れた私に彼はゴリアテの事を思い出したのか、少しだけ警戒の様子を見せる。だけどこれは違う、圧倒的な弾幕の手数量をもって、貴方をそこに縫い付ける！そしてすれ違いざまにカフスをかける！作戦その1！私は6本の腕を全て操って同時にオールマイト先生に照準をつける。マスクの単眼、高性能射撃用センサーで彼を捕らえて一斉に弾幕を吐き出した。

「どこに撃ってるんだい!？」

「外れるのも想定済み！」

当たるわけがない、とは思っていたけど一瞬でその場から姿を消したオールマイト先生は私の後ろに現れて、背中のブースターを壊そうとしてくる。だけど当たるわけがない、とは思ってた！だから、一拍おいてミサイルを真後ろに発射していた。これは近接爆発型……！当たらなくても近くによれば爆発する！私は至近距離で爆発したミサイルに吹っ飛ばされるがなんとか空中で体勢を立て直して着地する。オールマイト先生は……！

「なぜ、そうなんだい?！」

「……?何のお話ですか?！」

「君の戦い方の話さ、誰かを守ろうとするその戦い方は素晴らしい……だが、そこになぜ君がいない？」

「おっしやっっていることがよくわからないのですが……？」

「自分の負傷を勘定に入れてないのは何故か、という話さ」

ミサイルで多少煤けたオールマイルト先生はそう聞いてくる。私が自分を勘定に入れてない……ああ、そういうことか。何のことはない話だと思う。べつに

「え、だって私の手と足はほっとけば生えますし、生身を怪我してたとしても個性で補えます。即死しなければ内臓が吹っ飛んでも個性で代用できると思います。えーと、つまりですね……私の方が頑丈だから、です」

「だが、痛いはずだ」

「ええ、まあ……でも私よりも他の人の方が痛いに決まっています。

私は、機械ですから」

どこかで話したかもしれないけど、生身の身体は私の秘かな憧れだ。だから私は自分の左目が好きだし、他の人の体が大事だと思う。ただ、他の人は私にみたいに頑丈じゃないし、怪我すれば直すのだから時間がかかるし……失えば、戻らない。なら、私がそうなったほうが合理的だ。失っても戻るし、直すのだから一瞬。じゃあ、それでいいと思う。そりゃ、見る側からすれば気持ち悪いかもしれないけど……

話は終わり、と私は腰のレールキャノンを連射してオールマイルト先生に弾幕を張る。彼は一瞬だけ悲しそうな顔をしたが、すぐに顔を引き締めてレールキャノンを手刀で迎撃した。嘘っ!?手刀で弾丸切るの!?!しかも音速越えのレールキャノンを!?!冗談でしょ!?!いやそれでこそ平和の象徴か!

毎分100発の連射力を誇るギガランチャーの榴弾が連続でオールマイルト先生に迫る、ついでシエキナーとトリケロスのレーザーも。だが、スマッシュの一撃ですべてなかったことになる。シエキナーのミサイルを握りつぶしたオールマイルト先生がぶれる、そして、両肩が軽くなった。

「そうか、君は分かった上で……そうしてるのか」

「はい、私のそれは受け入れがたいものかもしれませんが。ですけど、私は保身して他人の命を投げ出せない。出し惜しみして、助けられなければ一生後悔するからです」

根元から切断されたサブアーム2本と、ギガランチャー。それはオールマイト先生の手の中で握りつぶされて拉げる。被害想定、戦闘行動支障なしなれど最大火力を喪失……ヘカトンケイルはここまでにした方がよさそうだ。作戦を2段階目に移行しよう。

「だが私は断言するぞ、君はいつも自分を機械というが、君は人間だ。私と何も変わらない、君は君を大事にするべきだ」

オールマイト先生の強い瞳にそう見据えられて、マスク越しでも気圧されてしまう。私自身を大事に、かあ……私は確かに傷ついちゃいけない戦い方が得意じゃない。避ける、躲す……それをできるほど私の体は身軽じゃないから。どうしたって避けられないものがある。言い訳か……そうかも。考えるのは後だ、今は試験に集中！

「後で考えてみます。ですけど、今は置いておかせてくださいっ！」  
「むうっ!？」

残りの武装をオールマイト先生の周りにばらまきながら突撃する。自分ではなく周り、更地に突き刺さる鋼の豪雨がオールマイト先生の動きを少しだけ鈍くする。そのまま突撃してタツクル……ではなく私は手足を切り離して、ヘカトンケイルを脱ぎ捨てた。交錯するようオールマイト先生を飛び越えて、周りにバラバラになったヘカトンケイルが、熱風を吹き出してさらにオールマイト先生をその場に固定する。

エンデヴァーから理論を教わった赫灼の極意「熱の圧縮」……それは一部だけ成功して私は手足に熱を圧縮することで生身の中枢を熱から守り、さらに切り離して熱のコントロールを行ってオーバーヒートへの対抗手段として身に着けることができた。だけど、今の私は手足がないだるま状態、だからこそ最初の仕込みが生きてくる！

「タイタンフォール！スタンバイ！」

空から、何かが落ちてくる。そう、最初に打ち上げたミサイルは3

つ、クラスターミサイルだったのは1発だけだ、残り二つは……私の残弾。ヘカトンケイルが通じなかった場合の別の手段だ。鈍足ではあっても威力と範囲に優れたヘカトンケイルならばオールマイルト先生の動きを止めて脱出ゲートをくぐれるかと思っただけど、甘かった。それならば次の手を。私の強みを押し付ける。手段の豊富さこそが私の真の強み。機械の力でも、硬い体でも、再生する手足のどれでもない。あれが通じなかったからこれ、を特化していくらでも試せるのが私の個性の最大の利点。トライ&エラー、それこそが今までの私とここに押し上げてきたものだから。

「構成拡張、オーバード軽装近接速度特化強化外骨格『アルビオン』スタンバイ機能更新・レ形成開始」

オールマイルト先生が熱風牢獄から脱出する前に、圧搾空気で空中で態勢を整えた私に迫った外骨格、アルビオンが結合する。肩口のユニバーサルブースターポッド、腰後ろにメインスラスターであるテールバインダーを両腰2つずつの計4機、脚はまるで鳥の足のように二股に分かれて足の内部にはバーストタービンエンジンがうなりをあげている。バイザー型のヘルメット、全体的にシルエットは細め、大きさも何時もの私を逸脱してない。

しやりん、とこの外骨格の唯一の装備、レアアロイブレードを抜いて構える。黄金色の刀身は希少金属をありとあらゆる方法で鍛え上げた西洋剣、折れず、曲がらずを体現した最硬の剣だ。全身スラスターの塊になった私が、ホバリングしながらオールマイルト先生を見下ろす。遠距離でのつるべ打ちはダメだった。ならこれなら！

熱風牢獄を腕の一振りでかき消してしまったオールマイルト先生に、私はレアアロイブレードを構えて突撃する。背中のスラスター達がうなりをあげて私を射出する。音を突破してソニックブームを連れてオールマイルト先生に突っ込む、けど……目で、追われてるのが分かった。振りかぶるレアアロイブレードと先生の拳が衝突して、私は押し負けて吹き飛ばされる。

「大分、速くなったね！だが、そろそろ私もエンジンがかかってきたぞ！」

「私もです、まだトップスピードじゃありません！」

この外骨格は私の弱点であるスピードを埋める為に開発したものだ。背中のブースターポッドも、テールバインダーも、脚のバーストタービンエンジンもそれぞれが単騎で私を飛行させることができる推力を持っている！ならそれを8機、同時に運用すればどうなるか……答えはこれ！

「ふぐぐぐ……！」

バイザーの下で歯を食いしばる。上下左右に滅茶苦茶にスラスターを向けてオールマイト先生から逃げる。当然のように、追いついてくるし、気を抜けば攻撃がクリーンヒットする。軽装、の名の通りアルビオンはヘカトンケイルと比べて紙装甲だ。オールマイト先生の攻撃をまともに食らえば落ちる。でもそれを補っても初速から前を凌駕できるこれならば！

「はあああああっ!!!」

「DETROITSMASH!!!」

私の両手で振りかぶった剣と、オールマイト先生の拳が衝突して、凄まじい衝撃波が周囲を駆け抜けた。

「なんで、追いつけるんですかっ……!」

「今の君並みに速い相手はいたさ!だが、君は動きが雑だからね!」  
「そりゃ、ぶつつけ本番ですもの!」

拳と剣が衝突し続ける。ヒットアンドアウェイでオールマイト先生の周りを飛び回り、黄金色の刀身を振るう。だけどそれはオールマイト先生の拳にあっさり負けてしまう。音速の加速を加味してもなお、打ち負ける。すぐそばにあるはずの脱出ゲートが酷く遠いものに見える。被害を小さく抑えたいからオールマイト先生がすでに壊し終わったところで戦ってるけど、それが逆に私を縛っている。

やっぱり一人は難易度が高いよ!いま何分!?10分経ってないね!だめだ、私の熱圧縮を使っても、オーバーヒートまではあと1回換装できるかどうか、それ以上は体にたまる熱を無視できなくなる域まで行ってしまう。何度かカフスを生成して剣戟と同時にカウンターで腕にかけようとしてみたけど、デコピンで壊されて対処されてしまった。最低でもこのレアアロイブレード並みの硬度が必要だと思う。

それに私自身、シミュレーションはしていても外骨格であるタイタンシリーズを動かすのは全部ぶつつけ本番だ。機能テストは出来ても思いつきり動かすなんて日常生活で出来るわけないから。一旦逃げると見せかけて脱出ゲートへ!

「おっと、逃がさないよ」

「あうっ!」

回り込まれて、水平チョップが私を襲った。とっさにレアアロイブレードを十字に構えて防御する。受けたら敗北必至だから……!吹っ飛ばされてビルに突っ込む寸前でスラスタで急減速を取り、オールマイト先生がその場から放った衝撃波による空気砲を横方向に飛んで避ける。ビルが見事に陥没してる、頭おかしいよ。私じゃ再現できないレベルだ……!」

「これクリアさせる気ありますかっ!」



「plus ultraさ櫛少女！目の前にある壁を真正面からぶち壊す！それが雄英の校訓！」

「知ってますー！」

内臓がGによって潰されそうなほどの慣性が私を襲い続ける。ゴリアテ以上の加速でデタラメな軌道をとって戦ってるんだ。そりゃ、内臓が滅茶苦茶になってもおかしくない……！オールマイルト先生の一撃をまともに食らえばいくらレアアロイブレードでも折れ曲がってしまっただろう。といふかなんで刃物に素手で対抗出来るんだこの人は!?これ個性の搾りかすで戦ってるだなんて思いたくない！

幾度目かの交差、初動の遅さを動き続けることで解消するアルビオンでも、相手が速すぎるとここまで苦戦を強いられるのか……！でも、データは揃ってきた……！オールマイルト先生の打撃の打ち方、力の込め方、初動の癖……！蓄積されたデータをもとに行動を予測する！そしてこれが、作戦3段階目……！

「タイタンフォール！スタンバイ！」

「2度目はないぞ櫛少女！」

「ええ、ですからこうです！」

落ちてくる外骨格を私が装着する前にオールマイルト先生は破壊しようとして力を込めて飛びあがろうとする。だけど、その予備動作を予測していた私の上からの斬撃を防御せざるを得なくなる。そのまま私はオールマイルト先生が行動の予備動作に入る前に先の先を取る形でオールマイルト先生に攻撃を放ち続ける。力負けは必然、少しミスをしたらだめ。少しでも連撃に隙を見せればたちまち脱出されてしまう。予測し続ける、その場に縫い留めるんだ！

そして、空から降ってきた外骨格最後の一つ……改良型ゴリアテ、バージョン2が私が入ってないのにもかかわらず、組みあがって着地する。超大型外骨格であるゴリアテ、私が入ってなくても操作できるように改良済み！さらなる改良点は主に腕部、硬くして、パワーをあげた。さらに肘部分が突出しており、その中には杭が覗いている。ゴリアテの肘が伸縮する。片手を構えたゴリアテが突っ込んできて、パンチをオールマイルト先生の背中に打ち込む。

「サドン！インパクト！」

「うおおおっ!?!」

内部で圧縮に圧縮を重ねた空気砲が衝撃波と一緒に炸裂する。私は一瞬で炸裂範囲から逃れたが、私に邪魔されてギリギリ防御行為を取れたオールマイト先生は吹き飛んで、脱出ゲートの真逆に吹っ飛んでいった。けど、一瞬で戻ってくる。やはり、ダメーヅらしいダメーヅはない。サドンインパクトはワンフォーオールの攻撃による空気砲の原理を解明して開発した武装だ。火薬式杭打ちパンチより連打力は劣るけど威力は段違い、遠距離攻撃も可能になった。

作戦3段階目、ゴリアテとアルビオンによる2対1でオールマイト先生にカフスをかける。スピードのアルビオンとパワーのゴリアテならオールマイト先生にだって小さい隙を作ることくらいはできると言うから、メキ、と道路を陥没させて大地を踏みしめるゴリアテと、そのうえでホバリングする私。

「これでダメなら、私の負けです」

「受けて立とうじゃないか。君の全てを受け止めよう」

「行きますっ!」

突っ込む、先駆けは私、両手の剣を揃えて横一文字の斬撃を見舞う。オールマイト先生はそれをバックステップで躲すけど、遅れて追いついてきたゴリアテに組み付かれて手四つの状態に持ち込まれる。当然それを抜け出そうとするオールマイト先生……ごめんなさい！オールマイト先生！

「What!?!」

『櫟希械！合格だよ！』

手四つになった瞬間、ゴリアテの前面装甲が開いて、本来私が収まっているべき場所から大量のトリモチが発射された。作戦4段階目、ゴリアテを加えた2対1に見せかけてここまで見せてこなかった搦め手を使って、一気に脱出作戦。サドンインパクトでゴリアテのパワーを印象付け、真正面から衝突すると見せかけて、スピードのアルビオンで一気に離脱する。騙し討ちみたいな感じだけど、多分あのままだったらゴリアテを1撃で壊されるとかあったかもしれないし

……。

「こ、ここ……怖かった……!!」

「やられたよ樗少女……お疲れ様だ!」

「えっ!?!と、トリモチは……!?!」

「H A H A H A!全部振りほどいてきた!」

「うそお……」

何とか脱出ゲートをくぐった私がアルビオンのバイザーをあげてへたり込んでいるとすぐ後ろに多少スーツにトリモチがついているものの応えてない様子のオールマイト先生がやってきた。ひえ、トリモチ通用しないんだ……!戦ってる最中のオールマイト先生強すぎて絶望感しかなかったから、全部終わって私は今涙目になっている。ヒーロー殺しとか脳無並みに怖かった……!

「なんですかオールマイト先生、ぜったいデクくんたちの時より本気出しましたよね!」

「あ、いやまあ……その、思ったより強くてだね」

「ほんとに……3回くらい死ぬかと思っただけ……」

バンバンと地面を叩きつつオールマイト先生に抗議すると、案の定私に対する加減の弁がどこかに吹っ飛んでいたらしいオールマイト先生がバツが悪そうに頬をぽりぽり書く。だってデクくんたちの時は直当てしないように気を付けた感じで攻撃してたのに私の時は全部直撃コースだったんだもん!一発当たればいくら私でも重症ですよ!

「あー、ほら、ね?そういう試験だから……」

「私たちの課題部分を見てたようですけど……大方、私の場合「自分の負傷を無視する傾向がある」とかそんな感じですか。あと継続戦闘能力に難がある。だから一撃当たったらおじやんなオールマイト先生で、30分の時間制限の生き残りっていう勝利条件が追加された。そんなところですかね」

「むむ、分かったのかい?」

「いや、試験中あんなこと言われたら流石に分かりますよ。まあ、予め手足のストックを打ち上げてて良かったです」

アルビオンの全面装甲を開いて私はアルビオンを脱ぎ捨てる。ギリギリオーバーヒートしてないからまだ何とか言い訳立つレベルじゃないかなあ？そう信じたいなあ。ああ、奥の手であるタイタンシリーズ3機を同時に投入しても足止めが精いっぱいだったオールマイト先生。No.1ヒーローという頂きがどれだけ高いのか思い知りました。もつと頑張らないとなあ、私も。

私は強化外骨格すべてを遠隔操作して、私の所に呼び集める。そして、粉碎機に全部放り込んで取り込んだ。そろそろサポート科に回収させるのも失礼な話だし、これからはこの方式で頑張ろう。そのあとやっぱり私が一番最後に試験が終わったらしくて、バスにオールマイト先生と乗り込んで教室に帰るのだった。でもこれ自慢できそうだよね、オールマイト先生の一撃を何度も防御したのに折れ曲がらなかったレアアロイブレード……！えーくんよりも硬いかもしれない。

「ひぐっ……うぐ……うえええ……」

「み、みみみ三奈ちゃん!?どうしたの!？」

「希械ちゃあん……慰めてえ……」

「???」

「あのね、上鳴ちゃんと三奈ちゃんは、不合格だったのよ」

着替えたりなんなりでみんなより遅くなってしまった私が教室に入ると、まるでお通夜のように沈み込む上鳴くと、ぐすぐすと号泣する三奈ちゃんの姿があった。私が慌てて三奈ちゃんに駆け寄って何があったのか尋ねると慰めての一言で抱き着いて何も言わなくなってしまう。とりあえず膝に抱き上げて私が椅子に座ってよしよしとあやしていると残念そうな顔をした梅雨ちゃんが三奈ちゃんと上鳴くんの組がタイムアップで不合格になってしまったことを教えてくれる。

「そうだったんだ……でも三奈ちゃん頑張ったんだよね！私は頑張ったの知ってるから！夏休みはいつたらいっぱい遊ぼう？」

「うわああん！林間合宿行きたかった〜！」

「あー、芦戸。今日帰り付き合ってやるから。カラオケ行こうぜ？  
なんか奢ってやるよ」

「ばふえ……」

「おう、パフエでもパンケーキでも何でも食べえ！男に二言はねえー！  
「明日のお弁当、三奈ちゃんの好きなもの沢山入れるから！ね？」

「うん……」

よっぽど林間合宿に行けないのがショックだったのか幼児退行を起こしだしてる三奈ちゃんに思うところがあつたのかえーくんも加わって私と二人で慰めにかかる。私の胸に顔をつけた状態でもごもごいう三奈ちゃん、物で釣ってるみたいであんまりよろしくないかもだけど、元気じゃない三奈ちゃんは三奈ちゃんじゃないので……

「まるでお父さんとお母さんね」

「あそこだけ家族オーラやべえな」

「芦戸って末っ子っぽいところあるよな」

「あ、ウチも行つていい？久しぶりに思いつきり歌いたい気分」

「カラオケ……行つたことないですわ」

みんなも期末テストがどんな結果に終わったかはわからずとも息を抜きたいというのは共通しているようでえーくんのカラオケという言葉に食いつく人が結構いた。三奈ちゃんのためにも賑やかな方がいいと思うので来てくれる分には構わないし、歓迎だ。でも私、このクラスのみんなに歌を聞かせるの初めてだ。なんか緊張してきた……あ、そうだ。

「えーくんはセメントス先生とだったよね？どうやってクリアしたの？」

「あー……男らしく正面突破しようとしたんだけどな、無限に壁生えてきてよお。砂藤は途中でダウンしちまうし……」

「うわ、ある意味予想通り。それで？」

「んで、セメントス先生ってセメント操って壁作って俺ら囲ってたから……見えてなかったんだよな俺らの事。だから、砂藤背負って地面掘って、足元から奇襲してカフスかけたんだ」

「いや、悪かったな切島……お前のおかげでクリアできたぜ。今度

菓子でよければ受け取ってくれ」

なるほど、地面からの奇襲をかけたんだ。えーくんの手なら硬化させてスコップ代わりにしても問題ないだろうし……でも凄いな。手で地面掘って奇襲？根性とかそれで片づけていいものなんだろうか……？それにしても

「よくわかったね、セメントス先生がいるところ」

「あー、いや……勘だったんだよ、それ」

「……運も実力の内？」

抱っこちゃん状態で私から離れない三奈ちゃんの頭を撫でながらえーくんと話していると、ようやく気持ちの整理がついたらしい三奈ちゃんがぼつと顔をあげて会話に混ざってきた。ちよつと涙目のままだけど、何時もの三奈ちゃんだ。

「もー！校長先生どこいるかわかんなくてさー！どんどん逃げ場ふさがっちゃうし！希械ちゃんみたいに空飛べれば私もく〜！」

「でも空飛ぶのって大変なんよ？行きたい方向に行けんかったり……」

「お茶子ちゃんは浮くだけだからねえ。スラスタ貸してあげよっか？」

「あはは、明後日の方向行きそうやから遠慮しとく」

「おし、カラオケ行こうぜ！反省会と一緒に思いっきり歌おう！」

「切島君奢ってくれるん？」

「え、マジ？切島ごちー」

「何頼もうかな」

「いや奢るのは芦戸と希械だけだぞ!？」

「私も？」

なぜか私にも奢ってくれるらしいえーくんと他の人たちのブーイングを聞きながら、私は帰り支度をするのだった。一発芸のゲーミング希械ちゃんの出番がついに来たか……！ミラーボールいらすの輝きを見せてあげよう……だから歌わせるのは勘弁して……

# I・アイランド編

## 39話

「はい、50回。インターバル5分挟むよ」

「はあ……はあ……」

ボタン、と倒れる心操くん。腹筋50回という中々に筋繊維ブチブチな回数を終えて、私に足を抑えられた状態で仰向けに倒れ込んだ。期末テストから一夜、まだまだ朝も早い時間帯である。なんでも相澤先生から心操くんが朝練を始めたという話を聞いて、オーバーワークしてないかなと心配になった私は様子を見ることにしたんだ。期末テストの時はあんまり顔出してあげられなかったし。

で、心操くんが一人つきりで走り込みやら筋トレを黙々とこなしてるのを見つけたのでお手伝いするよ、と乱入しました。あ、でもえーくん私が起こさなくても起きられるかなあ？ 雄英に入ってからくたくたになって帰ることが多くて、疲れがたまってるせいか一人で起きられなくなったんだよねえーくん。

まあ、昨日の内に今日は私朝早くに学校行くって言ってあるし、えーくんのお母さんが起こしてくれると思う。硬化した手で目覚ましを壊さないように気を付けてね……！ それで心操くんんだけど、黙々と基礎トレをこなしていたので私はやっぱり情熱あるんだねと感心した。普通科の期末試験はペーパーテストだけだったから余計に焦ってはいないかと思っただけ……。

「そういえばなんだけど、他の普通科の人たちって心操くんみたいにヒーローになりたい!! っていう熱い人いないの?」

「わからない、かな。ヒーロー科に多かれ少なかれ不満を持つてるやつはいる。けど、じゃあ俺がヒーロー科入って不満を解決しよう! って努力するやつは今んとこしらない」

「私たち、不満もたれてるの……?」

「結局体育祭もヒーロー科の独壇場だったし、ヴィランの襲撃にあったのもヒーロー科。茶番に付き合わすなって言ってたやつもい

たな

「それ、私たち何も悪くないんだけど……」

「わかっててもそう思っちゃうんだよ、人間ってやつは」

うーん、理不尽。雄英に於いて普通科はヒーロー科の滑り止め扱いで入学する人が多い。それが虎視眈々と心操くんのようにヒーロー科の席を狙い続けるというわけでもなく、自主練に明け暮れるわけもなく、不満を漏らして中傷するだけの人がいるんだね。確かに、そういう不満はあるかもしれないし直接言っただけ偉いけど……。

「心操くんみたいに、頑張ればいいのに」

「置いて行かれるとわかってて、追いかけるのは馬鹿のやることだよ。俺はその馬鹿なだけ」

「はい、そんなことありません。心操くんが自罰的なこと言ったら褒めろって相澤先生に言われてるから誉めるね」

「ちよ」

皮肉気にそんなことを言う心操くんにもかつと来た私は心操くんがいかにか頑張っているかというお話を懇切丁寧に彼に伝えていった。ここ頑張ってるくらい、ちゃんと毎日続けててえらいと伝えていくうちに真っ赤っかになっていく心操くん。かわいい。相澤先生がいなからないと思った？やれって言われてるからやるよ。人を褒めるの、私好きだし。

「ねえ、ヒーロー科の期末試験、どんなのだったの？」

「え、私はオールマイイト先生とタイムマンしたけど、他の人は二人一組で先生と戦ったよ」

「……勝ったの？」

「まさか、不意をつけたから合格は出来たよ。採点基準分かんないし、期末試験を合格できたかは分かんないけど……私視点でよければ、見る？」

「……………見たい」

私の褒め殺しから逃れるためか、顔を手で隠した状態で期末試験のことを訪ねてくる心操くん。むむ、では褒め殺しはここまでにしとき



ましよう。心操くんの凄い所はまだあるけど。対オールマイト先生の動画、まあ私の右目で捉えた映像なんだけど……見たいの？って聞いたらたっぷりの間の後に見たいというお返事をくれたので、一旦朝練は中断、私は映像を投影するのだった。

「ふんふん」

「なんだ希械、上機嫌じゃねえか」

「えっへへー、実はちょっと嬉しいことがありました」

教室で鼻歌を歌う私にちゃんと起きられたらしいえーくんが何があったのかを聞いてくる。なぜ私がこうも上機嫌なのか、それは心操くんがサンドイッチをご馳走したら美味しいって言ってもらったからです！あと様子を見に来た相澤先生にも勧めたら受け取ってくれて、それで食べてくれたの！心操くんの身体作りどうしてるのかなって聞いてみたら、ご両親が忙しいらしくてコンビニ弁当とか総菜が多いんだって。

それならばと私は朝お弁当をサンドイッチにして、沢山作っておいたんだ。だからそのうちの少しを心操くんと相澤先生にあげたってわけ！心操くんがお気に召したのは照り焼きマヨサンドで、相澤先生は明太ポテサラサンドが気に入ったみたい。朝から美味しいって言ってもらえて私はご機嫌なんだ。私は褒めるのも褒められるのも好きだからね！

「へー、何があったんだ？」

「ないしょー」

「だああ！気になるじゃねえかそんなこと言われたらよお！」

「ひーみーっー、だからね」

「ちえー」

口元に一本指を立ててしー、とやってみせると私の上機嫌の秘密を知りたかったえーくんはがしがしと頭を掻いてやっさと諦めてくれる。ごめんねー、心操くんのご機嫌なことは内緒なんだ。いつか彼が胸を張ってヒーロー科の敷居をまたぐまでは内緒。えーくんには伝えるとあつという間にクラス中に広がっちゃうからね、えーくん嘘つくの苦手だか

ら。

「予鈴がなったら席につけ」

しゅばっ、とみんなが自分の席に着く。相澤先生が教室に入ってきたからだ。みんな相澤先生に立派に躡けられてそういう行動を起こすのがとつても速く正確になってきている。相澤先生もそれはそれは満足気。相澤先生が怒ると怖いもんね、峰田くんとか上鳴くんとかはよくご存じのはず。女子更衣室覗こうとしたのは私でも流石に怒っっちゃうよ？

「さて、昨日の期末試験だが……赤点が出た。上鳴、芦戸はもう分かっているな？他は瀬呂、砂藤が赤点だ。心当たりはあるだろう」

「みんな……お土産話期待してるから……!」

「寝てただけだからな……そうだよな……」

「切島に背負われてただけだもんな……」

「うえい……」

「従って林間合宿には全員でいきます!!」

「!!」  
「!!」  
「!!」

赤点者の発表に呼ばれてどよーんとなってしまふ4人。あそこまでやって赤点だったら私はどうすればよかったのかという話になるので一応合格しててよかったあ……そして相澤先生が真顔で言った林間合宿全員参加の言葉に4人が感涙を隠せずに叫んだ。すごい、ホントにどんでん返した。よかったね三奈ちゃん、楽しみにしてた林間合宿に行けて。

「が、当然ながら現地で補習も行う。ぶっちゃけ残つての補習よりきついでそのつもりでな」

そしてあげて落とすのも忘れない相澤先生、飴と鞭の使い方が上手だなあ。飯田くんが相澤先生の合理的虚偽に文句というか意見を言ってるけどこの学校でそれ気にしてたら多分やっていけないよ。私は学んだからね、騙されるの前提で頑張るのさ!嬉しくないなあ……。

合宿のしおりを見ながら予定立てをする。合宿は夏休みの後半にかけてだから、前半は色々できるよね。短い休みだけど私たちにとつ

ては貴重な長期休暇！英気を養ってヒーローになるために頑張るぞ！

「樫少女、緑谷少年。ちよつとお話があるからおいで」

「え!?は、はい!」

「なんででしょう?」

すでに夏休みモードが漂う教室に筋骨ムキムキのオールマイト先生が私とデクくんを指名した。この組み合わせってことはワンフォーオール絡みの話かなあ?でもこんなに堂々と私たちを呼ぶってことはまた何か別の話題なのかも。談話室に一緒に入って鍵をかけたオールマイト先生が煙を上げてぼふんとガリガリのトウルーフォームになってしまふ。今日はギリギリだったのかな?

「さて、帰りがけに悪いね少年少女。実は夏休み中に小旅行に行かないか、というお誘いをさせて欲しくてね」

「小旅行、ですか?合宿もあるのに?」

「そうだとも!特に樫少女!君のためになる場所でもある!I・アイランドは知っているね!」

「勿論知ってます!最先端の科学を研究する人工島あのデヴィット・シールド博士が所属してることでも有名!常に移動しているうえに警備はタルタロス級だと……」

「あう、全部言われちゃった」

「ぐ、ごめん樫さん!つい!」

I・アイランド!その名前を聞いてときめかない技術者はいないであろう最新技術の宝庫にして科学の最前線!デクくんは全部言われてしまったけど常々行ってみたいなあという話をしていた場所だ。それが何でオールマイト先生の口から……?あつ!デクくんから聞いたことがあるんだけどシールド博士はオールマイト先生のヒーロースーツを作っている人だった!そうか、そういう関係か!

「とまあそんなわけでI・アイランドのエキスポ招待チケットを頂いてね。折角だから君たちと一緒に行きたいと思ったのさ!」

「こ、光栄です！オールマイイトに誘ってもらえるなんて！」

「あの、デクくんは分かるんですけどなんで私もなんですか？」

「H A H A H A！緑谷少年と私は君に随分と世話になったからね！お礼の意味を込めてさー！」

デクくんを誘うのは師弟関係なわけだし分かる。とても分かる話だけど、私ってぶっちゃけ勝手に首突っ込んで好き勝手やっただけなのであってお礼されるほどのことをしていないような……ああ、でもI・アイランドは非常に魅力的だ。行かない選択肢はあり得ない。もしも、もしもだけど荷電粒子の権威の一人であるミノフスキー博士に会えたりしたらビーム兵器を実用に持つていけるかもしれない……！

「まあ親御さんのこともあるから返事は夏休み前にくれれば平気だよ。あ、でも樫少女、君パワーローダーからサポートアイテムの免許取る様に言われてただろ」

「え、はい。模試はA判定でしたけど……」

「流石だね。実はI・アイランドでも試験があつてね。作品を事前に送って、合格点に達していれば国際版の免許が発行されるんだ。樫少女の場合そっちを取った方がいいと思う。どうかな？」

「や、やりますっつ!!!絶対!」

そうか！科学の総本山であるI・アイランドにサポートアイテムの免許試験がないわけじゃないんだ！というか向こうの学校であるアカデミーだとそれを取ってからじゃないと入学できないだなんて話も聞くくらいだし！日本だと取れるのは夏休みあと！夏休み中に取れるかもしれないなら越したことはないよね。お父さんお母さんを何と少しでも説得しなきゃ！

「何送ろうかな？プーマバギー？ホバーバイク？あーでもスイングショットシステムも捨てがたいよね……」

「H A H A H A！やる気みなぎっているようで何より！君の作品ならば問題ない筈さ！パワーローダーに模試の結果を向こうに送るよ言うっておくよ！」

「あ、発目さんにも……あ、でも彼女模試判定Dだったような……」

「流石にそれだと私の名前を使って推薦するのは難しいかな……」

「オールマイト先生に推薦されるんですか私!？」

「そうだとも!というか私相手にあそこまでやれるサポートアイテムを作ってる君が無免許なのは少々まずいからね!相澤君風に言う」と合理的推薦というやつさ!」

発目さんは実技方面では途轍もなく優秀なんだけど、興味が向かない部分にとことん無頓着みたいで法律を覚えるよりもトライ&エラーですとこのことでパワーローダー先生の実験室にこもっている結果みたい。パワーローダー先生は頭を抱えているみたいだけど発目さんらしいつちやらしいかも。まあ、彼女なら必要と理解させれば超速度で試験を通過しそうだし。

とにかく、I・アイランドに行ける!滅茶苦茶楽しみになってきたぞ夏休み!それならば!私も全力で研究に励みレポートを作って向こうの科学者の人に質問できる時が来たら質問するんだ!……あれ?私人前で初めて話す人に質問できるかな?声震えて詰まって何も言えなくなつちやいそう……せ、せめて超圧縮技術だけは掴んで帰りたい……!」

「むむむ、どうしようこれ」

そんなことがあった夜、私の部屋の私の机の上に、なぜかあるI・アイランド行きの手ケットレセプションパーティーへの招待状付き。何でこれがあるかっていうとオールマイト先生に誘われた直後、帰る段階になって相澤先生からもらってしまったのだ。何でも体育祭優勝の商品らしい。しかし私はオールマイト先生と一緒に行動しよう誘われてしまっている。

オールマイト先生に推薦していただく以上一緒に行動するのは当たり前前の話だし、そしたらこの手ケットは腐らせてしまうことになる……ん?これ私限定の手ケットじゃないね。誰でも使えるみたい。そうとなれば……

「えーくーん!I・アイランドに興味ない!？」

「何だそりやめちやくちや興味あるぜ！」

私は窓を開けて隣の家の庭にてバーベルスクワットをしている  
えーくんに声をかける。デクくんほどじゃないにしろ私もえーくん  
もヒーロー好きなのでI・アイランドのことはえーくんも知っている  
。となれば食いつくのは必然。シャワー浴びてそっちに行くわ！  
というえーくんに私はお茶の準備をしに自分の部屋を出るのだった。

## 40話

まさか人生でプライベートジェットなるものに乗ることができるとは思いもしなかった。現在私は空の上、トゥルーフォームのオールマイト先生と制服姿のデクくんと一緒に貸し切りの飛行機の中にいます。凄いねNo.1ヒーローの移動って。オールマイト先生は全盛期身一つで日本を縦断してたらしいけど。

「I・アイランド……楽しみだね。ね、デクくん」

「うん……！最新技術のサポートアイテムにパビリオン……ああ、どこから回ろうかな」

「私は免許が取れてるといいんだけど……」

すびよくという感じで眠るオールマイト先生を前にして会話する私たち。平和の象徴の鼻提灯だなんて貴重すぎてよくわかんないかも。夏休みに入る前にデクくんがヴィラン連合の首魁、死柄木弔に遭遇するという事件もあつたりしたが、その後は特に何もなくて私たちは夏休みを迎えることができています。

私は結局自分の分のチケットをえーくんに譲ってえーくんは爆豪くんを誘って二人でI・アイランドに行くことになったみたい。私と一緒にじゃないのは残念って言った。あとみんな割とI・アイランドで行われるエキスポが気になっていたみたいで、女子のみんなは百ちゃんの同伴者になるべくじゃんけん大会を催していた。向こうで会う予定だし、一週間楽しんじゃうぞ。

デクくんもワクワクを隠せないように眼下に見えだしたI・アイランドに夢中だ。窓にほっぺをくつつけて瞳をきらきらと輝かせている。何となく、幼く見えて少し笑いが漏れちゃう。ぎゅっと握られた付箋だらけのエキスポのガイドブックがそれを助長してる気がするよ。

「オールマイト、オールマイト、見えてきましたよ！」

「ん？おお……もうそんな時間かい？」

「はい、もうすぐ着陸態勢に入るみたいですよ？」

「む、では二人とも、着替えなさいな。学校に申請してヒーローコ

ス、持ってきてるんだらう？」

ムキ、と一瞬でマッスルフォームになったオールマイト先生が、スーツの胸元を開くと中には彼のヒーロースーツが輝いていた。プロヒーローは私服の下にいつでも出動できるようにヒーロースーツを着ていることが多いという話を聞いたけどオールマイト先生も例に漏れずなんだ。私は自分の席に引つ込むと、カーテンを閉じてそのまま着替える。更衣室なんて無いからね、ここは我慢。まさか峰田くんじゃあるまいしデクくんが覗きなんてあり得ないから安心。オールマイト先生は言わずもがな。

バッグの中に綺麗に畳んだ制服と下着を入れて、チェック！うん、大丈夫！左目出して、はい完成！シャツとカーテンを開けるとデクくんも既にヒーロースーツに着替えてるようだ。なんか別の意味でドギマギした顔してない？大丈夫？動悸が酷いならついたら病院に行った方が……え？違う？ふーん……？

なんだか慌ててるデクくん、顔が真っ赤だから心配して覗き込んでみると凄い勢いで顔を逸らされた。なんかシヨック……。緩やかに着地する飛行機の中で私は、すこし頬を膨らませるのであった。

『只今より入国審査を開始します』

「国じゃないのに入国なんだ」

「細かいね樗少女……さてここでクエスチョンだ！この人工島が作られた理由は？」

「はいっ！世界中の才能を集めて個性の研究や新技術の開発を行うためです。移動できるように作られているのは研究者たちや研究成果をヴィランから守るためで……」

「そのおかげで今まで一度もヴィラン犯罪が起ったことがないっていう稀有な地域ですよ。しかも警備システムはあのタルタロス並み……」

「うーん流石二人とも詳しいね！先生の出番がないぞ！HA—HA—HA—」

動く歩道の横に私たちのパーソナルデータが表示されて入国審査



が開始される。この島ってどの国にも属してないことが売りなのに  
入国審査とはこれいかに。あ、ちゃんと3サイズは隠してある、体重  
も。ちよつとした気配りが嬉しいなあ、もしくは知られて問題になっ  
ちやったりとかあったのかなあ？

オールマイト先生のクイズにデクくんと二人でI・アイランドのこ  
とを解説していくとオールマイト先生はいつかの授業の時のように  
全部言われた！という顔をしつつもサムズアップを返してくれる。  
まあ、I・アイランドについては前から行きたい行きたいと思って  
いたので入念に、隅々まで、会ってみたい科学者の人に至るまで調べ  
てあるのです。1テラバイトくらいの容量はあるぞ。

ゲートの前で動く歩道が止まる。けどすぐに入国審査が終了して  
私たちが入国する許可が下りた。エキスポを宣伝する人工音声に見  
送られてゲートをくぐると、物凄く心が躍る光景が広がっていた。

あらゆるところに空中に投影された画面が浮かび、巨大なパビリオ  
ンがいくつもある。遠目で見ただけでも最先端の科学がふんだんに  
使われてるのがよく分かった。そして個性を使ったと思わしきパビ  
リオンもここから見えるだけでいくつももある。凄いなあ。そして、そ  
こにいる一般来場者の人たちの笑顔！はじけるような笑顔が沢山  
あって私まで楽しくなってきた。

「一般公開ですよね、プレオープンなのにお客さん沢山いますね  
え。あ！あれもしかして反重力発生装置!？」

「ここまで客を入れるとは、アイランド側の本気が垣間見えるな！  
とりあえずホテルに行つて荷物置こうか！」

「あ、地図は頭に入ってるのでご案内しますよ」  
「樫さん、この島かなり広いけど地図覚えてるんだ」

覚えてますとも、メカですから！というかオールマイト先生は目立  
つうえに超人気なので早いとこ移動しないと人だかりができて大変  
めんどくさき……もとい、時間を消費してしまうので急いで移動するべ  
きなんだ。マッスルフォームを維持できる時間制限もあることだけ  
らね。

「I・アイランドによろこそく……え!? オールマイト!？」

「あ、バレましたね」

「オールマイト!？」

「No.1ヒーローの!？」

「うわあああ!？」

「あ、デクくん危ないよ〜」

移動する前にバレちゃったらどうしようもないよね。あつという間に人だかりがオールマイト先生を覆って、私はともかくデクくんはその流れに押し負けて流されてどっかに行きそうになってるのでとりあえず私が引き寄せて確保した。ファンサービスに厚いオールマイト先生のことだからしばらく動けないだろうなあ。テレビカメラまであるよデクくん。流石はI・アイランドー！

「オールマイト先生本人の方がどのパビリオンよりも人気だね」

「流石はオールマイト!……あの、樫さん、ち、ちかしい……」

「ああ、ごめんね。流されないように気を付けてね〜」

オールマイト先生に集まる民衆に流されないように密着状態だったデクくんの文句を受けて彼を解放する、んだけど民衆の密着具合のおかげで全く離れられない。凄いなオールマイト先生、それでいてファンサービスを欠かさないその様子は正しく平和の象徴。感心するばかり、と私は女性たちからキスの雨を降らされている彼を少し気の毒に思うのだった。サインカー、そういえば貰ってなかったし、今度お願いしてみようかな〜。

「あそこまで足止めされるとは……いやはや約束に間に合わなくなってしまうところだったよ」

「約束?どなたかと待ち合わせしているのですか?」

「そうとも!招待状を送ってくれた人でね!私の親友の娘なのさ!親友にサプライズをしたらしい!可愛らしいお願いを叶えるのもヒーローの務め!」

「オールマイトの親友の娘さん……」

顔中にキスマークを付けたオールマイト先生といろんな民衆の方々を振り切って少し、どこから出したのかハンカチで真っ赤なルー

ジユの跡をふき取るオールマイト先生が実は待ち合わせをしているということを教えてくれる。それだったら猶更ファンサを早く切り上げて用事があるといえばいいのになあ。そうしないから人気なんだろうけど。

「ああ、そうだ二人とも。ワンフォーオールについてはここでも他言無用だ。親友にも話していない話だからね、彼らを巻き込むわけにはいかない」

「は、はいー」

「わかりました」

指を立てて個性のことを小声で話すオールマイト先生の念押しに素直に頷くことにする。そう考えると無理やり押し掛けた私のなんと迷惑なことよ……立派なヒーローになって恩返ししないとね！と気合を入れなおしていると、遠くから物凄くジャンプする何かに乗った人影が近づいてくる。ホッピング？にしてはえらい近未来的な……使われてる技術は最新鋭だ、すごいなあ。もしかしてあれもエキスポの何かなのかなあ？

「マイトおじさま〜」

「OH！メリッサ！久しぶりだね！」

うわ、待ち人来るだ。満面の笑顔でやってきたのはオールマイト先生の言う通り女の子、多分アメリカの人で金髪、眼鏡をかけてて青い瞳。親近感湧いちゃう。そして百ちゃんなりにプロポーションがいい、峰田くんがいたら涎を垂らす……彼は女の人なら何でもいいんだっけ。ゆりかごから棺桶までというところでもない事を言ってたよ。うな気がする。メモリから消しとこ。

〇〇少年、少女と呼ばずにオールマイト先生が呼び捨てにしたってことはかなり親しい間柄と見た。ホッピングから飛び降りた少女はオールマイト先生に空中からハグを決めて、オールマイト先生は彼女を軽々と抱き留めて、ゆつくりと地面に降ろしてあげる。うーん、私たち場違いだねデクくん、あ。また固まってるや。

「見違えたね！すっかり大人の女性だ。今日は招待ありがとう！」

「17歳になりましたもの。昔と違って重いでしょ？マイトおじさ

まはお元気そうでよかった〜！パパは研究室で缶詰してるの。きつと会いたいと思うわ」

「デイヴも相変わらずのようだね！ああそうだ二人とも、彼女が待ち合わせの相手で、私の大親友の娘だ！」

「メリッサ・シールドです。はじめまして。メリッサって呼んでね！」

なんとなーく所在なさげだった私が明後日のパピリオンを見ていると急にオールマイト先生に話を向けられてグキリと急いで彼女に顔を向ける。とてつもなく人懐っこそうな笑顔を浮かべてデクくんの手を差し出して握手した彼女が、私にも手を差し出してくれる。冷たい手でごめんなさい、とおもいつつ力加減を謝らないように握手。うーん、えーくんと同じタイプな感じがするなあ。つまり、コミユ力高そう。

「み、緑谷出久です！雄英高校ヒーロー科1年A組に所属しています！」

「同じく雄英高校ヒーロー科の樫希械っています。オールマイト先生の同伴者です、お招きしてもらってありがとうございます」

「まあ！ってことはマイトおじさまの……！」

「未来のヒーロー候補たちさ！」

「すごいわ！マイトおじさまが連れてくるってことは将来有望なのね！ミドリヤくん、でいいかな？個性ってどんなの？」

「あ、デクって呼んでください、個性は……パワー系、です」

おーいデクくん、そこ躊躇ったら怪しいぞ〜。もう言ってるじゃん個性に関してはノータイムで答えないと怪しいって。メリッサさんは流石科学の街の女の子らしく、デクくんのヒーロースーツを周りをぐるぐると回りながら見聞しでした。むむ、まさか彼女私や発目さんと同じ技術屋側か？シールドという……？

「カッコいいけどオーソドックスなデザインね……補助的なアイテムも見当たらないし……あ、改良したほうがいいかも」

デクくんのスーツを摘まんだり引つ張ったりしながら呟いているメリッサさん、うわあ、外国の人っぽい距離の近さだなあ。デクくん

のヒーロースーツは確かにサポートアイテムがない。というのも力こそパワーな増強系はそういうのあんまり必要ないし、デクくんも頼まなかったみたい。顔がリングゴみたいなデクくんを観察し終えたメリッサさんは、今度は私の方へ。私も？

「すっごい大胆なデザイン……！デクくんと違ってこっちはサポートアイテムゴテゴテね。見たこともないサポートアイテム……！どんな個性でこれを活かすのかしら……!?!」

あ、メリッサさん私の手足の事サポートアイテムだと思ってるのかな？まあ、そうだよねえ。機械を出せる個性って希少らしいし、私は自分以外に個性として体が機械だつていうひと両親以外知らないからそういう風に見えちゃうのかも。あと確信した。メリッサさん完全に私たち側の人間だ。仲良くなれそう……。

「私の個性は異形型なんです。だから、手と足は私の体、ほらこんな感じ」

「えっ!?!すごいわ！創造系と異形型のいいところり！もしかして貴方……私たち側?」

カチャカチャと音を立てて私の右手が変形して戦闘形態をとって、元に戻る。それを見た途端にメリッサさんのテンションは振り切れて私の左手を取ってぶんぶん握手をしてくれる。わあ、やっぱり同じタイプの人だった！嬉しいなくえーくんも三奈ちゃんも科学のお話についていけないから同年代で深いところまで語り合えるの発目さん以外にもいてうれしい！

「あつ！思い出したわ！ユズリハさん、だったよね!?!アカデミーに雄英から送られてきた反重力で浮くバイク！貴方の作品!?!」

「そうだよ！ホバーバイク！陸と空で運用を考えてるバイクで、耐荷重は1トンは弱！武装は10ミリ口径機関砲、マルチパーパス仕様！送るの色々考えてただけど、あれが一番驚いてもらえるかなって！」

「やっぱり！教授が手放しに褒めてる所なんてなかなかないもの！皆嫉妬しちやったわ！反重力装置をあそこまで小型化して並列に稼働させるなんて！是非是非色々聞かせて欲しいわ!」

「あー、メリッサ？ 楳少女？」

「はっ!？」

両手を取り合って科学について語ってた私とメリッサさんはオー  
ルマイト先生の声で正気を取り戻すのだった

## 41話

「ごめんなさい、おじさま……私つい夢中になっちゃって……」  
「すいません……」

しまった、あまりにもメリツサさんと技術者として波長が同じすぎて話がかみ合いまくってしまった。発目さんの場合、割とゴテゴテしてロマンとかそういうものを重視しているんだけど私の場合、最新技術をぎっちぎちに詰め込んで尚且つ省スペース化とかそういうたぐいの方向性なので若干発目さんとはずれてるんだ。で、メリツサさんは私と同じ方向、最新技術が好きなタイプだと思う。絶対メルアド交換しようとか今決意した。

「早くパパを喜ばせてあげなくちゃ。案内するね、マイルトおじさま」  
「……！超圧縮技術……！」

「知ってるの!?あとでゆっくりお話ししましょ!夜のパーティーの時とか!」

「うん!是非!」

傍らで自立していたホッピングにメリツサさんが手をやると見る見るうちにホッピングは小さなひも状の物体になってメリツサさんのポケットの中に納まつてしまった。知っている、これが本家本元の超圧縮技術!私が概論だけじゃ答えにたどり着けなかった最新中の最新の技術の一つ!それを目の当たりにしてしまつて私の中の熱が高まる。ああ、色々話してみたいけどがまん!1週間もいれば話す機会は沢山作れるから!

そしてやってきたのはI・アイランドの中枢に位置するセントラルタワーと呼ばれる施設。文字通りの中央、ここにI・アイランドの警備システムやら何やらの全てが詰め込まれているらしい。普通なら多分入れない場所だ。見るからにハイテク!分厚い気密扉のエレベーター!自動で動く警備ロボット!うーん素晴らしい!住んじやいたいくらい!発目さんも来ればよかったんだけどなあ……模試の結果がね、あとパワーローダー先生が「帰つてこなさそうだから」という理由で……。

そしてその上層階にやってきた私たちに、メリッサさんはしー、と口に指を一本立てて目の前のドアをくぐる。

「パパ、研究がひと段落したお祝いに、パパのだーい好きな人に招待状送ったの！」

「私がああ！再会の感動に震えながら来た!!」

「トシ……!?!?オールマイト!?!」

「ほ、本物ですか!?!」

「当然本物だとも！わざわざ会いに来たんだぜデイヴ！」

部屋の中にいるのは初老で小太りの男の人と、シールドの姓で何となく察してはいたけどやっぱり、個性研究の第一人者にしてノーベル賞を受賞した天才博士、デヴィッド・シールド博士！ほ、本物だ！どうしよう、サインとかしてくれるかな？この際腕でいいから！後で装甲版剥がして飾るから！技術オタクとしては彼の特許についてはお世話になりっぱなしなんだよね！このスーツの再生機能の大本の技術は彼の特許だから！感動だなあ！

旧交を暖めていた二人が、こつんと拳をあてる。私もかなり興奮しているけど、それ以上に興奮しているのはデクくん。彼は勢いそのままにデヴィット博士に詰め寄ると彼の功績を並べ立て始める。個性研究のトップランナーであり、オールマイト先生のヤングエイジ、ブロンズエイジ、シルバーエイジ、ゴールデンエイジ……つまりすべてのヒーロースーツを作っている人。余りの勢いにシールド博士は少し引いていたけどただのファンだっというのが分かってからから笑ってくれてる。よし！わたしも！

「は、初めましてシールド博士！英雄高校ヒーロー科の樫希械です！ご功績はかねがね……その、ファンです。特にこの前の個性数値に関する論文には感銘を受けて……」

「ああ、ありがとう。樫希械……もしかして国際免許の子か！オールマイトの名前で推薦されていた……。いや、あのバイクは一学生が作ったなんて考えられなかったよ！特にエネルギーの循環！反重力の慣性制御の技術、素晴らしかった！間違ひなく免許は発行されると思っている！全くヒーロー志望じゃなければすぐに研究室にスカウ



トしたかったくらいだ！」

「そんな、私なんてまだまだで……詰まってる技術が沢山あるくらいなんです。このエキスポ中にヒントを見つけれたらなと思ってるくらいで……」

「そうか、ここには1週間いるんだっただね？機械系の個性は珍しいからアカデミーの教授たちも興味津々だったよ。私も君とデイベートをしたい。良ければ時間を取ろう、話させてくれ。メリッサも参加するといい」

「こ、光栄です！よろしく願いしますっ！」

「ええ、私も話したい事沢山あるもの！ありがとう、パパ！」

わ、わくわく!!!!なんてこと!?!あのデヴィット・シールド博士とデイベート!?夢じゃないよね!?仮に夢だったら私暫く寝込むよ!?ああ、何聞こうかなあ!は、私も聞かれるのか!ええ、プロというか科学界のオールマイトみたいなのから質問とかとちって変なこと言っちゃいそう!ああ、でも超圧縮技術については聞かないと!あとはエネルギー効率の話と熱放出技術についても!忙しいぞー!楽しみ!

「追って連絡させてもらうよ。私の連絡先だ、登録しておいてほしい。ああ、でも先にオールマイトと積もる話をさせてもらえないだろうか。何せ久しぶりの再会なんだ」

「は、はい!もちろんです!ね、デクくん!」

「え!?!はい!当然ですよね!」

「ありがとう、メリッサ。二人にエキスポを案内してあげなさい。きつとお前のためにもなる」

「勿論よ!むしろさせて欲しいっていつ言おうか迷ってたもの!」

シールド博士の連絡先!なんて恐れ多いものを……!すぐ登録して返送メールを送っておこう。こういう時私の個性は便利だね。何となく話題を逸らされたような気がしたけど……もしかしてシールド博士はオールマイト先生の後遺症の事を知ってるのかな?でもメリッサさんの様子を見るに彼女は知らないんだ。そういえばオールマイト先生がマッスルフォームを維持して1時間は経ってるし……そうか。気を使ってるんだ。じゃあそれを察さないようにするのも

役目だよね。

咳払いに見せかけた咳き込みをするオールマイト先生が心配だけど、シールド博士を信頼して私たちはお暇することにしよう。オールマイト先生、休めるといいのだけど……。

「すごいねー、ここが人工の島だなんて思えないや！」

「大都市にある施設は一通りそろってるわ、旅行だけはできないけどね」

「守秘義務があるっていうもんね。情報漏洩は怖いから、それを防いで科学者を守るために、でしたっけ」

「そういうことか……ああっ!? カイジユウヒーロー・ゴジロ!?」

「わ、ホントだ。流石デクくん、すぐ名前が出てくるね。本物が都市部にいるなんてなかなかレアショットじゃないかな？」

デクくんが大興奮で指さしたのは岩のような巨体をのっしのっしと動かすヒーロー、噴火などの大規模自然災害で活躍するヒーロー、ゴジロだ。端的に言えば私の倍は大きい巨体、都市部じゃ二次災害を誘発するということでめつたなことでは見ることができないレアヒーローでもある。気づけば周りには日本だけじゃなく各国で活躍する外国のヒーローがファンサービスに励んでいた。私は知らない顔の方が多いけどデクくんはすべて頭に入っているようでアレは誰、これは誰と私たちに解説してくれる。うーん、テーマパークに来た小学生よりテンション上がったるね。

「デクくんはヒーローが大好きなんだね。夜には関係者を集めたパーティーがあるから、その時にもたくさん会えるよ」

「なるほど、正装が必要だっていうのはそういうことだったんだね。スーツのデクくんかあ……期待していい?」

「え、その期待されても困るといふか何というか……」

「いやデクくんの私服ってこう……反応に困ってき。Tシャツって書かれたTシャツとか、いわゆるダサTっていうジャンルっていうのを私は初めて人が着てるのを見たんだよ。そのデクくんが正装だよ? 気になるよ。大丈夫! 私もちやんとドレス着るから! あんま

り私の方は見栄えは良くないけどね、大きいから」

「あはは、それは夜のお楽しみね！ほら、こつち！最新アイテムの展示場があるわ！」

メリッサさんの言葉に私とデクくんの目がギラリと光り輝く。最新アイテム？見に行かない選択肢はないよねデクくん？うん、同じ考えみたいで安心した。メリッサさんに先導されてやってきたのは最新のサポートアイテムを展示している場所！すっご、滅茶苦茶参考になる！メリッサさんが指し示したのは飛行機型のビークル、なんと陸海空すべてに対応するスーパーマシンらしい。水中まで対応とは恐れ入る。私だけだったら個別に作った方が確実だけど同行者がいるならこういうアイテムは全然ありだ。

「この潜水スーツは深海7000mまでの水圧に耐えられるの！そしてこつちが36種類のセンサーが内蔵されてるゴーグル！」

「深い！見えすぎるー！」

「あ、これアクアビット製なんだ。そつちのビークルはアナハイム……職場体験に行けばよかったか……！」

「実は、このアイテムのほとんどはパパが発明した特許を元に作られてるのよ」

「お父さんの事、尊敬してるんですね」

「勿論、パパみたいな科学者になることが私の夢なの」

あのアイテムはこれ、このアイテムはこの特許と説明してくれるメリッサさんはお父さんであるシールド博士のことをかなり尊敬している様子だ。きっとそれは、デクくんのオールマイト先生のような存在が彼女にとってのシールド博士だからだろうか。特許、特許かあ……パワーローダー先生にどやされて私もいくつか特許出願をせざるを得なかつただけで、シールド博士の持つそれは私なんかミジンコみたいなものだと思う。世界中のヒーローが彼の発明の恩恵をどこかで受けている、それほどの科学者なのだから。

「メリッサさんは、ここのアカデミーに？」

「うん、そうなの。3年生よ」

「すごいですよー！I・アイランドのアカデミーと言えば全世界の

技術屋の卵や科学者志望からすれば夢の学校ですよ！」

「私なんてまだまだ……」

デクくんの素直な賞賛を受けてメリツサさんは顔を赤らめて謙遜をしている。でも、すごいと思うよ。アカデミーはいうなれば世界版雄英高校だ。しかも技術者養成高校だけあってその偏差値は雄英高校よりお高い。難関中の難関であり才能がなければ入れない、優秀な人材の蟲毒とすら言われている。そこに所属し3年生に上がっている時点で彼女は将来が成功するといわれているようなものなんだ。

ん？ん？ん？……私は2歩、3歩と下がってメリツサさんを褒め続けるデクくと照れくさそうなメリツサさんを少し離れて見る。手でパースを作って収めてみると、意外とお似合いかもしれないね？三奈ちゃんじゃないけど恋バナは割と好きな方だし、これは面白い並び……にやにや。ん？この足音は

「楽しそうやね、デクくん」

「う、麗日さん!?!どうしてここに?」

「……楽しそうやね」

わー、お茶子ちゃんだ。こっちに来ているのは当然知っていたけどこうやって連絡せずに会えるとは思わなかったよ。あとこれが修羅場ってやつ?お茶子ちゃんデクくんが好きだったり?なーんかいつも通りうららかでいるように笑顔を平たんなんだよお茶子ちゃん、ちよつと怖い。

「とても楽しそうでしたわ、緑谷さん。希械さんもごきげんよう」

「緑谷、聞いちゃった。希械、ついたんなら連絡頂戴よ」

「ごめんね。まだホテルにも行ってないの」

「そうなん?希械ちゃんはデクくんと一緒だったんやねえ」

「あはは、たまたま飛行機が一緒だったの。ね?デクくん」

「うん!そそそそ、そうなんだ!」

「え、でもマイトおじさまと……?」

荷物自体はメリツサさんが呼んでくれたロボットに部屋に置いておくように頼めたんだけどホテル自体にはまだ行ってない。あとオールマイト先生と一緒に、というとなんだか面倒そうだし、公私の私

の部分でオールマイト先生と関係があると思われちゃったらデクくんの師弟関係に支障が出ちゃうのでメリツサさんだけに見えるように、私が彼女の前に出てオールマイト先生のごことは秘密という文字を背中に投影して教える。メリツサさんが思い至ることがあったのか背中に指文字でオツケーと書いてくれて一安心。

「お友達かしら？」

「そうなんです。私とデクくんのクラスメイトで、麗日お茶子ちゃん、八百万百ちゃん、耳郎響香ちゃんです。姿を見ればわかるけどみんなヒーロー科なんですよ！」

「よろしくお願いいたしますわ。八百万百です」

「麗日お茶子です。よろしくお願いします」

「耳郎響香ついていきますよろしくお願いします」

「まあ、そうなの！私、メリツサ・シールドよ！みんな二人のお友達なのね、良かったらカフェでお茶しませんか？」

メリツサさんの提案に、私たちは1も2もなく頷くのだった。

## 42話

「へー、女子はみんな来るって話は知ってたけど、クラスのほとんどがいまI・アイランドにいるんだ。世間って狭いねえ」

「そうだなー俺もクラス委員長として励まねば!」

「こーんなところまできてそれは流石にねーよ飯田く」

「オイラたちだって真面目にやってるんだぜく?」

「メリツサさんナンパしようとしてたでしよ二人とも。ぶつよ?」

「それかウチのイヤホンジャックか選ばせてあげる」

「何でもありません!すいませんでした!」

「みんな雄英高校の生徒さんなのね!とつても個性的だわ!」

私たちが入ったカフェで雑談に花を咲かせていると私たちがオーダーしたドリンクを運んできたのは何とクラスの少しお茶目なコンビこと上鳴くんと峰田くん、その二人が私たちと一緒にいたメリツサさんに目を付けてあろうことかナンパを敢行しようとしたのを止めたのは、クラス委員長の飯田くん。実は彼も家族の代理としてこの島に来ていて、アルバイトに励む二人がちゃんと働くか見守っていたのだそう。そして、ナンパを阻止するためにやってきたのだ。

私だけならともかく他の女子や外部の人に何かするのは雄英の恥になるので私としても強めのお仕置きをせねば、とゲンコツを見せる、そしてそれに便乗してイヤホンジャックをつんつんと動かす響香ちゃんと見た二人は直角90度の角度できれいにお辞儀をして謝る。アルバイトに来たならまともに働かないとね。

「それでねー、明日の一般公開にはみんなと一緒に回るんだ、希械ちゃんも一緒にね!」

「うん、それは約束してたからね。私は試験結果の通知とか呼び出しとかもありそうだからそこまで一緒にはいられないけど……」

「そうなの……折角会えたのだしよかったら私がおすすめの所案内しましょうか?明日の役に立つと思うわ!」

「まあ!よろしいのですか!?!ぜひお願いいたします!」

「やった!」

私とデクくん、メリッサさんのパーティーに4人ほど追加された瞬間だね。とても行きたそうな顔をしている上鳴くんと峰田くんには申し訳ないんだけどみんな飲み物を飲み切って出発することにした。ガツクシと肩を落としながらテーブルの片づけをする二人に私は両手を合わせてから皆に合流すると、ズドン！と凄い音が聞こえてきた。

「うるっさー！何この音……？」

「多分ヴィラン・アタックっていうアトラクションね。こっちよ、案内するわ」

ヴィランアタック……確か英雄でも使われてるヴィランロボットを個性ありで撃破したそのタイムを競うアトラクションだったっけ。なるほど、思いつき個性を振るえるわけだからそれは人気が出そうだね。えーと、誰がやってるのかな……あれっ!?

「えーくん!？」

「え、またクラスメイト?」

「希械ちゃんの幼馴染なんよ」

「かっちゃんもいる!？」

ヴィランアタックを行っていたのはえーくんだった。硬化した手で岩山を無理やり足場にしてロボットに飛びかかり殴り壊す、それを繰り返してロボット全てを壊したところでタイムが表示される。タイムは22秒、第2位だ。そして手をパチパチ言わせてスタートを待っていたのは爆豪くん、彼はスタートした瞬間に爆破で空を飛び目にもとまらぬ速さでロボットを次々壊していく、タイムは15秒、トップだ。だーくっそ!と言っているえーくんが私に気づく。

「お！お！希械！なんだ着いてるなら言ってくれよ！お前のおかげで俺もこっち行けたぜ！サンキューな！」

「ううん、全然！えーくんも楽しそうだよかった」

「ああ！楽しいぜ！お前もやったらどうだ!？お、緑谷も一緒か！飯田に八百万たちも！」

「ああん!？」

デクくんの名前が出た瞬間に目が釣りあがる爆豪くん、地雷なんだ

ね相変わらず……てめえ何でここに居やがるだの、色々文句を言う爆豪くんを何とか止めようとする。てめえが俺の記録抜けるハズねえという爆豪くんにうん、そうだねというデクくん、でもやってみなければわからないよねとお茶子ちゃん、そうだねとデクくん。あつ、やつちまった感じする。案の定それにブチギレした爆豪くんがデクくんをスタート位置にぶん投げた。

「んだらやってみろやクソナード！ミジメな結果出してこい！」

あつちやー。変な形で参加することになったデクくんだけここは英雄生らしく、やるからには本気、プルスウルトラだ。スタートがかかった瞬間にワンフォーオールフルカウルを発動させて、岩山を跳ねまわり次々とヴィランを撃破していく。おお、ちゃんと自壊しない5%でパワーをセーブ出来るね！うん、やればできる子のデクくん！特訓に付き合ったかいがあるよ。そして、かかった時間は16秒、おお、爆豪さんと1秒差だ！やるじゃん！

「ん、の……クソナードが……！」

「よーし、次は私やる！みててねえーくん！1位もぎ取ってくるから！」

「おお！おっしや応援してるぜ希械！ぶちかましてやれ！」

「まっかせて〜！」

『さあ御次の挑戦者はおおきな女の子！好タイムの連発ですが、どうなるでしょうか!?ヴィランアタック・スタート!!』

「っご」

予め出現位置は絞っていたので右目で捉えたすべてのヴィランをマルチロックオン、私の両手から放たれたマイクロミサイルが空中に七色の噴射煙をたなびかせながらそれぞれのヴィランを同時に撃破した。噴射煙はお祭りなので派手がいいよね、というお遊びだけど、タイムはどうか？あ、あつさりしすぎてみんなポカーンとしているや。ふふ、同じ位置に出てくるのなら2回も見れば位置なんてすぐですよ。そして私はこういうのが得意なんです。

『し、新記録！ぶつちぎりの新記録です！タイム7秒！現在トップに躍り出ました！』



ふふん、と憧れの地にいるせいかハイテンションな私は胸を張ってえーくんにピース。えーくんは腕を振り上げて喜んでくれるけど爆豪くんは緑谷君の胸ぐらを掴んで振り回してたのを放り捨ててずんこつちにやってくる。こわあ……。

「おい……」

「な、なになな？」

「調子に乗るんじゃないぞ、5秒以下とって突き放したらあ……」

『おおっと13秒！現在第二位に躍り出ました！』

「あああああつ!？」

「ひいつ!？」

私の次の挑戦者がデクくんと爆豪くんのタイムを上回る好タイムを叩き出したせいで瞳が吊り上がり作画が変わったような人相になる爆豪くん。これ以上はダメだ、私は彼を羽交い絞めにして回収する。離せコラア！と暴れる爆豪くんを空輸しながら挑戦者の人を見ると……冰山だ、んん!？」

「あ、轟くん！来てたんだね」

「ああ、樫。緑谷たちも一緒なのか」

「轟くん！こつちに来てたんだね！紹介するよ、こつちのアカデミーに通ってるメリツサ・シールドさん！」

「メリツサ・シールドです。雄英生つてすごいよね、退屈しなさそう」

「離しやがれ樫コラア！クソ重いもん押し付けてんじやねえわ！」

吠える爆豪くんを苦笑いして羽交い絞めし続ける私。そりゃあ、私の手足は重いけれども。いつの間にかやってきた百ちゃんにより猿轡をかまされて、ぐるぐる巻きにした爆豪くんを担いだえーくんたちと一緒に私たちはヴィランアタックのパビリオンから離れるのであった。雄英の恥部はあの二人以外にもいたね……。

適当なところで爆豪くんを解放した私たちだけ、爆豪くんは団体行動なんかしてられるか！とさっさと行ってしまい、招待チケットを持ってるえーくんも追いかける形で離脱してしまった。えーくんとは夜に会う約束したし、この後のパーティーでも一緒だろうから平気。

そして私たちは目いっぱいエキスポを楽しんだのだった。

帰り際に1日頑張ったであろう上鳴くんと峰田くん、メリツサさんからご褒美パーティチケットを渡され、レセプションパーティに行くメンツが決まり、仕切りだした飯田くんが集合時間を決めてしまった。それならという事で準備をする私たちは、解散となり、ホテルが同じデクくん、私とついでにメリツサさんが残る。メリツサさんがついてきてほしいところがあるといって私たちを先導し、ついた場所は何とアカデミー、メリツサさんの研究室だった。個人で研究室を持つって相当凄いよ!? 雄英じゃ兎目さんくら……彼女は一緒に人がいると危ないからか。

「ふふ、じつはね。私そんなに成績良くなかったの。マイトおじさまみたいにヒーローになりたくて一杯勉強したわ。だけど、無個性だったから諦めたの」

「……無個性……!?!」

デクくんの驚く声が聞こえる。無個性っていうのは私たち第5世代と呼ばれる世代の子供たちには珍しいものだった。デクくんもワンプォーオールを受け継ぐまでは無個性だったって聞いてるしそれを理由にいろいろ嫌なこともあっただろう、同じ、なんだきつと。デクくんもそう思ってるんだね。

「でもね、私にはもう一つ目標があった。それが私のパパ、個性なんて関係なく誰でも広く助けられる技術を持って人を助けている。間接的にヒーローをしているの」

「科学は万人に開かれてる。学べば応え、使えば応える。責任はその人間にある……それならばヒーローを助けるヒーローに……」

「パパの格言ねーそう、樫さんの言う通り。私は科学で、皆を助けるヒーローになりたい。だから、その第一歩としてこのアイテムをデクくんを送りたいの」

メリツサさんが白い箱から取り出したのは赤い腕輪のようなもの、それをデクくんの右手につけると、タッチパネルのようなものをぼん、と押した。するとそのアイテムは自らの形を取り戻すようにデクくんの右手にバンテージのように巻き付いて硬質化、固定化して腕を

守る防具、ガントレットを形作ってしまった。これは、また超圧縮技術……！右目で分かる、これ私が作ったガントレットとは比じゃないくらい頑丈だ。すっごい、メリッサさん……！

「これはマイトおじさまを参考に作ったものなの。デクくん、なんだか個性をセーブして使ってるよね？もしかして体に見合っていないんじゃないかと思って……そのガントレットはマイトおじさまの全力でも3発までなら拳を守ってくれるわ」

「すっごいね、メリッサさん。デクくんが個性をセーブしてたのを見抜くなんて。デクくん、全力でパンチしたら手が壊れちゃうもの、いいもの貰ったね」

「やっぱり、それは名付けるならフルガントレット、といったところかしら。困っている皆を助けられるヒーローになってほしいの。未来のヒーローへの、投資かしら？」

いたずらっぽく笑うメリッサさんからのデクくんに向けてのメールに、彼は姿勢を正して学校で返事をする時以上に力強く「はいー」と答えた。満足げにそれを見守るメリッサさんはまさに技術者、科学者の顔だった。しかし、すっごいもの貰ったね、デクくん。

「あ、ユズリハさんにはフルガントレットの設計図とデータ、あとは超圧縮技術の細かいところまで教えるわ」

「待ってくださいそれは流石にまずいです！技術者として何より大事なものですよ？」

「いいえ、さっきユズリハさん言ったでしょう？科学は万人に開かれているって。パパのあの言葉を聞くにサポートアイテムの免許は発行される。それなら雄英で、デクくんはフルガントレットを改良して作り続けてあげて欲しいの。それが間接的に私の作品がデクくんを助け続けることになるわ」

「……そういう、ことなら。ですけど私もタダでもらうわけにはいきません。なので、私が製作したパワードスーツを支える技術の一つを交換という形で受け取ってほしいです。これなら、見合おうと思いません」

「嬉しいわ！貴方に出会えたことに感謝しなくっちゃー！」

メリツサさんにそこまで言われたら私が受け取らなければ無粋だ。だけど、貰い過ぎもよくない。なので私から差し出すのは、パワーシリンダー……オールマイト先生並みの馬力を生み出す駆動装置だ。文字通りの秘蔵技術だけど、このくらいは差し出さなければ割に合わない。彼女の努力の結晶を受け取るのだから。ささつとメモリにすべてをまとめたメリツサさんがそれを差し出し、私も指から交換する技術が詰まったメモリを差し出した。今までで一番重いメモリを差し込んで読み取る。解析は後。

フルガントレットを元に戻したデクくんがそれを見つめると、ピリリリ！とデクくんの携帯が鳴った。ん？と思つて時計を見ると……あ、まずい！もうすぐ集合時間過ぎちゃう！飯田くんに謝らなくっちゃ！わたたと電話に出たデクくんのスピーカーモードの携帯から飯田くんの怒声が響いた

『何をしている緑谷君！集合時間までもう少しだぞ！』

「えっ!? あっ!? しまった!？」

「ごめん飯田くん、ちよつと用事が入っちゃつてそつちにかかりきりになつちやつたの。申し訳ないけど遅刻しちゃう」

『む、それなら連絡を入れてくれれば、いや急用ということなら仕方ないな。分かつた、待機してるので急いで来てくれ』

「ごめんね」

飯田くん結構怒つてた〜！急がないと！ダッシュ……というか飛ぶよ！デクくんほら掴まって！ホテルまで飛ぶから！メリツサさんは？あ、お家すぐなんだ！じゃあパーティー会場で！ヒーロースーツでよかつたあ！腰からアルビオンのテールバインダー二基を作り出した私はデクくんを抱えて研究室の窓から飛び立ち、ホテルへ急ぐのだった。個性が使用自由でよかつた！飛んでる人も結構いるしバレないよね！いそげ〜！

## 43話

「変じゃないよね……?」

ホテルの部屋の姿見の前で私は来ている礼服と髪型、お化粧が変じゃないかを何度も確認する。夜のパーティーに参加するのなんて初めてなものだから緊張するなあ。この日のためにお母さんといっしょに選んだドレスだし気に入ってるんだけど……ちよつとえーくんに見せるのが楽しみかも。三奈ちゃんには後で写真送ってあげよつと。

私が着ているのはブルーグレーのオフショルダー、フィッシュテールのドレス。いつもの手袋じゃなくて長いレースの手袋、脚もカバールを付けている。スカート丈は後ろの方が私の脹脛くらいまである。夜会のドレスは肌がある程度見せるのがマナーらしいのでオフショルダーを選んだんだけど、いいのかなこれで?その、谷間まで見えちゃってるから下品な印象を持たれないといいんだけど……。

髪型も変えてるし私だってわかってくれるかな?個性で髪を少し短くして、緩い三つ編みを作ってサイドから流してるの。流石に正式なパーティーに御呼ばれしてるのに顔のほとんどを髪で隠してるだなんて失礼極まりないので今日はちゃんと髪を分けてピンでとめて両目を出してるんだ。うーん、落ち着かない。ああ、そろそろ行かなきゃ!足の色もドレスに合わせたし、多分これで大丈夫。

すでに遅刻してるのでひいひい言いながらドアを閉めて鍵をかけ、手近なエレベーターに乗る。何とホテルはセントラルタワー内だから集合場所までエレベーターで直通なの!すごいねI・アイランド!あ、えーくんに連絡……繋がらない?あ、また携帯を忘れてるね?もー、合流したらでいつか。あ、ついた。

「ごめんね、お待たせしました」

「ゆ、樫さん!」

「そうだよ?あ、そんなに印象変わった?似合ってる?デクくんはハマってるね、礼服」

「神よ……」

「オイラは今日生きてて初めて神の存在を信じたぜ……」

私より先に集まっていたのは男子たち、ただ爆豪くんがきつと渋ってるんだと思うんだけどえーくんと爆豪くんはまだ来てない。正装のデクくん、飯田くん、轟くん。ウエイター服に上着を着た上鳴くんと峰田くんが先に待ってたみたい。女の子は準備に時間がかかる……って遅刻してる言い訳に使っちゃダメだよ。反省。

私の姿を見た途端上鳴くんと峰田くんは手を合わせて私を拝んだと思つたら天を見上げて今度は神様にお祈りを始めた。これ如何いう反応なんだろう？似合っていると考えてもいいのかな？それともご愁傷様、見るに堪えないから目を逸らすねっていうやつ？後者だと私そこはかとなく傷つくんだけど……。

「に、に、に、似合ってるよ、樫さん！」

「ほんと？よかつた〜。デクくんもかつこいいよ、素敵」

「……目、出したんだな」

「うん、正式な場で顔を隠しているのは失礼だからね。またお揃いだね〜」

「そうだな。よく似合ってる」

「うむ！樫君らしいドレス姿だ！似合っていると俺も思う！」

あ、もしかして結構高評価？あまりに褒められすぎてちよつと恥ずかしくなつてきちゃった……。どもりながらも褒めてくれるデクくんに、私が両目を出した状態を気に入ってるらしい轟くん、真面目な飯田くんがダメだししなかったことはきつとこの服装はちゃんとTPOを弁えてるといふことなんだろう。そんなことをやってると別のエレベーターのドアが開いた。

「ごめーん！遅れてしもうた〜」

「申し訳ありません、響香さんが……」

「だ、だつてウチこんな格好したの初めてで……」

「「おおお〜〜〜っ!!!」」

どうやら響香ちゃんはかなり渋つたみたいだけど百ちゃんセレクタらしい礼服に身を包んだ3人、超かわいい。私なんか目じゃないくらいカアイイなあ。自信もつていいよ、峰田くんと上鳴くんを指標に

しちやだめだけどね。デクくんはお茶子ちゃんを褒めていて、上鳴くんはサムズアップで響香ちゃんを褒めてる。あ、照れ隠しでイヤホンジャック。あちやく。デクくん褒められたのがよっぽど嬉しかったのかお茶子ちゃんは顔を赤くして手を振り回して慌ててる。うーん、青春。

「き、希械さあ……だ、大胆、だね」

「え、そう？夜会である程度肌を見せるのはマナーって聞いたんだけど……」

「ええ、間違っておりますわ。正礼装、大人っぽくてお似合いですわよ」

「ほんと？嬉しいなあ。お嬢様の百ちゃんに言われたら自信出てきた」

響香ちゃんが私の姿を上から下まで眺めて、イヤホンジャック同士をつんつんとしながらそう評してくれる。大胆かあ、下品って言われないだけましかな？機械部分がカバーとか手袋とかでほとんど見えない状況だからそういう風に見えるちゃうのかな？でも百ちゃんが両手を合わせて褒めてくれるってことはお墨付きをもらえたということなので胸を張っていいだろう、むん。

「あれ？デクくんたちまだここに居たんだけ？パーティー始まつちやつてるよ？」

「真打ち登場だぜ！」

あ、メリツサさん。メリツサさんもまたカワイくて、私並みにセクシーな正装に身を包んでいる。そんな大胆に足を露出する正装もあるんだね……。流石はパーティーの本場アメリカ出身、いやこれは関係ないか。あと峰田くんと上鳴くんのテンションが酷い。真打ち登場ってなに……？私らはおまけですかそうですか、ちよつと傷ついたので。

「ダメだ、爆豪君も切島君も電話に出ない。全く団体行動を何だと思ってるんだ……」

「えーくんは多分携帯忘れたんじゃないかな？爆豪くんはよくわからないけど……」

先ほどから5分おきというすさまじい正確さで二人に電話をかけた飯田くんが首を振る。なんせ私が来てから通算3回目だからね、もう諦めるしかないよ。えーくんが頑張って爆豪くんを連れてくることを信じて先にパーティーに行かないと……

『I・アイランド管理システムよりお知らせします。警備システムより、エキスポ会場内に爆発物が仕掛けられたという情報を入力いたしました』

「えっ?」

「……爆発物!?!」

「メリツサさん、これ信用できる?」

「ええ、I・アイランドの警備システムの堅牢さは折り紙付きよ。だからこそ、バレずに爆発物を持ち込むなんて不可能なはずなのに……」

突然の警報、I・アイランドに爆発物?……ありえない。私は元よメリツサさんがそれを一番よく理解してるはず。I・アイランドはエキスポの開催に合わせて普段でもタルタロス級の警備をさらに警戒態勢で運用してる。ネズミ一匹どころかありんこの足跡まで把握できるほどのはず。その状態のこの人工島に爆発物を持ち込む?さらに警備が一番厳重なエキスポのエリアに仕掛けた?嘘としか言いようがない。

私の考察をよそに警備システムの音声はより嚴重モードに入るところを警告している。これ以降の外出者は問答無用で拘束されること、さらには……主要施設はこれより封鎖されること……私たちがいる場所でも窓に防火シャッターが閉まつていき、常夜灯の光だけが照らす暗闇が私たちを包んでしまった。そして、あらゆる手段の連絡網が断られた。携帯の電波に、ネット、無線……全部だめだ。

「……パーティー会場に、様子を見にいこう」

「なぜだ、緑谷君。警備システムの言う通り部屋に帰るべきじゃないか?」

「ううん、違うの飯田くん。今この島、オールマイト先生が来てるの。こうなった時点で動き出してないと変じゃないかな?」



「オールマイトが……!」

「何だ、それなら安心だな!」

薄く動揺が広がりつつあった私たちを一瞬で冷静に戻してくれる平和の象徴、その彼が動けばこんな事態は一瞬で鎮圧されている。けど、もしパーティー会場で何かあったとしたら……避難誘導の手伝いくらいは許されるはずだ。デクくんと同じ考えかどうかは分からないけど、様子を見るくらいは大丈夫なはず。

「メリツサさん、ここから徒歩でパーティー会場に行けますか?」

「ええ、非常階段があるから……」

メリツサさんが指し示した防火扉の先の非常階段、私は重い扉を開けて、そのままみんなを促して非常階段を昇る。パーティー会場近くまで来たところで、大人数でいくと仮にヴィランがいた場合オールマイト先生をピンチにしかねないという理由で響香ちゃんと護衛役の私とデクくんがパーティー会場の上階の窓から様子を伺うことになった。

「2人とも、これ被って」

「え、これ……」

「わかった」

メタメテリアル・ギリ

光屈折迷彩のポンチョを作り出して二人に手渡す。同時に私も被って透明になると、二人も用途を理解したのか素直に被ってくれてその状態でパーティー会場の上からのぞき込むような形で様子を見ると……やっぱり、パーティー会場の中では武装したヴィランと警備システムの捕縛用ワイヤーにかかったオールマイト先生の姿が。

デクくんが携帯のフラッシュをつけていたり消したりしてオールマイト先生の注意を引く。気づいてくれたオールマイト先生が見えるように空間に投影された文字で『デクくんと楪です、響香ちゃんが聞いてますので状況を説明してください』と表示する。オールマイト先生の口元が動いた瞬間に画面を消した。

「ヴィランがタワーを占拠、警備システムを掌握……!?人質は島民全員で、ヒーローたちも拘束されている。危険だから逃げなさい……!?ヤバイよ、希械、緑谷!」

「……一番最悪のパターン引いた感じだね……」

「いったん戻ろう、二人とも」

デクくんの号令で私たちは一旦、非常階段の踊り場に戻る。待っていた皆に状況を説明すると皆、黙り込んでしまった。私もどうすればいいか分からない、ただ一つ言えるのはこのままだとI・アイランドはヴィランの思うがままにされてしまうということ。行方が分からないえーくんと爆豪くん、ホテルにいるであろう三奈ちゃんを始めとしたクラスメイト達の安否も非常に気がかりだ。

「……俺は、オールマイトの提案通りに脱出するべきだと思う。俺たちができることは、何も無い」

「飯田さんに賛成しますわ。私たちはまだ無免許、ヒーロー活動はできません」

「んならよ、何とかして脱出して外のヒーローに……」

「無理、かな。ここ警備はタルタロス級だから……外から入りづらいのは勿論だけど……中から逃がさないようになってると思う」

「じゃあ、オイラたち待つしかねーのかよ……」

飯田くんの現実的な提案に賛成する百ちゃん、上鳴くんに峰田くん。そう、そうなんだよ。私たちに許されるのは逃げることで、隠れること。嵐が過ぎ去るまで震えて待つしかない……けど、それがこの状況の最適解だとは思えない。

「ねえ、メリツサさん。警備システムってこの塔の最上階にあるんだよね？ヴィランが制圧したってことは……」

「警備システムのプロテクトが解除されてる……！奪い返せるかもしれないわ！」

「ダメだ！オールマイトが逃げろと命令してるんだぞ!?俺たちが規則違反を犯してヴィランと戦うわけにはいかないんだ……!」

「ウチは、希械に賛成する。ただ震えてヴィランが好き勝手するのを黙ってみてるなんて……ヒーローじゃないよ……!」

私とメリツサさんのやり取りに賛成したのは響香ちゃん、それに続くのは轟くん。ヒーローを目指しているなら、ここで指をくわえて見ているわけにはいかない。何もしなくていいのか?という轟くん

の問いかけに飯田くんは押し黙ってしまふ。飯田くんも分かっているんだ、本当ならどうしたいか。けどそれはしちやいけないことだから賛成できない。

「……助けに行きたい。戦う必要はないんだ。隠密行動して最上階までいって、システムを取り戻す。そうすれば、ヒーローたちが動けるようになる」

「デクくん！行こう！私たちにしかできないことがあるならやらないと！ヒーロー以前の問題だと思おう！」

「うん、行こうよ。幸い、私たちはまだ気づかれてない。それなら、気づかれないように上に登って、どこかの端末から私の個性でクラッキングを仕掛けるか……」

「私が直接、システムを変更するわ。お願い、私も行かせて欲しい！きつと役に立てるわ！」

麗日さんがデクくんに賛成をし、私もそれに続く。メリツサさんもそれに続いて、百ちゃん、響香ちゃん、轟くん、上鳴くん、峰田くんも次々に賛同に回ってくれた。ステインの件があるからか、飯田くんはそれでも消極的だったけど……止めても行くということを理解したんだろう。深くため息をつきながらも了承してくれた。

「……危険になったら引き返し、逃げに徹する。それを？んでくれ、でなければクラス委員長として賛同できない」

「ありがとう、飯田くん！みんな！行こう！」

デクくんが飯田くんの目を真摯に見つめて、皆の言葉を代弁してくれる。私たちはそのまま急いで非常階段を駆け上っていく。途中でデクくんはパーティー会場を覗き込み、オールマイト先生と無言のやり取りをした。最終的に振り切る形になってしまったのだろうか、やれることをやってから怒られよう。今は、誰も犠牲にしない方法を探るんだ。

## 44話

階段を駆け上がる。非常階段はどうやら監視カメラなどの防犯機能の対象外らしく、着ているだけで邪魔になってしまう光屈折迷彩メタマテリアル・ギリーを着ながら走る必要はないみたい。幸い私たちの体力はそれなりに余っているから、階段を昇り続けることくらいはなんてことない。

「最上階って何階だ!?!」

「200階だよ!今30階!」

「マジか!そんなにあるのかよ!?!」

「文句言う暇あったら足を動かす!」

「ヴィランに出くわすよりはましですわ!」

走りながら階数表示のプレートを見て上鳴くんの疑問に答えると、まさか200階まで階段だという事実<sup>に</sup>打ちのめされる峰田くん、彼は歩幅が私たちと違い過ぎるから体力の消耗も激しいだろう。それに……技術畑のメリッサさんなんかは特に体力がないと思う。ええい、この際恥ずかしいとか見られたくないとか言ってられないや!

「お茶子ちゃん、全員浮かせてもらえる?お茶子ちゃんは私におんぶの状態のまままでお願い」

「了解!みんな、手を!」

「よいしょっと」

「うおおお!!ぎゃあああっ!?!」

スカートをたくし上げて足カバーを外す。お茶子ちゃんがその後ろでみんなの手に振られて無重力状態にして浮かせている。何があるか分からない以上体力の消耗は避けるべき、それは私もそう。だから、機械に任せられる部分は任せちゃおう。私のスカートの中を覗きに来た峰田くんがイヤホンジャックで沈黙してるけど、全部終わったらビンタするからね。

脚が変形して、人外の形をとる。鋭く先がとがった8本足、端的に言えば今の私はアラクネ状態、蜘蛛という腹の部分にゼログラビティ状態のみんなを乗せて、ワイヤーで固定し、無音で走り出した。お茶子ちゃんは許容超過しての酔いを避けるために自分は浮かせてない。

ちよつとぎゆうぎゆうで申し訳ないけど許してね。

「なんでオイラの扱いがこんななんだよ！」

「殴られないだけありがたいだろ、峰田」

「轟イ！場所変われ！」

「峰田君！状況を考えたまえ！」

「すごい、ユズリハさん……でも体力が……」

「生身部分は動かしてないから大丈夫！一気に登っていくよ！」

一番後ろで逆さま状態でぐるぐる巻きになっている峰田くんの抗議は無視する。スカートの中は見られたくないの、いくら私でも。暫くそこで反省しててください、ちよつとしたら普通に戻すから。アラクネ樫ちゃんのスピードはまあ、並みだけどみんな抱えてこれ以上早く階段を昇る方法は正直思いつかないから、許して欲しい。メリツサさんが私の体力を心配してくれてるけど、まあ機械なので！金属疲労以外は平気！

そんな感じで50階を越えて、70階を過ぎ、80階に到達しようとしたところで、私は立ち止まる。隔壁が降りている、このままじゃ進めない……！ああ、もう！非常階段のくせして非常時に使えないとはなんということだ！文句を言ってもしょうがないけど！みんなを下ろして、お茶子ちゃんがいったん個性を解除する。

「どうする、壊すか？」

「ダメ！そんなことしたら警備システムに引っかかってヴィランに気づかれるわ！」

「……うーん、操作できそうな端末も見当たらないなあ……」

パネルか何かがあれば私の個性で一部だけハッキングして隔壁を開けることもできるんだろうけど……流石はI・アイランド、そんな便利な穴は見当たらないよね……。アラクネ状態の私がうーん、と天井スレスレを掠っている頭をかしげて考えているとぐるぐる巻き状態の峰田くんが

「じゃあ、このドアの向こうに行けばいいんじゃない？」

「なるほど峰田、それがいいかもな」

「あ！ダメ二人とも！」

峰田くんが指し示したドアに、上鳴くんが手をかけてしまった。慌てて止めるのも間に合わず、ドアが開いてしまう。轟くんが走れ！と言って皆でドアをくぐって走り出す。私はその場にアラクネを捨てて自分の足で走り出した。峰田くんのワイヤーを切り離してからどうすべきか頭を高速回転させる。

「気づかれた……！」

「しようがないよ！どっちにしろあの状態なら隔壁壊すかドアを開けるかだから！」

「反対側に同じ構造の非常階段があるはずよ！そこまで走って！」

「わかりましたわ！」

「急ぐぞー！」

飯田くんの号令に従って皆が廊下に転がり込んで急いで走りだす、当然ここには監視カメラが山ほどあるので、気づかれてしまっているだろう。それを現すように、廊下の隔壁である防火シャッターが次々と上から迫って閉まっていく。あっ！あれは！

「樫さん！危ない！」

「いいから！飯田くん！ドア！」

「そうか！了解した！」

「樫！」

私は防火シャッターの下に身を躍らせるとシャッターを受け止めて、持ち上げた。グギグギギ、と異音を立てて私を押しつぶそうとするシャッターを押し込める。視線で飯田くんに示したドア、飯田くんはすぐに私の意を察してくれて蹴りでドアを壊してくれる。轟くんが氷結でシャッターを凍らせてくれたおかげで私も脱出し、壊されたドアの先にみんなが入る。

中に入ると、うつそうと生い茂った植物と、近代的な機械装置のコントラストがアンバランスな場所だった。メリツサさんの説明によるとここは植物プラント、個性の影響を受けた植物を観察するための施設らしい。足を止めずにそこを突っ切ろうとすると響香ちゃんもみんなを止めた。見るとエレベーターが動いている。急いで皆植物の影に隠れる。

「ガキはこの中にいるらしい」

「ああ、メンドーなどに隠れやがって……。匂いがするな、こつちだ」

「……完全に気づかれてる……!」

ヴィランたち、抜け目がない。背が高く細い男とずんぐりむつくりな男の二人組、ずんぐりずむつくりなほうは個性なのか鼻をひくつかせて確実に私たちの方に向いた。完全に気づかれてる……!みんなの顔が青くなる、しようがない。覚悟を決めなきや……!

「皆、いい? 私が飛び出したら一目散に非常階段を目指して。いいね?」

「何を言ってるんだ! 戦闘は……!」

「今この状況でそれはもう通らないよ。逃げるかまた上に行くかは飯田くんに任せるけど……この中で、時間稼ぎが一番できるのは私だよ。他の人は残らないで。巻き込むかもしれないし、私も本気で戦えない」

「希械さん……!」

「さあ、行って!」

「……っ! 櫟、絶対追いついてこい!」

「もちろん!」

手袋を脱ぎ捨て両手に機関砲を展開した私が植物の影から飛び出してヴィラン二人組に向かって走り出す。他のみんなは私と逆方向に走っていく。私はヴィランたちに向かって機関砲を連射するが、のっぽの方の男の手が手袋を破って肥大化し、振るわれた風がカマイタチとなつて弾丸を一掃し私に襲い掛かる。体の方は手でガードしたけど……

「ドレス、お気に入りだったのに」

「わーるいことしたなあ? 大人しく死んでくれや」

「二人か? いや、時間稼ぎか。涙ぐましいぜ、女残してとんずらか」

「ふふ、私一人で十分なだけだよ? 卑怯なことしかできないヴィランなんて」

「強がったってなあ……ガキ一人30秒もいらねえわ」

カマイタチでドレスはずたずた、にやにやと笑うヴィランたちにむかつとしたけど今は冷静でいることが大事。火力をあげよう、圧搾空気から火薬で発射に変更、弾丸を徹甲弾へ。これでだめなら近接戦闘かな。ジャコツ！と大口徑に変形した私の両手の機関銃を二人に向ける、ずんぐりむつくりの方のヴィランの身体が毛で覆われ、巨軀に変わった。人と獣のあいの子のようになったヴィランが跳躍して私に拳を振り下ろそうとする。

咄嗟に両腕で防御しようと思腕を構えた。衝撃に備え歯を食いしばってたら……予想された衝撃が来ない。はっと目を前に向けると、目の前に見知った背中があつて、ヴィランの拳を体で止めてくれた。

「おい、誰かしらねえけどよお……俺の幼馴染に何してんだ!?!」

「こいつ、俺の拳を……ぐあつ!!」

「死ねえ!」

「えーくん!爆豪くん!」

獣人ヴィランの拳を止めていたのは硬化したえーくんだった。もう、かつこよく駆けつけてくれて!ありがとう!大好き!そして爆豪くんが爆破でヴィランを吹っ飛ばしてくれる。体勢を立て直した私は数瞬考えて爆豪くんに指示を飛ばす。

「爆豪くん!私の後ろでみんなが上階を目指してるの!貴方の力が絶対にいるから追いかけて!詳しくはみんなから話を聞いて!」

「ああ!?俺に指図す「お願い!」……チツ!」

一瞬反発した爆豪くんだけど、真剣に頼んでたおかげか緊急事態であると理解したからか、舌打ち一つだけして爆破で空を飛んでみんなを追いかけていってくれる。えーくんは何も言わずともここで残ってくれる構えだし、これで私たちの勝ちは確定した。えーくんがいれば、私は誰にも負けない。私のヒーローが一緒なもの、かつこ悪い所見せられないよね。

「おい、どっちだよ。こいつに攻撃したの」

「俺だよ、悪いなクソガキ。かわいい!彼女のおべべを破っちゃまってよ」



「服だけしか破れてないけど。団扇みたいな手の割にそよ風しか起こせないんだ?」

「言ってくれるねえ……!」

「つてえな……あ?他のガキ逃げたか」

「この馬鹿ガキ潰してさっさと追うぜ」

どうも、このヴィランたちは私たちのことを知らないらしい。私たちが有名だとかそんな話じゃなくて、ヒーロー志望の学生だということとを把握できてないようだ。獣人ヴィランが妙に強気なのもおそらくただの一般人の子供相手だと思ってるからだろう。ガツン!と拳と拳を撃ちつけたえーくんが私の前に出てヴィランたちに立ちふさがる。私はビリイ!とドレスのスカートを破って動きやすい形に変える。もったいないなもう!そして、戦闘形態に手足を換装した。

「えーくん、いくよ」

「おう」

短くそう言つて、えーくんは振り返らず返してくれた。それが生意気だったのだろうか、団扇のヴィランが両手を振って風を起こした。けど、えーくんが全てを受け止めてくれる。右目の観測、風を起こしてるんじゃないな。空間がえぐれてる。カマイタチは副次的効果なんだ。当たったらいくら私たちでもまずいかも。

「くたばれクソガキ!」

「ふんっ!」

「ぶっ!」

獣人ヴィランがえーくんに向かって飛びかかる。えーくんは獣人ヴィランの拳に拳をぶつけて対抗、打ち負けはしたものの相手の拳はえーくんの硬化した拳によって潰れて、拉げてしまった。即座に体勢を立て直したえーくんは軽いフットワークで相手の懐に入る。私はそれに合わせて足のバーニアで飛びあがった。えーくんのボディブローが正確に相手の肝臓を打ち据え、私のドロップキックが顔面を打ち抜く。吹き飛んだ獣人ヴィランは壁にめり込んで気絶。団扇のヴィランは一瞬で行動不能にされた相方を見て冷や汗を流した。

「えーくん、正装似合ってるね。汚れてないの見たかったなあ」

「お前もな。ドレス、一生懸命選んだんだろ？ちゃんと見たかったぜ」

「後で写真見せてあげる。全員助けたあと」

「何者だ、お前ら……!?!」

ドロップキックの体勢で落下する私を横抱きで受け止めてくれるえーくん、戦闘で汚れちゃってるけどえーくんの正装、カッコいいな。お姫様抱っこの状態から立たせてもらい、残った団扇のヴィランを二人で見据える。

「えーくん、あの手直接受けちゃダメだよ。多分防御できないやつ」

「あー、俺そういうの苦手なんだよなあ……突っ込むわ」

「ん、わかった。じゃ、行ってらっしゃい」

ジャコ、ジャキジャキ、と私の足や手が変形してハリネズミのように重火器やらミサイルが顔をだし、冷や汗をだらりと流したヴィランに私はにっこりと笑顔を向けて……全弾を相手を囲むように発射した。えーくんは私が制圧射撃を始めた瞬間に合図無しでまっすぐ相手に突っ込む。必死になって手を振るいミサイルや銃弾を排除しようとするヴィランだけど数が多すぎて追いついてない。えーくんの背中にも被弾してしまいうけど、彼も私もそれは織り込み済み!当たっても大丈夫なのはお互い知ってるし、信頼してるから!

「おい、歯……食いしばれ!」

「待っ……!?!」

つるべ打ちのミサイルの煙に紛れて接近したえーくんの硬く硬く握られた拳がヴィランの顔面を捕らえる。命乞いに聞き耳持たなかつたえーくんの鉄拳が顔面に直撃して背後のエレベーターの壁を陥没させるほどの威力をもつてヴィランに襲い掛かった。うわー、いたそー……あれえーくんかなり本気で殴ったね。当然ながらヴィランは気絶……ズタボロの正装だけど私たち二人とも無傷。戦果としては上々だ。

「えーくん、ん」

「おうー」

ガツン!と拳と拳をぶつけ合った私たちは、ワイヤーでヴィラン二

人を拘束しにかかるのだった。

## 45話

「なし崩し的にやっちゃったけどよ……何が起こってんだ？」

「……………放送、聞いてなかったの？」

「あー、なんか流れてたような……」

「えーつとね…………？」

ステインに縄抜けされた前回は踏まえて脱出できないように手錠、足輪、重り、その他あらゆる手段を用いてヴィラン二人をぐるぐる巻きにしていく私にそういえば、といった感じのえーくんが手錠をガチャガチャと相手に嵌めながら聞いてきた。え、まさか何も知らずに当然のように加勢してくれたの…………？そういえば爆豪くんも状況を分かってなかったような？

とりあえず私は知っている情報をえーくんに話す。ヴィランが島内のセキュリティを全部乗っ取ったこと、オールマイト先生を始めとしたヒーローたちは島内の人間を人質に取られて拘束されたせいで動けないこと、唯一自由の身である私たちでセキュリティを取り戻すことが出来ればオールマイト先生が自由に動けるようになり状況が逆転すること。全て話し終わった私が猿轡をヴィランに噛ませてガンガン、と手をはたく。なるほど、と得心顔のえーくん。

「いや、お前が殴られそうだったからつい頭に血がなあ。しかしまあ、状況は分かったぜ。さっさとみんな追いかけてオールマイトを助けようじゃねえか！」

「うん！あ、でも…………その前にまだひと悶着ありそう」

「あ、あ…………多くね？」

先を急ごう、と話しをまとめ上げたところで聞こえたサイレン、その方向に目を向けるとI・アイランドの警備ロボットが大挙して押し寄せているところだった。物量による消耗戦が苦手なえーくんが流石にこれは多い、と硬化して前に出ながらばやく。あ、でもただの機械なら全然だ。というか…………

「メカで私に挑むなら、このくらい対策しないとね」

「おお！一網打尽！」

ほいつとハンドグレネードを投げる。警備ロボットの波の前に落ちたハンドグレネードは一瞬雷光を走らせて起爆、その瞬間警備ロボットたちは全身から火花を散らして機能を完全に停止した。私特性のEMPグレネード、威力範囲無制限バージョン。ちなみに私には効かないしえーくんは硬化したので効かない。あ、でもこの階の電装系は死んだかもしれない。いやタルタロス級なら……？警備ロボット達には効果は抜群だったというわけです。

全身の電子機器に致命的な損傷を受けて黒煙を上げる警備ロボットたち、よしこれで次の階に……まだ来るの!?えー……きりないやつだこれ。どうしよう、あ!防火シャッター閉まつてる!もう!あの状況でみんな逃げるとは全く思わないので目指すべきは上だから……最上階までどうやって行こう。えーくんは数発グレネードを渡して私が考えてる間えーくんが警備ロボットにグレネードを投げて対処してくれる。ふむ、うん……よし!

「えーくん!外から登ろう!」

「おお!……外出れるのか?」

「出口がないなら作ればいいんだよ!はい!」

「よしきた!」

元来た道に戻る様にして私とえーくんは植物プラントから飯田くんが壊したドアを抜けて廊下に戻る。私はえーくんにもう数発グレネードを渡して足から放熱、短くなったスカートが暴れる。一発でこの頑丈なセントラルタワーの外壁を破る装備は……これしかないよね。いくぞお……!

「サドンインパクト、形成開始……!スタンバイ!」

ゴリアテの右手だけを生成する。肘が稼働して杭がせりだす。そして思いつきりパンチと一緒に杭が撃ち込まれて圧縮された空気とオールマイト先生並みの馬力のパンチが壁に打ち込まれる。轟音を立てて壁に大きな穴が開く、溜まってしまった全身の熱を圧縮して右腕と一緒に捨てる、腕を再構成すると同時に私の足が変形する。

「ホバーバイク、形成開始。えーくん!乗って!」

「……よし来た!」

生成されたホバーバイクに私は跨り、グレネードの残りを後ろに全部投げたえーくんが私の後ろに飛び乗る。壊れた警備ロボットを踏み越えて迫る警備ロボットが到達する直前で私たちはホバーバイクを発進させて上まで一直線に上る。それと同時に上階の方から爆発音が聞こえる。これは……！爆豪くんの爆破だ！おそらく最上階の一步手前、風力発電エリア近く……！

「えーくん飛ばすよ！落ちないようにね！」

「俺は気にすんな！目いっぱい飛ばせ！」

えーくんが私のお腹に手を回したのを確認してホバーバイクのアクセルを全開にして、ロケットのように空を急上昇する。風力発電システムでひととき大きな爆発が起こり、何かが打ち出される。あれは……！デクくんとメリッサさんだ！爆豪くんが上に送り出すために二人を爆破で飛ばしたんだね！

「希械！あれ！麗日が！」

「えーくん！お茶子ちゃんをお願い！」

「任せろお！」

風力発電システムのある階まで一気に登り切った私が見たのは、風にあおられて進路が変わってしまったデクくんとメリッサさん、警備ロボットにのまれようとしてるお茶子ちゃんとそれを助けようとする爆豪くんだった。とっさの判断でえーくんにお茶子ちゃんのことをお願いすると彼は二つ返事でバイクから飛び降り、お茶子ちゃん目の前に着地して警備ロボットを殴りつぶした。

「切島君！希械ちゃんも！」

「遅えんだよ切島あ！櫟あ！」

「悪い爆豪！希械！こっちは任せとけ！」

「うん！」

お茶子ちゃんが私たちに気づいて嬉しそうに声をあげた。警備ロボットに邪魔されてお茶子ちゃんの元に遅れてたどり着いた爆豪くんがわっつる顔で笑っている。いやほんとに遅くなって申し訳ない、他の人はどうなったんだろう？轟くんが残ったってことは無事だと思っただけ……！

空中で風にあおられているデクくんの手を取ってメリツサさんごと引き寄せる。抱きかかえるように私の前に座らせて覆いかぶさるようにふたりを固定した。そのまま目指してあるであろう非常口にまっすぐ突っ込む。寸前で二人を抱きかかえてホバーバイクを質量弾扱いして非常口を無理やりぶち破り、バーニアで移動してその中に入った。私たちが着地したのが見えたのかゼログラビティ状態だった二人の体に重さが戻る。

「潜入成功だね、二人とも怪我無い？」

「ありがとう樗さん、僕は大丈夫」

「私も大丈夫。それよりも急がなきゃ……！」

「っ!?デクくん！メリツサさん抱えて先に！」

安否確認をしてたらデクくんの背後にヴィランの影が見えた。とつさに二人を腕で引いて私が前に出る。体から刃物を生やす個性……！メキバキ、と私の手がヴィランの刃物を握りつぶしたのを見てヴィランは一步後ろに下がった。デクくんはメリツサさんを横抱きにして背後の階段に一目散に昇っていく。

「胸糞悪いガキどもめ！」

「どつちが！」

「やかましい！ヒーロー気取りかよ！」

「んんっ!!!」

手の刃物を新しく生やして襲い掛かってくるヴィラン、けど80階で対処したさっきのやつと違って単純な物理攻撃だ！無視できる！武装を作ってる時間も惜しいので私はカウンター気味に思いつきり戦闘形態の拳を突き入れてヴィランと壁をサンドイッチする様に殴りつける。刃物が全て砕かれ、蜘蛛の巣状の罅が入った壁をずり落ちるようにしてヴィランは意識を失った。簡易的な拘束具を作つてすぐさまデクくんたちを追いかける。銃声がなっている、心配だよ……！

ブーストジャンプで階段を一足飛びに上る。ドレスのスカートは戦闘に巻き込まれて焦げたり解けたりなんだからミニスカートより正直頼りないかもしれない。階段の途中でデクくんが倒したらし

いヴィランが気絶している。拘束する時間も惜しいのでそのまま進み、出遅れたのがわずかだったのもあって200階到達と同時あたりで二人に追いつけた。

一番ヴィランの警備が嚴重な場所である制御ルームまで何があるか分からないので一気に駆け抜ける。やはりヴィランは大挙して押し寄せてるわけじゃなくて少数精鋭でI・アイランドを乗っ取りに来たみたい。一番防御が硬いはずなのに誰もいない、そして制御ルームの入り口……！あれは！

「パパ!?」

「シールド博士……!? 助手の人!?」

「サムさん……！なんでパパに銃を……!?」

制御ルームの入り口少し前にある保管室とプレートに書いてある部屋に居るのはシールド博士と助手のサムさん……！だけど様子がおかしい、サムさんはシールド博士の背中に拳銃を押し付け、シールド博士は信じられないようなものを見る面持ちで端末を操作し、何かのブロックの鍵を開けた。サムさんはそこからトランクを取り出して、抱える。

「パパ！サムさん！何してるの!?!」

「……メリツサ!? 逃げなさい！サム！止める!」

「お嬢さん……申し訳ないね。見られた以上帰すわけには……!」

「動かないでください」

メリツサさんが飛び出してしまい、私たちもあわてて後を追う。メリツサさんに拳銃を突き付けるサムさんにシールド博士は「よせ!」と叫ぶ。私が彼に機関銃を突き付けるとサムさんはそれでも拳銃を下ろさずに引き金に指をかけた。

「よせ！サム！なぜだ……！なぜヴィランを島に手引するようなことを……!」

「なぜ？あなたがなぜというか！この研究成果を奪われ、凍結させられてあっさり引き下がった貴方が！何年貴方に仕えてきたと思ってるんです!?!地位も名誉も、全てが泡沫と消えた！せめて、金くらい手に入らなければ割が合いません!」



「そんな、理由で……？言つたじゃないか！これがダメなら別の方法を探るべきだと！政府の言う通りだ！この研究は危険すぎる！個性社会そのものを揺るがしてしまうかもしれないんだぞ！」

「……あなたには、分かりませんよ……！」

サムさんの目に浮かぶ苦悩の色は長年仕えていたシールド博士が完成しかけの研究をあつさり諦めて自分の時間を無駄にしたことに対する侮蔑と憎悪が入り混じり、とても正気とは思えなかった。この人……！何のためかと思えば……！お金!? たったそれだけのために島民を犠牲にしようとしたの!?

「そう、お前にはわからない。デヴィット・シールド……その研究、個性増幅装置の真の価値など。それによって引き起こされる混沌に莫大な金。素晴らしいじゃないか……！」

「ウォルフラムさん……！約束のものです！これで……！」

「ああ、ご苦労。そこのでかいの、邪魔だ」

「きやあつ!？」

「樫さん!？」

私たちの後ろから入ってきたヴィラン、ウォルフラムと呼ばれた筋骨隆々の仮面の男は個性なのか金属を操って私にぶつけてきた。真後ろからの奇襲に私は対処しきれずまともにもらって保管庫の壁に埋められる。その隙にウォルフラムに駆け寄ったサムさん、いやサムがケースをウォルフラムに渡してしまふ。パワーはある個性だけど私の方がまだ強い、鉄塊を無理やり押しつけて壁から復帰する。

「報酬を渡さないとな」

「なにを……ぐああああつ!？」

「いやあああつ!？」

「……サム……！」

ウォルフラムはケースを受け取るやいなや懐から出した拳銃をサムに向けて発砲する。至近距離で膝を撃ち抜かれたサムが膝を抑えてのたうち回る。メリツサさんの悲鳴が響く中、ウォルフラムはごり、と拳銃をサムの頭に押し付ける。まずい、デクくんが同時に動いた。

「おまええええっ!!!」

「やめなさい!!!」

デクくんのフルガントレットに守られた拳がウォルフラムに叩き付けられ、その隙に私が拳銃を奪って握りつぶした。ガードしたらしいウォルフラムが吹っ飛ばされるがデクくんの制御を誤ったらしい攻撃を受けたのにも関わらずダメージが少ない。私はメリツサさんに叫んだ。

「メリツサさん！制御ルームへ！お願い！みんなを助けて！」

「ここは僕たちが食い止めます！だから！」

「っ……！わかったわ！」

「させると思うかあ!？」

「するんだよ!!!」

メリツサさんが駆け出していくのを阻止しようとするウォルフラムに私とデクくんは叫んで突っ込んだ。ウォルフラムが触った壁の鉄板が剥がれてまるで生き物のように襲い掛かってくる。私は戦闘形態の両手の爪を利用して鉄板を引き裂き、殴りつぶしながら接近し、打って変わってデクくんは身軽に壁や向かってくる鉄板を飛び越えて迫る。

「スマツシユー！」

「このおお!!!」

デクくんの蹴りと私の振り下ろしはウォルフラムが操った鉄の壁に防がれる。そのまま壁に押されて生き埋めにされた。デクくんを庇って背中を壁を受け、サンドイッチ状態で腕を伸ばして耐える。デクくんが私の脇の下からワンフオーオールを纏った拳を突き出して壁を壊してくれる。脱出した私たちに対してウォルフラムは攻撃を私たちに集中するのではなく、非戦闘員のシールド博士と彼に手当てされているサムに鉄柱による攻撃を向けだした。いけない！

「そうだよなあ？動いちまうよなあ？ヒーローってのは難儀だ。たったこれだけで、身動きできなくなる」

「う、うぐぐぐ……」

「くうう……」

全方位から迫る鉄柱を私たちはシールド博士とサムを庇って受けざるを得ない。そして鉄柱はどんどん数を増し、私の力でも支えきれないほどの重量で私とデクくんを地面に埋めてしまおう。それでもなお、鉄柱の衝撃は数を増し、それが20を超えたところでようやく止まった。

「やめろ!!」

「チツ、警備システムを復旧されたか……博士、そのガキどもはまだ殺してない。生かしたいんだったら、大人しくついてくることだ」

「は、博士……ダメ……」

「黙ってろ」

「あああああっ!?!」

鉄柱の隙間から博士に声をかけるが、ウォルフラムはさらに鉄柱を追加して私に重量を追加した。ねじりつぶされるような痛み私の口から悲鳴が上がる。辛うじてデクくんは潰されてない……私もまだ、息ができる……!博士を守らないと……背に腹は代えられない。

「わかった……ついていこう」

「賢明だ」

ダメ、ダメ……!声が出ない。ウォルフラムの悪党らしい三日月のような笑みだけが残され、保管庫から二人が去っていく。サムは気絶してる、デクくんは動けない……私がやるしかない……!」

## 46話

ふう、ふうと息を吐く。あんまりやりたくないけど……これをやらないと脱出できない。右隣で同じように潰されているデクくん被害がいけないように……私は左手を自爆させた。至近距離での大爆発が鉄柱ごと私を吹き飛ばす。声にならない悲鳴が口から洩れたけど、これで自由になった。片腕の状態で鉄柱を引き裂いてデクくんを助け出す。

「ごめん……デクくん、大丈夫？」

「樫さん……僕は大丈夫だけど、樫さんは……」

「大丈夫、ちよつと痛かったけど……それよりも」

「うん、博士を助けないと」

もうぼろきれと化したドレスを翻して走り出す。左手を作り直し、下半身から思いつきり排熱して体の温度を下げる。これでまだしばらくは個性が使える……！デクくんも鉄柱であちこち痛めてしまったのだろう。少し動きがぎこちないが歯を食いしばってヴィランの後を追う。多分ウォルフラムは逃げるつもりだ。目的のものであるシールド博士とその発明品を手に入れたのなら。脱出手段も確保しては……それは恐らく空路！おあつらえ向きに屋上はヘリポートだ。

タツクルするように屋上のドアを開ける。やはりヘリポートには軍用らしいヘリが止まっていて、拘束されたシールド博士を後部に無理やり乗せたウォルフラムとその部下が今にもヘリを飛ばしそうだった。デクくんはその光景を前にして叫ぶ。

「待て!!」

「なるほど、そこまでの価値がこの男にあるのか？身内から犯罪者を出したこの男を」

「関係ない！私たちは博士を助けにきたの！エクスカリバー、  
形成開始!!!」

「ははっ!!出来もしないことも言うなよ、ガキ！」

ウォルフラムの個性が襲ってくる。もう何も奪わせない！何人の

人の命を弄べば気が済むの！私の両手が変形して大型の刀剣型武装が姿を現す。連結状態だったそれを切り離して鉄柱に向けて振るうと、レーザーの刀身が鉄柱を焼き切った。私の後ろからデクくんが飛び出してウォルフラムに迫る。私もバーニアを吹かして両手のエクスカリバーで鉄柱を次々切断しながらデクくんと挟撃するようにウォルフラムに迫る。

「なっ!?!」

「うっ!?!」

「はっはあ！ヒーローってのは不自由だよなあ！何度も同じ手に引つ掛からないといけないなんて！」

攻撃を当てようとした瞬間に私たちの動きが止まる。ウォルフラムが部下から受け取っていたらしい拳銃をシールド博士に向けていたからだ。そして、動きを止めた私たちを見のがさずにウォルフラムは巨大な鉄柱をぶつけて私たちを吹き飛ばした。何度か地面をバウンドしつつも立ち上がった私たちをあざ笑うかのようにへりは発進する。だけど、軍用へりなのが残念だったね……！後部座席のドアがないタイプのへりだ！

「デクくん！私を信じてくれる!?!」

「樫さん……！もちろん！博士を救けよう！」

デクくんの返事を聞いてすぐさま私はデクくんを抱えて飛び立った。ウォルフラムの鉄柱は、こない。やっぱり一回触らないと金属は操れないんだ！腰からもブースターを生成して速度を上げた私がへりコプターに追いついて……！デクくんを思いつきり投げる。デクくんはワンフォーオールを発動して私の手を蹴り、加速する。そしてそのまま……銃を向けようとするウォルフラムの隙について後部座席を通り抜けるようにシールド博士をさらうことに成功した！

「デクくん！きやあっ!?!」

「樫さんっ!?!」

デクくんをキャッチしようとした私に、へりから発射された近接誘導ミサイルが直撃する。とっさに足で蹴りつけて逸らしたけど爆発によって大幅に吹き飛ばされてしまった。このままじゃデクくんと

シールド博士が地面に激突しちゃう！間に合え……間に合え！間に合ってええええ!!!加速しつつ手を伸ばす、だけど遠い、遠すぎる！誰か、お願い……！二人を助けて……！

「よくやってくれた！有精卵たちよ！もう大丈夫、なぜって？私が来た!!!」

「おーる、まいと先生……！」

私と、デクくん、そしてシールド博士を抱き上げて助けてくれたのは……平和の象徴、オールマイト。彼は私にデクくんとシールド博士を託すとヘリに向かって拳を握り締める。ここまで来て不利になったと察したらしいヴィランが逃げようとするけどそれを見逃す彼じゃない。オールマイト先生の鉄拳に殴り飛ばされたヘリは、ヘリポートへ逆戻りして墜落した。空中を蹴ってヘリポートに向かうオールマイト先生を追って二人を抱えた私もヘリポートに着地する。

「パ・パ!!」

「メリツサ……！濟まない、怖い思いをさせてしまった……！ミドリヤ君もユズリハ君も、ありがとう……！」

シールド博士が私たちにお礼を言ってくれる。それだけで救われた気持ちになった、無理をした、無茶苦茶をやったけど……助けることができた。その事実だけでこんなにも嬉しい、それをあざ笑うかのように突然また鉄柱が飛び出してきた。オールマイト先生を吹き飛ばしてしまう。即座に警戒に移行した私とデクくんはメリツサさんとシールド博士を鉄柱から庇う。

「オールマイトオー！」

「メリツサさん、博士！私たちの後ろから出ないで！」

近くに落ちていたエクスカリバーを拾い上げて私や博士に襲い掛かる鉄柱やパイプを熔断して無力化する。あまりにも数が多い。それはヘリポートをめくりあげて蠕動し、まるで魔王が住む塔のようなまがましい物体を組み上げていった。その頂点にいるのは、ウォルフラム……！仮面を外した彼の頭に見慣れない機械が付いている。シールド博士がそれを見て叫んだ。

「よせ！その装置は未完成だ！個性は暴走し寿命を削る！目的が何

かは知らないが死ぬ気なのか!？」

「…………この期に及んで俺の心配とはお優しいことだ。当然、生き残るために使わせてもらう」

「往生際が悪いなーTEXASSMASH!!!なにつ!？」

「…………うそ」

防がれた。ただの鉄塊に、オールマイト先生の打撃が。一振りで天候を変える打撃をただの鉄塊が防ぐ、個性増幅装置といったそれは流石シールド博士の発明品ということだろうか……………そして、また鉄塊に吹き飛ばされるオールマイト先生、金属の蠕動は続き、まるで静脈のような青い線があたりを走って、金属がめくれあがって塔の一部になっていく。セントラルタワーそのものが敵に回ったような、そんな感覚に陥る。

高笑いするウォルフラムが操る鉄塊が私に降り注ぐ。エクスカリバーを捨てて私はメリツサさんとシールド博士を抱えて避ける。デクくんもフルカウルを纏って避けた。オールマイト先生に降り注ぐ鉄塊を全て受け止める彼の身体から、薄く蒸気が上がっているのが見える。そうか、活動限界……………さらに降り注ぐ鉄塊に、オールマイト先生が膝をついた。

「オールマイト!」

デクくんの叫びと同時に、オールマイトに迫っていた鉄柱たちが凍り付く。この個性は轟くん!そして聞き慣れた爆発音が響いて空を駆けているのは爆豪くん!くたばれ、といういつもの口の悪い言葉と共に爆豪くんの爆発がウォルフラムを直接襲う。ウォルフラムは壁を出して爆破を防ぐ、かなり個性を酷使したのだろう、腕を抑えて此方に戻ってくる爆豪くん。そして、誰一人欠けることなくみんながここに到着した。

「えーくん!シールド博士とメリツサさんをお願い!デクくん、轟くん、爆豪くん!オールマイト先生を助けよう!」

「うん!行くこう!」

「けっ!言われんでも分かるわ!」

「ああ、やるぞ!」

4人で並び立つ。ウォルフラムは私たちを邪魔だと感じたのか鉄柱を増やして押しつぶそうとしてくる。轟くんの氷結がそれを凍らせて、爆豪くんが爆破で粉碎した。そうか！温度差で脆くすれば壊せるのか！二人が壊してくれた鉄柱の隙間を縫ってオールマイト先生の所まで行ったデクくん和我、私がオールマイト先生を支えて、デクくんが……全力のスマッシュを鉄柱に叩き付けた。フルガントレットに包まれた手は、傷一つない。

「二人とも……なんて無茶を……！」

「だって……オールマイト先生、困ってたじゃないですか……！」

「困ってる人を助けるのがヒーロー、そうでしょ……オールマイト……！」

「……H A H A H A、確かにそうだとも。ありがとう二人とも！少年少女たちよ！しばし手を貸してくれないか！」

オールマイト先生が立ち上がり、私とデクくんはおろかその場にいるクラスメイト全員にそう問いかける。当然答えは決まっている、イエスだ！えーくんも、爆豪くんも轟くんもみんな！私と同じように肯定の言葉を帰した。それにと笑ったオールマイト先生が何時ものようにマッスルポーズを決める。その体から蒸気が消えうせた。

「行くぞー！二人とも！」

「はいっ！」

「くそ、ごみの分際で往生際が悪いんだよ！」

「そりやてめえだろうがぁ!!！」

「邪魔はさせねえ！」

ウォルフラムはいっそ狂気を感じさせるほどの表情で金属を操り私たちに向けてくる。轟くんがその大部分を凍らせて爆豪くんが粉碎する。オールマイト先生とデクくんが一直線に走りだして、私も付いていく、二人が作ってくれた隙に体を変形させながら、纏う。もうここで終わらせる、オーバーヒート前提、出し惜しみはなしだ！

「構成拡張、重装近接格闘型強化外骨格『ゴリアテ』機能更新・  
形成開始!!」

久しぶりに直接身に纏うゴリアテ、サドンインパクトで眼前の鉄柱



を薙ぎ払い、余波がウォルフラムの塔を揺らす。両肩から発射される連装ミサイルが爆豪くんが処理しきれなかった鉄柱を粉碎した。えーくんがメリッサさんに迫る鉄柱を受け止め、飯田くんがエンスト寸前の足を酷使してぶち壊す。頭皮から血を流してももぎもぎをもぎつた峰田くんが即席のシエルターを作り出してそこにもう戦えない人たちを避難させ、八百万さんが盾で覆う。

「うぐおおおつ!!!」

ウォルフラムが、吠えた。全ての力を振り絞る様に両手を上にあげる。すると、ウォルフラムの塔の天辺に今まで操っていた鉄、パイプ、捻子……ありとあらゆる金属が集まって巨大な金属塊を作り出す。人がありんこのように思えるサイズ、お茶子ちゃんが驚愕に目を見開くのが視界の端に見える。

「潰れちまえ!」

「デクくん、オールマイイト先生!私に任せてください!血路を開きます!後はお願ひしますね!」

「樫少女……!任せよう!緑谷少年!力を込めろ!限界を超えて!プルスウルトラだ!」

「はいっ!樫さん!任せるよ!だから、僕らに思いつきり託して!」

「ありがとう、二人とも!これで最後!50ガーベラ・ストレートファイファイ!形成開始!!!」

ゴリアテの両手から金属が伸びて、大きな大きな刀を作り出す。まさかこんな形で役に立つとは思わなかった、どれだけ大きなものが作り出せるかという限界値を見極めるためだけに設計した武器……!50mの長さを誇る刀、50ガーベラ・ストレート!ゴリアテの手と融合し、大上段に構えたそれを金属塊に向けて思いつきり振り下ろす。こちらに迫る金属塊を真つ二つにした50ガーベラ・ストレートがセントラルタワーの屋上にめり込んだ瞬間ぎりぎりです、全て体内に再吸収した。被害はギリギリ、ゴリアテの両手は肩からもげた!それでも活路は開けた!後はお願ひ!ヒーロー!

「いって!二人とも!」

「緑谷!」

「ぶちかませえっ!!」

「DOUBLE DETROIT S M A A A A A S H!!!」

二つに分かれた金属塊の間を吹き飛ばすように通った二人の拳がウォルフラムを襲う。苦し紛れの鉄壁を粉碎して、ウォルフラムの塔を真正面から粉碎していく。衝撃波があたり一面を叩く、デクくんのフルガントレットが耐え切れずに砕けた、それでも二人の雄たけびはウォルフラムの企てごと全てを打ち破り、粉碎する力を二人の拳に与えている。

そして、一瞬の静寂と共に塔が爆散して崩れ去る。ガラガラとセントラルタワーの屋上にウォルフラムが好き勝手に操っていた金属たちが自由を取り戻したのを喜ぶように甲高い音を立てて次々と落下し、積み重なっていく。私たちは、しばらく動けなかった。ただ、デクくとオールマイト先生が塔があつた部分に着地して、オールマイト先生の手によせ細ったウォルフラムが気絶している状態で持たれているのを見て、ようやく状況を理解した。

「……倒した! ヴィランを倒したんだ!」

「うおおおっ! やつたな! 希械! 緑谷! オールマイト!」

「うんっ! やつた! やつた! 守れたよ!」

皆、ボロボロで元気なんて欠片も残っていないはずなのに広がった喜びが伝播して手を取り合つて喜んだり、思いつきり両手を振り上げたがり……各々の方法でみんなが喜びを表現する。私はゴリアテから転がり落ちるように降りる。両手を失った私を見越していたかのようになーくんが受け止めてくれる。私は彼に、とびっきりの笑顔を向けてから、白んできた空の朝日を見つめるのだった。

## 47話

夏休みの大冒険というにはちょっと、いやかなりヘビーだったI・アイランドセントラルタワー占拠事件から一夜明けた。朝方に終わった事件だったんだけど私たちはまー、その……資格未取得にもかかわらず大立ち回りを繰り広げたので警察の世話になる必要があったんだよね……。怒られ、はしなかった。というのもヴィランを招き入れたのがI・アイランドの人間で私たちは巻き込まれてなし崩しの戦うことになったのが大きいみたい。

I・アイランドの責任者、いわゆる市長とかそんなクラスのお偉いさんは私たちがやったことに対して感謝の意を直接伝えに来てくれて、この件を公にしない代わりに私たちの将来に傷がつく事態は回避されたということみたい。うーん、ステインの時と一緒かあ……現場検証でゴリアテとか色々持ってかれちやったけど返してもらえないかな？法には触れてないけど私まだサポートアイテム資格取れてないから突かれたら痛いかも……。

まあ、そんなことはどうでも、よくはないけど置いとけばいい。今は、目の前にあるグリルでじゅうじゅうと油を滴らせながら焼けているお肉の焼き加減を見ることの方が大事なんだ。ん、今！ひっくり返して……んくく！いい焼き加減！いいお肉だなあ、そろそろステーキの方は良さそう。え？何をしてるかって？

「さあ食べなさいー！」

「焼けたよく〜！」

「……いったただっきまーす!!!」

四方八方からグリルに向かって手が伸びて、焼けたお肉と野菜が刺さった串を我先にと手に取って、口に運んでかぶりついた。あ、何してるかだったよね？私たち英雄高校ヒーロー科1年A組はいま、I・アイランドの人工湖のそばにあるテラスを貸し切って、BBQ大会を開いております！あ、えーくんこれ食べて？はいあーん。美味しい？えへへ、私がスパイス調合したんだよ？あ、峰田君もあーんね、頑張った話聞いたよ？ハーレムは無理だけど、このくらいはしてあげよ

う、私でごめんね？

昨日？一昨日？時間が曖昧だけど、ヴィラン襲撃の件でエキスポの開催は延期されちゃったんだ。何と今このI・アイランドには1年A組が全員集合してたの！凄いことだよ!?ほんとに世間って狭いね！で、オールマイト先生が戦った私たちの労を労うという意味を込めると、エキスポが延期になってしまったからその代わりに兼ねてBBQをご馳走してくれることになったの！

お料理と聞いては黙ってられないのが私こと樅希械なので、美味しいものをもっと美味しくしたいですとオールマイト先生にお願いして一緒に準備をさせてもらうことに成功して、ここにBBQ奉行希械ちゃんが誕生したわけです。寝かせてたアルミホイルを開けてく、んん！いい感じの熱の入り方！トマホークステーキ……一回でいいから丸ごとかぶりついてみたかったんだよね！

「おいしく〜！」

「ええ、ほんとね。希械ちゃん、みんな大変だったって聞いたわ。私たちがホテルの中にいた時にそんなことが起こってたなんて……」

「あはは、まあレセプションパーティーに行った人たちだけしか分からなかったと思うよ？ああ、パーティーと言えば私のドレス……」

「あー希械ちゃんあのドレスすっごい似合ってたよね！また着せてみせてよ〜〜！」

「うう、三奈ちゃん聞いて……あのドレス破れてなくなっちゃったの……」

「ええ〜〜っ！もつたいない！」

うん！ほんとにもつたいない！最終的に私のドレスはアマゾネスみたいな襤褸切れと化して、ゴミ箱行きになってしまった。いやほんと、私のヒーロースーツより布面積少なかったよ！絶対下着見えてたよね……いやでも峰田くんが言わないってことはギリギリ見えてなかった説が……？

うわあああん！と言いなから焼きそばを作り焼きおにぎりを焼き、さらには揚げニンニク、アヒージョなどを高速で作っていく私、うう、お料理してると癒されるよ……あ、焼きそば美味しい？やったく〜。

あ、爆豪くんこれ試してみて？辛いのが好きだって聞いたから、唐辛子多めのスパイスと麻辣風のスパイス別で調合しておいたの！爆豪くんが瓶に入った二つのスパイスを差し出すと彼は無言で受け取った後、デクくんが「気持ち悪い事教えてんじやねええええ!!」と卓上に丁寧已全部置いてから襲い掛かった。うーん、いつも通り。

「ごめんなさい！遅れちゃったわ！」

「すまない、お招きいただき感謝するよ。トシ……オールマイト。少し取り調べが長引いてね」

「デイヴ！メリツサ！H A H A H A！気にする必要はないさ！皆！紹介しよう、私の親友のデイヴとその娘、メリツサだ！仲良くしてくれよ！」

「よろしくね！」

「やあ、君らがオールマイトの教え子たちか。よろしく頼むよ」

よろしくお願いしまーす！とそこかしこから挨拶の音が聞こえるのは流石物怖じしないヒーロー科、やってきたのはメリツサさんとシールド博士！どうやらオールマイト先生が誘ってくれたみたい。シールド博士はそのままオールマイト先生と雑談に興じ始め、メリツサさんはデクくんが軽く挨拶したら私の方にやってきた。

「ユズリハさん！こんにちは！やっとな落ち着いて話せるわ」

「えへへ、大変でしたものね。色々聞かれるとは思ってましたよ、技術者ですから」

「うふふ、お見通しかしら。でもね、さっきデクくんにも言ったんだけど、先にこれだけ言わせて欲しいわ。助けてくれてありがとうね、ヒーロー」

「メリツサさんですよ。助かりました、ヒーロー」

メリツサさんがお礼を言ってくれるのに、そう返すと彼女は少し目を丸くしてから花が咲くように笑った。そのあと開始された技術者トークを料理しながら繰り広げていると他のみんなの頭に？マークが飛び始める。ギリギリついていけるの百ちゃんくらい？あ、上鳴くんショートした。難しい話かもしれないけどこれ私にとってはずつごく楽しいの！あ、メリツサさん忘れてた！連絡先交換！お願い

します！やったくく！お友達が増えた！炭火でバケツト焼いて、アヒージョのオイルとニンニク、アンチョビが混ざった残りを塗ると美味しいんだよくく？女の子的には口臭が気になるからそこまで食べられないけどね！

「な、な、な……なして、こんなことに……？」

「あはは、ユズリハさんのことみんな気になってたんだよ？パパがデイベートするって言ったら、あれよあれよとこんなことに……」

「私の心臓が持たないよう……」

BBQの翌日、私はI・アイランドの学校、通称アカデミーにヒーロースーツでやってきた。というのもシールド博士からサポートアイテム国際免許の結果が出たので取りに来るついでに約束してたデイベートをやろうというお話を貰ったのでメリツサさんとシールド博士と楽しく科学について語り合いあわよくば詰まってる所のアドバイスを戴こうかなくくとうきうきしながらアカデミーにやってきたんだ。

ちなみになんだけど他のクラスのみんなはそれぞれ思い思いのことをして過ごしている。だけどオールマイト先生はアカデミーにやって来てて、それについてきたのがえーくん、デクくん、飯田くん、轟くん、お茶子ちゃんに百ちゃんだね！三奈ちゃんはお勉強というワードが出た瞬間に別行動になっちゃった。えーくんは私が緊張で硬化するのが分かってるのでそれを緩和するためにきてきてくれたらしい、ありがたや。

それで、なんだけど……現在私の目の前にいるのはシールド博士！だけじゃなくて……アカデミーはおろかI・アイランドで研究をしている高名な科学者の方々、それがデエエエンと私の前に鎮座してるの……違うんです……会ってみたいとは思ってたけど会えるなんて思ってたから何も考えてなかったんです……。

わ、わあ……ミノフスキー博士もいらっしやる……ひい、ビーム物理学を確立したドクターJ博士……！あ、駆動装置の権威老子O！

……それら様々な科学分野のトップをひた走るエキスパート達。エキスポの関係でI・アイランド以外からも科学者が集まって忙しいだろうにそれを縫ってここに居ると思うとお腹が痛くなってくる……！

「は、はひい……!?」

「あはは、大丈夫大丈夫。みんないい人たちだし、気さくで優しい方たちよ。パパ、そろそろ」

「ああ、すまん。じゃあユズリハ君、少々遅れたが君の国際サポートアイテムの免許についてだが、協議の結果合格ということになった！おめでとう！これが、免許証だ。再発行は日本でもできるけど、なさないようにね」

「は、はい！ありがとうございますう！」

シールド博士が卓上からケースを取り出してそのまま私に渡してくれる。ケースの中に入ってるのは証書と、金属製のカードに文字と私の顔写真が刻印された免許証。わ、わくくくく!!!!ほんとに取れちゃった免許！オールマイト先生の名前を使ってるから裏口みたいな感じかもしれないけど！あれ？もしかして私不正にとったのに近い……!?精進します……。

「さて、大勢で押し掛けて申し訳ないね、君の作品であるホバーバイク、あれの完成度の高さは学内でも話題になったんだ。オールマイトからの推薦というネームバリューもある。仮に君が雄英のサポート科所属だったら十中八九、上が引き抜き交渉を根津さんに持ち掛けてただろう」

「そ、そこまでですかっ!?」

「ふむ、どうやら君はいささか自分が持つてる技術に無頓着のようだな。よいかね？超小型化した反重力生成装置、それを動かすエネルギー発生装置、慣性の制御による加速装置……確かに既存の技術を使ってるのだが、今の最先端を超えることに違いはないのだ。現に、エキスポの反重力発生装置は出力の都合こそあれ、建物サイズなのだから」

途中で口を挟んできたのはミノフスキー博士、な、なるほど……確

かにそうだったけど！でもそれ私の個性ですから！そこまで最先端を突き進んでるとは思えません！あーでも褒め、られ、てる？のかな？

「まあ、難しい話は置いておこう。つまりここに集まった私たちは、君と有意義に話したいだけなのだ。聞けば詰まっつているところがあるそうじゃないか。私たちなら君の技術を理解できるだろうし、解決の手段も提案できる……未知の才能というのはいつだって研究者をワクワクさせるものだよ」

「はは、そういうことだよユズリハ君。メリツサも通った道だ、存分に私たちに質問をぶつけてくれ」

「そ、そういうことでしたら……こちらなんですけど……」

「……ほう、シンプルな形だね。これは？」

「試作中の荷電粒子ビームを発射するライフルと荷電粒子を刀剣型に固定する装置です。名前を付けるとしたらビームライフルとビームサーベルでしょうか」

「ビームの個人使用が可能な装置だと!?今どこまで!？」

「ビームライフルの方は一応発射出来るところまではいつてるんですけど……発射後のビームの収束率に難がありました、拳銃よりも射程が短いんです。ですけど荷電粒子をため込むエネルギーパツクの容量が上がらないと収束率をあげることが出来ず……とん挫してます。サーベルの方は荷電粒子を斥力フィールドで包んで刀剣型に固定してるんですけど……若干むらがあつてビームが漏れちゃうんです。私と接続し続けないとビームは維持できませんし……使うエネルギーも膨大でとても実戦には……」

「そこまで実用化出来るのか……!ドクターJ、彼女になら開示しても問題ないのではないか？」

「……とにかく今どこまで出来ているかを確認してからでも遅くあるまい。差し支えなければ稼働しているところを見たいものだな」

「え、と動かすこと自体は可能ですけど……」

「パパ、実験場どこかあいてないかしら？」

「大丈夫だ、多分こういうことになると思つて一つ抑えてる。行こ



うか」

私が今一番実用化したい技術であるビーム、あるいは荷電粒子砲の試作品を手から作り出すと、やっぱりその道の権威である博士たちは食いついた。ビームサーベルの方は救助に使いたいので実装を急いでるんだ。というのもレーザーブレードより高出力なので欲しいものを切ることができ、つまりがれきの撤去などに有用！完成したらヒーロースーツに組み込みたいの。私はわたたと試作品を両手に抱えて実験場に急ぐのだった。

「とつても楽しかったわ！ユズリハさんアカデミーに転校するつもりない!?皆歓迎してくれるわ！」

「ふふ、もし雄英を除籍されちゃったら留学を考えてみますね。ヒーロー科は厳しいですから」

「そうね、ヒーロー志望だものね。私も頑張らなくちゃ」

「おっ！希械にメリツサさん！戻ってきたんだな！オールマイトが飯奢ってくれるってよ！行こうぜ！」

この1日で私の持つ技術がジョグレス進化したこと間違いない。デイベート&実験を終えて、メリツサさんと一緒にアカデミーを出た。私の質問や技術的な疑問に対して嫌な顔一つすることなく答えてくれた偉大な博士たちは今日のことをレポートにまとめるとかなんかでアカデミーの研究室にこもっちゃったみたい。でも、祝！荷電粒子実用化！ビバビーム！まさかこんなあっさり実用出来るなんて思わなかった。超圧縮技術とミノフスキー博士のE-CAP技術とドクターJのエネルギー縮退技術のおかげだよ！他にも私の持つてる技術は進化したので帰って実験をするのが楽しみだなあ……。

そんな私たちをアカデミーの前で待っていてくれたのはえーくん。どうやら他の人たちは別の場所にいるクラスメイトにご飯のお知らせをするために先に行ったみたい。待っていてくれたえーくんにお礼を言っただけでもオールマイト先生が抑えてくれたご飯屋さんにい

こう。お腹減った！たくさん食べるぞー！

## 番外編 ミニミニパニック!

「え、ナニコレ……?」

「轟……か?」

「おかしいよ、私の知ってる轟くんはこんな小さくないしもちもちしてない。いやでもこの頭半分紅白おめでたいヘアーは私の知ってる限り轟くんしかいないような」

「だよなあ……じゃあよ」

「なんで赤ちゃんになつてんの?」

I・アイランドでの一件を終えた私たちは日本に戻り、合宿前の注意事項を伝えられる夏休みの登校日、道端に雄英の制服が落ちてたと思つたらその中には気持ちよさそうに眠る紅白ヘアーの赤ちゃんの姿が。えーつと、これはつまり……?つまりどういふことなんだ!? ベビー服は着てるんだけど……でも面影ありまくりなんだよねえ……。

「し、しつれいしまーす……」

そう言つて私は暫定轟くん(仮)を優しく持ち上げて抱っこする。図太いのか態勢が変わつてもすすよと眠っている赤ちゃんに私はどうしたものかと戸惑いを隠せない。というかこのまま熱い地面に放置するとかは人としてどうなのかということもある。仮に轟くんだったらもつと困るし……えーと、右目で見て……うん、脱水とか危ない症状はないね。じゃあ私たちが来る少し前にこうなったのかな? いやしかし、解せないなあ。

「あー固まつてる場合じゃない! えーくん! こういう時は相澤先生に連絡してそのあと警察にも!」

「お、おうーそうだ! そうだったな! ってこれやっぱり轟の鞆じゃねえか! お前轟かあ!」

「えーくん声が大ききよう」

「ふえ……うえええん!!」

「す、すまねえー!」

「あーよしよし、びっくりしたねえ轟くん? なのかな? く、首据わつてるっほくてよかつたあ……」

落ちてた制服を確認したえーくんが鞆にある轟くんの名前を見て素っ頓狂な大声をあげる。それにびつくりしちゃったらしい赤ちゃんにはぼつちりと目を覚まして泣き出してしまった。顔を青ざめさせてえーくんが謝ってるけど赤ちゃんにはそんな関係ないんだよ。私は赤ちゃんを抱っこしたまま体を揺らして優しく声をかけながらあやし始める。やっぱり驚いただけなのかすぐに泣き止んだ赤ちゃんがぼつちりとした目で私をきよとんと見つめて、ふわりと笑った。

「か、か、かわいい〜」

「あ、相澤先生つすか!? すんません俺たちにも分かんないんですけど轟の制服とかぼんと一緒に轟っぽい赤ん坊が落ちてて! はい!? お前らもか!? はい! 希械に代わるツス!」

『樫か、状況をもう一度説明してくれ』

「あ、はい。えーく、切島くんと一緒に登校してたんですけど…:道端に轟くんの制服と鞆と一緒に赤ちゃんがいて…:一応脱水症状とか危ない状況ではないんですけど…:」

『やつぱりか…:いいか、それはヴィランの個性だ。同時多発的にテロのように無差別に人間を赤ん坊の姿に変えるヴィランがいてだな…:ヴィランそのものはオールマイトさんが捕まえたんだが、個性の効果が切れるまで暫くかかるらしい。警察も今てんやわんやだ。うちにも被害者が何人もいる。雄英で保護することになるから悪いが連れて来てくれ…:』

「そんなコミックみたいな!」

「コミックよりタチが悪くないかこれ…:? 戻るんだよな…:?」

えーくんの携帯に接続した私が相澤先生に事情を聞かれて説明すると驚愕の事実を返された。人間を赤ちゃんに変身させる個性!? なんじゃそりや!? あと相当相澤先生お疲れみたいだね…:? いつも気だるい感じの声をしているけど輪をかけてそうなっちゃってる。まっつて今雄英にも被害者がいるって言わなかった!? テロだよこれ! テロって言った!

「希械、ネットニュースにもなっちゃまってる」

「うそお…:」

通話が切れて、えーくんが制服を簡単に畳んでかばんと一緒に持って、ついでに検索したらしい画面を見せてくれる。そこには、同時多発的に人間が赤ん坊に代わるヴィランテロのニュースがあり、私は眩暈がしてくる感覚を覚えるのであった。ねえ、君ホントに轟くんなの？と私の制服をぎゅつと握ってきやつきやつしてる赤ちゃんを見て、可愛ければ何でもいいや、と脱力するのだった。

「うそお……」

「現実だぜ、希械」

「あははく梅雨ちゃんだけじゃなく皆赤ちゃんになってしもたんやねえ」

「上鳴さあ……ウチいなかったら危なかつたよ……」

「かつちゃんがそうなってるのは分かったんだけど……まさか他のみんなもだなんて……」

「尾白君かわいいいっく！私が面倒見るからね！」

「ヤオモモかわいい！だけどこの状況でヤオモモいないのヤバいんじゃないあ……？」

「畜生！なんでオイラに被害いかなかったんだよ！変われよ！なあ！」

「「却下で」」

悲報、A組だけでもかなり被害者がいた。まず私が抱っこしてる轟くんでしょう？デクくん嫌そうにだっこされてる爆豪くんでしょう？お茶子ちゃんが抱っこしてる梅雨ちゃん、響香ちゃんが抱っこしてる上鳴くん、透ちゃんが抱っこしてる尾白くん、三奈ちゃんが抱っこしてる百ちゃん……足元で色々アピールしてる峰田くんを砂藤くんが回収して瀬呂くんが個性でぐるぐる巻きにして黙らせてくれた。

「はい、席に……今日はつかなくていいか。それでなんだが、今朝の無差別個性テロの件はニュースなりで知ってると思う。このクラス

どころか隣のB組や普通科のクラスにも被害者が出た」

「『委員長!?!』」

「被害者1号だ。後処理で俺ら教師陣まで駆り出されることになつてな。戻るまではすまないがみんなまで面倒を見てやってくれ」

「流石に無茶です!赤ちゃんですよ!?!」

「ちなみにここらの保育園や幼稚園、あるいは小学校の教諭までもテロの後処理に駆り出されてるのでヒーロー志望が山ほどいる雄英に回す人員がないと上から決定事項が伝えられてな。警察も普通科の対応で手いっぱいだ。正直俺にもどうしようもない。またこの個性が厄介なのが血縁関係にある人間に接触すると広がるらしくてな。親御さんに預けると親御さんも赤ちゃんになってしまう」

「地獄か!?!」

「現在被害者がどれくらいいるかもわからん状況だ。幸い家の中や建築物の中にいれば大丈夫というのは実証済みでな。ヴィランが個性を使った瞬間外にいた人物が赤ん坊に変化している。なのでお前らが面倒を見るしか選択肢がない」

やってきた相澤先生に抱っこされてるのは我らが委員長である飯田くん、珍しく姿が見えないと思つたらまさか委員長までも個性の被害にあつてるなんて……困つたなあ、と私は軽金属と化学繊維を組み合わせて赤ちゃん用の小型ベッドを自作し、その中に轟くんを寝かせる。これ元に戻つたら二重の意味で地獄だよね。クラスメイトに赤ちゃんのお世話されてるだなんて。

「……樫」

「はいなんでしよう」

「そのベッド、54個作れないか。学校の被害者全員分だ」

「54人も被害受けてるんですか!?!犯罪史に刻まれますよ!?!」

「間違いなく教科書には載るから安心しろ。3年後くらいからな」

「安心できませんっ!とにかくベッドについては了解しました。作るんで……えーくん悪いけど轟くん見てもらつてもいい?」

「おう、わかった!あ、相澤先生俺が飯田の面倒見ますよ!希械も頼んだぜ!ガツコのみんのを助けてやってくれよな!」

えーくんに促された私はとりあえずクラスのみんなの分のベッドを作ってから相澤先生について教室を出る。どうやらホントに被害者がそこかしこにいるみたいで、別クラスから赤ちゃんの泣き声がこだましてたり必死にあやす教師の声が聞こえてくる。これはひどい、何という地獄……。被害クラス行脚をしてベッドを手渡し、適当に音が鳴る玩具も渡して対処、これもヒーロー活動……？

回るたびに警察の人とか生徒たちから感謝されて、なんでこんなことになったんだろうと私の目は死んでいた。そしてヒーロースーツのゴーグルをかけた先生が電話をかけながら出ていってしまった。残ってるのはミッドナイト先生だけ……。え？どうしようもなくなったら強制的に眠らせる？な、なるほど無慈悲な……。私は教室に戻ろう……。

「ただいま〜」

「うえええん!!!」

「お邪魔しました〜〜」

「待つて希械ちゃんいかないで!」

防音ばつちりの私のクラスの扉を開いた瞬間、赤ちゃんたちの泣き声の大合唱が聞こえたのでぴしやりとドアを閉じて回れ右しようとしたら飛び出してきた三奈ちゃんを始めとした他数名により私はクラスの中に引きずり戻された。だって……。明らかに面倒そう、もとい大変そう、じゃなくて問題が起こってるのがね……。？

「さつきから皆泣き止まなくて……。あやしてるんだけど……」

「……ちよつとごめんね？よしよし」

三奈ちゃんが抱っこしてる百ちゃんを受け取ってあやしてみるけど、少し静かになったあとまたぐずりだしちゃった。うーん、何が原因なんだろう……。？赤ちゃんのお世話だなんてお母さんのお姉ちゃんのお子さんくらいしかやったことないしわかんないよ。はっ!? もしや……

「お腹減ってるのかな？赤ちゃんって3時間ごとにミルク飲まさないといけないっていうらしいし……」

「それだっ!」

「でもよお……流石にミルクなんてないぜ?」

「……でるかな?」

「でえへんよ!?希械ちゃん正気に戻って!」

「流石に冗談だけど……うーん、困った……あれ?皆乳菌生えてるんだ。離乳食で大丈夫かも。誰か、ランチラツシュ先生に電話!」

赤ちゃんのお世話だなんてやったことないし手探り状態なわけで、泣いて口を開けた瞬間に皆菌が生えそろっているのが分かった。多分これなら離乳食で大丈夫だと思っただけど……砂藤くんが食堂に連絡を入れるとランチラツシュ先生はすでに動き出していたらしく配膳ロボットが離乳食を届けてくれるらしい。よかつた〜。

「希械ちゃんが抱っこするとなんか静かになるね」

「そりやおめえオイラが考察するにあの豊かな母性がだほげえええっ!」

「死ね峰田」

「耳郎さんのシンプルな殺意!」

ぐるぐる巻きにしてなおも足りないらしい峰田くんのセクハラ発言に耐えかねたらしい響香ちゃんがぐずる上鳴くんをあやしつつも両耳のイヤホンジャックで峰田くんに制裁を与えた。それに髪の毛が逆立つほど驚いたらしいデクくん、あれ?爆豪くんは泣いてないんだ。意外とデクくんがお気に召したのかな?あと轟くんも静か。他の子は泣いちやってる、いやクラスメイトが赤ちゃんになるとかどんな奇跡体験を今してるんだろう私たち……。

「ハイオマチ!デリバリー!」

「待ってました!あ!涎掛けもある!」

「どうやって食べさせるん?」

「流石にベビーチェアはないからね……作ってもいいけど片付けもあるし……仕方ないから膝に抱いてあげるしかないよ」

「ウチこういうのやったことないんだけど……」

「経験ありそうな梅雨ちゃんが赤ちゃんになっちゃってるからね……」



「つーかこのクラスでそういう方面で頼りになるやつが赤ちゃんになつてるよな、樫以外」

「あはは、私が赤ちゃんになったらえーくん以外抱つてできないんじゃない？とりあえずご飯あげてみよっか」

デリバリーロボットが人数分の離乳食を運んできてくれたので、百ちゃんを三奈ちゃんに返してから、私は轟くんを抱き上げて膝に横に座る形にして片手を背もたれみたいな感じにして保持する。じーつとこつちを見る轟くんに涎掛けをつけてからスプーンでほんの少し離乳食をすくって口元に持つていくと。口元をスプーンでつん、とすると大きく口を開けてくれたのでゆっくりと口の中にスプーンを入れて離乳食を食べさせてあげる。むぐむぐ、と一生懸命に咀嚼する轟くん、他のみんなも私の見様見真似でやってみるとみんなやつぱりお腹減つてたのか泣いてたのが嘘みたいにご飯に夢中になった。うん、その

「かわいいね〜。クラスメイトの男の子に言ったらあれだけど」

「かつちゃんが覚えてませんように……」

「爆豪が知ったらクラス全員爆殺だな！」

「上鳴かわいいって思っちゃった……不覚……」

「尾白くん尻尾でスプーン掴もうとしてる〜！かわいい〜！」

「ヤオモモ食べるペースはやっ!?詰まらせないでね!?あー、でも普段から結構食べてるっっちゃ食べてるよね〜」

うん、その可愛いんだ、みんな。だってさ、赤ちゃんって無条件に可愛いでしょ？じゃあ今赤ちゃんになっちゃってる皆も無条件で可愛いよね……結局私たちはご飯タイムを終わらせてそこから30分ほど赤ちゃんの姿になった彼らに構っていたのだが、唐突に彼らは元の姿に戻った。ご丁寧な制服姿で。当然ながら荒れに荒れてしまふよね。

「デクてめえ何くつついとんじや死ね！殺したるから動くな！」

「うわわわごめんかつちゃんこれには深いわけが！」

「うるせえ！聞きたかねえ！」

「ケロ……お茶子ちゃん……お話聞かせてくれるかしら……？もし

かして私とっても迷惑をかけたような気がするの」

「朝から記憶がありませんわ……」

「耳郎っ!?ちよ、おれなんかしたか!?ぎゃあああっ!?許してくれえええー!」

「葉隠、さん?あのどうして俺は君の手を握ってたのか心当たりある?」

「うーん!秘密!」

「切島君!なんだかわからないが迷惑をかけたような気がする!済まなかった!」

「おう!特になんもなかったから気にすんなよ!」

「樫……俺はどうしてお前の膝の上にいるんだ?まさか……」

「そ、そ、想像してるようなことは何もなかったよ!?その……このニュース、みて?」

そして私たちはそれぞれ赤ちゃんだった人たちにネットニュースをスマートフォンで見せる。すると、彼らはその見出しを熟読し、内容を精査し、たつぷり1分ほどかけて内容を理解した。段々と彼らの顔に赤みがさしてそして……学校のそこかしこから聞こえる悲鳴と同調するように同じように大声で悲鳴を上げるのだった。私たちはそれをいたたまれない表情で見るしかない。唯一峰田くんだけは羨ましいと顔に書いてあるけど努めて無視する。

結果的にこの事件は学校全体で黒歴史となり、誰も話すことも触れることも話題にすることもなくなった。赤ちゃんだった人は暫くふさぎ込み、世話をした人は自分もそうなってたらと恐れおののき、結果として誰も幸せにならないし笑えないにもかかわらず比較的平和な事件として……本当に日本のヴィラン犯罪史に名を連ねることになってしまった。私は、全てをメモリから消去することにしてこのお話を締めくくりたいと思う。

せーの、イキュラス・キュオラ。

## 夏合宿編

### 48話

「あれえ!? A組赤点いるの!? 補習の人がいるの!? A組はB組よりずっとずっと優秀なはずなのにおかしかべっ!?」

「ごめんなく。あとお前も補習組だろ、人のこと言えない言えない」色々あつて林間合宿当日、荷物を持った私たちは雄英のバスストップに参上した。そこでB組の人たちと体育祭ぶりに一緒になったんだけどどうやら物間くんは私たちが相変わらず気にくわない様子で補習者弄りを展開しようとしてたみたいんだけど……拳藤さんにいつか見たような感じで首に思いつきり打撃を打ち込まれて失神し、バスの中に吸い込まれていった。

私たちはそれを無言でどうしていいか分からず見送り、何とも言えない空気のままB組と別れてバスの方に向かう。私は体の大きさが大きなので荷物も大きな傾向にあるんだけど……バスもバスだしちゃんと乗るよね! ボストンバッグ二つ……! 1週間分の着替えとかそういうの入れたら重くなっちゃったの。

「A組のバスはこっちだ、席順に並びたまえ!」

「いい天気でよかったね、轟くん!」

「そだな」

「あ、ごめんね飯田くん。私体の大きさに普通の席じゃだめなの。席順じゃないけど一番後ろに行かせてもらえないかな?」

「むっ!? そういうことなら当然そうしたほうがいい! みんな! 後ろを樫君に譲ってくれ!」

「別に好きなのところに隙に座ればいいんじゃないやね? 早い者勝ちですよ! 荷物積んだやつから乗り込め! あ! 後ろは座んなよ!」

「おー!!!」

上鳴くんの意見にみんな賛同して各々荷物を積み込んでバスの中に行く。私もそれにならつて手荷物だけをもってバスの中へ、天井が低いので腰をかがめたり頭を曲げたりして何とか一番後ろにたどり

着く。あー、やっと座れたよ。若干座席が余ってるみたいだから私が2席分占領しても大丈夫だよね！

相澤先生の目があるからか無駄な時間をできるだけ作らないようにささっとみんなが乗り込んで緩やかにバスが発車した。ユーチューブで曲を流したりとかしたらしいみんなの声が聞こえてくる。私は一番後ろなのでみんなの顔は見えないんだけど楽しそうに微笑ましい。まるで小学生の遠足のようだけど皆高校生初めてクラス皆でお泊りする機会なのだから、それはそれは楽しみだったのだろう。ちなみに私の隣、まあ2座席ほど隣は爆豪くん。

一緒の座席でやかましくつるんでられっかとのことだけど、本当に鬱陶しいらしくバスが出発した瞬間から腕を組んで目を閉じて眠るスタンスに入っちゃった。まあ、私も眠るんだけど！というのも実は昨日まで夏休みなのをいいことにI・アイランドの件で実用化に成功してしまったチームについてI・アイランドの教授たちと夜遅くまでテレビ通話で知見を深めてたので眠くてしょうがないんだ。

あと！メリッサさんとも超圧縮技術の技術交流からテクくん用のフルガントレットを改良するためのメール通話、その他やり取り……恐れ多いことにシールド博士も一緒に！なので私は毎日寝不足だけど充実した日々を過ごせてるの……！フルガントレットの強度改良はまだ時間がかかりそうだけど応用技術も開発できた！テクくんへ披露するのが楽しみな〜。

そんなことを考えつつも眠気が限界になった私はバスのカーテンを閉めて窓にもたれかかるようにして目を閉じる。皆のワイワイした喧噪を子守歌代わりにして、私の意識はまどろみの中に消えていくのだった。

「……いちゃん！希械ちゃん！」

「んう……んん……？お茶子ちゃん？どうしたの？」

私の聴覚センサーがお茶子ちゃんの声を捕らえたので眠りから覚めるとお茶子ちゃんが前の席から私を呼んでいた。何という輝く笑顔であろうか、とてもうららかに可愛らしい。わざわざ眠っている私

を起こす程のことなんだから何か大事な用事があるに違いない、なんだろう？

「今皆でしりとりしてるんよ！次希械ちゃんて『ら』だよ！」

「……しりとり？何で……？私起こす必要あった……？」

「あああごめん樫さん！事情があつて！実はね……」

気持ちよく寝てたところを起こされたことに文句を言うつもりはないけどしりとりのためだけに起こされたのかとちよつとしゅんと悲しくなってしまった私に慌てたデクくんが説明してくれたところによると、何でも青山くんがバスの中で鏡を見続けたせいで乗り物酔いを起こしてしまっているのでみんなで気を紛らわす何かをしようとなり、それでしりとりとなったのだとか。なるほど、それで私より先に起こされたであろう爆豪くんの睚が吊り上がって怒ってるのね。ふーん……車酔いか荷物の中に……ん、あつた。

「百ちゃん！ちよつとアイマスク作つて青山くんに渡して欲しいの〜！」

「ええ、構いませんわ。しかしどうして……」

「青山くん、これ飲んで。酔い止めね。あとこれ付けて、静かな森の環境音と焚火の音が流れてるから。あとはゆつくり休んで、ね？はい、スポーツドリンク」

「……め、メルシイ☆レディー……」

私は酔い止めとスポーツドリンク、それと個性で作ったヘッドフォンを彼に渡す。補助席を使ってる轟くんに私の隣でいいならきいていよ、と変わつてもらつて青山くんが足を延ばして寝られるように場所を確保する。百ちゃんから回されたアイマスクを付けて、ヘッドフォンをして酔い止めを飲んで寝転ぶ青山くん。多分だけど、気を紛らわそうと騒いだせいで悪化した感じする。善意が空回りした感じがするな。でも、それはそれで……

「みんな、体調悪い人の周りで騒いじゃいけません。静かに休ませてあげて欲しいの。風邪の時と一緒にだよ？こういうのは変に意識するよりもちゃんと休んだ方がいいと思うな。というか誰も酔い止め持つてきてないの……？」

「「「ごめんなさい……………」」」

「私じゃなくて青山くんが復活したらちゃんごめんなさいするんだよ？でも、みんなの気持ちは嬉しいはずだからね。皆優しく素敵だなく」

「…………も、勿論だよ。みんなの気持ちは嬉しくてたまらなかつたさ☆今は羽根を畳んでバスを降りる頃にはキラめいてる僕に戻るから待っていてくれたまえ☆」

どうして気を紛らわすのにしりとりに発展したかはよくわかんないけど、皆の優しさは青山くんが届いてはいたんだ。ちよつと方向性を間違えちゃっただけで。だから青山くんも律儀に文句も言わず付き合つたし、みんなも爆豪くんすら青山くんを心配してしりとりに参加した。うーん、いいクラスだなあ、私A組大好きだ！

「すげえな、樫。さつと対処しちまつた」

「そんなことないよ？皆と一緒に、どうにかしたかつたけど手段だけ違つたんだよ。酔い止めが無かつたら私もあわててたかもね」

「そうか」

「んんん目が覚めちゃつた！何しようかな。轟くん何かテーブルゲームする!?!」

「…………将棋しかできねえ」

「いいよ！将棋！やろつか！」

私はI・アイランドの技術を応用して作つた感触はないけどつまんだりして操作できるホログラムを投影して将棋盤を作り出す。ホログラムの王将を不思議そうに持って、碁盤に置くとちゃんとパチンと駒を置いた音がする。ふふふ、こういうところをこだわつてこそその樫さんなのです！さあ、行くよ轟くん！勝負だ！

「ふ、ふぐうう…………轟くん強い…………！」

「いや、樫も相当だぞ…………！まだ分からねえ…………！」

轟くんは結構将棋をやりこんでいるらしくて普通に強い、私の穴熊を振り飛車で崩してくる…………！物凄い接戦だ！そして私たちはお互



キヤッツの一人、金髪のピクシーボブに肉球が付いたグローブで顔面を握られてるデクくんをよそに茶髪のマンダレイが山の麓を指さして説明するには、合宿所はあそこらしい。早ければ12時半くらいに着く……あれれ？何かおかしくない？

「悪いね諸君。合宿はもう始まつてる」

「やべえー！バスに戻れ！」

相澤先生がそう言った瞬間にピクシーボブが地面に手を突くと土石流が発生して私たちを飲み込もうとする。私が咄嗟に個性を発動して壁を生成しようとする……個性が出ない!?あれっ!?まさか……ああああ!やっぱり!相澤先生が私の個性を消してる!?そんなっ!?

「相澤先生く〜!恨みますからねく〜!!」

「私有地につき個性は自由に使っていていいからね!目指せ3時間以内に合宿所到達!頑張つてよ〜!何せここは魔獣の森だからね!」

なすすべもなく土石流に飲み込まれるクラスメイト全員。これがピクシーボブの個性……!土を操ることができる超強個性だ!どうやら空気を含ませて柔らかい状態にした土で私たちを包み込んで優しくおろしてくれたみたいで、私たちは怪我をすることなく地面につきことができた。そして、魔獣の森……?なにそのゲームによく出てきそうな名前は……?あ、個性使える。相澤先生、私が強引にどうかしようとするのを予期して消したね?凄いなあプロ……

「ドラクエめいた名前の森だな」

「やべえ漏れる!オイラは耐え抜いたぞ……!」

「魔獣つつつたつてなになが……」

「……………」

「マジユウだー……!!」

峰田くんが物陰に走ると、その物陰から土くれでできたような動物……正しく魔獣と言わんばかりの造形のモンスターが現れて、上鳴くと瀬呂くんが叫んだ。わ、私よりおっきい……!?サイズにしたらゾウとおんなじくらいだよ!?ここで即座に動いたのは動物を声で操ることができる口田くん。



「静まりなさい獣よ、下がるのです」

「効かないっ!？」

「ビームサーベル、形成開始<sup>デ</sup>!

口田君の個性が通用しない……ということとは生き物じゃない! 攻撃して大丈夫な奴だ! 私はすぐさま足に力を入れて踏ん張り、魔獣に向かって突撃する。そしてそのまま膝頭から出てきた丸い柄を片手で引き抜いて振るう。柄から伸びた光の剣が魔獣を一刀両断する。そして、私とほぼ同時にデクさんと飯田くん、爆豪くん、轟くんの攻撃が魔獣に当たって魔獣は見るも無残な姿に代わり、土くれになってしまった。

実践投入成功、かな。私は一部真つ赤なマグマになってる魔獣の残骸を見て、ビームサーベルのビームを仕舞う。荷電粒子を斥力フィールドでまとめたビームサーベルの威力は御覧の通り。火力で言えば私のどの装備よりも高い。一撃で全部ぶち壊せるまさに最強ウエポン! 私は太ももにサーベルを仕舞うラックを作つてそこにサーベルを仕舞つておく。また使うだろうけど。

「みんな! きつき相澤先生が言った通りだ! もう合宿始まつてる! これが最初のプログラム!」

「そういうことか! 緑谷君の言う通りだ! ここから合宿所まで全員で進むぞ!」

デクさんと飯田くんの号令に威勢よく返すクラスメイトたち。私も戦闘準備を整える為に個性をフル活用してベルトに小さな小型ボックスが10個ほどついているものを生み出して腰に巻く。そしてそのあと、木を踏みしめる音を立ててやってくる魔獣たちを油断なく見据えるのだった。

## 49話

「左! 3頭来るよ!」

「空からも!」

「空は私がやるよ。ビームライフル、形成開始<sup>デイ</sup>」

「陸の方は僕らが! 飯田くん! 轟くん!」

「おお」

「了解した!」

地面にイヤホンジャックを指して周りの魔獣が何頭いるかを確認した響香ちゃんが索敵の結果を教えてくれる。空を見ていた梅雨ちゃんの言葉通り翼を持った如何とも形容しがたい形をした魔獣が飛びながらこちらにやってくる。右腕から変形させた新兵器、ビームライフルを構えて、撃つ。独特な射撃音と一瞬だけピンクの閃光が駆け抜けて魔獣を撃ち抜き、撃墜した。うん、快調だね!

「何それ!?! SF!?!」

「凄いでしょ!! ビーム兵器だよ! 一撃必殺!」

「マジかよ樗それ男のロマンじゃん! 俺にも貸してくれよ!」

「……私が接続してないと使えないの……」

空を飛んでいる魔獣を次々ピンクのビームで撃ち落とす。残念ながらビームサーベルもビームライフルも手のコネクタで私と接続してないとうんともすんとも言わない金属の塊になるので誰かに貸すことはできないの。ごめんね瀬呂くん、私はビームライフルの下部についてるエネルギーパックを地面に落として、腰の小型ボックスを手取る。小型ボックスは一瞬で膨張するように姿を変えてエネルギーパックに変形した。超圧縮技術のたまものだよ。私に変形するよりずっと速い。

リロードを終えたビームライフルを照射モードにして横薙ぎに払い3頭の魔獣を真つ二つにする。最大発射回数は単射で15発、照射で3発、このエネルギーパックだとあと10発撃てるね。陸の魔獣はえーくんを始めとした近距離系の人たちが対処してくれる。アツパーで魔獣をぶっ飛ばすえーくん、爆破で粉微塵にする爆豪くん、氷

結で行動不能にする轟くんにはパンチで砕くデクくんのキルスコアが結構高いかも。

「希械さん！出来ればいろいろ詳しくお伺いいたしたいですわ！私にも作成できれば出来る幅が広がりますもの！」

「理論を説明するのはいいんだけど、サポートアイテムの免許取らないとこれ動かしちゃダメな奴だよ？」

「そうなんですの！残念！ですわっ！」

百ちゃんが私のビーム兵器に興味を示したらしく話を聞きたいと言ってくれるので後で理論から組み立てまでスライドショーで説明しようかな。残念ながら百ちゃんが動かすにはもう何ステップか準備がいると思うんだけど……大砲で魔獣を攻撃する百ちゃんの隣に立ってボックスの一つを解放、連装ロケットランチャーに変形させて目の前の魔獣を一掃する。

サポートアイテムの定義は色々あるんだけど、私のこれ、というか作ってる火器の大半はどうやら免許がいる奴らしい。自分で使うのはいいんだけど他人に教えたり他人が模倣したもので事故つたら私もやばいのです。あとビーム兵器は免許ないと動かしちゃダメな奴だってシールド博士が教えてくれた。作成した私みたいに分かってないと重大な事故につながる恐れがあるからだ。

「うえ〜〜い」

「やばい上鳴がアホになった！」

「陣形組みなおせ！直接戦えねえ奴は内にはいれ！」

「対空は私だけでいいよ！他は地上に集中して！」

「撃ち漏らしたら爆殺すぞ樫あ！」

「任せるよ！樫さん！」

許容量の関係で個性が使えなくなってくる人たちが増えてきた。最初にダウンしたのは放電し続けていた上鳴くん。サムズアップの両手を振り回して隙だらけになってしまふ。即座にフォローに入つたえーくんが魔獣の攻撃を受け止めカウンターで粉碎する。キリがないな魔獣！どれだけいる……ピクシーボブの個性だから無限かなるほど！最悪う！

空から迫る魔獣は私がビームで撃墜する。土を熱と圧力でガラス質に変えてしまうほどの熱量を持つビームのおかげで全部一撃だ。空に撃たないと森は燃えてしまうので地上の敵は超圧縮技術で封じ込めた腰ベルトのボックスたちで対処する。私は戦闘中に体を変形させて武器を作るのがデフォだったけど、結構集中力があるから誰かと一緒にやないと実は難しいの！特にオールマイイト先生みたいな滅茶苦茶強い人相手だとほぼ無理だね！

でも、予め武器を作っておくことはできてもストックするのは無理だった。やれて背負うとかそういう形で両手合わせて4つが限度。でも、超圧縮技術を覚えた今は違う。予めいくつもの武装を作っておくことができる。超圧縮技術は優秀で、私が通常使用する普通の人にとっては巨大な兵器を指先サイズの小さな小さなボックスに収めてしまえる。これで私の戦闘に幅がかなり出てきた！どのボックスがどの兵器かを記憶するという新しい問題が出来たけどそれは私、メモリがあれば忘れない！ありがとう個性！

「うわわわ！近づきすぎた！」

「透ちゃん！大丈夫!？」

「わ！希械ちゃんさんきゅー！あ！ライトセーバーだ！」

「ビームサーベルだよ……プラズマじゃなくてビームなの……」

「……どう違うの？」

「3時間くらいかかるけど聞く？」

「後で3分でわかるように教えて！」

「3分!？」

魔獣相手に囷を務めてた透ちゃんが距離を誤って魔獣に潰されそうになってしまったので咄嗟にビームサーベルを抜いて魔獣を切り捨てて助け出す。違うの透ちゃん、ライトセーバーはプラズマの光剣であってビームサーベルは粒子を加速させたビームなの……違いを説明すると長くなるんだけどカップラーメン感覚で教えるのは……いや、プルスウルトラだ。これくらいできなくてヒーローには成れないと思う！

「きりがねえ！」

「でも近づけてるよ！あと少し！」

「つーか3時間ってウソだろ！もう夕方だぞ！」

「直線距離で3時間って意味かな……？戦闘しっぱなしでそんな速くは無理だと思う……」

もう無理だ、うん。3時間？いやいや8時間近くかかってるんですけど……。最後に残った魔獣をビームサーベルで消し飛ばしてため息をつく。とっぷり茜色の夕日が私たちを照らしていた。みんな個性を使いすぎてヘロヘロなうえに全身の疲労で言葉が少なくなっている。かくいう私もくうくうお腹がなっついて、エネルギーが足りないうち無理やり個性を捻りだしている状態。ビームライフルもとつくに弾切れして残弾を補充する暇もなかった。ふええん、お腹空いたよう……。美味しいものが食べたい……。

「ねこねこねこ……とりあえずお昼は抜くまでもなかったねえ」

「なにが……3時間ですか……！」

「悪いね、それ私たちって意味なの」

「実力差自慢かよ……やらしいな」

ああ、やつと着いた……。みんなドロドロのボロボロ状態でようやく相澤先生やプツシーキヤッツのいる合宿所にたどり着くことができた。なお上鳴くんはアホ面から戻らず、峰田くんの頭皮は限界を迎えて流血し、砂藤くんは半分寝ている。そして脂質を使い果たした百ちゃんを私がおんぶしている。乗り心地悪くてごめんね。

「百ちゃん、大丈夫？着いたよ」

「ええ、申し訳ありませんわ……。ご迷惑をおかけしました……」

「ゼーんぜん！もうちよつと待っててね」

「でも正直もつとかかかると思ってた。私の土魔獣を簡単に攻略してくれちゃってもう……。3年後が楽しみ！唾つけとこ……！」

ピクシーボブが指し示したのは私を含むえーくん、デクくん、爆豪くん、飯田くん、轟くんの6人、ちよつと離れたところに立ってた私に被害はいかなかったけど物理的に唾をつけられてる5人はちよつと

気の毒かも……。え？ピクシーボブは焦ってる……。適齡期的な意味で。ヒーローも婚活に苦労するんだね……。結婚かあ、私はどんな人とするのかな。いやむしろこんな大きい女（半分メカ）を貰ってくれる人がいるのかしら……。悲しくなってきたので考えるのを辞めよう……。

「適齡期と言えば」

「と言えば？」

「もがっ!?!いやその、ずっと気になっていたんですがその子はどちらのお子さんで!?!」

「あー、いや違うの。この子は私の従妹の子ども。ほら冼汰! 1週間一緒なんだから挨拶しなさい」

なんてひどい話のつなげ方だよデクくん。ピクシーボブのネコハンドに顔面を掴まれた状態のデクくんがさつきからマンダレイと一緒にいた男の子、幼稚園か保育園に通ってくるくらい幼い男の子を指さしてどっちかのお子さんですかと尋ねる。マンダレイは手を振って否定し、自分の従妹の子供で事情があって預かっていると説明してくれた。あんまり私たちにいい印象は抱いてないみたいだけど……

「あ、僕は雄英高校ヒーロー科の緑谷出久、よろしくね……つつつ

……きゆう……」

!?!?!?!?!?!

「いやあああつ!?!デクくん!?!しっかりして!?!」

「いってーわ、あれ……。おい緑谷大丈夫か!?!」

「何してるの冼汰!?!」

「ヒーローになりたいなんて連中とつるむ気はねえよ」

冼汰くんに握手しようとする手を差し出したデクくんに向けて、容赦なく突き刺さる小さな拳。普段というか戦闘訓練で痛いのは慣れっこだと思っけど……。その、男の子、しか分からない痛みだよねきつと。どこがどうなつたかはあまりにも悲惨すぎてちよつと考えられない。泡を噴いて倒れ伏したデクくんを慌てて抱き起す。えーくんが酷く同情的な顔でデクくんの顔をペしペしと気付けしてくれてる。

冼汰くんは、私たちのことがよっぽど気にくわないみたいでマンダレイの注意を無視して合宿所の中に入っていった。それよりもデクくんだよ！思いつきり入ったから凄いいんだよね!?!想像できない

けど！えーくんも女子には分からねえよ……って言ってるからね……男の子は大変だなあ……。

「茶番はいい、さっさとバスから荷物を下ろして部屋に置いてこい。そのあと食堂で夕食、のちそのまま就寝だ。明日の起床時間は午前5時30分！」

「茶番で重症者出てるんですけど……」

「それに関しては同情しよう」

相澤先生も同情する一撃だったんだ……洗汰くん、おそるべし。次やったら謝るまで無言で見つめてやる。

「いただきまーす！」

「お腹減ったよう……自分で料理しろって言われなくてよかった」

「そしたらアタシ希械ちゃんに作ってもらおうかな」

「いいけど、三奈ちゃんのご飯も食べてみたいな」

もつしやもつしや、と我ながら少しお行儀悪いかもしれないけど個性の使い過ぎでエネルギーがデッドゾーンに突入してる私は卓上にあるおかずと奇麗につやつやと輝いてる白米を口の中に詰め込んで咀嚼もそこそこに嚥下していく。今なら多分大食いの自己記録を達成できそうな気がするよ……にしてもおいしいなあ。お腹が減りすぎてるせいもあるかもしれないけどプツシーキャッツのお二人お料理とっても上手だ！時間あったらレシピ聞きたい！

すさまじい速度で料理を消費していく私たちに怒ることなく次々補充してくれるお二人に感謝しつつ私も対抗してご飯を食べる。明日からも大変そうだし食いだめをしておかないと……。

「浮く……んだね」

「ういてるね！」

「……ほんまやねえ」

「ケロケロ」

「みんなしてどこを見てるの……別に大きくてもいいことないよ？」

下は見にくいし……時々邪魔だし……」

「ええ、そうですわ」

「これは私のだよ」

「いやちがうよ？私のだよ？三奈ちゃんは自分のがあるでしょ？」  
かぽーんと、鹿威しの音がする露天風呂。露天風呂だよ？凄いな合宿所、至れり尽くせりだ。そういえばこのクラスみんな、正確には三奈ちゃん以外と一緒に風呂に入るのは初めてだなく。あ、手足はちゃんと防水加工しております。漏電したらセルフ電気風呂になっちゃう。普通の人が入ったら死んじゃうくらい高電圧だけど。じーっと私の胸を見つめてくる皆。そっかー、お湯に浮いてるのが珍しいんだね。大きくても別にいい事無いんだけど……。

髪を纏めて、頭にタオルを乗せた私、温泉の深さの関係上仰向けに寝転ぶみたいな感じで温泉を堪能中であります。個性の関係上肩こりとは無縁だけど邪魔だなあって思うことは多々あるよ。特に下が見えないせいで何度か峰田くんを気づかず踏みつぶしちゃったことあるし……あ、でも私のぱんつ覗きに来たからお相手なのか、えーくんから何度もお話されてるのに懲りないよね峰田くんも。

「壁とは！超えるためにある！プルスウルトラああああ!!!」

「……もしかして峰田くん、覗きにきてる？」

「げ、まじ!?あいつさあ……」

「こりないねー峰田。切島に殴ってもらおうか？」

「えー！峰田くんに見られるのはなんかヤダ！」

「普通に男子に見られるのは嫌なんやけど……」

「ケロ、流石に相澤先生に怒ってもらった方がいいと思うわ」

「とりあえず全力で迎撃いたしましょう！」

「私、撃ち落とすね」

体を起こして腕を変形、怒りの6連ガトリングが顔をのぞかせる。圧搾空気なのは慈悲だと思つてほしい、峰田くん、覚悟！つてあれ!! 洗汰くん！洗汰くんが柵を乗り越えてこちら側にやってこようとしました峰田くんを柵の合間から顔を出して落としてくれる。クソガキイイ！という峰田くんの叫びが響くけど、自業自得だよ。



「ありがとう、洗汰くん」

「やっぱり峰田ちゃんサイテーね」

「中に水はいっちゃった……後で錆び止めしないと……」

「あついけない洗汰くんっ!?!」

覗きを防いでくれた洗汰くんにお礼を言うと、彼は反射的に私たちの方を見て、驚いてしまったのか男湯側に落ちてしまった。立ち上がって柵まで走っていく。ヤバイよ、下石畳だよ!?!頭を打ったり……それでなくても骨折とかしちゃう!

「おい男子……!洗汰くん無事……っ!?!」

「大丈夫だ!緑谷が受け止めた!おいマンダレイのどこ行くぞ!」

「うん!行こう切島くん!」

えーくとテクくんからの返事を受けて、私たちはほっと胸をなでおろしたのだった。峰田くんには後で三奈ちゃんが考えたお仕置きを実行しようかな……でも効果あるのかな?ひたすら筋トレ中のパントー丁ボデイビルダーの動画を見せ続けるのって。

## 50話

「おはよう、みんな起きれる?」

「むにや……希械ちゃんおあよう」

「おはようございますわ……」

「ケロ、まだ眠いわ……」

「希械ちゃんすごいね……眠くないん?」

「すび〜」

「んう〜……」

「あはは、私の体内時計は正確だからね。ほら響香ちゃんに透ちやん、朝だよ……透ちやんなんで裸なの!？」

「私、寝るときは裸派なの〜」

そうなんだ……じゃなくて!あの魔獣の森トレッキング(不本意)があつた合宿初日から一夜明け、集合時間少し前に目を覚ました私がみんなを起こす。私は起きようと思った時間にセルフ脳内アラーム&強制起床をすることができるのでみんなの目覚ましをやるよーと昨日のうちにお話してある。個性で寝ぐせばさあな髪を直してみんなを起こすと皆昨日のことで滅茶苦茶疲れてるのか何とも寝起きが悪い。

うゆく希械ちゃん寝ぐせ直して〜と甘えてくる三奈ちゃんの寝癖を櫛で治して、顔を洗わせたりなんだりしてるとすっかり集合時間間近だ。わーい朝ごはん……え?お預け?特訓が先?しよんなあ……動くためにジャージに身を包んだ私たちを出迎えてくれるのはいつも通りの相澤先生がいた。いつも眠そうなのに早起きなんだねえ〜。

「本日から本格的に強化合宿を始める。今合宿の目的は全員の強化及び、プロヒーロー免許の仮免許の取得だ」

強化、なら私たちは毎日励んでいるわけだけどどうやらそれとは別のお話みたいだ。筋トレや訓練、戦闘に救助の経験じゃないものかもしれない。というのも不本意ながら私たちはヴィランに襲撃されて、体育祭を勝ち抜いて、さらにはI・アイランドでヴィランから島を取り返したというなんじゃそりやという感じの濃ゆーい3か月を過ご

しているのだ。こんなこと言いたかないけどそこら辺のヒーロー科では絶対できない経験だ。

「で、だ。入学から3か月、君らがどれだけ成長しているか、だが……爆豪、これ投げろ」

「こいつは……」

「お！そりゃ個性把握テストの時の！確かになあ！1キロくらい行くんじゃないか？」

渡されたのは個性把握テストで使われたボールだ。それを受け取った爆豪くんがにやりと笑い……くたばれ、というまた何とも反応しがたい気合の掛け声とともに爆破でボールを打ち飛ばした。右目で観測すると、あれ？思ったよりも飛んでない？709mと少し、入学した時は705mだったから、あれだけ濃い経験をした割にはあまり伸びてないような気がする。

「とまあ、君たちは確実に成長していることは間違いないが……それはあくまで経験に技術、多少の体力向上くらいだ。見ての通り個性そのものに関しては何も伸びていないのが現実」

な、なるほど……確かに私の個性に関してもそうだ。例えば私の個性の上限と言えばオーバーヒート、熱耐性そのものが私の許容上限、熱圧縮だったり強制放熱だったり冷却ジェルだったりとあの手この手を尽くして熱への対策を積んできたものの、許容できる熱の上限が上がったわけじゃない。あくまで放熱効率が上がった、もしくは熱を捨てる手段が増えただけなんだ。

「この合宿で君らの個性を伸ばす！つまりはプルスウルトラ……限界突破だ！」

「じゃあ、轟くんよろしくね？私のことは気にしないでいいから」

「いや……普通に気にする」

「大丈夫だよ、私頑丈だから！」

個性の限界突破……私の場合弱点を埋める方向になったみたい。そもそも私の個性を伸ばそうと思っただけならやることはお勉強と実践なんだけど、既にビーム兵器まで実用化しているので攻撃力その他に関し

ては過剰もいい所、なので許容できる熱量をあげる特訓をすることになりました。

それで、その特訓をしてくれる相手は轟くん、彼は個性を交互に使ってお風呂の温度を一定に保つ特訓をするみたい。彼はアクセル全開状態なら両方を同時に使えるんだけど繊細なコントロールをするのがまだ無理なので両方を使いながらコントロールを目指すって感じかな。なので私は彼の近くで個性を使い続けて氷結と炎熱を交互に食らって温度に対する耐性をあげよう！っていうわけだね！

「いつでもどーぞ〜」

「おお」

個性で椅子を作って座り、ついでに今一番作るときのコストが高いゴリアテを含めたタイタンシリーズやビーム兵器などをメカアームの先で作ったり仕舞ったりして私は個性を使い続ける。うぐうぐなんもやってないとすぐ熱こも……いやあつう!? 轟くんの炎やっぱりエンデヴアーの息子なだけあって滅茶苦茶温度高いよ! あつっ! 生身が焦げそう! ちべたっ!? 今度は氷漬けだ!

「ゆ、樫……? 大丈夫か?」

「だ、大丈夫だよ今の所! あ、いけないオーバーヒートした……轟くんは私氣にしてたらダメだよ! 直撃してもへーきへーき」

「……心臓が悪い」

冷却ジェルも放熱も全くしないせいで一瞬で許容量を超えてオーバーヒートする私、個性は使えないけど熱耐性をあげるわけだからあんまり関係ないね。轟くんはどこどころ焦げた私を心配してくれるけど案外無傷だよ? え? もうちよつと離れる? 嫌です特訓なので。この夏の熱気がさらに私の中に熱を蓄積させていく……。

暫く冷たいとあつついの地獄のハーモニーを甘んじて堪能していると、えーくんが尾白くんと一緒に個性伸ばしをしているのが目に入った、氷越しに。尾白くんは割と必死なんだけどえーくんの方は何とも余裕そうで不完全燃焼って感じがするね。

「あー、尾白。すまねえけどもつと強く打ち込めねえか? まだ俺の方余裕あるわ」

「やっぱそうだよな。結構本気なんだけど……具体的にどのくらい？」

「そうだなー……希械ー！わりいけどちよつといいかー！」

「なに〜!？」

「お」

えーくんと呼ばれたので氷漬けの状態から氷をバリバリと割って立ち上がり、メキヤメキヤと音を立てて体の自由を取り戻してから二人の元へ向かう。轟くん氷結の中にいた私が急に動き出したことについてそう驚いたみたいだけど何度もやってるじゃん。うーん、氷漬けのおかげでオーバーヒートからは脱せたかな？オーバーヒートからの強制冷却を繰り返してるから大分酷使されたって感じる！

「いつもやってるみたいに殴ってくんね？思いつきり」

「りようか〜い。いくよ？ていつ!!!」

「ふんぬっ!!!」

ゴガキヤア!!!とすさまじい音がして硬化したえーくんに振り下ろされる私のパンチが彼の足元を陥没させる。火花を散らして私の拳とえーくんの硬化した体がぶつかり合い、えーくんが耐えて私は拳を引いた。唾然とした顔でこつちを向く尾白くんにえーくんと二人で声をかける

「このくらい」

「できないよ!？」

「まあ、そうだよなあ。相澤先生に相談すつか。あ、でも尾白は俺殴ると個性伸びるんだよな？だったら変えるのやめた方がいいかあ？」

「ならば、我ーズブートキャンプへ来い……！切島、貴様は我が揉んでやろう。尾白！貴様もだ！尻尾で筋トレ！筋繊維を千切り飛ばせ！」

「は、はいー！」

「マジっすか！虎さん！ありがとうございますー！」

如何せんえーくんは硬い、硬すぎる。何せ私の全力パンチをこうも耐えるのだ。尾白くんは異形型であって増強型じゃない、筋トレを繰り返せばえーくんばりのパワーを出せる可能性があるけどえーくん

がこれだけのパワーを誇るのはガッチガチに体が硬いので自分に帰ってくる反動をすべて無視して力を籠めることが出来るからだ。普通の人体でえーくんのパワーを再現したらデクくんがそうなたちやうみみたいに反動で骨が折れるかもしれない。

「デクくん、尾白くん！あとB組の人たちも！これ期末で先生たちが使った超圧縮重りのリストバンドだよ！折角だし使ってみて！重さは一つ10キロね！」

「ほおう、いいもの出すじゃないか樫……！全員それをつけてもう一回！」

「「イエッサー!!!」」

増強系で筋トレと言えば重りでしょ？と私が出したリストバンドをつけてブーツキャンプを再開する増強組とプツシーキャッツの虎さんに連続で打撃を打ち込まれるえーくんを置いて私は特訓を続ける轟くんの元に戻る。もういいのか、という轟くんに大丈夫、と返すと彼は短くそうかと言って、また炎熱と氷結を繰り返していく。熱い、冷たい、熱い、冷たい……これ私じゃなかったら死んでるよね、今更だけど。

「世話を焼くのは昨日までって言ったね!？」

「己が食うものは己が作れ！カレー！」

「「「「「イエッサー……」」」」」

午後4時、一旦特訓を中断した私たちは飯盒炊飯をするという実在林間合宿らしいイベントを体験することになった。料理といえば私、私といえば料理。つまりここは私の独壇場！いや違うか。皆が楽しく料理するのが大事だよね。私も適当に大雑把に頑張ろうかな。ニコニコしながら野菜に皮むきを進めていると

「ねー、希械ちゃん。私希械ちゃんの本気カレー食べたいな」

「いいけど……材料が……」

「カレーつつつたら希械のカレーうまいよな芦戸！分かるぜ！」

「え、なに樫のカレーそんなうまいの？」

「そーいや樫の弁当のおかずどれもうめーもんな！そう考えると俺

も食ってみてーな」

三奈ちゃんの発言に端を発してクラスのみんなが調理をしながら私のカレーの話に花を咲かせている。うーん、別に私のカレーは特に変わったところはないんだけど……えーくんも三奈ちゃんも確かに招待してカレーを振舞ったことはあるし、二人は味も知っている。そうならば私も作ってあげないとダメかなあ……でも聞いてみないと……。

「すみませんマンドレイさん、材料ってこれ以外にもあったりします？あとスパイスも……」

「ええ、あるけど……あら、レシピがあるの？じゃあ台所から好きなもの取ってきて、作っていいわよ。か・わ・り・に……私たちにも食べさせて頂戴な」

「え、はい！私の料理でよければ！」

許可が出たので合宿所の台所に駆け込んで必要な材料を取ってくる。えーつと、牛も肉のブロックに、赤ワイン、リングゴ、はちみつ、ヨーグルトにチョコレート、コーヒー、あとパウダースパイイス！ローリエも！ルーには頼らないのが樫ちゃん式です！むんっ！頑張るぞー！ゴム手袋嵌めなきや。

「あ、戻ってきた。って何それ!？」

「え？電気式圧力鍋だけ……時間がないし……」

時短のために個性で作り出した文明の利器と私が調理を開始する。ゴロゴロと大きくカットした牛も肉にすりおろしにんと生姜を塗りたくってから焼き目がつくまで焼いて、そのまま赤ワインと一緒に圧力鍋に入れて煮込む。灰汁を取ってから圧力鍋の蓋を閉めて加圧開始。同時並行でIHヒーターを作り出してフライパンでみじん切りにした玉ねぎをバターであめ色になるまで炒め、パウダースパイイスと一緒にカレーペーストを作っていく。そのまま鍋にジャガイモ、ニンジン、マッシュルームを入れて煮込んでおく。

「はっやどうなってるん……?？」

「クソがこんくらい俺もできるわ！」

「かつちゃん張り合うところ違うんじゃないかな……」

それで、湯剥きしたトマトを角切りにして野菜が入っている鍋の中に入れる。コクが出て美味しいの！トマト缶でもいいんだけど、折角生のいい野菜あるし！加压時間は30分でいいかな。その間にご飯を炊いておこう。あ、やってくれている？ありがと〜！カレーペーストを別皿に移して今は待ちの時間！

「希械ちゃん慣れとるね。ずっと家でもやってるん？私が泊まらせてもらった時とかもそうやったし」

「そうだよ。私お料理大好きなの。本当だったら前日にブイヨン作ってそれでカレー作るんだけど……流石に昨日にタイムトラベルはできないかなあ」

「何だろ、もうすでにうまそうっていうのが分かる」

「市販のルー使っていない時点でなんかやべえもん作り出したって感じするよな」

「ケロ、お茶子ちゃんお泊りしたのね。羨ましいわ」

「ふふ、梅雨ちゃんも来る？みんなも来たければ来ていいよ」

「じゃあ是非オイラが……」

「峰田はダメだろ。考えろよ」

瀬呂くんに真顔で突っ込まれた峰田くんがなんでだよと言っていきるけど仕方ないと思います。私は加压が終わった圧力鍋からトトロト口になったお肉を野菜の鍋に汁ごと投入して、そこにカレーペーストと隠し味のリンゴやはちみつ、チョコにコーヒーを少しづつ入れて、ウスターソースで味の調整をする。まあこんな感じかなあ。あとは味がなじむまで15分煮詰めれば完成！私特性カレー！

ぐるりと寸胴一杯にあるカレーをかき混ぜて、小皿に移して味見。うん、これで大丈夫かな。じゃ、マンダレイたちプツシーキャッツの分のご飯によそって……うーん、つやつやのご飯にカレーってどうしてこんなに食欲をそそるんだろう！？我ながら美味しくできたぞ〜。

「プツシーキャッツの皆さんと相澤先生、ブラドキング先生、良かったらどうぞ」

「うわー！すごい美味しそうにやん！」

「やるねー、想定以上のものが出てきた」



「感謝する……」

「あちしにも!?ありがとう〜!」

「俺の分もあるのか! いい子じゃないかイレイザー!」

「……ま、そうかもな」

そうこうしてうちにみんなのカレーも完成したみたい。鍋敷きに敷かれたカレーは私からしたらどれも美味しそうだなあ。でも、みんなの視線は私が作ったカレーに注がれてる。流星に全員分を大盛りにする量はないから、小盛りで許してね。と配膳を済ませてみんなの手を合わせて頂きます!

「うーん! やっぱり希械ちゃんのカレー美味しい〜!」

「ええ、美味しいですわ……!」

「お肉がトロトロや……!」

「えへへ、ありがとみんな」

どうやらみんなのお口にあったようで、皆が美味しいと言ってくれる。私はそれに嬉しくなって笑いながら、皆が作ってくれたカレーを口に入れるのだった。うーん、やっぱりこつちも美味しいね! 市販のカレーは偉大だよ、でもやっぱり。皆が作ったから美味しいのかな。

## 51話

「えー、峰田くん。流石にこれは私としてもフォローのしようがありません。間違いなく犯罪行為です。分かるよね?」

「なんだよ!風呂場で服着てんじやねえよ!反則だろ!」

「峰田ちゃん、貴方が覗くって昨日のうちに分かってたからこうやって罨を張っていたのよ?」

「お仕置きされちゃえばいいんだ!もう!」

鹿威しがいい音でなる露天風呂、私たちはロープとその他さまざまな拘束具を使い思いつく限りの方法で目の前にいる性欲モンスター、峰田実を捕獲していた。昨日覗かれるっていうのを察した私たちはマンダレイの許可を取り私と百ちゃんプレゼントによる女湯の要塞化を済ませていたのだ。そして峰田くんは案の定引つかかった。当然だ、私と百ちゃんが本気を出した&I・アイランドの技術力の無駄遣いの双璧を掻い潜れたのだとしたらそれはプロの技量だからね。

久しぶりに私も本気で怒っている、結局峰田くんチア服の件頑として謝ってくれなかったし。ぶんすこと私がお説教をしても峰田くんはどこ吹く風、怒ったぞ!私怒ったぞ!百ちゃんに目配せすると彼女もこくりと頷く。これからB組女子のお風呂で、私たちも峰田くんを捕獲出来たらそこで混ぜてもらおうことになっている。

ひよい、と峰田くんの首根っこを掴んでお風呂場の脱衣所を出てマンドレイたちがいる管理人室に運ぶ。女子全員怒ってるので無言で。きつと私たちの目には今ハイライトがない事だろう、持ち方もまるで腐った牛乳がしみ込んだ雑巾を掴まむような感じだ。私たちの怒りが伝わったのか峰田くんはゴクリと唾を呑んで無言になった。

「失礼します、マンダレイ」

「あら……昨日で懲りなかったのね。全く、思春期の男の子はこれだから……」

「で、どうするにゃん?」

「相澤先生に女子からお仕置きする案の許可を貰っています。その際ここでやれと言われているので少しだけ間借りさせてください。て

いつ」

「んぎやつ?!おいもつと優しく……ひよえ……」

ぽい、と峰田くんを床に転がすと、彼は扱いの悪さに文句を言おうと私たちを振り返って固まった。多分、にっこりと笑う私たちを見たからに違いない。私はどうか分からないけど、他のみんなは確実に怒ってるのが分かる笑顔なのでお仕置きされるのが確定だということを察したのだろう。私がVRゴーグルとヘッドフォンを、百ちゃんが拘束椅子を作り出して、峰田くんをセットする。私がそこで峰田くんにごーグルとヘッドフォンを付けて、スイッチを入れる。

「なんだ、なんだよこれ!? AV流してくれるのならかんげ……うぎゃあああああつ?! 止めてくれ! 救けてくれ! 筋肉が! 筋肉が迫ってくる!?!」

「2時間くらいこの状況でいてね。聞こえてないだろうけど……」

「はー、これで安心。希械ちゃんお風呂はいろお風呂! B組の子たちと一緒に!」

「そやね〜。峰田くんおらへんからゆつくりできるわ〜」

彼のゴーグルとヘルメットの中で流れているのは三奈ちゃん発案のボディビルダーの筋トレ画像、さわやかかつ暑苦しい笑顔でバルクアップをするマッチョたちに囲まれてさぞ幸せだろうね峰田くん。ちゃんとASMRもしてるし、どこ向いても筋肉がいるからね。よかったね峰田くん、裸の人たちと一緒にいれて、ね。

「えげつないじゃん」

「あちしでもちよつとのーさんきゅ〜」

悲鳴を上げる峰田くんをほって、私たちはお風呂に向かうのだった。次覗いたらもつとひどいことするからね。流石にライン超えちやうと私たちも庇えなくなつちやうからこころ辺でやめて欲しいなあ。ああ、暖かいお風呂が染みるよお。

「あー峰田、まだ叫んでるね」

「しょうがないよ、ウチがやられても叫ぶから、アレ」

「や、やり過ぎたかなあ……?」

「峰田くんにはあのくらい必要だよ!もう!」

ぷんすこぷんすこと怒る透ちゃんが私にもたれかかりながら文句を言っている。実は透ちゃんと私はそれなりに仲良しだ、というのも現状透ちゃんの顔を認識できて過たず目を合わせて会話できるのが私であり、今までそういう人間がいなかったらしい透ちゃんをよくよく話しかけてくれることが多くなった。きっかけがなくて名前で呼ぶタイミングを逃してたけど、三奈ちゃんをのぞいたら一番仲がいいかも。その次は席が近い百ちゃんかな?

どうも透ちゃんは無意識のうちに透明な自分を見れる人物を探してたようで、鏡にも映らない自分の容姿がどんなのか私に聞いたりして、髪型変じやない?とか頼ってくるようになった。というのも透ちゃん、誰にも見えないもんだから髪の毛は感覚で自分で切ってるみたいだし、自分がどんな顔をしてるのかを知らなかったのだそう。これも個性の弊害だね、私の体重とかと一緒に。

まあつまり、何といえばいいのか分からないけど私は透ちゃんが好きだし透ちゃんもきつと私のことを好いてくれると思う。三奈ちゃん並みにスキンシップが好きみたいだし。今もほら、体勢変えて私のお腹を枕にして寝転び始めた。いくら私が寝転んでるからって自由な。三奈ちゃんも三奈ちゃんですの隣で寝てるし。嬉しいです。みんな大好き。

「ごめーん、拳藤だけど少しいい?さっきはありがとね、これほんの少しだけど気持ち程度のお礼。受け取ってよ」

「おー、お菓子や」

「峰田さんのことでしたらお礼を言われることではありませんわ!寧ろ私たちのクラスの男子が皆さんに迷惑をかけるところでしたもの」

うんうん、とみんなで頷く。やってきたのはB組の拳藤さんに塩崎さん、角取さんに取陰さんだ。どうやら私たちA組の困ったちゃんで性欲モンスターの峰田くんの件で私たちにお礼を言いに来たらしい。そう、お礼を言われると逆に困ってしまうのです。なぜならアレは間

違いなくA組のクラスメイトなので連帯責任というか何というか……ねえ? やっぱり峰田くんきらい。

「ありがたく貰うけど……折角だしみんなで食べようよ! 女子会しよ女子会!」

「オウ、ジョシカイ! 実はやってみたかったんデス!」

「あー、折角の合宿だしね。悪くないじゃん」

「女子かい! いいね! ね、ね!」

「透ちゃん、好きね」

なるほど、女子会。三奈ちゃんが提案したそれに乗つかるA組女子たち、私もまあB組の人とは話してみたいし塩崎さんいるし、賛成かなあ。どうも他のB組の女の子は個性猛特訓の件で先生に呼ばれてるみたいで不在みたい。女子会、女子会かあ。何話せばいいんだろう? 私の会話デツキって科学の話とかそういう女の子らしくないものが多い気が。あ! でもお料理の話ならたくさんできるぞ?

みんなで廊下に出て自販機でジュースを買って戻ってくる。お菓子を真ん中に置いて車座でそれを囲んで乾杯。思い思いの体勢で話し出した。けど、皆何を話したらいいかわかんなくてうーん、と考えるとここで頼りになるのは賑やかしに定評がある三奈ちゃん、元氣よく手を挙げて発言した。

「女子会と言えば恋バナ! というわけで……付き合ってる人がいる人……!」

「あー、そういうやつ……!」

「オツキアイ……私イナイデス!」

「わ、私たちにはまだ早すぎますわ!」

ああ、そういう話題に行っちゃうんだ……流石は三奈ちゃん、恋バナ大好きだね。私たちも女の子なのでそういう、恋とかいうふわふわした青春的一幕みたいなものには俄然興味があるわけで、なんだけど皆ワクワク顔で誰か名乗り出るのかな、と見まわしてみるが結局誰も名乗り出ない。というかあれだね、作ってる暇ないよねヒーロー科つて。

「えっ!? 誰もいないの!?!」

「流石に危機感出てくるよ!」

「中学の時は受験勉強で、入ってからそれはそれどころじゃないもんなー」

「あー、友達が言ってたね。付き合うことになったとか……え、私らかなり遅れてる……?」

取陰さんの言葉に私たちは英雄ではなく別の学校に進んでいった中学のお友達を思い出す。繋がりが自体は薄味になってしまったけどグループSNSとかでたまに流れてくる彼氏が出来たとか友達にお付き合いしてる人がいるだとかそういう話、割と多くない?もしかして私たち、青春とかそういうものに乗遅れてるのではなからうか?

「うあー!悔しい!でも恋バナしたい!キyunキyunしたいよお!ねね、片思いでもいいから誰か好きな人いないの!?!」

両手をぶんぶんと振る透ちゃんそんなことを言う、片思いかあ……残念ながら私はそういうのないかなあ?何せ毎日がエブリデイで滅茶苦茶忙しいからね!特にI・アイランド行ってからなんてそれに輪をかけて凄いいことになってるもん!恋に生きるより科学とテクノロジーだぜ!って感じ。メリツサさんとエナドリで乾杯するのが日課になりつつある。

「お茶子ちゃん、どうしたの?」

「あー!もしかして好きな人いるの!?!」

「おっおっおらんよ!?!おるわけないしっ!」

片思いでも好きな人、という話題になった途端かくくっともちもちしたまあるいほっぺをリンゴのように真っ赤にしていくお茶子ちゃん。ほほう、この反応は脈ありですね?なるほどお茶子ちゃんが……ふくふくん。面白くなってきたね、これは根掘り葉掘り、もとい優しく相談に乗ってあげないとなあ、うふふ。

「その焦り方は怪しいね、お茶子ちゃん?ふふ、秘密にするから教えてよ〜」

「いや、これはその!そういうんじゃないっ!」

「そういうのってどういうのさ?」

「ほらほら!恋、してるんでしょ!?!」

「ちやうちやう！そういう話が久しぶり過ぎて動揺しちゃったんよ！そういうのじゃないから！」

ぶんぶんぶん、とお茶子ちゃんが手を振って全否定する。ここまで否定されちゃったら私たちとしても引き下がらざるを得ないのでお茶子ちゃんを解放する私たち、なおもえー、ぶーぶーつまんなーいという三奈ちゃんを抱えて撤去して私の膝の上に置いておく。ややあつて平静を取り戻したらしいお茶子ちゃんがぶくうと頬を膨らませて今度は私に詰め寄った。

「そんなこと言ったら〜！希械ちゃんはどうかん!?切島君との関係！」

「私とえーくん？」

「あー！確かに仲いいよね切島くんと希械ちゃん！どうなの!?ねえ!?!」

「……仲がいいのはいいことです。貞淑な関係をお築きください……」

ありや、矛先が私に代わっちゃった。私とえーくんねえ……どうだろなあ。言つての通りお互いに好きとかそういうの、恋愛感情？みたいな部分は通り越してる気がするの。一番近いんだったら家族、双子の姉弟？とかそんな感じじゃないかな？そもそもえーくんには私よりも素敵な人が現れるに違いないのだ。えーくんの彼女……気になるなあ、いつになるかわからないけどちょっとした楽しみなの。

「うーん、確かに男の子の基準はえーくんになるかもだけど……お付き合いつかそういうのをしたい、とは思わないかなあ？」

「冷静や……」

「切島つてあの鉄哲殴り倒したヤツ？なに？どんな関係？」

「希械ちゃんと切島は〜幼馴染なんだよ！あと中学校も私と希械ちゃんと一緒！」

「でもさ〜、希械つて毎日切島の分の弁当準備してくるじゃん？もう付き合っちゃいなよ」

「でもそれ三奈ちゃんも一緒だよ？」

「尽くすタイプね、希械ちゃん。ケロケロ」

どうやら切り口を変えて私に攻め入るつもりらしい響香ちゃんをさらりとかわす。ふふふ、お弁当は三奈ちゃんにも作ってるのでえーくにだけ特別ということはないのだ！お弁当の部分で色めき立ったB組の人たちには申し訳ないけどね、でもさ、と三奈ちゃんが

「切島って、暑苦しいけど悪くないやつなんだよね。さらつと気遣いができるし、優しいし。さり気に守ってくれるし」

「あー確かに！戦闘訓練で組むとすっごいやりやすいの！ほとんど攻撃効かないし、普通に強いし！」

「樫とまともに殴り合ってたもんなあ。体育祭の時」

「あの鉄哲が一方的に殴り倒されてたしね。鉄哲悔しがってたな」

えーくんの評価はおおむね好意的、話題に上がる上鳴くんとか物間くんとかよりも好印象な様子。暑苦しいのが玉に瑕って言うけれどもそれを含めてえーくんなので、私はそのままがいいと思っている。まあ、彼の言う男らしさをたまに理解できないのがちよつとばかり私の足りない部分でもあるのかな、反省。勉強しないとね。

「嬉しそうですわね、希械さん」

「うれしいよ〜？どこに出しても恥ずかしくない自慢の幼馴染だから。皆が高評価してくれるなら私は嬉しいの。カッコいいでしょ？えーくん」

「大好きなのね、切島ちゃんの事」

「うん、恋愛的な意味じゃないけど勿論好きだよ？だってね、私が最初に見たヒーローだからね」

「何それ気になる!？」

「ふふ、教えて欲しい？でもざんねーん。三奈ちゃんは補習の時間だし、私たちは消灯だよ。さ、解散解散」

私がそういうとみなしてブーイングが返ってきた。特に最後の方にのめり込んでいたB組の面々はずっこける始末。気になると取陰さんが言ってくれるけど、また時間があるときにお話するよ。というか三奈ちゃんは知ってるでしょ？幼稚園の時のあの話だつてば。さ、補習いつてらっしやいな。



## 52話

嬉し恥ずかしの地獄こと林間合宿も3日目に突入し、夕ご飯の支度をしている私たち。今日も私は炎であぶられて氷で強制冷却されて、ついでに限界を迎えたジャージが燃えるなんてアクシデントもあったけどいたって元気です。眠いの〜という三奈ちゃんを背負いながら今日のメニューである肉じゃがの調理を進めていく。

「皆！最高の肉じゃがを作ろう！」

「爆豪くん包丁使うのうまつ!?意外やわー」

「意外ってなんだコラ包丁なんざ誰が使ってもおんなじじゃクソが！」

「出た、久々才能マン」

「もー、肉じゃがが作らせるなら昨日のうちに作らせてほしかったな。味がしみ込む時間が足りないよう」

昨日のカレーほど工数が多い料理でもないし、味付けさえミスしなければどう作ろうと美味しくなるのが肉じゃがです。具は大きめがいいよね、糸こんにゃくも忘れずに。御出汁だけはきちんとつけたけど……さーてお肉を入れないとね。そういえば昨日私たちが女子会やってた時にえーくんたち男子も男子で集まってるいろいろやってみたいなの。

昨日、肉じゃがを今日作るよって言われた時にじゃあ今作らせて味を染みこませたいんです、って言ったら却下されちゃったのは置いておくとして、豚肉か牛肉を選んでねっていう話をされたの。それでB組の男子たちとA組の男子たちで勝負をしたみたい。私の肉じゃがは牛肉なので、一応その時牛肉を主張しておいたんだけど……。まあ出汁とりのために昆布を水に浸して、乾燥シイタケを水で戻しておくのは許可された。シイタケ入った肉じゃがも美味しいよ〜？

で、何をみんなしてたかって腕相撲による勝負だって！へー、そんなことしてたんだね、峰田くんがマツチヨに囲まれていた時に。それで、5回戦したみたいなんだけどえーくんが3人抜きして、4人目の宍田くん負けちゃったみたい。流星に増強系には勝てねーわ、って

言ってたけどえーくん普通に力持ちだからね。それで、賞品だったのは豚肉だったんだけど……えーくんが、私の肉じゃがは牛肉だし多分そっちの方が美味しいって言って結局牛肉になったみたい。それ勝負した意味は……？ 売り言葉に買い言葉した爆豪くんのせいだけど。

透ちやんに絡みに行つた三奈ちやんを見送つて肉じゃがに落とし蓋をしてコトコト煮込んでいく。火が通つたら30分は置いておきなあ。いったん冷まして味を染みこませたいんだけど……そう考えてると近くに轟くんとデクくんがやってきた。どうやら彼らも作業を終えたようで雑談に花を咲かせてみたい。私と髪越しに目が合った轟くんが思いついたように「デクくん」に話を振つた。

「色々言つたけど、そういう話なら俺より適任がいるだろ。樫とか」

「……何のお話かな？」

「えっと、その……実は冴汰君のことで」

いきなり話を振られた私がぱちくりとしながら事情を聴くとどうやら冴汰くんはヒーロー社会そのものが嫌いで、端を発しているのは両親……2年前に殉職したウオーターホース夫妻が深くかわつているみたい。ヒーローの両親が二人とも殉職してしまい、置いて行かれてしまった冴汰くんは死んでしまった両親を褒め称える周囲から反発し、ヒーローそのものを嫌悪するようになった。当然の話だ、他人にとつては英雄視される行為でも、残された方はたまつたものじゃないから。

デクくんはその事情を知つてしまい、冴汰くんは何も言えなかつた。もし事情を知つたのがオールマイト先生だったら彼にどんな言葉をかけるのか……それでもし、轟くんだったら、私だったらどうするかっていう話みたい。うーん、私がそれで言えるとしたら……。別作業に戻る轟くんをよそに私はデクくんに答えを返す。

「何もしない、かな。放つておいてあげるのも大事だと思うよ。デクくんは冴汰くん」にヒーローを好きになつてほしいの？」

「そ、そういうわけじゃないんだ！ ただ……ずっと一人でいるみたいだし、味方って思ってもらえなくてもいいから……敵じゃないって、伝えてあげたいんだ」

「デクくんらしいね。ウォーターホースが殉職して2年……それをもう2年なのか、たった2年なのか捉えるのは人次第だけど……洗汰くんはきつと後者だよ。両親の思い出だつてこれからたくさん作れるって時に二人ともいなくなった」

2年前、当時の洗汰くんは3歳、物心ギリギリつくかつかないかつとところだと思う。両親にだつて甘えたい盛り……いや、本当なら今だつてそうなんだ。私は両親が健在だし、彼の気持ちを分かつてあげることなんて到底できやしない。当たり前前にいる人がいなくなるということを経験したことがない。ましてやそれが自分の親だなんて。

「正直なところ、私たちが洗汰くんにしてあげられることなんてないと思うよ。経験談だけど、心の傷を癒してくれるのは、時間だけだから。周りを見渡せるようになるまでは、そつとしておいてあげるのも優しさだと私は思う」

「経験談って……？」

デクくんにそう尋ねられて、私は髪を分けて右目をデクくんに見せる。機械でできてて真つ赤で、瞳孔に十字のレティクルが入ったディスプレイのような私の右目。産まれてからずっとこうじゃなくて、ちようど洗汰くんと同じくらいの時に失くした私の宝物の片方。そういうばクラスメイトに話すのって初めてだっけ。

「ちようど洗汰くんと同じくらいの時かな。個性事故で私の右目、なくなっちゃったの。事故が無かったら両目とも蒼色だったんだよ？なくなつてから……立ち直るまでは私周りの事見えなかった。だつて、本当ならあるはずのものがなくなっちゃったんだもん。急に」

「えっと、その、ごめん……」

「ふふ、私にとつてはもう気にもしてないことだから大丈夫だよ。それに、デクくんにも覚えがあるんじゃないかな？周りの人だけが持つてて、自分だけ持つてないもの。意地悪な言い方でごめんね？」

「あ、うん。そうだね……確かに僕にもあったよ」

そう、デクくんも私もベクトルは違えど知っているんだ。あるはずのものがないという絶望を。目がなくなった私と、個性がなかったデ

クくん。洗汰くんに立ち直ってほしい、とは私も思う。私なんかよりもマンダレイがずっと思ってる。でも、彼に一番近いはずのマンダレイも何もできていない、いや……できないんだ。ただ時間が、洗汰くんを癒すのを待っている。

「洗汰くんも、今は少し感情が追い付いていないんだと思う。だから、私がするとしたら一人で整理する時間をあげることかな。待って、待って……周りを見れるようになった時に思いつきり抱きしめて、味方だと言ってあげる。それが何時になるかは分からないけど、ね」

「……うん、そうだね……」

「まあ、それはマンダレイの役目だから。もし私たちに洗汰くんが歩み寄ってくるならそれはまた別だけどね！というわけではない！味見してデクくん！」

何となく空気が重くなってしまったことを払しょくするように、落し蓋を取った私が小皿に肉じゃがを少しよそってデクくんに味見してもらおう。彼もまた空気を読んでくれたのか素直に味見してくれて、美味しいと言ってくれる。ふふん、時間を置けば味がしみみになってもっと美味しいんだけどね。基本料理は手間暇をかけるほどに美味しくなるから、時短できるときは時短して、時間をかけるときに時間をかけるのがコツだよ！覚えておくように！

美味しかったなあ、肉じゃが。やっぱり肉じゃがには薄切りの牛肉だよ、うん。豚肉もいいかもしれないけど私は牛肉の方が好き。豚肉は分厚いバラ肉を角煮にしたいよね！という感じの夕食を終えてお皿洗いなどの片づけを終えた私たち、さあお楽しみ時間！肝を試す肝試しの時間だ〜！

「悪いが補習組、お前らは今から補習だ。日中の訓練が思ったよりおろそかになってるからこっちを削る」

「ウソだろ!? わあああ堪忍して試させてよ〜!! 希械ちゃ〜ん！」

「三奈ちゃん……安らかに……！」

「十字を切ってやるなよ希械」

楽しみにしていた肝試しを削るなんてなんて無慈悲なんだ相澤先生……！私は捕縛布でぐるぐる巻きにされて運ばれていく三奈ちゃんがかちらに手を伸ばしているのを断腸の思いで見送る。せめて安らかにと塩崎さんに教わった十字を切ったらえーくんに叱られた。

それで肝試しのルールなだけで1周15分くらいのルートを通って真ん中あたりにあるお札を取って戻ってくる。個性ありの脅かしネタを切り抜けて、最終的により多くの人間を失禁させたクラスが勝利、いや失禁はしないでしょ。しないよね？させるような脅かし方はしないからね私は！問題なのは二人一組だって話で……私たちのクラスは21人、うち4人が補習だから……。

「二人余る……」

「デクくん、くじの結果だから……そんな顔しないで」

「あー緑谷、必ず誰かそうなっちゃうから、な？」

くじ引きの結果、一人になってしまったデクくん私とえーくんが揃って慰めにかかる。ちなみに私はえーくんとペア、峰田くんが変われとにじり寄ってきたけどえーくんがアイアンクローをしたら黙った。流石に暗がりでも峰田くんと一緒だと身の危険を感じないこともないこともないとも言いますか。覗きの件もあるからちよつと警戒中なのです。

順番はデクくんの一個前、3分ごとに出発するということなので結構待ち時間がある……んだけどどうしようかな。というのも私、夜でも昼間のように鮮明に色々見えます。右目が悪いんだけど。見え方的には生身の目と違うし、抑えても見えちゃうし……驚くことはできるかもだけどみんなとそれを共有できないかも、それだけちよつと悔しい！ぐぬぬ……！

12分後、お茶子ちゃんと梅雨ちゃんが出発する。残念ながら私の聴覚センサーに誰かの景気のいい悲鳴が聞こえてくることはなかったのでみんな驚きはしても叫ぶレベルじゃなかったみたい。私、急に何かが起こるとえーくん曰くぼんこつになるのでぼんこつ希械ちゃ

んになってえーくんを抱っこして全力疾走みたいなことになったら  
恥ずかしいし。

「なんか、焦げ臭い?」

「黒煙……? マンダレイ、火って使ってよかったでしたっけ? それ  
とも轟くんが驚いて炎熱使っちゃっただけ?」

「なら轟のやつすぐ氷結使って火い消すだろ」

私たちが異変に気付く。どうも何か、おかしい。異臭……? 成分分  
析、ガスだ。しかもこれ、有毒……!? まだ薄いけど広がったらまずい  
ことになるぞ!? えーくんを目を合わせるも何も何かがおかしいとい  
うのは分かっていたのかすぐに気持ちを切り替えてあたりを警戒し  
始める。そして、すぐに……

「ピクシーボブ!」

「邪魔ねえ。子猫ちゃん?」

「なんで……何でヴィランがいるんだよオ!? バレないんじゃないんか  
たのかよ!?!」

聞くに堪えない音を立ててピクシーボブが殴り倒された。アイ  
ガードを割るほどの一撃は彼女をあつかりと気絶に追い込んでしま  
う。なんで……ここにヴィランが……? しかもヴィランは片方はた  
らこ唇にサングラス、おそらく金属製の何かを布で覆って武器にして  
る。もう一人は恐らく異形型の個性、トカゲかヤモリだろうか。トカ  
ゲ男の方は知らないけどたらこ唇の方は知っている。ヴィラン名「マ  
グネ」、殺人などで指名手配されているステイン並みに危険視されて  
いるヴィランだ。

「貴様ら……いい度胸だな……! マンダレイ!」

「大丈夫、もう指示出した! いい、皆!? 決して戦闘せず、まっすぐに  
合宿所に帰りなさい! 委員長は引率……! 洗汰……!」

「はいっ! 聞いたな皆! 行くぞ!」

そうか、そうだ洗汰くん! マンダレイも知らないんだ、彼が何時も  
どこにいるのか! マンダレイの個性、テレパスの指示に交じって彼女  
の口からこぼれ出る洗汰くんの名前にデクくんが反応する。デクく  
ん、心当たりがあるんだ! マンダレイの指示は今すぐにここを離れて

合宿所に戻り、待機すること。

「マンダレイ、僕知ってます！飯田くん、先行つてて！」

「何を言ってるんだ緑谷君！マンダレイの指示が聞こえなかったのか!？」

「私も行くよ、デクくん。一人じゃ危ない」

「ああ、俺もいく。飯田、他のやつら頼むわ。俺と希械なら仮にヴィランにあっても逃げに徹すりや死にやしねえ。緑谷の足なら洸汰君抱えて逃げられんだろ」

「君たち……！すぐに戻ってくるんだぞ！」

飯田くんの苦虫を噛み潰したような顔に申し訳なく思いつつも、デクくんを促して避難するA組の残留組から反れる。何でヴィランの襲撃が、いやまずは、何でばれたのか。どうやってここを知ったのか。意味不明だ。森の中をデクくんの先導でかけながら私は個性で警察に連絡を入れつつ、さらに雄英にも連絡を入れる。

『やあ、樗少女。合宿中だろ？どうしたんだい？』

「オールマイト先生、合宿の場所は御存じですか!?!すぐに根津校長先生に連絡を入れてください！ヴィランの襲撃を受けています！お願いですっ！」

『なんだって……!?!待ってなさい！私が行く！』

私とデクくんが知っているオールマイト先生の連絡先に連絡を入れると活動中ではなかったのかオールマイト先生がきちんと出てくれた。慌てた私の拙い説明で危機を察知してくれたオールマイト先生が電話口で声を引き締める。私は一縷の望みを救援に託して、えーくんと一緒にデクくんについていくのだった。

## 53話

「とりあえず学校と警察に連絡は済ませたよ！けどどこから雄英までは遠い……！オールライト先生に至っては今東京にいるって！だから、早く見積もって他のヒーローたちが現着するには30分はかかっちゃう……！」

「ありがと樫さん！冴汰君きつと秘密基地にいるんだ。カレーを渡しにいった時にいた場所……！」

「なるほどな！ずっと居ねえと思ったらそういう場所があんのか！急ごうぜ！」

森の中を駆け抜けながら少しだけ声を抑えて会話する。多分既に雄英は動き出していると思うけど、オールライト先生が東京からここまでののくらかかるか……！そもそもここはプツシーキャッツの所有する山だ。人里離れた私有地、警察署だって近くにない。交番がせいぜいだと思う。うう、確認すればするほど雄英の対策が裏目に出てる……！

そもそもなんでヴィランにこの場所がバレたのかだ。相澤先生があそこまで徹底したということは情報が洩れる余地がないはず。謎過ぎる、もしかして私たちあるいは先生方を捕捉する個性のようなもの。例えば黒霧の霧を通ったものにマーキングが付いてるとかそんな可能性が……？考えれば考えるほどドツボにはまる。

あそこだ、とデクくんが指さした先には切り立った崖の中腹に空いている洞窟があった。なるほど秘密基地、言い得て妙だ。授業で習ったクライミングを利用して崖を登攀していく。崖を昇り切ったその先には、恐れおののいて後ずさる冴汰くんと黒いマントで全身を隠して、仮面を被ったヴィランがすでに相対していた。まずいつ！ヴィランの手から筋のようなものが沸きだしてヴィランの手を覆う。それを振るって冴汰くんを襲おうとしているんだ！

私たち全員、考えるより先に体が動いた。フルカウルを纏って飛び出したデクくんが冴汰くんを抱え上げて退避し、私とえーくんが攻撃に割って入る。えーくんの硬化で受け、私が支える。それでやっと拮



抗した。足元が岩にめり込む、なんて力……！間違いなく増強系だ！男は私たちが割って入り、自分の攻撃を受け止めたことに警戒したのかバックステップして距離を取り口を開いた。

「へえ、いい！いいなお前ら……！んん？そっちのお前と女、リストにあつたな」

「パパ……！ママ……！」

「大丈夫だぜ洗汰君！助けに来たからよ！」

『『血狂いマスキュラー』……！』

「っ！それってウォーターホースの……！」

最悪だ。仮面を外したヴィランの名前を私は知っている。えーくんが背後でデクくんを抱かれて震える洗汰くんをサムズアップで励ます、デクくんは私が呟いた名前にすぐさまあたりをつけたようで顔を歪ませた。洗汰くん事件、つまりはウォーターホース夫妻を殺した犯人としてニュースで顔写真が公開されている指名手配犯のヴィラんだ。マグネといいなんでこんな凶悪ヴィランがこんなところに……！

顔写真と人相が少し違う、左目に大きな古傷がありそこには明らかに義眼と分かるものが埋め込まれていた。見た限りサポートアイテムのような機構を持つてるわけじゃない。3人とはいえこれは逃げ切れるか？デクくんは洗汰くんを任せて二人で足止め……無理だ。さっきの攻撃で分かった。このヴィラン、デクくんより足が速い。やるしかないんだ。

「助けに来た、ねえ。流星はヒーロー志望、どこにでも表れて正義面しやがる」

「おう、悪いかよ」

「いいや、全く。緑谷つつたなそっちのお前。お前は率先して殺せて話だ。あとそっちの女……樫だったか？お前は手足潰して連れて来たってよ。まあ景気づけに一発やらせろや！」

「くるよー！」

「洗汰くん、捕まって！」

「じっくりいたぶってやるからよ！血を見せろ！」

デクくんが洗汰君を抱えなおして、私とえーくんが飛びかかってくるマスクュラーを妨害する。気になることをいくつも口走った、聞きたい事が山ほどできたけどここは生き残ることが優先だ！えーくんがさつきと一緒に受け止めてくれる。だけど体表から現れた筋繊維たちがマスクュラーの攻撃を増強させている。踏ん張り切れずに後ろに押し込まれていくえーくん、関節を硬化させて全力で耐えてくれるえーくんがくれた隙を使って私は武装を構築する。

「フラッシュエッジ！形成開始！」

「ぐおおっ!？」

左の腕から取り出したブーメランを真つ二つにした片方だけのよ  
うな機械。簡易的な無線誘導を搭載した投げるビーム兵器、ビーム  
ブーメランだ。あの分厚い筋肉を断ち切りダメージを与えるにはそ  
れ相応の火力がいる。ビームの熱量がマスクュラーの腕を覆う筋繊  
維を焼き切り、その腕を真つ二つにするぎりぎりですマスクュラーは腕  
を引いて難を逃れる。高速回転して戻ってきたフラッシュエッジを  
キヤッチし、手足を戦闘形態に変形させる。

「えーくん、大丈夫？」

「全く以て問題ねえ！元氣一杯だぜ」

「オツケー、デクくん！これっ！」

私はデクくんフラッシュエッジを投げた時から作り出していた  
腕輪を投げる。洗汰くんを後ろに避難させて戦線に復帰したデクく  
んがそれをキヤッチして、目を開く。腕を指して付けてみると示すと  
デクくんはそれを付けて、腕輪をタッチした。タッチした瞬間、超圧  
縮技術で封じられていたバンテージがデクくんの右手から背中を  
伝って左手、さらには両脚にも巻きついて手甲と足甲を形成する。

「まだ改良途中だけど、ないよりはマシだよ。フルガントレット&  
フルグリーヴ！メリッサさんと私の合作！」

「ありがとう、楳さん！これなら……！」

「ああ、それがありやあ……とどめは緑谷だな。一発かましたれよ  
！」

「やりやがるな……！ああ、そうだ。忘れる前に聞いてくぜ。爆

豪ってガキはどこにいる？ 樫と一緒に連れて来いって仕事でな」

「かつちゃんを……!?!」

相手の目的が定まってきた。デクくんの殺害、私と爆豪くんの拉致……!?! 統一性が見えない。その先に何を目的にして動いてるんだ？ 焼けて焦げ、溶けた筋繊維をいったん体の中に仕舞ったマスキュラーが首をゴキゴキと動かして、そう尋ねてくる。ヴィランに情報をやる必要はない、言わないのが正解だよ、デクくん。

「答えは、言わねえってことだな。オーケー、これで集中できるぜ！

さあ！遊ぼう！」

「ふぎけんなっ！ぐっ！」

「えーくん！」

今度は腕だけではなく全身に筋繊維を纏ったマスキュラーがえーくんを潰す様に殴りつけるのではなく、横から殴る形で壁に吹き飛ばした。戦い慣れしてる！踏ん張りがきかないように殴り飛ばされた、ダメージはないにしろ……!?!そこで止まるならよかった、だけどマスキュラーは止まらない！目的は私、じゃない！

「デクくんっ！避けて！」

「そう来るよなあ!?!だけどな、お前らはヒーローなんだぜ？」

「あなたっ!!」

よけようとしたデクくんだけど、寸前で押しとどまる。マスキュラーは後ろに洗汰くんがいる射角で攻撃を放ってきた。避ければ洗汰くんが巻き込まれる。フラッシュエッジを投げようとしたが、マスキュラーがよければデクくんに直撃するのが分かり、投げられない。デクくんは攻撃が直撃する!?!

「させねえ！俺の前で！ダチに当てられると思うなあ！」

「ほぎげ！力が足りねえよ！」

デクくんは当たる直前にえーくんが復帰して割り込んでくれた！だけど、威力が高すぎる！筋繊維の塊相手に全力で個性を使い抗う二人、一瞬の拮抗は二人が跳ね飛ばされる結果で終わる。洗汰くんは前ギリギリで地面を削りながら止まる。威力のすさまじさに一瞬二人ががくりと膝をつく。けど射線が開いた！フラッシュエッジを投げ、

一旦二人からマスクュラーを遠ざけて私も二人の所に急ぐ。

「出来もしねえきれいごと並べて、今しくじりかけたなあヒーロー志望！笑いが止まんねえよ！力が足りねえ！速さも足りねえ！お前は俺の完全な劣等だ！」

「出来る出来ねえじゃねえんだよ、なあ緑谷、希械。やらなきやならねえんだよ！後ろに守りてえもん抱えてんだから！」

「キレイごとで何が悪い！ヒーローは、命を賭してきれいごと実践するお仕事だ！洗汰くんは僕らが助ける！」

「貴方みたいな人には一生分からない！守るものすらないヴィランには！」

「はっはー！じゃあやってみなガキどもお！」

「止めるよ！えーくん！」

「任せとけ！」

今にも泣きそうな顔の洗汰くんが後ろにいる。絶対に、一步も後ろに引くことはできない。大丈夫、ヒーローは強いからヒーローじゃない、守るものがあるから強いんだ！止めてみせる！さらに太くなつた筋繊維に覆われた腕を振るい、まっすぐに右ストレートを叩き込んでくるマスクュラー。私はフラッシュエッジを捨てて、えーくんと一緒にそれを受け止める。一瞬で踏みしめた地面が陥没して、えーくんと私の体から異音が聞こえる。けど、止めた。止められた。

歯を食いしばってマスクュラーの右手を離さないように強くつかむ。戦闘形態の鋭い爪がマスクュラーの筋繊維を切断しながら強く大本の腕を握りしめた。えーくんはマスクュラーの腹部に硬化した腕を貫手で刺し入れて完全に固定してしまう。マスクュラーは私たちよりも速い、速いけど……！拘束すれば関係ない。

「緑谷あー！かましたれええええ！！！」

「させ、ぐぬうあああつ!？」

「にがさ、ない！」

「デトロイト……！スウマツシユツツ!!！」

私たちの拘束を振りほどこうとしたマスクュラーを私が腕から電気を放って体を硬直させて妨害した。私たちが止めた隙を縫って、デ

クくんがマスキュラーの懐に飛び込み、フルガントレットで守られた手でワンフオーオールの100%を引き出し、マスキュラーの体のど真ん中に思いつき叩き込んだ。

すさまじい衝撃波を伴いながら、マスキュラーが岸壁に突っ込む。デクくんの100%、オールマイト先生のそれに匹敵する一撃だ。悲鳴すら上げることが出来なかったマスキュラーは、岸壁を抉りぬいて、ガラガラと落ちてくる岩石の中に埋もれていく。だけど……！

「おい、マジかよ……!!」

「ウソだろ……?」

「あれで立つんだ……！あれだけやって！えーくん、デクくん。脳無を思い出して、あいつと同じだよ」

「やってくれるね、だが腰が入ってねえ。テレフォンパンチだ。しかしやるなあ！お前ら……遊びは終わったほうがいいな……」

岩石を押しつけて、筋繊維を体の中に収めたマスキュラーが立ち上がる、がダメージは確実に入っている。二人には脳無を思い出して、と言ったけど脳無の方が厄介だ、効かなくて、再生していった。けど目の前の男は？効いている、確実に。デクくんのパンチを受けたであろう部分は青紫色に変色している。骨くらいは折れているかもしれない。

「舐めてたのは謝るぜヒーロー志望！もう遊びなんてふざけたこと言わねえよ！こっからは……本気の義眼だ」

「緑谷、まだいけるな!? 1発でダメなら2発、それでだめなら10発でも叩き込め！」

「それまでは何度だって私とえーくんが止める！冴汰くん！私たちがぶつかったら全力で後ろに逃げて！」

「当然だよ……！何度だってやる！お願い！二人とも！」

「なんでだよ……！効かなかったじゃん。倒せなかつたじゃん……パパとママと一緒にだったのに……！どうして、どうして……!?!」

私たちに駆け寄ってなんでそこまでするのか、という疑問の声をあげる冴汰君に対して無言でえーくんが冴汰くんの背中を叩き、デクくんは肩に手を置いて前に出る。私も冴汰くんのずれてしまったカツ

コイイ帽子を直してあげてから前が出る。マスキュラーは左目の義眼を取り出して、ポケットの中からいくつかの義眼を取り出し、その中から一つを選んで自分の目に取り付けた。

わさ、わさわさと筋繊維がマスキュラーの体に巻き付いて覆っている。先ほどより量が多い、けど……！ダメージが隠しきれてない。衝撃に耐えられずに切れてしまった筋繊維がいくつかぶら下がってる。ビームで熔けたのもだ。確実にダメージを与えられているし、回復するわけじゃない。増強系の宿命である上限値があるんだ！

「最っ高じゃねえか……！もう仕事とかどうでもいいぜ！殺す、殺してやるよ！さあ！血いみせろやああああ!!」

「えーくん、来るよ」

「俺の男気、見せてやるよ！」

斜め上から潰すようにマスキュラーの筋肉の塊と化した腕が降ってくる。これは受けるとかそういう問題じゃないね。けど、下がらない、下がってあげるもんか！私より一歩前に出たえーくんが手をクロスして全身でそれを受け止める。私はえーくんが接触してコンマ数秒開けずにえーくんに覆いかぶさるようにして全身でえーくんとマスキュラーの筋肉を支えにかかる。油圧システムを全力で動かして、うなりをあげる私の関節たちがマスキュラーの超膂力に対抗する。

「はは！潰してやるよ！」

「つぶされるかああああああ!!」

「うううううっ！ゴリアテエエエ!!」

気合で持ちこたえる。あたりを衝撃波が駆け抜けて、私とえーくんの足が膝まで埋まるほどの力が私たちを潰そうと牙をむいている。私は右手にゴリアテのサドニンパクトを形成して、接射の状態できました。マスキュラーの攻撃の威力を弱めることには成功したけど、代わりに右手が根元から折れて脱落する。でも、バチバチとエネルギーが弾ける音がする。緑色に光るワンフォーオールエネルギーを纏ったデクくんが、崖を一部崩壊させるほどの踏み込みでマスキュラーの懐に今一度入る！

「緑谷ああああ!!いけえええええ!!」

「デクくん！やっちゃえっ!!!」

「はあああああっ!!!アーカンソースマツシユツツ!!!」

デクくんが繰り出したのは、踏み込みの威力をそのまま使った膝蹴り、左回し蹴り、右と左のラツシユ、そして最後に右の後ろ回し蹴りだ。限界を迎えてフルガントレットとフルグリーンヴが両方とも崩壊する。一撃が台風を超え、天候を変えてしまうワンフォーオールを超ラツシユを一瞬で叩き込まれたマスクュラーの筋繊維が全てブチブチと音を立てて千切れて、背後の岸壁に突っ込んでいく。

岸壁を真っ二つに割ってしまうほどの威力のデクくんのラツシユを受けたマスクュラーは全身にあぎを作り、口から盛大に血を吐いた後、沈黙した。私たちは、そこで終わったことを理解し、その場に座り込んでしまうのだった。

## 神野編

### 54話

「はあ……！はあ……！二人とも、大丈夫？洗汰くんは……？」

「えぐつ……俺は、平気……！守ってくれたから……！」

「ちよつと割れちまったけど、まだ動けるぜ。緑谷こそどうだ？腕壊れてねえか？」

「僕は大丈夫、ガントレットが守ってくれた……！樫さん、腕は……？」

「ふう……ちよつと限界を越えちゃったね。3分したら多分生やせるけど今は無理かな……？ヴィランはこのまま置いておくしかないよ。見た感じ全身複雑骨折、まともには動けない」

手足を全力稼働させながらゴリアテのサドンインパクトをかますということをしたので少し許容量をオーバーしてみたみたいだ。ぴく、ぴくと痙攣するマスキュラーは拘束せずに放置せざるを得ない。デクくんのあのラッシュを受けて骨折で済んでいるというのは驚異的だけど……もうこれで動けないだろう。泣きながら私たちに無事を伝える洗汰くんに一安心した。

流石にまだ強度不足だったフルガントレットにフルグリーヴ、要改良だね。私は個性の最後っ屁で作っておいたそれらをもう一度デクくんに渡した。ここにヴィランがいた以上、多分もつという。それならデクくんが無理をしないように全力で動けるようにしてあげないと。それと、釘もさしておくことにしよう。

「デクくん、いいね？残弾12発、だよ。13発使ったら、怒るからね」

「だな、緑谷。おめーいぎという時捨てるだろ、この状況でそれはやべーぜ、使えば使うだけ動けなくなるしよ」

「……うん、わかってる。ありがとう」

えーくんの硬化は限界を超えた衝撃を貰うと割れてしまう。若干ひび割れたような亀裂から出血してるえーくんはまだ余裕そうだけ



ど……あのえーくんの硬化を破りかけるなんて……マスクユラー、怖いヴィランだ。戦闘形態の私の手足ですら若干歪んでいる、出会ったのがある意味私たちでよかった。強引に破れるメンツが奇跡的に揃ってたんだから。

擦り傷や切り傷をこしらえた私たちがこれからどうするか、を話し合う。正直言えば結構限界に近いが、やれることがあるならやらなければならぬ。既に私は何度かプツシーキャッツや相澤先生、ブラドキング先生に無線での連絡を試しているけど繋がらない。

「もし、襲撃に来たヴィランがこのレベルならみんなが危ない……！相澤先生に伝えないと……！」

「そうだね、デクくんはこのまま洗汰くんを合宿所に連れて行ってあげて。私とえーくんは、残ったみんなを助けに行こう。ここからでもわかるけど有毒ガスが充満してる。百ちゃんがガスマスクを作れるけど遅れた人たちもいるかも。出来るだけやり過ごして他のみんなを回収して合宿所に戻る、どう？」

「ああ、それがいいだろ。緑谷なら洗汰くん抱えて合宿所までひとつとびだしな。頼んだぜ！」

えーくんが頷いて同意してくれる。今合宿がある森は火災と有毒ガスでひどいことになっている。ガスは幸い可燃性ではないみたいだけど……！それでも吸い込み続ければ命にかかわってくるかもしれない。早急に助け出さないとA組はおろかB組のみんなも危ないなら、私たちがやらないと！

「洗汰くん、僕を昨日追いついた時、個性で水を出してたよね？いざ逃げるときにきつと、君の個性が必要になるよ。だから、それまでは僕がキミを必ず守って合宿所に送り届ける！おぶさって！いくよ！」

「……うんっ……！」

「頑張ったね、洗汰くん。デクくん、お願い」

「わかってる！だけど！狙いの一人は樫さんだっ……！」

「そうだよ。だから大丈夫。狙いは私の生け捕り、殺しにこない。ならそこに隙がある」

デクくんの心配を私は残った左手のサムズアップで応えて、彼を送

り出す。洗汰くんを笑って送り出した私とえーくんは顔を引き締め  
て崩落した崖を駆け下りて肝試しの会場に戻る。ただ、道なりに行く  
と確実にヴィランと遭遇するため大回りを取って別のけもの道を  
走っていく。途中で個性が使えるようになったので、右手を改めて作  
り直した。

「緑谷のやつ……アレがあるからって無茶しねーといいんだけどよ  
……！」

「うん、速めに終わらせないとデクくん多分また無茶しちゃう」  
デクくんは追い詰められた時、簡単に体を捨ててしまう。私も人の  
ことは言えないけど、彼の場合はもつと重症だ。なんせ生身だ、あと  
に響いてくる。それがこんな非常事態なら猶更……！だから早めに  
事件が収束することを願うしかない。まだヒーローは現着しないの  
か、警察は何をしているのか。いろいろごちゃごちゃと頭をめぐる考  
えから抜け出せない……！」

「っ!? えーくんー！」

「おわっ!? 希械っ!?」

「ぐうううううっ!!」

超高熱源反応を私の右目が捉えて、咄嗟にえーくんに抱き着いて背  
中で庇った。轟くんの炎熱とは比にならない温度で私に襲い掛かっ  
た蒼い炎は、咄嗟に背中に出した耐熱シールドをまるでバターのよう  
に溶かして私の背中を焼いた。服が焼けて背中が丸出しになる、軽い  
とはいえ私が火傷を負う、生身でも常人よりは熱耐性がある私を焼い  
た。それだけで警戒するには十分……！」

「ビンゴ、だな。ここで会えるとは運がいい」

「てめえ……！ 何しやがる！」

「えーくんっ！ だめ！」

焼けた皮膚、ケロイド上になったそれをまばらに無理やり移植した  
ような黒髪のヴィラン……私たちに炎を放ったヴィランに膝をつい  
た私の背中中の火傷を見て頭に血が上ったえーくんが硬化して突っ込  
んでしまう。とっさに止めようとした手が空を切る。そして、えーく  
んが蒼い炎に吹き飛ばされて、背後の木に叩き付けられた。

「えーくんっ!!」

「悪いな、急に殴り掛かれて怖くなった。こけおどしの低温だ、死にはしない」

えーくんは駆け寄って安否を確認する。火傷は軽い、だけど意識を失っている……!これ、燃焼した炎で酸素がなくなっただ……!酸欠で気絶させられた……!それに、あれで低温……!私の耐熱装備があっさりと溶かしておいて低温での脅しだったって……!冗談じゃない、火の温度ならエンデヴァー並みだよそれ……!しかも、私はこの顔に覚えがない、ニュース放送されてない顔だ!

「俺は『茶毘』まあ、覚えても覚えなくてもいい。今からお前を連れて行かせてもらうぜ」

「何が目的……!?!」

「さあな。しいて言うならここに居ること自体が目的さ。お前はまあ、おまけだよ。樫希械、生け捕りがベストだが……死体でもいいらしい」

「っ……!!」

目論見が外れた……!えーくんは気絶してる……!私が彼を守らないと。私の鈍い痛覚が背中からの焼けるような痛みを伝えてくる。思ったよりもやられたかな……?!いいや、それは捨てておこう。今はこの状況を何とかしないとイケない。最悪、私が死んでもえーくんを守らないと。ただ、死ぬならあのヴィランを撤退に追い込んでからじゃないと……!ふうーっ、と口から大きく息を吐いて、キツと茶毘を見つめる。

「いい目してやがるぜヒーロー志望は……だが、逃がしてやるわけにはいかなくてな」

「……囲まれた……!?!」

「取引だ、大人しく付いてくるなら後ろで寝てるのは見逃してやる。俺は快樂殺人者じゃなくてね。仕事が果たせればまあ、どうでもいい」

「信用できないよ、この状況で」

「だろうな……じゃあ、無理やりだ」

茶毘は私とえーくんを囲うように火を放って炎のリングを作り上げる。完全に退路を断られた私に自分についてくるように提案した茶毘を私は一蹴する。ヴィランが約束を守るなんて到底思えない、私を殺しても問題ないと言い放つほどだ、目的外のえーくんの命なんて私よりも軽いに決まってる。飛びかかろうとした私を広範囲に放たれた茶毘の炎が縫い留める。

えーくんを巻き込む形で放たれたそれはこけおどしといった先ほどのそれよりもさらに高温だった。とつさにえーくんの前に陣取って炎を受けざるを得ない。轟くんの明るい炎と違って、この蒼炎は暗く、それでいて異様に温度が高い、戦闘形態の私の手足が熱で変形する、一瞬で耐えられる熱の許容量をオーバーした……！個性が使えない……！

「ふーっ……！ふーっ……！」

「耐えるな、想定外だ。Mr.」

「お任せあれ」

「しまっ!?!」

私の背後の木の上から仮面をつけた道化師のような男が降りてくる。伏兵……！私のサーチに引つかからなかった……!?!いや、ガスと火災でノイズが多かったせいか！咄嗟に振り向いた私が加減を忘れてがむしやらに男に手を振るう。だけど、男の手が私の手に触れた瞬間にバスン！と音を立てて空間ごと圧縮されて抉られるような形で私の手が消失した。

さらに男はすさまじい速度で私のもう片手、さらに両足を抉る。だるまのようになつてしまい、地面にうつぶせに転がる私に、わざわざしゃがんで見せつけるように白くて丸いビー玉サイズの物体を目の前に置いて、バチンと指を鳴らす。するとその瞬間ビー玉は抉られた私の手足に代わる。触れたものを圧縮する個性だったんだ……！

「趣味が悪いな、Mr. コンプレス」

「種明かしはマジシャンの嗜みでね。君がどうなるか、分かっただろ樞さん?」

「……触れないで、今体内に核爆弾を作った。急ピッチだけどここ

ら一帯を消し飛ばして余りあるよ」

「ウソだな。お前は他人のために死ぬるが、逆は絶対にできない。じやなきや、その赤髪を庇わずとつくに逃げてる。ああ、爆弾作れるってのは信じてるぜ？ 体育祭見たからな」

苦し紛れのブラフも一瞬で見破られる。核爆弾が作れるのは事実だけど、そこから見破られた。Mr. コンプレス、と呼ばれた男を強く強く睨みつける。視線だけで噛み殺してやれるくらいに。頭の中にマンダレイのテレパスが響く、戦闘行動の許可、そして爆豪くんと私が狙われているということ。こんな、こんなあつさりとヴィランに目的を遂げさせちゃうなんて、情けない、情けない！

「話したい事は終わりか？ ああ、泣いちやって可哀想に。じゃあな、櫟さん」

私の目から涙が落ちる、それをせせら笑ったMr. コンプレスが大仰な手ぶりで私の頭を触り、そこで私の意識は電源を落とすようにぶつん、と切れた。

ふつと、意識が戻る。真つ暗だ、右目の視界を弄って暗視状態で周りを見渡す。電波は……届かない……！ まずった、生きてることは拾い物だけどれだけ意識を失ってた？ 何日時間が流れた？ ずり、ずりと芋虫のように這ってゴロンと仰向けになり、腹筋の力を使って起き上がる。茶毘の超高温のおかげで個性はまだうんともすんとも言わない。熱が保存されてる？ それとも時間が止められた？ 攫われてから10分も経ってない？ どれなんだろうか。

「っ！？ ラグドール！？」

周囲を見渡していると、私から少し離れたところにプツシーキャッツのメンバーの一人、ラグドールが血まみれで横たわっていた。急いで転がる様に傍に移動し、呼吸が正常に働いてるのを見て、胸をなでおろす。右目で見える限り、命に別条がある怪我ではないが、出血量が増える。

「気になるかい？ その女が」

「えっ……！？ ひいうっ！？」

「おやおや、ひどい反応じゃないか。はじめましてくらい言ったら  
どうかな？ 櫟希械」

唐突にかけられた声、ねっとりとしていて、不気味で、底が知れない。声だけでそれほどの威圧を放つ人物を目にとらえ、私は悲鳴を隠せなかった。体中に管を繋ぎ、点滴を打ち、喉にチューブを刺した男。顔は何かに潰されたようにのっぺらぼうで酸素マスクが目を引く、そして目がなかった。声が出せない、喉が干上がったみたいだ。

「クク、いや済まない。これで話せるかな？ まあ、少しだけ付き合ってくれたまえよ。暇つぶしに、ね」

「はあっ……はあ……あなた、誰？ ヴイラン連合に私を攫わせたのは貴方？」

「如何にも。体育祭で君を見てね、実にいい個性だと思って、欲しくなった。だが、会ってみれば少々期待外れでね……」

「それはっ、期待に浴えずに申し訳なかったよ……！ でも、私にとっては嬉しい限り……！ ラグドールに、何をしたの」

男から放たれる圧のようなものが弱まり、私はなんとか話せるようになる。つかえつつも攻撃的な態度は崩さずに男に詰問した。熱が少しづつ引いていってる。個性が効率的な冷却を無意識のうちにあの少しの合宿で身に着けたんだ。個性が使えるようになったら、持てる火力をすべて使ってここを破壊してラグドールを抱えて逃げないと……！ だけど、男の言葉に私は思考が止まってしまふ。

「彼女？ ああ、なんてことはないさ。「個性」を貰っただけだよ。そして君の個性も、貰おうと思ってた」

「……個性を、貰う？」

「僕の名はオールフォーワン。覚えてくれても構わないよ。話の続きをすると、君の個性は少々、今の僕には重い。そして弔には合わないだろう。だから、君からは別のものを貰うことにするよ」

「何を……？ あっ?! あああっ?!」

オールフォーワン、と名乗った男が私から貰う、と尋ねた瞬間に私の左目が耐えがたいほどの痛みを発して、引っ張られる。まるで見えない手が無理やり私の目に干渉して引っ張られるように、ブチブチと

音を立てて、耐えがたい痛みが強くなる。熱いナニカが左目から溢れて私の顔を伝っていく。私の悲鳴を着にする様に含み笑いをした男が何かを引つ張る動作をする。

形容しがたい音を立てて、私の左目に失くしがたい空虚感、喪失感が産まれた。ちかちかと明滅する視界が、まるでバグに侵されたかのように安定しない。いつも見えてる視界じゃない。取られた、取られた、取られた……！私の宝物が、今宙を浮いてオールフオーワンが持ってた何かの液体が入ったケースの中に納まる。

私を見つめるその蒼い玉が、私の左のそれだということをまざまざと私に語り、私はその場で身を捻ってのたうち回るのだった。

## 55話

「くう……はっ……はあ……」

「おお、素晴らしい。眼球を抜かれて尚も冷静を保つとはね。やはり、殺さないで正解か。脳無の素材にはもつたいない。いや違うな……割り切ったのか！面白い！」

眼球を取られた。機械の右目じゃなくて、生身の左目。オールフォーワンと名乗ったヴィランは私の目が入ったケースを一瞬でどこかに消した。けど、もうどうでもいい。抜かれた以上取り戻すのは困難だから。流石に失った眼球を一から作りだすのは今この場では時間がかかって無理だ。冷静を保て、目がないからなんだ。片方だけでしょ、ヴィランに屈しちゃダメだ。

「私の目、どうするつもり……？」

「ハハハ、その胆力に敬意を表して教えてあげよう。個性をコピーするのさ、個性因子を使つてね。本当なら、腕や足といった大きな部位が好ましいのだが……君には両方ともないだろう？だから、眼球さ」

「……そう」

個性のコピー……そんなことできるかどうか分からないけど、仮にできたとしても……私の個性はすぐに使い物にはならない。確かに手足が機械なだけでも十分強いかもしれないけど、私の個性の真価を発揮するためには相当な知識を詰め込む必要がある。私が10年以上時間をかけて研鑽してきた技術を取られたわけじゃない。目玉からそれを読み取ることはできない。すぐに脅威にはならない、と思う。

「さて、そろそろ君も個性が使えるようになっていよう。まだお喋りに興じたいなら付き合つてやりたいけど、なにせ僕も忙しい。だから最後に聞かせてもらおうよ。こちらに来る気は？」

「私、貴方の事きらいだよ。私が死んでも、次が繋がる。貴方は絶対に捕まるんだ」

「そうなるといいね、君の願いは叶わないが。ああ、そうだ。暇だろ



うから、話し相手を用意してあげよう」

雑な勧誘に、顔をしかめた私がオールフォーワンに死んでも嫌だと返す。彼は私のその答えを予想済みだったのだろう。嗤ってからへドロのような黒い液体に包まれて、その姿を消した。彼の言う通り、私の体の熱が冷めて、個性を使えるようになっていた。戦闘形態の手足を作り直して立ち上がり、ふらついた。遠近感がつかめない、片目だから？右目を補正……くそ、痛みで集中できない。

ぼたり、ぼたりと伽藍洞の左の眼窩から真つ赤な血が私の顔を伝って零れ落ち、着ている服が真つ赤に染まっっていく。このまま止まらなと貧血に陥るかもしれない。焼いた方がいいかな、いやそれよりもラグドールの安否を……そこで、ごぼごぼと音を立ててオールフォーワンを転移させた液状の何かが3つ、また現れた。そこから現れたのは……脳無だ。

「……倒せるかな、3体」

ぼろり、と弱音が出る。やつが言った話し相手って脳無のことだったんだ。ラグドールを守らないと、左目の痛みで意識が飛びそうだ、かぶりを振って気付けをする。びちゃびちゃと赤い雫が周りに飛びちった。それが合図になったのか、脳無が飛びかかってくる。手が異様に長いのと、筋肉質なやつと、脚が4本あるやつ。一番乗りは筋肉質な奴、顔を掴んで後頭部を地面に叩き付ける。

私の攻撃の隙をついてきたのは手が長い脳無、死角になってしまった左目のおかげで反応が遅れた。顔の左側を殴られて、吹っ飛んだ。失ったばかりの左の眼窩が酷く痛み、情けなくゴロゴロ転がってすぐに体勢を立て直して追ってきた4本足の前足を爪で引き裂く。痛覚があるのか雄たけびのような悲鳴を上げる4本脚を前蹴りで蹴り飛ばして距離を取った。

「レアアロイブレード、ヒートホーク、形成開始<sup>デイ</sup>」

一瞬のスキについて何とか集中、左手にレアアロイブレード、右手に赤熱する片刃のハンドアックスを形成して構える。飛びかかってくる長い手の脳無の攻撃に合わせてカウンター、ヒートホークは長い手の脳無の拳に真正面から食い込んで。縦に焼き切る。まるで裂か

れたかのように分かれた手を抑えて絶叫する脳無。再生しない、そういう個性は持ってないんだ。そこで私を高圧電流が襲った。体か硬直する。4本足の攻撃か。そしてそのまま、飛びかかってきた筋肉質な脳無のパンチが私のどてっばらを撃ち抜き、殴り飛ばす。

「げほっ……ぐ……ほっ……フーツ、フーツ」

いい所に入ってしまったって、喉からせりあがってきたものを吐き出す。真っ赤だ。威力的に筋肉質は増強系の個性持ち。ラグドールを見つけた脳無たちが彼女にも攻撃しようとするので、今度は私から攻める。電撃を放つ前に4本足の片足を切りとばして、転んだところを加減せず踏みつけた。地面が陥没して4本足が動かなくなる。長い手の脳無が残った片方の手でラグドールを殴ろうとするのでヒートホークを投擲する。

ヒートホークは脳無の肩に思いつきり食い込んで、胴体中央まで切り込みを入れた。それが決定打となったのか長い手の脳無はそのまま崩れ落ちる、残りは筋肉質の脳無、レアアロイブレードを構えて、突撃。吠えた脳無が両手を打ちおろしてくる。私は倒れ込むような前傾姿勢で脳無にレアアロイブレードを深く突き刺した。打ち下ろしをそのまま背中にもらって地面に叩き付けられるけど、脳無は急所を突かれたのか、私の上に前のめりに倒れる。

「ううっ、ぐ……たお……した……かふっ……ゲホッ！」

ドバツと口から金臭い液体が大量に出る。背中から脳無をどかして言うようにラグドールの所まで移動し、彼女の安否を確認する。呼吸は正常、よかった……私はそのままラグドールの隣に陣取って、周囲を警戒する。またいつ、脳無が現れるかわからない。彼女を守るのは今私だけ、意識を飛ばすな。起きていないと。大丈夫、気付けなから今沢山受けた。暫くは、起きていられる。

「……あ、誰か……来た？」

どのくらいそうしてたのだろうか。意識を飛ばさないように必死で時間の感覚が飛んでいたみたい。真っ暗なこの場所、私が向いているその先の方から大きな破壊音と、多数の人間の声が聞こえてくる。

確保、とかメイデンを持ってきてくれと聞こえるから警察かヒーローだ。おそらく脳無が向こうにまだいて、ヒーローたちが制圧してるんだ。

いまだに気を失ったラグドールを抱える。案の定、私の正面の壁が粉碎されてがれきやら何かがこちらに飛んでくる。ラグドールの上に覆いかぶさるようにして私のがれきを受ける。ラグドールのヒーロースーツに私の血が付いてしまった。後で謝らないと、クリーニング代いくらだろう。顔をあげると、大きな手が壁を粉碎していた。これは、Mテレディだ。手が引つ込むとなだれ込むように人が入ってくる。

「っ!?要救助者発見!大丈夫だ!よく頑張った!君は助かる!」

「ちよ、ちよつと!重症じゃない!急ぎなさいよ警察!ストレッツチャーぶん投げなさいよ!」

「櫟!ラグドール……!」

入ってきたのは、ベストジーニスト、ギヤングオルカ、Mテレディ、そして虎を始めとするヒーローたち。私を見つけたヒーロー達は、私とラグドールを発見してすぐに駆け寄ってきて、安否を確認してくれる。血まみれの私を見て一瞬青ざめたヒーロー達だけど、私の意識がはつきりあることを見て安堵した表情になる。大柄でパワーがあるシヤチ人間、ギヤングオルカが私を支えて、横抱きに抱き上げてくれる。

「その体で、ラグドールを守ったか。賞賛する。よく耐えた、よく頑張った。あとは俺たちに任せて休め。君の帰りを待っている人がいる」

「……はい」

「……困るな、それを持っていかれるのは。脳無はいくらでも作れるが、その子は換えが効かなくてね」

「動くな!貴様、何者だ……!」

オールフオーワン……!黒くてまがましい機械を首から上につけたオールフオーワンがいつの間にか立っていて、手をくい、と動かし。すると私の口からごぼごぼとあいつが転移するときに使って

た酷い臭いのヘドロのような黒い液体が出てきて、一瞬で私を覆う。ギャングオルカが私の体を掴んで阻止しようとしてくれるけど、一瞬私の感覚が全てなくなつて……それが戻った時目の前の全てが更地に変わっていた。

「さて……やるか」

「ギャングオルカ、虎さん、ベストジーニスト、Mテレディ……!？」  
「流石はベストジーニスト！僕は彼女以外を消し飛ばすつもりだったんだが、君のおかげで仕損じた！皆の衣服を操って攻撃範囲のギリギリ外に寄せたね！いい練度だ、並みじゃない！」

わざとらしいほどの拍手をするオールフォーワン。私がいるのは彼の隣、そこに転移させられたようだ。見れば、まるで横向きの竜巻に挟られたような現場の隅に、ヒーローたちが転がっていた。意識の有無は分からないけどきつと……生きている。代償にベストジーニストはオールフォーワンの前でまともに攻撃を浴びて動けなくなつた。

「おっと、それでまだ動けたのか」

「……うう、貴方の思い通りになんて、させないから……かふっ!!」  
指でつぼうを構えたオールフォーワンが攻撃に入るのに合わせてベストジーニストを庇う。受けた左腕が粉碎されて、私は何度かバウンドを重ねた後、がれきに背中から突っ込んだ。お腹が熱い、脇腹だ。ああ、鉄筋が刺さったんだ、と他人事のように自分のお腹を見る。脇腹を貫通した鉄筋を体を起こして引き抜いた。だくだくと血が溢れる傷を右の指から溶接用のバーナーを出して焼いて塞ぐ。じゆううつという音と死にそうなほどの痛み、歯を食いしばって耐える。

バシヤ、と音を立てて私をオールフォーワンのそばに転送したヘッド口がまた現れる。また脳無……？かと思つたが違う。見慣れた金髪の男の子……爆豪くん。なんじやこりやあ！と大声で怒鳴る爆豪くんが周りを見て、オールフォーワンを見つける。彼は一瞬でバックステップで距離を取った。そうか、ヴィランは目的を達成しちゃったんだ。私だけじゃなくて、爆豪くんの拉致にも成功したんだ。

そのままオールフォーワンを警戒した爆豪くんが周りを確認して、

私を見つける。情けなく血まみれでへたり込む私を見た彼の目が零れ落ちそうなほど見開かれた。そっか、そうだよね……今私結構ギリギリの怪我してるんだ。背中は茶毘のせいで焼けちゃったし、左目はなくなつて血が髪の毛に染みて固まつちやつてる。口から吐血したし、服は真つ赤だし、おまけにお腹に穴が開いてる。気持ち悪いと思うのもしょうがない。

「んだよ……それ……！ 櫟、てめえ……」

「……大丈夫、生きてるよ。ごめんね、気持ち悪いものを見せて」

「そうじゃねえ！ そうじゃねえだろ！……クソが！ てめえか！ こいつこんなにしやがったやつは！」

「イエスでありノーだ。彼女の怪我は自業自得だよ、しかし君がクラスメイトの心配をするとは。彼女がそんなに大事か？」

「はあああ?! 心配なんざしてねー！ 俺はこのクソメカ女に負けてんだよ！ 万全のこいつに勝つんだ俺は！ 断りなくこいつ半殺しにしてんじゃねーぞ！」

爆豪くんらしい怒り方に私は一瞬呆気に取られてしまう。だけど、少しうれしかった、なんだかんだ彼は私や他のクラスメイトにアタリが強く、一人で行動することを好んでいる。えーくんを始めとして構いに行く人もいるけど、自分からこちらに関わることはほとんどない。その彼が、私を越えるべきものとして見据えてたことがこの上なく嬉しかった。

ふふ、といつの間にか口元が弧を描いていた。口にたまった血をぺつとその辺に吐き出して、立ち上がる。左手を再構成して、歩を進める。爆豪くんが転送されてきたのとはほぼ同タイミングで同じように転送されてきたヴィラン連合の面々が、事態を把握して立ち上がる。全身痛いし貧血でぼーつとするけど、私は全然平気、機械だから?……違う、心が折れてないからだ。

「寝てやがれ、邪魔すんな」

「えへへ、今私元気一杯なの。動きたい気分なんだ……利用して、私の事」

「……途中で死んだら殺すぞ、櫟」

「じゃあ、頑張つて生きることにするよ」

爆豪くん、素直に下がつてろつて言えないのかなあ？けど、彼が来てくれたおかげで気力が沸いてきたのは間違いない。体はズタボロでも心はベストコンディション、負ける気がしないよ。そろそろ血も止まつてきた。ギリギリ失血死はしないかな。ヴィラン連合相手だけど、私の天敵の茶毘はどうやら気絶してるみたい。Mr.コンプレスが彼を圧縮してポケットに入れる。死柄木にコマ持つて逃げようぜ、と言つてる所を見ると私と爆豪くんは依然彼らの拉致ターゲットの様子だ。

おそらくこのまま戦闘に入るのだろう。ヴィラン連合はまだいい、だけどオールフォーワンを相手にしてどこまで粘れるか……！爆豪くん一人なら逃がせるかもしれない。申し訳ないけど場合によっては強引に逃がした方がいいかも、と私がいくつか起こりうる可能性を思案していると、オールフォーワンが明後日の空を見上げた。

「来てるね、やはり」

ぼつりと奴が呟いたのと同時に、流星が降ってきた。見覚えのあるその姿、No.1ヒーロー、オールマイト。ガッツリ手四つで組み合った二人、余波がすさまじい衝撃波となってあたりを駆け抜ける。

「全てを返してもらおうぞ！オールフォーワン！」

「また僕を殺すか？オールマイト！」

戦いが、はじまる

## 56話

「随分と遅かったじゃないか。バーからここまで約5キロ……優に20秒はかかったの現着だ。衰えたね、オールマイト」

「貴様こそ、なんだその愉快的なマスクは!?!かなり無理をしているんじゃないか!?!」

「こほつ、オールマイト先生……」

「樫少女……!?!貴様……!?!その子に何をしたア!!」

「今更僕のやることに怒るのかい?ただ、友達になってほしいと言っただけさ。断られたから少々八つ当たりしたけどね」

バチイ、と音を立てて降ってきたオールマイト先生がオールフォーワンに振り払われる。たったそれだけですさまじい衝撃波が発生して砂埃があたりに巻き起こり、私たちを吹っ飛ばしかける。ここでやっと考えられてたことの最後のピースがはまった。ワンフォーオールの話聞いた時にオールマイト先生が語ったワンフォーオールが立ち向かう巨悪、それがオールフォーワンだったんだ。オールマイト先生を半死半生にしたのが多分、このヴィラン……!!

オールフォーワンの後ろで爆豪くんと突っ立っている私を見たオールマイト先生は、オールフォーワンに怒りに震える声で怒鳴りつけ、オールフォーワンは面白そうにそれを茶化す。これ以上話しても無駄だということは分かり切ってるのだろう。オールマイト先生はそのまま拳を構えて戦闘の体勢に入る。

「5年前と同じ轍は踏まん。樫少女と爆豪少年を取り戻し貴様を牢にぶち込む!貴様が手繰っているヴィラン連合もろとも!」

「それはそれは……お互いやるが多くて大変だな」

オールマイト先生の戦闘は近接での殴り合い、オーソドックスだ。彼の規格外のパワーがあればヴィランなんてひとたまりもない。相手が、目の前の巨悪でなければ。認識外の速度でオールフォーワンに迫るオールマイト先生が、カウンターを入れられて吹き飛んだ。一瞬、オールフォーワンの手が膨れ上がったと思ったら、サドンインパクトのような空気砲が発射されてオールマイト先生を吹き飛ばした

のだ。けど同時に、オールマイルト先生も攻撃を当ててたらしく、オールフォーワンが地面を擦りながらぶっ飛んだ。

お互いにカウンターを入れられて吹っ飛んだ二人は同時にビルに突っ込む。何棟ものビルが一瞬で貫通されてドミノ倒しのようになり落ちる。すさまじい衝撃波があたりを駆け抜け、私たちは吹き飛びそうになる。飛んでくる石や砂利から爆豪くんを抱き寄せて庇う。いつもならすさまじい抵抗を見せる彼でも、私がボロボロだからか、目の前の光景が信じられないからか無抵抗だ。

「衰えていると思つたが、どうやら想定よりも保っているらしい。起きろ、黒霧。弔を逃がせ」

オールマイルト先生より一瞬早くこちらに戻ってきたオールフォーワンの手が黒い爪となつて伸びて、気絶していたらしい黒霧に突き刺さる。彼は一瞬びくりと震えて、大きな黒い霧のゲートを作り出した。強制的に個性を発動させたんだ。それを皮切りに見ているだけだったヴィラン連合の面々が立ち上がる。来る、と私は爆豪くんを解放する、少々服が血に汚れてしまつて申し訳ない、判断力が落ちて来てるかな？右目まで抜かれてたらヤバかったけど、無事だし幸い機械の目だ。霞んだりとかはしないし、問題ない。どれだけ動けるかな？激しい動きは無理だ、出血が嵩む。

「行こう死柄木！あいつがオールマイルト止めてくれてるうちに……！コマを忘れずにな」

「やってみろや……！」

「……もう、油断しないよ……！」

膠着状態だった戦場が一気に動く、空中でオールマイルト先生とオールフォーワンが同時に衝突して、地上では背中合わせになった爆豪くんと私がヴィラン連合の6人を同時に相手する。注意すべきなのはデクくんからの情報で明らかになった5指を接触させることでモノを崩壊させる死柄木と問答無用で圧縮させられるMr.コンプレスの二人。広範囲を焼き払える茶毘とワープゲートの黒霧はダウン中、しのげるはずだ。

爆豪くんは無言で死柄木とMrコンプレスを爆破で威嚇して自分



に注意を向ける。無言の気遣いに、少しだけ口の端が上がった。派手な覆面を被ったヴィランがメジャーのような武器を鞭のように伸ばして攻撃してくる。私はメジャーを手で掴んで、全力で後ろに引く張る。覆面ヴィランは綱引きに一瞬で負けて私の方にすっ飛んできた。そのままカウンターで顔を殴りつけようとしたら、引く張られる。私を引く張っているのはマグネと傍にいるトカゲ男だった。確かにこのヴィランの個性は磁力、人間に磁力を付与することができる個性、つまり私は彼に磁力で引く張られているのか……！私は態勢を整える暇すら与えられず、仰向けに引きずられるような態勢のまま顔面に振り下ろされるナイフを避けることが出来なかった。

「……冗談だろ」

「反則よ、アンタ」

「ご馳走様でした、まずかった」

ナイフを口で受けた私は、そのナイフを噛み砕いて、飲み下す。驚いたのか一瞬止まったトカゲ男を、襟首を掴んで腕の力だけでぶん投げた。爆豪くんの方に向かったトカゲ男は見事にMr.コンプレースとぶつかり合ってもんどりうって倒れ込む。それを勝機と見た爆豪くんがいつも通りのすさまじい顔で笑い、連続した爆破を放って二人を黒霧近くまで吹き飛ばして死柄木とのタイマンに持ち込む。

「ああ、もう！力任せってこれだから厄介なのよ！せめてダメージ受けるふりくらいしたらどうなの!？」

「ごめんなさい、私今どこが痛いかわからないくらい全身痛いんだ。でも便利だよ、くらつても無視できるから」

「アンタ、イカれてるわ……!」

マグネの攻撃が私に突き刺さる。けど私はそれを無視してそのままマグネの腕を掴んだ。確かに重い打撃だ。普通の人食らったら病院行きは免れない、だけどさつき受けた脳無のパンチとか、高圧電流とか茶毘の炎とかそういうのに比べれば撫でられたくらいなものだよ。いい感じに痛覚が麻痺してるから、痛くもない。というか痛すぎてどこに打撃貰っても一緒だ。

「捕まえた」

「っ！放して！」

「カアイイねえ！ねえ！もつと血が出てボロボロなのがいいと思うの！」

ぐさり、と背中にナイフがささる。捻り上げたマグネの手を離さずに顔だけで肩越しに後ろを振り向くと、逆手にもったナイフを私の背中に突き立てていたのはこの場にいるヴィラン連合で唯一の少女。おそらく私と同年代のイマドキっぽい女の子が狂気的なほどの笑顔を浮かべたまま私の背中を刺していた。力を込めてマグネの腕を強くひねり、肘と肩の関節を同時に破壊して、その女の子に逆の腕を振るう。

「ぐがああああっ!？」

「え？」

余裕がないのであまり加減が上手にできない。胴体に直撃した私の手を避けられなかった女の子は車に跳ねられるように勢いよく吹き飛んで爆豪くんの方へ飛んでいった。そこで私は頭がぼーっとする感覚を抑えきれずにふらついて倒れる。倒れた衝撃が気付けなくなったのかそこで頭の靄が少し腫れた。背中に手を伸ばしてナイフを抜き取る。そのまま歯を食いしばって立ち上がった。

「楳少女！爆豪少年！今行く！」

「行かさないさ。そのために僕がいる」

「楳！死んだら殺すつつつたろうが！そんなところでくたばってんじゃねえぞ！」

「……うん、わかって、る」

行動不能にできたのはマグネと女の子だけだ。明らかに戦闘慣れしてるマグネを制圧できたのは大きかったかもしれないけど、その代わりに私に限界が来た。元気いっぱいなんて言ってみただけで正直だ。爆豪くんの喝に何とか返事をするけど、正直今は立つだけで精いっぱい。だけどここで私が抜ければ一気に戦線が瓦解する。

「弱い所から狙うのは常套手段だよなあ？悪く思うなよ」

「おっと爆豪、お前はこっちだ！マジックで遊んでやるよ！」

「おいふざけんな！楳！こっち向け！」

オールマイト先生がこっちに来ようとしてオールフオーワンに止められる。その繰り返し、ふらついている私を見た死柄木は勝機と見たか、爆豪くんを迂回して私に突っ込んでくる。爆豪くんはそれに反応するもののMr.コンプレスと覆面の対応に手いっぱい。こっちに来れない。死柄木の手が私に触れるタイミングで爆豪くんは私に向かつて大声を張り上げる。返事をするだけの気力はないけど、あと一手だけなら動けそうだ。

「ゲームセットだ」

「……そうだね」

「なっ——っ!？」

腕を何とか差し込んで死柄木の手を防御した私、手が崩壊を予兆させる罅が入る、そして防御した私の左手が自爆して死柄木を大きく吹き飛ばした。とっさに手を放して後ろに飛んだ死柄木だけど、爆発の威力を全て殺すことは出来ずに背中から地面に叩き付けられる。左手を失った私があるとかの場に踏みとどまる。ああ、もうこれでも歩も動けない。10秒後にはうつぶせに地面に転がっていることだろう。爆豪くんがヴィラン二人を振り払ってこちらに飛んできてるのが何とか視認できる。

そしてその瞬間、状況を全てぶち壊す出来事が起こった。私の前方、爆豪くんから見て背後から見覚えのある大氷壁がすさまじい音と速度で屹立し、その上を誰かが、複数人で戦場を横断するように飛んでいった。視覚情報だけはまだ万全に動いてくれるので誰なのか、それを確認する。

「あう……ああ……えー、くん……!？」

「希械ツ!!!爆豪!!!来いっ!!」

こんな状況なのに右目の視界がぼやける。機能がおかしくなったわけじゃない、泣いてるんだ、私。だって、この状況でこの場面で、一番来てほしくて、来ちゃだめな人が、私のヒーローが駆けつけてくれたんだから。えーくんを中心にデクちゃんと飯田くん。手を伸ばすえーくんを見た爆豪くんは一瞬啞然としたように驚いて、そして私の方を一直線に見つめた。

戦場の時間が一瞬、ほんの一瞬だけ予想外の出来事でフリーズする。だけど爆豪くんにとってはそれで十分だった。爆速ターボ、手から最大規模の爆破を打つことで自身を加速させた爆豪くんは私に向かって突っ込んできて、タツクルのような形で私をひっかけ、地面に向かってもう一度最大規模の爆破をかましてロケットのように私と自身を打ち出した。

「んぐあ……！クソ、重え……！！ダイエツトしろや樫……！」

「……そう、だね」

「真面目にとんじゃねえ！バカかよ、お前の幼馴染」

「お互い様、だよ」

私を俵担ぎしてるような形になった爆豪くんは手が痛むだろうに推進力を確保するため大規模の爆破を連打して上空を横断するえーくんたちに追いつく。えーくんの伸ばした手を取った爆豪くんが片手で私を強く固定してくれた。空中で姿勢を変更したのは飯田くとデクくん、私と爆豪くん、えーくんが中心になる様に両脇から抱き固めた二人、えーくんの力強い手が私を離さないように抱いてくれる。その掌に血が滲んでるのを見て申し訳ない気持ちになった。

「皆、行くよ！しっかり掴まって！かつちゃんも！」

「うるせえ！てめえに指図される筋合いねえわ！」

「だー！喧嘩すんなこんな時に！緑谷！急いでくれ！早く救急隊に希槇を見せねえと！」

「うんっ！」

見ればデクくんは足にフルグリーヴをつけていた。どうやら私の約束を今度はきちんと守ってくれたみたいだ。自損せずに、合宿の襲撃を乗り越えたんだね。デクくんはフルグリーヴを利用して空中をワンフォーオールの全力で蹴り込んだ。衝撃波が推進力になって、私たちを戦場から遠ざけていく。

背中だけ硬化させたえーくんがみんなの下敷きになって衝撃を和らげて着地することが出来た。私たちが墜落したのはパニックの最中、がれきが入り混じる繁華街だけど、戦闘範囲からは間違いなく逸れている。まずい、動きすぎた。何とか止まっていたというレベルの

出血がまた始まりだしてしまおう。

「希械！希械ツ！しつかりしろ！おい！起きてくれ！頼むから、なあっ!!」

「クソデク！緊急車両探せ！クソ眼鏡も急げ！」

えーくんが血まみれになるのを厭わずに着ている服を割いて私の止血をしようと頑張ってくれてる。周りがにわか騒がしい、サイレンの音が近いような、遠いような……。薄く開けた目から必死に私に呼びかけてくれるえーくんが見える。その声が私の意識をつなぎ留めていた。

「頭からも出血している！ガーゼは持参してきた！止めないと、切島君！」

「あ、ああ！飯田！助かる！」

「……あ、みな……いで……」

爆豪くんとデクくんが周りに知らせに走っていく。飯田くんが取り出した手当て用のガーゼを受け取ったえーくんが私の血で固まった前髪をあげようとするのをか細い声でとめる。だけど、間に合わずにえーくんは私の前髪をあげてしまう。あ、ああ、見られちゃった……。まだ知らせたくなかったのに。今まで隠してくれていた髪の毛が暴かれて空っぽになってしまった眼窩を見てしまったえーくんの顔から表情が削げ落ちる。飯田くんの顔からも、救急隊を引き連れて来てくれた爆豪くんとデクくんもだ。

「なん、だよ……それ……!」

絶望したようなえーくんの声が、周りの喧騒の中でも、よく聞こえた。

## 57話

よく生きてたね、と言われた。神野の悪夢と言われたオールマイト先生とオールフオーワンのぶつかり合いから3日が経っている。私は結局、空っぽになった左目を見られた段階で失血によるショックが限界を超えて気を失ってしまった。再起動プログラムとかそんなの関係なく、普通に死ぬ寸前だった。だった、という過去形なのは今の私は超重症であつても峠を越えて生きることが出来るから、つまり助かったのだ。命を拾うことが出来て実に嬉しい。

私の命の恩人はまたしてもえーくんで、失血で死にかけてた私に自分の血を輸血して助けてくれたの。私とえーくん、血液型いっしょだから。救急車の中でそれを行ってくれたから、私は本格的な治療を行うまでに命をつなぎ留めることが出来て、全身くまなく、と言っても手足は機械なので胴体全体に大手術を受けた。頑丈で助かった、後遺症はこのらないそうさ。なくなっちゃった目を除いて。

まあ、私は今朝個性のアラーム機能で目を覚ましたところで、まだ両親にも会えてないし、目覚めると思ってなかったらしい看護師さんが凄い顔で驚いて3回くらい転びながら廊下に出てったと思ったら医者に囲まれて色々検査されたと思つたら今度はリカバリーガールが現れて私に治療を施しながら私が気絶してからのことを色々話してくれた。私はうんうんと頷くことしかできなかつたけど、リカバリーガールにはそれで十分だったみたいだ。

まず、オールマイト先生はオールフオーワンを捕まえることができた。流星はオールマイト先生、と思つたけどヴィラン連合の面々は逃げてしまったらしい。やっぱり黒霧をどうにかしないとダメだね……それでなんだけどオールマイト先生が引退した。冗談だと思つてでしょ？冗談じゃないんだ。そもそもオールマイト先生は今無個性だ。ワンフオーオールはデクくんの中で、彼は残り火と呼ばれるワンフオーオールの残滓を使ってヒーロー活動をしていた。

そう、つまりオールマイト先生はワンフオーオールの残り火を使い切ってしまったのだ。動けないながらも右目にネットで検索した

ニュースサイトを別タブで開きながら確認していくとどこもかしこもオールナイト先生の引退をクローズアップしていた。トウルーフフォーム姿で記者会見に臨むロボロボのオールナイト先生が、真実を語っていてどえらいことになったと私はリカバリーガールの話聞きながら青ざめた。貧血でもともと青白いからバレなかった、いいい。

さてどうしたものか、と私は自分の左目があった場所、医療用眼帯で覆われたそれを上から撫でる。見えてる世界が変わった、物理的に。私は基本的に左目を利き目にして物事を見ていて、右目は基本機能をできるだけ最低限に落としていた。それは私の単なるエゴ、皆と同じものを同じように見たいという考えがあったからだ。右目の方が当然機能は上、今の視界も明るすぎるくらいにくつきり、鮮やか、そして情報量が非常に多い。そこがまた、宝物を失くしたんだな、っていう埋めようのない喪失感を私に植え付けている。

ただ、失くしちやったものはもうしようがないよね、という割り切りはオールフオーワンにあった時点でもう固めてたから改めてないことを理解してもそこまでショックではないかも。ただ……暫く左目を個性で埋めることはできない、かな。いや、起きた時さっさとやろうと思ったんだけど……うまく個性が使えないどころか過呼吸に陥ってしまった。あの目が抜かれるときの痛みや感触がフラッシュバックして、どうにもダメだったの。

問題の先送りになっちゃうけど、怪我を完璧に治してから目のことについては考えよう。ふむう……問題は山済みだね。と治療の邪魔だったせいかぱつとんと切られてしまった前髪を個性で整える。暫く目を隠すのはやめようかな。治療の時邪魔だし。

「希械！目覚めたのね！よかったわ！」

「ああ、よかった……！お前が攫われたって聞いて父さんたち気が気じゃなかったんだ……！」

「お母さん、お父さん……！」

ドアが勢いよく開いて、個室の病室の中に私の両親が転がる様に飛び込んできた。鎖骨からカテーテルを入れていくつかの点滴を受け

たままの私は動けないまま彼らを迎え入れる。ただ、両親に顔を合わせた途端に私の目から涙が溢れて止まらなくなってしまった。正直何回か死ぬかと思つたし、実際死んだと思つてた。だからこそ、両親に会えたことでこんなにも安心感で溢れているんだ。

嗚咽をこらえきれずボロボロと泣きだす私を両親は両側から強く優しく抱きしめてくれる。つかえながらも心配かけてごめんなさいと謝ると、いいんだと二人とも泣きながら慰めてくれた。ただ、どうしても謝りたかつたお母さんとお父さんから貰つた大事な目を失くしてしまったことを謝ると両親は何も言わず、ただ私に寄り添つて抱きしめてくれた。お前の方がつらいはずだ、と言われて初めて、噴き出すように辛いという気持ちが溢れてくる。割り切つた筈なのに、こんなに未練がましく、失くした左目の事を思つてる。それだけ、私は大事なものを失つたんだと気づかされた。

期末テストの時、オールマイト先生が言つていたことをようやく理解した。失つても補充できる、確かにそれは間違いなかった。使い捨ててる手や足と同列に考えていた。けど本当に大事にしていたものをなくすところなるのだということは理解してなかった、いや……：……したつもりだった。右目の時に思つたことを私は忘れていた、封じ込めていた。だからこそこうなつたんだ。痛すぎる勉強代になつてしまった。

退院は割とすぐ出来るみたいだ。お昼まで泣きながら無事を確かめ合つた私と両親はお医者さん、というか主治医のリカバリーガルのお話を聞いて胸をなでおろした。背中に刺さつたナイフとか、脳無のパンチをまともにもらつたお腹とか顔とか、鉄筋が貫通したわき腹も治癒のおかげでかなり回復してるらしい。頑丈だね、というリカバリーガルに私はいつものようにメカですから、とは返さなかつた。今回私は生身であるということ痛いほど知つたのでいつもの定型



句を返す気にはなれなかった。リカバリーガールはそれに満足そうに頷いてからカルテをもつて出ていく。

入れ違いに奇麗なノックが個室のドアを叩く。私の代わりにお母さんが返事をする。聞き覚えのある失礼しますという声とともにドアが開いた。

「相澤先生、オールマイイト先生、校長先生まで……」

入ってきたのは3人、こぎつぱりとしてスーツに身を包んだ相澤先生と、スーツながら激戦の跡が隠せない腕を吊ったオールマイイト先生。そして校長先生。お父さんとお母さんの目が少しだけ厳しいものになる。相澤先生と校長先生はそれも織り込み済みだったのかまらず私たちに向かって頭を下げる。オールマイイト先生もそれに続いた。

「今日は、改めて謝罪と説明にうかがわせて頂きました。ご息女誘拐、並びに奪還の際の負傷……全て我が校の失態が招いたこと。雄英高校の校長として謹んでお詫びを申し上げます」

「……顔をあげてください。貴方たちが悪くないというのは理解をしているつもりです。親としてはなぜうちの娘が、なぜここまで傷つく必要があったか、何かできたことはなかったかと思うことは山ほどあります。ですが、貴方方を糾弾するつもりはありません」

「お父様、しかし……」

「夫の言う通りです。悪いのはヴィランであつて、大本の責任はあなた方にはない。確かにミスはあったのでしょう、担任の先生から細かい事情は聴きました。それに、鋭児郎君からも泣きながら謝られました。あの場ではどうしようもなかった……私でもそう感じます」

「……お心遣い、痛み入ります」

「それに、命を懸けて娘を取り戻そうと奮闘してくれたヒーローが目の前にいるのに、ヒステリックに責め立てるほど未熟ではないつもりです。仮に私がここで怒れば、娘が私を叱り飛ばすでしょうね」

「さすが、お父さん。私のことよくわかってるね」

「希械のお父さんだからね、当たり前さ」

そう言ってお父さんはオールマイイト先生の肩に手首から先が金属でできた手を置く。オールマイイト先生はそれでもグツと頭を下げて

から顔を起こした。相澤先生も顔をあげてありがとうございます、と言ってからつらつらと今回の件の原因から始まりヒーロー側の対処、これからの予防策を含めた全体の話をお父さんとお母さんにプリント使って説明しだした。

どうも抜本的な改革として一番大きなものは全寮制の導入という話だ。全寮制、つまり寮生活……何それ面白そう。いやそんな軽い感覚で導入されるものじゃないんだろうけどさ。ちなみにお父さんもお母さんも同じ会社……警備会社に勤めているのでそういった内容について非常に詳しい。だから次々とこの場合は、あの場合とは例を出して防犯システムについて確認していく。

「オールマイト先生、先生はお体大丈夫なんですか？」

「ああ、大丈夫だとも。マッスルフォームもこの通り、30分なら持つき。戦えなくなっても私は君たちに寄り添い、経験を注いでいきたい。どうかそれを許して欲しい、樗少女」

「私は貴方に謝ってほしい事なんて一つもないんです。ウイルスに囚われたのだから……私が欲張ってみんなを助けようとしたからなの。そうですね、我がままを言えるのだとすれば……まだ私の先生でいてくれるととっても助かります。私はこれから強くならなければならぬので」

そう、私は強くならなきゃならない。オールフォワンには遊ばれ、脳無相手にボロボロになり、拳句の果てには仲間の手を煩わせつつ脱出をした。最後に至っては私足手纏い以外の何物でもなかったからね。爆豪くんが助けてくれなかったらどうなっていたことか。これからは今まで以上にどん欲に何でも吸収していかないといけないだろう。ここで経験値でもナンバーワンなオールマイト先生が辞職しちやったら私も困るんです。

「……警備、防犯の内容については分かりました。希械からもさつき雄英に通い続けたいと言われています。なので全寮制については受け入れさせてもらう方向で考えましょう」

「感謝いたします。また何かございましたら私共の方にご連絡をいただければまた対応させていただきます」

「わかりました。ただ一っだけ親として言わせていただきます。私が貴方方にまた娘を預けるのは貴方方を信用したわけではありません。一度狙われているこの子がまた狙われた場合、私たちでは守れないからです。もしも、雄英が安全でなくなつた場合……私たちはこの子の意思が何であれ引き離して別の手段を模索させてもらいます。この子に恨まれてもいい、これ以上傷ついてほしくない」

「私たち夫婦は出来ればこの子がやりたいことをやって、なりたい自分になれるように応援したい。ですが、傷ついていいわけじゃないんです。今回この子は目を失くしました。目ですよ？この子が自分の中で一番大事にしていたところです。それが無くたつて一大事なんです。それでも雄英でヒーローになりたいと泣きながら私たちに訴えてきました。この子の信頼を、裏切らないであげてください」

「……」忠告、痛み入ります。必ずご息女は雄英の総力をかけて守り抜き、立派なヒーローに育て上げます。どうか、これからの雄英を見て判断していただきたい……！

私の両親からの言葉を受け止めてくれた校長先生は、最後に深々と頭を下げる。両親はそれを見てほっと息をついてからこちらも頭を下げて娘をよろしくお願ひしますと校長先生に行つてから、警察の捜査協力があるからと病室を出て行つた。残つたのは先生3人と、私。

「樫、すまなかつた。一番いなきやいけない時に俺は傍にいてやれなかつた、助けてやれなかつた。担任として不甲斐ないことこの上ない」

「いえ、相澤先生もご理解してるはずです。今回の件は私の命令無視が原因、素直に施設に帰つてれば少なくとも私は攫われなかつた」

「結果論だ。それに、そうであろうともその責任は俺にある。お前は生きようと必死にあがいた。守るべき時に守れなかつた大人の失態だ。よく生き残つてくれた……！」

「……ありがとうございます、相澤先生。その、大変聞きにくい事なんですけど……私の左目の行方、分かっていますか？元に戻すのは不可能だと思えますけど……私の目を使って個性をコピーするとあのヴィランは言っていました」

私がオールフォーワンに抜き取られた左目の行方は気になるところだ。他人の所に自分の目があるっていうのは非常に気持ち悪いし、なんだかよからぬことに使われる予定みたいなことを直接オールフォーワンに聞いた。個性をコピーするのあたりは新情報だったのか校長先生が少し前のめり気味に話しを進めてくれる。

「その話、後日でいいから教えられる範囲で教えて欲しいのさ。それと、君の左目は見つかっていない。彼を尋問しても煽るばかりで口を割らないんだ。ラグドールも個性を奪われたのさ」

「やっぱり、って感じですね。私の右目で記録したことは明日かそれ以降纏めて提出させていただきます。今日は、疲れました……」

「長々と居座ってすまなかった。ゆっくり休んでくれ……もう一度どこか、プライベートで見舞いに来るよ」

「宿題、全然できてないけど許してくださいね」

私が冗談めかしてそういうと、相澤先生は仕方がないな、と珍しく冗談を受け入れてからドアを開けて去っていく。校長先生とオールマイト先生もそれに続く。私は、リクライニング機能で起きていたベッドを倒して、目を閉じる。すぐに深い闇が私を眠りに誘った。

## 58話

ままならないものだなあ。とベッドに寝転びながら考えている。私が目覚めてから1日、もう点滴は要らないということ鎖骨から体内の静脈に挿入されていたカテーテルが抜かれて、幾本もの点滴やら輸血パックやらのチューブとはおさらばになった。これに関しては喜ばしいんだけど、自由に寝がえりがうてるようになったし。私は横向きで寝るから実に寝やすくなった。

ままならないことというのはそれ以外のお話。具体的には左目のことだ。どうしても直せない。新しく作ることができない。開き直ってそのままでもいいかなと思わなくもないんだけどヒーローを目指すのに片目ってやばいハンデだよ。直す手段があるのに直さずにそのままにするのはあまりよろしくない。飯田くんの手のように戒めにしようというものでもないし。

「うーん、どうしたのかなあ」

「慌てる必要はないよ。というか焦りすぎさね。普通は時間をかけて飲み込んでいくものさ」

「それは知ってるんですけど、でもですねリカバリーガール。ないと困るんですよ左目。何回か距離感掴めずに転びましたし。階段転げ落ちて壁に穴開けちゃいましたし」

「私はいまそれ初めて聞いたよ?」

「今言いましたからね」

「そういう問題じゃないんだよ!」

壁に穴をあけた件については病院の方にすいませんでした弁償させてくださいって言ったら事故だし個性で部屋が壊れることとかまああるので気にしないでいいと言われた。壁に顔面から突っ込んだので実に左目が痛かったことを覚えてる。左目くく私の左目くく……ないと困るよう。でもなんでこんなに拒否感があるんだろうか。

疑問に思った私は人生経験豊富そうなおばあさんヒーローのリカバリーガールに一回右目を失くした時に通った道なのにどうして今回こんなに梃子搦ってしまっているのか意見を賜ったら、「アンタ、そ

れ本気で言ってるのかい？」と頭がおかしいやつみたい扱いをされてしまった。まあ大事に大事にしたよ、左目。でも実際なくなっちゃったんです。いつまでも引きずってたら辛いだけなんです。宝物でした、本当に。

わかんない。確かに大事なものだ。あの蒼い左目は私にみんなと同じものと同じように見せてくれる、私をみんなと同じ人間だとして証明してくれるものだったと思う。私がただの機械の塊じゃなくて人だという分かりやすい目印。けど、そこはもう割り切った。別に左目がないから私が私じゃなくなるって話じゃない。私は、私なのだ。全身、機械を含めた樅希械なのだ。一部欠損が出たごときで揺らぐものじゃないはずだ。

左目がなくなったことは確かに身を引き裂かれるほどの痛みだし実際引き裂かれた。私が思っている以上に私の中の重要なところに左目があったことは違いない。昨日はそのショックで両親を前に大泣きしてしまった。けど一夜開けて冷静に考えてみればみるほど、直せないのが不思議だ。だって、早く元に戻りたいんだから。力で無理やり引き抜かれた左目、仮に目玉があったとしても移植することは不可能、分かっているのに。どうしてこんなに焦がれてしまっているのか、それが分からない。

直そうとすればオールフォーワンの酸素マスク越しの歪んだ笑顔と弄られる左目の感触と痛みが脳裏をよぎって個性の制御を失う。それで結局直すのを失敗する。引き出しの中の再構成に失敗して目から零れ落ちた目が増えるばかり。首をかしげて不思議がる私にリカバリーガールは答えを教えてくださいることなくため息をつけて今日の診察は終わり、と出て行ってしまった。

コンコン、とノックの音が聞こえたのでどうぞ、と声をかける。両親だろうか？いやでも両親は私が攫われてから無理を言って仕事に穴をあけまくったのでそれを埋め合わせる為に働いてるはず。それなりのポジションにいる二人なので二人の所で決済やら仕事が止まって会社が麻痺しかけたらしい。反省。両親じゃないなら相澤先

生？有言実行すぎない？忙しいだろうに。

「ゆ、樫さん！目が覚めたって……！」

「デクくん!?……とそちら様は……?」

「あ、そうだよね！えっと、僕のお母さんなんだ」

「緑谷引子と言います。前々から、どうしても一度お話ししたいと思ってたの。出久の個性で怪我をしない方法を考えてくれたんでしよう?どうしても会ってお礼を言いたかったんです」

「え、え、デクくんの、いや出久くんのお母さん!?いやその私は別に何も特別なことは……！」

なんと入って来たのはデクくんだ。それと優しそうでふくよかな女の人……デクくんのお母さん!?思わずデクくんと言ってしまつて慌てて訂正する。これ元々爆豪くんが悪い意味で付けたあだ名らしい!ふ、ふへえ失礼なことしちゃった!恥ずかしい!穴があったら入りたい!いや掘るか!私ならず、じゃなくて!

がちやがちやぶんぶん両手を振り回して私は別に何もしてないと言ってみるけど引子さんは私がデクくんをお手伝いしたことについてかなり有難く思ってくれてたみたいで、私の気が収まらないんです。迷惑なおばちゃんの押し売りでごめんなさいねとまで言われてしまえば私もお細くありがとうございますう……というしかない。んっん!それよりも!

「お見舞いに来てくれたんだね、出久くん。嬉しいな、でも今朝全体メッセージ送ったのに随分早いね」

「え、とその……うん。凄い重症だつて聞いたから、気が気じゃなくて。クラスの人みなで行こうつて話も出たんだけど、病み上がりにそれはどうなんだつてなつてしばらく開けることになつたんだ」

「うわー、抜け駆けだ。来てくれてありがとう、嬉しいよ」

「う、うん!その……樫さんは、大丈夫、なの?」

「大丈夫だよ?もう輸液も抜けたからね!まだ内臓がちよつとアレだから固形物はダメなんだけど、ジュースが飲めるようになったのは嬉しいかな」

「そうなんだ、その……」

「あ、左目？こっちはダメだね。なくなっちゃったし。今個性で代替出来るように鋭意試行中なの。うまくいってないけどー！」

あははのはくと笑いながらデクくんが聞いたかったであろうことを答える。彼が気にすることは全くないので努めて明るく、私は気にしてないよという風に。引子さんも私の医療用眼帯の下がどうなっているのかわらなかつたのか「なくなつた……」とぼそつとつぶやいてくらすときてしまったらしい。気が弱い方なのかな、つてことは体育祭のデクくんを見て血の気引いてただろうなあ。

「ところで出久くん。フルガントレットとフルグリーヴどうだった？参考にするから使用感を教えて欲しいな」

重い空気にするつもりは一切なかつたのでちよつと強引ながら話題転換。ぶつつけ本番で投入したに等しいフルグリーヴや、メリッサさんと一緒に設計に手を入れた両手用フルガントレットも含めてこれからずつと使用するであろうデクくんへのヒアリングはとても重要なのです。あ、でもデクくんはまだ雄英に通うのかな？

「……引子さん、出久くんをまだ雄英に通わせますか？私はもう全寮制に同意したので通うことは間違いないんですけど……」

「まだ、出久と話してないの。親としては反対……けど出久は……」  
「僕は、まだ通つてたい、かな。まだ雄英で学べることは沢山あるはずなんだ。ここで別の学校に行つたら目をかけてくれる先生方に申し訳ないし……」

雄英高校の全寮制導入についてはかなり難しい問題だと思う。私はヴィランに狙われた上に片目を奪われてしまったという事実があつて、他の学校では私を守れないという両親の判断のおかげで通い続けることができる。世間では雄英へ非難の声が集まっているが、プロヒーローが常に常駐しているヒーロー科は数少ない。雄英はその数も段違いだ、他の場合多くは囑託のヒーローが非常勤講師という形で教鞭をとつていることの方が多いから……。

「うーん、私としては出久くんとまた学校でいろいろやれたらなあと思つてるから残つてくれた方が嬉しいかな」

こういう気持ちはストレートに伝えるべし、というのがお母さんの



教えの一つなのでデクくんに残ってよの思念をぶつけつつ言葉でもお願いしてみる。判断するのは引子さんとデクくんだから何とも言えないんだけどね！ただ、デクくんがワンフオーオールを継いでしまってる以上、もう平和な日常には戻れない。望むと望まざるとにかかわらず、きつと戦いに巻き込まれる。その時私がいなかったら？フルガントレットが無かったら？デクくんは逃げずに立ち向かい自損することだろう。嫌です絶対に。デクくんがコントロールを完璧にするまでは私はお手伝いすると心に決めているのだ、うん。

結局あの後私の目に触れることはなくデクさんと引子さんはフルガントレットの使用感を教えてくれたあと当たり障りのない会話を少ししてから帰っていった。気を遣われてるね……まあ私も友達の目がなくなりまして言われたらどう声をかけていいか分からなくなるからね。デクくんたちが帰ってお昼を挟み、まあ私は重湯だったんだけど。ナイフよりは美味しかったです。通算15回目の眼球再構成チャレンジを失敗して失敗品を引き出しに放り込んだところでまた個室のドアがノックされる。今度は誰だろ？

「……希械ちゃん……？」

「三奈ちゃん！来てくれたの!?!」

遠慮がちに引き戸を開けて顔を少し出してこちらの様子を伺っているのは三奈ちゃんだった。いつもと違ってかなりしおらしい様子の三奈ちゃんは私が来てくれて嬉しい！というとその黒い目からぼろぼろと無言で大粒の涙を流しだしてしまった。そしてその場に荷物を放り出して私の所に倒れ込むように抱き着いてわんわんと大声で泣きだした。

「うわあ~~~~ん！よかった、よかったよお！希械ちゃんが救急車で運ばれたの見た時、私心臓止まるかと思っ……！生きてる、希械ちゃんが生きてる~~~~!!」

「え？もしかして三奈ちゃんえーくんたちと一緒に神野に……？」

「うん……！切島が行くっていうから私も……！希械ちゃん助けなきゃって……！」

「そう、なんだ……。ありがとう、三奈ちゃん。助けてくれて」

「いいんだよ〜！うええええん！！」

そっか、そうなんだ……。三奈ちゃんあの場所に居たんだね。分断されてたから分からないけど轟くんは確実にいただろうし……。かなり大人数で動いてくれたんだろう。嬉しい反面、危ないことをしてほしくはなかったなと自分のことを棚上げしてしまう。三奈ちゃんやえーくんが傷つく方が私にとってはずっとつらいから。

暫く私に泣きつく三奈ちゃんを抱きしめて落ち着くまで待った。思いつきり泣いてすつきりしたのか三奈ちゃんは私がきちんと生きていることを確かめるように私の手をにぎにぎしている。あのそこメカだよ？冷たいし硬いでしょ？だからと言って生身の部分をにぎにぎされるのも困るんだけどね……

「ねー聞いてよ希械ちゃん！切島のやつ、誘ったのにお見舞い来ないって言ったの！……。合わす顔がないって……」

「えーくんのせいじゃないのに……」

えーくん、責任を感じちゃってるんだ……。私としてはえーくんにお礼を言いたい気持ちでいっぱいなんだけど……。リカバリーガールが教えてくれた救急車内の輸血のことだってあるし……。ぶんすこと最初は勢い良く怒ってた三奈ちゃんも次第に勢いを失って絞り出すような声でえーくんの言葉を伝えてくれる。

「三奈ちゃん、ありがとうね。来てくれて。私とっても寂しくしてたから……。ここ、誰も来なかったら凄く静かなの」

「うん……。ねえ、またみんなで笑えるかな？ーAのみんなで、同じクラス、同じガツコでさ」

私の手を撫でながらそんなことを言う三奈ちゃん。不安だよね、そうだよ。だって、雄英に入ってから普通なら逢わないことばかりに逢ってきた。ヴィランの襲撃もそう。三奈ちゃんがあんなに楽しみにしてた合宿だって3日で途中中断、クラスメイトの何人かはガスの被害にあって、私と爆豪くんは拉致。ヒーロー社会そのものの信用が落ちてきている。

「皆次第、としか言えないけど。私は三奈ちゃんの傍にいるから。」

またカラオケいこ？」

「うん……」

大丈夫だよ、という私の励ましに頷いてくれる三奈ちゃん。私たちはそのあと、退院したらパーティーしよう！という三奈ちゃんの案にのって退院したらお腹いっぱい美味しいものを食べたいなという欲に任せて何を食べるか何をするかという楽しい話を繰り広げるのだった。私を気遣ってか、目の話に一切触れなかった三奈ちゃんの優しさが、ただただ暖かった。

もうすぐ面会の時間が終わる、という頃になって本日3度目のノックが私の病室のドアを叩く。はいはいと三奈ちゃんが返事をしてドアを開けると……

「……切島？」

「えーくん……」

「悪い……やっぱり、来なきやダメだよなって、思ってたよ」

ドアの前に居たのは所在なさげでいつもあげている髪の毛を下ろし、ほとんど部屋着みたいな恰好のえーくんだった。走ってきたのか体は汗ばんでいて、息は乱れている。いつもなら元気よく部屋に入ってくるはずなのに、そうしない。まるでドアが境界線かのように、彼はそこから私の顔……左目を見つめていた。

## 59話

「入りなよ、切島」

「……ああ」

三奈ちゃんがえーくんを病室の中へ促し、お互いの顔を見つめ合っていた状態から私たちは解放される。自分には病室の中に入る権利もないという感じだったえーくんは躊躇いながらも病室の中に入ってきた。それでも入り口で止まったままのえーくんを三奈ちゃんが話すことあるんでしょ？と背中を押しして私が寝ているベッドの前まで押してきてくれる。

「じゃ、私は帰るよ。前途ある若者を邪魔するわけにはいかないからね」

「もう、誰視点なの。ありがと、三奈ちゃん。またね」

三奈ちゃんは多分、えーくんが来るって分かっててそれまで待ってたんだ。多分普段の三奈ちゃんならえーくんを引つ張つてでもつれてきただろうけど、今回はえーくんが自分から来るって分かってたからあえてそのまま放置してたんだね。ひらひらと手を振つてごゆっくりくなんて言いながら帰っていく三奈ちゃんを見送る。

ベッドの傍まで来たえーくんだけど、椅子に座ることはなくまた無言で私の目に視線をやっている。今までよりも見えすぎる右目の視界がえーくんの眼球の運動までも解析しようとするので意識してそれを抑えた。それでもえーくんの顔はまるで罪を犯して裁かれるのを待つ囚人のよう。いつも明るく笑顔なえーくんの面影はそこにはなかった。

「えーくん、ありがとうね。救急車の中で輸血してくれて。おかげで助かりました」

「……そんだけしかできなかった。考えたこともなかった、お前が死ぬかもしれねえだなんて」

「そのそれだけのおかげで私は助かったんだよ？それに、私だって自分が死ぬかもしれないだなんて本気で考えたこと、なかったよ」

えーくんの声はいつになく沈んでいた。えーくんは少々、その……

自罰的な面がある。いつもは明るく振舞って、周囲のムードメーカーをやっているえーくんだけけど少々自分に自信を持ってなくなってしまうているんだ。雄英に入る前、中学時代の時のある事件を契機に、これまでの自主トレを一層厳しくして絶対に倒れない男になろうとしてたえーくんが育てていた自負と自信はこの夏合宿の事件で崩れ去ってしまった。

「なあ、覚えてるか？ 中学時代、芦戸とお前がヴィランに話しかけられた時……」

「うん、覚えてるよ。三奈ちゃんが私を庇ってくれた。殴られるギリギリで、えーくんが三奈ちゃんを守ってくれたね」

中学2年生になりたてのころだった。三奈ちゃんと買い食いをして帰るところで、私たちは私並みに大きくて太い、聖書を片手に持った男に話しかけられた。道を尋ねる男だったけど、あまりの威圧感のある風体と帽子の影から覗く狂気に侵された目は、私たちを凍り付かせるには十分だった。私は、その時固まってしまつて声すら出せなかった。動けば殺されるという恐怖をそこで始めた味わつたからだ。

対して三奈ちゃんは、目に涙を浮かべつつも、私の前に出た。そして尋ねられた道を教えたのだ。それで去ってくればよかったのだけど、男はブツブツと何かを言ったかと思うと「主の御許に返す」と言つてグローブのような大きな手を振るつて三奈ちゃんを殴ろうとした。私は咄嗟に三奈ちゃんを引っぱって、近くにいて騒ぎを見てたえーくんが割り込んでくれたおかげで三奈ちゃんは助かった。

そのあとは、騒ぎを見ていた別の人が通報してくれたおかげでヒーローが到着し、その男は逮捕された。わんわんと泣いてしまった三奈ちゃんにつられて彼女を抱きしめつつ私も泣いたのを覚えている。えーくんが言っているのとはそのことだろう。

「強いやつは、一歩目が速え……芦戸が踏み出した一歩は俺よりも速かった。俺はいつも誰かの2歩目だ。今回も、そうだ」

「……私は、その一歩すら踏めなかったよ。だから、私とえーくんはそうなるように頑張ってきたんじゃない」

「そう、だよな。でも結局、届かなかつた。一撃だ、一撃。頭に血

昇って冷静さ失って、焦って突撃して、そんで言い訳のしようもなく負けた……そのせいで、お前が攫われたんだ……！」

ぎゅつと手を握りしめたえーくんは顔を俯かせて絞り出すようにそういう。震える声で吐き出される悔恨はそんなことない！という否定をさせてもらえないほど重くて、辛そうで……その原因が私だということに、申し訳がなくなってしまう。ちがうの、違うんだよえーくん。えーくんは全然悪くないんだよ。

「……あの夜、お前の髪をあげて、見ちまった時……幼稚園でのアレを思い出した。なんで忘れてたんだって自分を殴りたくなつた……てめえで守るって決めたもんを俺は2回も守れなかったんだ。何が男だよ、笑っちゃまうぜ……！」

「えーくん、思いだして……？」

「ああ、思いだした。お前の目に石が当たった後に動いた……同じだ。神野と。結局俺は、お前が傷ついてからしか動けねえ……！」

ぼたり、ぼたりとえーくんが握りしめた手から血が滴って床に落ちていく。私の左目が失われたことが契機となつてえーくんが封じていた幼稚園の……私の右目がなくなつてしまった事故の件を完全に思いだしてしまったらしい。私は、彼にどんな言葉をかければいいんだろう。私のせいでここまで彼を追い詰めてしまった、原因の私は彼にどうしてあげればいいんだろうか。

「ねえ、えーくん」

「……悪い、変な話聞かせた。帰って頭冷やす、うわっ!？」

「私はさ、えーくんに負けたくないって思ってたの。知ってる？幼稚園の時も中学校の時も、私は自分で動けなかったんだよ？」

踵を返して部屋を出て行こうとするえーくんの手を掴み、体を持ち上げて私が寝てるベッドの上に無理やり引き込んで、抱きしめる。どうしても言いたかったから、話したかったから。逃がさないために。血のにじんだ彼の拳を私の手でゆっくりほどいていく。はじめは驚いたのか慌てるえーくんだったが、私と目が合ってから、体の力を抜いてくれた。

「何時もね、私の前にはえーくんがいたの。幼稚園の時の痛かった

時も、小学校の寂しかった時も、中学校の怖かった時も。いつもえーくんが私の前にいて、引っ張ってくれた。三奈ちゃんにも助けられて、私も変わりたいって、えーくんたちの隣に居たいって思ったの」「別に、俺はそんなことは……」

「そうだよ。私はえーくんが『当たり前前』にやってくれてることにずっと助けられてたの。ずっとえーくんを守られてた。だから今度は私も守りたいって思ったんだ。自分を責めないで。えーくんはいっただって、私のヒーローなんだから」

「俺が、ヒーロー？」

「うん。マスキュラーと戦った時。えーくん覚えてる？ずっと、誰よりも先にマスキュラーの攻撃に立ち向かってたでしょ？一歩遅れてなんかない。ずっと私たちの一歩先で、攻撃を受け止めてくれてたじゃない」

マスキュラーとの戦闘で、えーくんは常に最前線に立ってた。攻撃を受けた回数は誰よりも多くて、後ろを守り切っていた。私の言葉に少し目を丸くしたえーくんの手を取って、眼帯の上、私のなくなつた左目の上に重ねる。少しびくつとしたえーくんだったけど、今なら多分、行けそうな気がする。やっぱり、私を助けてくれるのはいつだって彼なんだ。

「正直、えーくんの辛さって私が変わってあげられるものじゃない。でも、一緒に立ち上がって前に進むことはできると思うの」

「……まだ、俺がヒーローになれるって思ってくれるのか？」

「もう、言ったでしょ？えーくんは私のヒーローなの。なれるじゃないかってもうなってるの！それに、洗汰くんから手紙、貰ったでしょ？」

「……あ……」

か細い声がえーくんから漏れる。洗汰くんは、私たちが助けた後落ち着いてから手紙を書いてくれて、送ってくれていた。目覚めた時に枕元にあったそれを読んで、助けられたんだと誇らしくなった。デクくんも受け取っていたし、えーくんにも送ったということはひらがなだらけの手紙にしたためられていたから、彼にも送られたということに分かっている。

「プロヒーローじゃないけど、私たちは誰かを助けられた。後悔をしないっていうのは難しいけど、しないように努力しようよ。負けっぱなしじゃ悔しいよ、私。リベンジするとき、えーくんが隣にいてくれれば、負けないから」

「……見舞いに来て、俺が励まされてちやあ世話ないな」

「うん、その調子。ヒーロー、諦めないでよ。今度は勝とうよ、みんなで」

えーくんの手を解放して、医療用眼帯を外す。閉じっぱなしだった瞼を開けば、一瞬のホワイトアウトのちに一気に視界が広がった。左目も追加された視界に、目から涙をこぼすえーくんの顔が映る。新しく嵌まった左目で彼を見つめる。不思議とフラツシユバックは起きなかった。

「何色？私の今の左目」

「……真っ赤」

「そっか。あーあ、轟くんとお揃いじゃなくなっちゃった。さてえーくん、もう少し抱っこしてもいい？」

「え？いやそれはいろんな意味で待った方が」

「答えは聞いてなーい！」

むぎゆううううー！と思いつきりえーくんを抱きしめる。私の左にまた光をともしてくれたお礼を込めて、思いつきり、苦しいくらいになくなってしまった左目は、戻らない。だけど新しく作り直して、また大事にしていける。それでいい、それがいい。私が左を直せなかったのは、思い出がなくなってしまう気がしたからだ。左で見つめてきた全てがなくなってしまうと思ったからなんだ。

だけどえーくんと話して分かった。まだまだ思い出は作っていきける。新しい左目で見つめていけるって。泣き笑いの状態でわちゃわちやとえーくんを抱きしめる私と必死に抵抗するえーくん。入院してからこんなに思いつきり笑ったことはなかった。につこり笑って彼を見つめると、彼は仕方がなさそうに何時もの快活な笑顔を返してくれるのだった。

そのあと面会時間をブツチしていたことを知らせに来ていた看護



師さんに現場を見られて、あらぬ誤解をされかけたけど必死に弁解をすることに成功してから慌ててえーくんは帰っていった。帰る頃には、えーくんの周りにあつたよどんだ雰囲気はすっかりなくなっていた。あとはえーくんがどう向き合うか、私はきつと立ち直つてくれるって、信じてる。

「ということでは私は元気なんだよ心操くん」

「みたいだね、まあ……安心したよ」

「ごめんね。心操くんは体つきがちりしてきたね、頑張つてるみたいだし花丸あげよう」

「うわ、それどうなってるの」

翌日の事、律儀に私に連絡をくれた心操くんがお見舞いに来てくれた。どうやら相澤先生に私がどうなったという話を聞いたらしくて面会謝絶が解けたのを教えてもらった翌日にそのままこつち来てくれたみたい。病室のドアを開けた心操くんとバツチリ目が合った私を見て、彼は拍子抜けしたように大きく息を吐いてから、私に許可を取ってベッドの近くにあつた椅子に座つて、お土産らしいお菓子をくれた。

私もまあ、色々あつて今は平気だよ、という話をしたのだけど心操くんはどうやら断片的に私が超重症でヤバいという話を聞いていたらしく、包帯塗れで身動きすら取れない私を想像してたらしい。何その噂に尾ひれ背びれがついちやつた感じなのは。確かに、包帯塗れではないにしろ手術したし、色々ヤバかつたのも事実。だけどヤバかつた主な原因は失血なので輸血のおかげでだいぶ回復した。

私の目の色が変わつた件については結構驚いたみたいだけど、多分察してくれたのか心操くんは触れない。なので私も自分から触れることはなかった。もしかしたら私の両目が見えてる状態というのは心操くんにとっては珍しいかもしれないね。だって基本的に私は顔の上半分髪の毛で隠しちゃつてるし。心操くんとそのまま目を合わせるってのは私としても新鮮だ。あ、目逸らしたな。目を合わせろく？

それはともかく、私が一緒に特訓できないでいる間もサボらなかつたらしい心操くんは夏休み前に比べて結構体つきががっちりしてきたようで、実際両目の測定でも筋肉量と骨密度が上がっているのが分かる。頑張っている人が好きな私としてはこれは褒める案件なので盛大に褒める為に大きな花丸を投影してファンファーレを鳴らした。

心操くんは猫のようにビクツと驚いた様子だけど、I・アイランドの技術である触れる空間投影映像に興味を示したらしく、つんつんと花丸をつついて、それに合わせて揺れる花丸を不思議がっている。昨日のうちに復活した新しい左目はかなり好調で正直情報量が多すぎて脳みそが疲れてしまつて、何とか最低限に機能を落としてるんだけど、慣れるまではしばらくかかるかな。

「心操くんは、まだヒーローを目指す？ 神野のことは多分中継見たよね。私の姿も、見えてたでしょ」

「……見てた。オールマイトの戦いも、樫が血塗れで戦つたのも……正直、怖いと思つたよ。でもさ……憧れちまつたものは、しょうがないだろ」

「……そつか。それなら私も頑張らないとね。心操くんが頑張る限り、私は味方だし、お手伝いするよ」

「うん、有難く受け取るよ」

「ふふん、心操くんも素直になつてきたね」

「どこかの誰かさんに矯正されてるからね」

「なにを〜?」

心操くんと楽しくお話して、私は入院中の無聊を慰めるのだった。ついでに心操くんにリストバンド型の超圧縮重りをプレゼントしたら結構喜んでくれたので満足です。ふふふ、もしヒーロースーツを作ることになったら頼つてね？ そこら辺に関しては私はすでにプロだから！ ほら見てサポートアイテムの国際免許あるよ？ どんとお任せなさい！

## 仮免許編

### 60話

少しの間お世話になった病室をでる。8月の中旬、なんだかんだあったけど私は無事。髪型も元に戻した。何でつてやっぱ目を隠してないと落ち着かないし、私がオッドアイだということは学校中に知られているから。両目とも真っ赤でデジタルなレイクルが浮かんじやってるものに変わったのを少しでも隠せるなら、余計な騒ぎが起こらないし丁度いい。

ニュースで、私と爆豪くんが被害にあったのは報道されているけど、私は重症ということだけで具体的に如何なったかというのは報道されていない。仮に片目を喪失していたという報道がなされればただでさえ揺らいだヒーローへの信頼はさらに落ちることになる。悔しい話だけど責任を取るのは大人たちなのだ、私のミスだと言ってもそれは通らない。

ちなみに私は退院したその足で雄英に戻ることになっている、というか入寮が今日なのだ。荷物に関しては両親に送ってもらっているし、家具やらに関しては私の個性で作っちゃえばいいので下着と服、あとは小物程度、段ボール3つ分くらいかな。病院の前でタクシーに乗ってそのまま雄英に行くことになった。ちなみにこの交通費どころか入院費も含めて雄英持ち、すごいね。

そうしてまあ結構な時間タクシーに揺られて雄英に到着する。病院から雄英の制服でいたのでタクシーの運転手さんは気づいているんだけど寡黙なタイプなのか何も言わずに無言でいてくれた。多分、被害にあったのが私というのも分かっているのだろうか。報道では私たちは顔写真付きで放送されたので顔は割れてるんだ、それ以上にオールマイト先生の引退の方がスキャンダラスだっただろうからそのうち風化していくだろう。

そんなわけで、到着しました雄英高校。領収書を雄英宛てに切ってもらってからお金を払い、真新しくなった雄英バリエーをくぐる。敷

地内では、校舎からすぐの場所に無数のH型っぽい感じの建物が建っていた。築3日、私たちがこれから住まう学生寮であるハイツアライアンスという建物らしい。脳内でマップを確認した私はそのまま1-Aに割り当てられてる寮に進んでいく。

「あー！ー！ー！希械ちゃんや！よかつた！会えた！ー！！」

「あ、久しぶり？みんな。ご心配をおかけしました」

「ええんよ！ー！ー！」

既にクラスの大部分は集合していて、私を見つけたお茶子ちゃんが大声で叫ぶとそれのおかげでみんな振り返り、皆思い思いに私の無事を喜んでくれた。結局、お見舞いに行きたいと言っても家族が許してくれなかった人の方が多かつたらしくて、あの事件の跡で出歩くのもよろしくないだろうから、それでいいと私も思ってたところ。だから私の無事はメールで知っていても実際に目にするのはクラスの大多数が初めてだ。

「ぐえ、うえ、ぐお」

「おお、すげえ」

「女子全員を持ち上げるとは流石樫……」

クラスの女子、三奈ちゃんも含めて私に突進して抱き着いてくる。四方八方から抱き着かれた私はそれを全部持ち上げて大丈夫だよとアピール。団子みたいだね、私たち。男子たちも私が元気になったというのはよくわかったみたいなのでほっと息をついている。いやはやご迷惑をおかけしました、本当に。

「はい、集合。よし。おはよう諸君、まあ無事に全員集まれたようでは何よりだ」

しゅばつと全員が学籍番号順に整列する。相澤先生がやってきたと同時に刷り込まれた条件反射的なアレ、ぶっちゃけパブロフの犬のやつが働いた私たちは染みついた動きを完璧に発揮して相澤先生に怒られないように整列するようになってきているのだ。やってきた相澤先生はそれを見て一つ頷いてから寮の説明を始めた。

「さて、まあいろいろあるが、寮について説明する前に一つ、これからの予定について話しておく。当面は合宿で取る予定だった仮免の

取得に向けて動いていくことになる」

相澤先生が言うヒーロー仮免、それはプロヒーローの一步手前の証だ。個性の限定的行使と有事の際のヒーロー活動が一部とはいえ許される凄い免許。つまりこれを取得することが出来れば雄英の先生曰く受精卵の私たちはセミプロとして孵化することができるんだ。これは是が非でもとりたいよね。

「それに付随して大事な話だ。轟、切島、芦戸、緑谷、八百万、飯田……この6人はあの夜あの場所へ、爆豪と櫛の救出に赴いた」

ざわっ、とクラス全体の雰囲気が変わる。百ちゃんも一緒に来たんだ……気づかなかった。助けられた立場の私、全部を棚上げにして言うて来るべきじゃなかったと思う。だって、それは違法行為だ。プロヒーローの現場に潜り込み、場を混乱させる行動だった。最悪騒乱罪でヴィラン扱いされてもおかしくなかった。結果論で私と爆豪くんは助けられたけど、それでみんなの未来が閉ざされたら私はどうすればよかったのか、分からなくなる。

「その様子じゃ、多かれ少なかれ行く様子ってのは分かってたみたいだな。色々棚上げさせて言わせてもらうが、今回の件、普通なら俺は耳郎、葉隠、爆豪、櫛以外は全員除籍処分している。理由は言うまでもないな？」

そのまま先生は理由はどうあれ俺たちの信頼を裏切ったことには変わらない、と続ける。クラス中全員が沈んだ表情に変わるけど、相澤先生の厳しい言葉は必要な正論だ。だから皆反論することなく黙って聞くしかない。私たちがそれをきちんと理解したことを察した相澤先生は声音を切り替えて

「ただ、他人を大切に思う気持ち、仲間を取り戻したいという気持ち、そして負けて悔しいと思うその気持ちはヒーローとして大切なものだ。捨てずにとっておいてくれ。これからは正規の手続きを踏み正規の活躍をしてくれ。以上！さっ！元氣に行こう、中へ入れ」

んな無茶な……こんなクソ重い話のあとにテンションを上げまくれるわけもない。みんながみんな重い空気のまま戻れない。当事者であり原因の私だってそう、そこで何か思いついたらしい爆豪くんは

上鳴くんをひつつかんで木陰に隠れる。一瞬の放電音のあと、アホになつた上鳴くんがサムズアップを振り回して出てきた。それがツボらしい響香ちゃんが必死に嘔き出すのをこらえる。

「いつまでもシミつたれてんじやねえ切島。いつもみたいにあホさらせや」

「え、なにそれ。カツアゲ？」

「んなわけあるか！俺が下ろした金だタコ！さっさと元に戻れ！」

えーくんにお金……？何かあつたのかな？私にはわからない男の子の何かがあるんだろうか？今夜はこの金で焼肉だ！というえーくんだけど、誰もホットプレートとか持つてないと思うんだけど……え？私が作るの？そうなるよねきつと。別にいいんだけど、ご飯の仕込み間に合わないよう……

「1棟1クラス、右が女子、左が男子……ただし1階は共有スペースだ。食堂や風呂、洗濯などはここで」

寮の中に入ると、まるでホテルのロビーのような光景が広がっていた。広くて綺麗で、大きなテレビにソファがあり、それなりに本格的なキッチンと私の心をくすぐるのに十分な設備が揃っていた。特にキッチン！私の数少ない荷物の中には愛用のお鍋とか包丁とかも入っているので結構立派なキッチンがあるのは嬉しいな！

「豪邸やないかい……」

「お茶子ちゃん大丈夫？」

ふらふらと倒れそうになるお茶子ちゃんを支えてあげる。どうやら一人暮らしの節約生活を心がけていたお茶子ちゃんからしたら高級ホテルもかくやというハイツアライアンスの設備は高低差で耳がキーンとなるには十分だったらしい。大丈夫？と尋ねるとすぐにハッと息を吹き返したお茶子ちゃんが大丈夫、と足に来てる感じで立ち上がった。産まれたての小鹿かな？お茶子ちゃんかわいい。

「聞き間違いかな？風呂と洗濯が共有スペース……？」

「男女別だ。いい加減にしといたほうがいいぞお前」

「はい」

「相澤先生、女子の共有スペースに峰田くん専用のトラップ仕掛けでもいいですか？」

「許可する」

「畜生！」

「……日頃の行い」

ハアハアと危ない呼吸音を響かせて涎を啜る峰田くんが強めの釘をさす相澤先生。余りの目の濁りっぷりに私たち女子は寄り添いあい自らを抱きしめるように震えるしかない。おそらく合宿の時のように覗かれるんだろいうなあとというのは分かり切っているので峰田くんだけに反応するトラップを開発して設置することにしよう。見かねた常闇くんがダークシャドウで峰田くんをつるし上げて振り回して連行していく。片手を硬化させた半ギレのえーくんは私が止めておこう。はいはいえーくん大丈夫だよーつと。

先生について2階に上がる。開けられた部屋を見るとかなりの贅沢空間だ。小型とは言え冷蔵庫、エアコンにトイレ、クローゼットまで付いてる。学生寮というよりはウィークリーマンションとかそこから辺の充実具合だ。ほんとにホテルみたいだね。ベランダまである！凄いなあ！

我が家のクローゼットと同じくらいですわ、という百ちゃんのセリフにまた倒れかけるお茶子ちゃんを支える。大丈夫なのかなあこの調子で。相澤先生の号令で各自の荷物が搬入されている部屋へ入り、各自の部屋を作っているという指示の下、私たちは自らの部屋を作り自室に赴くのだった。私の部屋は2階！1階に一人しかいなくて若干寂しいけどしようがない！私重いからね！上に行くと潰れちゃ……流石にそこまで重くないもん！

「時間余っちゃった〜」

持てる技術と個性をフル活用して部屋を作り上げた私は反重力で

浮いている部屋の半分を占領するベッドの上で寝転びながらそうこぼした。超圧縮技術のおかげでコンパクトかつ多機能、それでいて省スペースというウルトラマジックで工房兼厨房兼自室を作り上げた私、実家の部屋よりも凄いや！後完全防音&吸音！たとえここでTN T火薬を爆発させても壁は無傷で音すら漏れない！そんな要塞なのです！……やり過ぎたね、間違いない。

うーん、暇になっちゃったらここはひとつ、お菓子を作るに限る！入院中の薄味のご飯も悪くはなかったけど、折角なら美味しいお菓子を食いたい。あわよくばみんなにも振舞いたい。そして暇を持て余した私、出来るだけ行程が複雑でこの夏にふさわしいお菓子……むむっ！

「シューアイスだ！材料何かあったかな!？」

実家から送られてきた沢山のお菓子の材料とか私特性ミックススパイスとか色々を棚に突っ込んで整理しつつ見つけた。牛乳に、生クリーム、卵に小麦粉、バター！ふふふ！これで作れる！アイスもシュークリームも！ベッドを飛び降りて、ぽんと叩くとベッドは折りたたまれて壁にピタツと薄くくつついた。そのまま腕を引くとジェスチャーに反応して反対側に畳まれてた調理台が自動で広がる。

目指せ！キャラメルシューアイス！と私はキャラメルを作って同時並行でアイスを作ることに決めて、小鍋にバターと牛乳、生クリームとお砂糖を入れてコトコトと火にかける作業から始めるのだった。

技術の無駄遣いでお馴染な私の急速冷凍技術によって時間のかかるキャラメルをまばらにちりばめたアイスが容器一杯に完成する。味見をして、ん〜ん〜ん〜！甘くておいしい！久しぶりのおいしさ！ちなみに私の部屋は通常の数百倍電気を消費するのでI・アイランドのインセン教授に紹介されたアメリカの大企業スターク社のCEOに頂いた宿題を解いて開発したアークリアクターというエネルギー炉を使用して電気を補っている。日本に行ったら会いたいと仰られたのでそのうち来るかもしれないね。

チーン、と大型のオーブンがサクサクのシュー生地が焼けたという合図を教えてくださいましたのでミトンに手を通し、天板を掴んでオーブンか



ら生地を出す。さつくりと焼けたシュー生地をナイフで上下に切り分ける。ちゃんと中空洞だね！ん〜、香ばしくていい匂い。あとこれにアイスを挟んで……出来た！いただきまーす！

「よし！美味しくできた！後は量産するだけ！」

粗熱が取れるまで待つて、私はそのままシュー生地を半分に分り、アイスを挟む作業を続ける。個性で作った持ち運び用冷凍庫に個別パック包装をして夜に時間があつたらみんなに振舞おうと思つてそのまま置いておく。キンキンに冷やすと美味しいんだよ〜。

「あ、みんな終わつてたんだ？お部屋、どう？」

夜になつて、私は流石にお部屋にずっといるのもアレかなと1階の共同スペースに他の女の子たちと一緒に降りる。すると男の子たちも考えることは一緒だったのか皆共同スペースのソファに座つたりして思い思いに過ごしていた。実はさつき女子である提案を男子に持ち掛けようと決めたんだ。

「ねえ男子〜！提案なんだけど……お部屋披露大会しませんか!？」

ぱん、と柏手を打つて提案する三奈ちゃんの輝く笑顔に、男子たちは楽しそうに同意するのだった。一部なんか顔がヤバい人もいるけど大丈夫かな？

## 61話

「わぁーっ！ちよつと待つて待つてままままつ……!？」

ガチャリ、と音を立ててドアが開いた。お部屋披露大会と称されたそれで真つ先にターゲットになったのは男子の中でも比較的とつきやすくそれで物腰も柔らかいみんなのよく知るあの人……つまるところデクくんである。難しい言葉を並べ立てたけど2階に上がって一番部屋が近かった哀れな人とも言う。

全力で入るのを阻止しようと腕を振り回すデクくんだけけど、爆豪くんのように爆破をしてきたりとか強引に排除とかは生来の優しさのおかげでできないらしい。私は若干申し訳なく思いつつも、気にはなるのでデクくんのお部屋に侵入する。そこには

「わぁ……オールマイト先生がいっぱいだね」

「オタク部屋だーっ！」

おお……すごい。いや凄いとしか言いようがない。だってさ、壁一面にオールマイト先生のポスターがあつて、フィギュアがきちんと棚の上に配置してあつて、カーテンもオールマイトカラー、ベッドも布団もそう。好きなんだなあとは思ってたけど改めてそう思うよ。好きなものなんだから誇ればいいのにね、恥ずかしい……分かるような分からないような。

「やべえな、なんか面白くなってきたわ」

「えーくん、ちゃんと荷ほどきできた？寮に入っちゃったから私お掃除中々してあげられないからちゃん自分でもごも……!？」

「だーっ！みんながいる前では言わないでくれよ！」

「……切島あ……オイラ今ならお前に勝てる気がするぜ……!？」

そういえば言い忘れてたし、えーくんのお母さんにも釘を刺しておいてねと言われたことを口に出すと、えーくんは真つ赤になって私の口を手を伸ばして塞ぐ。だってー、えーくんお片付けはともかくお掃除苦手じゃーん。こまけーんだよっていうけどそれがお掃除なんだよう。さて、次はお隣だね。

お隣は常闇くん……なんだけど、デクくんの件もあつたからか扉の

前で腕を組んでもたれかかり、部屋の中に入れさせない構えだ。どうしても見せたくないというならしょうがないし、なら次はべつの……と私とその隣の部屋に行こうとしたところで私を三奈ちゃんと透ちゃんが押しやって常闇くんの前にだしてしまふ。常闇くんをじつと見降ろす私とそれを見つめ返す常闇くん。どうしたらいいの？二人とも

「希械ちゃん！空輸！」

「なんだと!？」

「う、うん。ごめんね常闇くん」

どうしても常闇くんの部屋に入りたかったらしい三奈ちゃんと透ちゃんに常闇くんをどかせという指示を貰ったので、彼の脇に手を差し込んで、ぷらーんと持ち上げて私ごとドアの前からどく。そしてみんな、部屋の中に闖入する。その部屋の中は……

「暗い!?そして怖い!？」

「何かの儀式に使いそうだね……」

「出ていけ……」

呪術的、あるいは暗黒的といったらいんだらうか。真っ黒の壁紙、黒いカーテンに悪魔っぽいスタチュー、なぜか模造刀がいくつか転がっている。私には今いち理解できないんだけど無駄にとげとげしてて、持ちにくそう、重心が何ともおかしい。武器として考えた時に致命的すぎるんだけど……。インテリアなの？刀身になんか巻き付いてて使いにくそう。私だったらもっとう……

「流石にこの形は使いにくいよ。グリップが短いし、柄が金属むき出しだなんて。せめて皮を巻くか何かしないと手汗で滑って飛んでっちゃうんだけど……作った人何考えて作ったんだらう？」

「模造刀にダメだしする女子初めて見た」

「あー、希械はそこら辺の目線プロだからなく。実際ライセンス取って今プロみてーなものだし、おかしく見えちゃうんだろ」

「出ていけ!!!」

常闇くんに追い出された私たちは、無駄に眩し、もとい眩い三奈ちゃん曰く想像の域を出ない青山くんの部屋を見た後次の部屋……

に行こうとしたけどスルーして3階に上がることを決めた。それは何故か？待ち受けてるのが峰田くんだからだ。涎を垂らしながら息を荒げて入れよ……すげえの見せてやるよ……という峰田くんは360度どこから見てもへんたいふしんしゃさんだった。精神衛生上スルーするのが吉だろう。

続く部屋は尾白くん、感想としては……普通、かな？いやその特筆すべき点としては尻尾をブラッシングする用のブラシが卓上にあるくらいでドラマとかでよく見る普通の部屋をそのまま持ってきたみたいな感じだ。あるいみですごい、そして飯田くんルーム、眼鏡ずらり、本がどつさり。床にまで本があるのは少し意外かも、飯田くんならきちっと片付けるかと思ってた。

「チャライ！」

「うええ!?!よくね?!」

「とりあえず好きなもの詰め込んだ、みたいな感じだね。上鳴くんの部屋。このスケボーとか、あとこのバッシュとか1年くらい使っていないんじゃない?」

「なんでわかるんだ!?!」

チャライを形にした上鳴くんの部屋。私の両目が解析した古傷の状態から推察した予想は当たってたようで、上鳴くんは驚いた様子。そして口田くんの部屋、いたって普通だけど違うのは個性の関係上なのかうさぎが一匹部屋の中を闊歩してたこと。これは女の子ポイント高いよ口田くん!みんなうさぎにメロメロだよ……部屋関係ないね?うん?まあいつか。

「なんか釈然としねえなあ?なあ?」

「うん、俺もしないな、釈然」

「同意」

「ウイ☆」

「男子だけ言われっぱなしは納得いかねえ!お部屋披露大会だったーならよお!女子の部屋も見せろよ!誰がクラス1の部屋の持ち主か白黒はつきりつけようぜ!」

「いいよ〜〜〜!」

普通に男子の部屋を今見てるけど、終わったら女子の部屋、見せてもいいよっていう人は見せる予定だったからまあそれは問題ない話だ。私の部屋に来てくれた時に皆にシューアイス配ろうって。そんなわけで4階へ、確かこのフロアにはえーくんの部屋があったはず、ちゃんと荷ほどき出来てるかな？

「女子に分かんねえよ、この男らしさは！」

壁にかかった大漁旗、部屋の中央にあるサンドバックに筋トレグッズ。段ボールは出しっぱなし、整理整頓とは程遠い……むむむむむ……これはいけませんよえーくん。透ちゃんの彼氏にやってほしくない部屋2位にありそうという地味に扱られる感想、1位じゃないのは慈悲だろうか。それはともかく、ねえ？

「えーくん？」

「き、希械……？」

「一緒に荷ほどきしよう？今から」

どうしたのそんなに皆青ざめた顔しちゃって。ほら、私笑顔だったからえーくんのお母さんに言われた通りにするだけだよ？えーくんはやればできるんだから。ゆらあ、と両目を真紅に光らせた私の言葉にゴクリと唾をのむえーくん。というか床にダンベル置かないの。フローリング凹んじゃうでしょ。ちゃんとマットの上……マット持ってきてないの？

「えーくん??」

「あー切島？頑張れ」

「希械、まあほどほどにね？」

「希械ちゃん、先行ってるね！」

「うん。それじゃえーくん？始めるよ？」

「はい……」

みんなが部屋から出ていく。えーくん、お片付けを後回しにするのはいいんだけど結局やらないじゃない。別に私にやってほしいなら言えればいいんだけど、恥ずかしいんでしょ？しょうがないので段ボールを畳んでその上にダンベルを置いていく。ちゃんときれいで

きる部分は出来てるんだけど、なんでこう、ちょっと置いて後回しにするかなあ。やらないやつだよそれ。

ぶんすこぶんすこと耳の排熱口から蒸気を吹きだしてえーくんの残りの段ボール4箱を仕分けしていく。服でしょ、ダンベルでしょ、ダンベルでしょ、ダンベル……筋トレグッズ持ち込み過ぎだよ！床抜けるよ!? あ、私が立ててる時点で大丈夫か。早とちりだね、ごめんなさい。そんな感じで20分ほどで終了！段ボールを畳んで腕をシュレッダーっぽくして体の中に取り込む。後で体内炉で燃やしちゃう。

「はい、こんなすぐ終わるんだからめんどくさがつちやだめだよえーくん」

「あー、わり。助かったわ」

「そこでふざけんなやめろって言わないあたりえーくんもいい人だよね」

「いうわけねーだろ。実際俺の部屋片づけてもらってたりしたんだからよー」

「彼女さんが出来たらもうやらないからね？」

全くえーくんはもう。そんなこと言いながら部屋から抜ける、もうみんなはこの階にはいないみたい。ということは女子の方に行ったのかな？ 私の部屋は見せなくてよさげ？ まあ別にみても面白いことは何もないけど。そんなこと言いながらえーくんと一緒にエレベーターで共用スペースに降りた後、女子棟に向かう。するとみんな他の人の部屋は見終わっていたところだったらしく、ちょうどエレベーターが1階におりてくるところだった。

「あ、希械ちゃん間に合ったー！ねえさつき凄かったんだよ砂藤の部屋！シフォンケーキすっごい美味しかったの！」

「部屋と……シフォンケーキ？」

「皆食うと思ってよお……焼いてたんだ。好評で嬉しかったぜ」

「へー砂藤くんお菓子作りが趣味なんだ。今度一緒に何か作ろうね！」

「おう！いいぜ！樫いるなら難しいやつもいけるよな……」

「それよりも最後！希械ちゃん部屋いこ！皆待ってたんだよ！」

「え、見たいの？面白いものは何もないけど……」

みんなに促されて2階の私の部屋へ。なんだか男の子たちわくわくしてない？峰田くんは何をそんなに興奮してるんだろう？他の女の子の部屋に入ったんだよね？いいものなんてお菓子くらいしかないよ？まあ、いいか。というわけでカードキーで部屋の鍵を開けてドアを開き、みんなを促す。屋内センサーが人を感知すると照明がついて部屋中明るくなった。

「「サイバー!?!」」

「二人だけ世界観ちげーよ！」

「ホログラムがいつぱいや」

「あ、ごめん。新しい装備の設計してたんだった」

部屋の中に無数に浮かぶホログラムの設計図、壁にくっついてる折り畳みの反重力ベッド、向かいには同じく折り畳みの作業台、壁にかげられてる大型オーブン、冷蔵庫に冷凍庫。あとは高スペックのパソコンくらいかな。特筆すべきところは。私はいくつかの設計図を掴んで纏めて丸めて投げつける。部屋の隅にあるゴミ箱のホログラムからーんという音で設計図の成れの果てが入った。

「近未来……」

「あれ、希械ベッドどこ？」

「ベッドはこれー」

作業台を折りたたんで壁に引っ付け、今度はベッドを引っ張り出す。反重力でふよふよ浮いているベッドを見たみんながおお！となってるのを見るとなんだか嬉しいな。あらゆるものを折りたたんでしまえるようにすることで体の大きな私でも使いやすいように部屋を広く取っているんだよ！デクくんがホログラムの一つを手にと取ってしげしげと眺めてる。

「これ、もしかして……」

「あ、うん。それフルガントレットの改良品、の設計案だね。かっこいいでしょー？」

「うん！凄いかっこいい！色、緑なんだ！」

「デクくんのヒーロースーツが緑だからね！シルエット変えたくな  
いんでしょ？赤だと差し色になっちゃうから」

「ぶ、プルスウルトラ……」

「おい峰田。それ開いたら俺はこの電話をかけざるを得ないぞ」

「はい」

峰田くんが私のクローゼットの中を物色しようとしてえーくんに  
止められていた。ほんとに懲りないね、すごいよある意味。あ、そう  
だった！私は冷凍庫の扉を開けて、ラッピングされたシューアイスを  
みんなに渡すことにした。

「砂藤さんと被っちゃうんだけど、実は私も暇だったからシューア  
イス作ってたの！クラスのみんなの分あるから良かったら食べて！  
今食べない人は明日までなら食べられるから私の冷凍庫で保管して  
おくよ！」

「うわ！食べるー！」

「この時間にアイスは冒瀆的……うまつ！」

「うわ、すげーな樫。シューアイスとか結構難易度高いぜ？うまつ  
！俺もまだまだかあ……」

「私、砂藤くんのシフォンケーキ食べたかったな。砂藤くん合作  
したら凄いもの作れそうだよね！」

わいわいがやがやと盛り上がるみんな。これで爆豪くんを除く全  
員の部屋を見ることができたのかな？そんな感じで私たちは談話ス  
ペースに戻る。はてさて第一回部屋王はだれかな？私はみんなの部  
屋を見てないからえーくんと一緒に投票には不参加だけど、実に気  
なる話題！何でも瀬呂くんのお部屋凄いわれだったみたいなの  
！今度見せてもらえないかなあ。

「えーでは第一回部屋王は……男子の圧倒的な支持を受けての希械  
ちゃん！」

「えっ!?!なんで!?!」

お、おかしいよー！だってこういったらアレだけど私の部屋女の子っ  
ぽい要素ゼロだよ？普通に色眼鏡無しで見たら誰かの仕事場にしか  
見えないよ!?!頭の中に疑問符が浮かび上がって湯気をあげてオー



バーロード仕掛けてる私に男子たちは理由を説明してくれる。

「樫、男はな……ああいう秘密基地みてーなのに憧れるのよ」

「ベッド変形したりとか、ホログラムとか……特撮の基地みたいだったよね」

「あれはあれでいいものだ」

「つーかさり気に全部スマート家電だったよな。自動で開いたりとかよ」

「実は僕も……ああいうの好きだったり」

「分かるぜ緑谷」

「ちなみに次点は女子票を全てかつさらった砂藤力道！理由は「シフォンケーキ美味しかったから！」」

「ヒーローが贈賄してんじゃねーよ砂藤!!!」

「知らねーよ！でも嬉しい！」

そんな感じで第一回部屋王は終了、みんな解散の流れで……お茶子ちゃんがデクくんを始めとしたあの夜に神野に行った人たちを呼び止めた。私はそれが気になったけど、きつと私を知るべきことじゃないと思っただから……そのまま自分の部屋に帰って、眠ることにした。ハイツアライアンスの玄関から外に出ていくみんなの姿が、少しだけ心残りだった。

## 62話

「昨日話した通り、まず仮免の取得がお前らの当面の目標になる」

1-Aの教室の壇上に立つ相澤先生が、ホームルームを開始した。寮に入寮して翌日の話、朝ご飯は何とランチラツシュ先生のデリバリーが届く、んだけど私は普通に自分で朝ごはん作りました。毎日の習慣だし、好きなもの食べたいしー。昨日のうちにお買い物を済ませて自分の部屋の冷蔵庫に収めてあるのです。レシート持つてくれば嗜好品以外はお金出るんだって、すごい！

なので私はぶ厚めに切った食パンをピザトーストにして食卓に持っていった……ら三奈ちゃんにとられて、他の女の子たちも欲しかったと思ったらあれよあれよと私の分がなくなった。三奈ちゃんは学食でしょー！もう！仕方ないので作り直して私はピザトーストとついでにハニーバタートーストを堪能したのであります。美味しかった〜！

「ヒーロー免許は人命にかかわる極めて重要な免許、仮免でも合格率は5割を切る」

ヒーロー仮免許、それだけ厳しいんだ。私がとったサポートアイテム免許には仮なんでもものはなかったけど、発行時に頂いた映像資料には私たちのアイテムで人命が左右されるという内容が口を酸っぱくして何度も出てきた。とれるかな……ちよつと最近自信喪失気味だ、私。気を引き締め直さなきゃ、心配してくれたメリッサさんやシールド博士に顔向けできない。

「そこで今日から君らには最低でも二つ……必殺技を作ってもらおう！」

「「「ヒーローっぽくて……それでいて胸膨らむやつきたあああ!!!」」」

相澤先生の必殺技開発宣言と一緒に教室の扉ががらりと開いて、セメントス先生、エクトプラズム先生、ミッドナイト先生が勢いよく教室の中にはいつて怒涛の如く説明を始める。必殺技とは必勝の技、型のことで身に染みつかせたそれは他の追隨を許さない。今日日必殺



なるほど……要はどの状況でも安定して相手に押し付けられる技術を持つている人は相対的に戦闘力が高くなるって評価になるんだ。例えばと例に出された飯田くんのレシプロバースト、確かにあの高速移動は厄介極まりない、なるほどなるほど……つまり私の奥の手……？3機動員すればオールマイト先生ともそれなりに渡り合えたし。相手が本気じゃなかったにしろ。

「合宿では中断されたが個性伸ばしは必殺技を作る前段階の訓練だった。つまり後期までこれからは、個性を伸ばしつつ必殺技を編み出す、圧縮訓練となる！」

コンクリートの岸壁が屹立し、分身を幾体も出したエクトプラズム先生が生徒それぞれについてくれる。なるほど実戦形式で……ちよつとワクワクしてきたね。でも、必殺技かあ……どうしようかなあ……？

「とりあえず今確実に必殺技と言えるのは……ビーム兵器くらいですかね？ゴリアテとかは別にするとしてもです」

「成程……デハ新シク開発シテムルカ？ナニカ目指ス物ハ？」

「そうですね……」

必殺技のビジョンというものは案外難しいもので、どういうものかいいかという方向性から考えることになった。私になりたいものと言えばえーくんのように誰かを守れるヒーローなわけで、そうすると防御系の技というかそういうものを考えた方がいいのかな？というか！

「私に新しく必殺技作れって言うってことは新技術開発しろってことですよ。どれ実証しようかな……」

「手当たり次第に試していくのも有効だよ。その中からヴィジョンを固めたらどうかかな？」

「成程……それならばー」

確かに技っぽいものはいくつかあるし、実証したい理論も試したい技術も沢山あるのは間違いない。片っ端から試していくには丁度い

いのかも。そういうわけでセメントス先生のアドバイスに従って脳内アイデア倉庫からいくつかのイメージを急ピッチで形にする。よし！行くぞ！まずは1年位前えーくんの部屋を片付けしてた時に見つけたノートの中に書いてあったやつ！多分幼稚園の時のお絵かきノートから拝借させてもらいます！

「私のこの手が真っ赤に燃える！勝利を掴めと轟き叫ぶ！爆熱っ！」

「ちよっ！おいそれどこで見つけたんだよ！」

右手が変形し、青い籠手に覆われたマニピュレーターに変わる。指の関節が稼働し、高熱を纏った液体金属が噴出して掌全体を覆う。真っ赤に灼熱した手を籠手に包み、眼前のコンクリート塊に向かって貫手の形で突っ込む。思い当たる節がありまくりだったらしいえーくんが慌てふためいているけど私もかつこいいと思ったのでやってみたくなったの。ごめんね？

「ゴッド・フィンガアアアア!!!」

貫手を突き刺した瞬間にコンクリートが真っ赤になって溶けて、エネルギーに耐えられず爆発する。おお！結構すごいじゃんえーくんが考えてた必殺技！ここからさらにエネルギーを収束させる工程もあるんだけどコンクリートが耐えられないっぽいね。えー、評価は……威力過剰ですね。人に使えません！ボツ……強いのに……。えい、次！

右手を天に掲げる。右手が変形し手首から先が私の身の丈以上ある巨大なドリルに変形する。これの元ネタは明ちゃんから！何でもドリルはすべてを貫くスーパーウエポンらしいので、天を貫くドリルは何が何でも前に突き進む証なのだとか。なのでドリルはロマンですとのこと。今作成したドリルはレアアロイブレードに使う超硬金属を使用しているのでとても強くそれで超重い。つまりは超強い。

「ギガドリルブレイクウウウ!!!」

正面にドリルを構えて足のスラスタを全開にしてコンクリートの山に突っ込む。すさまじい音を立てて山を貫通した私が壁にドリルが突き刺さるギリギリで止まる。なるほどドリル、これいいかも。

こんな大きい必要はないんだけど方向性としてはありだ。相手の防  
御ごと貫通できるかも。

「必殺技の名前叫ばなきゃダメですか？」

「決め技って使うのを仲間に知らせる役目があるわ。オールマイト  
も技名叫ぶでしょ？ギャラリーにも安心感を与えることもできる。  
技名を言うのは重要よ」

「そうですかあ……恥ずかしいんですけど」

必殺技は叫ぶべしというヒーロー基礎学の授業に習ってシャウト  
してみるけどやっぱり恥ずかしい。ぶっちゃけヤケクソに近い。何  
でこんな恥ずかしい……うう……やらなきゃダメなんだよね……  
ううん……必殺技って言うとうとうしてもオールマイト先生のスマツ  
シユの印象が強くて私の全力でやつちやうんだよ。いつそのこと  
武器に頼らず素手という選択肢もあるんじゃないかな？ふうむ……  
必殺技……スマツシユ……これだっ！

私は背中にスラストスターを作り出しジャンプ、天井スレスレまで飛び  
あがった私は右足を下に向けてセメントス先生が新しく出してくれ  
たコンクリートの塊に向かって思いつきり突っ込む。背中のスラス  
ターを全開にして一瞬で音速を突破した私は衝撃波を引き連れてコ  
ンクリートをキックで粉碎、どころか床まで突っ込んでクレーターを  
形成した。

「名付けてイナズマキック！どうですか!？」

「脚が壊れてるぞ。それ何とかしたら必殺技でもいい」

「素材の選定からですね……むむむ……」

片足が耐え切れず粉碎されたけどこれ結構いい気がする。ぴよい  
んぴよいんと残った左足とスラストスターでコンクリートのクレーターから  
脱出するとすぐさまセメントス先生がクレーターを埋めてくれる。  
相澤先生のご指摘通り、脚が壊れるのはダメだから、脚の素材の選定  
を考えよう。どっちにしる戦闘形態で放つかもしれないし、新素材を  
採用するのもいいかも。

「お前の場合、テクノロジーを前面に押し出した方がいいだろうな。  
武術系のものに転換する必要はない」

「そうですよねえ……あー！」

ピコン、と私の脳内に天啓が走る。両目が機械になった今だからこそ実現可能な兵装がある！しかもその有効性は正しく必殺技と言っても過言じゃない！よしよしよし！脳内でピックアップした設計図にビーム兵器の仕組みを搭載して新兵器の実証を終える。シミュレーション上は問題なし！これならば！

「エスカッション、形成開始<sup>デイ</sup>」

私の左手が変形して大型のシールドを作り出す、青と白を基調にした大型シールド、エスカッション。レーザー、実弾、衝撃、果てはビームまで耐性がある。当然ながらこれだけならタダの盾だが、それだけじゃない。ガシャ！と音を立ててシールドがばらける。11個の部品に分離されたシールド、部品一つ一つが意思を持つようにふよふよと浮いて私の周りを不規則に周回する。

「ホウ……ソレヲ如何スル？」

「こうします。ビットステイヴ、一斉射！」

私の号令でエスカッションの部品、ビットステイヴが一瞬止まってからビームを連射する。ランダムな周回軌道で連射されるビームは標的のコンクリートを撃ち抜いてバラバラに切断していく、みじん切りになったあたりで私はビットステイヴのビーム掃射を終了して、左手に呼び戻し、再びシールド状態に戻した。

「使えた……！」

「成程、全方位からの一斉攻撃か……非常に合理的だ。一つ目、完成でいいだろう」

「やったー！」

この技術は私の中で長いこと眠っていたビジョンだった。名付けるならオールレンジ攻撃、複数の攻撃端末を同時に操って対象を攻撃するシステム。これが実現不可能だったのは高い空間認識能力が必要で、今までの私じゃそれがなかったからだ。片目が機械で片目が生身、性能差があつて難しかった。身もふたもない言い方をすると左目のおかげで空間の認識にずれが生じてシステムをうまく操れなかったんだ。

けど今は事故とはいえ両方とも機械の目だ。認識にずれは生じないどころかさらに高性能になつている。座標を認識することなんてお茶の子さいさい、スコープいらす！ちなみにビットステイヴの身なんだけど反重力発生装置と慣性制御装置をメインにスラスターをサブ、メインアームは貫通力に特化させたビーム！切断するように照射することもできるよ。便利だね！

「とりあえずこれを自在に使いながら戦闘できるように目指します！」

「イイダロウ、ソコ、ナニヲボートシテイル」

「あつ！すいません……！うまくヴィジョンが浮かばなくて……！」

当面の目標が決まった私がフンスと気合を入れる。ビットステイヴを動かしつつ戦闘をすることが出来ればかなりの戦力アップが見込める。オールレンジ攻撃は脳みそから信号を量子通信で送り操作するので脳みそをフル回転させる必要がある。端末の操作に集中して私自身の動きが止まったら意味がない。動きながらオールレンジ攻撃をする、暫くの目標はこれかな。

気合を入れる私の近くでデクくんが考え込んだまま動きを止めず、しまい、エクトプラズム先生に蹴りを入れられる。デクくんはどんな必殺技を考えるんだろう？オールライト先生から拝借するのか？ちよつと楽しみだ。



## 63話

難しい！エスカッションを利用したオールレンジ攻撃をしつつも自身も動きながら攻撃をする、自由に動く……凄く難しいの！そうだね、分かりやすく言うなら今の私はいつもの手足に加えて11個の手を追加した感じだ。ヘカトンケイルで6本腕は経験してたけど宙を自在に動くそれが滅茶苦茶難しい。自分が動かないなら全然余裕なんだけど動きながらだと途端に難しくなる。まるで知恵の輪をいくつも同時に解いてるみたい！脳内で処理する座標情報と刻一刻と変化する相手の状態、エスカッションのエネルギ―残量を同時に管理しつつ自分も戦闘……プルスウルトラだ！私！

とりあえず止まった状態での射撃と並行でエスカッションを動かしつつ対人用に威力を大幅にダウンさせたビームライフルを使って射撃を繰り返していく。うーん、あたりはするんだけど凄く処理が重い感じがする。急造プログラムだからブラッシュアップがいるね。あ、バグ発見、消去修正。おつ、いい感じ！

「やってるねえ皆！」

「あ、オールマイト先生。御加減どうですか？」

「大丈夫だよ樗少女！さて、私が特に用事はないけど必殺技の訓練を見に来た！」

体育館γの扉を開けて顔を出したのはオールマイト先生、もはや隠す必要のなくなったトゥルーフォームでの登場だ。ただ、決め台詞である私に来た！の所だけはマッスルフォームに変身して、すぐにトゥルーフォームに戻るといふ力の入れよう。コツコツと足音を立てながら私の方にやってきたオールマイト先生は私の周りを浮遊するエスカッションを見て、片眉をあげる。

「成程樗少女、君の必殺技がそれかい？」

「はい！今回はビーム兵器を搭載していますけど、同じ方式で操作できるミサイルとか、これ自体が武器になったり、盾になったりするものを設計中です！」

「2年前に似た個性のヴィランにあったことがある。そのヴィラン

は個性の発動中足が止まっていたが樗少女は動きながら使うことを目指すようだね。多対一を強制的に作れるそれは物にすればかなり有効だと思うよ。頑張っつね」

やはりオールフオーワンとの戦いで負った傷は深いみたいで、リカバリーガールの治療をしてもまだ腕を吊っている状況だ。そして、血反吐を隠さなくなった。今もマツスルフオームの変身の反動で少しばかり口の端から血が垂れている。怖いのでやめて欲しい。ギャグを狙いに行つて反動で血反吐とは笑えないから。

「さて、緑谷少年！」

「あ、はい！オールマイト！」

「うむ、迷つてる君に一つアドバイスだ。君は私ではない、まだ私に倣おうとしているぞ」

「え？それは、どういう…？？」

「頑張れよ！少年！」

私への激励を終えたオールマイト先生は次に私のお隣で難しい顔をしていたデクくんの元に向かつてそうアドバイスをした。私に倣おうとしている…？デクくんの個性はオールマイト先生のものだというのに彼に倣ってはいけないというのはどういうことなのだろうか？エスカツシヤンの青い軌跡でスカイツリーを描いたりしながら考える私。そろそろ推進剤とエネルギーが切れるね。回収、つと。大型盾の状態に戻ったエスカツシヤンを確認して、次のえーくんの方に行ってしまったオールマイト先生を私は首をかしげて見つめるのであった。ぼーつとすぎたのかエクトプラズム先生の蹴りを貰った、突くのは私でも痛いよ先生……

「あの…：…希械さん、少々よろしいでしょうか…？？」

「…：…百ちゃん？どうしたの？」

レアアロイブレード二刀流を振るいながらエスカツシヤンを同時に動かしていた私に話しかけてきたのは百ちゃんだ、ちよつと脳みそフル回転状態で頭痛がしていた私はこれ幸いといったん休憩を挟むことにした。シールドに結合させたエスカツシヤンを適当なコンク

リートに立てかけて、レアアロイブレードをコンクリート塊にぶっ刺して置いておく。

百ちゃん、多分私と系統が似てるから参考にしようと思きに来たのかな？私の場合、ため込んだものを使って物を作るというから多くの元素あるいは物体を出来得る限り毎日取り込んでいるんだけど、百ちゃんは脂肪からあらゆる物質を作り出すことができる。生きている生物は例外だけど、有機物だってお茶の子さいさいだ。凄いよね。ご飯食べればそれが材料になるだなんて。私の場合、取り込むには食べるかもしくは粉砕機で粉砕して吸収するしかないからね、アルバイトや雄英入学後のアレソレのため込みまくってるからあまり意識はしてないかもしれないけど、創造系としては百ちゃんの方がすごいのだ。

「その……私の必殺技はやはり、創造することですので、新しい素材を模索することにしたのです。希械さんならば、何かしらの知見をお持ちではないかと……」

「例えばこれみたいなのかな？」

「ええ、その通りですわ」

百ちゃんの創造後のお片付けのおかげで割と貴重な素材を戴いてる私としては協力したい、というかしなきゃいけないでしょう。日頃のお礼も兼ねて！コンクリート塊に屹立するレアアロイブレードをゴンゴンとノックする私に百ちゃんは頷く。なるほど、レアアロイブレードに使われる超硬質合金か……教えるのはいい、全然いい。特許は出願済みだけど、それをどうするか私の自由だ。それよりも……

「これ、持てそう？」

「えっ？……お、重いですわ……!?!」

「だよねえ……」

この超硬質合金の利点にして欠点、重いのだ。比重で言えば金とかよりも重い。イリジウムくらいとまではいかないけど……同物質のサバイバルナイフを百ちゃんに手渡すと私が手を離れた瞬間にずしつとした重さにナイフを取りこぼしそうになる。刃引き&鞘付けというよかつた〜！

「百ちゃんはこういう必殺技を作りたいとかあるの？例えはその、攻撃技とか、防御技とか……」

「お恥ずかしい話ですが、いまだその段階に行けていませんの……」

「ふむふむ、百ちゃんは肉弾戦には不向きだよね。基本後衛……おっ？おっ？思いついたっ！」

百ちゃんは大型のものを作り出すのに少々時間がかかる。それは私も同じだけど、私の場合は頑丈なので多少邪魔されても無視できないこともない。だけど深い集中力が必要な私たち創造系の個性は邪魔されるのは致命的だ。ならどうするか、邪魔されないようにしてしまえばいい。言うのは簡単だけど行うは難しい、けど……これなら……

「百ちゃん、発想を変えよう。必殺技を決め技にするんじゃない、必ず決め技に繋がられる技を作ればいいんだよ！」

「……足止めをする技ということですか？」

「そう！百ちゃんが火砲とか、爆弾とか大きいものを創造する時間を作り出してくれる技、というか技術！例えば、これっ！」

「腕時計に、服のボタン……ですか？」

「そう見えるよね。だけど腕時計の方は付けて、はいっ！」

百ちゃんに腕時計をつけると、腕時計は自動的に超圧縮されていた姿を解放して、リストバンドみたいな形に変わる。文字盤の横、手首側に穴が開いて、手のひらの中央に吸い付くように感圧式のボタンが配置される。百ちゃんはしげしげとそれを観察している。私が彼女の手を取って、手のひらを上にする形でコンクリート塊にその腕時計の穴を向けて、ボタンを強めに押す。すると穴からねばねばした糸のような液体が飛び出しコンクリート塊にくっついてワイヤー状になる。

「これは蜘蛛の糸を参考に作った液なんだ。張力もかなり高いし、何より液体だからどんな風にも変形する。と言っても液を開発したのは私じゃないけどね。特許出てるから百ちゃんでも使えると思う。腕時計の方は……蜘蛛の網を発射するものだからウェブシューター、かな？」

それともう一つは、と前置きしてボタンをコンクリート塊に投げる。コンクリート塊に引っ付いたボタンは一瞬強力な電流を発した後、断続的に電流を流して、5秒ほどで放電を終えた。ミニミニスタングандаね、使い捨てだけど。どっちも足止めあるいは無傷制圧に重きを置いたものだ。蜘蛛糸液については救難現場での実地使用の試験中のハズ。ウェブシューターについては私がいまサツと設計をしたものなので粗が多くてとても設計図なんて渡せない。せめて1週間……いや4日は欲しい。自分で使うものなら途中で爆発しようが何とかなるけど人に使わせるものはそうはいかない。

「テイザーディスクについては私が小型化したものだから後で作りを纏めるね。ウェブの方は……蜘蛛糸液があれば色々できそうじゃない？百ちゃんなら。こっちは3か月前のI・アイランドで行われた学会のレポートに載ってるよ。どう？参考になれたかな？」

「ええ！ええ！希械さんに相談して正解でしたわ！ああ、I・アイランドのレポートはやはり目を通すべきでしたわね……！必ず形にして見せますわ！希械さん！ありがとうございました！」

「よかった。あとね、これも。私の一押しはEカーボンだよ！軽くて強い装甲なの！」

ついでに私は参考になるだろうかとここ最近私が合成したり、特許が出願された新素材について纏めた紙を百ちゃんに手渡した。私たちが創造系個性にとって知識はそのまま力に直結する。科学、技術に極振りされた私よりも、有機物の生成まで可能とする百ちゃんの知識範囲は広いものがあるだろう。私のこれが彼女の力になればいいな。

私の両手を握手する形でお礼を言ってくれた百ちゃんは、気合をあらわにして頑張りますわ！とプリプリしながら去っていった。その先にいるエクトプラズム先生の分身を見る限り今日は個性を伸ばして今日の夜から新素材の選定を始めるんだろう。私も負けてられないね！

「えーくんはどう？順調？」

「あー、ちよつとなんかな。オールマイイトがな、俺の個性なら小細工

するよりゴリ押しがいいって言うんだよ。そも俺の個性でゴリ押しって何だっただけで感じだな」

「えーくんの個性のゴリ押し……難しいね。あ、こういうのはどう？(ご)しよ(ご)しよ……」

「ん？おお……なるほどな……男じゃねえか！やってみようぜ！」

「おっけー！おーい砂藤くん！デクくん！ちよつと手伝ってー！」

「え？」

「なんだ？」

「えーつとね、(ご)しよ(ご)しよ……」

オールマイト先生にアドバイスを受けていたえーくんに進捗どうですか、と聞いてみるとえーくんが考えすぎてドツポにはまってる様子だったので、昔えーくんと一緒に考えていた合体技的な奴を今ここで試してみない？と耳打ちして提案、えーくんも一回動いてみるべきかということを考えていたらしくあっさり承諾。

あと何人か人が必要だったので増強系の二人をチョイスし、事情を説明すると砂藤くんは胸をドンと叩いて承諾し、デクくんは驚きながらもやってくれるとのことなので準備を開始。私は合金製の頑強な柱を二本地面に突き刺し、間に引っ張るのも一苦勞な超強力ゴムを柱に繋げる、柱を個性を使った状態のデクくんと砂藤くんを支えてもらって、私はゴリアテを着込み、ゴムを限界まで引っ張る。そしてその引っ張られたゴムにセットされるのは、全身をガチガチに硬化させたえーくんだ。

「せーのっー！」

「二「最強合体兵器！人間パチン虎！二」」

「アホかよ」

ええい爆豪くんうるさい！なればこの威力を見せてあげよう。声を揃えてシャウトした私たちを鼻で笑う爆豪くん、感心するミッドナイト先生、表情が読めないエクトプラズム先生、無言で分厚いコンクリート塊を5枚作ってくれるセメントス先生に非合理的と顔に書いてある相澤先生。限界の限界、ゴムが切れる寸前まで引っ張った私は、合図とともにゴムを離す。パチンコ、つまりスリングショットだ。

弾丸はえーくん。硬いからこそ強いを地で行くえーくんしかできない荒業。

体育館中に響き渡る音で射出されたえーくんはすさまじい速度と威力で瞬く間に5枚のコンクリート塊を貫通して慌ててセメントス先生が出した巨大なコンクリートの山に突っ込んでそれを半壊させた。鼻で笑ってた爆豪くんは、威力のすさまじさを見たせいか笑った顔のままフリーズしてる。ガラガラと音を立てて当然のように無傷のえーくんがこっちに戻ってくる。

「ゴリ押しってこういうことかあ？」

「僕はその、そういうことじゃないと思うんだけど……」

「俺はすげえと思ったぜー！ やっぱ切島かってえわ！ 攻撃が効かねえってのは強いよなあ」

「相澤先生！今のどうでしたか!？」

「それ、一人じゃやれないだろ」

「「「あ」」」

「アホかよ」

相澤先生が頭を掻きながら言った指摘に全く同じ言葉を漏らす私たち4人、そしてそれをまたまた鼻で笑う爆豪くん。でもえーくんには何かヒントをもたらすことができたようで悩んでるには悩んでるんだけど突破口が開けて思考を延々と回してる感じの悩み方に入っただけきつと大丈夫だろう。

「それで、デクくんはどう？」

「やっぱりまだ何も見えてこなくて……オールマイトの言葉が、分からないんだ」

「ううん、じゃあ一回テクノロジの面から考えてみない？ デザイン会社にフルガントレットとフルグリーヴのことは申請したでしょ？ それならコスチューム全体の見直しも兼ねてサポート科、行こ？ 視点を変えたら何か出てくるかもよ？」

技のビジョンが一向に浮かばず、オールマイト先生の言葉が引っかかってるらしいデクくんは、私はそう提案してみるのだった。

## 64話

サポート科、それはヒーローを支えるサポートアイテム、コスチューム、ビークルなどあらゆるヒーロー関連のシステムを一手に引き受ける技術屋を養成する学科だ。おそらく私もヒーローを志さなかった、あるいは諦めていたら個性柄この学科を受験したであろうことは間違いない。私にとっても楽しい学科だ。主に技術と素材的な意味で。

デクくんの必殺技開発のため、というかフルガントレットとフルグリーヴに合わせてコスチュームを改良するために訪れたわけなんだけど、明ちゃんいるかな？いや十中八九いるんだろうけど、いなかった場合あとがめんどくさい。彼女が病的に自分本位なのはまあ、別にいいとして、彼女は今プラスチックレインションがたまりまくっているらしいのだ。I・アイランドに行けなかったせいで。

I・アイランドの技術は適宜民間に流されているんだけども、やっぱり最新技術は実地に行かないと見れないからね。ただ、I・アイランドのエキスポ期間以外は渡航制限あるから……一応ね、聞いたらしいんだよパワーローダー先生、でもその時目の前で開発してたベイビーがすごいいいところまで行ってみたいで明ちゃん、行かないって言うていかなかったの。それで今後から後悔してるのね。

で、その状態でI・アイランドの技術をたっぷり吸収して戻ってきた私、ついでにサポートアイテムの免許を取った……彼女にとっては今の私はネギをしよった鴨なのだ。1日5回くらいお話ししてくださいコールが来る。流石に入院中は来なかったけど。退院後も忙しくてこれだから、会ったらマジで分解されかねないぞ私。

「ここがサポート科……」

「あ、デクくんに希械ちゃんや」

「麗日さん！飯田くんも！」

「君たちもコスチュームの改良かい？」

「そうなの、だから——」

私の言葉は最後まで続かなかった。何せ、サポート科の工房、気密



扉が爆発したから。私の前に立っていたデクくんはもろに爆破を受ける、お茶子ちゃんに話しかける体勢のまま。私は爆発や爆風には慣れっこなのでノックバックもしなかったんだけど、完全に油断しきっていたデクくんは爆風に吹っ飛ばされかけ、後ろにいた私に突っ込んでくる。何せ私もここで爆破が起こるのは知ってたけど実際に起こるのを見るのは初めてだったので反応が遅れた。

どさっ、ぎゅむっ！と2回の衝撃が私の身体を駆け抜ける。私にとっては極めて軽いものだったから反射的につむってしまった目を開くと……吹っ飛ばされて私の胸に後頭部を埋めて足が浮いてしまったデクくんと、そのデクくんに思いつきり抱き着く形で支える煤だらけの明ちゃんがいた。どうやら爆発で吹っ飛んできたらしい。幸い私とデクくんがクッションになつて彼女自身が怪我をしているわけではなさそうだ。

「おやー希械さんではありませんか！ちようどよかったです！今新作のベイビーを作成してたところでしたー！」

「爆発させたんだね……それはそうとデクくん苦しそうだからどうしてあげて？」

「ややーこれは失礼しました……えーといつぞやの体育祭の！ヒーロー科の……すいません希械さん以外名前忘れました！」

「み、みみみみみ……緑谷出久、デス……！」

「またやったのか発目！全くお前は何度言ったら……楪じやないか。それとーAの子たちも一緒か。コス変の件だろ？中に入りなさい」

私と明ちゃんにサンドイッチされてにつちもさつちも行かないデクくんがあまりにも可愛そうなので、やんわりと明ちゃんを押しやっつてデクくんを解放する。うわあデクくん凄い顔してる。しかし明ちゃんこれで爆発を引き起こすの何度目だろう？明ちゃんは思いついたらとりあえず組んで動かしちゃうから良く致命的な噛み合いミスを起こして結果爆発しちゃうんだよね……パワーローダー先生が怒るを越えて呆れの域に入りだしてるから少し心配だ。

「パワーローダー先生、こんにちは。今日は私じゃなくてデクくん

のコスチュームの件で……」

「はっはい！必殺技を開発するために何かヒントになるものがあればと……」

「成程、君のコスチュームの担当は僕に変えるつもりなのか？」

「え？それはどういう……」

「何だ、違うのか？僕は既に免許を取得している。アイテムの開発力に関しては君らも知っている通りだ。てつきり大幅にデザインを変更するついでに担当者変更の届出をだしに来たのかと思ったんだが」

「あのく私サポート関係志望じゃなくてヒーロー志望なんですけど……」

「どうやらパワーローダー先生はとんでもない勘違いをしている様子だ。確かに私はサポートアイテムの免許を取って、コスチュームを自分で作って国に届け出を出すことができる。できるんだけど……現役のプロの方が凄いに決まってるじゃないですか。自分のなら自分でやった方がいい場合は自分でやるけど、他人のはまだ少し不安だ。フルガントレットとフルグリーヴに関しても20回くらい性能試験と耐久試験を重ねてから初めてデクくんに渡してるんだし。」

「くけけ……それならそれでいい。だが君の場合、個性柄俺と同じように戦場でコスチュームを応急修理することもあり得ると思ってる……早いうちに経験を積もうとしたのかと思っただのさ」

「戦場でコスチュームを修理……確かにそういうのありそうですね……でも今はデクくんの必殺技に関してです」

「必殺技！興味あります！」

「あ、明ちゃん。気は済んだ？」

「はい！」

私とパワーローダー先生、デクくんが話してる後ろでお茶子ちゃんと飯田くん相手にベイビーを代わる代わる実験、もとい披露していた明ちゃんがこっちにぎゅんつとやってきた。腕にブースターをつけてられて天井に激突した飯田くんと酔ってしまってグロッキーなお茶子ちゃんもこっちにやってくる。

「とりあえず、フルガントレットとフルグリーヴに合わせてコスチュームをブラッシュアップしたほうがいいかなって。素材から選定しなおしだね」

「フルガントレットとフルグリーヴ！何ですかそれ希械さんのベイビーですか!?!」

「そうだよ、デクくん見せてあげて」

「あ、うん」

デクくんが右手につけていた腕輪に触れると超圧縮技術で封じられていたバンテージが解放されて両手両足に巻き付いてフルガントレットとフルグリーヴを形成する。超圧縮技術を目にするのは恐らく初めての明ちゃんはそれに目を輝かせてなんですかそれ！と超ハイテンションになる。

「もしや超圧縮技術！初めて見ました！なるほどその装備を前提にしてコスチュームを変更したいと！それならばいいベイビーがいます!!」

「ああ、明ちゃんの悪い癖が……」

フルガントレットとフルグリーヴを全方位から触った明ちゃんが何時ものように暴走を開始した。パワーローダー先生曰く病的に自分本位……分からなくもない。明ちゃんちゃんと考えてはいるんだけど、発想がちよつとぶっ飛んでいるんだ。既存の概念にとらわれなかって言う非常にいいことなんだけど……成功までのトライ&エラーに巻き込まれる側の被害がね……。

「パスワードスツです！」

「あの……スツのデザイン自体は変えなくてよくて……アイダダダ！腰が！」

「可動域のプログラミングをミスりました！ごめんなさい！」

「発目……いつも言ってるがまずはクライアントの要望を聞け。お前の作品を押し付けたいだけならヒーロー科行って自分で試すことだ、俺や樫みたいにな」

「デクくんも律儀に着ないでいいんだよ……?」

「そもそも僕の個性は増強系だから筋力補正は要らないんだ……」

明ちゃんが引つ張り出してきたのは細身のパワードスーツ、全身装甲でゴテゴテしてる感じのやつだ。おそらくデクくんには必要ない……重過ぎて持ち味であるスピードを殺す結果にしか繋がらない。律儀に着るデクくんもいい人だね……腰を曲げようとしてパワードスーツが曲がらない方向に腰を曲げようとするのを急いで救出する。明ちゃん？あんまりやると私怒るよ？私が怒ったら怖いよ？峰田くんだって怖がるんだから！

「でもですね、私思うんですよ！足が使えないのなら腕で走ればいいし！酔ってしまうなら酔っても避けられるようにすればいい！力が強いならもつと力を強くしましょう！って！」

「まア……発目の言うことは話半分聞くとしてもだ。こいつとの縁は大事にしとけ、プロになった時に世話になるだろうよ」

「明ちゃんはきつとプロライセンス取ったら即戦力だからね。どこかできつと凄いことを起こすって私思うよ。私と違って、既存の概念にとらわれないから。何だってチャレンジする」

明ちゃんは恐れずにどんな発想でもとりあえず形にしようとする。私が処理している彼女の失敗作は毎週山になっているし、シミュレーションして無理だってわかり切ってるけど何かがあるはずだと挑戦する。そして、その結果からつかみ取って次に活かす。私は効率重視なのでシミュレーションで成功させてから形にする、この違いは大きいと思う。私も失敗前提で組んでみようかな？でも私の場合今はビーム兵器を研究してるので失敗したら周辺被害が……。

「必殺技と仰りますが！具体的にいまどんな戦い方をしているのでしようか!?!」

「えっと……僕の場合は指とか、パンチとか……強くすると腕が壊れるので樫さんのこれにお世話になってるんだ」

「なるほど！じゃあ投げ技中心とかいかがでしょう!?!パンチに拘りがあるのならやはりパンチを強化するベイビーなどもいいですが！」

「いや……別に拘りとかじゃ……あれ……?」

あ、デクくんが何かに気づいた、と同時に私もピコンと脳みそに天啓が走る。私なんでフルガントレットとフルグリーヴの待機形態を

一つに絞ってたんだろう？二つのアイテムの耐久力をあげること  
苦心していたけど……別に壊れてもいいと考えればいいんだ。チョコ  
バムガントレットのように。壊れても、修復する。あるいは新しいも  
のが銃の弾倉を入れ替えるように復帰する。明ちゃんのおかげで新  
しい知見が得られた！

「そっか、そうだ！飯田くん！後でちよつと教えてもらってもいい  
かな!？」

「あ、ああ構わないが……コスチュームの件は何一つ解決してない  
ぞ」

「あ、それだったら私が相談に乗るよ。明ちゃんを通すとあらぬ  
ものを追加されかねないからね。明ちゃんは私と一緒に開発しよう  
！」

「希械さんとの合作ベイビー！興味あります！」

「樫、やっぱり君サポート科に来ないか？発目の手綱を握れる君が  
必要なんだ」

「明ちゃん……どれだけ迷惑かけてるの……」

明ちゃんにそのまま希望を伝えても、彼女なりに気を利かして色々  
提案はしてくれると思う。だけどそれはかなり明後日の方向に行く  
ものが多いので誰かが手綱を握って方向を修正しないと飯田くんの  
腕ブースターみたいなことになりかねない。幸い私は免許を取って  
いるので私がかじ取りと修正をすればいいものができるだろう。  
ちゃんと組めば明ちゃんの腕は確かなんだから。これが無かったら  
明ちゃん凄いの……と私は合作と聞いて瞳を輝かせる明ちゃんを  
見るのだった。かわいい。

「それで、緑谷君。俺に聞きたい事とはなんだ？」

「あ、うん！実はキック中心の戦い方を教えて欲しいんだ。飯田く  
んって基本キックで戦うから」

「構わないが……なぜ突然蹴りを？」

「僕、オールマイトに憧れてて……ずっとパンチ中心だったんだ。  
でもオールマイトの言葉が発目さんのおかげで飲み込めた！僕は、僕

の戦い方を作る！だから言うなればスタイル！戦い方のスタイルをもう一つ作りたい！それが僕の必殺技！」

流石にあの後また体育館Yに戻ってトレーニング、とは出来なかった。私たちA組が使う時間が過ぎてB組の特訓の時間になったからだ。圧縮訓練というだけあって強度は滅茶苦茶高く、私たちはくたくた。上限値のある人はとつくにそれを越えて凄いことになってる。上鳴くんの顔とかすごいよ、骨格変わってる気がするもん。

そんな感じで私たちはヒーロースーツから着替えて、寮に戻ってきた。自主練は任せるとのことだけど、さすがにもう少し休みたい。圧倒的に糖分が足りない、エスカッションで脳みそを酷使しすぎた……むむ、なんか考えないとヤバいかな？私だけだと持てあます感じがするんだよね。何か補助のようなもの……ん？今日は私冴えてるぞ！ふふ、ふふふふっ!!!

「希械ちゃんが凄い笑いながらなんかやってる……」

「あー、希械のやつかなり集中してるな。周りが見えてないとあんなるんだよ。希械、きかーい」

「ふひゃ?!えーくん!?!」

頭においてきた天啓を形にしたかった私は共有スペースのソファに腰掛けて周囲に10個ほど空間投影のモニターを展開し、両手で別々の投影キーボードをタイピングしながら思考操作で滅茶苦茶にプログラミングを繰り返していた。どうやらそれがあまりにも不気味だったらしく、苦情が出たようで私の前の投影画面を突き破ってえーくんが顔を出して私を呼ぶ。それに私は驚いてソファごと後ろにひっくり返った。

「び、び、びっくりしたあ……」

「悪い、あんまりにも向こうに行きすぎてたからよ。あのままだとお前3日くらい徹夜すんだろ」

「えへへ、ごめんね。サポートアイテムのこと考えてたらつい」

私も案外明ちゃんのことどう言えないかも。ただ、デクくんのフルガントレットの改良案があがったし、今夜にでもメリツサさんと話し合って形にしちゃいたい。あとオールレンジ攻撃を補助す

るものの着想を得たのでそっちも形にしたい。忙しい忙しい！最高！私これならたくさん頑張れるよ！あれ？えーくんどうして頭抱えてるの？

## 65話

「なんでみんなサポート科行く前に私にコスチューム変更の相談してくるの?」

「相談しやすくサポート科並みに詳しいからじゃね?」

「嬉しいんだけどね、上鳴くん。私に丸投げするのはよろしくないんだよ」

ちゃんと自分で考えなさい、と上鳴くんの顔の前に指を突き付けて注意をする。飯田くんのラジエーターの件とかはともかく、お茶子ちゃんの酔い止めシステムの件とか、響香ちゃんの増幅アンプの件とか、果ては爆豪くんの籠手の改良型の件とか、なぜかクラスみんなはサポート科じゃなくてとりあえず私に相談を持ち掛けてくる。

嬉しいの、嬉しいんだけど……私が提供できるとしたらちよつとしたサポートアイテムくらいだし、時間の問題で一人に割ける時間は少ない、そんな中途半端な状態じゃ却って失礼だから、私は提案するだけに徹して、ヒーロー活動に直結するような超重要な所だけサポート科と連動して動くことにした。ちようど上鳴くんがそうだね。

上鳴くんのご要望は戦闘時間の延長、つまりアホになるまでの時間をコスチュームの機能を使って伸ばせないか、あと電気のコントロールの補助があればなお良しとのこと。上鳴くんの個性は「帯電」電気を纏うのであってコントロールするのは難しい。威力の強弱は利くけど、全身から放電するしか攻撃方法がない。今回の必殺技の訓練ではピンポイントで攻撃する方法を模索してるのだとか。

「うーん、こういうのとか? 持ってみて放電して?」

「うえ? うおおおっ!? すげえええ!」

「語彙力……」

私が設計を済まして手から精製した彼の二の腕くらいの長さの黒い棒、オレンジの稲妻ラインが入ってるそれをもって放電すると、黒い棒が放電された電気を吸収して、先端から収束した電気を形にした剣を作り出した。圧縮訓練初日に電気の剣に憧れてたって話してたし、ビームサーベルから得た技術を応用して作ってみたけどどうやら



気に入ってくれたみたい。

内蔵された超超々大容量バッテリーが放電された時の余剰電気を蓄積し、上鳴くんのシヨートによるアホ化を防ぐと同時にその余剰電気を使って電気の剣を作り出すメカニズムだ。これでいいなら稟議書自分で作ってサポート科に……え？わかんない？そつかあ……じゃあ頑張つてね。

「ここで梯子外すのかよ!？」

「いや、上鳴くんのコスチュームだからね？ちゃんと自分でどうにかしましょう。今持つてるそれについては私の方で申請進めるけど、引き続き別方面から頑張ろう？ね？」

「うえ、うえーい」

「なんもかんも私に丸投げしたら怒っちゃうよ？」

上鳴くんの課題は強い攻撃をしようとするのと周りを巻き込んでしまうことだ。必要なのはピンポイント電気を走らせる方法、それに関しては今みたいに私に全部答えを投げるんじゃないかって自分で動いて主体的に見つけて欲しい。だからちゃんとサポート科に行っている人と話して、考えるべき。上鳴くんはちよつと、おバカというかそういうところがあるから。

そんなこんなで4日経った。私があればこれ頑張っていたオールレンジ攻撃の解決の糸口を完全につかみ、そしてもう一つの必殺技も開発終了段階に近づきつつある。そこかしこでボコンボコンと爆発音が出る中、私はデクくんに声をかけた。ようやく完成したフルガントレットとフルグリーヴの改良品が国の審査を通過したので渡すためなんだけど。

「ん、デクくんコスチュームどう？兎目さんのサポーターとアイアンソールの付け心地」

「うん！凄くぴったりくるよー！」

「よかった。それはフルガントレットとフルグリーヴが壊れた時にデクくんを支えてくれるものだからね。そして！これがお待ちか

ねのものだよ！」

「審査通ったんだ！腕輪が、4つ？」

「正確には二つはアंकレットだけだね」

デクくんに渡したのは緑色の腕輪二つと黒色の足輪二つのセット。改良型のフルガントレットとフルグリーヴだ。サポーターとアイアソールのデザインの中に待機状態がはまる場所を組み込んでデザイン的に違和感がないように仕上げている。付けるようにデクくんに促すとデクくんは腕輪と足輪をつけて、右腕の腕輪にタッチすると腕輪と足輪それぞれがガントレットとグリーヴを形成した。

「ん、正常稼働だね。名付けてオーバーガントレットとオーバーグリーヴ！耐久力自体は変わらないんだけど。その腕輪と足輪の中には予備のガントレットとグリーヴが2つ封入してあるんだ！」

「なるほど！！壊れても次の分が出てくるんだ！」

「そういうことー！」

フルガントレットの元々の機構は超圧縮技術で封じたバンテージ状の装甲材を使用者の腕に巻き付けて硬化させるものだ。私はそこで超圧縮技術の限界までバンテージを封入することで壊れても即座に次のバンテージが腕に巻き付くという方法を思いついて、メリッサさんとの協議の末に方向性を決定した。代わりに待機状態が4つに分割されてしまったけど、問題はないはずだ。

ぐっぐつと手を開いたり閉じたりして動きを確かめるデクくん、フルカウルも様になってきたよね、前までは強く集中して意識する必要があったけど、今は息をする様にワンフォーオールを体に纏うことができている。個性の使用に慣れてきたってことなんだろう。うう、こんなに成長して……短い付き合いだけど努力を知っているから私まで嬉しくなってくるよ。

「あ、オールマイト先生だ」

「ほんとだ。また見に来てくれたんだ！」

デクくんにはヒアリングを続けていると何時のまに入ってきたのかオールマイト先生がクラスみんなの近くまで歩いて見に来ていた。私たちの所まではまだ距離があるけど、多分こっちにも来てくれる

……そう思ったところでオールマイルト先生の上から爆発音がして、コンクリートの塊がいくつか降ってきた。危ない！私とデクくんが同時に動いた。

「ハロー・ビットステイヴ展開！」

『ビットステイヴテンカイ！ビットステイヴテンカイ！』

「スマッシュユ！」

デクくんが地を蹴るのと同時に私も足のスラスターでぶっ飛んだ。私の周りに私以外が操るエスカッションが追随する。デクくんは空中で態勢を整え、ひととき大きなコンクリートの塊に向かって蹴りを叩き込んだ。同時に私も手を握りしめる。すると腕を覆うように空間を歪ませるエネルギーが集中し、バリアに変わる。私はそのまま腕を振りぬいてデクくんが届かないコンクリートの塊を粉碎、細かいものはエスカッションのビームで防いだ。

「オールマイルト、大丈夫ですか？」

「ご無事ですか!?オールマイルト先生！」

「ああ、ありがとう。緑谷少年、よく気付いたね」

「はい！」

今のはピンチに気づいてくれてありがとう、ではなくその戦い方に自分で気づいたことをオールマイルト先生は褒めたんだろう。デクくんは今までオールマイルト先生を参考にして足を止めたパンチを主体にする戦い方をしてきた。だけど、デクくんは時たま足を使った攻撃をすることがあった。彼はそこに発想を得て、戦闘スタイルを二つ作ることにしたらしい。

一つは今までと同じ、足を止めて拳を使う攻撃の繊細さと連打力を売りにしたブロウスタイル、もう一つが今オールマイルト先生を助けた足技を主体にし、細かい軌道とスピードを両立するシュートスタイル。デクくんはこのスタイルを使い分けることを必殺技として選んだらしい。

「あの、樫さん！さっきのパンチ、手を何かが覆ってたけど……」

「あ、聞いてくれちゃうの？ふふ、これはピンポイントバリアっていうの。電磁バリアを研究して、今朝やっとたどり着いたんだ！簡単に

言えば空間のひずみを利用したバリアなんだけど……細かいことはいいよね！」

「バリア!?それとさっきの声は……」

私のもう一つの必殺技に選んだのは、守る力だった。何せ私はこの機械の体の頑丈さを超える攻撃で何度も不覚を取ってしまった。だから、自分の体を守る技術を開発しようと思って、ずっと開発してた。燃費が非常に悪いんだけど、ビームもレーザーも実弾もあらゆるものから身を守ることができるバリアだ。小規模ながら強力で、体をピンポイントで守れるからピンポイントバリアってわけ！

『ハロー！ハロー！』

「あの、これはいったい……?」

「うん、オールレンジ攻撃の補助をしてくれるAIサポートメカの「ハロ」だよ。私がオールレンジ攻撃をする時に、座標の計算だとかの処理が重い物を代わりにやってくれるの！」

私めがけて緑色の丸っこい物体が地面を撥ねてやってくる。私はそれをキャッチして、デクくんに見せる。動きながらのオールレンジ攻撃、いくら私でも戦闘という一つのミスが命取りになる行為の中でいくつもの複雑に絡み合うタスクが必要なオールレンジ攻撃を自分が戦いながら繰り返しやるのは難しかった。だから、処理を代わりにやってくれるものを作ったの！バスケットボール大の大きさのマスコットみたいなカワイイロボット！まあ中身はI・アイランドのイオリア博士が提唱する量子コンピュータを入れた超高性能AIなんだけどね。

バスケットボールくらいの大きさのハロだけど、これは救助とかで人を探したりするときにはドローンとして動いてもらうための体なんだ。普段は超圧縮技術でビー玉サイズまで縮小して私のベルトのバックルにはまってもらう感じになると思う。えへへ、我ながらナイステザインだよ。丸っこくてカアイイな。機能的にはある程度の戦闘力はあるけど前線で戦ってもらうことはない。基本的にはエスカッションを始めとするオールレンジ攻撃の補助がこの子のお仕事になる。

オールマイト先生に危ないから近づかないようにと注意する相澤先生、オールマイト先生はその言葉に少し寂しそうにしていた。自分が戦えないということを再認識したからだろうか。大丈夫ですオールマイト先生。貴方が繋いできたものを、今度は私たちが繋ぐ。平和は、途切れさせてはならないものだから。

「心操くんも必殺技とか作らない?」

「まだ先の話だ。これを手足のように操れるまではな」

「ヒーロー科、そんなところまで……行ってるんですね……」

そんなことがあつた訓練後、自由時間になった私は久しぶりに相澤先生が心操くんの訓練を見るといふ話を相澤先生から聞き出し、半分無理やりついてきた。他人のことを心配する暇があつたら自分の必殺技をという相澤先生だけど、私の必殺技は演習場じゃないと使えないので自主練が難しいと屁理屈をこねて心操くんのトレーニングに相乗りする形にしたいと言つたら許可が出た。なので私はハ口の補助を受けつつ今エスカッションと新兵器であるシールドビットを動かしている。

そして目の前で捕縛布で雁字搦めにされているのが心操くん、彼はどうかやら戦闘スタイルを決める際に相澤先生の捕縛布を使うスタイルを選んだらしく、本格的に相澤先生と師弟関係を結んだみたいだ。直接的な戦闘力がない個性の持ち主という共通点もあるし、とても理にかなつてると思う。心操くんの戦い方を1から作るよりは他人の模倣から初めて手段を増やしてスタイルを確立する。合理性を尊重する相澤先生らしい判断だ。

「難しい……ですね。まず布をまつすぐ飛ばすのが難しいです。イレイザーみたい綺麗に飛ばすにはどうしたら……」

「これに関しては反復と練習だ。捕縛布は炭素繊維と金属を織り込んだ特殊武器、通常の布より重くて扱いやすいぞ」

「先端に重りとか付けたらダメなんですか?まつすぐ飛ばす練習

で」

「ダメだ、使用感がずれる」

「なるほど、じゃあ相澤先生、30回ほどいろんな投げ方で捕縛布投げてもらえませんか？私解析して心操くんにデータと動画で提供します！」

「……お前、便利だな。緑谷にもそれやったのか」

自縄自縛状態から抜け出した心操くんが捕縛布の扱いが難しいと相澤先生に相談するが、相澤先生はこれに関しては練習量しかないと返すけどここに私がいるならば、デクくんにもやったようにデジタル的な解析と詳細な動画を録画して提供することができのです！便利だな、という心操くんを助けられるから便利でもいいでしょ、と返す。相澤先生もそれに関しては異論はないのか10mほど距離を取ってから目標の木片に向かって投げ方を変えて捕縛布を投げてくれる。

両目のおかげであらゆるデータを集積することができる。両目とも機械になつてしまったおかげか、それとも一回死にかけたからか目の機能が爆発的に上がっていて、最近は日常生活でふとした瞬間に入ってくる情報量が洪水のように増えた。機能を落としてもそれなので早く慣れないとなく。多分今ならオールマイト先生の動きも見れる気がする！

流星は相澤先生、捕縛布は百発百中、かなり無理な態勢でも投げれば木片をつかみ取り、手首のスナップで拘束が解ける。ナニコレ凄いい、思えば相澤先生はこのスタイルを学生時代に確立したんだよね、師匠もなく一人で。私たちって滅茶苦茶凄い人に担任の先生やつてもらってたんだな。

「これでいいか」

「はい！心操くん後で動画とか纏めて送るね！」

『オクル！オクル！』

「うん、ありがとう……さつきから気になってただけど、その跳ねまわってるの、ナニ？」

「私のサポートメカだよ！戦闘の補助をしてくれるんだ、あとある

程度戦えたり、救助活動でドローンになってくれたり、多機能なの！」

「へえ、凄いじゃん」

『ウレシイ！ウレシイ！ハロ、シンソウオウエンスル！オウエンスル！』

相澤先生の実演が終わって、私と心操くんは貴重な動画を撮れたことにお礼を言った。デクくんに見せたらお金出してでも買いそう。ひと段落付いたのを悟ったのかさっきまで静かに転がっていたハロが跳ね回って私たちの所にやってくる。

どうやらハロは心操くんを気に入ったらしい、私と同じで頑張っている人が好きなのかな？あと爆豪くんのこと好きみたい。私の休憩中に爆豪くんの所に行って跳ね回って応援してだし、爆豪くんがキレる寸前だったから呼び戻したけど。凄いやつと言われて嬉しそうなのを胸に抱えて、私は今撮った動画を編集し、解析に回すのだった。あ、そういえば心操くんのサポートアイテムの案聞いてもらわないと！

## 66話

訓練の日々は流れていき、本日がヒーロー仮免許の試験当日。バスの中に揺られていた私は抱っこしていたハロを撫でつつ、見えてきた会場に視線をやった。国立多古場競技場……滅茶苦茶でかい競技場だ。その大きさは小さめの街をすぽつとそのまま収めてしまえるほど。流石は国立、雄英と同じでお金があるね。

「いいなく希械ちゃんマスコットなんか作っちゃって」

『アイボウ！アイボウ！』

「ふふ、そうだね。ハロはマスコットじゃなくて私のパートナーだよ。三奈ちゃんも欲しい？作ってあげようか？」

「んんんん悩むけど遠慮しとく！酸で溶かしたりしたら可哀想だし！希械ちゃんのハロ抱っこしてれば満足！」

『ダッコ！ダッコ！』

私の隣に座る三奈ちゃんが私が膝に抱くハロを撫でて可愛い可愛いと言ってくれる。ハロは爆誕した時から女子たちに大人気で、口田くんのペットのうさぎちゃんに次ぐ人気が出てーA寮のマスコットの存在になってしまった。マスコットを自認していたらしい峰田くんはハロに嫉妬心を燃やしているらしくオイラもと食って掛かってきたけど女子全員に拒否されて撃沈した。

側面にある耳をパタパタとさせて三奈ちゃんに返事をしたハロを私は三奈ちゃんの膝の上に置いてあげる。三奈ちゃんはハロをぎゅーつと覆い被さるように抱きしめて頬ずりをしている。うーん、我ながらハロはナイスデザインだね。丸っこくて抱っこしやすい上に女の子でも持ちやすい大きさと重さ。話しかければお返事も返してくれる！中身入れ替えてペットロボットとして発売を画策してもいいかもしれない。流石に量子コンピュータはオーバースペックだし、あと私は自前でどうにかできるけど値段にしたら天文学的な値段になる。わんこを譲り受けたほうがいいくらいだ。

ついで、という相澤先生の声で私たちは気を引き締める。私は三奈ちゃんからハロを受け取って小さくし、右耳につけたイヤリングに



嵌めた。ベルトのバックルにつけようかと思つてたんだけど、お腹あたりは被弾面積が広いので耳に変更したの。ベルトには超圧縮技術で圧縮した武器を懸架するのでスペースを確保したいし。結果的に耳に落ち着いたわけです。

「試験何やるんだろ……仮免とれっかなあ」

「取る取らないの話じゃないぞ峰田。とってこい。お前らも、この試験を合格すれば晴れてヒヨツ子……受精卵から孵化できる。頑張ってこい」

「よおし！期待しててくださいよ相澤先生！なつてやろうじやねえかみんな！ヒヨツ子によお！円陣組んで何時ものやろうぜ！」

峰田くんが胸に手をやってドキドキを隠さずにぼやく。相澤先生は珍しく励ますように峰田くんと私たちに激励をしてくれる。それに気合を入れなおした私たちはえーくんの音頭で円陣を組む。B組とは同校同士のつぶし合いを避けるために別会場になつてしまったのでA組だけだ、そして私たちは雄英生！雄英高校で円陣といえよ！

「「「Plus！Ultra！」」」

「Ultra！」

……だれ？私たちの円陣の後ろから掛け声を被せてきたのは……土傑高校の帽子と制服を被った男の子……非常に元気そうでえーくん並みに暑苦しそう。土傑高校といえよ雄英高校と並んでヒーロー科の名門として有名な高校のはずだ。勝手によそ様の円陣に加わるな、という同じ制服を着た人に注意されたその男の子は

「どうも！大変！失礼しましたあ!!!」

がつつん！と地面に頭をぶつけて謝罪をした。勢いだけで生きているような感じの人……うわっ!?頭めっちゃ流血してる！試験前なのに！これで脳震盪とか悪ければ脳内出血とかしてたらまずいよ！急いでタオルを取り出して彼に駆け寄る。

「だ、大丈夫ですか!?血が……とりあえずこれで拭いてください」

「やー大丈夫ツス！ご心配どうも！一度プルスウルトラ言ってみたかったツス！雄英の皆さんと競い合えるなんて光栄の極みツス！よろしくお願いしまあす!!!」

「ひゃ、ひゃい……」

「行くぞ、イナサ。雄英高校の皆さん、うちのものがご迷惑をおかけしました」

嵐のような人だったな……結局イナサと呼ばれた男の子は私のタオルを使うことなく帽子を拾い上げて土傑高校の人と一緒に去っていった。相澤先生は彼のことを知っているようで、教えてくれるところのよるとフルネームは夜嵐イナサ、昨年度、つまり私たちの受験の時の推薦入試で……雄英の推薦入試をトップで合格にしたにもかかわらずなぜか入学を辞退した人とのこと。

まず雄英の推薦入試をトップ合格というところですから凄いのにも、そこから雄英を辞退して土傑高校に行ったってこと？推薦入試をトップってことは……今はどうか分からないけど当時の轟くんを上回ってたってことだ。なぜ入学を辞退したのかは知らないけど、この試験一筋縄ではいかないかも。私も頑張らなくちゃ、とハロをつけたイヤリングを撫でて私は土傑高校が行った先を見据えるのだった。

「えー、では、ね。仮免のやつやります。はい。あー、僕はヒーロー公安委員会の目良、好きなものはノンレム睡眠、嫌いなものは徹夜。どうぞよろしくお願いします」

あの後相澤先生の知り合いというか恋人疑惑が持ち上がったヒーロー、M.S. ジョークが先生をしているらしい傑物学園高校と出会ったりしたけど、気を引き締めた私たちは競技場の中に入ってヒーロースーツに着替えて会場の中で待機している。ぎつと数えて1500人を超えるだろう。みんなヒーロースーツを改良してきていて並んでみると新鮮だなあ。うんうん、いくつか私が噛んだアイテムもあるし、メイドイン樺ちゃんのアアイテムの使い心地は後でヒアリングしないとね。

目の前で壇上に立つ人に私は見覚えがある。職場体験で入院した時に、私をスカウトしに来た公安の人の後ろに控えていた人だ。目の下にクマが出来てとても印象深かったのを覚えてる、あの時から輪

をかけて顔色が悪化しているように思えるのだけど大丈夫なんだろうか？

「さて、ずばり最初に言わせてもらいますが、1次試験はここに居る1540人で勝ち抜けの演習を行ってもらいます」

勝ち抜けの演習……対人戦かな？うーん、対人戦は苦手じゃないにしろ得意って程でもないんだよ私……火力に制限がかかっちゃうからね。けど対人用ビームの開発は終わっているし、自由度だけなら非常に増している。恐れることはない、かな。説明によると、現在のヒーロー飽和社会では事件発生から解決までの速度はすさまじくスピードアップしている。私たちがこれからその激流の中に身を投じる時に試されるのはスピード……それで先着100人を合格とする……。

突破率50%って聞いたけど10%以下になってる……!?!英雄並みに狭き門になった、条件というかルールはボール当て、体につけるターゲット3つとそれに反応するボールを6個所持しターゲットにボールを当て合う。ライフは一人3つ、3つ目のターゲット当てた人が倒した扱いになって、二人倒したら勝ち抜き……見る限り機械だ。私の個性ならハッキングしてあれこれ悪いことが出来ちゃうだろうけど、それはやめよう。あ、でもボール増やすのはありかもね。一つ食べて中身解析して量産しよう。私だけ残弾沢山になるね！

「じゃ、展開後ターゲットとボール配るんで……全員にいきわたってから1分後スタートとします」

展開？と私たちの頭に疑問符が浮かぶ。周りの壁が振動して、向こう側に倒れた!?!展開ってそういうこと？折り畳み式の部屋だったんだ、無駄に大掛かりだな！展開した周りは……USJみたいだ。山岳、水辺、市街地、工場地帯……あらゆるシチュエーションが用意されてるっぽいね。近くにいた公安の人からターゲットとボールを貰う。私はそうだな……左胸、みぞおち、背中かな。どうせ守る急所だし。

「このルールなら同校でのつぶし合いはない……チームアップの方がいいよね……！皆！余り離れず一塊で動こう！」

「ふざけろ、遠足じゃねえんだよ！」

「わりの、大所帯じゃ個性を活かせねえ」

「もぐもぐ……うん、私も。皆！合格して会おうね！」

デクくんがみんなに号令をかけてくれるけど、爆豪くんとえーくんと上鳴くんは揃って離脱、轟くんも範囲攻撃という都合上離脱せざるを得ない。そしてボールを一つ齧っている私も本気を出すと周りを巻き込みかねないので同じく離脱、1分しか時間がないので市街地に向かつて移動する、途中で今回使うことにする武装を作っちゃおう。

「ホルスタービット、シールドビット、アームキャノン、形成開始<sup>デイ</sup>」  
腰後ろからアームが伸びて両側に5機、緑色の縦長の武装を形成、左肩にも連結された8機の台形の形をした緑色の盾を形成。右腕が大砲の形に変形して準備完了。この右腕はボールをレールガンの要領で加速させて打ち出す物、あとミサイルも撃ち分けできる便利兵器。一気に体重が倍近くまで膨れ上がった私がガシャガシャと適当な広い場所に陣取る。

「うーん、見られてるね……」

視線がささる、とはこのことだろうか。どの高校の人も私を見ている、思い当たる節はある。私たち雄英は体育祭でいち早くメディアに個性の詳細と戦闘映像を晒したんだ、全国に。これが毎年行われていることは、情報が明るみに出た雄英を真っ先に狙ういわゆる雄英潰しみたいなことが試験では定石になってる可能性が高い。そして私は体育祭で1位をとっている、だから彼らにとっては最も警戒するべき敵であり、もつとも狙いやすい相手でもあるんだね。

「よろしくね、ハロ。初陣だよ」

『ウイジン！ウイジン！』

『3，2，1……スタート！』

「まずはあの雄英のやつからだ！」

「この人数で攻めれば！」

「いっけええええ!!」

予想通りだ。私に向かつて投げられるボール、燃えたりなんだりして個性が作用しているであろう物もある。私一人だけに豪華だなあ、

と他人事のように考えながら私は……その場から動かず、右耳のハロを撫でた。

『ビットテンカイ！ビットテンカイ！』

「ん、ハロ上出来」

『ヒダンゼロ！ヒダンゼロ！』

「ウソだろ……？」

「あれだけの数を防いだのかよ……」

ハロの音声と同時に左肩のシールドビットと両腰のホルスタービットが外れて総計18機の遠隔誘導端末がシールドとなり向かってくるボールを全て防いだ。私の周りに浮かんでいるシールドビット、ホルスタービットは時に組み合わせ違って面積を大きくしたり、時には分割したりと複雑な動きを見せつつ向かってくるボールから私を守り切る。私の周りにはただただ弾かれたりしたボールがむなしく地面に落ちる音が聞こえるだけ。

さて、次は私の番……と思ったところで私対その他という乱戦状態の戦場にふわりと風が吹いた。その風は徐々に勢いを強くして、私の足元にあるボールや他の人が投げたボールを拾い、そして上空へ持ち上げていく。個性だ、これ……！しかもボールだけを持ち上げて、さらには風の強さ形状を操つての繊細なコントロール……！

「俺！ヒーローって熱血だと思っんです！皆さんの戦い！熱いッス！」

「夜嵐、イナサくん……」

彼、だったんだ。なるほど、この個性なら英雄の推薦入試をトップ合格したというのも頷ける、まるでフライトジャケットのようなヒーロースーツとマントを身に着けた夜嵐くんは自分の上空に集めたボールを渦巻かせるように巻き上げて加速させていく。ちらりと私を見た夜嵐くんはすさまじいほどの凄絶な笑みを浮かべる。

「英雄の人！体育祭みてたッス！貴方と戦えるとは光栄の極み！是非一手……！指導頼むッス！」

「いいよ、私でよければ。どこからでも」

「よろしくお願いしまっッス!!!」

一際大きな風が吹き荒れボールが暴れ狂う。私は下げていた両目の機能を一気に引き上げる。風の向き、風速、次に吹く風の予想図までをシミュレートした私、瞬時にハ口と情報を共有して彼の攻撃に備える。ハ口は私のもたらした情報を元に数千パターンの攻撃を予測、ビットを操ってそれに備える。

夜嵐君が腕を振り下ろした。それに合わせて上空に舞っていたボールたち、軽く400個ほどはあるそれが一斉に私を中心とした範囲に殺到する。私どころか他の人も巻き込んでの旋風、いやボールの暴風雨が炸裂した。でも、問題ない。ハ口と私の操作でビットたちが動き出す、ホルスタービットからまるで拳銃のようなビットが飛び出し、シールドビットに仕込まれてあるビームガンと一緒に弾幕を吐き出した。

ビームによって私に当たるボールだけを溶かし、余波はホルスタービットが2枚一組で合体してシールドとなり守る。私はその状態で狙いを済まし、右手のアームキャノンに紫電を迸らせ3発ボールを発射した。暴風に負けない加速を得た私のボールは腕を振り下ろした状態から態勢を立て直そうとする夜嵐くんのターゲットに見事突き刺さる、1つ、2つ……！3つ目は体をねじって防がれた！

『脱落者120名！一人で120名脱落させて合格した！』

「危なかったツス……！」

「先、越されちゃった」

「ありがとうございます！アンタは絶対合格するツス！先で待ってるツス！」

「うん、ありがとね。夜嵐くん」

私に向かってきた攻撃の余波だけで120人を脱落させたのかあ……！凄いな、夜嵐くん。でも、オールレンジ攻撃は好調だね。あのボールの嵐でも、私に攻撃が当たらなかった。最後のターゲットを両手で掴んで冷や汗を流す夜嵐くんに左手をひらひらと振ってから私は戦場を移動する。その場にいる他の人たちは私とそれを見下ろす夜嵐くんを交互に見て、驚いていた。

## 67話

「クソ、あの雄英のやつどこに行っただんだ!？」

「もう探すのやめよう!?!時間ないよ!?!」

「情報割れてるやつの方が倒しやすいだろ!」

「おー……焦ってるね」

夜嵐くんと短い戦いのあと、あの場では私以外の人たちは全員夜嵐くんに脱落させられてしまったので私は獲物を求めて移動を開始していた。ビットを全て回収したのちに光屈折迷彩を作り出して透明になった私は、ここに私がいたという情報だけを頼りに私に固執しているらしい他の学校の人たちを観察している。

こうしている間にも合格者は21人を超えた。私としてもさっきの夜嵐くんと少しお話してみたいし、そもそも仮免を取りに来たのでここでまごまごしてるわけにもいかない。二人倒せばいいんだし、そこでまよきまよきしてる先輩方を狙うことにしよう。ちょうど今、見通しが悪い路地裏に入っていったから、ね。

「ハロ、注意を引いて……いや、そのまま倒しちゃえ」

『リョウカイ!リョウカイ!』

右耳のイヤリングからハロを外してサイズを大きくする。バスケットボール大になったハロは静かに転がって、路地の中で作戦会議をしている先輩方に近づいていく。コロコロと転がるハロに先輩たちはすぐに気づいた。けど、もう遅い

「なに、これっ!?!あああっ!?!」

「ぐうううっ!?!」

『ニンムセイコウ!ニンムセイコウ!』

ハロの口がぱかっと開いて中からテイザーディスクがシュパパッと空気圧で発射される。テイザーディスクが服に張り付いて一瞬高圧電流が流れた後に持続的な電流が先輩方を拘束した。私は路地裏の中に入って電気によって体が麻痺している先輩のターゲットをボールでタツチしていく。一人の先輩はツーアウト、もう一人はワンアウトだった。ごめんなさい、今回は私の勝ちです。

テイザーディスクの充電が切れて電流が流れなくなる。だけど脱落してしまった先輩はそのまま呆けてしまったように動かない。光屈折迷彩をボックス状に圧縮してから口の中に放り込んで食べる。シールドビットとホルスタービットも同様に超圧縮するけどこっちはまだ使うかもしれないから腰のベルトに懸架しておこう。

「ハロ、行こう」

『ダッコー・ダッコー!』

「はいはい」

どうも、みんなが甘やかして抱っこしてるせいかハロは人に抱っこされて移動するのが好きになってしまったようだ。跳ねるハロをキャッチして両手で抱えてお腹の前で抱っこする。私はそのまま乱戦の戦場を抜けて合格者が向かう待機場所に歩いていく。私のターゲットは3つほど光りっぱなしでどうやらこれが合格者のサインみたいだ。

ハロを抱っこして歩き続けること少し、私は合格者控室にやってきた。ガチャリとドアを開けると既に30人ほど人がいて、机の上にあるジュースや茶菓子を手に他校と雑談に花を咲かせたり一人精神統一してたりと思いいいに過ごしていた。私が部屋の中に入ると一斉に視線が私に向く、ひよえっ!?もしかしてこれ入ってくる人全員にやってるの!?そうか、そうだよ、みんな仮免を取り合うライバルだから、気になるんだよ。

私に向けられる視線の8割は「雄英体育祭の」が枕詞につきそうな視線だけど、残り2割は純粹に私の実力を推し量ろうとする目だった。ちやうど、部屋の奥からずんずんと私の方に向かってくる夜嵐くんみたいな。彼は私と戦った時のような獣じみた笑みではなく暑苦しくも人懐っこそうな笑顔で私に話しかけてくる。

「あっ!やっぱり合格したツスね!俺は夜嵐イナサッス!改めてよろしくお願ひしまッス!」

「樫、希械です。ライバル同士だけどよろしくね夜嵐くん」

「はいッス!いや〜俺の個性の合間を縫ってターゲットに当てら



れた時は冷や汗もんっした！結局俺の攻撃は当たってなかったツスし！」

「私はびっくりしたよ？あれだけのボールをそれぞれ別の風を操って全部操作するなんて。すごいなあ」

「いやでも樫さんのあのメカ？かなんか分からないツスけど、あれヤバいつすね！熱いッス！」

ぐいぐい来るタイプだねやっぱり。それと彼、身長が高い、勿論私よりはかなり低いけど、おそらく1-Aで一番背が高い障子くんよりも背が高い、その彼がぐいぐい来るのだ。とても、距離が、ちかい。ただ、純粹にヒーローを目指してるんだなあって言うのが分かる。熱意の量といえいいのか、それが彼ははずば抜けてる気がする。もちろん負ける気はないけれども。

私と話してる彼の顔が一瞬だけ凍り付いた。視線の先にあるのは……轟くん。どうやら彼も一次を通過することができたみたい。私を見つけた彼が嬉しそうにほっと息をついた。夜嵐くんはそれじゃ、俺はこれと言つて足早に去つていった。話の途中だったのに、どうしたんだろう。こちらにやってきた轟くんと何か関係があるのかな？

「樫、先に通つてたんだな」

「うん、轟くんもお疲れ様。飲み物あるよ、お菓子も食べていいんだって」

「口元になんかついてるぞ」

「うそっ!？」

轟くんにお疲れさまと声をかけつつエネルギーを補給するために卓上のせんべいやら何やらをぽりぽりぱりぱりと頬張つてた私に轟くんはこそつと口元を指して口元に食べかすが付いてることを教えてくれる。私は飛びあがりそうになりつつ急いで口元を拭いた。ああ、こういう時にこういうことが起こるととっても恥ずかしい〜。ああ、そうだ。

「轟くん、覚えてる？夜嵐くんのこと」

「……いや、思えばあの時から俺は……周りの事見てなかったんだ

な」

「でも今は違うでしょ？ほら、ちゃんと私の事見てる」

「……そだな」

どうやら轟くんは推薦入試のことを全く覚えてないらしい。それは当時それだけ余裕がなかったってことなんだと思うけど、今はきちんと周りを見てくれるし入学時の轟くんとは一線を画しているのが分かる。ただ、夜嵐くんの反応が少し気がかりだ。一瞬だけ顔を出したその表情は、まるで気に入らないものを見るような、そんな顔だったから。

それからすこし、どんとんと雄英1-Aのクラスメイト達が控室に入ってくる。百ちゃんに梅雨ちゃん、障子くん……皆怪我無く無事そう。私たちはとりあえずの1次試験を通過できたことを喜びあう。その次に入ってきたのはえーくと爆豪くん、上鳴くん。

「あー樫ーいやー、お前が作ってくれたこのサンダーロッド！初っ端から大活躍したぜ！ポインターとシューターもなー」

「うん、お役に立てて何よりだよ。えーくんも、無事そうよかった」

「おう、いやー士傑の先輩の個性に捕まれた時はやばいと思ったんだけどかてーもん丸めるのに時間かかるみたいでな！その隙に上鳴が剣でズバツ！ってやって爆豪が爆破でボン！だぜ。俺だけいとこなしだわー」

「じゃあ、次はえーくんが大活躍しないとね！」

「そうだなー！」

えーくとハイタッチ、ガチャンと硬いものがぶつかった音がする。これをするときちよつとだけ安心できるし、気合が入る。そうこうしてるうちにデクくんとお茶子ちゃんに瀬呂くんも合流した。デクくんはどうやらフルガントレットを使わなかったみたいで待機状態のまま手と足につけている。そうだね、あくまでそれは緊急時に補強するものだから普段は頼り過ぎないようにするのはいいことだと思う。

これで、A組の合格者は11人、残り9人は脱落してるわけじゃな

く、まだ戦い続けている。飯田くんが残ってるってことは彼を中心に指揮が取られてる、はず。何せモニター越しなので見たい場所を見れるわけじゃなく雄英にフォーカスが当てられてるわけでもない。残りの枠は10枠、雄英全員合格、出来るかな。いや、するんだ。私たちは前倒しで試験を受けに来ているけど、経験じゃ負けてない。きつと何とかなるはず。

『おっとここで続々と雄英がコンボを決めていくう!』

「三奈ちゃん……みんな……!」

「当然だぜ希械、あいつらがここで落ちるわけねえ」

「そうだね!そうだよ!」

えーくんが私の背中をばしんと強く叩いて励ましてくれる。そして、モニターの先では峰田くんと口田くんが他校生を完全に拘束して次々と残りのクラスメイト達が合格を叩き出しているところだった。残り2名、という目良さんの声と同時に飯田くんと青山くんが同時に合格をして、先着の100名が決まった。

『100名埋まりました!ッハーー!!!!ではこれより脱落してしまつた皆さんの撤収に移ります』

「雄英全員!一次試験突破だああああ!!!」

「やつた~~~~!」

「おおおお~~~~!」

「希械ちゃ~~~~ん!」

「三奈ちゃんっ!」

一次試験の終了の合図と同時に膨らんできた喜びが私たちクラスに一気に伝播して盛り上がる。だって、脚きり10%以下に雄英の21人が受かってしまったからだ。凄いよ!100人のうちの21人を雄英が独占!次に多いのは士傑、傑物と続く感じだね。私に飛びついてくる三奈ちゃんを優しく受け止めてハグをして、解放。磁気キーを三奈ちゃんのターゲットに反応させてターゲットを取り去る。

そうして暫く合格の喜びを分かち合っていると、脱落してしまった人たちの撤収が完了したのか、1次試験の終了を伝えた時のハイテンションが嘘のように死に体の目良さんの声がスピーカーから聞こえ

てくる。どれだけ眠いんだろう、というかそんだけ公安は激務ってこと……？ 将来のビジョンとしては少し遠慮したいかも……寝不足で隈を作るヒーローは中々……相澤先生とか？ いやクマないけどなんか雰囲気がそういうダウンナーな感じが……じゃなくて！ 今は試験に集中！

『えーでは残った100人の皆さん、こちらををご覧ください』

そう言われた私たちは素直に控室内にあるモニターを見つめる。写ってるのはさっきまで私たちが対人演習を行っていたフィールドだ。さっきまでとにも変わりが無い、と揃って首をかしげているといきなり、画面の中のフィールドのそこかしこが爆発する。同時に控室の外からも轟音が響き渡った。……なんで？ なんでその、爆破しちゃったの？ いったいいくらかかっていると思ってるんだろう、この演習場を作るために使ったお金……？

『次の試験でラストになります！ 皆さんにはこれよりこの被災現場にてバイスタンダーとして救助訓練にあたってもらいます』

「パイ、スライダいたっ!？」

「違うわ峰田ちゃん、バイスタンダーよ」

「現場に居合わせた人のことですね。一般市民を指す場合もあります……」

これは授業でやった話だ。峰田くんも頭はいい筈なので覚えてると思うんだけど、バイスタンダーはその場に居合わせた人という意味、つまり私たちはこの被災現場に偶々いたヒーローとしての役割を全うできるかどうか試されるわけだね？ まずいな、これ。救助訓練は勿論授業でやってるけど、その経験値は私たちは少ない、というか周りの先輩方に比べたら0だ。その差は、大きいと思う。

「ああ！ 人がいるぞ！ あぶねえ！」

「HUCだ……初めて見たよ」

画面の中では老人や子供、老若男女問わずあらゆる人間が次々と災害現場に入っていくところだった。彼らはきつとヘルプアスカンパニー、HUCと略される要救助者のプロ。お父さんとお母さんが会社の訓練で利用したことがあるという話をされたので名前だけなら私

は知っている。あらゆる訓練に引っ張りだこ状態でも人気な  
んだとか。お仕事って色々あるんだね……。

『傷病者に扮したHUCがフィールド全域にスタンバイ中、皆さん  
にはこれから彼らを救出してもらいます。今回は皆さんの救出活動を  
減点方式で採点していき、終了時に基準点を上回っていれば合格と  
します』

「なるほど……まるで、神野を意識してるみたいだね……」

「……そうだな」

町中を含む大規模災害の救助訓練……オールマイト先生とオール  
フオーワンが戦った神野の件が頭をよぎる。私にとってはとても苦  
い思い出だけど、乗り越えなければならぬものもあるんだ。私と  
えーくんが気合を入れなおしていると瀬呂くんと上鳴くんと峰田くん  
が何事か話し合ってた。

「士傑のボディスーツの人いるじゃん？あの女の人。あの人が  
さあ、緑谷と素っ裸で岩陰に居たんだよ」

「緑谷あ!!!」

「……デクくん?」

「緑谷、お前……」

「ちー違うんだよ！なんか個性関係のことで色々聞かれて！僕も凄  
い怖くてわけわからなかったんだ！」

「ウソこけアレ！歩進んだ男女の反応じゃねえか！」

「いい思いしてんなああん!」

へー、デクくんそんなことしてたんだ、演習中に……ふーん……。  
まあ反応とか見るに本当に何もなかったみたいだけど。これで峰田  
くんみたいな行いをしてたのだとしたら、私はちよっとデクくんと  
付き合いを考え直さないといけないところだったし、最近デクくんと  
とても仲がいいお茶子ちゃんをさりげなく離したりとかもしなきゃ  
いけなかった。今までの言動を鑑みて、私はデクくんを信じます。

私たちの騒ぎがうるさかったのか士傑の人たちがこちらにやって  
くる、頭を下げそうになったけどどうやらそういう目的じゃないみた  
い、どうやら士傑の人が爆豪くんに突っかったことへの謝罪？そん

なことがあったのえーくん？何々……うん、それはちよつと私でも怒るよ。仮にその人が目の前に居たらゴリアアテ着てサドンインパクトを両手でぶち込んでたところだね、あはは。

「おい、坊主のやつ……夜嵐、だったか。俺、お前になんかしたか」「イヤあ申し訳ないツスね、エンデヴァアの息子さん。俺はあんたらが嫌いだ。その目、おんなじなんスよ、エンデヴァアと」

轟くんの質問に、棘ありまくりの口調で答える夜嵐くん、彼に発言の真意を聞く前に、ベルが鳴り響いた。始まったんだ、演習が。夜嵐くんはそれに顔を笑顔に変えて土傑の方に戻っていく、残された轟くんは、複雑な顔をしていた。

## 68話

『ヴィランによるテロが発生！規模は市全域、建物倒壊により傷病者多数！』

「始まった……！」

「ケロ、頑張らしましょう」

「やるよ、皆！」

ジリジリ！と非常用ベルが鳴り響く中でマイクによる状況説明が行われる。シナリオはテロによる大規模災害、ヴィランによるものということは戦闘を想定しておかないとダメかも……！救助、戦闘、そして指揮……ヒーローに必要な3要素がまんべんなく含まれている試験だ。飛び跳ねていたハロを右耳のイヤリングに嵌めなおして、脹脛のバーニアを増設、細かく動けるように変更した。

採点基準は一切明かさねず、さらにはどうやって、誰が採点するのかわからない。これは不安になるやつ……！だけど！訓練通りに、落ち着いてやれば大丈夫。確かに先輩の方が経験はあるかもしれない、それでも私たちだって英雄に入って少なからず何度もやってきたことだ。13号先生に教わったことを思い出して、頑張るべし！

「えーくん、私たちは近い都市部じゃなくて山岳部に行こう。私たちの力が一番生かせるはず」

「おう、やろうぜ！」

「三奈ちゃんも都市部かな？酸で溶かして道を作ったりとかね」

「そうかも！希械ちゃんあつたまいい〜！」

私の体の大きさと倒壊した家屋の隙間や細い路地での活動はしにくいのでその部分は他の人に任せるべき、同時に馬力が物を言う山岳救助なら私は有利、えーくんもそう。硬化の個性は咄嗟にテコとして使えたり、支えにれたりとても有利だ。さらにえーくんは力持ち、重い岩石をどかさす必要がある山岳救助にうってつけ。

スタート、の合図とともにまた控室が展開する。私はえーくんの手を取ってその場からブーストを吹かして飛んだ。他の候補生たちの誰よりも早く山岳部にたどり着いた私たちは、山岳部の無事な広い場

所に簡易救護所を設置したほうがいいと判断する。私は個性をフル活用して、簡易救護所を作って設置する。簡易ベッド、椅子……それとある程度の応急治療用具を出しつつ、えーくんにはハロと一緒に先に救助に行ってもらった。ハロがいれば人を見つけてくれることができる。

「……救護所が出来てる?!いや、雄英の君が作ってるのか!」

「はい!一人先行して救助をしています。私もここが終わったらすぐに」

「よし!みんなここが一時救護所だ!ここである程度応急手当てを終えたらヘリの離発着場を作った控室の救護所に送るぞ!」

私たちに追いついてきた他校の人たちが私が作った救護所を見てからサクサクツと指揮系統を確立して指示を出してくれる。それに異論はないので私は完成させた救護所の跡に超圧縮技術で圧縮済みのボックスを50個ほど作成して聞こえるように声を張り上げた。

「皆さん!これストレッチャーです!中央部の丸い部分を押すと超圧縮が解けます!反重力で浮くので山岳部でも使えると思います!」

「これ、すごいな!みんな、一つは持っていった方がいい!」

実際にボタンを押して反重力で浮き続けるストレッチャーを見せたら皆有効性を理解してくれたのか一つずつそれをもって、崩れた崖や山に走っていった。私も遅れるわけにはいかないとハロがマップピングしたハザードマップを受信して救護所に立体投影してから救助に向かう。ストレッチャーとハロに仕組まれた発信機が全体マップを通して探索済みの場所をマーキングしてある。見落としがない限りはこれで次にどこへ行くべきか分かるはずだ。

ハロの反応を頼りに空を飛んでえーくんに合流する、えーくんはどうやらもう既に一人助けてみたいで、一人の人を背負ってた。私は彼の傍に着地すると、そのまま反重力ストレッチャーを超圧縮から元に戻す。

「烈怒頼雄斗!これ使って!意識はある?」

「いや、意識はねえ、けど脳内の出血とかはない。気絶してるだけだ」

えーくんはストレッチャーに気絶した男の人を乗せる。途中で私



たちを見つけた人がトリアージと応急治療をやるからこのまま引き継ぐと言ってくれたのでその人に男の人をストレッチャーごと託してすぐさま救助現場にとんぼ返りする。ストレッチャーの位置情報で共有されてるマップのまだ未探索の場所にえーくんと一緒にやってきました。

「ハロ、生体探査！」

『ミギー！ミギー！』

「……助けてくれえ……」

ハロの生体探査で生命反応をサーチ、すると右の土砂崩れの現場で大きな岩に挟まる様に潰されかかっている老人を発見した。どうやってそんなところに入ったの!?それはまあ後回しにして、急いでえーくんと一緒に現場に駆け付ける。

「大丈夫ですか!?すぐ助けます、烈怒頼雄斗、これ！」

「おう！やるぞ！エクスマキナ！」

バランスが崩れば潰されることは必至だ。幸い意識はあるようだから致命的な潰され方はしてないだろう、私は二つジャッキを作りだして片方をえーくんに渡し、老人を挟むようにセットする。ジャッキを起動させると、電動のそれがすぐさまジャッキアップを始めて老人を助け出す隙間を作り出す。すぐにえーくんが老人を引つ張り出してストレッチャーに乗せた。

「……レントゲンは大丈夫、脳内出血もなし。打撲で済んでる。このまま救護所に運びます」

「お爺さん！大丈夫ツスよ！絶対助けますから！」

「……ああ、ありがとうよ」

HUCの人を簡易的に両目で診断する。彼の設定がどうなのかは分からないけど簡易的とはいえ全身くまなく見た。おそらく奇跡的な挟まれ方をして怪我は軽いタイプという設定かな?ストレッチャーは勝手に人の後ろについて聞いてくれるのでえーくんと一緒に一時救護所まで行ってもらう。私はそのまま、土砂崩れの中を掘る。さつきハロが探査した時に土砂崩れの土の中から生命反応が3つあったからだ。

小さな掘削機を作り出した私はトンネルを掘る様に掘った周りの土を速乾セメントと金属の梁で補強して道を作りながら穴を掘り続ける。これ探索系の個性無かったら見つけられないやつじゃないかな？そうして1分もかからずに要救護者の所にたどり着く。

「助けに来ました！もう安心ですよ！」

「ああ！この子が意識がないの！」

「少し失礼しますね……うん、はい。大丈夫です！絶対助かりますし、私が助けます！一緒に行きましょう！」

ストレッツチャーを3つだす。多分家族の設定で小さな子が意識を失っている。両目でサーチして骨折とかがないのを確認した私はストレッツチャーにその子を優しく置いて、両親に笑顔を向けた。それを見た両親はほっとした顔をしてストレッツチャーに自分で乗ってくれ。私はそのままストレッツチャーを3つ引き連れて土砂の中から脱出、急いで一時救護所に向かった。

「トリアージお願いします！脳内出血及び骨折はありません！」

「分かった！おい！次きたぞ！運んでいってくれ！」

「エクスマキナ！」

「烈怒頼雄斗！こっちはもうそろそろ終わりそうだね！別の場所に……」

運び終えてこっちに戻ってきたえーくと合流して私が作った一時救護所に3人の要救護者を運んでいく、トリアージを務めてくれる先輩に3人を引き渡すと、移動に適した個性を持った別の先輩が応急処置を終えた人たちを救護所に行っている控室に運んでいく。マップを見る限り山岳地帯はほぼ全て探索が終わっているみたいなので、次はえーくと一緒に一番ヤバそうな繁華街方面を、と思つたら開始前のステージ破壊に匹敵する大爆発が起こった。

何事!?とえーくとシンクロして爆発の方を見ると……人影が多数……?ズームして見て見ると……ギャングオルカだ！ってことはこれヴィランによるテロでヴィランが追撃かけてきたってことだよね？ちよつと距離あるし……ここの避難は大分終わってる。なら私たちは戦闘をした方がいいかもしれない。幸い前衛としてとても優

秀なえーくんがここに居る。

「烈怒頼雄斗、私はここから援護するよ。皆の盾になってあげて。ドダイ、形成開始<sup>テイ</sup>」

「おう！頼んだぜー」

人一人が上に乗れる小型の飛行機を作り出した私はそれにえーくんを乗せてギヤングオルカたちがいる地区に向かって全速力で送り出す。私は崩れてない山の天辺に飛んで、フィールド全域を俯瞰する。あの方向からしかヴィランがやってこないとは限らない、ならどこから何が現れてもいいように準備をすればいい。

「GNスナイパーライフル、形成開始<sup>テイ</sup>。ハロ、ホルスタービット起動、ビットはライフルビットで」

『リョウカイ！リョウカイ！』

GNスナイパーライフル、Generation Nextスナイパーライフルの略。ビームライフルの発展形だけど。新たに開発した狙撃用のものだ、次世代に突入した装備なのでかっこつけてそんな名前を付けたけど、対人用のビームと通常威力のビームをデフォルトで打ち分けできる便利な子なんです。ありがたうイオリア教授、でもビーム関係本職じゃないってほんと……？

腰に圧縮して懸架しておいたホルスタービットを解放しハロの操作で中に入っているビットが出てくる、連射力に特化したピストルビットではなく、一撃の威力と射程を重視してピストルビットにパーツを接続したライフルビットだ。10基のライフルビットが私の周りに浮かび、ホルスタービットは後ろで組みあがって待機する。

両目を狙撃用に切り替えた私はGNスナイパーライフルと目を連動させてスコープとして使い、狙いをつける。既にギヤングオルカたちによる対ヴィラン想定戦は始まっている。ドダイに乗ったえーくんが飛び降りるのに合わせて私はギヤングオルカの周りにはいるヴィランの役をやっているサイドキックたちの右手、おそらく武器と思われるものを破壊するために狙撃を開始した。

「エクスマキナ、ダイレクトカノンサポートに入ります！」

独特な音を立ててGNスナイパーライフルとライフルビットから

ビームを連射する、降り注ぐ熱線の雨がサイドキックたちの武器を遠距離から破壊していく。中の人に損害を与えるわけにはいけないので、武器だけの破壊に徹する。ギャングオルカに相對してるのは……轟くんと夜嵐くんだ！彼らなら……あれ？なんか、喧嘩してない……？えーくんは私が武器を破壊した人の無力化で忙しいし……いけない！

「そつちに行くしかなない……!?まずい！」

二人の連携のまずさがいけない方向に噛み合ってしまった、傑物学園高校の真堂さんにフレンドリーファイアしそうになる。デクくんが助けてくれたみたいだけどそこで終わりだ、戦線が完全に瓦解した。多対一はえーくんあまり得意じゃない！しようがない、長距離ミサイルをいくつか発射して爆発によって足止めする。遠距離攻撃に徹していたけど、私も前線に行かないとまずそう。

ここで、轟くんと夜嵐くんの最後の攻撃が完全に噛み合った。ギャングオルカを炎で足止めし、その炎を夜嵐くんの風が竜巻にしてギャングオルカを閉じ込めたのだ。炎の牢獄……！ギャングオルカは乾燥と熱に弱い、弱点を突いた完璧な攻撃だ、私はその隙にスラストを吹かして前線に飛んでいく。

「ハロ、タイタンフオール！スタンバイ！」

『タイタンフオール！タイタンフオール！』

腰ベルトから3つ圧縮ボックスが分離して、それぞれゴリアテ、ヘカトンケイル、アルビオンを形作る。自立機能で組みあがった彼らのうち、ゴリアテのヘルメット内にハロを移動させて3機の自立起動の要として動いてもらう。そして私はそのまま、熱風牢獄を超音波で弾き飛ばしたギャングオルカに向かって突っ込む。

「で、次は？」

「私です！」

没になってしまった必殺技、イナズマキックをギャングオルカの目の前に着地と同時に放って足止めをする。めぐりあがった岩石と石の散弾に怯んだギャングオルカの間についてタイタンたちがギャングオルカを囲う。ゴリアテが背後、ヘカトンケイルが右、アルビオン

が左、そしてそのままそれぞれの武装をフルオープンさせてギャングオルカに狙いをつける。

「動かないでください、大怪我じゃ済みませんよ」

「いい判断をする……！並みのヴィランならこの時点で戦意喪失するだろう。だが、次を考えているのか」

「はい、次は彼らです」

私のその言葉と同時にえーくとデクくんが私の両側から雄たけびを上げて突っ込んでいく。ビットがギャングオルカの逃げ場を潰し、彼らの攻撃を受けるしなくなる。デクくんの蹴りとえーくんのパンチをギャングオルカが受けて、凄まじい勢いで後ろに滑っていき、そう……ゴリアテの所まで。

ゴリアテが拳を構え、ギャングオルカに当てる！というところで演習開始と同時に鳴り響いたベルの音と演習終了を知らせる目良さんの声が放送される。ハロに攻撃中止の命令を出してゴリアテが拳をびたりと止めて、下ろした。デクくとえーくんも追撃の拳を下ろしてぱちくりとしている。

ちよ、ちよつと消化不良かもしれないけど、試験終了だね？と私はホルスタービットにライフルビットを戻して二人とギャングオルカに近づいていくのだった

## 69話

『集計ののちこの場で合否の発表を行いますので、怪我された方は医務室へ、他の方はスーツより着替えてしばし待機してください』

試験が終わった、えーくんがバタバタと踵を返して轟くと夜嵐くんを抱え上げている。けどすぐに士傑の毛むくじやらの人に夜嵐くんを渡して轟くんをおんぶする形になった。私はギヤングオルカに少しだけ用があつたので彼に近づいて話しかけることにする。

「あの、ギヤングオルカさん……神野ではありがとうございます」  
「私は何もしていない。君が助かった経緯は聞いている、ヴィランごときにやりこめられて正直言えば私自身に腹が立つほどだ。君も、良く助かってくれた」

「でも、ギヤングオルカさんが言葉をかけてくれなかったら私、途中で折れてたかもしれませんから。助けに来てくれて、嬉しかったんです。ベストジーニストさんとかにもお礼を言えたらいいんですけど」  
「この後伝えておこう。彼がすぐさま復帰できたのは君が庇ったからだ。彼も君のことを気にしていた」

オールフオーワンの攻撃をまともに浴びたベストジーニストだけでなく、最後のとどめに私が割り込んだおかげで治癒で対処できるレベルの重症にとどまっていたらしい、ベストジーニストが逃がした他のヒーローたちも軒並み軽症で神野以降すぐに現場復帰した人も沢山いたらしい。

がぼ、とゴリアテのヘルメット内からハロを回収して抱っこする。ホルスタービットも含めて結局出番がなかったタイタンシリーズ3機をまた超圧縮技術で圧縮して腰ベルトに仕舞っておく。私はギヤングオルカにお礼の気持ちを込めて深々と頭を下げた後に踵を返してクラスメイト達と合流する。

えーくんが背負われている轟くんは無言だった、私たちも彼の気持ちを慮ることしかできないので深くどうこう言うことはできない。フレンドリーファイアはともかく、仲間割れはかなりの減点ポイントになってしまいうだろう、採点基準は分からないけど、HUCの人がし

てるのは確實、それ以外の行動はどうなってるのか……。着替えながらも私は不安がぬぐえなかった。

「はー、こういう時間一番ヤダ……」

「わかるわー」

「やれるだけのことはやりましたもの。きつと大丈夫ですわ」

「そうだよ、みんな頑張ったんだから平気！ね！」

制服に着替え終えた私たちはそれぞれの学校順に固まって結果発表を待つ、響香ちゃんが高鳴る心臓を抑えるように胸を押さえながらの感想に同意する上鳴くん、上鳴くんに同意されたのが若干シヤクだったらしい響香ちゃんが軽く頬を膨らませると上鳴くんはなんで!?!とシヨックを受けている、確かに理不尽。

『皆さん、お疲れさまでした。とりあえずは発表前に採点方式から説明させてもらいます』

あ、目良さんだ。一気に姿勢を正した私たちに目良さんが説明するところによると、減点方式の内訳はヒーロー公安委員会とHUCの二重の減点方式、危機的状況下でどれだけ間違いない行動をとれるかどうか、ということらしい。なるほど、観客席にいるサングラス黒スーツの人はそういうことだったのね。一人だけ私をじーつと見てる人がいるのもそういうことだったんだ。じゃあその人にお礼を言わねば、とりあえず手を振っておこう。なんかえらく驚いてるや。

『合格点は50点以上、今の言葉を踏まえたうえでご確認ください』  
その言葉と同時にバンツ！と電光掲示板に50音順で合格者の名前が映し出される、私はゆなので最後の方……！あつた！あつたよ！飛びあがりそうなほどうれしくなるけど必死で抑える、口元はきつとゆるゆるだけど……それでも超嬉しい！そして私の合格を確認できたので今度はクラスメイト達の名前があるのを確認する、梅雨ちゃんでしょ、お茶子ちゃんでしょ……ある、ある……爆豪くんと轟くんの名前が……ない？

轟くん……きつと仲間割れで大きく減点されちゃったんだ。爆豪

くんに至ってはちよつとわからないけど……どこにいたのかもわからないし。でもヴィランがいたのに突っ込んでこなかったのはちよつと違和感。今までの爆豪くんなら多分救助そっちのけでヴィラン相手に大立ち回りするだろうし。もしかして……迷ってたのかな？それで減点されたのか？そしたら一緒に行動してたであろう上鳴くんは合格してるし……ううん？

「これを機に改めよ？言葉って大事よ？」

「うるせえ……」

「まさか要救助者相手に暴言吐いてたの……!？」

私の戦々恐々とした声に爆豪くんは反射的に言い返そうとしてそれをグツとこらえた。凶星だったのか……そりゃ減点されるよ、不安になってる時に汚い言葉を投げかけられてしまったらそりゃあね……。そして、轟くんは無言。夜嵐くんがきて彼に謝っているけどお互い様だと轟くんは返して、お前のおかげで気づけたものがあるという明るい形で終わることができたみたい、よかった。

『えー全員ご確認いただけますでしょうか？今から配布するプリントは採点内容が記載されておりますのでしつかり目を通してください』

その言葉と同時に公安委員会の人私たちに採点内容が載ったプリントを配ってくれる。私にも配られたので中身を確認してみると……96点！これ凄いんじゃない!?減点内容は……ギャングオルカに放ったイナズマキックの大規模攻撃による二次災害の恐れ……なるほど。今まで戦場じゃ基本遠慮なしにぶっ放してたけどここからはそういうのも注意しないといけないのね、反省。

でもHUCの人からの減点が無ーい！嬉しい！つまり救助では間違った行動はとってない！ってことだ！かなり自信が出てくるねこれ！私のニコニコ顔が気になったのか三奈ちゃんが私の背中にジャンプして飛び乗り、私の採点内容の紙を見る。

「うそー希械ちゃんすごーい！96点！」

「まあ！私94点でしたの……流石ですわ、希械さん」

「だー……俺は82点だ、すげえな希械」



「訓練の成果が出た感じだよ。頑張ったんだ。私だけじゃなく、みんなね」

「よこせや……」

「爆豪くんこれとつても合格にはならないよ……」

地獄の底から手をこまねいている亡者のようなひつくい声で私やえーくんの採点用紙を奪おうとする爆豪くん、よっぼど悔しかったのか声に覇気がない。そして続く注意事項、オールマイト先生が引退したこと、そして彼の存在によって抑圧されていた犯罪者たちが動き出していること。それを踏まえての今回の試験……私たちがヒーローになる頃には象徴が不在となった社会がどうなっているかは分からないから。

『そして、落ちてしまった人。しょげている暇はありません。もし君たちが望むのであれば、3か月の特別講習のち個別テストで結果を出せば、君たちにも仮免許を発行するつもりです』

おお！目良さんが話すところによると一次は落とす試験だったけど、それで残した100人は出来るだけ育てていきたい、だから2次試験で落ちてしまった人にはチャンスを与える、ということね！よかったね轟くんに爆豪くん！これで仮免許に合格できれば晴れて1—A全員合格になるよ！

とにかく私たちの仮免許試験は、こういう形で終わりを迎えるのだった。帰ったら何か美味しいもの食べたーい！何作ろうかなあ、でもなんも仕込んでないなあ。

「樫少女、ちょっと」

「あ、はい何でしょうかオールマイト先生！デクくん呼びますか!？」

「あ、いや君だけに用があるのさ。相澤君には話を通していいからこのまま私の車で少し付き合ってもらいたい」

「……なんででしょう?」

仮免許試験の会場を後にする私たち、私に声をかけたのはオールマイト先生だ。どうやら私だけに用があるみたい、デクくんセットじゃな

いのは初めてじゃないかな？荷物をオールマイルト先生の車に乗せて、とりあえずみんなに寮でね、と手を振る。オールマイルト先生専用らしい黒い車の助手席に乗り込んだ私がシートベルトをしたのを確認してオールマイルト先生はそのまま上手な運転で車を発進させた。

「悪いね樗少女、仮免試験を終えたばかりで疲れているだろう。合格おめでとう、君ならば合格できると思っていたよ」

「ありがとうございます。あの、どうしてデクくんじゃなくて私に……？」

「ああ、今から空港にとある人たちを迎えに行くことになっていてね、君も知っている人たちさ。その人たちを含めての話があるんだ」

「私が知ってる人……？」

「デイヴと、メリツサだよ」

「シールド博士とメリツサさん!？」

滅茶苦茶驚いた。だってそんな話メリツサさんとは全然してないもん！なんでなんだろう？というかI・アイランドの渡航制限とかどうなったんだろうか？私が疑問符を浮かべている間にも車はジャンクションから高速道路に入って空港までの道のりをずんずん進んでいく。え、ちよつと待って私シャワーとか浴びてない!?いくら何でもこの状態でシールド博士やメリツサさんに会うのは失礼が過ぎるよ!慌てて汗拭きシートで顔を拭いている私にオールマイルト先生は申し訳なきそうにしながら。

「私が象徴から降りて一か月たたないが……それでも犯罪傾向は上がってきている。君たちを育てる側に回る私にもできることをしようと思ってるね。人脈を頼ることにした」

「つまり、シールド博士とメリツサさんが雄英に……？」

「そうなる。デイヴはサポート科の教員に、メリツサは留学という形でね」

「渡航制限は……？」

「H A H A H A！私がお願ひしたらなぜかあっさり通った!」

「そりゃオールマイルト先生のお願ひを断れる人がいたら見て見たいですけど……」

この人、今は何でもないただの人のように自分のことを語ってるけど……日本に平和をもたらした本物のヒーローなんだよ？その名声は海外にも届いていて、海外のヒーローたちもこぞって彼にはかなわないと言ってるくらい。その人が直々に、お願い。それを断るということはかなりの無茶振りか、周りの目を気にしない人くらいだ。この人にそのつもりなくても自動で圧力がかかる感じだよね……。

「……あれ？でもシールド博士とメリッサさんが来るなら猶更デクくんを呼んだ方が良かったんじゃない？……？」

「……それについては全員そろってから話そう。緑谷少年をなぜ呼ばなかったのかも含めて、ね」

「……分かりました」

ハンドルを握るオールマイルト先生の横顔があまりにもシリアスだったから、私はそれ以上突っ込むのをやめることにした。きっと何か重要なことがあって、それに私が必要だから……呼ばれた。好意的に解釈すれば頼ってもらえたということだよな!?オールマイルト先生に！頼ってもらえた！いけないな、この事実だけで私のやる気が有頂天だ。

「マイルトおじさま！希械さん！心配してたの！」

「トシ！それに樫君も！話は聞いた、大丈夫なのか!？」

I・アイランドからのプライベートジェットのタラップを駆け下りるようにメリッサさんとシールド教授が降りてくる。長時間のフライトを感じさせないほどの必死さだ。メリッサさんは私に思いつきり抱き着いて、無事でよかった……と言ってくれる。やっぱり神野の件は外国でもビックニュースみたいだね……。

「メリッサさん、心配かけてごめんなさい。私はちゃんと大丈夫だから」

「……希械さん、目が……!？」

「うん、取られちゃったの」

「そんな……!？」

「……I・アイランドでも大騒動だった。教授たちは軒並み君を心

配していたよ。トシ、ここから暫く俺は日本にいる。何でも頼ってくれ」

「ああ、ありがとうデイヴ。ここじゃ人目につく、場所を抑えてあるからそこに移動しよう」

私の髪の間から色が揃った両目がチラ見えしてしまったらしく、メリッサさんは瞳に涙を浮かべながら我が事のように悲しんでくれている。連絡を取り合ってはいても基本的にメールが主なので直接私を見るのは今日が初めてになるのか、驚かせて申し訳ないことをした。そして、オールマイト先生の言葉で気を取り直して入国審査をすつ飛ばし乗り入れた車に乗って私たちは空港を後にする。

正直、ちよつと不気味だ。何が不気味ってオールマイト先生、何時も鷹揚でユーモアを忘れない先生が、今日に限っては嫌にシリアスでどうも何かを急いでいる感じが拭えない。何が彼をそこまで突き動かすのか、象徴を引退した彼にそこまで何かを焦らせるわけがあるのか……私には見当もつかない。

何度も大丈夫なのか、ちゃんと目は見えているのかと心配してくれるメリッサさんに大丈夫だよ、見えていますと返事をする。そこまでしようやく私が一応の一応無事だと理解したメリッサさんはハンカチで目尻を拭ってほつと一息ついた、本当だったら有意義なはずの留学も日本がこんな状態だと素直に喜んでいいかわからないよね……いやホント、申し訳ないよ。

オールマイト先生は車を一つの高級そうな料亭に駐めて、そのまま入っていく。私たちも荷物を車に残してそのまま料亭の中へ、オールマイト先生は顔パスなのか綺麗な着物を着た仲居さんに案内されるがまま私たちも付いていく、案内されたのは、壁の一部が仕込みドアになってる隠し部屋。私たちが中に入るとオールマイト先生はそのまま中から鍵をかけてしまう。

時間を指定してあったのか既に湯気が立っている料理がスタンバイされていて、食欲をそそるいい匂いが部屋の中に充満していた。私はオールマイト先生の隣の座布団に正座させてもらい、シールド博士とメリッサさんは対面に座る。オールマイト先生は、そこから2度ほ

ど躊躇うように言いよんどんでから、口を開いた。  
「来て早々申し訳ないけど、大事な話をしたい。皆、落ち着いて聞いて欲しい。私は恐らく……今年か来年、死ぬ」

## 70話

「……え?」

「なっ!」

「お、おじさま……!」

オールマイト先生は今なんて言った……?死ぬ?オールマイト先生が?なんで……?私たちの三者三様の驚きを見たオールマイト先生の顔は極めて真面目、ユーモアではなさそう。というかオールマイト先生はこんなブラックユーモアを言う人でない。本気の話だと受け取った方がいいかもしれない。

「トシ、冗談じゃないんだな……?」

「……ああ。樗少女、サー・ナイトアイを知っているね?」

「は、はい!私の職場体験の時にも指名を下さりました!確か元々オールマイト先生のサイドキック……」

「ああ、そうだ。彼の熱意に負けてサイドキックとしてコンビを組んで5年ほど一緒に活動してた。今は訳あつて不仲だが……私の死を予知したのは彼の個性だ」

あ……!そうだ、サー・ナイトアイの個性は予知!詳細は不明だけど未来を見る力!サー・ナイトアイとオールマイトがコンビを解消したのは今から約5年前だから……その時にはもうオールマイト先生は自分が死ぬことを理解していたんだ……!だから、死ぬ前にデクくんという後継を見つけて育てている……!」

「予知を聞いてから今までね、私は自分の死を受け入れるつもりでいた。ゴールがあればそこに向けてひた走ろうと。神野のソレが私のゴールだと思っていた」

「マイトおじさま、その……デクくんには……?」

「今はまだ、言うつもりはない。出来ることなら隠しておきたいんだ。彼は私のファンだから」

「トシ……」

それで、デクくんは呼ばずに私だけを呼んだんだ。だけど、余計に腑に落ちない。それなら、私に言う必要も、メリッサさんに言う必要

もないはずだ。親友だというシールド博士に伝えるのは分かるし、大人同士の話し合いもあるだろう。まだ、受精卵から孵化したての私と、メリツサさんと呼んだ理由は何なんだろうか？

「トシ、その予知……変えられないのか？」

「未だかつて、彼の予知が変えられたことはないらしい」

「そんな……マイトおじさまが、死ぬ？いや、いやだ……！」

「すまないメリツサ、樗少女。君たちの気持ちを慮ることが出来ずにこんな話をしてしまったことを許して欲しい。だが、君たちにこれを話したことはきちんと理由があるんだ」

「……これが本題ですね？」

ただ死ぬ、という話ではないことは安心した。これでたとえば死んだ後のあれこれをお願いされるのだとしたら全力で断るんだけど……どうやらそういう話じゃないらしい。そこだけは安心できる。冷めてしまった料理をよそにオールマイト先生はマツスルフォームに変身してバン！と机を叩いて深々と私たちに頭を下げる。

「頼みがある！どうか私を……終わってしまった象徴、オールマイトにもう一度、生きる力を貰えないだろうか……！」

「………どういふことか、聞かせてくれ。もう一度、戦うと言っているのか、君は」

「そうです！もう休んでもいいんですよオールマイト先生！貴方がこれ以上傷つく必要なんて……！」

平坦な声でオールマイト先生を問いただすシールド博士に、私もオールマイト先生にこれ以上戦ってほしくなくて言葉を重ねる。だって今、先生は無個性だ。残り火は消え、内臓も半壊状態、古傷は治らずたまに開く始末、喀血は日常で激しい運動には向かない体なんだ。極限状態と言っても過言ではない。ここからさらに戦うなんて自殺行為だ、私じゃなくなつて誰でも止める、それが予知をしたサー！ナイトアイなら猶更。きつと彼も必死に止めたに違いない。

「……おそらく私の死因はヴィランによる他殺だ。他でもないナイトアイが断言した、対峙したヴィランによって言い表せないほど凄惨な死を遂げると」

「そん、な……！」

「メリツサ……！」

ふらりと気が遠くなつてふらついたメリツサさんをシールド博士が抱き留める。じゃあつまり、オールマイト先生はここから1年前後でヴィランに遭遇して、殺されるかもしれないということ……？戦う力を持たないオールマイト先生がそんなことになれば、殺されるのも無理はない……他のヒーローを護衛か何かにつけるべきじゃないの……？

「だけどね、3人とも。私は今……生きたい。緑谷少年や、櫛少女、メリツサが作る新しい平和の時代をこの目で見たいんだ。だから私は、何が何でも生き抜きたい。情けなくとも、誰かにすがろうとも……予知に抗いたい、そう決意した」

「トシ……分かった。俺を呼んだということは……科学方面か。そしてメリツサに希械君……新しく君専用のヒーロースーツ、サポートメカを作れと言いたいんだな？」

「そういうことなら、私も協力します。未来は確定してなんかいません、行動次第で捻じ曲げられるはずですよ」

「私も！マイトおじさまを助けられるんだったらいくらだって協力するわ！」

そうか、オールマイト先生は運命を、予知を受け入れていたけど……デクくんによってその意識は変わった。彼の存在が、オールマイト先生に生きる意志を灯したんだ。そういうことなら私たちだって協力しないわけにはいかない、もしもオールマイト先生が私たちに協力をお願いする理由が、象徴が不在になつてまた社会が混乱し始めているから、という自分をすりつぶすような理由だったら断つてたけど……違った。

生きる為に、明日を、未来を掴むために、力が欲しい。そういうことだったら是非とも協力しなければならない。だって、オールマイト先生は十分に頑張った、平和の象徴として長い期間君臨し、人を守り続けていた。その最後がただむごたらしく殺されるだけなんて、あんまりすぎる。報われるべきなのだ、報われなければならないんだ。そ



の絶望の壁を乗り越えるための力が必要なら、用意しよう。今世紀最大の発明家であるシールド博士と、その娘のメリツサさん、彼らには劣るかもしれないけど機械系個性の持ち主である私……これならきつと、いいものができるはずだ。

「ありがとう、3人とも……！私は必ずこの手で運命を捻じ曲げてみせる！樗少女、メリツサ……君たちが来た！と世界に羽ばたく日まで、私は生き残ろう」

「これ以上言わないでくれ、トシ。お前に生きていて欲しいなんて当たり前の話だ、礼なんていらぬ。俺のやることは変わらない、お前のスーツを作ってたのは誰だ？俺だろう。お前が望むものは全部用意してやる。しかも今回は、頼もしいパートナーたちが二人もいる。お前の全盛期を超えるものを作ってやるさ」

シールド博士の言葉に、私とメリツサさんは深く頷いた。私とメリツサさんはもう、サポートアイテムについてはプロライセンスを取っている。これがプロとしての初仕事だけど、私のやることは変わらない、作り出すだけだ。絶望の壁を粉碎する力を。プルスウルトラ、さらに向こうへ行く力を。やるぞ！うん！

「オールマイト先生、ありがとうございました。メリツサさんとシールド博士も、また。サポート科に顔を出しますので」

「ええ、頑張りましたよ！希械さん！」

「トシ、とりあえずこの後お前の要望をまとめるから付き合ってくれ。メリツサは寮の方に挨拶に行つてきなさい。希械君、頼りにしてるよ」

「はいー」

「樗少女、突然の話を了承してくれてありがとう。近いうちにまた、話し合おう。それまでは、学業に専念して欲しい」

あの後、雄英の夕食の時間を過ぎてしまったので、冷めてしまった

料理を美味しく頂いた私たちはオールマイト先生の運転する車に乗って雄英に帰ってきていた。メリツサさんとシールド博士は今日届いているはずの荷物で部屋を整理することなので明日明後日は学校に行かないで寮にいるのだそうだ。それなので私はオールマイト先生たちとはここで別れて自分の寮に帰ることにした。

多分だけど近いうちにシールド博士にメリツサさんと一緒に呼び出されることになると思う。メリツサさんは雄英のサポート科3年生に留学という形になるから、私と一緒にで学業優先になっちゃうのかな。と言つても私の個性最大の長所である機械の組み立て速度があれば試作品もブラッシュアップも思いのままなので、バンバン頼ってほしい。必要なことは何でもさせてもらいます。

「大変なことになっちゃったね、ハロ。あ、紹介し忘れちゃった」

『ヒドイ、ヒドイ』

「ごめんってば」

完成したら教えてね、と言われていた量子コンピュータを搭載したサポートAIメカ、ハロ。イオリア教授には完成したことを伝えていたんだけど、シールド博士とメリツサさんに紹介し忘れてしまった。空気を読んでくれていたのかイヤリング状態のままずっと黙っていてくれたハロの大きさを元に戻して私はあやすように抱っこする。そのまま玄関のドアを開いて寮の中に入った。

「ただいまー、みんなお疲れさまでしたー」

「あーっ！希械ちゃんやっとな帰ってきた！三奈ちゃんが寂しがってたぞー！もう寝ちゃったけどー」

「あ、ごめんね。透ちゃん、起きてたんだ」

「うん、見たいドッキリ番組がやってたの！」

「あ、樫さん。オールマイトに呼び出されてたけど……どうしたの？」

「デクくん、うん。実はね……空港にメリツサさんとシールド博士を迎えに行ってたの！何と二人、雄英にくるんだって！」

「ええっ!?!それは凄いね！」

共用スペースでテレビを見ていた透ちゃんがソファを乗り越えて

此方にやってくる。ごめんね、反省会する約束だったんだけどブツチしちやって。すりすり私にすり寄り寄り透ちやん、かわゆい。ハ口を落として透ちやんをなでなで、足元からハ口の抗議の声が聞こえるけど今はこっちの方が大事、ああ、癒される。拗ねたハ口は跳ね回って一緒にテレビを見てたお茶子ちゃんの膝に着地する。フフフ、と笑ったお茶子ちゃんが掌でハ口を撫でている。

お風呂上りらしいデクくんが髪をふきながら共用スペースに入ってきて、私が呼び出された理由を尋ねてくる。うーん、デクくんも入学時よりだいがつしりしたね、ナイス腹筋シックスパック！顔と体のバランス凄いいよ、まあえーくんにはまだまだ遠く及ばないけど！だってえーくん硬化しなくても筋肉だけで鋼レベルに硬いし……。

実はメリツサさんとシールド博士が雄英にくるんだ、という話をしたら共用スペースにいてテレビを見ていた他の人は大盛り上がりだ、なんせI・アイランドの事件では事件にかかわった人だけじゃなくてI-A全員がI・アイランドに入島していたので全員メリツサさんと面識がある、なので大盛り上がりだ。ヒーロースーツについて聞いてみようという話も出ている。

「そっか……オールマイト、僕も連れてってくれればよかったのに」「あはは、私を呼んでほしいってシールド博士がいったみたいで。色々話してきました」

「もしかしてI・アイランドの最新サポートアイテムの話?」「うーん、どっちかというところと研究発表会というか私の進捗状況の共有というか……」

デクくんオールマイト先生の死期の話をするわけにはいかなないのであらかじめ車の中で4人で示し合わせていたカバーストーリーを展開して誤魔化す。ごめんねデクくん、貴方に秘密を持つことになっちゃったけど、オールマイト先生はいつかきつとあなたにも話してくれると思うから、それまでは私は話せません。

「あ、青山くん。明ちゃんからネビルレーザーについての……」

「あ、ありがとうレディ☆明日聞いてみるよ、僕はこれで☆」

「あ、行っちゃった……」

うーん、おかしいなあ。圧縮訓練の時から青山くん、私を見ると拳動不審になってるんだよね。私と遭遇すると一瞬固まるし、視線は左目に行くし。もしかして、目がなくなっても生えてくるのが気持ち悪いとかそう思われちゃってるのかな？いや、ありえるな。だって再生するといえど脳無で、脳無と言えどUSJで私たちに少なくとも心理的ダメージを与えてる。きつと同じように見えちゃってるんだね。彼の心の傷がいえるまで、私は少し距離を置くことにしよう。寂しいけど、仕方ない。

「あ、私お風呂入ってくるね。皆も早めに休むんだよ〜」

「峰田ちゃん、希械ちゃんが出てくるまでソファから離れちゃだめよ。さもなければ切島ちゃんに通報するわ」

「ええい離せ梅雨ちゃん！男の夢がそこにあるんだ！ビッグボインがオイラを待っているんだ！」

「ビ、ビッグボイン……」

み、峰田くんが私の胸部に穴が開くほどの視線を注ぎながらソファから立ち上がろうとするのを梅雨ちゃんが舌で叩いて止めて、瀬呂くんがテープでぐるぐる巻きにする。まさかストレートにそんなことを言われるなんて思ってもいなくて思わずオウム返ししてしまう。うう、大きいのは分かるんだよ実際大きいもの。だけどその、恥ずかしい……あう、デクくんまでも……。

「デクくんのえっち」

「えっち!?待って樫さん誤解だから！弁明させて！お願いだから！」

両胸を手で掻き抱いた私がデクくん一言文句を言ってからお風呂に突入する。後ろから必死で声をかけるデクくんだけ、今回はがつつり見てたねデクくん、男の子だね。まあ峰田くんのように覗いたりとかそういうことはしないと信じてるよ。それに話題に上がってつい見ちゃったんだよね、そういうことにしておこう。私は真っ赤になった顔で、洗面所でしゃがみ込みながら深呼吸をするのだった。

## インターン編

### 71話

「ケ、ケンカして謹慎!?!デクくと爆豪くんが!?!」

「らしいぜ?俺も朝聞いて驚いたんだ。だからホレ、寮内の共有スペースの掃除させられてんだとよ」

「私が朝クロワツサンを焼いている時にそんなことが……」

「お前もお前で何してんだよ。なんかいい匂いするなって思ったらすういうことか」

「えーくんも欲しい?」

「食う」

翌日の事、朝ごはんにメープルクロワツサンを焼いて、ベーコンエッグと共に自分の部屋で堪能した私が制服に着替えて共有スペースにおりていくとなぜか普段着の爆豪くとデクくんが朝ごはんもそこそこに掃除機で共有スペースを掃除していたので先におりてきていたえーくんに話を聞くと、なんと昨日の夜に爆豪くとデクくんが本気でケンカをしてしまい、相澤先生に寮内謹慎を言い渡されたのだそうだ。

爆豪くんが合格できなかった腹いせに……なんて浅い考えを持つ人はこのクラスにはいないので、きつと何か理由があるんだろう。えーくんがいうには殴り合って深まる友情というものがあるそうなのできつとそのたぐいじゃないか、って。なるほど、そういうのもあるのか……。

「うわー、希械ちゃんいい匂いする〜」

「焼き立てのパンの匂いだ〜甘くて香ばしい〜」

「ふふ、いいでしょ。教室についたら分けてあげるね」

くんくん、すりすり私の服についたクロワツサンの匂いにつられた三奈ちゃんと透ちゃんが私の匂いを嗅いでいる。ちよつと恥ずかしいけど今朝のクロワツサンは自分でもガッツポーズの出来だったので数に限りはあるけど学校に持っていくことにしたんだ。ああ、で

も爆豪くんとデクくんはここに居るんだった。

硬質な音を立てて急いで階段を昇り、自分の部屋から夜に食べようと取り分けて置いたクロワッサンの籠を取ってくる。まだほんのり暖かいそれを共有スペースのリビングに置いて、掃除をしているデクくんと爆豪くんに話しかけた。

「じゃあ、これおやつ置いておくね。ケンカした後なんだから、仲良く分け合って食べること！ね？」

「うん、ごめんね樫さん」

「ああ!?んでこんなクソデクと仲良く分け合いつこしなきやなんねえんだよ全部俺が食うわ！」

「爆豪くん？」

「……ケツ！」

「よろしい。それじゃあ、お掃除よろしくお願いします」

爆豪くんが一回反発するのは分かったので、改めて圧をかけると顔を逸らして舌打ちした。むむ、まあ態度は悪いけどこれは了解のポーズだね。私もだんだん爆豪くんを理解してきた気がするよ。

始業式への移動途中でB組の物間くんに会って、B組が仮免試験に全員合格したという祝福すべき事実を教えてくれた。私はそれを素直に喜んでただけど、なんか最近の物間くんは私に対しての悪口のキレというか、挑発の度合いというか、B組の自慢というかそういうもののレベルが低くなったというか、なんか乗り切れてないというか、そんな感じがする。なんか言おうとして慌てて口を押えてたし。B組の女の子たちが今にも物間くんを袋叩きにしそうな視線がちよつと怖い。拳藤さんだけじゃなくて全員が手刀構えてたし。

多分私のせいなんだろうなあ。物間くん、一回口が回りだすと自己や止められないからきつと、ヤバイ事言いそうになったら僕を止めろとかB組のみんなに言ってるのかも。B組をあげる発言をするならいいけど、B組の品位を下げちゃうのは僕の本来の目的じゃないとかそんな感じで。まあ、拉致の被害者が二人もクラスにいるんだから、発言も慎重になっちゃうよねきつと。

それで始まった始業式、校長先生のなが〜〜〜い自分の毛質の話を聞いていると、すごく気になる情報が入ってきた。ヒーローインターン、名前から察するに職場体験のアップグレードバージョン？めっちゃ気になる！特に私職場体験が超中途半端で終わっちゃったから経験が少ないの！情報！情報頂戴！

「寮のグルルルツ！バウバウ！アオーーーーン!!」

「ぴゃっ!」

「えー、昨晚ケンカした生徒がいましたが節度を持って譲り合い、生活してくださいとのことです」

「な、なんだ…ハウンドドッグ先生か」

ヒーローインターンについて考えるのに夢中でいきなり響いた猟犬のような吠え声には肩をビクツと跳ねさせる。慌てて壇上を見ると肩を怒らせたハウンドドッグ先生をブラドキング先生が宥めて意識をしているところだった。興奮すると人語を忘れるんだっただねハウンドドッグ先生、ってことはデクくんと爆豪くんにそれだけ怒ってるんだ怖い。私は冷や汗を背中にかきながら、始業式を終えるのだった。

「じゃあまあ、今日から通常授業を再開することになる。色々あったが学生の本分を全うしてくれ、訓練は明日からだ」

「あの先生、少しいいかしら。校長先生のお話に出ていたヒーローインターンってどういうものか、聞かせてもらえないかしら」

始業式を終えてホームルーム、相澤先生が注意事項と連絡事項を伝え終えたタイミングで梅雨ちゃんが拳手をして、みんなが気になっているであろうヒーローインターンについての説明を求める。皆もその話題が出てやっぱり気になっていたのかざわざわとヒーローインターンの正体について騒がしくなる。それを一睨みで黙らせた相澤先生が首に手をやりながら説明をしてくれる。

「まあ、今話しといたほうが合理的か…平たく言う校外でのヒーロー活動、以前行った職場体験の本格版だ」

「え!?!体育祭の頑張りは何だったんですか!?!」

「そこもきちんと関係がある。これは体育祭で貰った指名をコネク

シヨンとして使う。つまり指名がなければ活動自体が難しいんだ」

なるほど……つまり、仮免の免許を前提としてセミプロとして本当にヒーロー事務所で働くことを言うんだ。何それ凄い！私絶対やりたいよ！というか職場体験をやらなかった分絶対やらなきゃいけないやつだ！絶対私を先に進めてくれると確信した！今はまだ先生方は協議中みただけど許可が下りたら一番に申請に行かなきゃ！そのために今日から指名を貰った事務所のリストアップから分析してどこに行くか決めておかないと！

「とりあえず今日は授業に集中しろ、きちんと後日に改めて説明する。じゃあマイク、待たせた」

「オウケエイ・エヴィバディハンズアップ！今日は盛り上がったいくぜ！置いて行かれないように死ぬ気でノート取れ！」

「樫、ちょっと」

「あ、何でしょうか相澤先生」

「この後、ヒーロースーツ持って運動場γに来てくれ。お掃除だ」  
「分かりました〜」

午後のホームルームを終えて、みんな寮に帰ろうというタイミングで相澤先生が話しかけてきた。お掃除ということは心操くんの特訓ですね？了解ですとも。ちなみに本当に本当にお掃除というか廃材処分の時もあるので動きやすいヒーロースーツで行うことも間々ある。えーくんとかが手伝ってくれたりしようとするけど、専門知識があるサポート科と一緒にやるから大丈夫だよと断っている。割とマジで危険物扱ったりするからね、危ない。

えーくんたちも私の個性関係なので無理に手伝おうとはしないし、彼らにも彼らでやりたいことが毎日あるんだ。私に付き合わせてばかりでは可哀想だし。ちなみに私はこれが強くなる手段なのでやめるつもりはありません！しかし運動場γかあ……職場体験明けで救助レースをしたところだね。そんな広い所を抑えるなんて相澤先生、



本気だ。

寮でねくとみんなと別れた私は、運動場γの更衣室へ直行、さささと着替えて、さらにボックス懸架用のベルトいっぱい超圧縮した兵器を配置して準備完了……なんかちよつと胸きつくなつた？いや気のせいだ、そうに違いない。まさか太つた……？え？こんなに動いてるの？毎日腹筋も背筋も欠かさず行っているのか、帰ったら体重計に乗ろう……！いつも通り青メッシュを髪の毛に入れて、両目を出してよし！

「お、やつほー心操くん」

「ん、ああ樫……何その恰好!？」

「え？私のヒーロースーツ……あ、そっか見せるの初めてだったっけ」

既に運動場γに来てウォーミングアップをしていたジャージ姿に捕縛布を首にぐるぐる巻きにした状態の心操くんが私を見て物凄く驚いている。そういえば心操くんの特訓の時はずっと私もジャージだった。相澤先生が私に心操くんの特訓でヒーロースーツを着用するように言うのは確かこれが初めて……あれ？今日何かある？

「よし、時間前だな。で、だ。今日樫にこんな仰々しい恰好をしてもらったのには理由がある」

「はい」

「今日はお前ら二人で模擬戦を行う、心操、お前が夏に身につけたものを發揮しろ」

「俺が、樫と……？勝てませんよ、今は」

「現実を見据えるのはいいがな、勝つ気概くらいは言葉で見せろ。目は合格だ。樫」

「はい」

「手段を選ぶな、徹底的にやれ」

「……分かりました」

相澤先生から釘を刺されてしまった。正直、心操くんと私は相性最悪だ。私は基本洗脳は効かないし、身体性能に大きな差がある。だから、模擬戦と言われた瞬間に彼をどうやったら無傷で制圧できるかの

手段を考えていた。だって、私が本気で対応したら怪我じゃすまない。マグネの腕を破壊したように、脳無を再起不能にしたように……私に手段を選ぶなどということとはそういうことだ。

だから、気づいた。相澤先生は、ここで壁を見せるつもりなんだ。私という現状では超えられない壁を、どうするかということを中心くんに求めている。雄英高校のヒーロー科編入は2年生からだ、体育祭で認められてもそれだけのスパンが開いてしまう。1年の訓練の差は大きい、相澤先生が特訓できる時間も限られる。だからこそ、濃度を限りなく濃くする。そのための私だ。

「心操、手を選ぶな。全てをつかえ。樫から2分、逃げてみせろ」

「2分でいいんですか」

「私にとつては、2分もあるんだよ。心操くん」

私の見え見えの挑発にむっとする心操くん、そうそう、その顔だよ。デクくんと戦った時にしてたその顔。やっと私の前でも出してくれたね。通信機をセットして、私がスタート位置に移動する。制限時間は2分、入り組んだ隠れやすい地形である運動場は逃げに徹する側としては有利だろう。相手が私じゃなければだけど。

「スタートだ」

「1回目、だね」

「なっ……!?!」

相澤先生がスタートを出した瞬間に、ブーストを爆発させるように吹かした私が壁もパイプもすべてを突き破って、両目で常に捕捉していた心操くんをタックルするように抱きかかえて捕まえる。タイムは5秒かかってない。何をする間もなく、何もさせてもらえずに心操くんの1セット目が終了する。呆然とする心操くんを放す。

「呆けるな、お前が諦めない限り何度でもやるぞ。もう辞めるか?」

「……いえー!続けます!」

「……それでいい。樫、分かっているな」

「はい、加減はしません」

彼が本気で私に挑み続ける限り、私も本気で心操くんに対応しよう。いじめに見えるかもしれない、彼の心が折れてしまうかもしれない

い。だけど、彼ならきつと……さらに向こうへ、プルスウルトラしてくれると信じているから。

「ハアツ……！ハアツ……！クソ……！」

「ここまでだな」

「っ！いえ！まだやれます！」

「時間だ。今日はここまで。講評だが……期待以上だ。心操。よくここまで折れなかった」

「……え？でも俺、結局一度も……」

30回目の鬼ごっこに負けて、心操くんは息も絶え絶えに倒れる。私は本当に手段を択ばずに彼を追い詰めたので、オールレンジ攻撃にビーム、爆発……全部を使った。それだけの戦力差を見せられてもなお心操くんは一度も弱音を吐くこともなく何度でも立ち上がった。そして結局、私は彼の心を折ることが出来ずに、運動場の使用時間を終えたのだ。

「そうだ、お前は樫から逃げられなかった。だがな、それは当然の話だ。手段を選ばないこいつから逃げるのは、俺でも難しい」

「イレイザーでも……？」

「それが俺やお前、戦闘能力に直結しない個性を持った人間の宿命だ。俺は個性を消せるからまだいいが……お前の場合は初撃で通用しなければそれ以降は無個性として戦わざるを得なくなる」

「……そう、ですね」

相澤先生の指摘に心操くんは顔を伏して答える。心操くんは洗脳が効かなければその後は対策を取られてしまい大幅に有効性が落ちてしまう。その事実を突きつける相澤先生の声は、優しい。相澤先生の伝えたいことは、そこじゃないから、心操くんのいい所、個性よりも何よりも凄い所だ。

「樫のような天敵と、戦わざるを得ない時……必要なのはなんだと思っ？」

「判断力、とかですか」

「諦めない心だ。今のお前のように、何度でもくらいついて活路を開こうとする心だ。体育祭の時の緑谷を思いだせ。マラソン、騎馬戦、バトル……腕を壊そうが何しようが諦めなかつただろう。今のヒーロー科にお前が追いついているところはそこだ。たとえ周回遅れだろうと追いつこうと必死に努力をする。その心を忘れるな」

「俺が……ヒーロー科に……」

「神野以降、動きに焦りが見え始めた。そのままじゃお前はどこかで壊れていただろうからな。荒療治だが、思いだせたか。お前の原点……オリジンを」

そっか、心操くん焦ってたんだ……動きからそれを見抜いて、心操くんの原点……ヒーローへの憧れを思い出させるために、徹底的に彼を追い詰めた。どこかで折れるかもしれないと相澤先生は思ってたのかもしれない。だけど心操くんは相澤先生の予想を超えて何度でも立ち上がった。

「憧れちまったもんはしょうがないだろ……お見舞いに来てくれた時、そう言ってたよね」

「……あ……」

「お前は既にヒーローとしての適性を見せている。焦るなどは言わんが、この前のように倒れるまで無茶をするな。それが分かれば今日の特訓は満点だ」

「はいっ……」

相澤先生の言葉に、目尻に涙を浮かべた心操くんがそう返す。ヒーローとしての適性がどうなのかは私にはわからないけど、彼のその心は、私にとつては眩しくて、ヒーローになるには十分だと、そう思えるものだ。絶対にヒーロー科に入る、その誓いを彼が果たすまで、そう遠くないのかもしれない。

## 72話

「ご迷惑おかけしました!」

「デクくんオツトメご苦労様—」

「緑谷何息巻いてるの?」

「この3日間でついた差を取り戻したくて!」

ふんす、と鼻息荒く朝のホームルーム前にみんなに頭を下げているデクくん、もう、ホントだよ? 始業式含めて3日経ったんだけど、毎日毎日座学も訓練も新しいことのオンパレードで1学期より濃い、色々と。これでB組から聞いた話だとB組との合同授業も増えていくんでしょ? 1日だけで凄い置いて行かれるわけで、そのもどかしさを3日間デクくんは味わったというわけ。

それは鼻息荒くもなるよ、と私は一人うんうんと頷きながら、ホームルームが近いので響香ちゃんの机の上で彼女に遊んでもらっているハロを呼び戻した。私に呼ばれたハロは机と地面を撥ねて、私の机の上に戻ってくる。遊んでもらえてよかったね、ハロ。それからすぐ、時間ぴったりで相澤先生が教室に入ってくる。一瞬でみんな席について静かになった。

「じゃ、緑谷も戻ったところで、本格的にインターンについて話していこう。入っておいで」

単刀直入という言葉がとてもよく似合う要点だけしかないホームルームを始めた相澤先生がドアの外に声をかける。誰かいるのかな? 建付けのいい教室のドアが開いて3人の人が中に入ってくる。金髪でとってもガタイがいい人と、黒髪で三白眼の人、そしてとってもきれいなツイストがかかったロングヘアの女の人だ。

「あー! 天喰先輩!」

「えーくんどうしたの? 知り合い?」

「そうなんだよ! ファットガム事務所にいた先輩! すっげえ良くしてくれてるいい人なんだぜ!」

「二部知り合いがいるようだが、彼らは通称ビッグ3、英雄ヒーロー科のトップに君臨する3人だ」

へー、えーくん知り合いなんだ。ニコニコと笑顔を向けるえーくんに天喰先輩と呼ばれた黒髪の人の表情が若干緩む、えーくんのコミユ力にかかれれば先輩とも仲良しになれるらしい。しかし雄英でトップの3人かあ……あれでも去年の体育祭とかで見た顔はいないし……現場で輝くタイプなのかな？

相澤先生から軽く自己紹介をする様に言われたビッグ3、天喰先輩と呼ばれた人がこちらをギンツ、と一瞥する。おお、迫力満点だ。クラス中が彼に気圧されてしまっている。爆豪くんがいたら反発して襲い掛かってたかもしれないね。

「ダメだ……ミリオ、波動さん……どう頑張ってもみんな人間のままだ……言葉が出ない、頭が真っ白……辛い……帰りたい……！」

え、ええ……？えーくんが苦笑しているところを見るとどうやら天喰先輩はとつても小心者というか、人前があまり得意なタイプじゃないようだ。アングラヒーロー目指してるのかな？相澤先生みたいに。最終的に黒板に額をつけて私たちに背を向けた先輩に私たちは如何したらいいか分からなくなる。代わりに一步前に出てきたのは唯一の紅一点の女の人だ。

「あ、聞いて天喰くん、そういうのノミの心臓って言うの！知ってた？人間なのにね。ね！不思議！えーつと、彼がノミの天喰環で、私は波動ねじれ！今日はインターンについてみんなに説明して欲しいって言われて来ました！」

波動先輩っていうんだ……！そう思ったら波動先輩の口から出てくるのはインターンについてではなく私たちの外見というか気になったところをマシンガンのように次々と質問として飛ばしてくる。答えを言う暇もない、教壇を降りて尾白くんの尻尾触ったり、色々やっている。そこで彼女が目付けたのは机の上でコロコロ転がっている私のハロだった。

「わ、わ、かわいいー！何それどこに売ってるの？勝手に動いてるよね、どうなってるの？」

「……合理性に欠くね？」

とりあえずハロを波動先輩に渡してあげているとユラア、と個性を

発動させて髪の毛を逆立てた相澤先生が残ったもう一人に声をかけていた。それにあせあせとして大丈夫、大トリは俺なんだよね、という言い訳を重ねている金髪の男の人が前に出た。

「前途……！？」

しーん

「多難……！！よーし掴みは大失敗だ」

い、威厳ないなあ3人とも……！ギャングオルカとまではいかないにしろこう……オーラというかそういうものがあまり感じられない。えーくんだけは天喰先輩の実力を知っているからなのか尊敬の視線を注いでるけど、実際がどうなのか分からないので私たちも如何したらいいかわからない。景気よくコール&レスポンスにのればよかったのかな？マイク先生の授業みたいに。

「まあ何が何やらって感じだよね……ふむ、よし！じゃあ君たちこのまま俺と戦ってみようよ！俺たちの経験を、その身で体験したほうが分かりやすい！」

「……好きにしろ」

えー……！結局自己紹介してないよ!?金髪の男の先輩に言いくるめられた相澤先生はあっさりと戦闘許可を出してしまう。ジャージに着替えて体育館へといった相澤先生はあっせりと教室を出て、ビッグ3もそれに続いてしまう。私たちは顔を見合わせて、ジャージを取り出すのだった。

「あの、マジすか」

「マジだよね！」

通形ミリオ、と体育館で自己紹介した金髪の先輩は姿勢よく準備運動をしながら本当にやるのかという瀬呂くんにホントにやるよ、と答えている。んー、でも私も現3年生トップの実力を味わえるなら是非ともという感じなのでやる気自体はないわけじゃない、だけど全員かかっておいで、という通形先輩の言葉にムツときている人は多い。

「えーくん、どう思うっ？」

「強いと思うぜ。結局俺は職場体験じゃ一回も天喰先輩に勝てな

かったし、その天喰先輩が強いつて言ってるのが通形先輩だろ？舐めてかかったらヤバいんじゃないか？」

「なるほどね……」

若干前のめり気味なみんなが前衛と後衛に分かれて一人で私たちの前に立つ通形先輩に相對する。これちよつとまづいな……若干みんな緩んでる。通形先輩の挑発じみた行為と袋叩きにできるという安心感、そして直近で仮免許を取ったことによる自信が悪い方向に噛み合いだした。幸い私の隣にいるえーくんは天喰先輩の強さを知っているから、天喰先輩が認める通形先輩に対してかなり警戒モードだ。ありがたい。

「我々はハンデアリとはいえプロとも戦っている……ヴィランとの戦いも経験済みです」

「先輩！俺らそんなクソザコじゃないつすよ！」

「うん！いつでもここから来てもいいよね！一番手は誰だ!？」

「僕、行きます」

おお、一番手はデクくん！朝からやる気がみなぎっていたと思ってたけど、ここでもそうみたいだね。えーくんは一番手行きたかったみたいだけどやる気がフルマックス状態のデクくんに気圧されて譲ることにしたみたい。私はとりあえず様子見、という感じで腕から機関銃を展開しておく。今回は後衛かな？

「じゃあ、先輩！ご指導ご鞭撻のほど」

「……よろしくお願ひします!!!」

みんなの挨拶と同時にデクくんがフルカウルを身にまとって蹴りを入れに行く。何でもデクくん許容上限が上がって12%までなら無傷で使えるんだって！すっごいね！対する先輩は……えっ!？」

「はっ!?!は、は……は……はうう……!？」

「服脱げた!？」

「あ、ああごめんごめん！調整が難しいんだよね！」

デクくんの蹴りが当たる瞬間に、はらりと先輩のジャージが体を貫通するように地面に落ちる。局部は何とか手で隠してくれたけど、初対面の先輩、それに男の人のフルヌードを見てしまった私含め女子か



ら悲鳴ともとれる叫び声上がる。上半身まではえーくんで慣れっ  
こだったけど下半身は想定外で、真っ赤になつて蒸気を噴出する私と  
突っ込むえーくんという凄い絵面が出来てしまった。

「隙、だらけー」

「顔面かよ」

いそいそとジャージのズボンを履く通形先輩にデクくんの蹴りが  
突き刺さり、体ごとすり抜けた。そうか、すり抜ける個性……物理攻  
撃無効は私にとってはかなり鬼門だな……！遅れて遠距離攻撃持ち  
の後衛の攻撃が先輩に降り注ぐ、当然私の機関砲も。だけど……直撃  
の瞬間に、先輩はまたズボンを残して、地面の中に落ちるように姿を  
消した。地面もすり抜けるのか！

「まずは遠距離持ちだよね！」

「後ろ!？」

声がした方向、真後ろに体ごと向き直ると響香ちゃんの後ろに裸の  
先輩がワープするかのように出現していた。そしてそのまま、響香  
ちゃんのイヤホンジャックを掴み、上鳴くんと一緒に響香ちゃんごと  
ぐるぐる巻きにして拘束してしまう、そこからさらに5秒かからず、  
クラスの遠距離攻撃を持つ後衛のみんなのお腹に拳を突き入れて行  
動不能にしてしまった。全部みぞおち狙いでなんて正確な……！そ  
して私の眼前にまたワープするように迫ってくる。

「んんんっー」

「なんの！必殺ブラインドタッチ目つぶし！って痛っ!？」

ワープのタイムラグを計算していた私が眼前に現れるであろうこ  
とを予測して迎撃にかかる、それすらも予測されていたのか目つぶ  
し攻撃を受けた。透過する手による目潰しだけど、今の私は両目とも  
機械、たとえ狙撃用のライフル弾が直撃しても平気な機械の目だ。目  
を瞑ることすらなく先輩を捕まえにかかる、がすり抜ける。その隙に  
みぞおちにパンチを貰う、けど展開したピンポイントバリアが先輩の  
パンチを完全に防ぐ。実体があるときとない時があるね……！えー  
くんなら攻撃受けても大丈夫そう。

「いい機会だからしつかり揉んでもらえ。通形ミリオは俺の知る限

り、プロも含めて最もNo.1に近い男だ」

「あとは近接主体ばかりだよね！」

「もうちょつと情報欲しい……えーくん、耐えられる？」

「任せろー！」

何したのかさっぱりわかんねえ、という砂藤くんの叫びには同意だ。攻撃自体はシンプルなもの、だけど……移動手段が全くの不明。すり抜けるかワープの二択が最有力だけど……ワープの場合はどうやって実体を失くしているかが分からない。一部だけ別の場所に飛ばしてるとか、私たちの攻撃を飛ばしてるのかどっちだ？ いやさっきの接触時に違和感はなかった。すり抜けるほうかな？

こういう時に頼りになるのがデクくん、なんだけど彼が立てた予測を上回られた。カウンターのカウンター、さっき私がやられたやつだけどキレが段違い。けどデクくんもさるもの、私がさっきカウンターを入れられるのを見てたおかげでガードが間に合っている。12%の超パワーなら掠っただけでもパンチ程度なら逸らせるだろう。

デクくんを後回しにすることにしたらしい通形先輩はそのまま地面に落ちるように消えて、今度は飯田くんの真後ろに出現、そのままお茶子ちゃんや砂藤くんといった近接主体のみんなをみぞおちパンチで次々行動不能にしていく。えーくんが全身を硬化させて現れた先輩の攻撃を無視してパンチを叩き込もうとするが、それも透過してしまう、がバンツ！と音を立ててえーくんと先輩が弾かれあった。接触時に実体を取り戻すと弾かれる？ いい感じに情報が集まってきた……！

「んだよこれ……！」

「残ったの僕たちだけか……！」

「よし、いけそう。そろそろ反撃しよう3人とも。先輩、覚悟！ デクくん、これ付けて！」

「やれるものならやってみるといいんだよね！」

デクくんにフルガントレットとフルグリーブ、改修前のそれを渡して付けてもらう。無敵化とも思える凄い個性、けどこの仮説が正しければチャンスを作り出すことができる！先輩が個性を使つて床に

潜る……今！

「デクくん！割って！」

「スマアツシュ！」

「なに!？」

「うらあああつ！」

私の指示を疑わなかったデクくんが引き出した40%ほどのワンフォーオールでの踏み付けが先輩が潜った地面を割る。その瞬間、先輩が空中にはじき出されるように出現した。デクくんが地面を割ると同時に走り出していたえーくんのタックルが先輩を捕らえて引き倒す、瞬間にまたすり抜けて、先輩は近くにあった百ちゃん製の拘束用ロープでえーくんをぐるぐる巻きにしてしまう。ダメか！

「確定だね、すり抜けるほうが個性だと思う。さっきのえーくんみたいにすり抜けたままで実体を取り戻したら弾かれるんだ。ワープは地面に弾かれてた」

「そうか、それで地面の形を変えればワープの出現先が変わるんだ！」

「それと、先輩……発動中は呼吸を止めてる。それがおそらく発動条件、それなら……飽和攻撃で呼吸させないようにすれば、スタミナ切れでこっちが勝てる」

超圧縮されたボックスを解放してエスカッションとホルスタービットを出して空中に浮遊させる。そしてデクくんが両手の20%でパンチを連打し空気の砲弾を先輩に向けて連射する。先輩はそれにやりと笑うと、半分だけ体を地面に埋めた。

「必殺……ファントム・メナス！」

「ぐっ!？」

「うあつ!？」

目で捉えても反応できなかった。ランダムワープによる錯乱で狙いを逸らされた私たち、デクくんとはお腹にパンチを受けて崩れ落ちる。こ、このパンチいったら!? えーくんの鉄拳に匹敵するよ!?! 崩れ落ちた私たちを最後に、A組vs通形先輩の戦いは、通形先輩の勝利で終わってしまうのだった。

## 73話

「ギリギリちんちんは見えないようにしたけどごめんね女性陣！とまあこんな感じなんだよね！」

「いや、こんな感じって言われても……」

「訳も分からず全員腹パンされただけっすよ……」

ケロっとしている私とえーくん以外の全員がお腹を押さえた状態で通形先輩に文句を言う。痛いには痛かったけど、脳無のパンチと比べたらなあ……あれで胃が破れてたらしいし。痛覚鈍くて助かりました。それで、通形先輩の宣言通りに全員でかかって負けちゃったわけだけど……いや凄いな通形先輩。少なくとも私たちもそれなりに自信はあつた、けどあつさり上回った。

「でも正直予想外だったんだよね！俺の個性、完璧に解析されちゃったし！必殺技まで使わされた！」

「あの個性強すぎッス！」

「ずるいや！私のことも考えて！」

「あつはつは！俺の個性は樫さんが解析した通り「透過」！ワープはその応用なのさ！」

デクくんから返してもらったフルガントレットとフルグリーヴをパリポリと食べているとそれをみた波動先輩がねえねえ美味しいの!?!と聞いてくる。私はいつも通り美味しくないけど素材回収のために食べてます、と返した。通形先輩の個性は発動するとあらゆるものをすり抜ける。空気も、光も、振動も、地面すらも。取捨選択ができない個性だ。発動条件は呼吸を止めることではなくて、そもそも呼吸できなかつたんだ。

「緑谷君が地面を割った時、俺が飛び出してきたのはワープのため に姿勢を固定して地面に弾かれようとしてたら、地面の形が変わって ワープの出現先が狂ったってわけ！そもそも俺のワープのタイミン グに合わせてそんな対処されたのは初めてだったけど、俺は彼らに戸 惑うことなく対処することができた！なぜだと思う？」

確かに気になる話、デクくんが地面を割ってワープを防がれた時通

形先輩はかなりの驚愕の表情をしていたけど、よどみなく体を動かしまるでそれが作戦のうち、想定内だったとでも言わん動きで私とデクくんを制圧して見せた。超圧縮したエスカッションとホルスタールビットをボックス状に戻してポケットの中に仕舞いながら首をかしげる。皆も答えは見えない様子。

「答えは経験！回りにくくなっちゃったけど、これが君たちと戦った理由でもある！言葉よりも経験で伝えたかった！俺はインターンで培った経験をもとに、樫さんと緑谷君の次の動きを予測して、予想外のことが起きても落ち着いて対処できた！」

通形先輩は続けてインターンでは仮免許を取った人はお客ではなく一人のサイドキックとして扱われる、つまりそれはプロとして扱われるということ、時には人の死にも立ち会う恐ろしいことも起こるという。だけど、それよりも学校じゃ決して手に入らない一線級の経験を得ることができると言った。確かにそうかもしれない、だって実戦だ。私たちが否応なしに戦ったヴィランとの戦いは訓練よりも大きく私たちが成長させた。それを意図的に行えるインターン、経験を積めないわけがない。

「俺はインターンで得た経験を力に変えてトップを掴んだ！なので！怖くてもやるべきだと思うよ！1年生！」

そう私たちに教えてくれる通形先輩、彼の熱いヒーローへの思いが伝わってくる。これは私も俄然やる気になってきたな。というか絶対やる！やらねばならない！ここでやれねば女が廃る！相澤先生に促されて教室に帰る道すがら、私は決意を新たにすのだった。

「樫、ちよつといいか」

「ん？どうしたの轟くん」

「付き合ってほしい」

「ふえっ!？」

ざわっ、と教室内に緊張とざわつきが走る。授業後の教室、寮に帰る準備をしていた私の所にやってきた轟くんがそんなことを言うの

で私は顔から蒸気を吹きだす程に真っ赤になってフリーズしてしま  
う。あの峰田くんですらフリーズするほどだ、轟くんのその言葉の威  
力は押し知るべしだろう。お付き合いですか？お付き合いですか？  
あの轟くんが!?私に!?悪いものでも食べた!?それとも個性!?

「あー……轟、主語入れて言ってみろ」

「? 樫に訓練に付き合ってほしいって言った」

「なんだー……」

「何時もの轟かー」

「希械ちゃんご愁傷様。轟も勘違いさせるようなこと言わないで  
あげてね」

「?? 俺なんかヤバイ事言ったのか?」

もういいよ! 私の心を弄んだだね轟くん! とまあ冗談はそのく  
らいにしておいて、えーくんが轟くん全部言えって言ってくれたお  
かげで教室の変な空気が発散された。いやー、私なんかにお付き合  
い申し込みをする人なんていないし、こんな女を好きになる人もい  
ないからね! 言っただけ悲しくなってきた、ぐすん。でもいいんです、メ  
カだもの。それで、訓練に付き合ってほしいってどうということなん  
だろ。

「今日でいいの?」

「ああ、演習場抑えてある。樫じゃねえとダメなんだ」

「……狙ってやってる?」

「何をだ?」

あー、轟くんのド天然は今日も絶好調だね。私じゃなかったら女  
の子勘違いしちゃうよ? 凄いや、ある意味こんな意味深というか、思  
わせぶりなセリフを無意識に言えるって。ほら、お茶子ちゃんなんか  
真っ赤つかだよ? あと透ちゃんも透明だけど凄いや楽しそうな顔して  
るね?

気になるというえーくとデクくんも一緒にトレーニングにくる  
ことになって、轟くんが抑えてくれた演習場に一緒に行く。炎熱ある  
いは氷結系の個性用に用意された耐熱フィールドだ。轟くんが全力  
を出せる場所だね、それで、何をしてほしいんだろう? とジャージに

着替えた私たち、轟くんが前に出る。

「見ててくれ」

ジャージの上を脱いだ轟くん、半袖の体操服姿で左拳を引く、するとあたりの熱が一気に急上昇しだす。これは轟くんの個性だ、けど、いつもと違う。発動したら噴き出すはずの炎が見当たらない、全部轟くんの体の中、特に左腕に集中している。見覚えがある、これは……！

「赫灼、熱拳……！」

「エンデヴァーのやつか！」

「うっ……！」

最高潮に高まった熱が放出される！というところで、制御を失ってしまったらしい轟くんの左拳から爆発するように圧縮された熱が噴出した。無差別に飛び散る炎と熱が吹き荒れる、それが終わったところには悔しそうな顔をしている轟くんが佇んでいた。

「……成功しねえんだ。クソ親父に頭下げて教えてもらった。力が足りなかったなんて言い訳したくねえ……なのに」

「ああ、だから樫さんなんだ！」

「なるほど、赫灼熱拳習得のお手伝いをしてほしいってこと？やるよ！やるやる！」

「ああ、頼む」

赫灼熱拳、エンデヴァーをナンバー2に押し上げた超必殺技だ。その極意は個性の熱を貯めて貯めて、臨界点ギリギリまで圧縮したのちに……1点で放出すること。私は職場体験で熱の圧縮を教わったけど、轟くんはどうやらエンデヴァーに赫灼熱拳そのものを教えてもらったらしい。ただでさえ強い轟くんに赫灼熱拳が合わさるとか凄いことだよ！私もうかうかしてられないなあ……。

「んでもよ、轟。どうして急にエンデヴァーにそれ教えてもらったんだ？詳しくは知らねーけど、お前多分エンデヴァーの事嫌いなんだろう？」

「……林間合宿、知らねえ間に樫攫われて、結局目の前にいた爆豪も助けられなかった。あんな思い2度とごめんだ、そうならないために

親父に頭下げるくれえ、なんてことねえ」

「……悪い、聞くまでもなかつたな」

あ、ああ〜！気まずい〜！ごめんごめん轟くん！私がままと攫われちゃったせいで嫌いなエンデヴァーに頭下げさせるような真似させちゃって……！こ、これも私のせいならば、お手伝いするのが筋というもの！デクくんが頑張ろう！と轟くんに声をかけて、轟くんもさつきまでの悔し気な顔を収めて穏やかに返している。とりあえず、さつき見せてもらったのを解析すると、圧縮、蓄積まではうまくいつてるんだけど、一点での放出を失敗してる状態、だよね。

「轟くん、それ、右でやれない？」

「右でか？」

「うん、氷結の方が使い慣れてるでしょ？多分赫灼熱拳と同じ要領で行けると思うの。冷気を圧縮して、蓄積、そして放出！エンデヴァーは熱のほうしか教えられないけど、使い慣れてるほうでやったら成功しそうじゃない？」

「やって、みる」

視界を切り替えてサーモグラフィーを中心とした物にして、再度構えに入る轟くんを見つめる。ピキピキ、とさつきとは左右逆の構えになった轟くんの右手に霜が降りて、ぐんぐんと温度が下がっていくのが分かる。さつきの炎熱の場合に比べて圧縮と蓄積がかなりスムーズだ。やっぱりやり慣れてるものが一番ってことだよな。轟くんが右手を突き出して、臨界ギリギリまでため込まれた冷気を発射する。炎熱のように暴発することもなく、拳の一点から発射された冷気はまるでビームの様にまとまって、着弾点に氷の華を咲かせた。

「すっごい！威力全然違うよ！流石にアレ貫ったら私でも動けなくなっちゃうかも！」

「……成功、した」

「おお、さすが才能マンだけ轟！俺も負けてられねえ！」

「やったね！轟くん！」

まさかまさかの一発成功に沸く私たち。エンデヴァーが教え上手ってのを加味しても、一発で成功させるのは流石轟くんと言わざる



を得ない。そして、多分これ私じゃないやつだね？頼ってもらえたのに何もできてない、くやしい。それはともかくとして、赫灼熱拳の氷バージョン、名前は轟くんにお任せするにしても、これでエンデヴアーみたいに冷気を噴出して移動したりとか、冷凍ビームとか撃てるようになってたら轟くん滅茶苦茶強くなるよね。

「ああ、樫……ありがとう」

「んー、私は何にもやってないけどね。でも右が出来たってことは、左もできるってことだ！頑張ろう！轟くん！」

「おお」

レッツ赫灼！と手をあげた私に付き合ってくれるえーくとデクくん、それに見様見真似で便乗する轟くんという構図で、私たちは轟くんの赫灼熱拳習得に向けて、作戦会議を始めるのだった

「絶凍氷拳って名付けたそうですよ、氷結版赫灼」

「はは、轟少年も中々いいネーミングセンスしてるね」

通形先輩にボコボコにやられた翌日の事、私は始業前の時間を利用してオールマイト先生に相談をもちかけ、仮眠室に一緒にお邪魔していた。というのもインターンのお話で、行きたい場所が出来たからそのことについてオールマイト先生に相談に乗ってもらうためだ。昨日のことについて雑談から入っていると暖かいお茶が入った湯飲みを傾けるオールマイト先生は楽しそうに聞いてくれる。この人、とっても聞き上手だね。流石はナンバーワンヒーロー！

「で、本題なんですけど。インターンについて、私行きたい事務所がありません」

「ふむ、その前にだ樫少女、一応だが私の立場はインターン反対派だ。朝のホームルームで説明があるだろうが、1年生のインターンは受け入れ実績が多い事務所に限って認めることになった。けど私としてはもう少し必殺技に磨きをかけてからでもいいんじゃないかと思ってるんだ」

「認めてはもらえるんですね。行きたい事務所って言うのは……」

サー・ナイトアイの事務所なんですけど……」

「ナイトアイ？通形少年がインターンしてる所だね。どうして？」

そう、私が行きたい事務所って言うのはサー・ナイトアイの事務所だ。理由としては一つ、通形先輩がやった経験則からの予測をものにするため。私のデジタルな予測は予想外の事態に弱いので、経験則での予測と両立させて先読みとして機能させたい。あと、教えてもらったんだけど通形先輩の複雑な工程が必要になる透過の個性の制御を教えたサー・ナイトアイなら、私一人でのオールレンジ攻撃の操作について何かしらヒントを貰えるかもしれない。そうすれば、ハ口と一緒に2人分の操作が可能になってより強くなれると思う、という話をオールマイイト先生に言うとな彼は成程、と納得してくれた。

「ちようど私はサー・ナイトアイから体育祭での指名を載いていますし、コネクションはあると思います」

「いいと思うよ。もしかしてそれが私に相談を持ち掛けた理由かい？私の許可なんていらないよ、それは」

「いえ、もう一つあります。サー・ナイトアイにオールマイイト先生の死の予知を詳しく教えてもらおうと思ってるんです。なのでそっちの方の許可が欲しいんです。貴方が抗うと決めたということ、彼に伝えていいか、と」

インターン先についてはいろいろ考えたけど、条件に合致してる事務所は二つ、ウイングヒーロー、ホークスの事務所とサー・ナイトアイの事務所の二つで、ホークスの所で職場体験をしていた常闇くんにお話を聞いたところ、ホークスよりもサイドキックとの活動が多かったという話を聞かせてもらったので、サー・ナイトアイのほうにしようかなと思ったんだ。それで、思いだしたのがサー・ナイトアイの個性で予知されたオールマイイト先生の死期の話。私にとつてはどっちも大事なので、両方を取ることにしました。強欲でごめんなさい。

「……どうして、と聞いてもいいかい？」

「ええ、端的に言えば対策を立てます。サー・ナイトアイからの情報を元に設計段階から貴方が対峙するであろうヴィランにメタを張り

ます。直接お話するのは気まずいと仰ってらしたので、私から聞いた方がいいかと」

「分かった。正直言って彼には会わず顔がないんだ。結局私は、彼の言う通りの道を進んでいる」

「ありがとうございます。でもきつと、話したらサー・ナイトアイの方から連絡があると思います、だから」

「ああ、その時は彼ときちんと向き合おう。気まずい役目を押し付けて済まない、樗少女」

サー・ナイトアイの件について、やはりかなり気に病んでいるらしいオールマイト先生は、私がサー・ナイトアイに事情を説明することを許してくれつつ、深く頭を下げてきた。私はそれを慌てて止める。だって、私がやりたくてやってることだから、この人に謝られる理由なんてない。笑顔でいて欲しい、それだけなんだから。

## 74話

「1年生のインターンですが、昨日協議した結果多くの先生がやめとけという意見でした」

「えー!あんな説明会までして!？」

「ざまア!!!」

朝のホームルームにて、相澤先生がインターンについての説明を始めた。昨日の説明会の趣旨に反して、朝オールマイルト先生が言ったように反対派の人が多いいみたい。全寮制になった経緯からしてもそれは自然な流れだろう、復帰した爆豪くんは自分が参加できないまだ先の話が潰れたと知って、何とも言えない声をあげている。喜んじゃダメな奴だよ？

「が、今の方針じゃ強いヒーローは育たないという意見もあり、1年生のインターンについては受け入れ実績が多い事務所に限り許可をするという結論に至りました」

「クソが!!」

「爆豪くん、どうしたの?情緒不安定だよ?」

「不安定じゃないわかってないほど安定しとるわクソが!」

「わー、いつも通りの爆豪くんだ」

爆豪くんのご機嫌急降下があまりにもすさまじいので後ろから声をかけるといつも通りに反発してくれてなんか安心する。いや反発するかどうかを爆豪くんの健康のバロメーターにしちゃうのもおかしいとは思うんだけどね?さてさて私はさくつとサー・ナイトアイの事務所にアポイントを取っておこうかな。必要書類に関しては朝オールマイルト先生にもらったところだし!

あ、でも授業後の方がいいのか。幸い今日はサポート科のお手伝いもゴミ拾いも何もないとても平和な日なので、急用が入らない限り私はお休み!メリッサさんとお茶会でもしたいなあ。メール送っておこうかな?それともA組女子皆を誘ってもいいかも。百ちゃんのお茶と私のお菓子で!うーん、楽しそう!でも、それよりもインターンだ。頑張るぞ!……ちゃんと話せるかな、私そこに関してだけは今だ

にプルスウルトラしてない気がする。ぐすん。

「すー、はー……よしー!」

授業後、自室にて私はスマートフォンを前に正座していた。一応相澤先生にはサー・ナイトアイの事務所にアポイントを取ることは説明していて、相澤先生も私ならば行ってよしという答えを貰っている。私ならばってどういうことなのかわかんないけど、よろしいということならそれでいいかな。

事務所の電話番号を入力して、あとワンプッシュでかかる、というところで怖気づく私、かれこれ3回目。だって、その……こういうの苦手なの!サー・ナイトアイって厳しい仕事で知られているしちよつとでも失礼なことしたらどうなるか……!うう、こわいよう……!あつ!手が滑った!

『はい、こちらサー・ナイトアイ事務所のセンチピーダーが対応させてもらいます』

「お、お電話失礼します! 雄英高校ヒーロー科1年A組の樫希械と申します! この度はインターンをお願いをしたくご連絡をさせてもらいました!」

『樫希械、ああ! ナイトアイが一票入れてましたね。分かりました、ナイトアイに変わりますので少し待っててくださいね』

電話が保留に切り替わって、30秒ほど立つ。な、何とか今のところは失礼のないように出来てる……よね? そして保留状態の電話が通話状態に切り替わる、正座したまま背筋が限界までピンツッて伸びてしまった。あつ、胸元のボタン飛んだ……。後で付け直さないと。それよりも今はインターン!

『もしもし、樫希械だな? 私はサー・ナイトアイ。この事務所の社長をしている。インターンを申し込みたいという話だったか』

「はい! 昨日通形先輩とお手合わせさせていただきました! そこでお話を少し聞かせて頂いて、開発した必殺技の強化及び実戦の経験を積ませていただきたいと思っております」

『ミリオカから聞いている。一杯食わされて個性の詳細まで見抜かれ

たとな。分かった、時間を取ろう。週末、ヒーロー科の休日、午前7時に私の事務所にくるように。面接をする』

「ありがとうございます！」

『では、待っている。ヒーロースーツは持参してくること』

ブツツと電話が切れる。こっこっ……怖かった……!!相澤先生とはまた違う厳しさを覚える声だった!でも、面接をしてくれるって!まだ受かってないけど、電話口でにべもせず断られてたら私の心はぼつきりとダメージを受けてたけどそういうことが無くてよかった……!

「やった……!」

思わずもろ手を挙げて万歳して喜ぶ、その瞬間、さっき外れたボタンのみならず、制服のシャツのボタンが上から3つパンパンパン、と弾けて外れてしまった。しまった、完全に手加減を忘れていた。ぐずん、最近ブラジャーが若干きついな、と思っていたんだけどやっぱり太った?いやでも腰回りの計測は大丈夫だし……あ、お尻と胸が大きくなったのか。うん、結局太ってるね。なんでえ?

しくしく、と気分が完全に落ち込んでしまった私はシャツを脱いで、上だけ下着姿のまま机の引き出しからえーくんのお母さんに頂いた誕生日プレゼントの裁縫セットを取り出して、地面に飛んでいったボタン4つを全部集める。そしてそのまま針に糸を通してボタン留めをしていると部屋のチャイムが鳴った。

「希械。わりいけど今日の授業でわかんねえとこあったんだ。教えてくんねえか?」

「えーくん?いいよ」

「おう、お邪魔するぜ……はっ!」

遠隔操作でドアのかぎを開けると、英語の教科書とノートを持ったえーくんが部屋の中に入ってくる。そしてシャツをもつてボタンを留めている私を見て、完全に固まった後すさまじい勢いで振り向いてドタンバタンとドアを閉めてしまった。どうしたんだろう?とぬいぬいと二つ目のボタンを留めながら首をかしげる。

「お、お、ま……開けていいつつたよな!」

「言ったよ?」

「よくねーーっよっ!!!」

「なんで?」

「なんでってお前……」

「えーくんに見られるなんて今さらじゃない。何回一緒にお風呂入ったと思ってるの」

「小学校1年生までだろうがそれはー!」

でも結局私の全部を見られたことには変わりないし、そもそもえーくんに見られることくらいなんてことないし、何だったらえーくんは毎日1度は私に上半身裸の状態を見せてきたのだ、トレーニングで。自分も人のこと言えないじゃないか。それにヒーロースーツほぼ半裸じゃえーくん。私のヒーロースーツも露出多いし、大事な部分見えてないし別に良くない?流石に通形先輩みたいに全裸は憚られるけどちゃんと服着てるし。下着だけだ。

「はい、服着たよえーくん」

「……おまえさー、男を部屋にいられてる自覚あるの?」

「えーくんが私を襲うなら話は別だけど。襲うの?私のこと」

「んな男らしくねえことはしねえけどさ、もうちよい意識しろよ、これが峰田だったら嫌だろ?いや普通俺でも嫌なもんだろ」

「まあ嫌だけど、峰田くんにはんつ覗かれる回数も数えるのやめちゃったし」

「……あいつマジで一回話し合わねえとダメだな……」

懲りないよねー峰田くんも。覗かれるたびに踏んずけてはいるんだけど、踏みつぶされるへばんつらしくて何回でも油断したところに覗きに来るの。スパッツ履いたら逆に興奮しだして怖くなったからやめちゃった。よくよく考えれば峰田くんがいまだにヒーロー科に所属出来てるのが謎だな?性欲の権化なのに。私がそこまで怒らなから調子に乗ってるのかな?一回本気で怒ってみようかな?私が怒ったら怖いよ。

「それで、分からないの英語でいいの?どこ?」

「ん、ああここなんだけどよ……」

「ああ、そこ。過去形にすれば平気だよ」

「かし、そういうことか。お前はいいよなあ、英語喋れてよ」

「海外のレポートとか論文読むのに必要だったからね。これも強くなるためだよ」

えーくんが聞きたいことに3つ目のボタンを留めながら答える。口に糸を啜えて噛みきり、玉結びして4つ目のボタンに取り掛かった。いやね、本当に科学関係は英語できないとダメなんだよ。というか読むだけならドイツ語とかもいるからね。日本語に訳されるのなんて何か月も先なんだから待つてられないし、自分で和訳しているうちに読めるようになったし。おかげでシールド博士とかメリツサさんも英語でやり取りできる、便利。ついでにオールマイト先生も英語ペラペラなんだよね、尊敬するなあ。

「強くなるといやあ、お前インターン行くのか？俺は行くぜ」

「うん、私も行くよ。さっきまでサー・ナイトアイの事務所にアポイント取ってたところなんだ」

「へえ。俺は当然ファットガムだな！帰って来たときにや一回り大きな男になって帰ってくるぜ！男子三日合わざれば刮目してみよ！ってやつだな！」

やつぱりえーくんはファットガムの所に行くんだね。職場体験で相当気に入ってたみたいだし、ファットガムは防御系ヒーローの中でもクラストに次いで人気突出してるヒーローだ。ファットガム印のたこ焼きソースは私も愛用している。ファットガム事務所の雰囲気さえーくんは相当気に入ったみたいだ。というか私にも次の機会あつたら行こうぜって言ってくれてたし。

でも一回り強くなったえーくんかあ。必殺技も作ったえーくん、私の素手じゃもう戦闘形態でも硬くて負けそうになっちゃってるし。対人威力のビームは弾くし。ほんとに硬くなるだけなの？そのうち私と腕相撲して勝つても不思議じゃないんだけど。頼もしくていいか。えーくんが楽しければ私も楽しい、何の問題もないね！

私さえーくんの分も夜ご飯を作つて、久しぶりに二人だけでご飯を食べた。えーくんは沢山食べてくれるので作り甲斐があるなあ。で



も夜ご飯を食べたら男女の部屋の行き来の時間は過ぎてしまったので、えーくんは私に今一度気を付けるように釘を刺して帰っていった。大丈夫、見せるのはえーくんだけだよ。何回みられてるか分からないからね！全部！今更だよ！

「んんんんい朝！今日は残念だけど作り置きのご飯だね」

時刻は午前4時30分、アポイントを取ってから初めての休日、つまり今日が面接当日だ！いつもよりだいたい早く起きた私は、昨日作りおいてた残り物と食パンで朝ごはんを済ますと寝間着のラフな格好のまま大浴場まで下りていく。女子の大浴場は男子のお風呂と同じ広さだけど、私たち自身が少人数なのでだいぶ余裕がある。当然ながらこんな時間にお風呂入る人はいない、つまりは貸し切り！わーい。

「ふんふんふん」

ざばーつと頭からお湯を被って丁寧に丁寧に頭を洗い、体を洗っていく。もこもこと泡の塊になった私、お風呂は命の洗濯というけどよく言ったものだね。シャワーで全身の泡を隅々まで流し、髪の毛を纏めてタオルで包んだ私は湯船にざばつと入る。少しお行儀悪いけど、誰もいないからね。

たつぷり30分ほどかけて体の隅々まで洗った私は、ほこほこ湯気を立てながら服を着替えて脱衣所を後にする。そして、昨日洗っておいた制服のシャツにアイロンがけをして、着替えてネクタイをピシッと決めて、ヒーロースーツの入ったアタッシュケースを持ち、背中に書類やら必要なものが入ったりリュックサックを背負って、まだ誰も起きていない寮を後にする。

面接で目を隠しておくのは非礼だと思うので、今回は前髪をピンで分けて両目を出した状態。今から面接に出発することを相澤先生にメールで伝えるとすぐに電話がかかってきた。気を付けて行ってくるように、何かあったらどんな小さなことでも必ず報告し、事件に巻き込まれた場合は近隣のヒーローがいらない場合に限って仮免許の権利用行使を許可すると言われた。切り際に「お前に関しては不採用はな

いだろう。安心して受けに行つてこい」という激励を貰つてから、私はハイツアライアンスを後にした。

サー・ナイトアイの事務所は雄英から電車で1時間、まだまだ早い時間なのにもかかわらず電車でお仕事に向かう人たちに交じつて私も電車に乗る。遅れもなく定刻通りに発車した快速特急に乗つて私は一時間の旅に出た。雄英前で降りる人が多かつたからか、座席が空いていたので座らせてもらう。

途中で乗つてきた妊婦さんに席を譲つたり、痴漢をした人を持ち上げて駅員さんに引き渡してたりしたら少し時間をオーバーしちゃつた。30分余裕をもって出てきてよかつた。そういえばなんでサー・ナイトアイはこんなに早い時間に面接の時間を指定したんだろう？実技試験もあつたりするのか？通形先輩に聞けばよかつたかな。

数多の試練を乗り越えて、やってきましたサー・ナイトアイ事務所。スタイリッシュなビル一棟が事務所なんてやっぱり人気のヒーローはお金あるんだね。事務所の玄関の電気はついてない……今10分前だけどうしたらいいのかな？ええい、女は度胸だつてどつかで言つた気がする！覚悟を決めてインターホンをポチつと！

「来たのか、10分前行動。いいことじゃないか」

「ぴえっ!?!」

「元気がないな」

「し、失礼しました！雄英高校ヒーロー科1年A組！樫希械です！本日はよろしくお願ひします！」

完全に油断していた私が背後からかけられた声にびくつと飛びあがる。慌てて真後ろを振り向くと、そこには七三分けにかつちりとしたグレーのビジネススーツを模したヒーロースーツに身を包んだヒーロー、サー・ナイトアイが銀色のアタッシュケースを片手に眼光鋭く私を見つめていたのだった。

## 75話

「では面接を始める」

「よろしく願います！」

大きめの事務机に腰掛けたサー・ナイトアイが私が提出した書類を一通り確認して頷きつつ、私に視線を戻した。かつちりと整髪料で固められ、メツシユの入った七三分け、眼鏡の下の眼光は鋭く、私の一挙手一投足を見逃さんとしてるように見えてしまう。

出勤途中だったらしいサー・ナイトアイとばったり事務所前で遭遇してしまった私はやばいやらかした！と滅茶苦茶焦りまくっていたのだが、むしろ早めに来たことは好印象だったらしく、事なきを得ることができた。案内されたサー・ナイトアイの事務室はいたるところにオールマイト先生のグッズやフィギュアが飾られ、完璧に掃除が行き届いてるように見える。というか埃一つかぶってない、すごい。

「まずなぜ私の事務所にインターンを申し込んだ？ 貴様ならもつと上の事務所からの指名もあっただろう」

「授業で身に着けた必殺技の強化をするためです。その必殺技には予測、観測、計算……単純に分けても1度に15行程ほどの作業を同時に脳内処理する必要があります。通形先輩の複雑な工程が絡み合う個性の制御を指導したサー・ナイトアイの下でなら私の必殺技の強化につながると思います」

「成程、では次だ。お前はわが社に何をもたらせる？ この事務所は既にサイドキック2名、インターン生1名で滞りなく回っている。貴様を入れて私の事務所にメリットはあるのか？」

サー・ナイトアイの鋭い質問、彼の厳しい目から絶対に自分の目を逸らさないようにする。逸らせば落ちると思え。インターンはお客さんじゃない、プロとして仕事としてのヒーロー活動をすることになる。その場合、私はこの事務所に何をもたらせるのか。私のもたらせるものはただ一つ、科学技術だ。

「そうですね、まず監視の目を増やすことができます。私は現在30程度の監視カメラであれば同時に脳内で処理して監視し続けるこ

とができます。現地でのサポートアイテムの修理、製造も可能です。こちらはすでにプロの免許を取得しています。デジタル的な処理もお任せください。それと……」

「戦闘能力が入っていないようだが？」

「仮免許を取れる程度の戦闘力があるのはインターンの前提だと思っけています。確かに一番得意ですが、それ一辺倒ではないことを示せ、ということかと思いました」

「……イレイザーヘッドはいい教育をしているとみえる」

インターン生を受け入れての一番のうまみは単純に戦力が増えることだ。なのでそれは大前提として、そのうえで何をこの事務所にもたらせるのかという話だと思っけて、私が出来ることを列挙していく。私とハロの情報処理能力ならオールレンジ攻撃の応用でドローンを飛ばして町全体を監視することができるし、情報を纏めたりとかそういうことも得意だ。それを伝えるとサー・ナイトアイは首肯してくれた。どうやら正解を導き出すことができたらしい。

「では最後だ。私を笑わせてみる」

「……サー・ナイトアイを、笑わせる？」

「そうだ。私の事務所の方針として「元気とユーモアのない社会に未来はない」というものがある。ヒーローとして、私はユーモアを何より大事にしている。オールマイトが、パワーとユーモアで世界に示したように」

元気とユーモアのない社会に未来はない……オールマイト先生のサイドキックとして何年も共に活動した彼らしい信念だと思っけて。確かにウィットに富んだジョークや、余裕のあるユーモアをオールマイト先生は大事にしている。安心感をもたらし、人を笑顔にすることができるから。なら、サー・ナイトアイもそれを大事にしてるのは当然の話。

だけど、私にそれはちよつと難しいかな……いやメカジョークを言うという手段がないではないけど、彼のこの厳しい鉄面皮を見る限り、生半可なことで笑っけてくれるとは思えない。どうやら時間を少しかけるみたいだから、私はその間に脳内の回転速度を脳無と戦った時

並みに高速回転させる。笑顔……笑顔？サー・ナイトアイの笑顔……だめだ。私にはジョークやユーモアで彼を笑顔にすることはできない。それならば、私は、私らしくやろう。

ふう、と息を吐いてから掌を上に向けて、個性を使う。今回使うのは強化プラスチック、3Dプリンターの技術を応用して成形されたものに塗装を済ませ、机の上にとりと置く。それを見たサー・ナイトアイは目を見開いて両手でその物を手に取った。

「これは……！」

「私にはユーモアのセンスはありません。ですけど、人を笑顔にするのはユーモアだけではないことを知っています。私にできるのは作ることに、私が作ったもので人を笑顔にすることが出来ればと……そう思います」

私が作ったのはオールマイト先生のフィギュア、それも市販のものではなく……期末試験の時に私と戦った時のオールマイト先生を完全に再現したものだ。顔の皺、筋肉の張り、ヒーロースーツの損傷具合、煤の尽き方、今にも動きそうなスマッシュのポーズで自立するそれをサー・ナイトアイは食い入るように見つめている。身長体重も再現した。これを何倍にも大きくすればそのままオールマイト先生になる。

私のその答えを聞いたサー・ナイトアイは静かに、それでいて丁寧に机の上にオールマイト先生のフィギュアを置くと、机の中から会社印を取り出して、インターンの書類にダン！と勢い良く押し返して私に返してくれた。その顔には薄く笑みが浮かんでいる。

「満点だ、樫希械。貴様をわが社のインターン生として採用する。詳しくは後程説明しよう」

「ありがとうございます!!」

「ところで、これはいつのオールマイトだ？私が持っているコレクションには既知の事件でこうなったオールマイトはないのだが」

「あ、それは雄英の期末テストで私と戦った時のオールマイト先生です。一番かっこいい所を切りぬかせてもらいました！最近のフィギュアだと顔の皺まで再現しているらしいので、クオリティに妥協は

「しませんでした」

「ああ、素晴らしい出来だ。特にこの今にも拳を放ちそうな躍動感あふれるポーピング、まさにオールマイトそのもの。これは私からもらっても構わないか?」

「え、貰ってくださるのであれば是非!持ち帰っても友達にあげるくらいしかできないので……」

「では、遠慮なく」

おお、かなり気に入ってもらえたみたいだねオールマイト先生のフィギュア!机の中から取り出した薄手の白手袋をつけて大切そうにフィギュアが並んでいる強化ガラスのケースを開けて、卓上から一番画角的に映える場所に配置して満足気に頷いた。この執務室を見て気づいたけど、やっぱりサー・ナイトアイはオールマイト先生が大好きなんだろう。聞いた通りの重度のオールマイトファンっぷりだ。デクくんにも匹敵するだろう。ガラスケースに鍵をかけたサー・ナイトアイはそのまま執務机に座って、私に楽をする様に配慮してくれた。

「コーヒーでも入れよう。砂糖とミルクはいるか?」

「ブラックで大丈夫です。すいません、有難く頂きます」

「構わない。ここからは雑談なのだが……緑谷出久について君はどう思っている?クラスメイトだそうだが」

「デクくんですか?どうして急に……」

雑談、ということと厳しめの口調を少し崩してくれたサー・ナイトアイに聞かれたのはデクくんの事、どうして急にデクくんの事を……と考えたけどすぐに理由にたどり着く、ワンフォーオールのことだ。アポイントを取った日の朝、オールマイト先生と話した時にワンフォーオールの後継者についても揉めていることを教えてもらっていたんだ。サー・ナイトアイはデクくんが継ぐことに反対していて、通形先輩を後継者として育てているということも知った。

「実は君がアポイントを取る前にミリオから連絡が来た。緑谷出久という少年をインターン生として紹介したいと。君の面接をこんなに早い時間にとったのは彼の情報を聞きたいからでもある。何せ、体

育祭では自損して自滅していたからな」

「ああ、ワンフォーオールをどこまで使えるか、ということですね」

「……貴様、なぜそれを知っている」

私が素のままに出した言葉に一気に警戒を強めたサー・ナイトアイ、手の中にとつても重そうな印鑑がコンニチハしてて、緩んでいた視線がとんでもなくつぶれそうなほどの圧を込めたものに変わる。ひいー、もう何ステップか踏めばよかった。

「端的に言えば、私は協力者です。デクくんがワンフォーオールを使いこなす制御するためにサポートしています。当然オールマイト先生も御存知です」

「……私にはそれが正誤いずれであるかを確認するすべはない。だが、神野での貴様の行動を信じて話を進めるとしよう。緑谷出久はワンフォーオールをどれほど使える?」

「何もない状態であれば12%つてところですね。ただ、私ともう一人が開発したサポートアイテムを使えば最大36発まで100%での攻撃をすることができます。それに私個人としてはデクくんをとても好ましく思っています。私は彼がどれだけ努力をしているかを知っています。何もない状態からたった1年で、個性の制御を見出しつつありますから」

私の所感に、サー・ナイトアイは難しい顔で考え込む。正直、デクくんはかなり頑張つてると思うし、結果も伴っているはずだ。だって全く鍛えてない状態から1年で収まりきらねば体が破裂するほどのエネルギーの結晶を受け取り体に収めるレベルまで体を鍛え上げて、雄英に入学した後も一足飛びにワンフォーオールを使いこなす始めている。スタートダッシュが遅かった分追いつけてないかもしれないけど、進むスピードは段違いなんだ。

「……ミリオからも聞いている、私が好みそうな戦い方をする上に貴様ともう一人との組み合わせが厄介極まりなく、必殺技まで使わされてしまったとな。使えない人材ではないことは分かる」

「だけど、平和の象徴を継ぐべき人間かどうかは別、ですか」

「そうだ。オールマイトの意思には反してしまうが、やはりミリオ

が継ぐべきだと私は思う」

確かに、通形先輩がワンフォーオールを継げば、攻撃をすかしつつワープで移動し回り超パワーですべてを粉碎するスーパーヒーローが完成することだろう。だけどそれは机上の空論だ、まだ。透過という非常に難しい個性を使いつつ、失敗すれば自損しかねないワンフォーオールを同時に使うことが果たしてできるのか。透過する以上フルガントレットにも頼れない。

「……話はここまでだ。サイドキックが出勤してくる。君はヒーロースーツに着替えてきなさい。さつそく今日からインターンを行う」

「今日からですか？」

「もともと君の採用は決まっていた。人となりを知るために面接をしたが、少々気が小さい以外は十分だった。あとは働きぶりを見せてもらおう」

「分かりましたー」

君のロッカーのカギだ、と渡されたカードキーを有難く頂いていると、執務室のドアがノックされる。サー・ナイトアイが入室を許可すると中に入ってきたのは青い肌をした女性ヒーロー、サイドキックのバブルガールだ。彼女は分厚い書類の束を持っていて、私がいることに気づくと笑顔で挨拶してくれる。私もそれに丁寧にお辞儀をして返礼をした。

「サー・ホシについての報告ですが……」

私は採用するというのを聞いていたのか、バブルガールはそのままつらつらと報告書の中身を報告していく。すると内容が1分を超えたあたりでサー・ナイトアイは

「バブルガール、いつも言っている通り元気とユーモアのない社会に未来はないと私は思っている」

「え!? あっ! ちよ、報告書長くて……やだ、やめてください——」

さつきも私に言った方針を改めて口にしたサー・ナイトアイが持ってきたのは部屋の片隅に鎮座していたTICKLE HELLOと書かれた機械、確かこれアナハイムが遊びで開発した罰ゲーム用くすぐ



りマシンだったはず。無駄に高性能かつ多機能なので警察で尋問用に導入しようかという話も出てたほどだ。結局犯人虐待になるから導入は見送られたらしいんだけど。

「サー！お伝えした1年生！連れてきましたよね！」

「いつたいどんな!？」

「あ、デクくんに通形先輩」

「樫さん!?何が何だか!？」

「サイドキックのバブルガール、ユーモアが足りなかったみたいだね……!」

くすぐりマシンに囚われたバブルガールのプルスウルトラな笑い声が響く中、勢いよくドアを開けて入ってきた通形先輩と彼に連れられたデクくん。私は彼らにひらひらと手を振る。デクくんは私がいる状態に驚いて尚且つバブルガールの惨状にも驚く二重の驚愕顔を見せてくれる。なんか安心するなデクくんのその顔。日常って感じがする。

くすぐりマシンが仕事を終えても捕らえられたままのバブルガールは息も絶え絶え、というか半分昇天してる感じで沈黙している。大きな声が出るじゃないか、と言ったサー・ナイトアイは今度はギロリと音が出そうなほどの眼圧を込めてデクくんを見据えた。デクくんはそれに若干気圧されつつも、手で顔を隠していきなり

「緑谷出久です！よろしくお願いします！」

見事なほどのオールマイト先生の顔真似をして自己紹介をした。きつと通形先輩からユーモアの話聞いていたのかな。それでこの一発ネタを仕込んできたんだ。凄いな、そっくりだデクくん。若干皺の形が違ったりするけどそんな細かいことを気にする人は早々いな

「オールマイトを馬鹿にしているのか？」

ここに居たんだ……!」

## 76話

あっちゃー、と私は頭を抱えそうになる。ユーモアを大事にしているという話を通形先輩から聞いたのであろうデクくんはサー・ナイトアイを笑わせようとしてオールマイルト先生の顔真似という選択をした。はつきり言えば滅茶苦茶よく出来ているんだけど相手が悪すぎた。だってファイギュアの顔の皴にまで言及するほどのオールマイルトファンだ。ちよつと違うレベルで怒るに決まっている。

「貴様、その顔何のつもりだ。私を元オールマイルトのサイドキックと知ってやっているのか」

TICKLE HELLOの電源を切ったけど放置されるバブルガールに背を向けてつかつかとデクくんのほうに歩いてくるサー・ナイトアイ。私はもう逆鱗に触れた重症ファンの激怒というだけで恐ろしすぎて瞳の奥で私にヘルプコールを送っているデクくんを助ける余裕がない。ひ、ひく。ファイギュアのクオリティに妥協してたら私がああなつてたかもしれないんだ。うう……怖いよお。

「オールマイルトにこんなシワはない!」

「ちよつ……待つ……!?!」

グイ、とデクくんの顔を掴んで私も気付いていた顔の皴を指摘したサー・ナイトアイ。だけどデクくんもさるもの、彼がチョイスした顔は、ビネガースーサイド事件という川でおぼれた中学生の個性によって川がお酢に代えられてしまい、そこに飛び込んで救助したオールマイルト先生の顔を再現したものだというのだ。今チラツと検索したけど本当にある!多分デクくんの中でその顔がオールマイルト先生の顔の中で一番ユーモアがあつたってことだよな?凄いなあ、私も練習しようかな、顔真似。

「……オールマイルトのグッズだらけ……!あのファイギュアなんて見たことも聞いたこともないぞ……!?!」

「あ、それさっき私が作ったの。袖の下ってやつ?」

「え!?樫さんそれちよつと詳しく!」

「今は面接でしょ?」

「そうだった!」

どうやらサー・ナイトアイもデクくんが重度のオールナイトファンだということをご理解したらしく、意気投合……とまではいかないだろうけど私には少し理解が難しいオールナイト先生の話を繰り広げました。デクくんもそれでタガが緩んだのか何時もの高速トクを始めている。私は立ち尽くすしかない、通形先輩は笑い過ぎで顔がすごいことになってるバブルガールを救助している。

「全く不愉快だが、ミリオの紹介だ。面接を始めよう。ミリオはバブルガールを事務室に移動させて楪を更衣室に案内してヒーロースーツに着替えてくるように」

「あ、はい」

「元気がないな」

「イエッサ!!楪さん、案内するんだよね!」

笑い過ぎで動けないらしいバブルガールを背負った通形先輩は私に声をかけてくれる。私もヒーロースーツに着替えるようにとの指示を貰っているの、サー・ナイトアイに一回お辞儀をしてから荷物を纏めて退出することにした。デクくん、面接頑張ってるね。私は応援することしかできないけど、オールナイト先生が認めた弟子は貴方だよ。きつと大丈夫。

「成程、良く似合ってるんだよね!」

「ありがとうございます。通形先輩も、カッコいいです」

「だろ!」

割とくすぐり地獄はいつもの光景だったのか、事務室で事務仕事をしていたムカデが個性のセンチピーダーというサイドキックにバブルガールを託して更衣室に案内されて、私はそこで着替えを済ました。一応相澤先生に合格したとこととこれからヒーロー活動をすることをメールで連絡すると、了解の返事が返ってくる。

先に着替え終えてまっていた通形先輩に謝って合流すると、彼はニカッと笑ってグッドサインをしながら私のヒーロースーツを褒めてくれる。通形先輩の胸元に100万の数字が書かれたヒーロースー

ツも、オーソドックスながらマントが映えるいいデザインだったの  
で、私は同じようにグッドサインで褒めてみる。

「きつとそろそろ面接も終わってるんだよね！」

「デクくん、合格できるといいんですけど……」

「大丈夫さ！サーは厳しいけど、嫌いだからとかそんな下らない理由で落としたりはしないよ！俺相手にあそこまでやれるんだったら平気平気！」

私の背中をバン、と叩いて励ましてくれる通形先輩。突入するとき  
は元氣よく派手に行くよ！と言われて二人でこのポーピングだ！と  
言われてしまい、やらざるを得なくなった。中がどうなってるのか、  
デクくんの結果がどうなのか、不安で仕方がないけど……きつと受  
かっていると信じて！

「失礼しまあす！緑谷君どうでした!？」

バンツと勢いよくドアを開けた通形先輩と室内に侵入、鏡合わせの  
ポーズをとってド派手に登場した私たちを迎えたのは……スツール  
に座って足を組むサー・ナイトアイと意外そうな顔で私を見るデクく  
んだった。うん、分かってるよ。私こんなことするキャラじゃないも  
のね。でもね違うのデクくん。これは通形先輩がやるって言ったか  
らこの事務所の流儀だと思って……。

「採用だ、ミリオ」

「わあ！良かったじゃないか緑谷君！」

「とりあえず今日は一旦帰ってよく話し合ってくるように。貴様の  
インターンは明日からだ、遅刻厳禁。では、解散だ」

「よろしく願います！」

デクくんからハンコを受け取ったサー・ナイトアイはデクくんにつ  
らつらと明日の集合時間等を口頭で説明してからそのまま退室を促  
す。私は先に何かやるらしいのでここでインターン開始です。少々  
焦った顔をしているデクくんを見送ってからサー・ナイトアイの指示  
を待つ。少ししてからサイドキックの二人が入室してきてサー・ナイ  
トアイはそれに一つ頷いた。

「ではこれよりパトロールを行う。ルミリオンはエクスマキナと組

んで周辺地域のパトロール、私とセンチピーダーはホシへの張り込み。バブルガールはルミリオンたちとは逆方向にパトロールだ」

「「はい！」」

「いい返事だ。ではルミリオンたちは正午に一度事務所に戻るよ」

「了解したんだよね！」

「よろしくお願いしますー！」

私たちはサー・ナイトアイの号令で事務所を出発する。既に一人でのヒーロー活動を容認されているなんて通形先輩、やっぱりすごい人だ。尊敬しちゃうなあ。そういえばホシって確か警察の隠語で容疑者とか犯人って意味だよな？張り込みをしているってことは長期捜査だろうし……やっぱりプロは色々してるんだね。

「エクスマキナは、どういうヒーローになりたいの？」

「私ですか？」

パトロールの最中に、通形先輩にそう聞かれる。緑谷君にも聞いたんだ、彼凄くとんでもない目標立ててるね！と仰る通形先輩。パトロールは平和そのもので、ヴィランのヴィの字も見当たらない。そういえばこれが普通だったなあ、と濃すぎる前期のあれこれを遠い目をしながら思います。いやホント、入学してすぐヴィランが襲撃してくるわ、職場体験で凶悪犯に出くわすわ、旅行先でテロリストに会うわ、林間合宿で攫われるわ碌なことがなかったね！

「私は、そんな大それた目標は立ててないですけど……誰かの幸せを守ったりとか、誰かの盾になれるようなヒーローになりたいです」

「いい目標だね。俺もそうさ！ありったけ沢山、手の届く限り100万人だって救って見せる！それがルミリオンの名前の由来さー！」

胸を張って胸の100万の数字を示す通形先輩、なるほど……そんな意味がヒーローネームに込められているんだ……。レミオロメンみたいでカッコいいだろ、というけどそうじゃなくてもかっこいいと思う。確かにこの人、ユーモアがあるというよりは笑顔を絶やさない人で、その笑顔が周りに伝播していくっていう感じの人だ。ふふ、と

私の顔も綻んでいく。

「きゃーっ！っ！」

「エクスマキナ！」

「はいっ！」

ほっこりとした雰囲気が一変して鋭いものに変わる。白昼堂々の悲鳴、私たちは急いで現場に走っていく、するとそこには札束でパンパンになった鞆を背負って、子供の首に鋭くとがった針のような指を突き付ける男がいた。人質事件、おそらく銀行強盗の帰りだ。警察の姿はまだないが、背後の銀行は入り口のドアのガラスが割れている。中の人に怪我はないか……!?

「どけ！このガキの首から噴水が出ることになるぞ！」

「そこまでだ！子供を放して投降しろ！」

「ツチ、ヒーローかよ……！これが見えねえのか、ああ!？」

まずい、犯人は興奮状態だ。この場合、加害へのハードルがかなり低くなる。刺激したらあの子供が無事じゃすまない……！幸いまだ人質にされた子は状況についていけないのか、きよとん、としている。投降を先輩が呼びかけてみるけど、子供を突き出したヴィランは先輩に人質を突き付けてそこから動かないように命令してくる。

やばいっ！状況を理解した人質の女の子の顔が歪み、じわ……と瞳が涙で飽和し始めた。数瞬もしないうちに泣いてしまうだろう。そうなれば余計に犯人を刺激してしまうことになる。私は一歩前に出て、通形先輩を私の体を遮蔽物にして隠す。

「子供を放してください。すぐに他のヒーローも現着します。逃げられますよ」

「うるせえっ！こうなりやヤケ……ごあつ!？」

「POWERRR！」

私の呼びかけに語気を強めて言い返してくるヴィラン、人質の子が恐怖に耐え切れず泣き出してしまう、と周りもハラハラとしている。犯人がヤケだ、と言った瞬間地面から現れた通形先輩のアップパーカッツが顎に直撃して、たたらを踏む。先輩は同時に人質の子を奪い取ってこちらに下がってくる。

私は犯人に向かってテイザーディスクを発射し、犯人をスタンさせて無力化する。そして腰から圧縮ボックスを一つ取り出すと犯人に向かって投げる。ボックスはヴィランに当たった瞬間にメイデンと呼ばれる移動式牢に変形してヴィランを中に取り込んで完全に拘束した。この間約3秒、一瞬の捕縛劇に周囲の人たちはポカンとしている。通形先輩の片腕に抱かれた女の子も。

「確保完了です」

「ナイス！エクスマキナ！ヴィランから見えないようにしてくれたおかげでスムーズに確保できたんだよね！」

私が一回前に出たのは体の大きな私に注意を向けて通形先輩が自由に動けるようにするため。ヴィランから見えないように私の体で先輩を隠した。先輩はその意図を察知してくれて隠された瞬間透過で地面に落ち、ワープで救出、そして人質がいなくなればこっちのものなので私が逃げ出せないように拘束する。ここまです無言でやり取り出来たのは通形先輩の経験のたまものだろう。

「トモちゃんっ！」

「お母さーん！うえええんっ！」

状況を理解した観衆たちが沸く中、周りの人に飛び出さないよう止められていたらしい女の子のお母さんが飛び出してくる。通形先輩はお母さんを見つけて本格的に泣きだしてしまった女の子をお母さんに渡す。警察のパトカーが鳴らすサイレンが近づいてきていた。どうやら先に通報をしてくれた人がいるみたいだ。自立して移動するメイデンを引き連れて、私は先輩の所まで歩いていくのだった。

「ルミリオン、エクスマキナ。よくやった。本日の銀行強盗の件、スピーディーかつ完璧な立ち回りだった」

「エクスマキナのおかげで被害は最小限に抑えられたんだよね！」

「いえそんな……私は何もしていませんし、確保したのは先輩です」

「俺一人だったらアレかなり梃子摺ったんだよね！人質を抱えながら殴り合いなんてもつてのほかだし！透過したら攻撃が素通りするから周辺の人たちに被害が行くかもしれない！その点俺が人質を救出した後一瞬で拘束してくれたおかげで安全かつ素早く終わった！」

サー!?!即戦力じゃないかな!?!」

「そうだな、危機的状況化でも冷静で頭が回る、うちの事務所向きだ」

銀行強盗の件はすぐにサー・ナイトアイの耳に入ったのか、すぐに一旦事務所に戻る様に連絡を受けた。そして警察にメイデンとそのカギごと犯人を引き渡し、通形先輩と一緒に戻ってきた私を待っていたのは褒め殺しだった。違うんです、私は特に何もしてないんです、と言っても通形先輩に褒められる始末。と、とりあえず……インターン初日は、成功つてことで、いいのかな?

「希械ちゃん、ちよつといいかしら?」

「梅雨ちゃん?どうしたの?こんな時間に」

あの後事件も起こることなく、正午で返された私はそのまま寮にトンボ返りした。帰ってくる頃には銀行強盗の件はネットニュースになっていて、クラスのみんなにも心配されるわ褒められるわ大変だった。怪我一つしてないのにみんな心配性なんだから、爆豪くんすら確認に来たからね。信用ないなあ、私。

まあそれはともかく、私はクラスのみんなに先んじてヒーローデビューを飾ることが出来ました!というか何時のまに私と通形先輩の写真をとってた人がいるんだろう?私に気づかれないってことは相当だよな。その道のプロの人かなあ。それ以降は何事もなく夜になって、もうすぐ完全消灯時間。そんな夜遅くに私の部屋を訪ねてきたのが梅雨ちゃんだった。

「ケロケロ……少し恥ずかしいのだけれど、お泊りさせてもらえないかしら?私いつも弟妹と一緒に寝てたから……一人で寝るのに慣れてないの」

「え?私は別に大丈夫だけど……それだったら同じ階の百ちゃんとか……わざわざ下まで降りてこないでも」

「……希械ちゃんが、いいのよ」

くりつとした瞳で口元に指を当てながらそういう梅雨ちゃんに、私



は首をかしげながらも部屋に招き入れる。そういえばいつでも遊びに来ていいよって言ったし、私がいいって言ったわけだから構わないんだけど……ベッド一つしかないよ？大きさが部屋の半分はあるから私ともう二人くらいは入れるだろうけど。

結局私は梅雨ちゃんの目的が何なのか分からずに、一緒に寝ることにした。ただ、彼女が一緒に布団に入った時、ずっと、寝てる間すらも私の手に自分の手を重ねてたことが、不思議だった。

## 77話

「ではブリーフィングを始める」

「はい！」

「はいっ！」

翌日の事、ただ単に誰かに甘えたかったらしい梅雨ちゃんとお互いに抱き合った状態で目を覚ました私は、梅雨ちゃんより一足先に起きて朝ごはんを作ってから梅雨ちゃんを起こして、一緒に朝食を取り別れた。そのままデクくんと一緒にサー・ナイトアイ事務所に出勤した。梅雨ちゃんが実は甘え下手だったっていうのは初収穫だったかな。すりすり寝ながら私にすり寄る梅雨ちゃんはとつてもかわいかった。あと寝ぼけた状態の梅雨ちゃんも。

電車で通形先輩と合流してからサー・ナイトアイ事務所にやってきて、ヒーロースーツに着替える。センチピーダーは既にパトロールに出てるらしく不在、ナイトアイの執務室にて集合した私たちに号令がかけてられて、私たちは背筋を伸ばして大きく返事をする。ナイトアイの後ろにあるくすぐりマシンにかけられるのは嫌だ。いや私ならかけられた時点で拘束ごとマシンを壊すことはできるけど、そういうのは違うだろう。

「では本日のパトロール兼監視だが、まず私とバブルガール、楳で監視を。ミリオと緑谷は周辺のパトロールだ」

「監視、ですか？」

「ナイトアイの事務所は今秘密の調査中なんだよ」

「死穢八齋會という小さな指定ヴィラン団体を調べている」

バブルガールが言うには、死穢八齋會の若頭「治崎」と呼ばれてる男が妙な動きを見せ始めているらしいとのこと。指定ヴィラン団体、昔々だと指定暴力団って呼ばれてたみたい。個性が出る前の呼び方ね。平たく言うならヤクザ屋さんってことか。でも過去に大解体をされているから軒並みそういう団体は今潰れるか潰れないかギリギリで続いているくらいの弱体化を食らっているはず。それが今、変な動きをしていると。

「最近はそのヴィラン連合と接触をはかったわ。顛末はまだ分からないけど、現場を見るに穏やかではなさそうね」

「ただ奴が何かを企んでいるという証拠をまだつかめていない。それが無い限り死穢八齋會は黒に近いグレー、強制捜査などできない。我がナイトアイ事務所が狙うのはやつらの犯行証拠<sup>ポ</sup>。くれぐれも向こうに気取られぬように」

「イエツサーー」

「ビシッ!と敬礼をすると通形先輩をよそに、私とデクくんの表情はすぐれない。ヴィラン連合ときたか……!神野でのどさくさに紛れて姿を消したやつらの尻尾がつかめるかもしれない。その一助になれるなら、こんなにやる気がみなぎることはない。だって私は結局、あの人たちにはやられっぱなしなんだ。いつか絶対に100倍返しにしてやるって思ってたけど、可能なら捕まえたいな。」

しとしとと小雨が降る中、私はバブルガールとナイトアイについて、死穢八齋會の本部近くまでやってきていた。なぜ身長が大きくて目立つ私をこつち側に連れてきたのかは分からないけど、役に立てるなら頑張ろう。とりあえず、ポンチョ型の光屈折迷彩を作って、被る。それを不思議そうに見ていたバブルガールが蛍光灯が付くような音を立てて周囲に消えていく私を見て驚いている。

「気づかれたらいけないようなので、必要でしたらどうぞ。周囲の光景に溶け込むことができます。最大稼働時間は5時間です」

「凄いい、これ一つで潜入任務の難易度変わっちゃうわ……!」

「……これだけでも採って正解だったかもしれん」

顔のフードを脱いだ私が差し出した光屈折迷彩を受け取ったバブルガールとナイトアイはそれを被る、起動はオートなのでそのまま二人が透明となっていく。私にははっきりくっきり見えてしまっているんだけどね、光学的に透明になってるだけだから。いやホント、私にも知覚できないステルスシステムも開発しないとなあ。

そんなこんなでやってきたのは死穢八齋會の本部、一応ビルの路地裏から本部を見てみると……うわ、純和風建築のとっても大きなお

家。ヤクザ屋さんってドラマとかフィクションの中ではお金持ちって印象だけど本当に現実でもお金持ちなのか。いい家住んでるなあ……ん……?あれ……?」

「どうした、エクスマキナ」

「いえ、その地面に違和感が……これは地下道……?本部から無作為に伸びてる……?」

じーっと本部を見てたら何かがおかしいと思って、視界を切り替えて家の中まで透視する。高精密なレーダーの画像を脳内処理していく。間違いない、本部の真下から地下道が伸びてる……!これ無許可じゃない?ヤクザに国が地盤沈下の可能性があるあんな粗雑な地下道の建設を認めるわけがない。というかどこまで伸びてるの?私たちの下にもあるね?」

「確定しました。本部から地下道が伸びています。それに既に何人かが地下にいます。流石に顔の判別まではできませんが……」

「……一週間いつもより人出が少ないと思っていたら、活動を地下に移してたのか……エクスマキナ、どこまで探れる?」

「マップを作成するまでは行けそうですけど……3時間は欲しいです。結構広いですし、何層にも分かれてまして……」

私は地面にしゃがみこんで地面に手を付ける。この下にも地下道が伸びているのでそこを起点として反響音で探るためだ。手から可聴域外の音を発して地下まで届かせ、地面越しに戻ってきた音を利用して物体の形を把握する。エコーロケーションによる反響視界はいつも透ちやん相手にやつてるんだけど、地面越しは初めてだからうまくいくかどうか……。

そうしているとバブルガールの電話がミュートで鳴り出した。それに出たバブルガールが話を進めていくうちに血相が変わる。私は一旦マップ作りを中断して立ち上がる、バブルガールは電話を繋いだまま

「ナイトアイ……!!ルミリオン、治崎と接触したらいいです……!」

「なんだと?いったん合流する。ルミリオンに指示を出せ。エクスマキナ、今はここままでとする」

「わかり、ました」

デクくんたちが治崎と接触した……!? ってことは本部にはいなかったんだ。しかも別の場所をパトロールしていた二人と接触するだなんて、そんなことがあるのかと思ってしまう。連絡が来たということは二人は無事なんだろうけど……ナイトアイに気づかれないうに、ハロに接続したドローンを飛ばす。狙撃用に調整された高性能カメラを駆使して路地裏を探すと……いた。写真通りペストマスクをしているんだ、それと……小さな女の子……? あ、地下道の入り口がそこにあるのか、これ以上は追えないか……。

「すみません!まさかあんな転校生と角でぶつかるとは遭遇するとは思わなくて……!」

「いや、これは私の失態。事前にお前たちを見ていれば防げた話だ。無事で何よりだ」

指定した街角でデクくんと通形先輩と合流する。かなり焦った表情をしている二人を見てギリギリの攻防があったのだと察することができる。まさか追っている組織のボスが目の前にいきなり現れるなんて思えもしないよね……。

「そんな恐ろしい感じには……」

「……先日の話だ。治崎ら死穢八齋會が一つの事件に巻き込まれた。強盗団が人を巻き込みながらトラックで暴走していた事件だ」

「レザボアドッグズですか?」

「そうだ。死傷者はゼロ。強盗団の連中も含めてだ。なぜか、事故で負傷したであろう以外の部分、持病のリウマチに虫歯……一切綺麗に直ってたそうだ。おそらく治崎の個性」

知っている、ネットニュースで事故った強盗団は無事だったのにお金だけ全部消えてしまった話。警察は現金は燃えたものとして事件性はなしと判断してるみたいだけど、サー・ナイトアイ事務所では怪しいと判断して本格的にマークを始めたんだ。これがプロの眼力……!

「怪我の功名というのは少し違うんですけど……さつき確認できま

した！治崎には娘がいます！」

「エリちゃんって呼ばれてました。とてもおびえてて……助けを求めた。手足も包帯がグルグル巻きで……！」

「もしかして、この子？」

「そう！樫さんどうしてこれを……!?!」

「さっき通形先輩から連絡を貰った時、ドローンを飛ばして上空500m地点から観測して見つけたの。すぐに地下道に潜っちゃったから追えてないんだけど……」

通形先輩とデクくんから治崎には娘がいる、という話が出た。私は隠しておく意味はないと感じてすぐさま立体投影で上空からドローンで撮影した治崎とその娘、エリちゃんの画像を呼び出した。ナイトアイとバブルガールはその画像を食い入るように見つめた後、ため息をついた。

「どうにか……保護してあげられていたら……」

「傲慢な考えをするんじゃない。事を急いで仕損じる。焦って追えばますます逃げられる、救いたい時に救われるほど貴様は特別でもない」

「そんな……」

「それができるのは……オールマイトのような圧倒的なものだけだ。そうではない我々ができるのは分析を重ね、準備をし、万全な状態で挑むこと。志だけで救けられるほど、今の世の中は甘くない」

ぐっ、とデクくんが息をのむ。きつと保護できなかったから、救われず、そのまま見逃してしまった後悔が今彼を苛んでいる。デクくんにとってが一番つらいことのはずだ。だってそれは、目の前で攫われた爆豪くんと重なるだろうから。また……神野みたいに無理やり助けに行ったりとかしないといけないのだけれど。もしそうなってしまうようなら私が止めよう。きつと、相澤先生もそういうだろうから。

「真に賢しいヴィランは闇に潜む。時間をかけねばならなければならないこともあると心得ろ」

「とりあえず、今日は二人とも事務所に戻って。サー、エクスマキナはどうしますか？」

「……エクスマキナは引き続き私たちと監視だ。気づかれないように地下道の様子を探ってほしい。それと上空からの空撮はいい判断だった。だが、次からは報告をする様に」

「はい、申し訳ありません」

「……すみません、やっぱり道路の上からだ精度が著しく落ちます。地下道なのか下水道なのかは判別できないです」

「いや、十分だ。後でHNでこの近辺の下水道の通り方と照合して地下道がどれかを絞る。よくやってくれた」

「はい……あと、これ、この近辺で地下道の入り口かもしれない場所を、さつき治崎が入っていた入り口と照らし合わせてマップピングしました。ただ……こつちもやっぱり絞り切れていないです」

事務所の執務室内にて、私はサー・ナイトアイと一緒に本日あったことを整理して書類に起こしていた。あのあと死穢八齋會の本部近くまで戻った私とサー・ナイトアイ、バブルガールは監視を続けたけども、結局そのあと死穢八齋會に動きはなかった。反響定位でのマップピングも空洞が下水か地下道かを判別することは潜ってみない限り難しいので、作成したマップはまるで幾重にも張り巡らされた蜘蛛の巣みtainな感じになってしまっている。

ただ、下水道がある高さの下にある物がそうなんじゃないか思っている。そこは深すぎて何かがあるとしたか分からなかったけど。うーん、直接ミニロボットが何かを侵入させることが出来れば完璧なマップを作ることができただけ、死穢八齋會はまだ指定ヴィラン団体なだけでヴィラン確定じゃない、つまり捜査権限がないのでそこまでは踏み込めなかった。

あとは半径1キロ圏内の地下に繋がっている構造物をリストアップしてマップに表示してみたけどどこまで役に立ってるか……真に賢しいヴィランは闇に潜む、オールマイト先生が言った通りだった。エリちゃん……あの白い髪の小さな女の子、目が……まるですべてを諦めているかのように伏せられていた目が、私を捉えて離さない。

なんで助けてくれなかったの、どうして私を放っておくの……そう言われているようにしか思えない。分かっている、勝手な妄想だつて。だけど、裸足で、あんな病院着より薄い襪履切れみたいな服で……必死に逃げ出したに違いないんだ。あの小さな体から勇気を振り絞つて。絶対助ける、そのためならなんだつて調べてやる。

「本日はこれで終了とする。ミリオと緑谷と合流して帰宅するように。君のおかげで捜査はかなり進展した、気を落とすな」  
「分かりました。ありがとうございます」

データの整理が完了したので、業務終了がナイトアイから告げられる。報告書は既にデータで作っていたのでナイトアイに転送済み、私は私が見てもいい資料と本日分かったことの整理をお手伝いしていたわけだ。こういうことならお任せあれ、つて面接でアピールしたからね。ああ、もやもやする。こんな気持ちを捜査中のヒーローは抱えているのかな、救けられたのに、見逃さざるを得なかったなんて。

沈んだ顔をしているデクくんと通形先輩と合流して電車に乗る、きつと二人も同じ気持ちなんだ。だけど、これも一緒だよ。絶対に次こそは救け出す、気持ちを重ねて前に進んでいこう。



## 78話

むしゃくしやする、とは少し違うか。イガイガする？チクチクする？何とも表現しがたい感情が私の中に渦巻いている。端的に言い表すならば、しこりが残った。週明けの今日、授業に集中できない私は筆記を取りつつも、頭の中ではインターンのアレソレだけが残り続けている。

あの後個人的に画像の解析を進めていたんだけど、女の子……エリちゃんの腕や足の包帯の下は恐らく虐待痕ではなく、もっと別な洗練された医療器具による傷の可能性が高い事に気づいた。痣がない、腫れもない……注射やメスなどの傷を隠すために巻いてるのかもしれない。治療痕かと思っただけど、それにしても元気に動いている。皮膚病？手足だけに……？謎が深まるばかりだ。

こういう時に頼れるのはえーくんだけど、彼は喜ばしいことにファットガムにインターンを受け入れてもらえて今絶賛大阪にいる。机に突っ伏す私を撫でる三奈ちゃんをありがたく思いつつも、私はこう思うんだ。このままではいけないと。

授業は精彩を欠いた。というか私よりもひどい人がいた、デクくんである。授業では当てられた問題を答えられず、USJではおぼれ、対人訓練では身体能力は一般人の透ちゃんにやりこめられる始末。相澤先生に捕縛布で釣り上げられて、両立できないなら辞めさせるとまで言われてしまった。私も爆豪くんに爆破されて黒焦げになっただし、ううむ。よくない！

「こういう時は、お料理に限る！」

もやもや気分を吹っ飛ばせ！と冷蔵庫をのぞいてみる私であるが、週明けにも関わらずすっからかんだった。そういえばインターンで買い物に出かけられてないんだ……ぐすん、何もないとわかると急に切なくなってお腹がすくよね。不思議だなあ人体。私は半分機械だけだ。

ナイトアイからは暫く忙しくなるのでインターンは少し先になる

というお話を貰っている、急に呼ばれたりする可能性もあるが……プロが仮免の人間を引つ張り出すということはよほどの緊急事態のハズ、つまり既にニユースとかで流れる可能性が高い。今のところそういうのはないのでお出かけしても大丈夫だろう、そうつまり……お買い物に行こう。

雄英近くのスーパー、というか繁華街。カラオケもゲームセンターもコンビニもなんでもある所まで私は制服姿のまま歩いていくことにした。そういえばお休みじゃない日にお買い物行くなんて初めてだ。いつもは基本纏めて買って冷凍して都度解凍してお料理してたから。ちらほらと周りには雄英の制服を着た人たちがいる。多分普通科とか経営科の人たちかな。ヒーロー科やサポート科は忙しいからあまり遊び歩いたりはしないし。

私の目的はいつものスーパー！ではなく、商店街。最近気づいたんだけどこの近くの商店街大型スーパーがあるにもかかわらず結構賑わってるの！しかも、お野菜にお肉、お魚に至るまで珍しいものからメジャーなものまで取り揃えがすごい。ココナッツが売つてたりとかしてみるだけでも楽しいんだよね。ただ欠点とすれば、ちよつと遠いの。いつものスーパーより30分くらい歩かないといけない。

でも、ちよつと体を動かすだけでも気分転換には十分だ。この無力感を飲み込む方法は思いつかないけど、パフォーマンスが低下するのはいただけない。ならちゃんと気持ちを切り替えて次につながるのが大事。この歩いている時間が、私の頭の中を整理する時間をくれる、ならそれも楽しい事なんじゃないかな。

「……あれ？心操くんだ」

軽く鼻歌なんか歌っちゃったりして、気分良く歩いていると見知った後ろ姿を見つけた。紫色で柔らかそうな無造作ヘア、普通科の星の心操くん。行先は……同じ方面だと商店街かな？声をかけようかと思ったけど、彼はどうやら普通科のお友達と一緒に遊びに行く様子。私たちヒーロー科は普通科の人にいい印象は持たれてないみたいなので、声をかけるのはやめよう。心操くん一応ヒーロー科に編入するつもりだっていうのクラスには内緒にしてるみたいだし、私と関

わりがあるのがばれたら心操くんのクラスでの立場が悪くなるかも。道路を挟んだ反対側にいる心操くんの顔は、何時ものニヒルな顔でありつつも楽しそうに微笑んでいて、これが普段の心操くんなんだなあ、と私は勝手に納得した。そりゃ特訓で毎回のようにポッコボコにしてくる相手に対して穏やかな表情なんて出来るはずもあるまい。お見舞いに来てくれたのは彼生来の優しさだろうし。やっぱり彼はヒーロー向きだねえ。

知り合いが楽しそうだとんだか私も楽しくなってくる。何とも単純だけど、今回は心操くんに感謝しなくちゃ。よし！今日は美味しいもの沢山作って一人満漢全席やってやるもんね！どうせお腹が空いてる人が部屋になだれ込んでくる可能性があるから多めに買い物しよう！ふふふ、楽しくなってきたぞ〜！

「きゃあああ〜〜〜っ!？」

ウキウキ気分で何を買おうか考えだした私の耳を悲鳴が貫いた。悲鳴の先には、大型のトレーラー。それがなぜか信号機やガードレールをなぎ倒してこちらに向かって時速80キロほどで突っ込んできている。運転手の顔の焦り方からして、居眠り運転じゃない。どういうこと？違う、ブレーキ踏んでるけど効いてないんだ！トレーラーの下から油が漏れ、さらには高圧の空気が抜ける音が聞こえる。整備不良？

このままじゃまずい、周りのヒーローは、いない！このままじゃトレーラーは時速を保ったまま私の後ろにあるマンションに突っ込むことだろう。その前に、心操くんたちを轢いてから。心操くんは私の次にトレーラーに気づいたらしく一気に顔を引き締めて頭を回転させ始めたみたい。そして遅れて普通科の人たちも気づく、このままじゃ死ぬかもしれないということに。

仮免取つといてよかった、と思いつつスラスタを全開にして心操くんたちの前に躍り出る。幸い轢かれそうになった人は路地裏に逃げ込んだりして逃げてくれた。そこだけは良かった、そう思いつつ私は全身でトレーラーに真正面からぶつかった。ガッシャアアアアーン！とすさまじい音がしてトレーラーのフロントと私が衝突し、フロン

トガラスが割れる。

「櫛っ!？」

「くっ……!うう……ん!」

ギヤリギヤリズガガガ!と私の足がアスファルトを割って後ろに押し込まれる。けど、幸いアクセルのシステムは無事だったのかこれ以上加速がかかることはないらしい、トレーラーの勢いは徐々に徐々に収まって行って心操くんたちの少し手前で停止する。あー、5mも押し込まれちゃった。焦って戦闘形態に変形することも忘れてたよ。へたり、と心操くんのお友達らしい女の子が、腰を抜かしてその場にへたり込んだ。

「ふへー、止まった。運転手さーん、大丈夫ですかー?」

ぷらぷらと手を振ってからトレーラーのフロントから離れて運転手席側のドアをドアごと外して中の運転手さんを確認する。私と衝突した瞬間にエアバッグが作動したらしく、顔を叩きつけられたりしたとかはないようだけど、衝撃が激しすぎてどこかを痛めたみたいでうめき声をあげている。私は両目を使って損傷部位を確認しつつとりあえずスマートキーらしいトレーラーのシステムにハッキングをかけてエンジンを切った。やっぱ運転席若干変形してるや。力入れすぎた。

「あ、声出さないくださいね。はい、肋骨が3本折れちゃってますから。とりあえず病院まで行きましょう。ちよつと失礼しますね」

運転手さんは肋骨を折ってしまったみたいだ。運転席から運転手さんを引つ張り出して、反重力ストレッチャーを作ってそこに寝かせると通報通報つと、携帯を取り出して通報しようとしたら、胸ポケットに入れてたせいで盛大に折れ曲がってた。私の携帯電話……三奈ちゃんとお揃いだっただのに……。

「ゆ、櫛!お前、無事なのか!？」

「あ、心操くん。ごめん携帯壊れちゃったみたいで、悪いんだけど通報してくれないかな?あと学校にも、連絡は救急車が先で」

「あ、ああ……」

「いや、必要ない。よくやった櫛、遅れて悪かったな」

「あ、ブラドキング先生」

「あとは俺が引き継ぐ」

ファンファンとサイレンを鳴らしてパトカーと救急車が駆け込んできた。おお、ブラドキング先生が呼んでくれたみたいだ。ブラドキング先生もかなり急いで来てくれたみたいで、若干息が切れている。そりゃここから学校までは徒歩で40分前後かかるわけだし、通報を受けてからじゃ間に合わないよね。私の背中を優しく叩いてくれたブラドキング先生が警察の対応に入った。救急隊の人に肋骨が折れることを伝えてから私は地面に座り込む。

「もー、びっくりした！心操くんは無事？お友達も怪我してない？」

「いや、俺は無事だし……あいつらも驚いただけだよ。それよりもお前、大丈夫なのか？」

「あ、ごめんね驚かせたつぼくて。大丈夫だよ、トレーラーくらいなら。比較対象がオールマイト先生だけど」

「それ大概のやつが大丈夫だっていうことになるからやめろよ。つてお前！血が！」

「あ、ぶつかった時切れちゃったのか」

たったり、と私の顔を血が伝って地面に落ちる。どうやらトレーラーを受け止めた時に部品が何かで額を斬ってしまったらしい。うへえ、無傷で終われたと思ったのに。少しため息をついていると心操くんは私の前髪をぐいっと上げると片手で持ってたハンカチを切れてしまった私の額に当てた。うわ、申し訳ない、そのハンカチ使えなくなっちゃう！ああ、もう。自分のうっかりが呪わしい。あ、それよりも

「ありがとう。友達のところ戻らなくて大丈夫？私と一緒にいるところ見られたら、あんまりよくないんじゃない？」

「お礼を言うのは俺の方。何で樫と一緒にいるとよくないの？」

「いやほら、私たちヒーロー科って普通科の人から良く思われてないんでしょ？心操くんが私と仲良くしてるってわかったら立場悪くなるんじゃない？」

「あのさ、流石にさつきみたいに助けられた後で悪く言うやつら

だったら俺の方から願ひ下げだから。それに、あいつらはそんなじゃない」

「そっか。安心しました！心操くんがちゃんとやれてるみたいで」  
「……アンタ俺の母親か何か？」

失礼な、そんな年取つてません。心操くんがいい人なのは知つていたんだけど、心操くんがヒーロー科のフォローを人知れず入れてくれているおかげで直接的な害がヒーロー科に来てないことも私は知つていた。だから、普通科の癖にヒーロー科の肩を持つのか、みたいな感じで邪険に扱われてたらどうしようかなつてちよつと心配だったの。そういう人の感情つて理屈じゃないから。正論よりも感情で動くのが人間だから、いくら優秀な雄英生つて言つてもそこら辺はまだ難しいんじゃないかと思つてた。

だけど、抜けてしまった腰を何とか立て直してこちらに歩いてきた心操くんの友達が、助けてくれてありがとうと言つてくれて……嬉しくなつた。心操くんの俺の言つた通りだろ、という顔には少しむつとしたけど彼の人を見る目は確かだつたつてことだからね。はい、私の負けです。そろそろ血止まつたかな。

「あの、私絆創膏もつてるの。良かったら使つて」

「ありがとう。次は無傷で止めるからね！そのくらいしないと立派なヒーローにはなれないし！」

「いやもう一回はごめんかな……」

「そりやそうだ！」

ぺたり、と心操くんのお友達から貰つた絆創膏をおでこに貼つて、私も立ち上がる。見下ろされる形になつた彼女らはさつきまでは気づかなかつた身長差におつきい、と声を漏らした。おつきいでしょ。ちよつと前まではコンプレックスだつたけどヒーロー科に入つてからは大きいといい事ばかりだから誇りになつたんだよね。何せ庇う面積が広いからね！

「あ、商店街やつてるかな。晩御飯の材料買いに来たのに」

「……その状態で買い物行くわけ？」

「でもー、目的を果たせないまま帰るのはなんか負けた気がする！

トレーラーごときに負けるのは悔しい！メカとして！」

「心操、知り合いか？ヒーロー科で、体育祭優勝したやつだよな？」

「……たまに運動するとき付き合ってもらってる」

「ああ、ヒーロー科編入のための特訓に付き合ってもらってるんだ、やるじゃん心操。大物釣りあげてる」

確かに私の制服は今かなり破れたりとかでアバンギャルドな感じになってしまっているけど、トレーラーに敗北宣言するのはなんかヤダ。ほぼ無傷なのに！本体は軽傷なのに！くやしい！脳無とかのパンチの方がよっぽど強かったぞ！オールマイト先生のスマッシュの方が威力があつたのに！油断してたか？気を引き締めねば。

それはそうとどうやら心操くんがヒーロー科に行くために頑張ってるという話はどうやら普通科にとっては公然の秘密だったらしい。そして、それを応援しているのもみんな一緒なんだ。今度は私にやにやする番だね、心操くん？かあっと赤くなって隠してたはずなのに、とつぶやく心操くんに分かんねえと思ってたのか、とあきれ顔のお友達。いいお友達じゃん、私とえーくんみたいだね。

樫、状況説明たのむ。とブラドキング先生に言われたので私はまたね、と心操くんたちに手を振って警察の所に行く。心操くんたちには別の警察官が事情を説明するようだ。私はお財布の中から仮免許を取り出して警察に見せつつ、事情聴取を受けるのだった。

## 79話

「えーくん大活躍おめでと〜〜!」

「お、おう!ありがとな希械!」

ファンファーレと一緒に盛大に投影花火を教室中に打ち上げた私、全身で万歳してえーくんにおめでと〜コールをしているのには理由がある、なんとえーくんこの度新聞に載ったのです!ネットメディアだけじゃなくて、大阪のメインの新聞とも言つていい凄いやつ!なんで?と思うでしょ!?!えーくんね、ファットガム事務所で大大活躍して、それが取り上げられたの!

大阪のチーマー崩れ?ヤクザ崩れの人がヴィランになって、発砲事件とかを含む暴動ともいえる行動を起こしたのが始まり、天喰先輩とファットガムが大部分を捕まえたんだけど、一人だけ逃げ出してえーくんが追走、行き止まりまで追い詰めたんだけどそのヴィランは個性のブースト薬を自分に投与して、個性を暴走させた。全身から刃物が飛び出るようになったヴィランをえーくんが抑えたってワケ!

その時にお披露目されたのがえーくんの必殺技、烈怒頼雄斗安無嶺過武瑠!えーくんの現時点での最高硬度を維持したまま行動する技で、この状態のえーくんはたとえ私が戦闘形態で全力で殴りつけようともノックバックすらしないし、スラストハンマーを全力でぶち当ててもスラストハンマーが壊れるほどの防御力を持つている。それでいて、行動速度は従来のまま!現時点だと1回3分くらいしか持たないけど、十分だと思う!まさに硬化の男でゴリ押しって感じ!

安無嶺過武瑠で向かってくる刃物を全て砕き、ワンパンの元でヴィランを沈めたえーくんの姿はネット上でも話題で、雄英の大型新人として一気に話題となった。画角は良くなかったけど、超超々かつこよかったので私の脳内メモリに焼き付けました。やっぱりえーくんは私の一番のヒーロー!

あとあと、お茶子ちゃんと梅雨ちゃんもインターンに行つててそつちでも大活躍してみたみたい。どうも最近裏ルートで個性のブースト薬が流行つてらしくて、それを使ったヴィラン組織同士の抗争、大型



化する個性で戦ってた二人を捕まえるのに大貢献したとか！凄いなあ、二人とも。私も負けるわけにはいかないね。

「でもなんで私は怒られたの？」

「ありや誰でも怒るだろ」

えー、そんなー。私がトレーラーを受け止めた件はすぐに発表されてクラスみんなが知る所になった。というか誰が撮影したのか知らないけど私がスラスターで跳躍してトレーラーを受け止めるところまでの一連の流れが撮影されてバッチリネットに上がった。コメント欄はゴリラで埋め尽くされた。ちよつと泣きたくなつたけど、面白がってくれるならそれでいいか。つてなつて警察の事情聴取を終えて寮に帰ると、待ち構えていたのはいい笑顔でこつちを見る三奈ちゃん他女子勢と荷車にスタンバイしているI—Aマツスルズだった。

言論を封殺されて荷車に放り込まれた私はレシプロバーストで保健室まで運ばれておでこの切り傷以外は健康と診断されてから寮に爆速ターボでトンボ返りしてお説教を貰った。なんでえ？私何も間違つた行動してないと思うんだけど？ちよつとこればかりは異を唱えたいぞ。唱えたら怖いので言わないけど。あ、結局お目当てだつたご飯の買い物とついでにブラジャーのサイズを測ろうと思つたのにどつちも駄目でした、泣きたい。

ああ、つまりあれか。素でパワープレイしたのがダメだつたんだね？例えばゴリアテを着てやれば許してくれたかもしれないけど、ゴリアテ着てやつたら間違いなく運転席がぺつちやんこだつたので結果的に怒られた方法が最適解だと思えます。私は腕組みしてうーんと頭をかしげる。納得いきません、わたしわるくない！えーくんはそんな私を頬杖を突きながら見ているのだった。

それから数日後、やつとナイトアイ事務所から連絡が着てインターンの日が決まった。というか今日だ。でも、ヒーロースーツ要らないんだつて、不思議。それはともかくデクくんと一緒に寮を出ると、それに合わせてえーくんとお茶子ちゃんに梅雨ちゃんも一緒に寮を出

るらしいことが分かった。

「あれ？えーくんも今日なの？」

「おう、キグーだな！なんか先輩と現地集合らしくてよオ。場所ちげえんだわ」

「暫く呼ばれなくなつてやつと今日だよ。僕らも集合場所違うんだよね」

「へー、そうなんや。私たちもなんよ。」

電車を使う、というところまで一致していたので私たちは5人そろつて駅まで一緒に行くことにした。途中でパトロール中のヒーローに送つてもらつたりして、電車に乗ろうとすると関西のはずのえーくんやリユーキュウ事務所のお茶子ちゃん達まで同じ電車を使うというのだ。そして降りる駅も一緒。なんだなんだ……？何が起こつてるのか分かんないや。

そして、駅を降りてからも同じ方向、曲がる角すら一緒。そしてたどり着いた建物の前では雄英ビッグ3もお揃い、そういえば私とナイトアイが執務室で地下道について整理してた時の事、ナイトアイが現在他事務所とのチームアップに向けて動いていて、この情報をその時の会議に使う資料として使いたいみたいなこと言つてた。もしかして、そのための会議がこれ？

「あ、相澤先生」

「グラントリノ!?!」

「なんだ緑谷、知り合いのヒーローか？」

「あ、うん。職場体験でお世話になつて……」

建物の中にはずらつと並ぶヒーローたち、その中にはチャートで見覚えのあるヒーローや地域密着型のマイナーヒーローまで様々。デクくんがブツブツとそれぞれヒーローの名を呟いている。その中には相澤先生とデクくんの職場体験先で小柄な黄色基調のヒーロースーツを着たお爺ちゃんヒーロー、グラントリノの姿もある。まさに歴戦の古強者つて感じ、生涯現役なのかな？

「ナイトアイさん、そろそろ始めましょう」

「では、これよりあなた方から提供してくれた情報を元に、死穢八斎

會という小さな組織が何を企んでいるのか協議を行わせてもらいます」

ナイトアイの合図で、みんなが机の前に腰掛ける。私たちも通形先輩に従ってナイトアイ事務所に用意された席に腰掛けることになった。そこで説明されたのは今までの経緯、ナイトアイ事務所が2週間前から張っている死穢八齋會のことだ。きっかけは強盗団レザボアドッグスの事件を皮切りに、ここ1年以内に裏組織との取引が急増、そして先日ヴィラン連合の覆面のヴィラントウイスと接触したことが分かったと。それで、グラントリノにお声がかかったらしい、あ！思い出した！名前だけ知ってたけど確かグラントリノってオールマイト先生のお師匠さんなんだっけ！なるほどそれで……。

「二ついいか、雄英生とはいえどうしてここにガキがいる。話が進まねえ、本題に行く前に日が暮れちまうぞ」

「ぬかせロックロック！この二人は超重要参考人やぞー！」

「あとエクスマキナもだ。彼女がいなければ情報はもっと不足していただろう」

「え!?俺!?!」

「私もですか!?!」

浅黒い肌のヒーロー、ロックロックが私たちがいることに苦言を呈すると、ガタツと立ち上がったのが丸くて親しみやすいデザインをしているファットガム、そして私を指さしたナイトアイだ。とりあえずファットガムが言うところによると死穢八齋會は違法薬物の取引に手を出していて昔はそれを専門にしていたファットガムに連絡がいったらしい。

「それで、この前環に打ち込まれた薬……個性を壊す薬や。今まで見たこともない種類、今は個性は元に戻つとるが、一時的にとはいえ致命傷やな」

「それで俺にも声がかかった。俺の「抹消」とは違うが、その薬は個性の大本である個性因子を直接攻撃しているらしい」

「そんで持ってた連中は撃ったつきりでな、中身の解析もできんかった！だけどな！切島君が弾いてくれた無傷の一発が手に入った

んや！それでそれを調べた結果……中に入ってたのは人の血と細胞やった、気色悪いことにな」

ざわつとヒーローたちがざわつく、人の細胞由来の力ってことはそれは個性の力の可能性が高い。当然ながらI・アイランドなどの一部を除いて個性由来の人体実験は禁止されているし、忌避もされていく。ここ1年公的に行われたことはない。そして私はたどり着いてしまった。心当たりがあつたんだ、だって……！あの子の、あの手足の包帯は……！

「エリちゃんの身体を、銃弾にしてるってこと、ですか……!?!」

「……その可能性は高い。治崎の娘、出生届はなかった。そして先日遭遇した時には手足に夥しいほどの包帯を巻いていた。治崎の個性は対象を一度壊し再構成する個性。何度壊しても治せるだろう」

「そんなー！」

「なんてことしてやがる……!?!」

体から力が抜ける。何が強引にハッピーエンドにする機械仕掛けのヒーローだ。私は見つけてた、見つけてたんだ。最悪その場からの狙撃だって出来た、一撃で頭を吹き飛ばしてやることだってできた。たとえそれが犯罪だったとしても。けど、やらなかった。見捨てたんだ、あとから捕まえやすくするためなんていう大義名分で。絶望の檻の中にいる小さな女の子の檻の鍵を自ら閉めたんだ。

今度こそエリちゃんを保護する。という通形先輩とテクくんにも深く頷く。熱気が籠る会議室に冷静に水を差したのはロックロツクだ、見られた以上何かしらの対策をするのではないかと。それに対してナイトアイは日本全土にある死穢八齋會に関連のあるグループの組織を可能な限り洗い出して、それを調査することを提案した。

「そして、本部ですがこちらはエクスマキナによる科学的探知で地下に迷宮のような複雑な地下道が無許可で建設されていることが発覚しました。エクスマキナによるマップがこちらです、同様に他の場所についても同じように地下道がある可能性があります。それも留意してもらいたい」

「あの、一つよろしいですか。貴方の個性の「予知」性能は分かりか

ねますが、それで未来を見れないのですか？」

「……それは、できない」

「なぜ？」

相澤先生の質問にナイトアイが個性の性能を答えていく。インターバルは24時間、対象の未来を1時間の間見ることができると。それで十分だろうと言った相澤先生にナイトアイが返した言葉は、その人物が予知で死んでしまった場合その予知を覆したことがない事を説明し、未来が確定するのが予知で見た段階だとする可能性が一番高く、ダメ押し以外で未来を見て死を予知した場合、避けられないからこそ、ここぞという時のダメ押しとして使うべきだと主張した。

ナイトアイは、オールマイイト先生の予知を見てしまったから、こうしてそれが重くのしかかっているんだ。だって現状オールマイイト先生は予知通りに動いているから、オールマイイト先生ですらダメならもう、避けられないと思っっているのかもしれない。そこまで言い切られたら誰も、未来を見ろだなんて言えなかった。

結局そのあと、反対意見は出ることもなく個別で捜査を進め確度を高めてから一気にガサ入れという形で落ち着いた。解散した私たちは建物の中の休憩室の机に座って、沈んでいた。

「そっか、そんなことがあったんだ……辛いな、希械、緑谷」

「うん……」

「……通夜でもしてんのか」

「相澤先生」

「学外ではイレイザーヘッドで通せ」

休憩室でうなだれていた私たちに声をかけてきたのは相澤先生だった。えーくんたちに事のあらましを話した。エリちゃんについての後悔は、私より直接接したデクくんたちの方が深いだろう。その沈みようは、迂闊な慰めの言葉は言えないくらいくらい。相澤先生が通夜のような、ということもわかる。

「今日は君たちのインターン中止を提言しに来たんだがなア。ヴィラン連合が関わってくる時点で事情が変わってくる」

「ええ!?今さら何で!」

「話は最後まで聞け」

相澤先生から出たのはインターン中止の話、理解はできる、なにせヴィラン連合だし、私のような被害者がまた雄英内から出れば今度こそヒーロー育成高としての、いや教育機関として雄英は終わる。そういう意味では絶対にここで中止せねばならないだろう。私たちの心を見捨てる形になるが、それが仕方のないことだ。

「ただなあ、緑谷に切島。お前らはまだ俺の信頼を取り戻せてないんだよ。特に緑谷、お前はそのまま無理やり止めたら勝手に飛び出していってしまうと俺は確信した」

「……はい」

「なら、俺が見ておく。するなら正規の活躍をしよう、分かったか問題児たち。樫も、今度は自分を犠牲にして物事を収めようとするな、全員無事に切り抜けることを考えろ」

「はい!」

「ありがとうございます、相澤先生」

「イレイザーヘッドだ」

相澤先生のインターン続行の許可に、私はほっと息をつく。絶対に、絶対に助けるんだ。私が閉めてしまった檻の鍵を、鍵なんかなくたって全部捻じ曲げてでもエリちゃんを助け出そう。そのために私は、私たちは強くなった。もう二度と誰も、何も失わないように。えーくんの気合の掛け声に、私たちは声を合わせて応えるのだった。

エリちゃんの居場所が特定できるまでの間、私たちは待機することになった。既に無許可での地下道建設という罪により捜査の許可は下りているんだけど、エリちゃんを保護しそなたら台無しどころか負けなので、情報収集が終わるまで私たちは待機することとなる。

なにせチャンスは一度きり、どれほど準備しても足りないだろう。私だってそうだ、帰ってから放課後は完全に演習場を一つ借り切つて実験に励んでいる。今回は加減を抜いて何でもありでやるつもりなので、必要なことは全部済ませておかなくちゃいけない。だって、失敗すれば全部終わりだもの。これがプロの現場、プロの人たちはこれをこなし続けてるんだよね……。

相澤先生曰く、私たちの役割は薄いとのことだ。当然か、むしろ参加させてもらえるだけでもありがたいくらいなのに、ここでまた重要な仕事をインターン始まったばかりの生徒に任せるわけがない。それでもいい、エリちゃんを助けるのは誰だっていいんだ、私たちがその一助になるなら喜んで作戦に協力する、きつと皆そうなんだ。

「あの……樫さん、少しいいかな？」

「ん？デクくん、どうしたの？」

「その……聞きたいことがあるんだ、オールマイトについて」

「……聞いたんだ？」

授業後、演習場からみんないなくなるタイミングで今日使った武器やら百ちゃんの創造物を片付けるのを手伝ってくれたデクくんが、そんなことを言った。私はそれに、何となく察しがついた。デクくん、オールマイト先生の予知について知っちゃったんだね。それで、私にも知ってるかどうか尋ねた。

多分、納得がいつてないのかな。後継者である自分より先に私たちにそれを教えたオールマイト先生について、さらにそこにエリちゃんのことがかかってきたから、デクくんが処理できるキャパをオーバーしたんだ。とにかく事情を知ってる人に話を聞きたい、そんなところだろうね。

詳しくは私の部屋で、とデクくんの耳元でささやいてから、私は演習場のお片付けを再開するのだった。デクくんもそれで納得したのか、そのまま手伝いを続行してくれた。

「いらっしやい、デクくん。さて、単刀直入に聞くけど、聞きたい事って何かな？」

「えっと、樫さんはオールマイトの事情を全部教わってたんだよね？」

「うん、そうだね。教えてもらったのは仮免の日だよ。メリツサさん達もそこで。ああ、でもワンフォーオールの話はしてないから其処はシールド博士たちと話すときは考えてね」

そんなこんなで私の部屋にて、椅子に座った私たちはテーブルとコーヒーを挟んで膝を突き合わせていた。聞かれたら困る話なのでドアには実験中、爆発の恐れありなので入室禁止と書いたうえで鍵を閉めてある。まあロケランでも撃ち込まれない限り問題ないでしょう。デクくんは自分より先に私が全部知ってたことについて少し声を荒げる。

「どうして！どうして教えてくれなかったんだろう……オールマイトは……」

「そりゃ、知ってほしくないよ。気づいてないかもしれないけどデクくん、オールマイト先生にとって今一番大事な人だよ？死んでもいいって思ってた先生をデクくんは思いとどまらせるどころか、生きる希望になった。私だったらそんな人には教えたくないよ、笑ってほしいもの」

「それは、分かってるつもりだけど……悔しいんだ。樫さんはオールマイトに頼ってもらえた、だけど僕は……」

「ずっと秘密にされてた、と」

うーん、デイスコミュニケーション。まあ、弟子として後継者として全部を知りたかったっていうデクくんの気持ちは分かる、と思う。当たり前の感情だし、そりゃあいい気分でもないか。憧れのヒーローが1年かそこらで死んでしまうだなんて。まあ私が言うとするれば――



「えっとデクくん、デクくんがやることって何だと思う？」

「え、それは……立派なヒーローになることで」

「そう、そうなんだけど……ワンフオーオールを100%使いこなすのがマストでしょ？オールマイルト先生は話せば多分、こっちの方にも首を突っ込んでくるって思ったんじゃないかな、デクくんの性格上、ね」

「うっ……」

はつきり言うけど、デクくんが私とシールド博士とメリツサさんのヒーロースーツ製作とかに関わるのは推奨できない。けど、デクくんは知ってしまったら100%何かの役に立ちたいと首を突っ込んでくるだろう、それが正しいか正しくないかは別にして、デクくんにはもっと大きなタスクがある。必殺技を開発して、今いい所なんだから……そっちに集中して欲しいのは当たり前前の話だ。

「今回はきつと分業だよ。手分けしてオールマイルト先生を助けよう！」

「分業？」

「私たちはオールマイルト先生の命を助ける為に頑張る。デクくんはワンフオーオールを使いこなせるようになってオールマイルト先生を安心させて、運命を捻じ曲げることに専念させてあげる！チームアップだよ！」

「そうだね……どうしてだろ、頭がもやもやして……」

あー、もう！この師弟はコミュニケーションが下手なの!?ファンの扱いは超上手なのに弟子となると不器用だねオールマイルト先生は！メンタルケアもしてあげてよ！デクくん思い詰めるタイプだよ！いつそのこと河原で殴り合いでもさせた方がいい気がする！だから話した方がいいんじゃないかって言ったのに、オールマイルト先生の気持ちも分かるんだけどさ！

「納得するのは難しいと思う。でもデクくん、そういうのは時間をかけて飲み込んでいくしかないよ。デクくんにはデクくんの考えがある様に、オールマイルト先生はオールマイルト先生の考えがあるんだか

ら。それに。話せないことだって。私だってえーくんに秘密にしていることあるし」

「樫さんが、切島君に……」

「そうだよ？スリーサイズとか。知りたい？」

「ぶっ!？」

「まあこれは冗談だけど。秘密なんてあつて当たり前なの。全部知りたくても、教えてもらえる方が珍しいんだよ。それこそ、全部教えてもらうなら……教えても大丈夫だって思ってもらうしかないよ。だから、まずは目の前にあるタスクをこなす、それが第一歩でしょ」

「そっか、そうだよ。よし！頑張らないと！」

「その調子だよデクくん！目指せ運命ちやぶ台返し！ということがかつ井作るから食べてつてよ！ゲン担ぎ！」

ふー、やつとデクくんが何時もの調子に戻った。なんか、食堂でもひと悶着というか、泣いてしまったらしいし、心配してたところになりようどよく相談をぶつけてくれてよかった。最悪サンドバッグになるつもりでいたけど、デクくんはそういうタイプじゃなくてよかったよ。ぐいっとコーヒーを飲み干した私は、そのまま立ち上がった。私はエプロンをつける。デクくんも手伝うよ、と立ち上がってくれた。私たちは並んで、調理台でお料理を始めるのだった。

「ちなみに私のスリーサイズは上から」

「いやいいから！」

ノリわるーい。

ヒーロースーツに着替えた私たちと、ヒーローたちが一斉に並ぶ。これだけの数のヒーローが一堂に会するとやっぱり壮観だね。デクくんの相談から約二日後の深夜に、決行日時を知らせるメールがあった。調査の結果、エリちゃんは身柄を移させることなく死穢八斎會の本部の地下にいたことが分かった。ナイトアイの予知で構成員に接触して未来を見た結果分かったみたい。

そこからは速かった。既に無許可の地下道の件で裁判所から逮捕状が発付されている、なので決行日時の今日私たちは警察署の前に集合しているのだ。今回協力してくれる警察の皆さんも結構な数既にスタンバイ済み、さらに私が見つけた地下道の出口と思われる場所にも既に捜査員が張っているらしい。役に立てたみたいでよかった。

「緊張するな……」

「お茶子ちゃん、大丈夫。みんないるからね」

「うん！がんばろー！」

午前8時30分が作戦開始、警察署から移動を始める私たちに釘を刺したのは相澤先生、デクくん今回俺はナイトアイ事務所と一緒に動くと話している、やり過ぎたら即止めるということだろう。私も神野みたいに油断しないように気をつけないと。今回は万全の態勢だし無傷で捕まえようとかそんな甘いことを考えてる余裕もない。最悪腕や足を飛ばすことも手段に入れるべきだ。止まってくれないならば、こちらこそそれ相応の手段で。

「少しでも怪しい素振りや犯行の意思が見えたら、すぐ対応を頼むよ！令状読み上げたらガーッツといくからね！」

本部の立派な木製の門に据え付けられたインターホンの前に警察の作戦責任者の人が令状をもって立つ。インターホンを押そうとした時に、私の聴覚センサーが異常を感知した。門の向こうすぐに誰かがいる？まずい、このままじゃ攻撃を受ける。手足を戦闘形態に移行してそのまま警察の人の前が出る。轟音を立てて門が破られて拳が迫ってくる。

「何なんですかア？」

バチイッ！とまるでカラスの顔のようなマスクをつけた大男の拳を受け止める。結構強いな、威力が高い。増強系……？いや、そんなことはどうでもいいか。勢いよく腕を掴んだまま振り上げて男を持ち上げて、思いつき振り下ろして地面に叩き付ける。地面が陥没してマスクの男がうめき声をあげた。追撃を入れようと圧縮ボックスを手にとると地面にうつぶせになる男に爬虫類のかぎ爪と鱗が生えた手がのしかかり、押さえつけた。

「よくやったわエクスマキナ。けど、ここからは私たちリユーキウ事務所が対処します。みんなは中へ！」

「突入！」

「ようわからん！もう入って行け行け！」

男を押さえつけたのは大きなドラゴンの姿に変わったリユーキウだった。彼女の個性は閉所戦闘では不利、だから外を担当してくれるということらしい。私は有難く彼女に男を任せる。男は抑え込まれた状態にもかかわらず、何事もなかったかのように地面に手を当てて立ち上がるうとしている。結構強くやったのに効いてないの？

「お茶子ちゃん！梅雨ちゃん！後でね！」

「頑張ろうぜ！」

「またあとで!!」

リユーキウ事務所が残る、ということでお茶子ちゃんと梅雨ちゃん、そして波動先輩も残ることになる。私たちは彼女に一声かけてから死穢八齋會の本部に侵入する。日本庭園を模しているらしい大きな庭では既にいかにもホンモノっぽい、というかホンモノヤクザさんたちがドスとか、金属バットとかをもって待ち構えていた。

「ゴリア!!何勝手にひと様の土地はいつとんじやワレエ!!」

「ヒーローと警察だ！違法薬物製造、所持その他もろもろで令状が出てる！」

「知らんわ！」

ヤクザの人たちが個性を使って私たちに攻撃を加えようとしてくるけど、随伴する他のヒーローたちが鮮やかな手際で押さえつけて無力化して警察の人が手錠をかけていく。そのまま邸宅の玄関の閉ざされたドアをカチ割って中に入る。おかしい、どこからか情報が洩れていた？まるで待ち構えていたかのような感じの厳戒態勢。どうということなんだろう？

「ここだ、この床の間の板を決まった順番に抑えると地下通路への扉が開く！」

「バブルガール」

「はいっ！」

ナイトアイが床の間の板敷きを順番に押すと壁がスライドして階段が姿を現した、それと同時に中で待ち構えていた構成員たちがなだれ込むようにこちらに出てくる、けどバブルガールとセンチピーダーによって纏めて捕縛されていく。私たちはその隙にその階段を使って地下に入る。階段の先にあつたのは……行き止まり？

「おい、話が違うじゃねえかナイトアイ」

「俺、見てきます……ナイトアイ！先に道があります！壁はかなり厚いですけど……！」

「なら話は速ええ!!緑谷！」

「うん！」

右手を硬化させたえーくんとワンフォーオールを纏ったデクくんのパンチが壁を完全に粉砕する。先を越されたわ、というファットガムのぼやきと共に私たちが先に進もうとした瞬間、迷宮みたいに壁がまるで生き物のようにぐにやぐにやと動き出した。なに……これ……？

「入中だ！やつの個性にしては規模が大きすぎるが……」

「ヤクや、かなーりキツめに打てばない話じゃないなあ」

入中、確かものに入り自由に動かせる個性を持つ幹部、地下を形成するコンクリートに入り込んで操ってるのか！だけど、セメントス先生みたくに自在に操れるわけじゃない、それなら私たちにも勝機はある。一直線に壁に穴をあけるとかね……！

「道を変えられ続けたら、目的地までたどり着けない……！女の子を救い出すどころか俺たちも……！」

「環！そうはならない！大丈夫さ！なんせお前はサンイーターなんだから！こんなその場しのぎ、俺には関係ない！目的の方向さえわかれば！俺は行ける！」

「ミリオ……！」

弱気になった天喰先輩を通形先輩が励まして、スピード勝負なら時間稼ぎに付き合う必要はない、先に行きますとマントを翻して組変わってしまった道を透過で無理やり先に進んでいった。私たちも壁を壊して先に進もう、としたところで地面が鳴動して落とし穴のよう

に大穴が開いた。とつさにブーストを吹かして私は浮いたが、そのまま他の人は落ちて行ってしまう。助けようと姿勢を変えた瞬間、ナイトアイの指示が飛んだ。

「エクスマキナ！ミリオを追って援護しろ！私たちも必ず追いつく！」

「希械！頼んだぜ！先輩の事！」

「一緒にエリちゃんを助けよう、樫さん！」

「うん！烈怒頼雄斗！デク！絶対にだよ！全員無事で、会おうね！」私を落とすのは諦めたのか、地面が形を取り戻す。相澤先生の抹消を嫌ったのか、どうやら入中は私よりもプロが多く混じるみんなの始末を先にすることにした様子。私一人ならどうにでもなると？舐められたものだね、この地図は入った瞬間からずっと探知してる、組変わろうとも方向は見失ってない。それなら同じ、目の前の壁をぶち壊して進んでいけばいい。

ブオン、と私は太もものラックからビームサーベルを取り出して起動する。灼熱のビームの剣を私は思いつき振りかぶって目の前の壁に振るうのだった。

## 切島鋭児郎 アンブレレイカブル

落とされた……！クソ、今どこだよ！上に残れたのは希械と通形先輩だけ、他はプロ含めてみんな地下のさらに下まで落とされちまった！高所から落ちた時の対処は授業でやってる、うまく受け身取ってすぐに立ち上がった。俺よりうまく着地した緑谷があたりを見回している。

「広間……!?」

「おいおいおいおい、空から国家権力が落ちてきたぜ？不思議なこともあるもんだ」

「よっぽど全面戦争したいらしいな……！流石に我慢の限界やわ、ここはワイらが……！」

「そのプロの力は、取っておいてくれ……！明らかに時間稼ぎ要員、そんなの俺一人で十分だ」

俺たちが落ちてきたのは地下のさらに下層にある大広間、そこにはやっぱり死穢八斎會の構成員らしいヤツらが待ち構えていたみてえだ。数は3人、玄関で殴りこんできたヤツみたいなマスクをそれぞれしてる。多分これが幹部の証か何かなのか？俺は考えるのはあんまり得意じゃねえけど、警戒するべきだつてのは分かる。

構えた俺たちを制したのは天喰先輩、言葉を聞くに3人を一人で相手にするつもりみてえだ。いくら先輩でも一人じゃ、と声が出そうになつたけど……：：：：：そーいや俺一度も先輩に勝てた事ねえんだつた。しかも、大体謙遜してたし……：：：：その人がこの局面で任せてくれたって言うてくれたんなら……：：：任すしかねえだろ。

「銃見せるな！窃盗の個性持ちだ！」

「ち、ばれてんのか！けどな、やりやすいわ！」

「やらせるわけないだろ、刀捨てろ！」

作戦は決まった、先輩に任して俺たちは抜ける。そのために一瞬隙を作る！合わせられるはずだ、俺なら！相澤先生が個性を消して、その隙について頭陀袋みたいなマスクをしたやつを気絶させる。俺はもう一人、スキンヘッドのやつに思いっきり硬化させた拳を個性らし

き結晶のガードの上から捻じ込んで殴り飛ばした。鈍い音とバキバキに割れた結晶の感触と一緒に壁に叩き付けられたスキンヘッドが痛みに呻いている。多分拳が入った左手がボツキリ折れたな。使いもんにはならねえと思う。

「ありがとう、烈怒頼雄斗。やっぱり君は強いな」

「あざっす！でも、先輩はもつと強いです！あとお願いします！」

「ああ、任せろ。ミリオを頼むよ、あいつきつと……無茶するから」先輩を置いて、広間の扉をくぐる。その後ろで手をタコに変えた先輩が、構成員たちから銃や刀を奪って壊しているのが見える。先輩を信じて、任すしかねえ。希械も今、上で頑張ってるはずだ。腑抜けになるのはもうやめるって誓ったんだ、前だけ見てろ。俺は烈怒頼雄斗、先輩に託されたんだから。

「先輩、樫さん……大丈夫かな……心配だ」

「大丈夫に決まってるだろ、緑谷。先輩は確かにああだけど、強いんだ。職場体験で俺はそれをよく知ってる。それに……希械だって強いのは知ってるんだろ。本気になったあいつは多分クラスの誰も勝てねえ、そうだろ」

神野の件があつてからクラス全員があいつに少し過保護になつてるが、本気を出したあいつはクラスの誰よりも強い。当然、俺よりも。多分今頃、壁を全部壊しながら通形先輩に追いつこうとしてるはずだ。それに、俺たちだって黙ってるわけにはいかねえ。だからこうやって必死こいてコンクリートの道を走ってるんだ。

「上に戻ろう」

「あの階段やな」

「妙だ、何の障害もなくこうやって走れているが……地下全体を把握できないのか？突破力ならうち随一の樫が上で暴れまわってるかもしれない。分離されたが警官隊もいる、そっちに意識を割いて――」

「イレイザー！」

突然、今まで動かなかった壁が動いて相澤先生を狙い撃ちにする様



に、捕まえて壁に押し付けて潰そうとした。それを見ただけで、体が先に動いた。相澤先生を庇うために、後ろに飛ぶ、だけどそれはファットも同じだったみたいで俺はファットの脂肪に埋まってしまった。脱出できないでいると、そのままファットごとコンクリに押しされて壁に開けられた穴を転がり落ちちまった。

「ぶはっ!!」

「雛か!?何しとんねん!」

「すいません、俺もイレイザー庇おうとして……ファットに埋まっちゃいましたけど」

「まあ、しゃーないわ。イレイザーはいないと困る、よう判断した。それより——」

暗がりからまた構成員が現れた!武器は……ねえ!頑丈そうなグローブ付けてやがるけど、拳だ!それなら、と俺は全身を全力で硬化させる。安無嶺過武瑠、これなら素手だろうが武器でこようが関係ない。嘗めんなよ、その拳……壊れちまっても知らねえぞ!

男が拳を振るつた瞬間に、凄まじい衝撃が俺の全身を駆け巡る、んだこれ……!まるで緑谷に殴られ続けてるみてえじゃねえか。いや、連打力ならこいつの方が上!だけどなあ、たかがこの程度で俺の硬化を破れると思うな!殴られながら前に進む、ぜってえ倒れねえ、倒れたらその時が俺の死だ。約束した、無事で会うって。じゃあよ、勝つしかないだろ……!

「おおおおおおおりゃああああああっ!!!」

「いっ……!」

殴られながらも振りかぶったパンチ、勢いはそがれたけどそれでも反撃する余裕はある。それなら俺は何度でもぶん殴る!それだけだ!だけど、拳は男の眼前で青い半透明のバリアみたいになものに止められた。男の方も内から攻撃を通形先輩みたいに透かすことはできないのか嵐のようなラッシュが止まる。後ろからファットも攻撃に参加してくれるけど結果は変わんねえ。硬いバリア……!へっ、希械でそんなの経験してんだよ。あいつの方がすげえ。

「烈怒、無事やな」

「つす」

一旦安無嶺過武瑠を解いて、通常の硬化に戻す。時間制限があるかな、安無嶺過武瑠。都度息を入れて戦う時だけ安無嶺過武瑠の方がいい、オールマイトの言ってたゴリ押しだけど、頭だって使わなきゃなんねえ。

「俺は思うんだ、ケンカに刀や刃物は無粋だって。持ってたら勝てるだろ、な？その身に持っているもんだだけで殺し合うのがいいんだ」  
「ふむ……ファットガムに体を硬化できる少年……防御が得意な二人だ。乱波よ、残念だったな」

「節穴か？ガキの方もデブも強いぞ。それに俺のラツシユを受けても平然と立つ、今までいなかった」

「だとしても、だ。我々は矛と盾、たいしてあつちは盾と盾……我々のコンビネーションなら封殺できる」

「参ったな……ケンカにならないぞ」

一人じゃなくて、二人だったのか。グローブ付けた奴が增强系の個性で、バリア張ってるやつは和服着てるおっさんだな？ファットがいつも言う『ヴィラン退治はいかに早く相手を戦意喪失させるか』今の状況はスピード勝負、ならなるだけ早くみんなと合流しなきゃなんねえ。希械がまた、自分を削っちゃう前に。

「ファット！」

「ああ、こんな三下ぶっ飛ばして、さっさとみんなの所もどるで！」  
「オツス！」

ファットの号令に気合を入れて返す。怖くねえ、なんていや嘘だ。けど、それ以上に燃えている！負けてらんねえんだ、あいつにも緑谷にも！俺だって、エリちゃんを救ってえ！

「おい天蓋、バリア出すな。面白くなってきたところだ」

「烈怒、各個撃破や。殴った感じあのバリアは俺じゃ破れん。可能性があるんだとしたら、君の必殺技や。バリアぶち抜いて、あの糸目についてもうたれ。その間に俺は、あいつをやる」

「分かりました！天蓋つつつたな、おっさん。勝負だぜ、盾と盾、

どっちが硬いか」

「乱波、まずはあの少年を」

「知らん、突っ込んできた方が先だ」

「乱波君いうたな。打撃でダメージ貰ったんは久々やわ。ここはひとつキミの腕が壊れるか俺が壊れるか……勝負といこうやないか！」

「やっぱりお前はいいデブだ！」

ファットと乱波つつー大男が激突する。ありえねえほどの速度のラッシュ、音が重なりすぎてどんだけ打ってるのか分かったもんじゃねえ。けど、ファットなら受け切れる。あの脂肪で衝撃全部沈めて、打撃の隙間縫ってあいつを殴ることができる。ファットが任せろって言ったんなら信じて任すのが男だ。だから俺は、俺がやるべきことをやる。

「フム……少年、残念ながら君は私に触れることさえできない。最高硬度のバリア……乱波でも砕けんよ。そして、ファットガムを倒した後は君だ」

「言ってくれるなあ！じゃあまずいくつか訂正させてもらおうじゃねえか！一つ！俺はお前を捕まえる！二つ！ファットはあいつになんか負けねえ！」

ビキビキ、メキメキと音を立てて俺の全身が硬化していく。安無嶺過武溜、触れば切れそうなほどに鋭くそして今までにないほどの硬度を持ちつつ、フットワークを鈍らせないように訓練した必殺技。何度希械に打たれて、殴られ続けたかわかんねえ。あいつには頭が上がりねえわな。その研鑽の日々が実を結んだこの必殺技、見せてやる！

「まだあるか、少年」

「おうよ！最後に3つ！俺は盾じゃねえ……盾であり、矛だ！」

体が軋む、硬化した体同士がすり合わさって火花が飛び散る、軋みながらこちらにやってくる俺を天蓋のおっさんは何かを察したかのようバリアを分厚くした。関係ねえ、ぶち破ってやる！向こうが分からないくらい分厚いバリア、きつとこのおっさんの最大出力だ。ならこいつを何とかしまえば、俺の勝ちだ。

拳を握る、メキメキと異様な音が鳴り続ける。さらに握る、もつと

握る。握って握って……一塊の鉄塊のように変わった拳を思いつきり引いた。小細工なしの一本勝負、ナツクルアローだ。振りかぶった拳に渾身の力を込めて、踏み込む！踏み込んだ脚が地面を割った。解放された力をありったけ目の前のバリアに向けて叩き付ける。インパクトの瞬間、関節含むすべてを硬化させて反動すら打撃の威力に変える！これがっ！

「烈怒不<sup>フレイム</sup>黎無<sup>ツツツ</sup>!!!」

ガキヤア!!と工事現場でも聞かねえような音が俺の拳とバリアから発生する。分厚いバリアにぶち込まれた俺の全力が余すところなく伝わり、ビシビシとひびが入る。ひび割れたガラスみたいになったバリアの向こうから、糸目を見開くおっさんの顔が見える。ダメ押しのもう一発、破裂するような音を立ててバリアが完全に砕け散る。これ以上バリア張られたら困るんで急いで近づいておっさんの胸倉をつかみ上げた。

「ば、ばかな……!?!」

「おっさん！歯あ食いしばれ！」

ガツン！と音を立てて俺の頭突きが天蓋のおっさんの額にぶつか。バリアに頼り切ってたからか、おっさんは痛みに耐性がなかったようでそれだけでくたりと気絶してしまう。情けねえ、ヤクザがこれかよ……てめえらが囲ってるエリちゃんはこの何倍も怖くて痛かったに決まってるんだぞ！

それよりも、ファットだ……！おっさんを地面に投げ捨てていまだに打撃音が鳴り続けるファットと乱波の方に向き直る。乱波のやつ、打撃の速度上がってねえか!?そしてファット……かなり細くなっちゃまって……！打撃の防御に使う脂肪が少なくなってるんだ！衝撃を沈めると脂肪が燃える……！盾がなくなりかけてる！

迷うまでもねえ！希械だったら、芦戸だったら、緑谷だったら！絶対に飛び込んでファットを庇う！そして、俺ならそれを無傷でやり遂げられる！安無嶺過武瑠のまま走ってファットの前に飛び出る。

「烈怒！」

「この人殴りたかったら！俺を壊してみろよ！」

「お前……！最高だ！」

まるでガトリングのような拳の雨が俺を襲う。ズリ、と押されて下がりそうになる足を根性でこらえる、いや進め！こいつのパンチは俺に効かねえ！足を踏みしめて前が出る。確かにパンチは速い、俺の知ってる誰よりも。だけど……！希械あいつよりも軽い！加減を抜いた希械の拳は芯にくる重みがあった。大型重機に跳ねられたみたいなのパンチに比べればこいつのラッシュなんて体を搔かれるようなものだ！

「うおおおおおおおっ!!!」

「押される……！俺が……!?!」

一歩、二歩と前が出る。それに伴ってラッシュを続ける乱波が押されるように下がってく。オールマイトが言ってた、小細工よりもゴリ押しで……！ゴリ押ししてやろうじゃねえか！確かにすげえよ、息を入れる暇もねえ。けどな、それでも最後にものをいうのは覚悟と根性だ、俺はそれを神野で知った。血塗れで戦い続けるアイツが怖くなった。だから、こんどこそ……！誰よりも前に立って全てを受け止める、そんな男になるんだ！

「俺の後ろに！血は流れねえええ!!」

「お疲れさんや烈怒頼雄斗！プロの俺が完全におんぶにだっこ……！情けなくて涙が出るわ……！でもな、おおきに！ええ矛が出来たわ」

俺の肩に手を置いたファットが入れ違うように前が出る。その右拳には今まで蓄積されてきた衝撃が渦を巻いていて、それだけで勝負が決まると確信するほどの威力をもつて、乱波に襲い掛かった。

「俺たちの勝ちや」

「……ああ、俺の負けだ。いいケンカだった」

吹き飛ばされて壁を貫通して隣の部屋まで吹き飛んだ乱波に、ファットが手錠をかける。乱波は抵抗せずに負けを認めて、素直に従った。いつもの丸いフォルムからスタイリッシュな？せ型に変貌したファットは、それでも変わらない笑顔で、俺の背中を強く叩いて褒めてくれるのだった。

「やああああっ!!!」

轟音を立てて壁が粉碎され、赤熱したコンクリートがあたりに飛び散る。もう、壁の数が多い！1m先に設置されてるとかそんな感じだよ！私はビームサーベルを振り回して壁に切れ目を入れてそのまま突っ込むことで壁を粉碎しながら先に向かった通形先輩を追って地下道をかける。えーくんたちはきつと大丈夫、なんせ相澤先生たちが一緒だ。私より安全！

常にソナーを発してマップを更新し、目的の部屋がある場所まで走り続ける。時には壁を粉碎し、時には落とす穴を飛び越え、時には待ち構えていた一般構成員を殴り飛ばして気絶させて進み続ける。途中には通形先輩が殴って気絶させたと思いきお腹を押さえた状態で沈む構成員も転がっている。近い……！

「これは……幹部格？」

決定的なものを発見した、ペストマスクを模した仮面をつけている構成員が一人転がっている。そして明らかな戦闘音、間違いない！通形先輩が戦っている！目の前の閉じられた壁の中で！右手を握ってエネルギーを集中させる、ピンポイントバリアが右手を覆った。間髪入れずにそれを目の前の壁に叩き付ける！轟音を立てて壁に大穴が開いた。

「音本！撃て！」

目の前に広がる光景は、修羅場だった。治崎に殴りかかるマントを失った通形先輩、銃を構えた構成員、そしてその先にあるのは……通形先輩のマントに包まれたエリちゃん。考えてる場合かつ！スラストーに無茶を強いる、爆発するように推進剤を吐き出したスラストーが私を打ち出した。エリちゃんの後ろから覆いかぶさるように私が彼女を庇う、銃弾は……私の肩に突き刺さる。

「エクスマキナー！」

「誰だ？いや、何でもいい……今お前は銃弾を受けた！お前の個性は庇ったその子の力でなくなった！お前の全てが今！無に帰した！」

治崎、いやオーバーホールが動揺した通形先輩の隙をついて地面に手を突いた。その瞬間に棘だらけだった地面がいったんバラバラになり、組変わるような形で大壁を形成して私を挟みつぶすように迫ってきた。私は庇っていたエリちゃんを優しく抱きあげて立ち上がる。私の腰からボツクスがおち、ハロが超圧縮を解いて大きくなる。

轟音を立てて壁が閉じられる。通形先輩の叫びが聞こえる、ぎゅつと瞳を閉じたエリちゃんを優しく撫でる、予想していた痛みがない事にエリちゃんは恐る恐る目を開いて、私と目が合う。そして、その後ろに目をやって驚いたように瞳を丸くしている。

「個性がなくなった？残念だけど、ちゃんと狙いなよ。隙間に挟むんじゃないよ」

エリちゃんを左手一つで抱っこして、右手で左肩に手をやり機械の隙間に挟まる形で止まっていた銃弾を摘まむ。まだ中身が入ったそれを握りつぶして地面に落とす。後ろで手を広げたゴリアテが壁を手でせき止めた状態で止まっている。ハロが一回跳ねてゴリアテのヘルメット内に収まり、ヘルメットが快音を立てて閉じる。壁から手を離れたゴリアテの左の肘が稼働し、サドンインパクトの発射態勢に入る。

「先輩！戻って！」

私の叫びに反応した先輩が地面に落ちる。瞬間ゴリアテのサドンインパクトが眼前の全てを薙ぎ払う衝撃波になってオーバーホールを含む3人に向かって解き放たれた。塵が視界を遮る中、滅茶苦茶になっていく地下道の壁に叩き付けられるオーバーホールが見える。ゴリアテの肘が排熱し、塵が晴れる。

「先輩、エリちゃんをお願いします。まだ終わってない」

「いや、エクスマキナ。俺がやった方がいい！一度当たったら終わりの個性だ」

「ですから、私です。先輩ならエリちゃんを傷つけずにここから脱出できます。私だと……巻き込んでしまう」

それに、ここから先は見せない方がいい。絶対に。サドンインパクトに打たれながら、オーバーホールは3回ほど自分を分解して、無傷

に作り直していた。傷が回復しているのは間違いない。もうすぐ出てくる、今ので気絶しないなら痛みによる気絶は無理だ。だから、殺さないようにギリギリをつけて致命傷ストレスの攻撃を叩き込み続け、心を折るしかない。そんなの、傷つき続けた女の子に見せるものじゃない。

「信じて、ルミリオン。私を本気で戦わせてください」

「っ………無理しちゃダメだ！すぐにサーたちも来る！」

「はい、お願いします」

「だ、だめ！殺されちゃう……！」

「ふふ、心配してくれるの？とつても優しいのね。大丈夫だよ……お姉ちゃんは絶対に負けないから」

通形先輩にエリちゃんを手渡す。私のヒーロースーツの裾を掴んで必死に心配してくれるエリちゃんに笑顔を見せながらガッツポーズをする。ハロもゴリアテを操ってマッスルポーズ、ユーモアはないけど、コミカルに。エリちゃんの乱れてしまった髪の毛をうさぎさん型のヘアピンを作つて留めてあげる。その上に手をやったエリちゃん、ヒーロースーツから手が離れる。通形先輩はそれを確認してすぐさま踵を返し、私が開けた穴から出ていった。

「エリを……返せ……」

「どこ見てるの？」

「ぐあああああつ！」

オーバーホールは無傷ではあるものの、よたついた動きで這い出して来た。その瞬間、私が操作する新兵器によって両肩を貫かれて壁に縫い付けられる。白い牙のような形をしたそれは、新開発したビット兵器、フアング。ビームを発射するのではなく、ビット自体が武器となり、襲い掛かるものだ。バンツと音がしてまたオーバーホールが自分を分解して無傷に戻る。ふーん、フアングごと分解されてるね。発動は掌だけど、体に接触してれば分解に巻き込めるのかな？

二つ、三つ、と腰から圧縮ボックスを落とす。それが変形して追加のフアング、シールドビット、ホルスタービットに変わる、自分でもわかる。怒りでどうにかなりそうだ、きつと私は今とてもヒーローと



は言えない表情をしてる。怒りで熱くなるんじゃない、どんだん体の熱が冷めて行ってる。冷静に、合理的に物事を進めようとしている。それこそ、無感情な機械のように。

「自分の娘に拳銃を向けさせて発砲させる……流石にやっていいことと悪いことがあるよ。」

「ハア……ハア……」

フアングによる近接攻撃、ビットによるビーム射撃が組み合わせられた波状攻撃の檻が真綿で首を締めるかのようになり、一手ごとにオーバーホールの動きを制限して詰みの状態に持っていく。オーバーホールはビームに貫かれては自分を分解して修復し、フアングにズタズタに引き裂かれては自分を戻し、を繰り返している。無傷に戻っていくが、分かる。息の仕方、体表の蕁麻疹、冷や汗、筋肉のこわばり……すべてが彼の消耗を私に示している。

「まだまだ……っ！」

「っ……っ！」

そう来たか、彼はフアングの攻撃を予測し、自分の頭を貫くように姿勢を変えた。私がヒーローだから、殺さないというのを予測して。怒りでどうにかなりそうな今でも、最後の一线だけは跨がないように意識してたのを逆手に取られた。私はフアングの軌道を外す、完璧な計算の元にランダムパターン化された攻撃に一瞬のスキが開き、その隙についてオーバーホールは大規模攻撃を繰り出して来る。

ビットとフアングを巻き込んだ棘の壁、それが迫ってくる。だが、こつちにはゴリアテがいる。ゴリアテが前に出て壁を完全に受け止める。私はその隙にオーバーホールがどこにいるかを目視で探る。

「終わりだ……っ！」

「そうだね」

迂回するように回り込んできたオーバーホールが私のすぐ横に迫ってきていた。彼の全てを分解する手が、私の体に触れて……すり抜ける。驚愕に目を見開くオーバーホールのすぐ横に蛍光灯が付くような音を立てて私が現れる。大規模攻撃の瞬間に、立体映像と入れ替わっておいた。右手の空間が歪む……この距離ならいくら遅い私

でも外さない。

「貴方の目的は、果たされぬ。何をしようと、私が、私たちが！ここで止める！」

「現代病が！そういうのが！組長オヤジを隅に追いやったんだ！」

「うるさああああいっ!!!」

もう、オーバーホールのハチャメチャな理論に付き合ってもらえなかった。何がオヤジを隅に追いやるだ、何が現代病だ！勝手な理屈並べたところで……！小さな女の子を苦しめる理由になったりするもんか！そんな自分のことしか考えてないヴィランの理屈に耳を貸すわけない！絶対にここで止めてあの子に謝らせてやる！

私の叫びと共にピンポイントバリアパンチがオーバーホールの顔を真正面からとらえる。ペストマスクが拉げて飛び、頬骨を折り、歯が滅茶苦茶にへし折れるのが分かる。私はそのまま地面に拳を振りぬいて、オーバーホールを叩きつける。頭を時間差で2回強烈に揺さぶられたオーバーホールはそこでついに気力が尽きたかのように気絶した。

「後でたっぷり反省してください。タルタロスの中でしようけど」  
そう言っただけは拘束具でオーバーホールをガチガチに拘束する。さらに首輪とヘルメットをつける、脳波計と拘束装置だ。たとえ意識を取り戻したとしても個性を遣おうとした瞬間に電撃が流れて個性の発動を不可能にする。私はオーバーホールのズボンのポケットが膨らんでるのを見て、ポケットに入っていた何かを取り出す。それはあの個性を消す銃弾と見覚えのないカプセルだった。証拠品だね、と私は自分の腕の中に証拠品としてしまう。さっき音本と呼ばれた男が使っていた方の銃弾は……サドニンパクトに巻き込まれて滅茶苦茶になっている。

「ハロ、ナイスアシスト。助かったよ」

『オツカレ！オツカレ！』

ゴリアテが乱雑にオーバーホールを持ち上げる、もう片手には他の幹部がぞんざいに拘束されてぶら下がってる。結局は私は無傷で、オーバーホールを捕らえることが出来た。戦術に完全に嵌めること

が出来て、オーバーホールを封殺することができたのが非常に大きい。それに……オールフォーワンほど怖くなかった。あの世界にある闇を全てを凝縮したようなヴィランに比べれば……怖くない。だから、臆せず立ち向かえたのだと思う。

「エクスマキナっ!!!」

「樫さんっ!!!」

「はい？」

「……なん、だと……予知が……？」

とりあえず地上に出るか、と思つて道に戻るか、と考えてるとデクくとナイトアイが私が開けた穴から現れた。いやに焦っている二人が私を見て、デクくんはほつと息をついていて、ナイトアイは驚愕に顔を歪めている。ヒーロースーツが大きく裂けているナイトアイは私が首を傾げているのを見て、それからゴリアテに持たれているオーバーホールを見て絞り出すように声を出した。

「倒した……のか？」

「え、はい。そうですけど……やり過ぎましたか!？」

「い、いや……そうではない。今は後で置いておこう。とにかく合流は済んだ、主犯も拘束済み……よくやった」

「……あれ？デクくん相澤先生とえーくんは？ファットガムにクックも」

「あ、うん。実はね……」

デクくんが説明するところによると天喰先輩は足止め要員の排除のために残り、ファットガムにえーくんは分断されて、さらにデクくんたちはヴィラン連合のトガヒミコとトウワイズに襲われ、相澤先生が負傷、動脈をナイフでやられてしまったらしく失血でリタイアせざるを得なくなつたそうだ。クッククックと警察が残つたから無事だろうとのこと。良かった……!

それで途中で通形先輩とエリちゃん合流し、私が一人で戦っていることを聞いた二人は急いでこっちに来て、私がすでに鎮圧してて拍子抜けした……つて感じかな。でもこれ、あれだよな？作戦成功つて

ことでいいよね!?助けられたんだ!よかつた〜!来た道に戻って、突入してきた警察にオーバーホールを渡した。警察は拘束の上からさらに拘束を重ねてから嚴重にオーバーホールを連行していく。

そこまで見届けて、ようやくなんか体の力が抜けた。おっと完全に気を抜いちゃいけない、エリちゃんの無事を確認してからじゃないと安心できない。通形先輩が一緒だから無事だろうけど、この目で確認するまでは。小走りで元来た道をまっすぐ進む。地下から出て、本部から庭園に出ると……道路側がいやに騒がしいことに気づく。急いで外に出ると……そこには異様な光景が広がっていた。

「う……うう……あ、ああ……!」

「エリちゃん!」

「ダメだミリオ!戻ってしまっ!」

「くそ、イレイザーがおれば……!」

道路の真ん中で、エリちゃんがうずくまっていた。エリちゃんの額にある角から計測できないほどのエネルギーが迸っている。何があつた!?救急隊員の人が一腰を抜かしたようにへたり込んでいる。いや、顔に見覚えがある、作戦に協力してくれている隊員の人だけ……作戦前に見た時より、若い。服も少しぶかぶかになってるように見える。

「なんだ……これは……!」

「戻ったんや……!エリちゃんをあの救急隊員に任せた瞬間、エリちゃんの個性が発動して、隊員が若返った!それでエリちゃんが自分から離れて、今ああなつとる!」

「人間を巻き戻す個性なのか……!!」

痩せに痩せたファットガムの断片的な説明で、事態を理解する。エリちゃんの個性は巻き戻しで、それが何かのほずみで発動した。けど訓練を受けてないであろうエリちゃんは個性を止めるすべを知らない、だからアクセルを踏み続ける状態から戻れずにいま個性を暴走させ続けているんだ!近づけば巻き戻るという事態に、みんな手をこまねいている。相澤先生は失血で気を失い、すでに別の救急車で病院に行ってる……!打つ手が……!

「よせ！エクスマキナ、いくんやない！」

「戻れ！エクスマキナ！」

ファットガムとナイトアイが走りだしてエリちゃんの元に向かう私を止める。その手を振り切った私はエリちゃんの元にひた走る。だつて……だつて！助けを求めている！必死に個性を制御しようと苦しみながら私たちに向かつて手を伸ばすエリちゃんを見た瞬間、私は走らざるを得なかった。

「大丈夫だからね……！」

私はエリちゃんの元にたどり着くと、膝をついて、彼女を抱きしめる。えーくんたちが私を呼ぶ声が、いやに響いていた。

## 82話

「あかん！エクスマキナ！離れろ！戻るぞ！その子をまた傷つけるつもりか！」

「はな……れて……！」

ファットガムの怒鳴り声が聞こえる。確かに、物理的に人間を巻き戻すこの個性かかれば普通の人なら巻き戻されて……きつと受精卵まで巻き戻り、なくなる。それをこの子は知っているから救急隊員の人完全に戻る前に自分からその手を振り切った。なんて、優しい子なんだろう。伸ばしたその手を、今まで誰もとることが出来なかった。けど、私なら手を取ることができる！

「いいえ、大丈夫。私は戻らない」

「……え？」

エリちゃんを抱き上げる。周囲からも私が戻っていないことに気づいたヒーローたちから疑問の声が上がった。予想通りだ、この子の能力は純粹な生物のみに適応される個性。地面が戻ってなかったように道路や車、無機物は戻らない。じゃあ……機械が体中のそこかしこに入り混じった私なら？機械と生物が融合し矛盾を孕んだ状態で生き続けている私なら？純粹な生き物じゃない……私なら？答えは戻らない。私は機械だから。

「怖かったね、辛かったね……助けるよ。もう絶対、離さないから」

「エリちゃん、樫さん！」

「ダメ！3人とも近づいたら戻る！私だから効いてないの！」

私に個性が効いてないからか、デクくん、えーくん、そして通形先輩が駆け寄ってくるのを止める。3人が私の必死の声に足を止める。どうする、どう止める？エリちゃんの個性は額にある角を中心にしてエネルギーが噴き出すような形で発動し続けている。そして、そのエネルギーの噴き出し方は少しづつ強くなっていった。影響範囲がどこまで広がるか分からない……！

「ナイトアイ！空に行きます！そこで思いっきり個性を使わせる！」

「どっぴうことだ!？」

「エリちゃんの個性はエネルギーをため込む形です! エネルギーを使い切ればおのずと止まります!」

両目の測定が終了した瞬間に私はナイトアイに叫んだ。放出されているエネルギーは角の中に溜まっている。そのエネルギーは貯蔵されているのであって無限に湧いてくるわけではないんだ。証拠にエネルギーの放出口兼貯蔵庫である角が徐々に、徐々にではあるが短くなっている。ただ、角が短くなるにつれてエネルギーの放出が強まってる以上、誰もいないところに連れて行くのがベスト!

ナイトアイが苦渋の決断とでも言わんばかりの顔で頷く。私は許可が出た瞬間、上空に舞い上がる。指数関数的に噴き出すエネルギーが増えていく、そして角が短くなる速度も上がっていく。上空200m、エリちゃんを抱きなおして話しかける。

「大丈夫、怖くないよ。貴方の個性は人を傷つけることなんてない、きつと……人を助けられる優しい個性」

「やが、しい?」

「そう。貴方の個性があれば何人も傷ついた人を助けられることができる。今はコントロール出来なくても、大丈夫。私がずっとそばにいる。貴方の個性で私はいなくならない」

「……うう……うえええん……!」

きつと、こんな風に抱きしめてもらったことがないのだろう。甘いことなんてなかったんだろう。安心感もない生活だったんだろう。ポロポロとエリちゃんの瞳から流れる涙がそれを物語っている。エリちゃんが私に抱き着く。手を伸ばしてくれた、私を安心できるものとして捉えてくれた……! 間欠泉のようにエネルギーが噴火する。エリちゃんが個性を自分の意志で使い始めたんだ。止められないから、使い切ろうとしている。

なんてエネルギー量……そして目に見える速度で角が短くなっていく。噴き出すエネルギーが突然ふつと弱くなり……蛇口を閉めるように止まった。エリちゃんの角は目立たないほどに小さくなっていく。ぎゅつと私を離さないように強く抱き着くエリちゃん、私も彼

女を抱きしめる。ここにいるよ、と伝える為に。

「おかあ、さん……」

「……おやすみ、エリちゃん」

エネルギーを使い切ったエリちゃんが瞳を閉じる。消耗しすぎて気を失ったんだ。でも、個性は止まった。それならもう下に降ろして大丈夫だろう。気を失う前に、母親を呼んだ彼女……おかあさん、か……この子の母親はどうしたんだろう。でも、きつと私と同じように抱きしめたことがあるんだ。エリちゃんは幼いながら、それを覚えていて……母親を呼んだ。やるせない。この子が穏やかに目覚めることができませんように、と祈るしかできないだなんて。

スラストターの勢いを調整してゆっくりと下降していく。下ではもう大部分の撤収は終わつたらしく、オーバーホール他の死穢八斎會の幹部たちを乗せた装甲車が出発するところだった。すやすやと眠るエリちゃんを起こさないように音を立てずに着地した私に待っていた皆が駆け寄ってくる。

「樫さん！エリちゃんは……？」

「しーっ。大丈夫、体力を使い果たして眠ってるだけだと思う。とにかく病院へ行かないと……」

「そうだな。私と同乗しよう。ミリオたちはリユーキュウ事務所と一緒に行動するように」

「あの、私も行かせてください。もしまた個性が発動したら……抱きしめてあげられるのは私だけです」

「……いいだろう」

とにかくエリちゃんを病院に移動させなければならぬ。既にエリちゃんの個性の影響を受けた人は別の救急車で病院に行つたらしく、姿が見えない。私のヒーロースーツを強く握りしめたまま眠るエリちゃん、私は彼女をストレッチャーに寝かせて、ヒーロースーツの上着を脱いだ。握らせておいてあげた方が、いいと思ったから。

ナイトアイが救急車での同乗を申し出てくれたので、私も連れて行ってもらえるようお願いする。気になるから、だけではない。もしまた個性が発動してしまうようなら、触れられる人間は今のところ



私だけだ。それに、そばにいるってさつき約束した。

またあとで、とデクくんとえーくん、先輩たちに告げてから私はナイトアイと一緒に救急車に乗り込んだ。救急隊員たちが慌ただしくエリちゃんのバイタルチェックを進めていく中、何かを考えこんでいたナイトアイが口を開く。

「……エリちゃんをミリオが救助し私たちと合流していた時のことだ。君の所に行く前に、私はエリちゃんに予知を使った」

「作戦成功のためのダメ押しですね？」

「ああ、あの状態からなら確実に助かる未来が見える……そう思っていた。だが、見えたのは……君が敗北し、異形の姿に変わった治崎が地上で暴れまわる未来だった。エリちゃんは……治崎に奪い返されていた」

「……予知が覆った……？何が原因で……？」

ナイトアイがまるで罪人が懺悔するように語るのは、自らの個性の事。未来は見た時点で確定する、それならば私はオーバーホールに負けて殺されていて、エリちゃんは今頃オーバーホールに奪い返されて、ヒーローが敗北していたってこと？じゃあ私が治崎を倒せた理由は何なんだろう？予知が覆った理由は？何か特別なことをしたつもりはない、強いて言うなら必死だった。

「思うに……エネルギー、いや願いの発露……そう感じる。私たちはエリちゃんを助けるために作戦行動を始めた。ヒーロー達だけじゃない、警察も……全く同じ疑念の入る余地のないヴィジョンを思い描いていた。それが最終的に収束し、君を通じて私が見た未来を捻じ曲げた」

「人の想いが未来を変える……」

「長らく私が忘れていたものだ。個性をよく使うようになってからことさらに感じていた『変えられない』『変わることはない』という諦め……その固定観念に縛られて、元から未来なんて不鮮明だということとを忘れていたんだ」

「……何か私が特別なことをしたとは思いません。私には未来が見えませんが……ただ、絶対にオーバーホールに負けるわけにはいかない

と必死でした」

私自身、その未来がナイトアイにとってどれだけ絶望的だったかは分からない。なぜかと言えば、私には未来が見えないから。ただ……それだけが全てではないと思う。結果が決まっているなら何でもいいんじゃない。負ける未来が見えるからもうやめよう、とはならない。負けるわけない、勝つてやる。その気概、決意、覚悟……きつとそれが望む未来を手繰り寄せるものだ。確信した、未来は不確定で捻じ曲げることができる。

「オールマイト先生……貴方の予知に抗う、と仰ってました。私やシールド博士に頭を下げて、生きる力をくれないかと頼んできたんです」

「オールマイトが……?」

「はい。なので、オールマイト先生と連絡を取ってください。先生もそれを望んでいます……合わす顔がないって、言っていましたけど」

「私は……ただ単に、彼に幸せになってほしいと思っただけだ。生きる決意したなら、それで」

「よくはないでしょう!」

もー、なんなの!?!オールマイト先生に関係する人たちは大切な人に対して不器用になる呪いか個性にでもかかっているの!?!何がそれでいいの!よくありません!ちゃんと話し合ってください!いきなり大きな声を出した私に救急隊員も含めて視線が集まる。私はそれに顔を赤くしながら声のポリュームをダウンさせて話を続ける。

「あのですねえ、生きることは戦いだってアニメやコミックですら言ってるんですよ。生きる為にこれから戦うオールマイト先生を支えるのは誰なんですか。貴方じゃないんですか?」

「しかし……私は」

「サイドキックじゃないですか。辞めたとかじゃなくて、貴方しかないんですよ。オールマイト先生の相棒を務められる人は。私や他の人はせいぜい、サポーター止まりです。そもそも私やシールド博士は彼の新装備の開発で手一杯です!ちゃんと会って腹を割って話してください!というか会わせます!」

「……はっ！」

「あ、もしもしオールマイルト先生ですか？あ、どうもどうも。はい、作戦終了です。物は相談なんですけど今からこれませんか？ええ、厩棚の総合病院まで。というか来てください、絶対。じゃないとオールマイルト先生が私の胸を盛大に揉みしだいたとデクくんにお話し……あ、来てくれますか？ありがとうございます」

「待て待て待て！今さらっとオールマイルトを脅迫しなかったか!？」

「私のユーモアです。事務所で学びました。ちゃんと半分冗談ですが、揉みしだかれたのは事実です。戦闘訓練で私の足がもつれてのしかかっちゃった際に支えてくれた時に偶然胸に手が、という形ですが」

いい加減に我慢に限界が来てしまった私はその場でオールマイルト先生に電話をする。相澤先生からこの件について連絡を受けていたであろうオールマイルト先生は真っ先に怪我人の有無を尋ねてきたけど、命に係わる怪我をした人はいないのでそこは安心だ。多分一番重症なのが相澤先生とロックロックかな？次点でファットガムかなあ。

それにほっと息をついたオールマイルト先生に今から行く厩棚の総合病院まで来るように頼んだ。なんだかんだでオールマイルト先生はナイトアイを避けてる感じがしたので強硬手段、一番やられたくないであろう私にラッキースケベをした件についてデクくんにはらすと言ってみたら、快く来てくれるとのことのお返事。怪我の功名だね、本当にごめんなさい。あれは全部私が悪いんです。

それでもあの時は恥ずかしかつたなあ。オールマイルト先生が必死になって謝る姿は初めて見た。正直オールマイルト先生絡みの人間関係はボタンの掛け違いが多すぎるので少々頭に来ていたところだ。素直に話せば解決するのにいつまでもずるずるすると……！男ならシャキツとして欲しいものだ、えーくんみたいに。理由があるのは当然わかる、思想の違いも分かる。けど、じゃあもう関係ありません、気まずいし……それは悲しい。

オールマイルト先生がデクくんを選んだ理由も、ナイトアイが通形先輩を次代の後継に据えたいと思っ……相反しないもの

だ。というかそもそも通形先輩はワンフォーオールのことを知らないのに、ナイトアイが器として引き入れて育て続けたことを知ったらどう思うかとか考えないのかな。通形先輩は自分の個性に誇りを持ってるように見えるから、ショックを受けそうな気がしないでもないよ。

もちろん私が今無茶苦茶やってるのは分かっている。二人の考えを完全に無視して踏みつけるような行動だ。長年のわだかまりがそんな簡単に解消されるわけないし、後継問題では二人は相反する立場をとっている。理詰めで行けばデクくんを持たせておいた方が安全ではあると思うけど、将来性を考えるなら通形先輩だろう。ただフルガントレットを使えるかどうかの差は正直大きい。

「君は……無茶苦茶だな」

「お母さんが言ってたんです。女は男を振り回すくらいがちょうどいいって。男はこつちを振り回すんだから、私たちも振り回してやるんだって」

「……君にもユーモアのセンスはあったみたいだな……我が事務所向きだ」

諦めたように、ナイトアイは苦笑した。そういえば、初めてこの人が大きく表情を崩すのを見た気がする。そうです、私は滅茶苦茶なんです。そのくらい……貴方たちに仲直りして欲しいって思ってるだけなんです。これから先はきつと……貴方が絶対に必要だから、無茶でも何でも通します。ごめんなさいね、ナイトアイ。

## 83話

救急車が厩棚の総合病院に到着して私たちはエリちゃんと一緒に救急車を降りる。エリちゃんはただ体力がなくなっただけで眠っているだけらしく。発熱などの諸症状はないみたい。ただ、今までの生活と若干の栄養失調が合わさってどこまで眠り続けるかは不明だし、これから病院で詳しく検査してもらわないといけないよね。

あと私も、エリちゃんの個性がどう私の体に影響を及ぼしているかわからないので検査を受けるようにナイトアイに釘を刺された。そこに関しては異論はないし、仮にその検査で私に何もなかったら、エリちゃんの個性の作用範囲が確定して尚且つ暴走した場合でも私が近づいてどうにかできるということになるので人間ドックばりに色々見てもらおうかな。

「……ナイトアイ」

「オールマイト……やつと会う気に？」

「返す言葉もない。樗少女からさんざん発破を貰ったからね、踏ん切りがついたよ」

「最終的に脅さないといけないなんて思いませんでした」

凄いなオールマイト、どうやって来たんだろう。法定速度守った？ いや脅した私が言うのも変だけど、よく来たね。冷や汗掻きまくりだからきつと相当急いだんだろう……どれだけ弟子に自分のイメージがダウンすることを恐れてるんだろう。事故なのに、何だったらデクくんは私の胸をちらちら見てたりするぞ？ 言わないけど、峰田くんよりましだし。峰田くんが意図的に揉みに来たときは流石に悲鳴を上げたよ。えーくんの顔面パンチにより前が見えなくなっただけでお仕置きは取りやめたけど。

「色々君と話したいこともある。私の未来についても」

「ええ、希望があることは証明されました。貴方がこの先生き残るために私の個性が必要ならば、いくらでも」

「……私は検査を受けてきます」

この分だと私の出番はなさそうだし、お邪魔だし。素直に検査を受

けるとしよう。ストレッチャーで中に運ばれていくエリちゃんについて私も病院の中に入る。オールマイトとナイトアイはそれを見送ってくれてから、別の方向に歩き出した。オールマイトの車の中で、いろいろ話し合うのだろう。

「二応隅々まで検査したけど、どこも異常はありませんね。健康そのものです。念のため1日検査入院しましょう」

「そうですかー、よかったです」

検査、人間ドック並みにいろいろ受けたけど自己診断と同じ結果で終わった。やっぱりエリちゃんの巻き戻しは純生物に限定される個性なのかな？ 発動型で無機物が生える、とかじゃなくて私みたいな異形型で無機物が混ざっていると多分影響されないんだと思う。詳しくは実験を試してみないとわからないけど、いや実験なんて無理だよ、強行しようとしたら私が全部ぶっ壊して中止にさせるからね！ ああ、そうだよエリちゃん！

「あの……私と一緒に運び込まれた女の子は……？ それと他にもケガをした人がいると思います」

「ああ、それなら俺が見てきた」

「相澤先生！ お怪我は大丈夫なんですか？」

「頸動脈をやられた。ロックロックが傷口を固定してくれなきゃ死んでたな。輸血して1日入院して様子見だ。全く俺は不覚を取ってばかりだな……」

首に包帯をぐるぐる巻きにした相澤先生が診察中の扉を開けて入ってくる。私は慌ててあげていたタンクトップを下ろして下着を隠す。後ろを振り返ると輸血パックを何本もぶら下げたポールを持った相澤先生が気まずそうに立っていた。私は医師の先生に頭を下げてから相澤先生と一緒に病室を出る。

相澤先生の話の聞くに、デクくんは無傷、えーくんは若干打撲があるけどほとんど無傷。ファットガムはちよつと無茶したみたいで骨折が何か所かあったみたいだけど元気いっぱいでお腹が減ったって

言ってるみたい。通形先輩は少しだけ打撲を貰ったみたいだけど特段なにかはない様子。天喰先輩は顔面の不完全骨折で少しだけ入院。ロッキロッキもナイフで刺されはしたものの軽傷で済んでるのだとか。よかつた〜。

「エリちゃんは、どうですか？」

「まだ眠ったままだが、少々栄養不足なこと以外は問題ない。捕まった死穢八齋會の連中が言うには食事は摂らせていたが自分から食わない場合が多かったとのことだ。エリちゃんの素性も分かりつつある」

今分かってることは、と相澤先生の話を総合するとエリちゃんは死穢八齋會の組長、つまりオーバーホールにオヤジと呼ばれていた人のお孫さんで……娘さんは一般人と結婚するために組を強制的に破門、離縁されてたらしい。それでもヤクザの娘とあれば危険も付きまとうので組長は密かに護衛を付けていたのだが……とある日護衛との連絡が途絶えた。

急いで若頭だったオーバーホールと一緒に娘夫婦の所に行く……そこにあつたのは娘とその夫の服と護衛の服、そしてそれに囲まれて泣きながら気を失ったエリちゃんだった……とのこと。それからエリちゃんの個性検査を闇医者に行ってもらい個性が確定して、オーバーホールは組長を再起不能にして暴走を開始した……。

ああ、なんてこと……つまりエリちゃんは個性を発現すると同時に、自分の両親とその護衛を巻き戻してしまった、ということなんだ。だからオーバーホールは娘として扱わず道具扱いをしていて、あくまで孫として引き取った組長を黙らせた。気を失う直前、おかあさんと呼んだのは私と母親が被ってしまったんだ。だって私も……彼女と彼女の母と同じであろう赤い目にメッシュをしていたとはいえ白い髪をしているものだから。

「今は隔離されている。お前が接触して得たあの子の個性の状態を鑑みての結論だ」

「そう、なりますか。面会謝絶ですか？私なら……」

「ああ、お前なら接触できる可能性がある。強制的に個性を止めら

れる俺もそうなるだろう、目覚めた時次第だ」

そこまで言った相澤先生のポケットから着信音が鳴り響く、点滴で取りずらそうにしながら電話に出て、少し血相を変えて確認を取り、通話を切った。何があったんだろう……？まさか他の人たちに予想外の怪我とかがあったり!?

「樫……まずいことになった。護送中の警官隊がヴィラン連合に襲撃を受けた。護衛のヒーローは殉職……治崎は両腕欠損、幸い証拠品等は無事だったんだが……まさかこんな形で直接的に襲撃をするとは……」

「ええっ?!あの護衛装甲車の群れを直接襲撃したんですか!？」

「ああ。目的が分からん、一番可能性が高いのは個性を消す銃弾だろうが……どうした、樫」

相澤先生が銃弾、と言った瞬間に私の顔がさーっつと青ざめる。わ、わ、忘れてたああああ!!私はふるふると震えながら相澤先生に向けて腕をだし、その中からにゅつとオーバーホールから証拠品として取り上げた個性を消す銃弾と謎のアンブルを出す。それを見た相澤先生は一拍おいてことを理解したのか、ゆらあと個性を使いつつ髪の毛を逆立てる。

「……樫」

「ご、ごめんなさいごめんなさい！取り上げたはいいんですけどそのあとエリちゃんのこととかがあって完全に頭からすっぽぬけてて！」

「ほおう」

「ひいひいっ!？」

完全に私が悪いので反論すら出来ずそのまま頭を抱えてうずくまる私、それを見下ろす相澤先生の眼から個性の光は消えない。違うんですわざとじゃないんです分かってください！うえ、うえええん！まさかこんな初歩的どころか最悪なミスをするだなんて！情けないどころか仮免を持つセミプロとして失格だよお！恐怖に震える私を見る相澤先生はため息を一つついて個性を解除する。

「……まア、それでヴィラン連合の襲撃からその銃弾を守れたと思



えばフラインプレーではある。だが2度目はないぞ、心に刻めよ」

「はいいいっ!!」

相澤先生がぼりぼりと頭を掻きながらお許しの言葉をくれて私はそれに急いで立ち上がり敬礼をしながら心から謝る。ごめんなさい相澤先生、こんな教え子で。警察にそれ引き渡すぞ、と言った相澤先生に一も二もなく頷いて外で待機している警察の人に証拠品として渡しに行くことにした。

「樫さん！相澤先生！」

「あ、デクくん！えーくんたちも！」

「相澤先生、無事でよかったわ。いまリユーキユウ達が現場検証をしているのだけれど、インターン生は先に病院に行きなさいと言われたのよ」

「心配かけて悪かった。蛙吹、麗日、緑谷、切島、樫。とりあえず今日は病院で検査して1日待機だ。明日になってからまた色々あるだろう」

私は警察の人に証拠品を渡す。そこまでやってなんか気が抜けた。待合室のソファにずりずりと座り込む。相澤先生は警察とのアレソレがあるみたいですがすぐに出て行ってしまった。私の隣にえーくん、反対隣りに梅雨ちゃん、デクくんとお茶子ちゃんも座ってヒーロースーツ姿の見習いヒーローが無言でソファを占領するという中々にシュールな絵面が完成した。

「なんか……実感わかねえ」

「うん、僕なんて結局……ヴィラン連合を取り逃がしちゃったし」

「でも……作戦自体は成功だわ。大きなけが人もいない」

「そうやんね！希械ちゃんめっちゃすごかったって聞いたよ！治崎を確保して、エリちゃんを守ったって！」

「そうだね〜そうなんだけど……現実感がないや……それに」

そこまで言った後で、私たち全員のお腹が音を立てる。みんな一斉にお腹を押さえてお腹が空いた、腹減った〜って。なんか心が追いつけてない、ふわふわしてて、死穢八齋會の本部に置き忘れてきたんじゃないかなって感じ。突発的な事件じゃない、捜査として自ら

関わってそして解決した今回の件は、私たちに大きな成長をもたらして、終了することが出来たんだろう。ご飯食べようか、とデクくんが提案して、その前に体を奇麗にしましょ、と梅雨ちゃんがいう。病院のシャワー室って借りれるのかな。借りれるなら、着替えたいなあ、あ、でも制服事務所に置きっぱなし。どうしましょ。

「ねえ、樫さん。エリちゃんがどうなったか、聞いてる？」

「うん、暫く隔離なんだって。やっぱり、触れ合える人は少ないし、相澤先生みたいに個性を強制的に止められる人もいないから」

「そんな……」

「しようがない、と私も思うよ。だってまた個性で人を戻しちゃうたら……傷つくのはエリちゃんだから」

「そうだよね……」

「だから、退院したらデクくんもみんなと一緒に迎えに行こ？きつとエリちゃんもそれが嬉しいよ」

一夜明け、私たちは朝食の後入院着のまま病院の休憩室でジュースを片手にエリちゃんのことについて話していた。デクくんは一番心配だろうし梅雨ちゃんやお茶子ちゃん、えーくんも同様。通形先輩と波動先輩はいま天喰先輩の病室に行ってる。なんだかんだ天喰先輩がインターン組のなかで一番重症だ、えーくんもこの後行くって言ってるし私もいくべきかな。

「ここにいたか」

「緑谷少年、ちよつと」

「ナイトアイ、オールマイトも！」

「おーれーもー！いる！ってね！」

「通形先輩、昨日はお疲れ様でした」

「樫も！大活躍だったじゃないか！」

私たちの反省会に入ってきたのはサー・ナイトアイにオールマイト、さらには通形先輩。このメンツでデクくんってことはワンフオーオールのことかな。お話があるからおいで、というオールマイト先生

の言葉で何となく察しがついたらしいデクくんがちらつと私を見るけど、それは私が首を突っ込む話じゃないかな、デクくんだけだよ。私は、待つてるからね。ひらひらと私はデクくんを送り出す、もちろんにつこり笑うのも忘れずに。

デクくんはそれで伝わったらしく、頷いてジュースを一気飲みするとゴミ箱に捨ててからオールマイト先生たちについていった。なんなのかしら、と梅雨ちゃんが何時ものように口元に指を立てながら首を傾げているけど、オールマイト先生はデクくんの個性の使い方の師匠なんだよ、と嘘と真実を混ぜ込んで教えるとそうなのね、と納得した様子。いや、思ったことは口に出すと散々公言している彼女のことだし、何かを察して飲み込んでくれたのかもしれない。察しが良くて助かるな、今度ゼリーを作って差し入れてあげよう。

「ああ、いたか樫。ちよつと」

「あれ？今度は相澤先生？」

「こんどは？」

「さつきオールマイトとナイトアイがやってきて緑谷ちゃんを連れて行っっちゃったのよ」

「なるほどな」

それでどうしましょうか、となっていた私たちの所に現れたのは相澤先生、輸血の点滴はなくなっていて、昨日いたリカバリーガールから治療を受けたらしく首の包帯も薄いものになっている。今度は私に用なのかな？どうしたのかな。

「まずお前らに伝えておくべきだと思うから言うが、エリちゃんの目が覚めた」

「ホントですか!？」

「良かったじゃねえか！」

「よかった〜」

「ええ、嬉しいわ。ケロ」

「それでだな、目覚めてからずっと樫を探している。お前ヒーロースーツ残していっただろ。服だけあったせいで個性でお前が消えたんだと思っ込んでいる、会ってやれないか？」

「!!会います！」  
相澤先生の言葉に、私は一も二もなく頷いた

エリちゃんが目を覚ました。相澤先生のその言葉を聞いて私たちは揃ってソファから立ち上がる。だけど相澤先生は全員を会わせるわけではなくエリちゃんが探しているという私だけを会わせるつもりらしい。万が一個性がぶり返した場合どれほどの速さで戻るかわからないからだそうだ。先生が止めても、間に合わないかもしれないと。

「そっか……ならしゃーねーわ。希械、エリちゃんの事頼んだぜ」

「そうね、大勢で押しかけても怖がらせちゃうだけだわ」

「後で大丈夫そうか教えてね！」

「うん、ごめんねみんな。相澤先生、行きます」

「ああ、わかった。ついてこい」

私は自分の分の缶ジュースを飲み干して缶を握りつぶし、飴玉サイズまで圧縮して口の中に放り込んで飲み下す。たまーにこれ中身入った状態でやってぶしゃーってなっちゃうんだよね。中学時代の時スポーツドリンクでやって上半身ベッタベタになって下着が透けて……いやこれどうでもいい話だ！今はエリちゃん！

彼女が覚えているのは目を出した私なのでピンで髪を分けつつ先に行く相澤先生についていくと、エレベーターで上の階、小児科病棟じゃなくてどうやら特別病棟にエリちゃんの部屋は位置してるみたいだ。最高層の階までたどり着くと壊理と書かれた部屋に相澤先生はたった。こんな漢字で書くのか、オーバーホールが野望のためにつけた当て字か知らないけど、あまりいい意味じゃないかも。

部屋の前に立つとにわかになが騒がしいことに気づく、落ち着いて、大丈夫だよ……ゆっくり息を吸って……？エリちゃんに何かあったの!私はずっとをせずに急いでドアを開ける。中ではエリちゃんを囲んで医師や看護師がせわしなく動きながらエリちゃんに声をかけていた。

「ハッ、ハッ……アッ……ッ!!!」

「落ち着いて、貴方を傷つける人はいないわ。ゆっくり、ゆっくり息

を吸って……」

中にいたのは病院着に身を包んだエリちゃんが苦し気に胸を押さえて呼吸をしているところだった。涙がにじんだ瞳から雫が落ちる。これ、過呼吸だ！エリちゃんの瞳が私を映すと同時に、彼女は泣きながら私に手を伸ばした。医師や看護師さんが私に目を向けて、私は彼女らにどいてもらって膝をつきエリちゃんを胸の内に抱きしめる。膝の上に改めて抱きなおし、とん、とんと背中を叩いてあげていると不規則だった呼吸が落ち着いてきた。呼吸が完全に落ち着いてきても、彼女は私の胸から顔をあげようとはせず、必死に私にしがみついていた。

「……原因は？」

「……おそらく心因性です。目覚めた時は落ち着いていましたが、あのヒーロースーツを見てしまったからパニックを起こして……。相澤さんが出て行ったときはまだ混乱しているだけでしたけど、段々と酷くなって過呼吸に移行しました」

「じゃあ、私が原因で……？」

「正確には、貴方がいなくなったのが原因です。どうやら、エリさんにとつて貴方は唯一の安全な人間……そう捉えているのかと」

そんな……頭がグルグルと混乱してきた。私の胸の中でぐずるエリちゃん、助けられたと思つてた……けどそれは結局独りよがりで彼女はまだ闇の中にいるんだ。なんで、と考えるすぐに原因が思い当たった。私はエリちゃんが知っている中で唯一彼女の個性が効かない人間なんだ。相澤先生は彼女の個性を消せるけど、彼女はそれを知らないし……。だから、私がいなくなったせいで彼女はもし個性が発動したらという恐怖におびえ続けることになってしまった。昨日、救急車に乗る前に一人個性で少し巻き戻してしまったことも影響しているかも。まずい、どうしようもない……。

「参ったな……」

「暫く落ち着くまで様子見を。大人に囲まれてはまたぶり返すかもしれない、白衣も怖がっているのだったん私たちは外に出ます、何かありましたらナースコールを。すぐに駆け付けます」

「頼みます」

頭を掻く相澤先生を残してお医者さんと看護師さんが心配そうにしながら部屋を出ていく。残された私と相澤先生はまずいことになった、と目で意思疎通をしてエリちゃんを見る。理由ははっきりとわかる、決定的な一打は私が打ってしまった。エリちゃんを助ける為に、別の迷宮に彼女を放り込んでしまった。ああ、なんて情けない。不甲斐ない……。

「……ごめ、なさい……ごめんなさい……!」

「どうしたの？エリちゃん、私は怒ってないよ。ごめんね、いなくなつて。怖かつたよね……」

「ち、ちがう……!おか、……ん、また、戻しちゃつたつて……思つて……!」

「だーいじょーぶ、私は平気。私は戻ってないよ、どこも昨日のまま」

嗚咽をこらえながら私を見上げたエリちゃん、そのルビーのような大粒の瞳からまたポロリと涙が落ちる。ベッドの傍らにあつたタオルでエリちゃんの顔を優しく拭つてあげる。分からない、このまま甘えさせ続けていいのか、それとも心を鬼にして突き放してあげるべきなのか。傷つき続けたこの子が今私だけを頼りにしてる状態で、私だけおめおめと自分の居場所に帰るべきなのか。

おかあさん、とまた私を呼びかけて慌てて口をつぐんだ彼女。やっぱり、私と母親を重ねているのか。また、ということはきつとこの子は覚えてるんだ、両親を戻してしまったことを。本来なら行政で手厚く保護されるのが通例だ、特にエリちゃんの個性は所謂個性訓練が必要な類の個性、それを受けていないということはやはりオーバーホールは彼女を監禁していたということの証拠に他ならない。

「も、戻らない？ほんと……?おかあさんも、おとうさんも……私が……わたし、が……」

「うん、戻らない。だから、もつとくつついても大丈夫だし、一緒にいても、平気。もしまた個性が出ちゃつたら、私が昨日みたいに助けるよ」

「そうなる前に俺が抑える。エリちゃん、もう大丈夫だ」

結局私は相澤先生とアイコンタクトをして彼女を甘えさせる、依存させる方向へ舵を切らざるを得なくなった。優しく声をかけた相澤先生を見て、少し警戒気味の空気を醸し出し始めた。私は彼女に言い聞かせるように相澤先生を紹介した。

「この人は相澤先生っていうの。個性を消せる凄い人、私よりすごい人なんだよ。もしエリちゃんが個性が出ちゃっても、すぐに止めてくれるわ。私より苦しくないかも」

「……………」

「こりやすこし時間かかるかもな…………」

相澤先生が笑った瞬間、エリちゃんは私の入院着を強く握りしめて身を固くした。ま、まあ中々怖いもんね相澤先生の笑顔……。それにエリちゃんは相澤先生が個性を止められるって言ってもその現場を見たことがないから何とも言えないのか……。結局私しか今は頼れる人がいないのかな…………。

「え、と…………あの…………緑の人と金色の人は…………」

「ん？デクくんと通形先輩のことかな？この二人？」

「そ、そうー！げ、元気、です、か…………？」

「元気だよ、大丈夫。エリちゃんに会いたって二人とも言ってるよ。エリちゃんが元気になったら会おうね」

「…………うん」

通形先輩とデクくんの写真を投影すると頷くエリちゃん。優しい子だな、と思った。私なんかじゃ想像もできないくらい酷い目にあつてなお、他人のことを心配してくれるなんて。ゆっくりと彼女の頭を私の手袋につけた手が撫でる。安心するように瞳を閉じた彼女を見て、ほっとした。先々の不安は絶えないけど、それでもまだ希望はあると、そう思うから。

「…………先の予定の組みなおしだな。樫、どうしたい。このまま離れるという選択肢もある。個性の訓練が出来るようになるまでは俺の元で監督することになるだろうが…………」

「そんなの、決まってるじゃないですか。ヒーローなら、いえ…………」



ヒーローじゃなくても、この子を見捨てたりなんてしませんよ」

「だろうな。校長にどう報告したものか……」

「その必要はないのさー!」

「こ、校長先生!？」

「……くまさん?」

「クマなのかネズミなのか……その正体は校長さー!」

驚いた、いつの間にかドアをすり抜けたとしか思えないくらい自然体で校長先生が私が腰かけているベッドの枕の上に出現している。唐突に表れた校長先生にエリちゃんがまた怖がるかと思っただけ、見た目がぬいぐるみっぽい、というか動物その物な校長先生に少しだけ興味を示してくれたらしい。不思議そうな顔で、校長先生を見つめている。

「すまないね!病院から連絡を受けて文字通り脱兎の勢いで駆け付けたのさ!エリちゃんを受け入れることは全く問題ないのさ!見る限りエリちゃんは君と一緒にだと安心感を覚えるみたいだね!つまり」

「つまり?」

「学校に連れてきて一緒に授業を受けるのがベターだね!個性に関しては……もう今その子に暴走するだけのエネルギーはないのだろう?」

「……それは私が見た範囲での話です」

「病院を舐めない方がいいのさ。個性由来のエネルギーの計測装置なんて今の時代どの病院にも備え付けられてる。それがこの子が昨日入院してから都度7回、検査が行われて結果はゼロ。つまり安全ということさ。リカバリーガールとも相談したが、今その子に必要なのは安心を覚える相手と、優しい環境。敵と思える人がいない環境だよ」

「白衣を見て怯えるんじゃない、病院に置いておく方が危ない。かといって個性の調節を覚えさせずに里親に預けるわけにもいかない。そして、その子が一番頼っているのは個性が効かないアンタ……ヒーローやっつれば間々あることではあるけどね」

白衣を脱いだリカバリーガールが入ってきてやれやれと言った感

じでため息をつく。薄々気が付いてきた。エリちゃんは、私から離れようとしなない。病院の設備その物に怯えてるような雰囲気だった。白衣を怖がり、お医者さんや看護師さんから目を背け、相澤先生やリカバリーガールといった大人に身を硬くして震える。例外は、私と多分、デクくんと通形先輩。

エリちゃんは今、数少ない例外を除いて全部自分を脅かす敵に見えてしまっている。選択肢は、ない。いや、ありはするし相澤先生も言外に首を突っ込み過ぎるなど警告をしてくれていた。リカバリーガールも遠回しに荷を下ろせと言った。けど大人たちの話を聞いて私を見上げるこの子を……どうしても見捨てるという選択肢は出来なかった。

「いきなり人が沢山いる環境に連れて行っても大丈夫でしょうか？」

「そうだね、そこが懸念だ。登校時間をずらすか、別の方法を考えよう。寮に行ってみての反応次第だね」

「校長、性急すぎます。合理的じゃない、楪の負担が大きすぎる」

「全く以てその通りだ。親御さんへの対応もある。ヴィラン連合が出ただろう？その件で上から警備案の見直しとシステムの全点検を命じられてね、一旦3日ほど休校になる。その間にやってみて対応を考えるしかない」

校長先生にしては行き当たりばったりな対応に思える。だけど、それしか方法がないんだ。校長先生の個性、ハイスペックからしてその対応しか出ないんだったらエリちゃんの置かれてる状況は私が考える以上にまずいのもかもしれない。健康状態は両手両足の包帯の下にあった注射器とかメスの切り傷、これはリカバリーガールによって治癒済み。低栄養、こちらでも軽度なので自宅療養で問題ないらしい。あとは精神面……やってみるしかないよね。

「ごめ……んなさい……私のせいで」

「それは違うよ。エリちゃんのせいじゃ絶対ないから。分かりました、私じゃなければダメだとしたら、私がしなければならぬことです。けど、私では責任が取れません。未熟者ですが、どうかサポート

のほどをお願いします」

「勿論なのさ！というか本来ならすべて大人の仕事なのさ。君たちに頼らざるを得ない情けない大人を許して欲しい。取り急ぎどうかするから、君はエリちゃんのことだけ考えて欲しいのさ。煩雑な全ては私たちがやる」

校長先生が言うには先ほど既に学校内の職員でエリちゃんのことには周知されていて、私が関わらないにしろ雄英でエリちゃんを引き取ることは決定事項だったらしい。そのうえで私が関わるか関わらないかというところだったのか。不安そうに自分を責めるエリちゃんにそれは違うよと否定して私はすべてを引き受けることにした。やってやろうじゃない、人を助ける為にヒーローになろうというのに小さな女の子一人救えないでヒーローとはおこがましい。私の力が届く限り、頑張るのが筋というものだろう。

「エリちゃん、いま私がいる場所にはデクくんや通形先輩、それにたくさんの人たちが一緒に暮らしてる。はじめは怖いかもしれないけど、皆優しいし、エリちゃんを傷つける人じゃない。私と一緒に暮らしてくれる？」

「……ん」

不安げに私を見つめるエリちゃんに優しく問いかける。彼女がちゃんと理解しているかどうかわからないけど、彼女は私の目を見てこくりと頷いてくれた。ゆっくりでいい、ゆっくり、少しづつ……前に歩いていこうね。それまでは私が、貴方の手を引いて、守っていくよ。よろしくね、エリちゃん。

## 文化祭編

### 85話

「それで、暫く女の子の面倒を見ることになったの」

『なるほどなあ。希械、その女の子の個性っていうのは無機物が混ざった異形型なら効かないのか?』

「多分、だけどね。お父さんとお母さんは私とおんなじだけどお父さんは手と骨格で、お母さんは足と内臓半分でしょ?どれくらい生物だったら効かないとか実験もおいそれとできなくて」

『お父さんとお母さんは反対しないぞ。ただ、子供の面倒を見る、世話をするっていうのはお前が考えているより遥かに大変だ。一人でやろうとするんじゃないやなくて必ず周りを頼りなさい』

「うん、そうする。ありがとう」

エリちゃんの病室にて私は携帯に個性で接続して電話を両親にかけた。エリちゃんに話を聞かれても彼女は自分を責めるだけだと思うので、脳内で完結するように話している。自前の声帯は使っていない。結局エリちゃんと私は一緒に暮らすことになった。寮のみんなにもそれは今相澤先生が話していて、不安を持ったりとか反対する人がいれば私の部屋は引き払われて教員寮にお引越すことになる。逆に受け入れられた場合は相澤先生が管理人室に常駐することになるのかな。

その他学校関係などは今校長先生がフルスペックを發揮してどうにかしてるみたい。健康管理はリカバリーガール、栄養管理はランチラッシュ、教育、お勉強に関してはプロしかいないので私が頑張れば大丈夫でしょう。ただ、ご飯をなぜ食べられないか尋ねたら前に、ご飯を食べたら眠くなって寝ちゃったら……これ以上は言いたくない。オーバーホールを許せない理由がまた一つ増えただけ。

私が持ってきたものは大丈夫みたいで、トーストした食パンにバターといちごジャムを塗ってあーんしてあげたら食べることができた。目の前で調理すれば信用できるのかもしれないね。食も細かいし、

食パン1枚でお腹いっぱいだそう。小分けにしてカロリーを確保したほうがいいかな。お医者さんと要相談。私がついていいなら私を作るけど、味や栄養面を考えたらランチラッシュ先生なんだよね……。

「ん、良く似合ってるよエリちゃん。かわいい」

「……ん」

両親にエリちゃんのことを報告し終えて電話を切った。一回電話をするために私が離れて見たんだけど、私の姿が見えなくなるのがまじいみたいですぐにパニック発作が起きてしまった。部屋の中とかなら一回離れても平気みたい。だから一旦準備のために寮に戻ったりとかは出来なかった。なので私は相澤先生に病室から制服を持ってきてもらうようにお願いして今そこで着替え、エリちゃんは病院の売店で売っていた子供用のTシャツにスカート姿だ。可愛いとは言ったけど、もうちょつとマシな服を着せてあげたいな、無地だし。

エリちゃんは……笑わない。私と接していても一度たりとも笑顔を見せない。見せるのは不安げな表情や、泣き顔……笑うことができないのかどうかはまだ、分からないけど。いつかその顔を笑顔にしてあげられたらな、と思う。エリちゃんはこのまま退院、週に1度雄英の近くにある小児科の人が往診にくる。トントン、とドアがノックされた。

「希械、荷物持ってきたぜ。緑谷も今いっしょにいる。入って大丈夫か？」

「エリちゃん、デクくん来たよ。会いたい？」

「……ん」

「入って平気だよ」

どうやら病室の前にはいるのはデクくとえーくんの様子。デクくんが来てくれた、とエリちゃんに教えてあげると彼女はこくりと頷いた。入室を促すと静かにドアが開いてデクくとえーくんが中に入ってきた。えーくんには私の部屋の荷物を纏めて欲しいってお願いしたので片手には私の鞆が下げられている。

「エリちゃん、こんには。まだ自己紹介してなかったね。僕は緑

谷出久、ヒーローネームはデクって言うんだ。好きに呼んでね。これからよろしく」

「俺は切島鋭児郎！希械の幼馴染だ、困ったことがありや何でも頼ってくれ！よろしくな、エリちゃん！」

「……デク、さんに、えいじろー、さん」

「うん！」

「おう！」

ぼそり、とたどたどしく二人の名前を呼んだエリちゃんに二人はニカツと笑って返事をする。デクくんをじつと見つめるエリちゃんが彼の手を見つめているのに気づく。デクくんもそれに気付いて膝をついてエリちゃんに向かって手を差し出した。エリちゃんはその手を両手で取って、確かめるように2度、3度と握ってから離す。そのあとぴやつと私の傍まで戻ってきちゃったけど私だけに安心感を覚えるわけじゃないっていうのが今証明された。

「ごめんねえーくん。荷物頼んだりして」

「気にすんなよ。相澤先生にいろいろ話聞いた。寮の皆も納得して、爆豪もなんも言わなかったんだと。帰ろうぜ」

「そっか……うん、そうしよう」

ぴつとりと私の足にくつつくエリちゃんを抱っこして、私たちは病室を出る。やっぱり外は不安みたいで顔を私の体につけて動かなくなってしまう。雄英専用のバスがすでに病院の前に止まっっていて、相澤先生や通形先輩や天喰先輩、波動先輩は既に待ってた。通形先輩がエリちゃんに声をかけようとして、彼女にそんな余裕がないことに気づいてやめた。天喰先輩も波動先輩も心配そうだ。

バスに乗り込んで、エリちゃんを窓側に座らせてシートベルトをつける。涙で飽和した瞳を不安そうに揺らすエリちゃんが安心できるように頭を撫でていたら、運転手さんが気を利かせてくれたのか驚くほどゆっくりかつ滑らかにバスは出発し、雄英を目指して進んでいった。

バスがゆっくりと雄英の門の前に留まる。エリちゃんは緊張しっぱなしで疲れてしまったのか、道中でうつらうつらとして、最終的に

は私にもたれかかって眠ってしまった。すうすうと寝息を立てる姿は年相応、いやそれ以上に幼く見えた。ただ、私に触れてないと不安なのか服の袖をずっと掴んでいて、心の傷の深さを改めて見せつけられる形になってしまった。

学校についたので起きないように横抱きで抱っこした状態で立ち上がる。若干かがみながらえーくんの手を借りてバスを降り、落ち着いたらまた会いに来るんだよね、という先輩方と別れて寮へ私たちは歩いていく。道中で気温が変わったせいかエリちゃんは目を覚まして見慣れない外の景色にきよろきよろとしていたが、私やデクくんが一緒なせいなのかそこまで不安そうではない。むしろ、明るい外の景色に興味を示しているように思える。

色々あつたせいで時刻は既に夕方、校長先生の配慮で事件関係のアレソレは明日以降に回された、降ってわいた休校だから、授業については心配することはない。むしろエリちゃんが慣れてくれるかどうかの方が大事だと思う。出来るだけ普通科やサポート科、経営科の寮を避けてヒーロー科の寮へ進んでいく。まだ子供がヒーロー科の寮に住むという話は周知されておらず、要らないあれこれを持ち込まないようにするためだ。休校明けに校長先生から全校集会で説明がなされる。

「ここだよ、エリちゃん。今日から暫くここがエリちゃんのお家だね」

「おうち？」

「うん」

そうしてついた1—Aの寮を指さしてエリちゃんに説明すると、ちよつとだけそわつとした雰囲気でした。私たちの寮を見つめている。期待2割、8割不安って感じかな。やっぱり少し性急すぎる気がするけど、病室から出てる方が病室の中よりも少しだけ明るいように思える。少なくとも、何かしらがあるたびに震えたり、白衣の人を見るたびに目をぎゅつと閉じて頭を抱えてうずくまるみたいな様子はない。ちちゃんといろんなところに目を向けている。

お茶子ちゃんがドアを開けてくれて、先にデクくんや梅雨ちゃんが

入ってみんなに帰ってきたことを知らせる。案の定、ニュースで死穢八齋會のことはやっていたので中に入った瞬間峰田くんのやつらが帰ってきたああああ！という叫びが聞こえて私は苦笑する。エリちゃんは一瞬驚いてびくつとなつてしまったが、私のお友達が帰ってきてくれて嬉しいって言ってるんだよ、と伝えるとこくと頷いてくれた。

えーくんが両手がふさがってる私の代わりにドアを開けてくれるので玄関に滑り込み、エリちゃんの子供用の靴を片手で脱がしてあげてから私の足もう履きに変形させて共用スペースに入ると、既にデクくんとお茶子ちゃんに梅雨ちゃんはクラスの皆に囲まれてやんやんやとされており、砂藤くんがガトーショコラをデクくんの口に突っ込んだりしてる。

「あ、希槭ちゃんおかえり！……その子が、エリちゃん？」

「うん、ただいま三奈ちゃん。そう、エリちゃんだよ。エリちゃん、この人は三奈ちゃんっていうの。私の親友、一番仲のいいお友達だよ」

「みな、さん？」

「はーい！アタシ芦戸三奈！よろしくね、エリちゃん！ヤオモモがハーブティー淹れてくれるって。砂藤のガトーショコラと一緒に食べちゃいなよ！エリちゃんも食べるよね！」

「がとーしょら……」

「チョコレートの菓子だよ。お夕飯前だから私と半分こしようね」

病院から買ってきた紙パックの麦茶にストローを刺してあげてエリちゃんに飲ませてあげる。エリちゃんの食の細さはすぐにどうこうなるものではないので朝昼晩だけでなく間食も挟むように言われている。私はガトーショコラ一本程度ならぺろりと入るけど、他人が作ったものをどこまで受け入れることが出来るか分からないので、同じものを私が先に食べることにする。高級そうなお皿の上に載った一切れのガトーショコラとティーカップを百ちゃんが運んできてくれた。私はガトーショコラをフォークで切り分けてから、先に私が食



べてみせる。

流石は砂藤くんのケーキ、美味しいな。エリちゃんが私が食べたことで警戒心がなくなつたのか私が差し出したフォークに刺さつたガトーショコラを啄むように口に入れた。どうやらお口にあつたらしく、無表情ながら瞳が少し輝いた。やるじゃん、と私が砂藤くんに親指を立てると彼はちよつと赤くなつて頭を掻く。

「しかしまあ何で言つてくれなかつたんだよ。俺たちニユース見てひっくり返つたんだぜ？」

「わりい、カンコーレー敷かれててよ。色々あつたんだ」

抱っこからソファにぼふん、とエリちゃんを下ろして百ちゃんが淹れてくれたハーブティーをご馳走になる。みんな、意図的にエリちゃんに視線を集めないように目を逸らしてくれてる。授業で習つた子供への対応の仕方、一度に殺到しないということを実践してくれてるんだ。エリちゃんはみんなが自分を気にしないようにしてくれてるのを分かつてないけど、思ったよりも落ち着いている。その視線の先にあるのは、我関せずとソファの上で携帯を弄っている爆豪くん。

彼は視線に気づいたのかエリちゃんに目を向けると立ち上がる。そしてずんずん、とこちらに歩いてきた。エリちゃんがそれに身を固め、上鳴くんがおい、と制止しようとするのを無視して爆豪くんはしゃがみ込んでエリちゃんと視線を合わせた。その瞳にいつもより棘がないことに私は気づいてふふつと笑つてしまう。私に剣呑な目を向けた爆豪くんはすぐにそれをやめて

「ゆっくりしてけ」

とだけ言つてその場を後にした。エリちゃんは何が何だか分からないのかぼかんとしてるけど、爆豪くんをよく知っているデクくんの驚愕の表情と、クラスメイト達のありえないものを見たような視線が一気に爆豪くんを貫いている。爆豪くんはそれを気にすることなく、どこに行くのかと尋ねる上鳴くんに部屋に戻るとだけ返して爆豪くんは去っていく。

もともと彼はあまり共有スペースを利用しないので、今日はエリちゃんの顔を確認しにわざわざ待っていたんだろう。細かい所をよ

く見てる彼のことだから、エリちゃんの状態に納得がいったからこそ言葉少なく歓迎して、怖がらないように去っていった。うーん、スマートフォンだけど分かりづらいね。

「揃ってるな」

「相澤先生」

「すまん、色々あってな。とりあえず今日の所はランチラッシュが飯を用意する。ただ、怖がるようだったら教えてくれ。風呂に関して協力してやって欲しい。樫、明日か明後日にお前の部屋の壁を取っ払って二部屋繋げる。悪いがもう一度片付けを頼む」

「分かりました。さっき砂藤くんのカトーシヨコラを食べたので私と一緒に同じものを食べればきつと大丈夫です、ね？」

「……おいし、かったです」

「だって、良かったな砂藤！」

「お、おう！俺の菓子でよければ何時でも作るぜ！」

玄関の扉を開けて入ってきたのは相澤先生、どうやらエリちゃんのお夕飯についてお知らせに来てくれたみたい。多分、同じものだったら私に先に食べることで警戒が解けると思うと話したら相澤先生も安心してくれたみたいで、表情が緩んだ。エリちゃんはカトーシヨコラを気に入ったらしく、美味しかったと言ってそれに反応した上鳴くんが砂藤くんの背中を叩いている。

エリちゃんの入寮初日は思ったよりも穏やかに終わることが出来そう。私は右耳からハ口を取り出して大きくする。エリちゃんはそれに目を丸くして驚いているけどお喋りを始めたハ口に興味が沸いてきたらしく視線が一気に釘付け。これはエリちゃん用のハ口を作った方がいいかな、と私はひそかにたくらむのだった。

## 86話

「んう……」

「ん、エリちゃん起きた？おはよう」

「お、おはよう、ございます」

『オハヨウ！オハヨウ！』

私のベッドの上で、エリちゃんが目を覚ます。枕元に鎮座していたハロがエリちゃんに挨拶をしている。私はエプロンをつけて朝食を準備しているところ。昨日は結局エリちゃん、お夕飯を半分くらい食べてお腹いっぱいになっちゃって、そのあと私たちと一緒に風呂に入って私が添い寝する形で眠ったんだ。私はやることがあったからそのあとに起きて相澤先生やランチラッシュとエリちゃんのことについてリモートで会議していた。

昨日のこともあって、ランチラッシュが作ったものを運ぶより私が目の前で調理したもののほうが安心して食べられるだろうと私が提案したのが通ったのでランチラッシュが献立を決めて私が作る形に落ち着いた。エリちゃんは、病院での様子とは打って変わって怯えた様子はなかった。個性エネルギーも相変わらず検知されず、私の部屋に漂っているホログラムを興味津々で触ったりしていた。けどやつぱり、無表情で、笑顔がない。

エリちゃんはどうも私に甘えられる状況に安心感を覚えると同時に申し訳なく思っているようでお行儀よく、自分で何もかもをしようと頑張っていた。着替えも、お風呂も。その行動の一つ一つに「嫌われたくない」「捨てられたくない」という感情があって、彼女の世界の大部分を私が占めてしまったことに胸がちくりと痛んだ。

「ご飯の前に、顔洗っちゃおうか。あと、今日は髪の毛整えて……服も考えないとね」

エプロンをかけたままの私はベッドの前でしゃがみ込み、エリちゃんと顔を合わせる。髪越しに私と目が合ったエリちゃんは起きたばかりで眠い目をシパシパさせて、こくりと頷く。寝ぐせでぼさぼさの髪の毛を手櫛ですかして整えてから私はエリちゃんを抱き上げて共

用の洗面所におりていく。途中であつた百ちゃんと合流して顔を洗ったエリちゃん。ご飯を用意してくるから百ちゃんと待てる？と聞いたら不安そうに頷いてくれたけど、パニック発作の兆候が見られたので一緒に連れて帰ることにして、ついてきてくれた百ちゃんに遊んでもらいながら私は朝食を仕上げてまたエリちゃんと一緒に共用スペースにおりていく。

「ごめんね百ちゃん、ご飯持ってきてもらって」

「いえ、当然のことですわ。べつたりですのね」

「うん。甘えてくれるならいくらでも甘えて欲しいくらい。普通なら、お母さんとかお父さんの役割なんだよね……私がやって、いいのかな」

「希械さんらしくないですわ。今のエリちゃんは、希械さんしかいませんの。私たちも支えますから、頑張りましょう」

「ありがと、百ちゃん。オムレツあげちゃう」

「ふふ、有難く頂きますわ」

本日の朝食は、トーストした食パン、野菜のオムレツ、角切りリンゴにヨーグルトをあえたもの。オレンジジュース。エリちゃん用はどれも量は少ないけど、食べられるなら私の分を分けてあげればいい。お盆に乗った余りのオムレツは百ちゃん用だ。ちらほらと起きてきたみんなが共用の席について、配膳ロボットが持ってきた朝食をみんなで配っていた。片手でトレイを持った私はエリちゃんを席に座らせてその前に朝食を並べる。

「おはよ、エリちゃんいいもん食ってんなー。うまそう」

「ランチラッシュの方が美味しいよ？上鳴くんは和食なんだ」

「女子の手作りってのがいいんだろー？なんか今日味噌汁飲みたくてよ」

「またそういうこという。そんなんだからぞんざいに扱われるんだよ。そのうち峰田くんみたいになるよ？」

「オイラが悪い手本みたいないい方やめろよ！」

「じゃあエリちゃんの前で今までやってきたこと言えるの？まあ言ったら私の手が何をするかわからないけど」

きよとん、と峰田くんを見つめるエリちゃんに峰田くんはうつ…とバツが悪そうな顔になる。良かったー、これで嬉々としてセクハラ行為を自慢するようなであれば黒焦げにしてたよ、うん。電動のドリルとか鋸とか使ってまで女子風呂覗こうとしてたんだから私たちからの扱いが底辺になっちやうのはしょうがないと思うの。エリちゃんは好き嫌いはないのかな？野菜のオムレツは食べれるみたいだし、半分にしたトーストも食べれたね。

いつもは私、自分の部屋で食事を取ってたんだけど、これからはエリちゃんが他の人と交流を持つために共有スペースでご飯を食べることにしたの。たまに三奈ちゃんとかにお願いされて下でご飯を食べることもあったけど、自分で作って自分で食べる以上自室の方が片付けが楽なもので……。

「ん？もしかしてエリちゃん、リンゴ好き？」

「……甘くて、美味しい」

「そう、じゃあおやつはリンゴで何か作ろうか」

私と百ちゃんに挟まれたエリちゃん、ペースはゆつくりではあるものの食べ切ることには出来て、デザートのリンゴのヨーグルト和えに取り掛かった。リンゴを口に含んだ瞬間、きらきらとエリちゃんの目が輝いて、リンゴが好きなんだとわかった。エリちゃんのこと少し知れて嬉しいな。

ご飯の後は歯磨きして、エリちゃんのやたらめったらに伸びた髪の毛をお風呂場で切ることにした。ばっさり短くすることも考えたんだけど、エリちゃんが私と同じがいいという可愛いことを言ってくれたのでロングに抑えて前髪や毛先をカットしてかなり整った感じに変えた。ぼさぼさしてた毛質も百ちゃんプレゼンツのお高いシャンプーとかコンディショナーとかその他もろもろのおかげでさらつやに変わっている。値段を聞いて目玉が零れ落ちそうになった。零れ落ちても作り直せるけど、メカジョーク！

「おおーエリちゃん可愛くなったねー！あ、私見える!? 見えないよね！ごめん！私葉隠透！服だけ浮いてたら私だから覚えてねー！」

「っ！?……っ?……っ?」

「エリちゃん、透ちゃんは透明なの。これも個性だよ。とっても優しいから大丈夫」

お風呂場の掃除を終えてお着替えも済ましたエリちゃんと一緒に共用スペースに戻ると可愛らしい普段着に身を包んだ透ちゃんが迎え入れてくれた。既に各々好きに過ごしていて、テレビを見る人や部屋に戻った人、様々だ。デクくんは残っていてエリちゃんが戻ってきたことを知ると微笑んでこつちを見ていた。透明な透ちゃんにびつくりして頭の上に疑問符が浮かんでいるエリちゃんの頭を撫でて私もデクくんの隣のソファにお邪魔する。

「えーくんはまた寝坊だなー？もー、休校で休みだからって」

「切島君、朝苦手だよね」

「起きるには起きれるんだけど、目覚まし時計寝ぼけて硬化して壊したりしちゃうの。スヌーズ3回目くらいで起きるから、1回目ですれやると寝坊しちゃうんだよ」

「そうなんだ、やっぱり個性柄色々あるんだね。エリちゃん、寮生活大丈夫そうではよかった」

「うん、すごくいい子だよ。ご飯も完食できたし！」

ハ口を膝の上に乗せて見つめ合っていたエリちゃんが自分の事を話していると気づいて私たちに顔を向けた。デクくんがテレビのチャンネルを弄って子供番組にする。初めて見るのか分からないけど、私たちが幼稚園のころからやっている息の長いアニメだ。エリちゃんは首を傾げながらもだんだんと前のめりになってアニメを見始める。ここら辺は年相応なのかな。

「今日はどうするの？」

「ずっと寮にいてもいいんだけど、一回学校の中に行こうかなって。人がいないし、それならエリちゃんが入っても大丈夫でしょ？」

「そうだね、僕も行つていいかな？」

「勿論。午後から行こうと思ってるから、適当な時間に連絡入れるよ」

午前中はとりあえず寮の中でみんなとコミュニケーションを取れたらな、と思う。そんな話をしているとえーくんが降りてきて、景気

のいい朝の挨拶をした後朝ごはんにがつつき始めた。みるみるうちに減っていく大盛りの朝食を見たエリちゃんが目を白黒させている。山盛りのご飯を平らげたえーくんが食器を片付けてエリちゃんにニカツと笑ってから歯磨きに行く。

昨日と朝、エリちゃんを観察してて気づいたんだけど、エリちゃんは自分から人に触れようとしらない。誰かから触れられるときも一瞬身を硬くして一歩引く。エリちゃんと仲良くしたいクラスのみんながコミュニケーションを試みているけど、あんまりうまくいってないのが実情。そりや、来てすぐだしっぱいっばいだと思うんだけど……。私から一切離れられない現状は少しまずい。1時間くらいは離れられるようにしたい。いざという時のためにも。

個性のせいかな……。「自分が触れると人が戻る」という意識が彼女が人と触れ合うことを拒んでいる……。そんな感じがする。ハ口を伸ばした脚の上に置いて撫でているエリちゃんを眺めながら私が考えを巡らせていると、私たちの寮の玄関が開いた。誰かが自主練にでも行ったのかな？と思っただけに入ってきたのはブラドキング先生だった。

「ああ、いたな。少しいいか、樫」

「あ、はい。なんでしよう」

「あまり急ぎではないんだが……。B組をエリちゃんに紹介だけしておきたくてな。今学期から合同の授業が増える、おそらくお前はエリちゃんと行動を共にするんだろう。一気にB組の20人と合わせるより1日に少人数ずつ顔を見せておいた方がいいと思っただけ。イレザーに話は通してある」

「多分、大丈夫だと思います。周りを囲んだりしなければ怖がらない、はずです。昨日はA組の皆が気を利かせてくれたのでパニックは起こしませんでしたし。今朝も大丈夫でした」

子供番組が終わって、デクくんとハ口と一緒にソファの上で遊んでいるエリちゃんを見ながらブラドキング先生に了解をする。エリちゃんはどうかやら私が見える範囲にいれば平気で、多分四方八方を囲まれたりするとちよつとまずい。エリちゃんに手招きをすると遠慮

がちにとてとと私の所にやってくる。お友達がエリちゃんに会いたいって言ってるから会ってくれる？と膝の上に抱き上げながら聞くところくん、と頷いてくれた。

それを確認したブラドキング先生は待っていてくれ、と言って玄関の方に歩いていく。既に何人か伴ってきてたのかな？安心したように体を預けてくれるエリちゃんと待っていると先に歯磨きやら身支度を終えたえーくんがピシッとセットされた髪型で共有スペースに入ってきて私の隣に座った。ハロが飛び跳ねてデクくんの頭に着地するのをエリちゃんが拍手してみたりしてると――

「会いに来たぞA組い！」

「初っ端人選ミスだろこれ！」

「なんだって!？」

騒がしく部屋に闖入してきたのは物間くんだった。峰田くとスマホで何やら見ていた上鳴くんが思わずと言った感じで突っ込むけど、物間くんは意に介さず狂気的な笑いをしている。すつと私がエリちゃんの目を塞ぐと阿吽の呼吸でえーくんがエリちゃんの耳を塞いだ。物間くんは、まずい。まずいっていうか峰田くと並んで教育に悪い。口を開けばA組をこき下ろす彼の無駄に豊富な語彙をエリちゃんに学ばせてはいけない。

「とまあここまででは冗談だよA組。僕も流石に保護されてる子の前で優劣どうこう言うつもりはない。顔見せしに来ただけだ」

「急に落ち着きやがった」

「やっぱり病名のある精神状態じゃないかこいつ？」

「ごめーん、物間は最後にしようって話してただけど強引についできちやあって……その子がエリちゃん？」

その物間くんの後ろについてきてたのはB組のクラス委員長である拳藤さん、そして角取さんに鉄哲くん、あと泡瀬くんも一緒。5人だけかな？エリちゃんの目と耳を解放してあげるときよろきよると増えた5人を見て少しだけ不安そうに私の服を握ったエリちゃん。B組の人たちはしやがんでエリちゃんに視線を合わせて自己紹介、握手はまだちよつと不安みたいだけど大丈夫そう、かな？



「学校で会うかもしれないから、あつたら仲良くしてね。困ったこと、というかこれが迷惑かけたら言ってくれば回収するから」

「拳藤、君は僕のことを何だと思ってるんだい」

「雄英の負の面かな」

「言い得て妙だな！」

「お前は雄英の性欲魔人って呼ばれてるぞ峰田」

「僕の方がましだな！」

「誇る所そこなんだ……」

「せいよく……まじん……？」

「おい上鳴」

「わるかった」

一気に騒がしくなった共有スペース内の中心にいるエリちゃん、受け入れられているっていうことが分かってきたのか少しづつ言葉が増えてきたように思える。それで最初に言うことが上鳴くんが言った峰田くんのあだ名の一つなんだから複雑な気分だ。というか6歳の女の子になんて言葉言わせてるの上鳴くん？素直に謝ったからいいけど。

角取さんが個性で自分の角を飛ばしてエリちゃんの前でハ口を乗つけてふらふらさせる。エリちゃんはそれを見ていて、空を飛ぶハ口も楽しそう。B組の皆が帰るまで、その状況は続き、エリちゃんの緊張は程よくほどけていくのだった。

## 87話

「じゃあ、5回目のミーティングを始めよう。メリッサ、進捗を」

「うん、おじさまの身体データは揃ってきたわ。ただ、マッスルフォームとトゥルーフォームどっちで作ればいいか……」

「マッスルフォームの維持時間は30分だったな？トシ」

「ああ。だが無理をすればするほど時間は短くなる。全力で動くなら15分が限度だろう」

「なら全力戦闘は15分で想定したほうがいいですね」

夜11時、ベッドの上でハロと眠っているエリちゃんを気にしながら私は脳内通信でシールド博士、メリッサさん、オールマイト先生と会議をしていた。休校が開けるまであと二日、オールマイト先生の新ヒーロースーツのコンセプトだけは明確にしておこうという話になったからだ。

エリちゃんがいる生活はなんだか張り合いが出て楽しい。午後には学校を案内した時も見たいことない施設に興味深々だったから思ったよりもすんなりとここでの生活に馴染んでくれるのかもしれない。ついでにサポート科に顔を出してシールド博士とメリッサさんにエリちゃんを紹介したりもした。私の足元から離れなかつたけど、きちんと挨拶は出来たので満点かな。

「だったら両方に合わせて作っちゃいましょう」

「それが出来ればベストだが……既存の超圧縮技術でも可変は流石に厳しいものがある。構造が複雑すぎて強度が保てない」

「超圧縮技術もいいですけど、ナノ技術が実戦投入できそうなんです。F技術についてはまだまだ理論実証段階なんですけど……」

「ほんと!? ナノテクノロジーよね!」

「はい、メリッサさんのいうナノテクノロジーです。ただ、時間もうちよつとだけ欲しいんですけど……」

私の最近の研究テーマは一応対人威力を確立したビームから別方面へ移っている。それがシールド博士から提案されたナノテクノロジー技術、超圧縮のその先の技術だ。机上の空論だったけど、私の個

性で実戦段階までもつていくことが出来そうなの。もう一つの技術はまだできるかも？くらいの扱いなので封印中。いや私の個性でも暴走しかねなくて……危なすぎるんだ。

「とりあえずこれをフルガントレットに組み込んで実験してみたいんですが」

「いいと思う！私に設計やらせてもらえないかしら!？」

「お願いできますか？ナノテクの実物は明日か明後日にでも持っていきますので」

「まったく……君の個性がなければ不可能な作り方をしてるな。だがこれならトウルーとマッスルを行き来しても問題なさそうだ。希械くん、私にも実物を見せて欲しい。ヒーロースーツに組み込めるか試してみよう」

「了解です」

ナノテクで使うナノマシンの設計図を二人に送るとメリツサさんは気色ばんで設計に乗り出し、シールド博士は流出防止のために私の個性がないと作れない作り方をしているのを見抜いてため息をついた。ふふふ、既存の技術で作ろうとしたら専用の設備と滅茶苦茶な額のお金にながくくくい時間が必要だ。

それにたとえ設計図が流出してもコピーされて利用されるより私に対策を打つ方が早いようにしているのだ。何だったらこのナノマシンは私の号令で自己崩壊するように根幹部分の外せないところ、いわばブラックボックスと言われる部分にプログラミングを仕込んであるし。これを外すとただの金属の粉になるのだ。

そんなこんなで色々とおールマイト先生の意見を取り入れつつやいのやいのやっているとむず、とエリちゃんが身をよじった。起こしちゃったかと私が通信を繋いだままベッドに座る。立体映像が向こうにも届いているのでエリちゃんのこととは3人にも見えている。寝ぼけ眼で寝転んだまま私に向かって

「おかあ、さん……」

「うん、ここに居るよ」

「ごめん、なさい……ごめんなさ……」

「うん、うん……」

エリちゃんは、夜中にうなされる。昨日もそうだった、私の隣で眠りながら自分の両親にひたすらに謝っていた。フラッシュバック、両親の記憶が彼女を苛んでいる。個性の爪痕は、こんなにも深い。頭を撫でて声をかけると次第にエリちゃんの寝言は落ち着いていき、安らかな寝息を取り戻した。閉じられた瞳からツウ……と涙がこぼれる。それを拭って私は、沈痛な面持ちで博士たちに向き直る。

「……PTSDか」

「そんな、ここまでだなんて……」

「きつと、今日はお母さんの夢でしょう。昨日はご両親でした。何もできない自分が悔しいです」

「自分を追い詰めてはいけないよ、樗少女。ただ傍にいただけでもエリちゃんにとっては救いとなっているんだ。君はもう既に、彼女を救い始めている。続けて行けばきつと、彼女の笑顔が見えるはずさ。そのためにも」

「私が笑顔でいないと、ですね」

「その通り！」

投影映像のオールマイト先生がムキつとマッスルフォームに変わって指を立てる。そうだよ、私よりも急に生活の場所が変わったエリちゃんの方がずっと不安なんだ。私が笑顔でいないといけないよ。そろそろ終わろうか、とシールド博士の提案で今日の会議はここまでということになった。彼が主導するオールマイト先生のニューヒーロースーツは最新技術を惜しみなく使用する予定なので信頼性だけは損なっちゃいけない。実証は急ぎで、だけど丁寧に。頑張ろう。

「インターンについてだが、ヴィラン連合の出現を重く見てこれ以上は中止ということになった」

「それは……仕方がないですよ」

「だー……もうちつと先輩たちと一緒にやりたかったんだけどなあ」

翌日の朝食の後、そういえばインターンについてはどうなるのだろうか、とインターン組でエリちゃんと遊びつつ話し合っていたところにぬるつと相澤先生が出現して何事もなかったかのような口調でインターンの中止を伝えてきた。それは私たちにとっては半分予想できたことではあったけど、正直に言えば残念というほかない。だってまた中途半端ー！うう……職場体験に続きこれまでも……私、何かしましたか!?悪い事なんてしてないよ！

「そうね、残念だけど……ヒーローとして働くことができたわ。大きな経験を得たと思うの」

「そうやね！また落ち着いてきたらできますよね!?インターン！」

「ああ。少し時間は置くことになると思うが、出来るようにはなるだろう」

「そうですか！よかった……あ、そうだ。相澤先生。外出許可が欲しいんですが」

「……理由は」

「エリちゃんの服を買いに行きます。いつまでもこれじゃあ……」

私は病院で買いそろえた無地のシャツに無地のスカートを履くエリちゃんを先生にずいっと見せる。お料理の材料については学校から分けてもらえるようにはなったけど、エリちゃんは女の子なのだ。おしやれというレベルではないにしろ、無味乾燥な服じゃなく同年代の子たちが着ている服と同じものを着せてあげないといざ学校に通いだした時に仲間外れにされてしまうかもしれない。

「……俺が買ってきたのがあるだろ」

「それ本気で言ってます？これですよ、これ」

「相澤先生、さすがにこれはないと思うわ」

「あー……これ子育てに慣れてないお父さんのチョイスやね」

「……そんなに悪いか、これ」

「せめてミッドナイト先生に頼んでくれれば……」

私がつまんで取り出したのは無駄にフリルが付いてて、原色のピンクで、大きくG A N R I K I N E K Oがプリントされたトレーナーに、フリルだけで形成されたスカートだった。こっちも原色ピンクに

さらにスカイブルーが追加されて段々で色が変わっている。アメリカの子供服か？日本だと派手過ぎるよこれは。ちなみにエリちゃんに着的か聞いたらきゅつと眉根を寄せたのでやめました。

「仕方ないな。俺が付いていく、それでいいな」

「はー……ありがとうございます。エリちゃん、お出かけしようお出かけ。あ、下着店にも入りますけど大丈夫ですよね？」

「正気か？」

「普通に女の子なんですからそういうお店で選ぶべきでしょう。それに実は私も色々あつてですね」

「イヤ言うな、セクハラになる、俺が。ミッドナイトに頼むから待ってろ」

そうなのだ。心操くんのトラックの件で忘れていたけれども、私は今現在……ブラジャーとパンツのサイズがあつてない！ブラジャーはともかくパンツまで合わなくなったのはショックだった。だって……太ったつてことだもの！はくくく…… 私含む女子3人から指摘を受けた相澤先生は頭をガリガリとしながらも必要性を感じてくれたのか許可をくれる。そんなわけでは

「えーくん、ついてきてくれない？」

「荷物持ちか？任せろ！あーでも流石に女用の下着店は勘弁してほしいぜ……」

「じゃ、それは私が行くわ」

「わたしもー！」

「たくさん買うなら僕も付いていくよ。荷物持つくらいしかできないけど」

その場のノリでインターン組全員とエリちゃんのお出かけが決まる。エリちゃんはお出かけについてはあまり恐怖を感じてないのか、それともみんなが一緒だからか……こくりと頷いてそわそわしだした。私はそこら辺を跳ね回っていたハコを回収してイヤリングにはめ込む。準備してくるぜ！とえーくんとデクくんが部屋に戻り、私たちも、と言ったところで玄関が勢いよく開き、ミッドナイト先生が「エリちゃんの服を選べるんですって!？」と登場した。快く受けてくれて

有難いな、と思いつつヒーロースーツで行くのか、と若干不安を感じるのだった

「はああああ〜〜〜」

「希械ちゃんどうしたの？そんなにため息なんてついて……」

「……バストがワンカップ上がったの」

「羨ましいわ」

「出費がバカにならないの……被覆控除で何とかできるヒーロースーツはともかく、普段使いのやつ全部買いなおしだよ!?おかげで荷物……」

「成長期だもの、仕方ないでしょ。それ・に、貴方のプロポーションは問題ないどころか優秀よ。毎日努力してるのね」

こそつと梅雨ちゃんに耳打ちしたため息をつく。あああああ〜〜！予想はしてたけど！してただけど！ブラジャーもパンツも買いなおし！出費にして……イヤ言いたくない。えーくに持つてもらっているソレの数で察するべし。まだ大きくなるんだ……私。そろそろ止まってもいいと思うの。それはそうと！エリちゃんがすつつごく可愛くなった！白のシャツに赤い吊りスカート！シンブルながらもよく似合っているデザインだね！

「ミッドナイト先生、さすがですね」

「ふふ、みんなを選んで服気に入ってくれて良かったわ。これで暫くは大丈夫そうかしら？」

「そうですねえ。基本的な生活用品は校長先生から差し入れて頂いてますし、服はこれで揃いました。あとは……これで最後ですね」

「それは……白いハロ？」

私が腕の中から取り出したのは、デクくんが指摘した通り真っ白に赤い目をしたハロとそれがはまっているネックレスだった。エリちゃんがハロを気に入ってくれたのはすごく嬉しかったし、ずっと仲良くしてくれてた。だけど、このハロは私のハロでずっと彼女と一緒にいれるわけじゃない。だから、彼女のための、彼女の一番になれる

ハロを作った。

エリちゃんの髪と目で色をお揃いにしたハロ。性能は私のハロより下がるけど、これは万能であるべきというコンセプトで作った私のハロと違い、白ハロはエリちゃんの友達兼、護衛役なのでそっち方面に特化したのだ。つまりこのハロもサポートアイテムの区分に入る。白ハロの中にはエリちゃんを護衛するために作った外骨格「ギガンテス」が封入されている。万が一の場合白ハロの自己判断で外骨格を起動して中にエリちゃんを乗せ、飛行で離脱あるいは防衛行動をとる様にプログラムしてあるの。おそらく、狙われるかもしれないから。

「え……わたしの、ハロ？」

「うん。エリちゃんだけのハロだよ。白ハロ、起きて」

『オキタ！オキタ！エリチャン、ハロ！ハロ！』

「わあ……」

「よかったね、エリちゃん」

ネックレスをエリちゃんの首にかけてあげて、白ハロに呼びかけると、私の起動コマンドを認識した白ハロが起動してエリちゃんを認識し、挨拶をした。エリちゃんはそれに感嘆の声を上げた後に、ぐすと鼻を鳴らしてから……大声で泣き始めてしまった。私は慌てて荷物をその場に降ろしてエリちゃんを抱っこする。

「エリちゃん、どうしたの!?!ごめんね、気に入らなかったのかな……？」

「ち、ちがう……う、うえええん……」

「そうじゃないわよ樫さん、嬉しいのよ。どうしたらいいか分からなくて、泣けてきちゃうの」

私に力いっぱい抱き着きながら泣いているエリちゃんに動揺していた私は思わず慌ててしまう。でも、ミッドナイト先生がエリちゃんの様子を見て、断言してくれた。そっか……エリちゃん嬉しかったんだ。胸をなでおろした私が改めてエリちゃんを抱きしめる。その頬に私の頬をくっつけて、落ち着くまで待つ。周りの皆は、微笑みながらも怒ることなくそれを見守っていた。エリちゃん、私は……いや、私たちは貴方がとつても大事なんだよ。だから、貴方が立てるように



なるまでしっかりと私たちが支えていくからね。白ハロ、エリちゃん  
をきちんと守る様に。

## 88話

あつという間に10月になった。いろいろ吹き飛んだと思うんだけど、忙しすぎてそれどころじゃなかったの……休校の分訓練は過密になったし、勉強はフルスロットルだし、エリちゃんはかわいいし、研究は楽しいし。とにかく毎日がエブリデイだった。エリちゃんのことについては休校明けの全校集会で校長先生が話してくれて、まあ物珍しそうに見る人もいるけど表立ってやっかみを言ってくる人はいなかった。

エリちゃんはもともとが大人しい気質の子だったので、雄英の難しい授業と一緒に受けてる状態でも首を傾げるだけで静かにしていて、無声状態の白ハロと一緒に絵かきしたり、骨伝導のイヤホンで子供の教育番組を見てたりしてとつてもいい子だった。それと、白ハロをプレゼントした日から少しづつ私が離れても大丈夫なようになってきたの。

ただ、それも白ハロが一緒な場合だけで、私と白ハロ両方いなくなってしまうとちよつとまずい。発作とかが起こるまでタイムラグはあるけど不安神経症の兆候が見えたりする。ただ、それもかなり落ち着いてきている。栄養的にも安定してきたおかげがちよつとだけふつくらしてきて、子供らしい丸みを帯びてきたように感じるかな。

そして、私に甘えるときかなり素直になってきた。来た当初は甘えたくても我慢するし、私含めみんなにできるだけ触れないように過ごしてたエリちゃんだけど今は自分から触れることはないにしろ、触れられることについてはかなり慣れてきたように思える。デクくんを手を繋いで散歩に行ったり、えーくんの筋トレに付き合っ腕立て伏せの上に座ったり……。みんなに可愛がられて過ごしているうちに、ここを安心できる場所と捉えてくれたんだと思う。

「えつと……お、……あう」

「ん？エリちゃんどうしたの？抱っこ？」

「……ん」

俯いたエリちゃんがこくりと頷いた。ヒーロー基礎学前の移動時

間、ヒーロースーツに着替えた私たちはTDLに向かつて移動中。必殺技開発の続きである。私も必殺技に磨きをかけたい、というか新技術実証を頑張りたいのでやる気がみなぎりまくっております。ただ、TDLは危ないので相澤先生にエリちゃんを預けるのだけどね。

そういえば、エリちゃん……私の事名前で呼んでくれないなあ。他の人にはデクさん、えーじろーさん、お茶子さん、梅雨ちゃん……みんな名前で呼んでくれるのに、私だけは違う。私に声をかけようとするエリちゃんは必ず口ごもってしまったって、結局言葉にできずに私の服を引くことで伝えようとする。

……ホントは分かっている。エリちゃんが私を何て呼びたいかだなんて。けど、それは違う、違うんだ。たかが呼び方ひとつ、じゃない。これは私にとってもエリちゃんにとっても大きな意味を持つ。戻れなくなってしまうし、私は年齢的にも精神的にもその選択肢に責任を持つことができないもの。それはエリちゃんがいつか出会う優しい大人の人に向けて呼びかける言葉だ、私になつていいものじゃない。

おかあさん、と呼びたい。エリちゃんその気持ちは嬉しい、と思っちゃいけないものだ。似ているだけだ、容姿が。きつとエリちゃんの本当のお母さんは私みたいに背は大きくないし、手足は機械じゃない。ただ単に髪の毛の色と目の色が同じなだけだろう。顔だって、全然違う。重なってしまったているだけだ。私は彼女に優しくすることができても、母親のように愛を注いであげることができない。それはエリちゃんを不幸にする。

ごめんね、と心の中で謝りつつ私はエリちゃんを抱っこしなおして、TDLに向かう。追いついてきた三奈ちゃんが私の背中にぶら下がってエリちゃんのほっぺをもにもにとしだす。エリちゃんはちよつとむずがゆっているけど、いやな感じではないね。ありがと、三奈ちゃん。

「なんか最近、デクさんと青山くん仲いいよね」

「え、そうかな？まあ最近ちよつと色々あったんだけど」

「えー、いいな。私なんか青山くん避けられ気味でさ。ちよつと寂しいの」

「そうなんだ……」

数日後、朝のホームルーム前の教室にて私は膝にエリちゃんを乗せて髪の毛を梳かしてあげながら雑談をしていた。ハロより少し小さなサイズの白ハロを抱っこしたエリちゃんは大人しく私にされるがままになっている。それはそうと、なんだか最近青山くんとデクくんが仲良くなってるの。私が話しかけてもすぐに用事かなんかでどっか行っちゃうのに。クラスメイトとして仲良くしたいだけなのになあ。

「ねーねー、見てて!」

そんな声に後ろを振り返ると教室の一番後ろに陣取った三奈ちゃんがステップを踏み出して、そのままブレイクダンスを始めた。派手なパワームーヴを前に後ろに集まっている皆は大盛り上がりだ。三奈ちゃんはダンスが趣味だからね、私もたまに引き込まれてダンスやったりするけど、三奈ちゃんが一番上手。私はその……大きくて迫力あるねって感想が出るくらいの腕前です。

「芦戸さんは体の使い方がダンス由来なんだよね?何というか動き全てに全身が連動してる感じで力強いって思ってたんだ」

「下履くならスカート脱げよなあ……つーか下も脱げへぶつ!」

「ごめん峰田くん、何か言ってた……?」

「な、何でもないです……」

三奈ちゃんにセクハラをしようとしていた教育に悪いでお馴染峰田くんをエリちゃんの目を隠して踏みつぶす。地面にめり込んだ峰田くんは私の問いかけに息も絶え絶えな様子で返して、砂藤くんは頭陀袋にいれられて天井から吊るされる。まったくもう、峰田くんは油断も隙も無いんだから。

「ハイ希械ちゃん!レッツダンス!」

「え、私も?しょうがないなあ……」

「え、樫さんもできるの!」

「まあ、出来なくはないけど」

エリちゃんを机の上に座らせてから教室の後ろに、三奈ちゃんに合わせてステップ踏んで、まあみられる程度には踊れるんじゃないかな？ 何せ師匠は三奈ちゃんだからね。盛り上がってきました、上鳴くんが付けてくれた音楽に合わせて三奈ちゃんと踊る私。最後の1音でビシッとポーズを決めるとクラスの皆は拍手喝采、口笛も飛ぶ始末。エリちゃんも、楽しそうかな。まだ笑顔は見えないけど、雰囲気だけで何となくわかる様になってきた。嬉しいとか、楽しいとかそういう正の感情が。

「いやー、砂藤のスイーツとか樫のアレソレとかもそうだけどさ。ヒーロー活動にそのままつながら趣味はいいよな、強い！」

「私の場合は趣味っていえるのかなあ？あくまで強くなるためだし」

「趣味といえば耳郎もすげえよな。あの楽器の数々！楽器屋みてーでさ、趣味の域超えてるぜありゃ」

「ちよ、やめてよ。部屋王のことは忘れてくんない!？」

一通り拍手をし終わった上鳴くんが携帯をスリープに落としてそんなことを言う。確かに響香ちゃんの部屋凄いやね。ギターにベース、ドラムにシンセサイザー！しかも性能がよさそうなアンプにヘッドホンとかまさにロッキンガールって感じの部屋だ。何回かお邪魔させてもらったり、エリちゃんも楽器を触らせてもらったりとお世話になっていきます。けど、響香ちゃんはそれを褒められるのは恥ずかしいようで顔を赤くしながら否定をしている。

「いや、ありゃプロの部屋だね！なんつーかさ、おっ!？」

「もう、やめてよ！マジで！」

ビシッとイヤホンジャックを上鳴くんの眼前に突き出してちよつと怒った様子で自分の席に戻る響香ちゃん、上鳴くんは褒めてるつもりだったから結構戸惑っている。んー、まあ恥ずかしいのかな？けどなんかそういう感じじゃないんだよなあ響香ちゃん。好きなんだから趣味にしてて、その趣味を褒められたんだから嬉しくなってもいいと思うんだけどね。まあ、響香ちゃんなりに考えがあるのでしよう。チャイムの音が鳴り響く、私は相澤先生が入ってくる前に自分の

席に戻る。膝の上にエリちゃんを乗つけて、今日の授業は何だろうか  
あと思いをはせるのだった。

「文化祭があります」

「「「ガツポオオオオイ!!」」」

学校っぽいって略すとそういう風になるんだ……と相澤先生の  
ホームルーム中に私は他人事のように感想を抱いた。文化祭、文化祭  
かあ……中学校にはなかったよね文化祭って。高校生活の一大イベ  
ントというやつじゃないかな!?やだ、なんか私もテンション上がって  
きたぞ!?

「ぶんかさい?」

「学校でやるお祭りだよ。みんなでいろんなことするの。屋台出し  
たりね」

きよとり、と首を傾げるエリちゃんに文化祭のことを教える。周り  
の皆は大盛り上がりで学校っぽいのなんだの大盛り上がりだ。何や  
るか決めよう、とかそういう楽しい騒がしさが教室中に伝播してい  
く。うーん、そうなんだけどなんだかちよつとなあ。この状況で文化  
祭ってやっていいのかな?

「いいんですかこのご時世に文化祭って!?お気楽なんじゃ……」

「切島お前……変わっちゃまったな……」

「いやそーだろ!?ヴィラン連合だってまだいるんだぜ!?警察が襲撃  
されてんだ!」

「もつともな言葉だ。お前らもニュース見て知ってるだろ、イン  
ターン組は特に」

ガタツと立ち上がったえーくんが言った言葉、上鳴くんは茶化すよ  
うにえーくんになんかことを言うけど、こればかりは私でも領くし  
かないよ。相澤先生もそれに領いてくれている。そう、英雄はヒー  
ロー育成高校であると同時にヒーロー社会の信頼を繋げる役目も  
担っている。何度も襲撃を許して、夏休みには大事件も起きた。その  
中での文化祭開催はかなりのリスクを伴うだろう。原因の一端を  
担っている身としては申し訳なきが勝る。お祭り気分に参加してい

いものなんだろうか。

「しかし雄英もヒーロー科だけでできているわけではない。体育祭がヒーロー科を主役にしたものならば、文化祭は他科が主役になる」相澤先生が言うには、体育祭とは注目度が異なるとはいえ、文化祭は普通科、経営科、サポート科が主役になるのだそうだ。つまり、他の科の人たちは自分たちが主役になることができる文化祭を楽しみにしているということ、気合も入るし、やる気もみなぎる。それなのに、中止にしてしまったらどうなるか……悪い方向に転がって決まってるよね。

それに、現状……寮生活の発端となったヒーロー科中心の動きは他の科の人たちにとってはストレス以外の何物でもない。実際に私は心操くんを通じて学校の人たちの嫌な空気というものを聞き及んでいる。もちろんそうじゃない人もいるけど、ヒーロー科のことをよく知らない人にとっては事件をよく起こす、巻き込まれる私たちヒーロー科は邪魔なんだろう、悲しいことにね。

ままならないものだね、と私は難しい話を理解しようとうんうん頑張るエリちゃんの頭を撫でる。だからこそ、簡単に自粛するわけにはいかない。もし自粛が決定してしまえばただでさえ悪い学校内の空気がよりひどいものになり、最悪の場合は学校の中で派閥が割れ、ヒーロー科VS他科なんて構図になりかねない。もしそれでエリちゃんに危害が及んだり、誰かが傷つくようなことがあればそんな不幸せなことはないだろう。お互いにね。

「だから、今年は例年と異なった対応を取ることを校長が決定した。上の方は自粛しろって圧をかけてきたらしいが校長が何とかしているわけだ。お前らも感謝しとけ」

校長先生にはお世話になりっぱなしだな……本格的に美味しいチーズとかを差し入れたほうがいいのかもしれないね。条件つていうのは単純、警備を徹底的に強化したとえ誤報であってもシステムが異常を知らせた場合即座に文化祭は中止、そのまま厳戒態勢に移行するという感じだ。これは……結構厳しいな。シールド博士が忙しそうなのはその警備の強化のためのシステムを作ってるからか……。

「まあ、それで外部の人間は招けない。極々一部を除き学校内だけでの文化祭になる。それで今日は……1クラス一つ、出し物をしなければならぬのでその出し物を決めてもらおう」

説明をしながら寝袋にくるまった相澤先生が床に寝転がる。そこで出てくるのは我らが真面目委員長と頼りになる副委員長！飯田くんと百ちゃんのコンビだ、相澤先生から資料を受け取った二人はそれに軽く目を通してから声を張り上げる。

「ここからはA組委員長である飯田天哉がまとめ役を務めさせていただきます！スムーズかつ手際よく纏められるよう頑張る所存です」

「同じく副委員長の八百万百ですわ。まず候補をあげていくことにしましょう。希望のある方は挙手をお願いします」

百ちゃんがそう言った瞬間、クラスのほとんどが手をあげて大声で自己主張を始めた。その楽しい空気に、私の頬が少し緩む。エリちゃん、自分の頬を引っ張って笑顔の形にしようとしたけど、無理やり笑ってほしいわけじゃないので、赤くなる前にそっと、私は彼女の頬を撫でるのだった。



## 89話

ハイハイハイハイ！とクラス中の皆の手が上がる。私は別に何してもいいかなーと思っただけなのでみんながやりたいことをやればいいのか。いや、私が提案すると何もかもがメカメカしくなるので……例えばの話だけど誰が論文朗読会とか喜ぶの？せっかくの文化祭なのに。カフェとかするならお料理とかさせてもらえればなーくらいのテンション。

私は椅子を引いて、隣で新しく専用の椅子と机を貰ってそこに座っていたエリちゃんを膝に抱き上げる。これなら黒板がよく見えるし、みんなの顔も見えて輪に入っていきやすいだろう。私のハロとエリちゃんの白ハロが机の上でコロコロしだすのをよそに、みんなの挙手スピードと音量は際限なく上がっていく。声が大きいなあ。

「くっ！なんという変わり身の早さー！だが必ずまとめ上げてやるぞ！上鳴くん！意見を！」

「メイド喫茶とかどうよ?!」

「奉仕か……！悪くない！」

え、それ私含む女子勢がメイド服着ることだよな？うーん、メイド服かあ。ミニスカみたいな所謂メイド喫茶とかで着られているメイド服はなんか抵抗感あるんだけど、クラシカルなロングスカートとメイド服だったら着てみたいかも。長袖ロングスカートで私の手足が隠れていい感じに柔らかい印象になるんじゃないかなあ。エリちゃんにも可愛い服着せてあげたいし、そういう方向性はあるしありだ。なんか楽しくなってきたぞ。

「ぬるいわ上鳴！」

「では峰田くん！」

「オッパブツツ?!?!」

めしやり、と私が無言で放ったロケットパンチが峰田くんを直撃して梅雨ちゃんが構えた頭陀袋の中に吹き飛ばす。梅雨ちゃんは無言で袋をロープでぐるぐる巻きして天井に峰田くんを吊るした。重しは私の腕。もごもごやっている峰田くんを女子全員で冷たい目で見

つつ、会議は踊っていく。単純に言えば進まないともいう。

腕相撲大会にびつくりハウス、クレープ屋、ダンス、ふれあい動物園……若干理解不能だが暗黒学徒の宴だの僕のキラメキシヨウ☆なんていうよくわかんないものまで多種多様な提案が黒板を埋めていく。私にも意見が求められたので素直に喫茶店と答えておいた。無難だけど、なんだかんだ私は料理をするのが好きなのだ。楽しいよね、みんなが作った料理をおいしそうに食べてくれたらさ。

一通りの意見が揃ってわいわいわいとあーだこーだの喧々諤々。意見が取りまとめられることはなく、みんながみんな好きに意見を言い始める。流石は私の強いヒーロー科である、やりたいことを前にした圧倒的バイタリティには恐れ入る。そういえば私はどうすればいいんだろう？エリちゃんがいるからそこまで準備とか手伝えない気がする。

キーンコーンカーンコーン、となにもきまらないまま無情にも夕方のホームルームは終了してしまう。むくり、と寝袋から起き上がった相澤先生を前にみんながぴたりと動きを止める。だつてこれ……相澤先生が嫌いな非合理的な奴だから。相澤先生の恐ろしさはみんな骨身に染みているのでちよつと……いやかなり怖い。ごめんなさい相澤先生！許して！と峰田くんを地面に落として腕を回収した私含むみんながぶるりと震えた。

「実に非合理的な会だったな……明日、朝までに決めておけ。さもなくば……公開座学とする！」

相澤先生の眼光に、私たちは水飲み鳥のように首を縦に振り続けるのだった。

「はい、補習お疲れ様。とてもいい子だったわ……少しずつ離れられるようになってきたわね」

「ええ、ですけどやっぱり……寂しいのかもしれないね」

むぎゅ、と私に抱き着くエリちゃんを預かってくれていたミッドナイト先生から受け取る。授業後、私たちインターン組はインターンで

公欠していた分の補習があつたのでその時間分をエリちゃんが私から離れられるようにする訓練に当てることになった。白ハロがいれば基本は問題ないのでミッドナイト先生や13号先生にお願いしてちよつとだけ離れている。

ちなみにいの一番に手をあげてくれたプレゼントマイク先生は声が大きすぎてエリちゃんに怯えられてしまつて暫く部屋の隅でいじけてた。自慢の金髪トサカヘアもなんだかしなびていたような気がする。少し経てばエリちゃんは落ち着いて抱き着く力を弱めた。そういえば、話し合いには参加できないけど文化祭のアレソレはどうなつたんだろう。

インターン組の補習はインターンが超短期間で終わったせいで短くなり今日で終わりなのでこれ以降の話し合いは積極参加できるのです。エリちゃんに話しかけてくれるデクくんに話しやすいようにエリちゃんを再度預けながら私たちはそのまま寮に帰る。寮の共有スペースに入ると……

「……」

すごく難しい顔をしているA組の皆がいた。爆豪くんだけいないのは恐らく参加する意思があまりないからだろう。それはいつも通りなのでいいとして、このどうしたらいいか決めかねているみたいな感じの空気は何だろうか。私たちが揃つて首を傾げていると透ちやんが私たちに気づく。

「あー！おかえりー！補習組も参加してよー！煮詰まつちやつてるの！」

「あ、うん！飯田くん今どんな感じなの？」

「ああ、緑谷君。落ち着いて考えてみたんだが、他の科のストレス……その発散の一助になるような企画を出すべきではないかという話になっているんだ。俺たちはヒーロー科、他人に迷惑を掛け続けるわけにはいかないだろう？」

「いいんじゃないの!?そういうの大好きだぜ俺！」

「ところがそーゆーわけにもいかねーのよ切島」

えーくんがいつも通り拳を打ち付けながら飯田くんの提案した

テーマに沿った企画を出すというのに賛成する。それに困ったような顔で声を上げるのは瀬呂くん。やれやれと肩をすくめながら事情を説明してくれる。

「今さあ。体験系がいいんじやねえかって話してんだけど、素人芸ほど萎えるもんねーじゃん？どうすつかな、つてさ」

「あー、そやねえ」

「じゃあ、ダンスは？三奈ちゃんいるし」

「流石は希械ちゃん！ナイス援軍！」

「いいんじやねえか、ダンス」

「轟?!意外な援軍が!」

三奈ちゃんのダンスは見ごたえあるし、教えるのも上手。だから文化祭までの1か月あれば結構なレベルまでみんなを押し上げることができると思う。私がソファに座りながらそう提案すると、それに乗っかってきたのが轟くん、なんて意外な!?轟くんだったら蕎麦推しし続けるものかと思つてた!いや、それは流石にひどいか。彼は飯田くんのノートパソコンを一言断つてから操作し、一つの動画を映し出した。

「こういうの、いいんじやねえか?」

「轟から出る発想じゃねー!?!」

上鳴くんの驚愕の声に、ちよつとだけ同意。ノートパソコンの画面に映し出された動画は、言うなればクラブorderディスク。サイケデリックな照明が乱舞しステージ台に立った演者とそれを見る観客が一体となつて大盛り上がりしている奴だ。轟くん曰く、飯田くんの提案には賛成で、それを実現するためには楽しませるのではなくて、楽しめる場を提供するのがいいんじやないかとのこと。なるほど、確かに!

「仮免補講からの連想なんだが」

「……DJでもやってきたの?」

「それはプレゼントマイクがやってた」

「どんな補講だったんだよ……」

「けどよー、もう一回言うが素人芸ほどストレスなものはねえぞ?」

瀬呂くんが再度釘を刺す。まあ、その通りだけど……三奈ちゃんがはーい！と手をあげる。私教えられるよ！と青山くんを指しながら三奈ちゃんが言えば、青山くんは今朝の奇妙な動きとは全く違う洗練されたツーステップを披露する。おおっ！とみんなが沸いて芦戸に任せれば行けんじゃね？という上鳴くんの声でみんながその気になった。

「待て素人共！ダンスとはリズムだ！もっと言えば音そのもの！パリピどもは極上の音じゃねえとノらねえ！」

「音楽といえば……！」

「え、何？」

「響香ちゃん、だね」

「ケロケロ」

峰田くんの魂の叫び、それに反応した透ちゃんがある一人を指さす。音といえば響香ちゃん、楽器といえば響香ちゃん、音楽といえば響香ちゃん。つまりはヒアヒーロー、イヤホンⅡジャックのことだ！唐突に自分にお鉢が回ってきた響香ちゃんはおろおろと動揺してイヤホンジャックを振り回している。エリちゃんも響香ちゃんのは歌のお姉さんという認識でいるらしく、無表情ながら一目でわかる期待の目で響香ちゃんをじーつと見つめていた。

「耳郎ちゃんの楽器で生演奏！」

「ちよ、ちよつと待ってよ！ウチのはホントただの趣味！表立って自慢できるもんじゃないっつーかさ……！」

「そういうことか、昼間のアレはよ……！いいか！耳郎！お前はすげえ！」

「ちよ、上鳴！いきなり何言ってるの！」

もしかして響香ちゃん、趣味のことで私たちに引け目を感じてたりしたの？そんな、私はとても素敵な趣味だと思っただけだなあ、音楽。上鳴くんの飾らないドストレートな言葉にかあつとほっぺを赤くして恥ずかしがる時の癖らしいイヤホンジャックを手に持つてつんと先つちよを合わせ始める。いぞ上鳴くん、もう一押し！彼のストレートな言葉が逆に心からのそれだと分かってしまう響香ちゃん、

何だったら声紋もぶれてないしね。上鳴くん本気だ。

「あんなに楽器できるとかめっちゃカッコいいじゃん！俺はおめーのこと尊敬するぜ！」

「っ……………」

「そうだよ、人を笑顔にできるかもしれない趣味だよ。十分ヒーロー活動に根差していると思う」

上鳴くんと口田くんの怒涛の波状攻撃にさらに真っ赤になっていく響香ちゃん。あっちゃー、やりすぎかも。キャパシティ超える前に助けようかな、とソファを立ち上がろうとしたら私が割って入る前に察した百ちゃんがやんわりと二人を止める。百ちゃん、響香ちゃんととても仲がいいからね、私より早く彼女の状態に気づいたんだろう。

「お二人の主張もとても分かりますが、でもこれは耳郎さんの意志が大事なのですわ。無理強いはできませんの」

「いや、やるよ。ここまで言われてしり込みするのも……………ロツクじゃないよね……………」

「よっしゃー！これで決まりだな！A組の出し物は……………！生演奏とダンスでパリピ空間の提供だ！」

「櫟、ちよつと。管理人室で話がある」

「あ、はい。なんででしょうか？」

クラスの出し物会議が終わって、夕飯前。時間を見つけてくれたB I G 3が遊びに来てくれて通形先輩がエリちゃんを抱っこして一緒に遊んでくれている。私はそれを楽しく見守っていたわけなんだけど、そこでぬつとあらわれた相澤先生に管理人室に連れ込まれる。エリちゃんが離れてる今じゃないとできない話なんだろうか。

「お前、自分の両親からなんか聞いてるか？」

「え、いやなにも聞いてはないですけど……………」

「……………そうか。エリちゃんの里親の件……………お前の両親が名乗りを上げてな。場合によってはそのまま決まりそうならいだ」

「え!?!」

お、お父さんにお母さんがエリちゃんの里親に立候補したあ!?  
ちよ、ちよつと何を言ってるのか分かんないよ!? どうしちやっただらう……? それにまだまだ時期尚早だ。確かに私は両親にエリちゃんのことを話して暫く一緒に生活するという話も話したし、何回かエリちゃんとの生活がこんなにも楽しいと両親に報告した。エリちゃんも私のお母さんとお父さんの顔を知っている。けど、それとこれとはまた別でしょう?

「知つての通り、エリちゃんの個性のコントロールが出来なければ里親の元へなんて出せない。ただ、コントロール出来ても暴発する可能性はある。所詮は身体機能だからな、スイッチでオフにできるものじゃない」

「ええ、個性はそういうものです。私でもたまに失敗しますし」

「そういうことだ。その場合……エリちゃんの個性の暴発は致命的になる、が……個性が効かない可能性がある二人が名乗り出た」

「あー……確かに私の両親なら効かない可能性はありますね」

エリちゃんの個性が効かない条件はいまだに謎に包まれているけど、可能性が高いのは生物的に矛盾していることだ。つまり、異形型かつ無機物などのありえないものが混ざり合つて人として成立していれば効かない可能性がある。その点骨格と手が機械のお父さんと内臓の一部と足が機械のお母さんは条件を満たしてはいるはずだ。あとで聞いておかないと。

「ただ、だいぶ先の話だ。一応耳に入れておくべきだと思つてな。仮にお前の両親に里親が決まれば……無理に引き離す訓練をしなくてもいい。お前が家に帰ればいつだつて会えるだろう」

ちくり、と私の胸が痛む。そう、私はエリちゃんと少しずつ離れられるように訓練をしている。エリちゃんに気づかれないように。いつも私が傍にいてあげられるわけじゃないのは分かっているし、私の元を離れなきゃいけないのも分かっているけど。私から離れる時間があるたびに、またオーバーホールの所にいた時みたいな諦めの顔を見せる彼女にひどく胸が痛んだのだ。

依存してるのは私のほうかもしれないね、と苦笑しながら私は相澤

先生にお礼を言った。どっちにしろ両親は問い詰めないとね。私だと甘やかしちゃうだけだろうから、両親が考えることも何となくわかるけど……意図がちよつとわからないし。



## 90話

「文化祭はちょうど1か月後！時間もないし今日いろいろ決めておきたい！」

「まずは楽曲だね！ノれるやつ！」

「じゃあなるべくみんなが知ってるやつがいいんじゃない!？」

「あと踊れるやつな！」

翌日の事、さっそく文化祭の準備に取り掛かった私たち、文化祭まではエリちゃんの訓練を兼ねて準備が終わるまでは別行動だ。白ハロに加えて私のハロも一緒に派遣しているので大丈夫だろう。万が一があればハロからコールが入るので物理的に飛んでいくべし。それで、今決めているのは響香ちゃん主導の使う音楽のこと。生演奏予定だから楽器経験者が必要だけど、やれる人いるのかなあ。

「となると4つ打ち系だよな。ニューレイヴ系のクラブロック。誰か楽器経験者の人いる？できればベースかドラム」

響香ちゃんの言っていることの半分くらいしか理解できなかった私たちは周りを見渡して誰かいないかとなっているけど、名乗り出る人はいない。かくいう私も、DTMは扱ったことはあるんだけど楽器となると門外漢だ。ほぼホンモノの楽器の音を出すことはできるけど、それは求められてるものじゃないだろうし。

「いないかあ……ウチギターメインだからドラムやるにしても初心者に教えながらだと1か月は正直きつい……」

「生音とほぼ同じな打ち込みなら用意できなくもないけど」

「希械さ、アンタなんでもありだね……それは最後の手段かな。今回は生音に意味があるからさ」

「爆豪、お前昔音楽教室行ってたって言うてなかったか？ほら、親に無理やりとかなんとか」

「あ……」

きらーん、と私の目が光る。えーくとアイコンタクトのち響香ちゃんをお姫様抱っこ、えーくんは爆豪くんを確保し私は響香ちゃんの部屋に走る。響香ちゃんに部屋の鍵を開けてもらって、ドラムセツ

トを共用スペースに運び出した。セットされたドラムセットにえーくんが爆豪くんを座らせ、スティックを握らせる。

「あ?」

完璧なりズムキープ、心地よい音の鳴り方……爆豪くんが叩くドラムは音楽についてあまり知識がない私たちにとつてはほぼ完璧なそれに聞こえた。というか普通にカッコいい、さすがは才能マン。響香ちゃんですら完璧というソレを披露したにもかかわらず爆豪くんの顔はすぐれない。バチを見つめて、そのままスネアの上に置いて立ち上がり、部屋に戻ろうとする。慌てた響香ちゃんがいいものになると爆豪くんを説得にかかるけど、彼の顔は芳しくない。

「てめえらのお題目……他の科のストレス解消だったか? あいつらにとつて俺たちはストレスの根源だ。こんな生活に追い込んだヴィランなんだよ! てめえらヴィランが人を楽しませられると思ってるのか!? アア!? 俺たちだつて好きで転がされてるわけじゃねえ!」

「言わんとすることは分からもねえ……けど話し合いに参加してねえのだから文句言うなよ」

「痛つて! 樫てめえ何しやがる!」

「言い方。要はこう言いたいんでしょ? 『ご機嫌伺つてもいいものにはならないから忬度せず全力をぶつけるべきだろ』つて。楽しんでくれるかな? じゃなくて絶対に楽しませてやるつていう本気度が欲しいんでしょ?」

べちこん、と爆豪くんの頭をチョップ、若干いい音が鳴ったあたり爆豪くんの頭は詰まってるらしい。それに両手を爆発させて怒る爆豪くんの言葉を意識するとだいたいこんな感じかな? 主なストレスの発生源は普通科らしいから、彼らに向けたものという私たちの考えは爆豪くんにとつてはヌルいものだった。やるなら自分たちの全力で、校訓そのままじゃないか。

「いいか! なれ合いじゃなくて殴り合いだ! 雄英全員! 音で殺るぞ!」

「デクくん、翻訳」

「えーと、やってやるから足を引っ張るんじゃねえぞ、かな?」

「クソデクいい度胸だ雄英の前にてめえ殺つたらあ」

とにもかくにもやつてくれるらしい爆豪くん。ちようどいたデクくんは翻訳を頼んでみると完璧な訳をしてくれた。爆豪くんがかつてないほどキレ散らかしてる所を見るにはほほほ凶星なのだろう。流石は幼馴染、よくお互いのことを知ってるね。見事なアフロヘアーになったデクくんをよそにどんとと色々決まっっていく。

「私、幼少の時からピアノを嗜んでおりましたが……何かお役に立てるでしょうか？」

「わー！じゃあヤオモモはキーボードだ！」

「シンセ……シンセサイザーってクラブミュージックになくてはならないものなの。ヤオモモ！超助かる！」

「頑張りますわ！」

百ちゃんがキーボードかあ……グランドピアノが似合いそうだとは思ってた、というか前にお家遊びに行った時に当然の権利のようにグランドピアノが部屋に鎮座してたからね……弾けるんだろいうなあとは思ってた。例によつて私は弾けません、音だけなら出せるよ！メカだから！私にできることなんてゲーミングミラーボールくらいだろうなあ。

「ベースは……希械やれるでしょ？」

「え？前教えてもらったつきりだよ？」

「ツインベースやりたくてさあ……希械スラップ超上手だったからお願い！」

「まあ、そういうことなら……」

寮生活入つてすぐのことだったんだけど、何回かベースを教えるもなかったことがある。というのも私がインターネットの動画サイトでベースで曲を演奏している動画を共用スペースで見たら、響香ちゃんの方から興味あるなら弾いてみない？と誘われて教えてもらったの。何回かやっているうちにまあ弾けるんじゃない？くらいの腕前にはなってると思う。リズムキープは得意だ、何せ機械だからね！そんな感じでじゃあ私はベースでバンド？と決まりかけたところに待ったをかけたのは私の大親友こと三奈ちゃんだ。

「スタアーっ！希械ちゃんはダンス！これ絶対！あと切島も！」

「俺もか!？」

「当然でしょ!? 私についてこれるの今のご希械ちゃんと切島だけじゃん！」

「何切島ダンスできんの?」

「出来るっつーか、付き合わされたっつーか」

中学時代、私と三奈ちゃん、えーくんは仲良しトリオとして中学校の中じゃ有名だった。小学校からダンスを続けていた三奈ちゃんも熱いプツシュと指導を受けて、何度かトリオでダンス大会に出たりもした。体を動かすのが好きなえーくんや三奈ちゃんはそれが楽しかったみたいだし、私は目立つからちよっぴり苦手だったんだけど……面白かったのは事実だ。まあつまり何が言いたいかっていうと、踊ろうと思えば踊れます、はい。

「でも私出来れば裏方業務のほうがむいて」

「それはダメ」

「私の希望はあ……?」

裏方でメカを操ってド派手な演出とかやりたいなあって考えてたので裏方やりたいなあと口にしたら三奈ちゃんどころか響香ちゃんまでダメっていう!なんで!あのねえ、私大きすぎてダンス隊にはあわないし、チアリーディングのトラウマもあるし、そもそも楽器は初心者なんだから!私を無理に引き込まないでよお……。

「えーくん……」

「あー希械、俺もあいつら側な。お前裏方よりも表出たほうがいいわ」

「えーくんの裏切りものお!!!」

「ああ、希械ちゃんが入学し始めのころに戻ってしもうた」

私の意見と希望が残らず粉碎されてしまった。私は涙目になってえーくんに助けを求めたらえーくんにも裏切られてさらに涙目になり、お茶子ちゃんに泣きついた。え、私の希望は?夢の裏方でみんなを支えながら最新技術でド派手なショーを作ろうと思ってたのに

……。

「じゃあ、前半希械ちゃんダンスで、ラスサビでバンド入るとかどう？」

「それいいかも、けど希械の負担大きくない？どっちかに絞った方が……」

「……やれんだろ、このクソメカ女なら」

「かつちゃん、樫さんはエリちゃんのこともあるから……」

「分かんねえのかクソデク。だからだよ。このメカ女が目立ちや、あのチビ……笑うかもしれねえだろ」

デクくんを思う存分爆破して満足したらしい爆豪くんの言葉に、私は目を見開く。エリちゃんが笑うかもしれない……笑顔を作れない彼女に笑顔を戻せるかもしれない。なるほどなるほど……爆豪くんは私を焚きつけるのが上手だね？というか皆そうか、笑えないエリちゃんのことはみんな気にしてるんだから。私が頑張って、それでエリちゃんが楽しんでくれるならやりたい！やる気みなぎってきた！24時間どころか240時間でも戦えるよ！

「私！ダンスとバンド両方やる！」

「おお！やるぞ希械！」

「希械さん、しかし……」

「ヤオモモ、大丈夫！希械ちゃんダンス自体は踊れるし、振付覚えるだけで終われるよ。基礎練習要らないから！」

「ベース自体も弾けるしね。途中でツイーンベースで盛り上げるの、ロックじゃん？楽譜も覚えるのは半分以下だろうし、行けるんじゃない？」

「決まりだね！」

決まってしまった。ベースにダンスかあ……頑張らないとね。まあたしかに、ダンス自体の経験はあるし、楽器経験は少なくとも手先の器用さにはとても自信がある。メカですから！リズムキープもお任せあれ。デジタル的に頑張るよ！えーと、私と響香ちゃんがベースで、百ちゃんがシンセサイザー。じゃあ

「ギターはどうなるのかな？」

「ベースが2本あるんだし、ギターも2本欲しい！希望者いる!？」

「やられてー！楽器弾けるとかカッキーじゃんよ！」

「やらせろー！」

「じゃあ持ってみて」

ギターはいわばバンドの顔と認識してる人も多いのではないだろうか、そこで手をあげたのはクラスの女の子好き、上鳴くんに峰田くん。爆豪くんにやりてえんじやなくて殺る気があるのかと物騒なことを聞かれつつもあるある超あるととっても軽いお返事でギターを肩にかける。確かにあれだよ、さまになってる。上鳴くん似合うなあギター。峰田くんは……その……

「手が届かねえよ……」

「それに関しては私にはどうしようもできないかな……」

そう、峰田くんの身長は108cm、なんと実はエリちゃんより小さいのだ。当然ながら手と足もそれに伴って小さくて……ギターの弦に手が届かずネックを握ることができないでいる。上がっていたテンプションを一気に下げてしまった峰田くんは崩れ落ち、部屋の隅で体育座りを始めた。うーん、峰田くんサイズのエレキギターを作るっていう選択肢もあるけど、確実に玩具っぽくなってかつこ悪くなっちゃうんだよ……そこで現れたのは意外なことに常闇くん、彼は峰田くんが丁寧に放り出したギターを拾い上げると静かに爪弾き始めた。

「常闇!?!お前ギター弾けたのか!?!何で黙ってた!?!」

「Fコードで一度手放した。だが、黙っているのもおかしい話だと思つてな。もう一度手に取りたい。峰田、俺がやつても構わないか」

「勝手にしろ。もうさっさと終われ文化祭」

「峰田くダンスパートでハーレム作ってあげるっていったらやる気だるっ。」

「最高かよ文化祭。はよ来ないかな」

峰田くんの掌返しが酷い。それはともかくとして、ギターパートもきまりだね！常闇くんが経験者なのは嬉しいなあ。峰田くんもやる気を出してくれるみたいだしあとは練習あるのみだけど……あ。

「歌は響香ちゃんがいいよねっ。」

「え!?!ウチ!?!」

「他に誰がやるの?」

「そうだよ! 耳郎ちゃんの歌すつごく上手なの私達知ってるよ! セクシー&ハスキーボイス! ね!」

「待てよ! ギターは諦めても歌は諦めねえぜ! オイラのシャウトを聞け!」

「僕も☆」

歌パートといえば、というか普通に響香ちゃんカラオケ行った時とかすつごい歌上手だったからそれが一番いいと思ったんだけど、何となく恥ずかしいみたい。そこに現れたのは毎度おなじみ峰田くんとなぜか青山くん。彼らは聞いてみやがれとマイクを前に自慢の歌を披露しはじめた。峰田くんはがなってるだけで、青山くんは物凄い裏声。狙ってやってるのかな……それでは!

「響香ちゃん、お願いします!」

「え、ハッズ……じゃあ、1番だけ……」

響香ちゃんがアカペラで歌いだした瞬間、峰田くんと青山くんが歌パワーによつて吹っ飛ばされ、床に転がる。私たちの間を駆け抜けていく響香ちゃんの甘く、ハスキーなのにセクシーな歌声。100点満点。歌い終わった響香ちゃんを待っているのはスタンディングオベーションと拍手の雨あられ、負けを認めた二人も含めた満場一致で歌パートも決定。

「じゃあよ、残り必要なのってなんだ?」

「雰囲気作りだよ! 演出つてやつ、ミラーボールとか、紙吹雪とかクラッカーとか! ダンスと音楽に合わせて一緒にもりあげん!」

「なるほどな! 轟の氷とかで氷の橋とかやったら面白そうだよな!」

「使う機材とかイメージあったら教えてね。私が用意しちゃうからさ!」

「私にも一声おかけください。希械さんと私で用意できないものはありませんわ!」

よーし決まった! 決定! バンド隊! ダンス隊をメインにそれを支

える演出隊！私はちよつとハードスケジュールだけど！大丈夫だからね！エリちゃんが見るんだから、不格好な出し物は出来ないな！よし、頑張ろう！みんな！飯田くんの音頭で私たちは円陣を組んで、拳を突き上げるのだった。



## 91話

「とういうわけで臨時講師の楳少女と通形少年、そして観客のエリちゃんだ」

「なんか増えてる!？」

「ヤッホーデクくん」

「手伝いに来たんだよね!」

「こん、にちは」

みんなのパートわけが決まった翌日の事、訓練終わりに私はエリちゃんとお散歩に行ってから文化祭の準備に取り掛かろうと思っていたので、エリちゃんと雄英の敷地内をプラプラしていたらオールマイト先生から少しだけ時間が欲しいと呼び出しを貰った。なので私はエリちゃんを抱っこしてオールマイト先生がいる森の中に来たら、なぜか通形先輩もいらっしやった。エリちゃんは通形先輩を見ると少しだけ恥ずかしそうに挨拶をしたし、通形先輩は笑顔でエリちゃんに構ってくれる。エリちゃんはかわいいなく。

通形先輩は、死穢八齋會の事件後病院にてサー・ナイトアイからワンフォーオールのことや弟子に取った理由を話されている。通形先輩はそれに全く怒ることはなく、むしろ事件前よりもナイトアイと固い師弟関係を結んでいるみたい。たまにメールで今日のオールマイト先生についてナイトアイに報告したりしてるからそこら辺の雑談でナイトアイから聞いたからきつと間違いない。ファイギュア第二弾はもうすぐ発送です。デクくんの分もあるよ!

それで一応話を聞くに、デクくんがワンフォーオールを一定段階まで習得できたというのを判断したオールマイト先生はワンフォーオールの中の使い方を教える段階に来たということ、デクくんにとある技をレクチャーしようとしてるみたい。それが、サポートアイテムなしで攻撃に風圧を纏わせて遠距離攻撃をする方法。ワンフォーオールは出力が15%を超えると攻撃に風圧が伴い始めるのは体育祭前の測定で分かったことなので、その使い方を教えるということなのだろう。

「樫さんは分かるんだけど……通形先輩はなんで？」

「ふむ、それは通形少年がこの個性の使い方に最も適した人材だからだ。まず緑谷少年、現時点で安定して壊れずに引き出せるのは12%、そうだね？」

「はい！だから、15%はとて……」

「ところがどっこい！」

「どっこい……？」

ここで私が口を挟む。15%を引き出すのは無理だというデクくんの声を全否定。ぴしっとデクくんを指さすとエリちゃんも真似して指をさした。それにちよつとほっこりしながら私は5月に測定したオールマイト先生の個性の使い方をデジタル分析した映像を見せる。スマッシュの瞬間にスローになって、視覚化されたエネルギーの流れが移る中、デクくんが何かに気づく。

「常に同じ出力じゃない……!?!」

「その通り！君の個性は私とよく似ている！私は常に100%を意識していたわけではない！それはつまり……!」

「攻撃の瞬間だけ、インパクトに合わせて出力を爆発させる……!」  
「ただ、結局上限の話は……」

「そこだよデクくん。つまり、インパクトの瞬間に出力を一気に上げる。体が壊れる限界点を見極めてね。100%なら一瞬で壊れる。だけど……それより低い出力なら短時間耐えられる可能性は十分にあるんだよ」

そう、デクくんのワンフォーオールの許容上限は12%だけどそれ以上にあげた瞬間に100%を素で引き出したような壊れ方はしない。負荷の大きさに合わせて、壊れる。出力の大きさと怪我は比例関係だ、低%なら長く、高%なら短く、壊れるまでの時間が変わる。12%が無理なく使えるなら、それ以上を一瞬だけ使うことはできるかもしれない。そこで

「そこで、俺というわけさ！君の個性、難しいみたいだからね！ただ、俺との共通点として体の部位で個性を発動することができるって聞いたよ！」

「……！全身に個性を回しつつ1部位だけ一瞬で高めて遠距離攻撃！」

「そう！透過とは勝手が違うけど、アドバイスはできるハズさ！同じ発動系だからね！だからこそ今日は俺が臨時講師ってわけ！」

「私はデータでお手伝いするよ。エリちゃんはデクくんを応援してあげてね。頑張れーって」

「……デクさん、頑張って」

「……っ！うん！頑張るよ！」

「はいというわけでまずは20%のフルカウルお願いしまーす」

エリちゃんが聞いてるのでワンフォーオールの話は意図的に避けつつデクくんが風圧攻撃を習得するための道筋を立てて説明をする、もともと努力型かつ頭を使うタイプなデクくんにはすぐに色々理解をすることができたらしい。私に抱っこされた状態でぎゅっと手を握ってデクくんを応援するエリちゃんによほどの気合が入ったのかデクくんは鼻息荒く、ワンフォーオールを発動する、12%ではなく20%……少し顔色が苦しそうだけど、壊れない。

「戻して！」

「はっっ……ふう……」

「うん、その状態なら2秒持つね。つまりデクくんが目指すのは体の1部位で20%以上を1秒以内にかけて戻す、かな」

両目でデクくんの体に自壊の症状が出た途端、私は強くデクくんに叫ぶ。デクくんは私が叫んだ瞬間にすぐにワンフォーオールを纏うのをやめた。少々傷んだのか額に脂汗が滲んでいる。大体データは取れたね、今のを考えるに25%を瞬時に引き出すのを目安に考えたほうがよさそう。さてここからは通形先輩の出番だ！

「よし緑谷！ここからは俺が教えるよ！先ず、人体で一番繊細に動かせる部分はどこかな!？」

「指です！」

「そう！だから、最初は指からだ！俺の個性も実はそういう風に末端から訓練していったんだよね！じゃあ！後は試行回数と努力だ！いくぞー！」

「はいっ！」

通形先輩の声にデクくんも気合を入れて返し、サー・ナイトアイ仕込みの個性制御術をデクくんに伝授していく。私はそれをデータで取りながら、マッスルフォームに変身して二人を見守るオールマイト先生を目を白黒させて見つめるエリちゃんの頭を撫でるのであった。

「しゃー！曲決まった！後は死ぬ気で練習うううう！」

「ちげえ！殺る気だ！おら上鳴そこミスってんぞ！」

「演出隊と相談して私が入る場面ラスサビちよつと前になったんだけど、ここら辺からでいい？」

「ん、そこがいいかもね。TAB譜はこつからだね。何かわかんないところある？」

「響香ちゃんがすごく丁寧にたくさん教えてくれるから大丈夫！夜に練習してみるね」

そんなことがあつて今は休日、朝ごはんの後にエリちゃんを相澤先生に預けて、私はバンド組の練習にいる。午後はダンス隊に行つて振付決めをえーくんと三奈ちゃんと一緒にやる予定だ。演出隊の瀬呂くんに砂藤くん、口田くん、轟くん、障子くんにも話を通して大まかな流れを決めている。曲が決まったので私がダンス隊から外れてバンド隊に合流するタイミングはここ！というのを共通で決められたので、超練習すればいいのだ。

「夜やるならベースかそつか？」

「ん？これでやるから大丈夫だよ。音出すとエリちゃん起こしちゃうかもしれないし」

「便利だなー、それ」

私は手元に出現させた立体映像のベースをじゃん、と響香ちゃんに見せる。実物みたいな重さはないけど、触った感触とかそういうのを私の手のデータを弄って干渉することであたかも実際に演奏してるようなりアリティをもつて練習することができる。もちろんホンモノを握った方がいいに決まってるんだけど。夜にジャンジャカやつ

てエリちゃんを起こすとか考えられないので日中で練習しまくることにした。

そうこうしているとドタドタドタドバンツ！と練習している空き教室のドアが勢いよく開いて誰かが転がり込むように入ってくる。見覚えのあるブドウっぽい頭、峰田くんだ。彼は息も絶え絶えになった状態で荒げた呼吸を必死に落ち着かせ……いやさらに荒くなつてない？

「おい峰田、どうしたよ」

「如何したもこうしたもあるかあ！樫か八百万！オイラの一生の頼みを聞いてくれ！」

「は、はい。何でしょう？」

「ミスコンにでくれえ!!!」

「ミスコン？あれ？そんな催しあるの？初めて知った」

「相澤先生！黙ってたんだよ！クソ！何としてでも樫か八百万を送り込まねえと……」

「却下だ、峰田」

ミスコン、ミスコンテスト？へー、この学校ってそんな催しものまでやってるんだ。意外、国立だからそういうのって保護者の目が厳しくてできないものだと思ってた。魂からほとばしるような峰田くんの叫びに気圧されてしまう私たち、勢いのまま押せると判断したらしい峰田くんがこちらににじり寄ってくるのを捕縛布がグルグル巻きにする。それができるのは、いつの間にか現れた相澤先生だけ。

「出し物一つ決めるのにあそこまで非合理的な時間を使うおまえらにミスコンなんて知らせたら余計に収集が付かなくなる。もう参加も締め切っているしな、諦めろ」

「イヤだあ！もう一回あのドレス姿の樫と八百万を見てえんだ！あと耳郎も」

「ウチはついでか！」

「ぎゃああああっ!!!」

「くだらねえ」

ついで扱いされた響香ちゃんの乙女の怒りが峰田くんを直撃する。

爆豪くんがぽつりとつぶやいたその言葉が今のその現状を表していた。どれだけ見たいんだ峰田くん、百ちゃんのドレスがもう一度見たいのは何となくわからなくもないが、私は違うでしょう。女の子なら何でもいいの？そんなんだからもてないんだよ、というかもうちよつと欲望を封じ込めたほうがいいと思う。というか封じ込めて、お願い。私たち――Aだけ妙にセクハラに耐性が付きだしたの峰田くんのせいだからね？

「まー確かに、峰田の気持ちも分からなくないけどなあ。樫や八百万に耳郎、麗日の正装似合ってたしな」

「……気にならないと言ったらうそになる。俺は見れなかったからな」

「可愛かったぜー？写真とつときや良かったな、爆豪？」

「んな下らねえことに脳容量使ってねーんだよ俺は。さっさとやり直せや」

「ういうい」

相澤先生に引きずられていった峰田くんを放っておいて私たちは練習を再開する。私が参加するタイミングは先なのでタイミングを確認しながらラスサビで入る。爆豪くんは相変わらず完璧だし、響香ちゃんの安定したベースのおかげでみんな何とかついていけるって感じ。私も頑張らねば。弾けるだけだからね、弾きこなさないとけないわけで。むーん、むずかしい。

「あ、心操くんだ」

「しんそう？」

「私のお友達なの。エリちゃんも仲良くしてあげてね」

「うん」

文化祭というやつは、実は開催日当日よりも、準備期間が一番楽しいだなんて言われている。私もそれは何となく今察しているところで、研究開発を一旦ストップしてみんなと交流しながら文化祭の準備をするのはとっても楽しいの。それで今は私、休憩中。エリちゃんと一緒に文化祭の浮ついた雰囲気は漂う雄英の中を歩いていく。

すると普通科のC組の教室を通りがかった時、クラスの皆と一緒に作業をして何やら大工仕事をしている心操くんがいた。思わずぼろっと声を出すとそれを聞いていたエリちゃんが首を傾げる。私とエリちゃんは身長差がありすぎて手を繋ぐことが難しいので基本抱っこして移動するか、エリちゃんの歩幅に合わせてゆっくりと移動している。今日はエリちゃんは自分の足で歩いている。

「おい心操、師匠来てんぞ」

「師匠って誰だよ……って樫か」

「わー、なんか小っちゃい子いるー!」

「あれじゃね? 校長先生の話にあつた保護してる子ってやつ」

あつちやー、ちよつと足を止めたせいで気づかれちゃったね。視線が集まってしまったことに少し怖くなっちゃったエリちゃんが私の足にきゅつと抱き着いて後ろに隠れる。心操くんはやし立てる周りを諫めてから癖になつて首を抑える仕草をしつつトンカチを置いてこちらにやってくる。

「なに?」

「お散歩中なの。エリちゃんをよろしくお願いしまーすってあいさつ回り、かな?」

「ふーん……俺、心操人使つて言うんだ。うちのクラスはお化け屋敷だつていうから縁はないだろうけど、よろしくね」

「……よろしく、おねがいます」

「うん、よろしく」

エリちゃんに視線を合わせる為にしゃがみ込んでくれた心操くんがエリちゃんに挨拶をしてくれる。そうか、C組はお化け屋敷やるんだ、エリちゃんにびつくりドッキリ系はちよつとアレなので確かに縁はないかもなあ。私の後ろから顔だけ出したエリちゃんが心操くんにきちんと挨拶をしたので頭を撫でてあげる。その様子が微笑ましかったのか、私がトレーラーから助けた人たちを中心にこっちにわらわらとやってきた。

「そっかー、こんな小さい子いるならお化け屋敷はやばいかもねー」  
「ヒーロー科震えあがらせてやるからクラスに宣伝してくれや、こ

れチラシな」

「……ま、色々やるから楽しんでいってくれよ。覚悟しておいた方がいいかもな」

「うーん、機会があつたらお邪魔しようかな。心操くんが私を驚かせられるか、見ものだねー」

「言ったな？驚かせてやるから来てみるよ……無理せずにな」

「うん」

C組の皆は意外とエリちゃんに好意的で、女子はしゃがみ込んでエリちゃんとコミュニケーションを取ろうしてくれる。ただ、ヒーロー科の皆ほど扱いに精通しているわけでもないから私はさりげなく心操くんの傍によってエリちゃんが囲まれないように抱き上げつつ話を広げる。親子みたい、と誰かの声が聞こえる。そう見えちゃうのかな、でも……その役目は私じゃないんだよね。



## 92話

「衣装とか、どうしましょう」

「でん！と各パートの代表者枠、三奈ちゃん、えーくん、響香ちゃん、百ちゃん、私が集められ、演出組の瀬呂くんが私たちを前にそう宣言する。衣装、衣装ねえ……確かに大事だよ。ステージの中で踊る私たちが例えばジャージとかだった場合没入感がまるでない。三奈ちゃん曰くデイズニーのパレードのようなものにした方がいいので、それっぽい衣装は必須なのだ。」

「意外性の瀬呂くデザイン案とかない？」

「俺かよーまあ、なくもないくらいだけどさ。どうなのがいいっていう意見が欲しいんだよ」

「色は統一したいよね、あとバンドとダンス隊は違うのがいいかも。バンドはバンドTシャツで、ダンス隊はダンス衣装みたいな」

「デザインが決まれば私がお作りしますわ」

「うーん、ヤオモモに頼りすぎるのも良くないよね。できればみんな同条件で行きたいじゃん？個性ばかり使ってるのもあまり、ね」

「じゃあ、バンドTシャツはクラス全員分作っちゃおう。衣装については、いいものがあるの！」

カキン、と手を打った私の言葉にみんなの視線が集まる。確かに必要なものはない、と私たちがぼんぼん出してたらみんなで作ってる感薄れちゃうもんね。それなら普通に手に入るものは普通に買った方がいい、手に入らない特別なものとかを私たちが作っちゃえばいいんだよ。というわけで私が出したのはちよっとオシャンテイなチョーカー。ちよいちよいと響香ちゃんを手招きしてカチャカチャとチョーカーを首に嵌める。

「おお！響香ちゃん似合ってるー！流石希械ちゃん、ナイスデザインー！」

「なんか照れる……」

「んで希械、これなんだよ」

「ふふふ、では3、2、1……イリユージュオン！」

「「「おおおおっ!!!」」」

「ちよっ……はっず……!」

ぱつとエフェクトがかかってまるで魔法少女の変身シーンみたいに上から下に響香ちゃんの服が変わっていく。Tシャツにパンツスタイルだった彼女の服は今は煌びやかなアイドルのような衣装に変わった。ご丁寧にならば小さいシルクハットが頭に斜めに被さっている。いきなり変わった衣装に顔を赤くして恥ずかしがる響香ちゃん、かわゆい。

「どう?これは名付けてワールドプロジェクター!体の表面に空間投影した映像を定着することができるの。もちろん映像だから触れないけど、物理演算は仕込んであるから本物の服と同様に動くんだよ」

「これやべーな。喋りつくり箱かお前」

「耳郎さん、素敵ですわ」

「でね、私がこれを提案するのは理由があつて……ダンスの最中にお着替えとかできたら……楽しくない?」

「「「それめっちゃいい!」」」

演出組合むみんなが声を揃えて立ち上がる。古今東西のライブなどで行われる早着替え、アレは着ている衣装にいくつか仕込んでそれを解放することで服が変わる、みたいなものだけどこれを使えば話は変わる。どんな衣装でも、どんな服装でも、自由自在だ。モデリングは私が見れば一瞬、あとはハロにお任せってね。

「めっちゃいいじゃん早着替え!」

「これさ、どうやって元に戻すの?ウチ流石にこれはね……」

「首元一回撫でてみてー」

「えっちよっ!希械!」

「あはは、ごめんごめん」

響香ちゃんの衣装が今度はフリフリのアイドル衣装にかわる。うん、やっぱり可愛い。流石に弄り過ぎたと反省した私はチョーカーを撫でて投影映像を消す。普段着に戻った響香ちゃんは軽く頬を赤らめて私に抗議する。なるほど、三奈ちゃんが私を弄り倒すときはこん

な気持ちなのかあ。これは確かに楽しいね、やり過ぎは可哀想だけさ。

他にもなんかねえか!?と尋ねる瀬呂くんにあんまり機械に頼り過ぎたらダメじゃない? 主役は私たちと観客だし、と返すとはっとなつてそうだな! といつてくれた。多分私が介在するのはここまでにした方がいい気がする。機械を使えばなんだって自由自在なのは間違いないけど、それは心が通ってないものだ。みんなでやるからこそ意義があつて、意味がある。いいものになると思えば提案するけど、全部が全部私が噛んでたらキリがない。だから、今回はここまでだ。あとはみんなで作っていけばいい。

「ダンス、するの?」

「うん、するよ。エリちゃん明日楽しみにしててね」

「……ん」

あつという間に文化祭の準備の日々は過ぎていった。何と明日が文化祭の当日である。エリちゃんと深く関わりがある私とデクくんは何が何でもという感じで張り切っている。私はエリちゃんと一緒に眠るのが毎日なのでみんなより少し早めに自分の部屋に引っ込んだ。練習は万全、エリちゃんには内容を秘密にしてるのは申し訳ないし、寂しい思いをさせちゃってるのかな。

エリちゃんは、文化祭が近づくとつれてどんどんと、そわそわ、わくわくしたような空気を醸し出すようになっていた。私が放課後練習に行く前にエリちゃんとぐるっと校内をお散歩するのが日課みたいになってたんだけどエリちゃんはどこへ行っても人気だった。3年のヒーロー科では通形先輩や波動先輩に構ってもらえて、2年生の去年相澤先生が担当していたクラスの人たちにチラシを貰ったりとかね。

もちろん好意的じゃない人もいる、こつちを遠巻きに見てあまりいい感じではない視線をエリちゃんに注ぐ人とか、聞こえるように嫌味を言う人とかね。さりげなくエリちゃんから見えない位置に移動し

たりとか聞こえないようにしたりとかはしてたけども、表立って何かを言つてこない以上それより先は私も何もできないし、全部録音してあるにしろそれを使つて先生に伝えるなどして排除してしまつたらますますヒーロー科への悪感情を強めることになってしまう。

特にそのやつかみが多いのが1年生たちで、通りすがつただけでぎわぎわ言う人もいるし、しようがないにしろいい気分はしないかな。ただ、心操くんが所属するC組はヒーロー科への偏見は全くないみたい、むしろそんなことがあつて大変だつたんだなあという感じで氣遣つてくれる人の方が多い。お前らのせいじゃないだろ、という心操くんの人徳のたまものかな。

すやすや、と明日を楽しみにしていつもより遅い時間まで起きていたエリちゃんが限界を迎えて私の隣で眠つてしまう。枕もとにいる白ハロが優しく目を光らせながらエリちゃんを見守つていた。エリちゃんの精神状態は私と生活をしているこの2か月ほどでかなり改善されたように思える。白ハロをプレゼントした日から、うなされる回数が減つて文化祭で私たちが出し物をする伝えた時からさらにぐつと減つた。

エリちゃんが戻してしまつた両親がエリちゃんのことをどう思つてたかなんて私にはわからないけど、ただ一つ言えることは……彼女はきちんと愛されていたということだろう。押収品のアルバムを相澤先生から見せてもらった。エリちゃんの両親のことを知るために。そこに広がつていたのは笑顔、エリちゃんによく似たお母さんと優しくそうなお父さんに挟まれた赤ちゃんの時のエリちゃんを見て、確かに幸せだつたんだろうなと辛くなつた。

1週間前、私は自分の両親と連絡を取つた。聞きたいことがあつたからだ。それは、エリちゃんについて両親がエリちゃんの引き取り手に手を挙げた理由を知りたかつた。下手な同情や考えなしの行動をする人たちじゃない。異形型の個性を持つて生まれた私の両親は当然のように個性差別を受けて生きてきた、そしてそれは今も真綿で首を締めるかのように緩く、しかし確実に続いている。

家庭環境が悪い、という話じゃない。異形型それ自体がまだまだ社

会に受け入れられていないのだ。エリちゃんは異形型ではなく発動型、角という異形の部分はあれどほとんど人間だ。わざわざ傷ついている女の子をもしかしたらまた傷ついでしまうようなところに引き込む人じゃないっていうのは両親を見て知っている。もちろんえーくんのご両親のように偏見のない人もいるが、確実に悪意のある人はいるのだ。

「エリちゃんも個性柄、差別を受ける可能性があるだろう。そうなった時の対処は私たちが一番よく知っている」

「個性が効かないかもしれないっていうのも重要よ。エリちゃんが絶対に安心できる……貴方のような人が必要なの」

「だから、私たちが立候補したのさ。それにね、もう一人くらい、娘が欲しかったんだよ」

「やっぱり、貴方に会えなくなってしまうのはきつとエリちゃんにとって良くないの。養護施設に入ってしまったら、会うのだから一苦労よ。面会だって制限されてしまうわ」

両親は私にエリちゃんを引き取ることを決意した理由についてそう説明してくれた。確かに養護施設に入ってしまったら私とエリちゃんは容易には会えなくなってしまうし、引き離されることになると思う。いいか悪いかで言えば……私には判断できない。だって、今エリちゃんは私に少なからず依存してしまっている状態だから。離れることはできるようになったと言っても、まだ不安は少し残っている。

けど、あの年頃の子供だったら両親に甘えた状態にいるのは普通のことだとは思う。特にエリちゃんは、ずっとそれが出来なかった。だからそれを取り戻すように私に甘えている状態……なのかもしれない。確かに両親がエリちゃんを引き取るのは選択肢としては最良なのだろう。けど、エリちゃんのためになるのだろうか……それともこの考え自体が傲慢なのかな。

わからない……わからないの。エリちゃんをどうしてあげたらいいのか。私にはわからない、何が彼女にとって最良なのかをずっと考えている。私はエリちゃんが好きだ、大好きだ。この2か月一緒に過

ごすうちに彼女に対する情を抱えてしまった、抱いてしまった自覚はある。少しづつ、外の世界に目を向けて感情を取り戻していく彼女が愛おしいと思っている。

だから、私は離れるべきじゃないのかと思ってもいる。答えの出ない迷宮のような自問自答に沈みながら、私は目を閉じて眠りにつくことにした。

「あれ？デクくんは？」

「あー緑谷？青山ぶら下げる用のロープとかを朝練のついでに買ったよ。こつから15分ぐらいのホームセンター」

「なんだ、私に言ってくれればいいのに。絶対に切れない炭素ワイヤーロープとかあるし」

「お前とか八百万を便利道具扱いしたくないんだよ、皆」

「ふーん……」

「あ、希械ちゃん真っ赤ー」

「だってー！」

翌日の事、午前7時に起きた私とエリちゃんは朝ごはんを一緒に食べて身支度を済ませて共用スペースにおりてきた。文化祭の開幕は午前9時、私たちの出し物は午前10時から開園ということになっている。クラスのみんなで作ったバンドTシャツに袖を通し、フールドプロジェクターのチョーカーを首につける。エリちゃんの分もバンドTシャツを作っているので彼女にも着せてあげて、思いつきおめかし。1日沢山動くだろうから髪の毛をポニーテールでまとめあげて、白ハロがはまったネックレスを首にかけてあげる。

そうして共用スペースにやってきた私たち、すでにみんな勢ぞろい……なんだけど一人足りない。デクくんだ。最近朝にワンフオーオールの特訓をしていることは知っていたからそれかなと近くにいたえーくん聞いてみると何でも出し物で使うロープが練習でかなり傷んでしまっているのを昨日、私と百ちゃんが寝てから発見したらしく朝練のついでに朝早くからやっているホームセンターに買いに行ったのだとか。

でもこんなギリギリで買い出しなんて……間に合うのかな。私は午前中いっぱいエリちゃんを預かってくれるということで寮にやってきた通形先輩よろしくお願いします、とエリちゃんを託してみんなと一緒に最後の準備に入る。作っておいたフールドプロジェクトターを全機起動、皆が一瞬でステージ衣装に変わった。問題なし。昨日作って運んだアンプなど音響機器へ外部接続、大丈夫。

「ハロ！チェック！」

『オールグリーン！オールグリーン！』

「演出隊の皆、ハロをよろしくね」

「ああ、世話になるなハロ」

今回、私はダンスにバンドと大忙しなのでアンプなどの電子関係や演出で使う細々した機械制御は全部ハロに任せることになる。その際の指示は轟くと瀬呂くんにお任せしてるので今のうちにハロを轟くんの手渡した。そうこうしているともう既に午前9時を回ろうとしている。デクくんはまだ、戻ってこない。

「電話置いて行っちゃったんだよね、デクくん」

「つかしーなー。ここまで時間かかるような用事じゃねーと思うんだけど」

「つとにあのクソデク……後で爆破してやる」

「いつも通りだね……」

『へい！エブリバディ！さあさあ来たぜ文化祭！開幕だあ！』

外からプレゼントマイク先生の威勢のいい開始の合図が聞こえる。私たちは不安になりながらも準備をするために体育館に移動し始める。念のため寮に残ってくれるという青山くんをお願いして私たちは準備を始めるのだった。

## 93話

「ごめん皆！お待たせ！」

「遅ーいデクくん！心配したんだよ！」

「そうだよー！デクくん、電話置いてっちやうもんやから……」

「いやその……面目ない。ちよつと山降りるときに転んで気絶しちゃってて……」

「えー！？」

現在9時45分ちよつと前、ギリギリのギリギリでデクくんは帰ってきた。デクくんの話によると山を走って降りるときに勢いが付きすぎて転んで木に頭を打ったせいで暫く気絶していたとのこと、リカバリーガールに診察をしてもらっていたから遅れたとのことだ。もう！なんて危ないことをしてるの！エリちゃんがいなくてよかった……不要な心配をかけちゃうところだった。もう既に会場でスタンバイしてるんだよ、皆も。エリちゃんと通形先輩も。

私とお茶子ちゃんは時間ギリギリになって青山くんと一緒にステージ裏に駆け込んできたデクくんに向かって二人で詰め寄る。あと1分遅かったら私、衛星と監視カメラを全部ジャックしてデクくん探すつもりだったんだからねー？反省してください、と怒ってたらしいハロにごちんと頭に乗っかられたデクくんに指を立てる。

とにもかくにも、これで役者は揃った。ここからはノンストップ、全力の全力だ。ただただ、走りぬけるのみ。伝えるんだ、私たちの思いを。ぶつけろ、私たちの願いを。午前10時ちょうど、幕が開いた。

「どんなもんだー！1年生！」

「ヤオヨロズ！ヤオヨロズ！」

ざわざわと広がる喧騒の渦、バンドシャツ姿の私たちが静止した状態で腕をあげて止まっている。開幕の号令は、我らが才能爆発マン、爆豪くんだ！

「いくぞゴラアアア!!」

「よろしくお願いしまああああす！」



天に掲げた彼の両手から個性の大爆発が起きる。続けざまの高速ドラミングによりインパクトを与えて観客の心をつちりつかむ！音で殺る！宣言通りのその勢いに私たちも乗る、イントロを一斉に弾き始めたバンド隊、響香ちゃんの挨拶で一斉に私たちダンス隊のバンド服がフォールドプロジェクターによって専用衣装に変わった。響香ちゃんの歌声が駆け抜ける中、私たちは踊り始める。

「服変わった！」

「おおー！いいじゃん！」

ステップ、ジャンプ！バンド隊の激しいリズムに合わせて踊る私たち。ヒーロー科の厳しい訓練で鍛え上げた身体能力を十分に活かしてステージを縦横無尽に跳ね回る。そして、最初の見せ場、デクさんと青山くんの出番だ！一斉に脇にはけた私たちと逆に中央に出るデクさんと青山くん、全員でバツと二人を指し示すポーズをとる。観客の注目が二人に集まり、その瞬間デクくんが青山くんを上空へぶん投げる。そして青山くんは回転しながらヒーロースーツの機能を使ってミラーボールのようにネビルレーザーをばらまいた。

上空で天井近くにいた障子くんに上下逆でキャッチされた青山くんにロープが取り付けられる。それと同時にハロが操る轟くんの氷を削るダイヤモンドダスト発生装置から細かい氷が吹き荒れ、青山くんのネビルレーザーの光を乱反射する。そしてサビに差し掛かった。爆豪くんのドラムが加速し、響香ちゃんの歌に熱がこもる。

峰田くんが四方八方にもぎもぎを投げると同時に、上のキャットウォークから瀬呂くんのテープが発射されてもぎもぎを巻き込み芯のような形になる。それを追うように轟くんの氷結が走って観客の真上に氷でできた橋が完成した。そして私はお茶子ちゃんとタッチしたダンス隊を次々放り投げて氷の橋の上に送る。私自身もブーストで飛び立ち、圧縮ボックスを砂藤くんが投げて、それが元に戻り、シールドビツトとなる。それを足場にデクさんとえーくん、三奈ちゃんと一緒に観客の中を飛び回った。

「楽しみたい人ー！ハイタッチー！」

お茶子ちゃんとハイタッチした人が次々と浮き上がる。瀬呂くん

のテープで安全を確保して、さらに投影映像により観客の手拍子、足踏みにエフエクトが付いた、エフエクトの星が舞い散る中、私がえーくんと三奈ちゃんを空中でキャッチし、ステージに舞い戻る。ここから3人での見せ場！

ダンス経験者による三奈ちゃんを中心としたアクロバットなダンスに観客がさらに沸いた。踊りながら、私は観客席を見る。そしてすぐに、見つけた。通形先輩に抱き上げられてこちらをきらきらとした瞳で見つめるエリちゃんを。楽しんでくれてるみたいだね！それなら私、もつと頑張っちゃおうよ！

ラスサビ直前、皆がジャンプして後ろに宙返りする。その瞬間、光のゲートが発生し、皆がそれをくぐった瞬間もう一度衣装が変わる。黄色を基調とした衣装から、赤が眩しい情熱の色へ。再度の早着替えに観客たちの熱は最高潮、バンド隊の衣装も同じように光のエフエクトに包まれて様変わりする。

後ろに下がった私は、立て掛けてあったベースを手を取った。ストラップを肩にかけて響香ちゃんと一緒に前に出る。スタンドマイクからマイク本体が分離して響香ちゃんの口元に追従している。えーくんと三奈ちゃんが手を振ってからシルドビットで作られた階段を駆け上がって氷の橋のあちこちに分散したダンス隊と合流する。

響香ちゃんと目を合わせて、合図。ラスサビに入った瞬間私のベースと響香ちゃんのベースが組み合わさり、音楽の圧力がさらに高まる。元から合った響香ちゃんのベース音に私のストラップベースが組み合わさって、音楽の厚みが深まる。つてあ！響香ちゃんあんなにアドリブいれるなって言ってたのに、自分がいれてる！分かる、分かるよ！楽しいもんね！いいよどんどんいれちゃって！私たちがフオーローするから！

背中合わせになる私と響香ちゃん、観客の声援が大きく、大きく響いている。演奏に集中しながらもつい、気になってエリちゃんの方を見てしまった。私の顔に満面の笑顔が浮かぶ。笑っていた、エリちゃんが……！笑ってる！両手を広げて此方を指さし、通形先輩に指し示すエリちゃんの顔には、花が咲いたような大輪の笑顔があった。それ

に涙ぐむ通形先輩を見て、私も泣きそうになったけど、まだ途中だからこらえる。

響香ちゃんの熱のこもった歌が終わり、最後の1音が途切れる。その瞬間、爆豪くんが最大威力で爆破を起こしたよりも大きな声援が観客席のあちこちから私たちに降り注ぐ。バンド隊、ダンス隊、演出隊全員がステージに揃って、観客に向かって頭を下げ、カーテンコールが引かれた。凄い聞き覚えのある声がカーテンを揺らしている、何してるのプレゼントマイク先生。

観客席から完全に私たちが隠れた瞬間に、私は膝について崩れ落ちる。両目からぼろぼろと涙がこぼれた。心配した皆が駆け寄ってくる中、つかえながら私はみんなに伝える。

「うっ……ぐす……笑ってた！エリちゃん、笑ってたよ……よかつたあ……！」

「希械ちゃん！やったね！」

「……頑張ったな、希械。お前ら！大成功だぞ！」

「ケツ、当然だな」

エリちゃんが笑ってた、それを伝えた瞬間みんながわっと沸いた。駆け寄って私に抱き着く三奈ちゃんも、デクくんも……クラスの大多数が笑えなかったエリちゃんが笑顔を取り戻したことを知り、涙ぐんでいる。良かった！ほんとに良かった！きつと、これ以上ないほどの大成功だ！私は三奈ちゃんどころかえーくんも巻き込んで抱っこしながら、成功の余韻に思いつき浸ったのだった。

「詰め込み過ぎだろ！色々可笑しかったわ！」

「勢いがヤバすぎて笑っちゃったわ」

「B組の劇好評だなく見たかったぜ」

「しゃーない、片付けはちゃんとしないな」

「あ、アンプとかは私が何とかするよ。ハロ！」

『圧縮！圧縮！』

少しだけ余韻に浸った私たちは急いで体育館の片づけを済まして

しまう。別の体育館の中では私たちと時間差で始まったB組の劇「ロミオとジュリエットとアスカバンの囚人〜王の帰還〜」が上映されていたらしく、私たちが片づけを終えると同じくらいに上映が終了したらしくて、観客の人たちがお腹を抱えながら体育館から出てくるところだった。そんなに面白かったのかな？私もちよつと見たかったかも。

ライブに使ったアンプ、大小合わせて計40個ほどがうずたかく私の前に積みあがっている。何せ観客を取り囲むように計算してアンプを配置したからね。音が伝わるまでの遅延とかも含めて完璧な配置だったはずだ。それらが一つ一つ超圧縮技術で小型のボックスに変わる。それをあーんと食べようとしていると、響香ちゃんがじつとこつちを見ているのに気づいた。

「どしたの？」

「え!?いや……その……食べちゃうんだなって」

「うん。こんなにあっても使わないでしょ？どの会社の規格にも合わないアンプだし」

「えー……あー、その……」

「ああ！欲しいの!?!もしかして!?!」

そっかそっか！腐っても私が本気を出して作ったアンプだもの！響香ちゃんが音質に太鼓判を押す出来だったし、部屋で使いたくなつたのかなあ？でも寮でアンプなんてヤバイなんてもものじゃ……私の部屋防音室だった……！もじもじと何をかを言おうとしている響香ちゃん、アンプが欲しいのかと聞いたら凶星だったらしくて真っ赤になつて俯いて、一回だけ頷いた。やだ、かわいい。

「いいよ、はいー」

「あ、ありがと！大事に使うー！」

「うん、壊れたら直すから教えてね」

私は大、中、小の圧縮されたアンプを手にとって、どれがどのサイズなのかマジックで書いてから袋でまとめて響香ちゃんに渡す。響香ちゃんはよっほど恥ずかしかったのか顔を赤くしたままだったけど、両手で受け取ってお礼を言ってくれた。どうせ食べて失くしちや

うくらいなら欲しい人にあげちゃえばいいよね。なんかいいことした気分！そう考えていると、鈍い音がして、私の方に誰かが飛んでくる。あれは……？

「デクくん、どうしちゃったの？空中遊泳？」

「むむりはさん!?ほめん!ははひて!?!」

「え、うん？」

飛んできたのは今日の遅刻魔ことデクくん、放物線を描いて私の胸の中に納まった彼を抱き留める。私に真正面から抱き留められたせいで、腕を振りぬいた状態でハウンドドッグ先生が鼻息荒く立っていた。な、殴られたのか……体罰?いや流石に勘弁してあげて欲しいなあ、ただ転んだだけなんだし。オールマイト先生の心配っぷりっとなかったよもう。

ホント凄かったんだよデクくん?聞いている?オールマイト先生ったらデクくんが戻ってこない戻ってこないって寮と雄英の門を歩き来してたんだよ?5分おきくらいに。ただでさえ顔色が悪いっていうのに真っ青になっちゃってさ。しまいにはマツスルフォームに変身して吐血しながら探しに行こうとするもんだから全員で止めたんだよ?エクトプラズム先生に捜索はお願いしたんだけどね。

「とりあえず緑谷お前暫くあだ名は『はじめてのおつかい』な」

「あ、あはは……ゴメンナサイ」

「そうだぞー心配したんだよ？」

わざとらしくぶんすこ、と腰に手を当てて怒って見せるとデクくんは苦笑をしながら謝る。氷の橋の残骸を爆破して細かくした爆豪くんがひくひくと頬を動かして、無言でデクくんの頭を爆破した。爆豪くんの無駄に繊細な個性コントロールにより見事なアフロヘアーに変わったデクくんの表情に思わず峰田くんが噴き出した。そんなこととしてるとB組の劇を見終わった観客の人たちが私たちを見つけて手を振り上げる。

「A組……楽しかったぞー!」

「お疲れ様!来年も期待してる!」

「わっ!!やったア!アザッス!」

えーくんが素直に褒められたことに感激してお礼を言い返す。私たちも手を振り返して応える。三奈ちゃんがフォールドプロジェクトでまたまたライブ衣装に姿を変え、それに触発された女子全員が同じようにまたフォールドプロジェクトでライブ衣装に姿を変える。オーデイエンスが沸いて一通り写真を撮られたところで、中から大きな声が聞こえる。

「ごめん!こき下ろす気で見てた!」

「最高だったよ!ありがとう!」

「……言わなくてもいいのに」

「へっ、勝った」

爆豪くんは何の勝負をしてたんだろうね?それはともかく、あの私たちはヒーロー科に対してストレスを抱えていた人たちなんだろう。だけど私たちの思いは私たちが否定的に見ていた人にも届いて、その心を動かすことが出来たんだ。よかった……そうこうやっているとき、聞き覚えのある足音が。後ろを振り向く。

「エリちゃん……楽しかった?」

「えっとね、えっとね……!」

通形先輩がエリちゃんを抱っこして、私たちの所までやってきてくれていた。エリちゃんは私と目が合うと、ふくふくとしたほっぺを紅潮させて一生懸命話し始めるのだった。

## 94話

「えっとね、えっとね！最初は大きな音でこわくって、でもダンスでびよんぴよんして、青山さんとデクさんがぴかかってなって」

「うんうん」

「手を叩くと星がでて、キラキラってしてて……！」

エリちゃんは一生懸命全身を使って私たちのショードダンスの感想を一杯喋ってくれる。その顔は明るくて、自然な笑顔に彩られていた。よっぽど楽しんでくれたんだろう、何時も言葉少ななエリちゃんとは思えないほど矢継ぎ早に、次々に言葉が出てくる。皆、爆豪くんですら片付けの手を止めてエリちゃんの感想を聞いているあたりみんな気になってくれたんだろう。身をよじって通形先輩の抱っこから抜けてとてと小走りで行ってくる。

私はしゃがんで手を広げて、エリちゃんを受け止める。私の腕の中に自ら飛び込んできたエリちゃんは最後に一番思いが籠った言葉を言ってくれた。

「わたし、わあああつって言っちゃったの！」

「楽しんでくれてありがとう、エリちゃん。笑えたね」

「うんっ！」

強く強くエリちゃんを抱きしめる。エリちゃんのほっぺと私のほっぺがくつつく、子供らしい暖かな体温が興奮でさらに高まっているのを感じた。本当に……本当に良かった。楽しんでくれて、本当なら一番喜ぶべきはエリちゃん自身のはずなのに、私が泣きそうになっちゃってるよ。デクくんもみんなも少し涙ぐんでいて、峰田くんなんかもう半分泣きながら声を荒げている。

「おらサボるな！櫛はもういいからエリちゃんと文化祭回って来いよ！ミスコンでいい席取つといてくれ！な！」

「そうだー！エリちゃんをもっと楽しませてやれ！」

「行つて来いよー！」

「みんな、ありがと！お先に失礼します！」

峰田くんの粋な提案にみんなが乗っかってくれる。確かに文化祭

は今日1日しかないし、イベントも目白押しだ。エリちゃんを目一杯楽しませてあげるにはちよつと時間が足りないほど。なので、私は有難くみんなの後押しを受けて片付けから離脱しエリちゃんと通形先輩を伴って文化祭の真つただ中に繰り出すことにした。

「通形先輩のクラスは何をやっているんですか？」

「俺たちかい!?俺たちはね、焼きそばさ！」

「おお、エリちゃんお腹空かない?通形先輩のクラスの焼きそば食べにいいっか」

「焼きそば……!」

「私よりきつとおいしいよ〜?」

「ハードルが上がるんだよね!」

エリちゃんは、通形先輩のクラスの焼きそばが気になっている様子。でもそうだよね、文化祭といえばクラス単位でやる屋台も醍醐味の1つだよ。A組でも食べ物関係の提案は出るには出たんだけどランチラッシュを超えるものを提供するのとは不可能だと飯田くんが断じて不採用になった。こういうのは雰囲気大事だし、皆もそこまです期待はしてないと思うんだけどなあ。真面目だよ、委員長。

実は初めて訪れる3年生のエリア、というか2年生のエリアも私は訪れていないんだけど通形先輩は有名人みたいでヒーロー科じゃない他のクラスの人たちもちらほら挨拶したり寄って行ってと声をかけてくれる。私やエリちゃんの行動範囲は基本1年生のエリアばかりなので新鮮だなあ。エリちゃんにも皆手を振ってくれて、優しい。

「おい通形!デートか!」

「はっはっは!そうさ!」

「え?」

「でえと?」

私とエリちゃんの声が重なる。あ、そうかこれ傍目に見たら男女二人で文化祭を回っていることになるのか。いやエリちゃんいるじゃん、デートじゃないよ。あ、これ通形先輩のユーモアか!さっきまでエリちゃんとデートしてたしそういうことなのね。通形先輩、なんと



「うかこう、ユーモアのセンスが若干ズレてるような気がしないでもない感じがする……！」

「俺が奢るんだよね！皆！焼きそば3つ！」

「あ、二つでお願いします。エリちゃんと私で分けるので！」

「そうかい!?じゃ、二つね！」

「さらっと自分の分注文してるんじゃないやねーよミリオー！」

「わ、その子がエリちゃんか！よしっ！お兄さんが腕によりをかけて焼きそば作っちゃおうよ！」

「わあ……！」

なるほど、ソース焼きそばじゃなくて塩焼きそばなんだ。じゅわつと鉄板に豚バラ肉が敷かれて、もやしに玉ねぎ、キャベツが後に続く。塩コショウでいためられた野菜炒めに店番らしい先輩はエリちゃんに見せるように丁寧に焼きそばを作ってくれている。エリちゃんはよく私がお料理してる時も手元をよく見ているから完成されていく料理を見るのが好きなのかもしれない。エリちゃんのお腹の容量を考えるとほんぶんこしてもちよつと多いくらいだけど、大丈夫かな？

「はい！どうぞ！ミリオにつけとくわ」

「え、いや払いますよー！」

「ここは俺にかっこつけさせて欲しいんだよね！」

お財布をござこそとポケットから抜こうとする私の機先を制して通形先輩は私より先に財布を取り出しそのまま会計を済ませてしまった。お、奢られちゃった……！先輩に！えーくんがちよくちよく奢ってくれたりはしてただけど私先輩にご飯奢られるの初めてだ。座れる場所があるみたいなので、失礼してそこでエリちゃんと一緒にパックに包まれた塩焼きそばをいただいた。

「おいしいかい？」

「……おいしい」

「つしやあ！どーだ見たかミリオオ！」

「流石なんだよね！」

ふうふうとあつあつの塩焼きそばを一生懸命冷ましてからはふふと頬張るエリちゃんが、美味しいという店番の先輩はガッツポー

ズをして通形先輩にアピールする。やっぱり通形先輩は凄い人なんだな、と私はエリちゃんと塩焼きそばをはんぶんこしながら勢いよく焼きそばを啜る通形先輩に改めて尊敬の念を送るのだった。

「……??？」

「エリちゃんにはまだ難しかったかな」

目の前を通るまっげが凄い顔を横した装甲車に首を傾げるエリちゃん、現在ミスコンの真ただ中。この装甲車の持ち主であるミスコンの覇者こと絢爛崎先輩を不思議そうに見ている。これどんなアピール何だろう？流石は3年間サポート科に在籍してるだけあって技術力には舌を巻く勢いだけど、果たしてこれが絢爛崎先輩本人のアピールになってるのだろうか。

私も首をエリちゃんと同じように傾げながら見ていると、次は波動先輩の番だった。おおくドレス凄い似合ってる。彼女はふわりと個性で浮くと、まるで妖精のように私たちの上空を飛び回り始めた。個性のねじれた波動の軌跡と、波動先輩本人の飾らない美しさが相まって、会場中が見入ってしんと静まり返る。綺麗だな……。

とん、と波動先輩がステージに着地した瞬間、周囲の時間が動き出す。エリちゃんもはっとなって小さな手でぱちぱちと拍手をしている。司会の人も意識を取り戻して、波動先輩を褒め称えている。通形先輩もポカンとしているあたり、彼もまたこれは予想外だったのだろうか。何というか、他の参加者とはオーラが違う、そんな印象を受けた。

この後から仕事なんだよね、という焼きそばの店番に行くという通形先輩を見送り、今度はえーくんと一緒に文化祭を回ることにになった。デクくんはお茶子ちゃんと回るんだって。指摘したらめっちゃめちや慌てて面白かったなあ、お二人さん寮生活になつてからなんとなーく仲がいいように思ってたからこういう時に一緒に回ればいいと思ってたからちようどいいよ。エリちゃんを心配してくれるのは嬉しいんだけど。

「あれ？障子くんに砂藤くん。何してるの？出店？出店許可を強奪

したりした?」

「違う、経営科のたこ焼き屋なんだが別の人気店に客を奪われてな。経営科はそれの対策会議中だ。近くにいたからと留守を任された」

「材料使っているから勝手に食っててくれて言われてよオ。結局断れなかったんだよな」

「……くるくる、すごい」

「そうか、エリちゃんたこ焼き見るの初めてか? 旨いぜ?」

なぜか別の科の人に一時的に店番を投げられてしまったらしい障子くんと砂藤くん。断らないあたりには二人の根底にある人の良さを感じる。手際よくくるくるとタコ焼き器を操る障子くんの手元をまるで魔法を見るかのように一心不乱に見るエリちゃんに障子くんは少し照れている様子だ。普段あまり感情を表に出すタイプじゃない障子くんにしては珍しい。砂糖君は別のタコ焼き器でミニケーキを焼いたりしている。

「せっかくだ、食べていくといい。切島も消費を手伝ってくれ」

「おっ!?!いいのか障子!?!ちょうど腹減ってたんだよなあ!」

「こっちのケーキも食べてくれ。即席だが悪くねえと思うからよオ」

「ありがと砂藤くん。エリちゃん、熱いから冷ましてからね」

「いい匂い、する」

ソースをかけて、マヨネーズを絞り出し、青のりパラパラ、鰹節わっさー、と複製腕をそれぞれ操って別個の作業を同時にする障子くんから船型のパックに乗つけられた大粒のたこ焼きが渡される。エリちゃんはその作業をする障子くんを尊敬の目で見つめている。その視線が障子くんにはなんだかむず痒いらしくて、ちよっと目を逸らす彼に私は思わず笑ってしまった。じと、とこちらを見る彼にごめんごめん、と手刀を切つて、冷ましたたこ焼きをエリちゃんにあーんしてあげる。

それでもやっぱり中身は少し熱いので、ほふほふと言いながら美味しそうに食べるエリちゃん、お気に召した様子だよ障子くんと彼を見るとかなり穏やかな表情でこっちを見ていた。エリちゃんにしては

速いペースでたこ焼きを食べているところを見るに相当お気に召したのではないだろうか。食べ終わったのを見計らって私はエリちゃんの手をに入れて持ち上げて、障子くんの膝の上に乗せる。どうしていいか分からないらしい障子くんに

「たこ焼きの焼き方、教えてあげて」

「……わかった」

エリちゃん、多分やってみたいという感じを醸し出していたので私は障子くんにたこ焼き器を指し示しながらお願いしてみた。何となく障子くん、エリちゃんに触れたりするのを避けてたように感じたから。同じ異形型だから何となくわかる、普通の人への接し方の難しさというやつ。エリちゃんは、私という異形型と2か月の間みっちり生活していたおかげか障子くんに怖がる様子は一切ない。

ためらいがちに開始されたたこ焼き作りのレクチャーをエリちゃんは真剣そのものという様子で聞いている。複製腕をエリちゃんの腕に添えて生地を流し込んだり、ネギや天かすを入れて、たこを入れる障子くん。エリちゃんがよいしょ、よいしょと一生懸命たこ焼きを丸くしようと頑張ってるのを微笑ましく見ると、いつの間にかギョララーが集まっついていて、砂藤くんが作っているミニケーキやエリちゃんを作っているたこ焼きの注文が入り始めた。おおっと。

とりあえずえーくんは列整理に走り、私は余っているたこ焼き器で追加のたこ焼きを焼き始める。障子くんが作り置きしていたのを含めて飛ぶように売れていく。エリちゃんは一生懸命で気づいてないけど、マスコットが追加されたことで華がでてきたのかな？経営科の人ごめんなさい、とりあえずちよつとだけ面倒を見ようかな。

「エリちゃん、楽しかった？」

「うんっ！また、やりたい」

「たこ焼き器買うか？たこパってやつ。芦戸のやつが喜ぶんじゃない？」

「いいかもね、それ」

たこ焼きを丸くする作業を大いに楽しんだエリちゃんはいつの間

にか人垣に囲まれていたことに気づいてびくびくしていたが、障子くんが複製腕の被膜でエリちゃんを包んで気を遣ってくれた隙に私が見たこ焼きを焼ききって人がまばらになった隙に脱出できた。エリちゃんは障子くんを怖がることなく、複製腕をつんつんついたりしていた。障子くんは怖がられなかったことに安堵していたけど、多分エリちゃんは気にしないだろうなっていうのは分かってたからね。

ヒーロー科を中心にエリちゃんは大人気だ。どの学年もヒーロー科は言うに及ばずサポート科、経営科、普通科の人もエリちゃんを見つけると初めて会うにもかかわらず、やれ商品サービスだの、やっていってほしいとか優しくしてくれる。お祭りの雰囲気とかが大らかにしてくれてるのかな。お腹いっぱい、と満足気なエリちゃんがうとうとしだったので木陰のベンチでエリちゃんを膝の上に乗せてえーくんとおしゃべりする。

「今日のショーダンス、楽しかったね。バンドもできて、エリちゃんも笑ってくれて……大成功だったんじゃない？」

「そうだなー！お前ずつと頑張ってたし、俺たちも気合入ったもんだしよ。緑谷が遅刻したのはひやひやしたけどな！結果オーライだろ」  
えーくんはエリちゃんの頭を優しく撫でながら清々しそうに感想を言う。A組のショーダンスは最高に盛り上がったと私自身も思っているのでえーくんの感想も頷けるというもの。私にとっても大切な思い出になった。新しい左目で見つけた最初のクラス皆で成し遂げた思い出だ。私たちの出し物を見てくれた人たちから道中声をかけまくられたのできつと見てくれた人たちにも私たちの思いは伝わったのだろう。それは……とても嬉しかった。

プレゼントマイク先生が文化祭の終了を告げる放送を聞きながら、私はえーくんの隣で、眠ってしまったエリちゃんを抱きながらいつまでも日常が続いてくれたらな、と一人思うのだった。

## 95話

文化祭が終わってしまい、完全に眠ってしまったエリちゃんをベッドで寝かしてあげるためえーくんと私はゆっくりと寮に戻っていく。片付けを途中で抜けてきてしまつて申し訳ないな、とえーくんにも謝ったんだけどエリちゃんが優先だろと男前な返しをしてくれて少しだけ心が軽くなった。

寮の中に帰つてくると、すでにちらほらと帰ってきてる人がいて私やエリちゃんに気付くと挨拶を返してくれようとするが、エリちゃんが眠ってるのを見て皆静かになった。私はそれにフフフと笑いながら自分の部屋まで行つてエリちゃんを自分のベッドに寝かす。ハロと白ハロを大きくして、エリちゃんが起きるまで見守つてもらおう。彼らが居ればエリちゃんが私がいけない時に起きても自分で下に降りてくることのできる。というか起きた瞬間に私が気づいてマツハで部屋まで戻る。

すやすやと眠るエリちゃんの寝顔に、きゅんとしながら私は彼女に布団を被せ、エアコンを適温に設定し頭を撫でてあげてから自分の部屋を出た。そのころにはもうクラスの大部分の人が戻ってきていてめいめい今日のことについて話していた。そんな感じで共用スペースに戻ってきた私ではあるけど、珍しいものを見ることができた。デクくんが、共用スペースの台所に立って砂藤くんと何やらやっているのだ。ぴこん、と面白スイッチが入った私が何をしているのかな、と台所を覗きに行く。

「デクくんがお料理なんて珍しいね？砂藤くんと一緒ってことはお菓子作り？うわ！この果物どうしたの!？」

「お、樫。手伝ってくれよ。実はな、経営科のたこ焼き屋手伝ったお札にこれもらつてよオ。折角だし打ち上げに使おうと思つてな。皆立って食べられるようにフルーツ飴にしてんだ」

「へー、ナイスだね。いいよ、手伝う。デクくんもそうなの？」

「僕は、エリちゃんがリングゴ好きだつて聞いて……。屋台でりんご飴なかったから、作つてあげられたらなつて」

なるほど、デクくんは優しいな。わざわざエリちゃんのためにりんご飴作ってるんだ。ってことはエリちゃんが寝てる今がチャンスなんじゃないかな!? サプライズになるよデクくん! 台所の一角を占有するリンゴ、みかんにバナナ、ブドウにイチゴ、パイナップルにマンゴー。なるほどこれは一苦労かもね。と私は新しく小鍋に砂糖と水を入れてフルーツをカットしつつ火にかける作業を始める。

フルーツ飴というやつは簡単に作れば手間なんてないようなものだ。もちろん手が込んだものを作ろうと思えばいくらでも手を入れることはできるけど、お祭りっぽい感じのフルーツ飴って簡単だからこそ雰囲気が出るんだよね。そう思いながら斜めにカットしたパイナップルに溶かした飴をコーティングする作業をしていると砂藤くんがぎよつとするものを手に取った。唐辛子である、それも辛いでお馴染鷹の爪じゃなくてハラペーニョというやつだ。あ、それがサルサソースを作った余りでみんなに使っていいよーって冷蔵庫に入れてたやつか!

「ハラペーニョなんてどうするの?」

「爆豪って絶対えフルーツ飴なんて食わねえだろ? 爆豪用に愛情たっぷり唐辛子キャンディだ」

「ははあ、なるほど。お、デクくん上手いね。りんご飴、完璧だ」

「そうかな。エリちゃんが喜んでくれるといいんだけど」

私や砂藤くんは食紅を使わない透明な飴でフルーツ飴を作っているけど、エリちゃん専用に使っているりんご飴だけは赤い食紅を使ってお祭りでよく見るそれそのままに作っている。艶々と赤い光を反射するりんご飴を冷風発生装置の前に置いて急速に冷やし固めてりんご飴の完成だ。私たちが作るフルーツ飴もクラスの人気分完成して、トレーに乗せて皆の所に持っていく。いつの間にか峰田くんがバナナを使って飴を作っていたが何も見てないことにした。

「うわー! おいしそー!」

「フルーツ飴かあ! そういえばなかったよな」

「お祭りっぽい!」

「打ち上げだー!」

きらきら輝く宝石のようなフルーツ飴を皆がそれぞれ好きなものを手に取って、乾杯の音頭をまつ。当然ながらその音頭を取るのには我がロボットダンス委員長、飯田くんである。飯田くんは最初はこの一か月間を全部最初から振り返ろうとしていたけど、流石にそれはみんなからブーイングが飛んだ。皆、早くどんちゃん騒ぎをしたいのだ。明日の全体後片付けの前に、景気づけをしたいんだよ。

「では、簡素に……皆！お疲れさまでした！」

「おつかれさまー！」

飯田くんの音頭に合わせて、全員好きなフルーツ飴を掲げてから、勢いよくかぶりついた。私はリンゴが食べたかったのでエリちゃん用とは別のりんご飴をがりつといい音をさせて噛み砕く。甘い砂糖の単純な味とリンゴの甘酸っぱさが合わさって、体に染み入っていくようだ。ミッドナイト先生風に言うなら、これが青春の味というやつなのだろう。

「んだこれ！辛えのか甘えのかわかんねえだろうがあ！無駄な気を回してんじゃねえ！」

「あ、爆豪くんそれ砂藤くんの愛情がたっぷり入っているから残さずに食べてあげてね」

「気持ち悪いこと言ってるんじゃねえよ！」

「またまたー、シュガータイム楽しみにしてるくせにー」

「あゝあゝ!？」

お祭り気分で気が大きくなって私ハラペーニョ飴を見て砂藤くんが文句を言う爆豪くんを弄つてみると、デクくんがあまりにも驚愕の顔でこつちを見るものだからちよつと面白い。でも知ってるんだよ爆豪くん、週に一回行われる砂藤くんのお茶会「シュガーマンのシュガータイム」に、結構な頻度で参加しているということ！私もよく参加したり砂藤くんと一緒に何かを作ったりするんだけど、砂藤くん流石個性が甘いもの関係だけあってお菓子系なら私よりも上手だからさ。私の出番ないんだよね。

ただ、ご飯とかそういうものだったら負ける気はしません。たまにやる料理勝負ではいまだ負け知らず。スイーツ対決は砂藤くんの勝



ち越し。寮の中のイベントとしてちよくちよくやってるんだ。実は甘いものも食べるといふ爆豪くんへの弄りに彼は額に血管を浮かべてキレ散らかしそうになっている。いつもの私ならこれでビビってえーくんの後ろに引っ込むのだが、まあ室内だけど花火の一つや二つ上がってもいいでしょう。爆豪くんもガチで傷つけには来ないしね。

「けほっ」

「樫さん大丈夫!？」

「何でデクくんまでアフロなの？」

「なんかかつちゃんがついでって……」

「ええく……」

いや理不尽だな爆豪くんや！アフロヘアーに生まれ変わった私と、モジャヘアーが爆発でねじ切れたデクくん。爆豪くんは鼻で笑いながら一口でハラペーニヨ飴を頬張り、バリバリ噛み砕いている。ギャグ漫画っぽく煙を吐き出して見せた私を心配するデクくんだけけど、多分デクくんの方が威力強いなこれ。平気だよー、と個性を使つてすぽつと鬘を取る様にアフロを外す。いつも通りのロングヘアーと目隠し前髪に戻った私、便利でしょ。

暫くやいのやいのやっていたんだけど、ここで玄関の扉が開く気配がした。このタイミングってことは教師の誰か、というか相澤先生だろう。相澤先生は非合理的なことは嫌うけど、こういう場をわざわざかき乱したりはしないし、むしろ楽しめるときに楽しんでおけつていう人だから。皆特に気にすることなく今日の感想を言い合っている。ヒーロー科の歌姫なんてあだ名がついた響香ちゃんを弄り倒す三奈ちゃんとかね。峰田くんはバナナ飴を泣きながら全部食べてる。食べ物が無駄にしない精神はととてもいいことだ。しようがないから一本食べてあげよう。がりつとな。何でそんな目をするんだろう？

「盛り上がってる所悪いが樫、ちよつと」

「え、はい。何でしょう」

「あー、管理人室までこい。大事な話だ」

ぬつという感じで共用スペースに現れた相澤先生に指名される。

なにかな？明日の全体片付けのゴミ箱係のことなら了承済みなんだけれども。大事な話、とわざわざ言うあたり何か重要なことがあるのかもしれない。残りのりんご飴を芯ごと全部食べた私はみんなに断つてから管理人室に入る。ハロと視覚共有してエリちゃんが安らかな寝息を立てていることを確認して相澤先生に向き直った。

「単刀直入に言う。エリちゃんの里親が9割9分9厘お前の両親に決まりそうだ。貯蓄、仕事、家庭環境もろもろ……国の審査を通りつつある」

「……本当に、ですか」

「ああ。このまま不測の事態が起こらない限り、個性訓練を終えればそうなるだろう。エリちゃんは？」

「今は、寝ちゃってます。多分そろそろ起きてくるとは思いますけど……」

「話してやってくれ。俺からよりも、お前の方がいい。お前ももう、我慢するな」

ドキツとした。相澤先生に言われた我慢するな、という言葉に。エリちゃんの気持ちは分かっていたつもりだ。だからこそ、私はエリちゃんが私の所からいつでも巣立てるように何とか一線を引いた対応をしてきた。彼女の気持ちに寄り添いつつもそうじゃない方向に向けるように誘導していた。少しづつ、1日の中で離れる時間を増やしていった。

両親がエリちゃんの里親に立候補した時に私が感じたことは心配とか、焦りとかではなく……安堵だった。同時に私はこんなことを考えた最低な自分を嫌悪し、唾棄していた。たかが一緒に生活した程度で、たかが母親と重ねられた程度で親にでもなった気分なのかと。無邪気に私に好意を向けるエリちゃんをぬいぐるみか何かとでも思っていたのかと……オーバーホールと同じじゃないかと。

いつの間にか私の日常に入り込んでいたエリちゃんがいるのが当たり前になっていて、いつか必ず離れなければならないというのは分かったのに、一緒にいられる期間が増えたんだとまず喜んだ。こんな感情が自分の中にあるのが信じられなくて、悲しかった。だから

ずっと、私では絶対にダメだと考えていたんだ。

「我慢なんてしていません。いずれは私はエリちゃんの前から消えなくちゃならない人間です。両親に任せるのだって反対です。エリちゃんは私を見るたびに本当の母親を思い出しています。自分が戻ってしまったおおかあさんを。そんなのは……良くない」

「傲慢だな」

べちこん、と相澤先生は手に持っていたファイルで私の頭を叩いた。相澤先生にしては珍しいそれに私は俯いていた顔をあげる。相澤先生は目を逸らすことなく私を見据えていた、私はそれに後ろめたくなってまた、目を逸らしてしまう。

「悩んでいたのがお前だけだと思うなよ。確かに最初からお前はエリちゃんにとって特別だった。けどな、エリちゃんは考えてたぞ。それで、選んだ。お前自身の傍にいたいと自分からな。気づいてるか、エリちゃんが自分から触れるのはお前だけだ。緑谷でも通形でもなく、お前だけだ。エリちゃんは、お前が自分の母親じゃないことをちゃんと理解している。した上でお前をしたっているんだ」

「……いいんでしょうか、私でも」

「俺から言わせてもらえればな、お前は立派にエリちゃんと家族してるよ」

相澤先生の言葉は無責任ともとれるそれかもしれない。けど、相澤先生は相澤先生で毎日エリちゃんと一緒に生活しているし、過ごしている時間なら私に次ぐだろう。きつと私に言えないことも伝えてるに違いない。迎え入れていいのだろうか、私と家族になって、と伝えていいのだろうか。……相澤先生に言われて自分を見つめなおす。どうすればいいのか、それは最初から決まっていた。私が勝手にしり込みしてただけで。両親はそれを見透かした上で、相澤先生は察したうえでずっと見守ってくれていた。私は立ち上がる。

「どこ行く」

「エリちゃんが起きました。気持ちは決まったので、言いに行きます」

相澤先生は頷いてくれた。私はそのまま、共用スペースの喧騒を背

にして、自分の部屋へ行く。私の部屋の中では目を擦っていたエリちゃんが入ってきた私に気づいて、ぱつと顔を明るくした。私はエリちゃんに笑いかけながら、前置きする。

「エリちゃん、大事な話があるの。聞いてくれる？」

「大事な、話」

「そう。エリちゃんの里親……新しい家族、私のお母さんとお父さんに決まったって。さつき相澤先生が教えてくれた」

エリちゃんの横に腰掛けて、エリちゃんにも分かりやすいようにそういうと、エリちゃんは隣でこの先の言葉が本題だと察して、身を硬くする。不安は勿論ある、受け入れてもらえるのかだつてわからないけど言おう。2か月、たったそれだけでこんな言葉を言うのはおかしいのかもしれない。だけど、偽らざる私の本音だ。

「だから、エリちゃん……私と家族になつてくれませんか？」

「……いい、の？」

「私は、エリちゃんと家族になりたいな」

「もう、呼んでいいの？」

「……いいよ」

「っ………！お、おかあ、さん………！」

言うが早いのか、エリちゃんは私に抱き着いてそう呼んでくる。私は彼女を抱きしめ返してから、返事をした。おかあさん、エリちゃんがかくれた信頼の証。そう呼ばれるにふさわしい人間であろうと、私は決意をする。それまでずっと、そう呼ばずに我慢していたエリちゃんには、堰を切ったように泣き出した。私はそれを受け止めて、何度も確かめるようにそう呼ぶエリちゃんにずっと、返事をし続けた。

## 96話

「へっちよい！」

「常闇くん、風邪？」

「いや、息災だ。我が粘膜が仕事をしただけのこと」

「なんだそれー」

木枯らしが吹き始めた11月、相澤先生から今日はお客さんが来るから共用スペースに待機しているように、と連絡を受けた私たち1年A組は雑談に花を咲かせつつ、誰が来るんだろうなあと楽しみ半分、期待半分で待つ。そんな中盛大に特徴的なくしゃみをした常闇くんをみんなが心配する。エリちゃんが「だいじょうぶ？」と常闇くんを心配そうに尋ね、常闇くんは問題ないと返した。言い回しが難しかったのかエリちゃんは頭を傾げているけどね。

エリちゃんは、かなり表情が変わるようになった。ちよつと物静か気味なのは多分元の性格で、明るくなつたように思う。今となつては2か月前の状態が嘘のように思えてきた。ここまで精神的に持ち直すことができたのはきつと、皆がエリちゃんを気にしてケアをしてくれたり、積極的に話してくれたからだと思う。私の隣に座って白ハロを抱っこしているエリちゃんを見て、私は一人頷いていた。

「おかあさん」

「なに？エリちゃん」

「お客さん、って誰？」

「それがねー、相澤先生教えてくれなかったの。だから、サプライズだね」

「なー、来賓ってことは俺たちが知らない人かもしれねーんだろ？」  
「おかあさんと、私を呼ぶエリちゃんに優しく答える。このおかあさんっていうのは、エリちゃんにとって親、という意味じゃなく……一番安心できる人って意味だと思う。私を母親として慕っている、ということではなく家族として一番傍にいて安らげる人ってこと。エリちゃんにとつてその象徴がおかあさん、だから私をそう呼びたい。そういうことなんじゃないかな。」

そう、エリちゃんと私は家族になった。国の審査を通過して私の両親がエリちゃんの里親になるってというのが法的に認められたのだ。行政の判断にしては随分と速い気がするが、それはエリちゃんの個性が関係している。エリちゃんの個性は忌まわしきオーバーホールが目を付けたこともあり、第一級の超強個性だ。人を治療するどころか、やろうと思えば殺せてしまう。破壊と再生を両方でできてしまう強い個性。

その個性の作用範囲外にあると思われるのが、私と試せてはいないけど私の両親だ。エリちゃんの個性の作用範囲は、純生物であること。異形型の中でも無機物が体内に入り混じって矛盾した状態の私たちには効かない可能性が高い。だが、エリちゃんの個性が成長して効くようになってしまう可能性ももちろんある。それでも、今効かない可能性が高いというのは最重要だ。

仮に、養護施設に預けるにしてもその個性を知った職員や子供たちがエリちゃんを腫れもののように扱ってしまうかもしれない。杓子定規な対応でおなじみの行政も考えてはいたということだね、一応。それに個性関係のいじめというのも考えられる。私はかなりマシな部類だったと思うけど、経験者としてはアレは堪えるのでないに越したことはない。

それと両親の社会的立場も強く働いた。警備会社の部長ポジション、お父さんに至っては現場にも出ることがある。これが何を意味するということかというのと、仮にヴィランに襲撃を受けた場合でも一般人よりは耐えられる可能性があるということだ。というかお父さんに至ってはヒーロー免許持ってるしね。使っていないけど。お父さんの個性、異形型だけどどっちかといえば増強型に近い感じで人気が出なかつたんだって。

纏めると、エリちゃんの個性が効かない、養護施設にいた場合の危険性、さらには預けた場合の安全性。この3つが決め手となって異例の速さでエリちゃんの里親は私の両親に決まったというわけだ。嬉しいか嬉しくないかで言えば、嬉しいのだけでも、私でよかったのかという思いは常に付きまとう。

「そーいや、お前エリちゃんの両親に会って来たって?」

「会ってきた、まあそーだね。お参りさせてもらったよ」

里親が完全に決まった時、私の両親とエリちゃんは顔合わせをして、エリちゃんの両親のお墓へ参らせてもらった。死穢八齋會も一枚岩ではなく、逮捕された人間の中に所謂前組長派の人がいて、その人が司法取引の中でエリちゃんの生家とご両親のお墓の場所を教えてくださいそうだ。自分は何もできなかったが、どうか組長の孫のことは悪くしないでくれと繰り返しお願いしていたことを、相澤先生越しに私は知った。

両親にお参りに行きたいと言ったのは、エリちゃんだった。本当なら、内内に私と両親でご挨拶に行こうとしてたんだけど……エリちゃんから本当のお父さんとお母さんにちゃんとごめんなさいをしたいと申し出た。個性事故によるそう言った事例は……ないわけではない。昨今の複雑かつ高威力になった個性では、そういう事故は起こり得てしまうからだ。だから、前にどんどんと進もうとするエリちゃんの意味を尊重して、私と両親は彼女を連れて彼女のご両親のお墓参りに行かせてもらった。

エリちゃんは、遺骨の入ってないお墓に小さな手を合わせて、ひたすら祈っていた。両親と私も同じく。ただ、必ず無事に育て上げると私のお父さんは口に出して宣誓した。ご両親が私たちをどう思ってくれるかは、分からないけど。墓前で誓ったことを無駄にするつもりはないし、必ず守ると私は誓った。あとは見てもらうだけだ。

ガチャリ、と玄関の扉が開く。どうやら来賓だという人が来てくれたみたいだ。私たちは飯田くんの号令でお出迎えの態勢に入る。誰かなー?

「煌めく眼でロックオン!」

「猫の手助けやってくる!」

「どこからともなくやってくる」

「キュートにキャットにステインガー!」

「二「ワイルド・ワイルド・プッシーキャッツ!」二」

「プッシーキャッツ!お久しぶりです!」

「元気そうね、キティたち！」

「虎さん、お久しぶりです。その節はどうも。洗汰くんも！元気だった!？」

「ああ、元気そうで何より」

なんと！来賓だというのは夏休みの合宿でお世話になったプツシーキャッツの皆さんだったのだ！エリちゃんは息が完全に合った決めポーズを見て首を傾げているけど。いやー、久しぶりだなあ。それに洗汰くんの姿もある！がちやっと私が立ち上がって虎さんに神野のお礼を言うと、後ろにちよこんと洗汰くんがいるのが見えた。むむむっ！身長が伸びたね！成長期だなあ。

「久しぶり洗汰くん！手紙、ありがとうね！宝物だよ！」

「ちつとでかくなったかあ!?!元気そうでよかったよ！」

「うわわっ!?!」

洗汰くんと関係があるデクくんとえーくんが駆け寄り、確かに大きくなった洗汰くんの脇にえーくんが手を差し入れて高い高いという感じに持ち上げる。えーくんの筋力なら洗汰くんなんて羽根より軽いだらう。最近相澤先生にお前増強系も持ってないよな？て確認取られてたくらいには力が強いし。流石えーくんカッコいい！

「ふふ、緑谷くんこれとこれ、見て」

「うわっ!?!やめろよ！」

「靴!?!お揃いだ！後リストバンドも！」

「赤がいいって聞かなくてねー」

マンダレイが洗汰くんの靴と腕を指さす。そこにはデクくんが良く履いている赤くてごつくておつきな靴と同デザインで洗汰くんサイズの靴が揃えられていた。へー！お揃いだ！凄い凄い！そして赤いリストバンド、もしかしてこれフルガントレットの待機状態じゃない!?!やだ！洗汰くん立派にデクくんのファンになってる！

かわいー、と思わずニマニマした私とえーくんがデクくんは顔を赤くしつつも洗汰くんにお揃いだね、と声をかける。洗汰くんはまだやっぱり恥ずかしいのか無言になってこくん、と頷いた。かー、青春というやつかこれが！ミッドナイト先生があんな感じなのがちよっ



とわかるかもしれない。むふふ……。

「しかしまた、どうして雄英に？」

「復帰のご挨拶に来たのよ」

「復帰ですか!?!おめでとうございます!」

「ラグドールの個性、戻ったんですか? 活動見合わせの理由って……」

「戻ってないよー! アチキは事務仕事で3人をサポートしていくの! 題してOLキャッツ!」

「タルタロスから報告は貰うんだけどね」

そう、個性「サーチ」……夏合宿で私と爆豪くんと一緒に攫われたラグドールはオールフオーワンに個性を奪われた。私も一被害者としてタルタロスから定期的にオールフオーワンの尋問の結果を聞いてはいるんだけど、依然私の左目の行方は分かってない。個性因子を使つての個性のコピーという話もいまだに謎のままなのだ。

悪いとは思っているんだ、という嘘塗れだろう台詞が記載された報告書にはこちらを煽るだけのオールフオーワンが載っているだけで、核心に迫ることができていない。個性を使えばラグドールの個性を返す、というやつという言葉を用いるわけもなく、タルタロスに封印しておくことしか今はできないのだろう。だから、ラグドールの個性はいったん棚上げの状態なのだそうだ。何もさせないことがやつを抑える唯一の方法なの、というマンダレイの顔は明るいものではない。

「それならば、なぜこのタイミングで復帰を？」

「それがね、今度発表されるヒーロービルボードチャートJPの下半期、私たち411位だったんだ」

「え、すごい」

思わずポロリと言葉が漏れる。私の足元にやってきてじつと冴汰くんを見るエリちゃんに冴汰くんは自己紹介して手を差し伸べた。エリちゃんもぼそ、と自己紹介をしておらずと手を取る。白ハロとハロが二人の仲を取りもち、ちよつとだけ恐る恐るの会話が始まるのを見守りつつ、私はマンダレイの言葉を分析する。

ヒーロービルボードチャートJ.P.、ようは日本の中にいるヒーローを人気、実績、実力その他総合的な面でランキング付けしたものだ。年2回発表のソレがもうすぐテレビでやるんだけど、前回32位だったプッシーキャッツが411位だった。急落したように見えるんだけど、違うの。ヒーロー飽和時代とも呼べるこの時代で、神野から全く活動してなかったプッシーキャッツたちが3桁の順位を保っている。これは凄いことだと思う。

つまり、それだけ固定ファンがいて、人気があるということの証左なのだ。これ実はとんでもない事なんだよね。だって、ヒーロー飽和社会、4桁では足りないヒーローがいるのに何も活動してなかったプッシーキャッツが3桁順位にいる。どれっただけ支持率が高かったのだろう。そんな結果を耳にしたなら、動かざるを得ないよね。

お茶だけでもしていつてくださいよ、と半ば強引にプッシーキャッツの皆さんを席に案内する。百ちゃんが高級な紅茶を入れて、砂藤くんが私と一緒に作ったホールケーキを切り分けて持ってきた。すぐ行かなきゃならないと遠慮していたプッシーキャッツの面々もここまでされてしまつては席につかざるを得ない。

「そういえば、この子は」

「私の娘です」

「「「娘え?!」」」

「言い方よ、言い方」

「だってこれ以外言うことある?」

「義理のをつけるって言つてんだよ希械」

「な、なんだ……ホントに産んだのかと思つたわ」

「いや何年前だと思つてるんですか。私まだ16ですよ?」

冨汰くんとハ口達と遊んでもらっているエリちゃんをマンダレイがさして尋ねる。1歳お姉さんのエリちゃんだけど、ほぼほぼ同年代なおかげなのか冨汰くんがリードする形で楽しそうに遊んでいた。別に隠すことはないので実質私の娘みたいなものですと答えてみると、結構驚いたのかプッシーキャッツの息の合った突っ込みを見られた。なんか得した気分。

だって、結構似てるわよ？とマンダレイが私とエリちゃんを指して言う。まあ、髪色と目の色一緒ですからね。私の場合本当は目の色蒼いんですけど。しかし、そんな風に見えるのかな？仮にエリちゃんが実娘だったとしたら私は10歳かそこらで産んでることになっちゃうし、犯罪だよ。というかそんな風に見える!?老けてますか、私は。

「なんだか見ないうちに大きくなったわね」

「身長はもう伸びてないんですけど」

「そういう意味じゃないわ。人としての大ききよ。貴方に限らず、このクラス全員ね」

「風格が出てきたと言ってもいい。その年にしてプロの空気を身につけつつある」

「実力はまだまだだけどね！精進するように！」

流石はヒーロー、エリちゃんの事情をうつつすらとだけ察してくれたりらしい。洗汰さんとエリちゃんは少しだけ仲良くなれたのか、砂藤くんが持つてきたケーキとオレンジジュースを一緒に食べている。微笑ましいなあ。しかしプツシーキヤッツ、結構べた褒めに私たちのことを褒めてくれる。褒めてもケーキしか出ないぞ。あ、持ち帰りにマドレーヌいかがですか？バター多めのフィナンシェもありますけど。砂藤君お土産入りまーす！

## 97話

『俺を見ていてくれ』

「んー、チャート発表から連日このニュースだねえ」

「しようがないよ……オールマイトがない初めてのビルボードだから……」

「めらめら……」

本日は休日、朝ごはんを食べた後片付けを済ませた私とエリちゃん、そしてデクくんが共用部のテレビを見ながら雑談に花を咲かせている。テレビに映っているのはつい先日発表された下半期のヒーロービルボードチャートの結果だ。その映像には2位の速すぎる男ことウィングヒーローホークスに煽られてコメントをするエンデヴァアの姿があった。

万年2位の繰り上がり、と揶揄する人もいるが2位の座にいたのは紛れもなくエンデヴァアの実力なので、圧倒的だったオールマイト先生がその座を去れば必然的に彼が1位になるのは自明の理だった。それはきつとエンデヴァアの望む1位の取り方ではないにしろ、その座についたからには求められる役割があると思う。

俺を見ていてくれ、有言実行どころか不言実行に定評のあるエンデヴァアらしい言葉だと思う。実生活のことを知ってる身としてはあまりいい印象はないのだけれど、ヒーローとしてのエンデヴァアの決意表明としては満点だったのではないだろうか。それはそうと舞台裏でホークスが燃やされてそうだなあ、と私は予想している。ああいうのエンデヴァア嫌いそうだし。

エンデヴァアの燃え盛る炎がきれいだったのか、めらめらと口に出したエリちゃんがじつとテレビを見ている。純度の高い燃焼を常に行っているエンデヴァアの炎は確かに美しいと思う。実直な彼のパーソナリティがそのまま出ている感じだ。最近のエリちゃんはいんなものに興味を示し始めたのでちよつとだけ大変だ。子供らしくてたいへんよろしいのだけれども。

「じゃあ、僕は先に失礼するね。オールマイトに呼ばれてるんだ」

「あ、今日ナイトアイも来るって聞いてるから、しごかれてきてね」  
「ほんと!? 益々頑張らないとね!」

「デクさん、頑張つて」

「ありがとうエリちゃん! 行ってきます!」

休日ではあれど、デクくんには休みはない。いや、休みはあるんだけど自主練に当てているというのが正しいか。休みだからこそ、といえるかもしれない。なぜなら授業のことを考えることなくオールマイト先生が付きつきりでデクくんに修行をつけているのだから。オールマイトファンとしても彼の弟子、次代としても外せない用事だよな。

そうそう、ナイトアイは一応オールマイト先生と話し合つてデクくんがワンフオーオールを持ち続けることに納得したみたい。まあ、通形先輩が「いらないです」とずばつと言いつつ切つたつてこともあるだろうけど。だから、時間を見つけては雄英に足を運んでデクくんに通形先輩にやったように経験と予測をつけさせに来てるのだとか。あとインターン中止になつちやつたから通形先輩の顔を見るついでに、という形みたい。麗しき師弟愛だねえ。

「……おはよう。樫、緑谷みたか?」

「んー、今日は自主練だつて。さつき出て行つちやつた。えーくんは今日は爆豪くんとお出かけだし、私も何しようかなあ」

「暇なのか?」

「暇だねえ。ねえエリちゃん?」

「おかあさんと一緒だから、暇じゃない」

「やだ凄い可愛いこと言ってくれるー!」

なんて健気なことを言うんだこの子は。私はエリちゃんをぎゅーつと抱きしめてうりうりと頬ずりする。私に声をかけたのはカジュアルな服に身を包んだ轟くん。轟くんは休みのたびに必ず出かける、入院中のお母さんのお見舞いに行くというのはクラス全員が知っているので今日もお見舞いに行くのだろう。あれ、でも緑谷つてことはデクくんに用事があつたのかな?

「デクくんは用事?」

「まあ、そうだな。正確には飯田、緑谷、お前に用事があった」

「私にも?」

「急で悪いんだが、今日ついてきてもらえねえか?」

「お母さんのお見舞いに?」

轟くんはクールな顔のまま私たちに用事があったという話をした。うーん、顔がいいって女子の皆は言ってるけど確かにイケメンな顔だよね轟くん。実はちらほら文化祭の時に聞いたんだけどバンドの時轟くんがいないのが残念っていう声があったのは事実。轟くん人気だねえ。それはともかくとして。

お母さんのお見舞いについてきてほしい、1—Aで一緒になってからそんなことを轟くんが言うようになったっていうのは初めてのことであった。だってずっと轟くんって一人でお見舞いに行ってるものだし、ごくごく一部の人しか知らないけど、家族のあれこれ今その時間を取り戻しているところだろうから邪魔するわけにもいかないじゃないのさ。そんな轟くんがわざわざお見舞いについてきてほしいっていうには何か理由があるはず。

「どうして、って聞いていい?」

「……この間、お母さんに今日行くって手紙書いたら……私のは大丈夫だからお友達と遊んだりしてもいいのよって返ってきた。ずっと休みはお母さんのところ行ってたから、心配されちゃった」

「なるほど、それでお友達がきちんといるっていうことを伝えて安心させたいと」

「ああ。お前らのこと、結構話したつもりだったんだが……気にしてたみてえなんだ」

なるほどね。轟くんのお母さんとしては、休みの時に毎回来る息子が話だけじゃなくちゃんと友達と学校生活やれてるか不安でたまには休日遊んで来たか?という話をしたんだけど、轟くんはそれを友達がいるかどうか不安になったから安心させたいなっていう風に受け取ったんだ。なるほどなるほど……私はいんだけど……

「エリちゃんももれなく付いてきちゃうけど平気?」

「おみまい?」

「そう。轟くんのお母さんが元気になりますようにーって」

「来てくれんなら多分、平気だ。それよりもエリちゃんって……」

「ああ、それは平気。わかった、じゃあご一緒させてもらいます」

「わりい、ありがとう」

残念ながら、今日は相澤先生は不在、ミッドナイト先生はパトロール。他の先生にエリちゃんを預けていくという手もないわけじゃないけど、今日は一緒だよと約束した手前それは憚られた。そうなれば一緒に連れて行くということになるんだけど、轟くんが心配してるのはエリちゃんの病院への恐怖のことだろう。それに関しては、もう平気だ。克服とはまた違う、分かったというべきだろうか。彼女が病院の……医療機器やそれがある部屋を怖がっていたのはそれが自分を傷つけるものだったからだ。

けど、今はそうじゃないことを理解している。健康診断で来る優しいお爺ちゃんのお医者さんがエリちゃんの警戒心を解いてくれた。だから、直接メスなどの危ないものを見せない限り大丈夫だ。今日の個性エネルギー測定もゼロ。暴走はしないだろう。もちろん先生方の判断を仰ぐことにはなるだろうけど、エリちゃんとお出かけするのはお医者さんにも推奨されてるのでお見舞いにはいけると思う。

「準備してくるからちよつと待っててもらえる?」

「ああ。急いでねえからゆつくりでいい」

「ありがと」

おめかししようか、とエリちゃんを抱き上げて私は自分の部屋に戻る。お土産は……作ってる時間がないから昨日焼き上げたフィナンシェでいいかな。真空パックしてあるし保存は効くはずだから。そういうえば私、轟くんのお母さんに初めて会うんだよね。わ、なんか緊張してきたぞ。体育祭で轟くんと本気で戦ったのは見られてるだろうし、顔くらいは知られてるのかなあ。

「緊張するなあ……」

「そうか?お前が職場体験で言ってくれたみてえに、優しい人だから大丈夫、だと思っ」

病室の前にて、私はエリちゃんと並んで立ちながら unnecessary 緊張を感じていた。背筋がピンと伸びて、高い背丈がより高くなってしまったみたいだ。私とエリちゃんでお揃いにしたサイドテールのシユシユを何となく直してしまふ。お友達の親御さんに会うのなんてえーくんを除けばそれこそデクくんのお母さんである引子さんくらいだし、それもお見舞いの一度きりだ。私から行くの初めて。エンデヴァー? ノーカンでお願いします。

こんこん、とノックをする轟くん、待ったなしか! いや家族だもんね、そうだよね! どうぞ、という声の中から聞こえてドアが内からスライドして開く。顔を出したのは、白い髪にところどころ赤が混ざった眼鏡の女性だ。一言で言えば、美人さん。この人が轟くんのお母さん? にしては若いような……まさかエンデヴァー!?! いや絶対ない、ない。流石にない。何を考えてるんだ私は全く。

「姉さん、来てたのか」

「焦凍!?! そっか、今日学校休みなんだ。えっと……こちらの人はもしかして……」

「友達。お母さんに会わせてあげたくて、来てもらった。樫、この人は俺の姉さん。冬美姉さんだ」

「轟冬美です。そっかー、姉さん焦凍にも彼女が出来た、のか、と……??」

なるほど、轟くんお姉さんいたんだ、初めて知った。冬美さんというらしい轟くんのお姉さんは一瞬私を轟くんの彼女だと思っただらしい。いやいや不釣り合いなんですよ、イケメンとこんなウドの大木みたいな女は。轟くんの彼女かあ……百ちゃんあたりがお似合いな気がする。天然同士だし。冬美さんは私を見上げていたせいで、足元のエリちゃんに遅れて気づいたらしい。かなり慣れた様子でしやがんでエリちゃんに目線を合わせてくれた。

「貴方の名前は知ってるわ。体育祭で見たもの、樫希槇さんよね? この子は貴方の妹さんかしら?」

「エリ、です」

「挨拶できてえらい! それに関してはうーん、まあちよつと複雑で



して……有体に言えば義理の娘ですかね……？里親は両親ですけども、私がこの子にとってはおかあさんということ……」

「あんま突っ込まないでやってくれ、言いづらいし、複雑なんだ」

「教師やってればそういうことは間々あるわ。ごめんなさいね、聞きにくいこと聞いて。立ち話もなんだし入って行って。お母さんも待ってるわ」

そう言って扉の外から内に招かれた私たち、ととととと続くエリちゃんに歩幅を合わせてゆつくりと中に入ると、ベッドの上で体を起こしている女性と目が合った。優しそうな顔を綻ばせた女の人は美しい所作で私に頭を下げてくれる。慌てて私も頭を下げる。そっか、この人が轟くんのお母さんかな。冬美さんと轟くん、似てると思ったけどお母さんは余計にそっくりだ。親子だな、と私は当たり前前の感想を抱く。

「初めまして、轟冷です。焦凍ったら私があんなメール送ったからわざわざお友達にお願いしてくれたの？そんな、気にしなくていいのに」

「別に、どっちにしても紹介したかった。緑谷とか飯田はまた今度連れてくる。俺の友達お母さんに知ってほしかった」

「初めまして。樫希械といいます。こっちはエリちゃんです。轟くんには色々お世話になってます」

「俺、お前には世話になりっぱなしだ。赫灼の時とか」

「そう？アレはとっかかりを掴むのをお手伝いしただけだし、私は見てただけだよ？」

轟くんとちよつとした会話をしているとエリちゃんがお土産を渡したい、と申し出てくれたので片手に持ってたお土産をエリちゃんに託すと冷さんの所までとことこ歩いて行って、お大事にしてください。とお土産の袋を手渡してくれた。そこでエリちゃんは恥ずかしくなっちゃったみたいでぴゅーっに戻ってきて私の後ろに隠れる。冷さんはそれを微笑ましく思ってくれたみたいで、優しい笑みを湛えていた。

「ちようど冬美があんな感じだったのよ。小さい時ね。懐かしいわ

……樫さん、焦凍は普段どうですか？ちゃんと学校でお友達と仲良くやれてますか？」

「轟くんはみんなと仲良くやっていますよ。今日は私だけでしたけど、私より仲がいい親友が二人もいますからね。それに、文化祭でも轟くん大活躍だったんですよー！」

「文化祭？焦凍からはバンドとダンスで色々やるって聞いていたわ」

「見ますか？轟くんドアップでお届けしますよ」

「見れるの!？」

文化祭のショーダンスは体育館中に仕込んだカメラによって私が隅から隅まで、何だったら一人につき3カメラくらいの勢いで全員を同時に録画してたりする。これはみんな了承済みで、もう少ししたら私が編集したショーダンスの動画が映像媒体で公開予定だ。ちなみに飯田くんの案で、文化祭で見れなかった皆さんにも見てもらえれば、とのこと。動画の公開は相澤先生に公開予定の動画を見せてから許可が下りるかどうか決まる。

動画ありますよ、といった私の言葉に一本釣りされたのは冷さん、ではなく冬美さんだった。にこにこことエリちゃんを見ていた彼女は私が動画を保存しているのを知った途端すさまじい勢いで私に詰め寄る。見たいんだ、轟くん裏方だからあまり出番はなかったのだけれども。じゃあ流しましょうか、と私が投影映像で公開予定の編集版と轟くん寄りカメラを2画面同時で再生する。

わー、外部の人に見られるの初めてだから緊張するなあ。と思いなから私は動画を再生するのだった。

## 98話

大きめのテレビ画面ほどの大きさにした投影映像の中では、ざわざわとした体育館全体の様子が映し出されている。外部の人間を関係者以外一切入れなかった文化祭の様子は、当然親御さんは知ることができない。飯田くんが提案した見れなかった人用の映像撮影がこんな風に役に立つとは思わなかった。演者でなかった轟くんの様子がアップカメラに写されている。

キャットウォークの欄干に体を預けた轟くと欄干に器用に置いてあるハロ、そして砂藤くん、障子くん、口田くん、瀬呂くんの演出隊の面々が見守る中、幕が開いた。開幕の掴みに合わせて轟くんがハロに指示を出す。同時に口田くんの個性で白いハトが観客の上を飛んだ。

「すっぴい」

「ほんとね……」

演奏の掴みにぼろつと二人の言葉が漏れた、内心でガッツポーズ。爆豪くんの言葉も馬鹿にできないものだね。そこからの早着替え、ダンス……それを見守る画面の中の轟くんの顔は……笑っていた。日頃クールな彼はよっぽどのがなければ表情を崩さない。それこそ、お腹を抱えて笑うとかは見たことがないほど。だから、私はカメラの映像を確認してちよつと驚いたんだ。あの轟くんがこんな無邪気に笑うんだって。

微笑んだりとか、そういうのは普通に見たことあるし表情が変わらないながらも意外と雰囲気は雄弁なのが轟くんだ。その彼が、公演中ずっと笑みを隠さなかった。轟くん自身も今客観的に自分を見てその時笑ったことを知ったのだろう、ちよつと驚いてる。轟くん最大の見せ場、幾重にもかかる氷の橋。観客から見えやすく、それでいてど派手になるように何度も練習を重ねたそれ、自信に満ちた顔をしてそれを行う轟くんを見て、冷さんはじわ、と目に涙を浮かべた。

流れている動画が終わり、私は投影映像を消した。冬美さんが目尻を拭う冷さんに駆け寄った。轟くんもお母さんが心配になってし

まったらしくて少しだけ顔を消沈させながら近くによる。冷さんは大きく息を吸い、心を落ち着かせた後に轟くんをまっすぐ見つめた。

「おつきくなつたのね、私の中のアナタはずっと……私が貴方から離れたところで止まっていたわ。貴方がお見舞いに来てくれるようになってから、お手紙をくれるようになってからも……私の心のどこかで貴方はそのままだった」

「お母さん……」

「でもね、今を見て……私も前に進まなきゃって思えてくるの。貴方は素敵なお友達に囲まれて、私のずつと先に行っちゃったわ。私も追いつかないとね」

ほん、と轟くんと冬美さんの頭に手を置いた冷さんは二人の頭を抱き寄せてそんなことを言った。やっぱり母親っていうのは偉大だな、と私はその光景を見ながら今さらになって感じた。冬美さんの目から涙がぼろりとこぼれて堰を切ったようにとめどなく溢れていった。私はエリちゃんをそつと抱っこして、一旦病室の外に出る。ここからはきつと、家族の時間だ。私やエリちゃんが入っていいものじゃない。

「わりい、連れてきておいて放っておいちゃった」

「気にしないで。私こそ、急にいなくなったりしてごめんね」

「いや……助かった。お母さんがあんな風に色々話してくれたの、久しぶりだった」

轟くんの携帯電話に病院の休憩室にいるよ、とメールをしてエリちゃんと待つことしばし。エリちゃんとオセロをして過ごしている、と、私がいけないことに気づいたらしい轟家の3人が慌てた様子で休憩室にやってきた。エリちゃんの白一色に染まったオセロの盤面に私が接待をしたのがばれてぼこぼこエリちゃんに抗議をされていたところを見られてしまいちよつと恥ずかしかったけど。

謝られるようなことをされた覚えはないので謝らないでください、ときっぱり断った後に冷さんと冬美さんはそれでも、と謝ってくれたけどそこからは普通に談笑することができた。まあそれで、冷さんや

冬美さんに普段の轟くんの様子を根掘り葉掘り聞かれた。授業ではどうだ、とかみんなどうまくやれてるのか、とかね。

みんなどうまくやれてるかどうか、といわれても私の視点での話なので仲いい人はいますよ。という感じなんだけどね。ここ最近は無免の補講と重なってあまりお見舞いに行くことは出来なかつたみたいだからね轟くんは。私が伝える普段の轟くんの様子を聞いた二人はなんだか安心したような顔をしていた。

私の家族は、普通だ。普通に私を愛してくれて、育ててくれた。だから、轟くんの家族のような……歪んでしまった家族のことは分からない。分かると思っってはならない。彼女らの心情を私は慮ることしできないけどそれでもきつと、安心してもらうことは出来たんだと思う。屈託なく話し合う3人を見て私は強くそう思った。

お昼ご飯食べて行ってもらえないかしら、と冬美さんにお家に招待されたんだけど、エリちゃんが朝からたくさん歩いたせいで完全に眠ってしまったので丁重に断らせてもらって私たちは雄英に帰ることにした。11時過ぎの私にとってはちよつと冷えたくらいの陽気の中、轟くんと近場の駅まで歩いていく。そろそろ息が白くなってくるよね。

病院から駅への並木林を通る。そんな感じで特に会話とかはなくそれでも居心地が悪いわけでもない不思議な感じで歩き続ける。轟くんと二人になると大体こういう沈黙になることは結構ある。私も轟くんも、話題を提供する立場かといわれれば首を傾げるのだ。そりゃあ、お話するのは嫌いじゃないけどね。そう考えてると私の右耳のハ口が耳元で警告音を発した。これ緊急ニュースとかでテレビ番組が変更されるとかそういう大事件の時に知らせてくれるよう設定した機能だ。

『ご覧ください！福岡の街でヴィランが！エンデヴァーが必死に応戦しています』

「これは……！」

「親父……！」

眠ってしまったエリちゃんを起こさないようにそつと音声を遮断

するイヤーマフを付けた後に私は投影映像を自分たちの眼前に映し出した。どの局もやっている番組は同じ、緊急ニュース速報。果たしてその中身は……福岡の街で暴れまわるヴィラン……オールフォーワンがタルタロスに収監されてから一向に音沙汰がなかった脳無と、それと戦うエンデヴァー、ホークス、そして地元のヒーローの面々だった。

ビル一棟がすでに半壊してる様子で逃げ惑う人々とヒーローの戦いを間近で見ようと逆に近づく人々、ヒーローの戦いは一市民にとつて娯楽だ。だけどそれは、一定程度のヴィランだけ、ヒーローが余裕をもって鎮圧できる力しか持たないチンピラの場合のみだ。そして、平和の象徴というアイコンが不在になってしまった今、まだ市民たちはオールマイト先生がいた頃と同じ感覚でいる。最強無敵のヒーローがやられそうなヒーローを助け、ヴィランを完璧にくじくという幻想の筋書きがまだ現実になると思っている。

何度も戦ったから分かる。脳無は、ザコじゃない。ショービジネスのように魅せる戦いができる相手じゃない。エンデヴァーが相手にしているあの脳無は、入学当初に襲ってきたあの脳無と同じ感じがする。見るだけでも、分裂、肩からのエネルギー噴射による飛行、腕を振るえば衝撃波が出るパワー、腕を変形させる個性、都合複数の個性を同時に運用している。

エリちゃんが眠ってて良かった。こんな怖いもの見せられるわけがない。轟くんが息をのんで戦闘を見守る、私も目が離せない。なぜならこれは、オールマイト先生が引退してから初めての大事件だからだ。ヒーロー社会の信頼をつなぎ留める戦いになってしまっているからだ。そしてその相手が、オールフォーワンが残した負の遺産だとは……因果なものかもしれない。

『ああ！エンデヴァーがここからでも分かるほど輝いています!!』

「赫灼熱拳……!」

「プロミネンスバーンだ……!クソ親父の、最終奥義」

エンデヴァーの赫灼熱拳は並のヴィランなら一撃どころかかすつてしまうだけでも戦闘不能に陥れることができってしまう超必殺技。

極意である熱の圧縮と一転放出に支えられたそれは、自らの個性の弱点をも増大させている。轟くんの左のように、使い過ぎれば体の中に熱がたまり、身体機能が著しく落ちる。それを押してあれだけの熱を貯めるということは、エンデヴァーはここで決めるつもりなのだろう。

テレビカメラが一瞬ホワイトアウトするほどの輝きが、脳無に向かって極大の熱線となって襲い掛かった。すさまじいと言いたいようなない、あれを再現しようと思ったならどれほどの準備が必要だろうか。ただ短時間貯めるだけであれを打ち込めるエンデヴァーには脱帽するしかないよ。プロミネンスバーンの熱線に飲み込まれた脳無は一瞬で炭化して、勝負あり……じゃない！

「あつ……い！」

思わず声が漏れた。テレビカメラがその機能を十全に取り戻した一瞬で、プロミネンスバーンに飲み込まれる前に自分で頭を千切って攻撃の範囲外から逃れた脳無が体を再生させてエンデヴァーの顔を挟んだのだ。テレビカメラが写す映像じゃ怪我の程度は分からないけど、まずいことになった。

めら、と轟くんの左から少しだけ炎が漏れた。ぎりつと無意識だろうが歯を食いしばる音が彼から聞こえる。私は何も言うことが出来ず、彼の手に空いている自分の手を触れさせて、握った。一人じやないと伝える為に。ダウンを奪われたエンデヴァーが瞬時に背中から炎を吹き出して赫灼熱拳による攻撃を仕掛けるが、伸びた脳無の腕がエンデヴァーを捕らえて振り回し、ビルに叩き付ける。

『これが象徴の不在！』

「ふざけないで……い！」

「ふざけんな……い！」

私と轟くんの声が重なった。いつまでオールマイイト先生にもたれかかっているつもりなんだ。唇をかみしめる、ピリツとした痛みと口の端から血が垂れる。エリちゃんを抱き上げてる手に力が入りそうになって慌てて抜いた。画面の中で好き勝手に喚くりポーターを殴ってやりたくなつた。画面の中の福岡の人たちは逃げ惑い、パニックに

陥る。その中でも私たちと同じ考えを持つ人がいたみたいだ。

『ふざけとんなや！みえるやろ！エンデヴァアの炎！まだ戦ってるんやぞ！俺たちのために命かけて！おらんもん引きずらんと今必死に守ってくれるやつは誰や！見ろや!!!』

市民の声が聞こえると同時に空撮の映像に切り替わる。空を飛ぶエンデヴァアと脳無、それに合流したホークスが連携攻撃を仕掛けていた。ホークスの剛翼がエンデヴァアに速度を上乗せして、力を振り絞ったエンデヴァアの赫灼熱拳が脳無の顔を捕らえる。その瞬間、脳無の顔が変形し獣のような形相に変わってエンデヴァアの腕に食らいついた。だけど、そのままエンデヴァアは脳無の口腔内で火力を上昇させて強引に攻撃を通していく。さらに追加された剛翼がエンデヴァアを空中に押し上げる。

『つ……戦っています！身をよじり！あがきながら！私たちのナンバーワンが!』

「親父つ……見てるぞー!」

「……エンデヴァアつ……!」

轟くんの手に力が入る。その声援が届いたかどうかは分からないけど、エンデヴァアは最後の力を振り絞って上空高く舞い上がると、ゼロ距離で先ほどのプロミネンスバーンの倍はあろうかという超高熱線を放ったのだ。再生の核となる頭を中心にして焼き尽くされた脳無が、ボロボロの炭と化していく。

力なく落ちていくエンデヴァアを福岡のヒーローがキャッチする。地面にたたきつけられた脳無を前にして、自分の足で立ち上がったエンデヴァアが右手を上げる。神野でのオールマイト先生の最後のそれと酷似したポーリングに気色ばんだテレビクルーがアウンサーどころかカメラや音響の人までも叫んだ。

『エンデヴァア……!!!立っています！勝利の！いえ！始まりのスタンディングです!』

「はっ……!」

「おっと。轟くん、大丈夫?」

「よかった……!」



くたり、と轟くんの力が抜け、私が支える。もぞ、と私の体勢が大きく変わったせいでエリちゃんが起きてしまった。血塗れのエンデヴァーを見せないために投影映像を切る。轟くんの口を出てきた言葉、きつと色々あるんだろう。エンデヴァーはいまヒーロー社会の信頼をつなぎ留めてくれた。それだけでも既に100点満点だ。あの人なら多分0点というのだろうけど。

ぴりりと轟くんの携帯が鳴った。エリちゃんにおりてもらって今余裕がない轟くんに断って、電話にでた。エリちゃんは起きたらいきなり轟くんが酷い顔しているものだから、心配そうな顔でしゃがんだ轟くんの頭を私が何時も撫でるように撫でている。電話の先は、相澤先生。

「もしもし、ごめんなさい相澤先生。楪です」

『っ！楪か!?轟は!?!』

「エンデヴァーの福岡でのことは見ました。今は少し余裕がないのでこれから雄英に帰ります。エリちゃんには見せてません」

『こつちで迎えを出す!そこから動かないでくれ』

「分かりました。位置情報を送ります」

先生、外出許可を貰ったのはミッドナイト先生だったし、今日行き先はクラスの誰にも伝えてなかったので連絡が来るのが遅れてしまったのだろう。珍しく声を荒げた相澤先生にいろいろと説明をして指示を受ける。轟くんはその間に落ち着くことができたと、エリちゃんに硬いながらも微笑みお礼を言っていた。無事だとは思いますが……!重症だろうから心配だ。

近くのベンチに座って、相澤先生に位置情報を送る。こりゃ、えらいことになったな……。事情が分かってないエリちゃんが不安そうな顔を見せるので膝の上に抱っこして私の胸にエリちゃんの耳をつける。エリちゃん、なんだか私の心音を聞くと落ち着くみたいだから。生きている、っていうのが分かるからなのかな。その間も轟くんは携帯で、中継の切れたネットニュースでしきりにエンデヴァーのことを検索していた。

## 後期授業編

### 99話

福岡の脳無襲撃事件からはや二日の時間がたった。エリちゃんが起きてすぐ私と轟くんはニュース映像を消したから知らなかったんだけど、あの後茶毘が負傷したエンデヴァーとホークスを襲撃したらしい。あわやナンバーワンが殺される、というところで割り込んだのはチャート上位のラビットヒーロー、ミルコだった。

その場から動かずに待っていた私たちは車に乗って現れた相澤先生に事のあらましを詳しく聞かされて私は気絶しかけた。うん、覚悟できてないところに情報の濁流が襲ってきたから普通にキャパシティ超えそうになった。いや、脳無が来た時点で連合が関与してるなんてことは自明の理なんだけど、明らかにこれエンデヴァー狙いと思えないんだよね。だってエンデヴァーが福岡に移動した途端に起こった事件だから、タイミングが謎過ぎるんです。普通なら、避ける。エンデヴァーは強いから。

だけど、エンデヴァーがいるタイミングでわざわざあんな強い脳無、それこそUSJのアレ以上のやつを投入してきたってことはエンデヴァーを亡き者にするためとしか思えない。ふむう……と考えるながら私の意識は考え事に引っ張られていく。

「希械！もつと強く頼む！」

「え、あ。うん」

「おわあああつ?!」

「あ、やり過ぎた」

ガインゴインと考え事をしながら安無嶺過武瑠状態のえーくんを寮の中庭で殴っていた私は、えーくんの要請を受けて戦闘形態からゴリアテの腕を作り出してそれで殴った。あ、と思った時には既に遅く、えーくんは地面を擦りながら5mほど後ろにノックバックして停まった。考え事しているときだったから手加減がお粗末になってしまった。いや、えーくんなら正直おざなりになっても無傷なんだけど

さ。

「急にどうしたの？自主練に付き合っただけなんじゃない？」

「エンデヴァアの戦い、お前も見たら。情けねえが、今の俺はあの脳無には勝てねえ。ならせめて、あの脳無の攻撃を受け止める程度にはなっておかねえと。いざって時に動けなくなっちゃまう」

「なるほど。けど流石に近所迷惑だよほら、爆豪くんの部屋から手榴弾落ちてきた」

「あいつにしちゃ優しいな。今度から森の中でやるか」

中庭に落ちてきた爆豪くんお手製の個性手榴弾により見事に煤塗れになる私とえーくん、ちなみにノーダメージ。これ以上やると爆弾製造機本体が襲い掛かってきかねないので今日はここで終了かな。夜も遅いし、窓ガラスに張り付いて私たちを見ているエリちゃんが煤にまみれた私たちを見て目を白黒させているし。あ、轟くん帰ってきた。えーくんと一緒にタオルで粗方体を拭いてから共用スペースの中に入る。お風呂入ろうかな、とエリちゃんに言うところ、と頷いてくれた。

「おう、轟！お帰り！エンデヴァア、どうだった？」

「顔にデケエ傷跡が残ったが、無事そうだった。なんか……色々話せた。何でだろうな」

「そう……エンデヴァアが何か変わったからじゃないかな？自分の目標としてたところに自分の力じゃない形で座ることになったんだし」

「……そうかもな。あいつのことはまだ嫌いだ。けど……その先はまだ分かんねえ」

「轟、風呂入ろうぜ！色々聞かせてくれよ！」

「私たちもお風呂行こうか、エリちゃん」

「ハロも一緒」

「勿論」

帰ってきた轟くんに声をかける。轟くんは重傷を負ったエンデヴァアを見舞うために外出許可を得ることが出来てさっきまで相澤先生と一緒に実家に里帰りしていたところだ。何となくすつきりし

た感じの顔をしている轟くんにはえーくんが肩を組みながらお風呂に誘うと、わかったと轟くんは返して荷物を置きに部屋に戻っていった。私とエリちゃんはお先にね、と女子風呂に向かうのだった。

「個性が暴発？」

「うん、その時変なものを見て……」

「なるほどねえ……オールマイト先生には？」

「相談したんだけど、オールマイトにも分からないって」

オールマイト先生に分からないだったら私にや本格的にお手上げだなあ、とヒーロースーツに着替えた私がかぶりを振る。えーくんと一緒に煤塗れになった昨日からあけて本日のヒーロー基礎学の準備中、デクくんから一応知っておいて欲しいとお話をされた。何でも昨日の夜ワンフォーオールが夜中に暴発したのだそうだ。怪我をしたのか、と思っただけでデクくんの許容範囲での暴発だったみたいで一応の一応無事らしい。よかった。

それで、なんで暴発したかは不明なんだけど、デクくんはその時ワンフォーオールの初代とそれに対峙するオールフオーワンの記憶を見ていたらしい。個性が見せる夢かあ……代々継がれて来たワンフォーオールならではの現象なのかな？これって普通の個性にはないことだし。例えば両親のどちらかと個性が一緒だからって両親の記憶を垣間見るなんてことは報告すらされていないわけで。

「まあとにかく無事でよかったよ。よく考えれば100%が暴発したら寮が壊れて私たち生き埋めだっただろうし」

「うっ……それは流石に怖いな……気をつけないと」

「今日の個性の動きで確認取ってみたら？出力調整の具合とか、個性が言うことを聞くかどうかみたい。調子悪いと個性っていうこと聞かなくなるもの」

「そういうこと、あるんだ」

「身体機能だからね。エリちゃん！お待たせ」

「おかあさん！かっこいい、デクさんも」

教室でハ口と待っていたエリちゃんを迎えに行くと、ぱたぱたと音を立てて走ってしゃがんだ私の胸にぼふつと飛び込んでくるエリちゃん。随分と明るくなったなあ、と思いつつ私やデクさんのヒーロースーツ姿が好きらしく、エリちゃんは訓練のたびに私たちがヒーロースーツに着替えるときちよつとテンションが上がる。一番最初に見た私たちだから、記憶に強く刻まれてるのかな。

「それで、風圧制御装置を組み込んだ新型ガントレットはどう？できただけ軽くしたんだけど」

「うん！すつごく使いやすいよ。待機形態がグローブに変わったから逆に強度が上がったんだよね!？」

「そうだね。超圧縮で封じ込められる限度が上がったからさ。待機形態が大きければ大きいほど、より大きなものを封じ込められるの」  
ぐつぱ、とデクくんは真新しい白と赤で構成されたグローブに包まれた手を開いて閉じてみせる。デクくんのご要望に合わせてまず明ちゃんが作ったのが風圧に指向性を持たせるグローブ、文化祭の朝に渡したらしいそれを元にしてメリツサさんがフルガントレットを再設計。オーバードレスレットを踏襲しつつ更なる強化を施したのが今デクくんが付けてるガントレットだ。

名づけるならバードジョン2つとところだね。製作はなんと明ちゃん、私、メリツサさんの共同制作の逸品である。それよりも、今日は凄く楽しみなんだよね。とエリちゃんを抱っこしながら私は胸を高鳴らせた。なぜって？それはね……

「さあ白黒つけようかA組い！」

「おう！物問ア！勝負だぜ！」

こういうことだからだ。燕尾服に時計を複数つけたようなヒーロースーツ姿の物真くんが胸を思いっきり逸らしてこっちに向けて叫んでいる。そう、今日は待ちに待ったB組との合同訓練、というか戦闘訓練なのだ。救助訓練は実は一緒にやったことあるんだけど、戦

闘訓練はお初。だからヒーロースーツを見るのもお初。個性に関しては訓練中のB組の映像を相澤先生から貰ってちよこちよこクラス内に共有してるんだけど、B組の個性って直接戦闘に秀でた私たちみたいな個性持ちと違って捌め手とかの方が得意な感じの個性が揃ってるんだよね。クラス分けの時に意識したのかな？

「アハハハハ！ねえこれ見てよ！文化祭の時のアンケートさあ！2票差の僅差で僕らの勝ちだったんだよね！つまりこれはB組が優れている証拠でキュツ」

「物間あ!？」

「やかましい。そういうのは訓練後にやれ」

「相澤先生、容赦ないなあ」

相も変わらず教育に悪い物間くんがテンション高めで喋りだした瞬間に音響遮断イヤーマフをエリちゃんにつけて立ち位置を調整してエリちゃんから物間くんが見えないようにする私。猫耳型イヤーマフをつけたエリちゃんは大変かわゆい、クラスの女子もメロメロ、B組女子からもかわいいと声上がる。エリちゃん大人気だね、よかったね。

エリちゃんは物間くんを完全に雄英の負の面として認識してるらしく「ゆうえいの、ふのめんのひと……」とぼそつと私に抱き着く力を強める。流石の物間くんでも小さな女の子に怖がられていと来るものがあるのか、相澤先生の捕縛布で首をきゅつとされながらも傷ついた顔をしている。傷つくならエリちゃんの前でA組をこき下ろさなければいいのに……。エリちゃん、A組の皆の事好きなんだから、好き放題言われて印象がいいわけないんだからさ。

「さて、本日はゲストがいます」

「1年C組の心操人操くんです」

あああーっ！とみんなが歓声の声をあげる。相澤先生とブラドキング先生に促されて前に出てきたのは、ジャージ姿で捕縛布を首にぐるぐる巻いている普通科の星、心操くん。おおーっ！ついにヒーロー科の授業に混ざれる段階まで来たのかな!?!私、残念ながら最近エリちゃんのことがあったせいで心操くんの特訓にお邪魔でき

てないからどれくらい強くなれたか分からないんだよね！

うんうん、と私が頷いていると文化祭で面識を持った心操くんがここに居るのが不思議らしいエリちゃんやんが首をちょこんと傾げている。そっか、エリちゃんにとっては普通科の優しいお兄さんだったからね。当日はお化け屋敷だったから会えなかつたけど。雄英を散歩しているとたまに走り込みとかしてるのを見るよ。頑張ってるなあつて感じで好ましい。

「では心操、一言挨拶を」

「……何人かは面識あるし、俺のことを知ってる人もいると思う。先に謝っておきます、慣れ合うつもりはありません。俺はこの場にいる誰よりも遅れている、悪いけど必死です。だから、貴方たちを乗り越えて、俺の個性を人のために使いたい。そのために、超えさせてもらいます」

うわー、心操くんギラギラだ。ただ、アレは体育祭でのいわばやけっぱちからくるビッグマウスじゃなくて、本当に高い壁として私たちを見ているからこそ出る油断のない言葉だ。心操くんの瞳はまっすぐ皆、ではなく私を見つめている。おお、ここで私にくるのか。戦闘訓練だし、もしも対戦することがあればいつかの時のように加減を抜いて相手を務めさせてもらうよ。うんうん。

「じゃ、早速やりましょうかね。戦闘訓練！今回はA組とB組との対抗戦になる！」

「舞台は運動場Yの一角！双方4人組となって1チームずつ戦ってもらう」

「つてことは半端が出ねえように心操はB組に行くことになるのか」

「はっはー！当然だね！彼はもうB組決定さ！」

「いや、そうじゃない」

なんですと、と心操くんがB組側として加算されることを決定事項みたいに誇っていた物間くんがフリーズして発言したブラドキング先生を信じられないものを見るような顔で見ている。ブラドキング先生信頼されてるなー。それにしてもそうじゃないとはどういうこ

となのだろうか？ A組側が21人ということは20人であるB組に心操くんを足すのが一番フラットだと思っただけけれど。ほら、チーム戦とかで一番輝く個性じゃん心操くん。B組の戦闘映像は細部に至るまで解析して対策立ててるから彼が入ることでは何かがあるか分からないという強みがB組に生まれ出てるんだけどなあ。

「今回は心操を2回参加させたい。つまり、A組とB組で一回ずつ行う」

「では、A組が5人チームになるのが2回あると？それは不公平ではありませんか？」

「飯田、最後まで話を聞くように。確かにそういうことになる。だから……A組からは一人不参加とする」

「というわけで樫、お前は不参加だ」

そんな……っ!?ピツと相澤先生に指を刺された私が今回の対抗戦に参加できないということが決まって愕然とした。ひどくない？ひどいよね。だってあれじゃん、これ期末試験の時と一緒じゃん。また一人じゃん私。流石にこれはいかに精神が鋼とか高張力鋼とか噂されてる私でもちよつとひびが入るよ？しゅん、とした私を抱っこされてるエリちゃんが頭に手を伸ばして撫でてくれる。エリちゃんは優しいなあ……。

「先生！そりゃーねーだろー！希械だけハブなんてよー！」

「そーだよー！希械ちゃん可愛そう！」

ぶーぶー！と主にA組とB組の一部からブーイングが飛ぶ。相澤先生はそれをひと睨みで黙らせてからまだ話は終わってない、と続けた。なるほど、まだ何かあるわけだね!?具体的には私を参加させてくれるようなやつが！

「全部終えてから、樫と心操をペアにしてB組5人チームとの特別戦を開催する。それが樫を外した理由だ」

ええ？



## 100話

私を外した理由が、全部終わった後で心操くんと組んでB組5人との特別戦を開催するため？なんでだろ？なんだか相澤先生もブラドキング先生も私を特別視してないか？もしかして私この訓練においてバランスブレイカー扱いされてる？ええ……ひどくない？それを聞いた物間くんが口をとがらせる。

「それじゃあまるでB組5人がかりで樫と心操君がトントンだと言ってるみたいじゃないですか」

「そう言っている。というか樫に関しては数の差が関係ないからな。プロヒーロー並みの戦闘能力を持ったメカを増やして数の差で圧倒できる。そもそも本人が現3年生1位が押し切れなかったヴィランを一方的かつ無傷で捕縛するほど戦闘能力が高いんだが」

「ああ！樫さんの外骨格！」

「あれ訓練で使うものじゃないんですけど」

「使ってほしいから分けたんだぞ樫。全力出さずに訓練して本番で全力以上が出せるわけがないだろう。数的不利は一番最後にすることで許してくれ」

なるほどね。私は訓練のたびにどう手加減したものか、ということに頭を悩ませていたわけなんだけど……ほら、えーくん以外だとたとえ爆豪くんであろうと私が本気で攻撃すると命に関わるわけ……。例えばパワーなら砂藤くんとかデクくんとか、火力ならそこそ爆豪くんとか轟くんとか、一部分で私に匹敵する戦力を持つてる人はいる、それでも……まともに攻撃を受けられるのはえーくんだけだから、えーくん以外の場合何とか手加減を頑張っていたわけです。

というか私一番最後にしているの？相澤先生はよくわかってると思うんだけど、私に情報を与えたら対策しちゃうよ？というかB組の個性は大体把握済みなんだけど……アップデートできるならホントにガツガチに対策できるんだけど。B組の個性ってどれも搦め手の人が多いから対策には力入ってるし。

「どうして俺が樫とペアなのか、理由ありますか？」

「それが樫への課題だ。お前をメインにしつつ、B組を相手にしてみろ。ルールは今から説明するが、ただ制圧するだけなら樫一人でいい。それくらいこいつは反則だ」

「まあ、それは分かりますが」

「分からないで!?!それは過大評価ですよ!?!」

「悪いがこれが俺たち教師陣の認識だ。戦闘能力なら既にお前はプロの域に踏み込んでいる。いつまでも加減させるわけにもいかん。上限を知っておきたい」

心操くんが私チート説を補強してしまった。ああ、そうだよね……特訓であれだけ好き放題やったらそういう認識になっちゃうよね。全力……全力かあ。それこそ死に物狂いで全部出し切ったって言えるのはUSJの時の脳無とオールフオーワンの時、それと一番近いところでオーバーホールの時だ。特に殺す気でやった脳無とオールフオーワンの時は加減とかしなかったしね。

私、どこかで必ずパワーをセーブするから……爆豪くん風に言えば舐めプになっちゃうのかな。でも、それは相手を殺さないようにするためだし、ふぎけてるとか真剣にやってないとかそういうのは違う。訓練相手をできるだけ傷つけたくないだけなの。あーもう!?!つまりこういうことだよね!?!相澤先生!

「何でもやっていいんですね?」

「そう言っている」

「分かりました」

「あ、やべえ希械のやつ本気だ」

「私はいつでも真剣だよ?」

「希械ちゃん目が据わつとる据わつとる」

つまり、バリー<sup>反</sup>・トワード<sup>無</sup>ですね、と私が言うと相澤先生がやっと理解したかと面倒くさそうに頷いた。いつかの心操くんのアレソレを思い出したのか心操くんの顔が苦笑いを含んだソレに変わる。いや、あのそれについてはごめんなさい。相当怖かったと思うんだけど……今回も同じか。はい、頑張ります。エリちゃんは私の雰囲気か怖かったのかつたかたーとえーくんの後ろに隠れてしまった。あ、す

ごいシヨック……。

「あ、倒れた」

「樫対策にエリちゃん有用じゃね？」

「やめとけ、黒焦げにされるぞ。消し炭になるぞ」

「私を何だと思ってるのさー！」

「A組の最終兵器、何でもあり、ドラえもん」

何それすつごい傷ついた。私そんな風に思われてたの？上鳴くん後で覚えといてね、お茶会の時にハバネロクッキー混ぜてやるんだから。あと仮にはあるけどエリちゃん巻き込んだら私その時点でプツツンするよ？最近開発した打ち上げてエネルギーを蓄積する衛星端末から私本体にエネルギーを還元して放つ超出力ビーム砲を叩き込むよ？名前は絶賛募集中。実験で空に放ったら校長先生に呼び出されてこつぴどく怒られた物体です。すいませんでした！

ではルールを説明する、とブラドキング先生がとりなしてくれて私はよろよると立ち上がる。エリちゃんは私の雰囲気に戻ったことで安心したのかそろそろと私の傍に戻ってきて服の裾を摘まむ。ごめんねエリちゃん……。で、ルールなただけど状況想定は「ヴィランングループを包囲して確保に動くヒーロー」お互いをヴィランとして想定しての模擬戦となる。

双方に陣営には「激カワ据え置きプリズン」なる檻が設置されていて相手を投獄した時点で捕まえた判定になる。うん、名前で明ちゃんが作ったってわかるね、この緊張感のないネーミングとか。A組B組共に5人チームがあるが、それでも4人捕まえられた時点で負け、それがハンデってことらしい。

「お荷物抱えて戦えってわけか、クソだな」

「ホントにお荷物ならね。心操くんは凄いだよ？」

「ああ？」

「やってみてのお楽しみ〜」

爆豪くん相変わらずストレートだね。心操くんと幾度か実際戦った私からすれば彼結構すごいんだけどな。個性が効くならそれはもうえげつないことになる。チームにいるだけでも意味があるほどだ。

初見殺しかつ、種が割れた後でも警戒の必要があるジョーカー。下手な戦闘系個性よりも厄介だよ、私じゃ真似できないし。

というわけできつじをみんな引いていく。私はもう既にペアが発表されてるのでひかないけどみんながみんなチームを組んでいく。当然心操くんも。いいなー、私も4人か5人で組んでいろいろやりたいなー。だって、それぞれ個性を組み合わせたら色々できそうだし。むしろ私はそういうのが得意なのだ。何かと何かを組み合わせると1+1を何倍にもする、それが機械の本質だからね。

さて、最初の一戦は……おお！いきなり心操くんだ！それにチームメイトがえーくんに上鳴くん、口田くん、梅雨ちゃん！かなりバランス取れたいいチームだね！特に司令塔の梅雨ちゃんは侮れない。そして言わずもがな無敵の前衛えーくんに中衛の上鳴くん、サポートに口田くん、そして搦め手の心操くん。これかなり相手やりづらいで。

そういう相手は塩崎さんに穴田くん、円場くん、鱗くん。塩崎さん居るのきついなー、彼女物量戦なら結構えげつないからね。待ちに徹された場合攻め崩すのは至難の業だ。あと増強系の穴田くん、遠中距離型の鱗くん、そして防御型の円場くんときた。うーん、攻め込むA組を守るB組って感じの戦いになりそうだね。

よろしく、という心操くんをケロケロと受け入れる梅雨ちゃんを筆頭にA組チームが分かれて作戦を練り始める。何気にA組のコミュニケーションション上手が3人もそろっているのいろいろスムーズに決まるだろう。あー楽しみ！そう考えていると後ろからオールマイイト先生とミッドナイト先生がやってきた。優しく遊んでくれるミッドナイト先生が大好きなエリちゃんがとてと駆け寄っていく。ミッドナイト先生がエリちゃんに優しく構ってくれるのを見守っていると、オールマイイト先生がやあ、と手をあげた。

『では双方位置についてたな？では、始め！』

さてさてどうなるかな？オールマイイト先生が言うには、成績的には特にトラブルがなかったB組の方が良く伸びているということらしい。それに調子づいた物間くんがB組の勝利は揺らがないなああい！と叫んでいる。うーん、舐められてるわけじゃないねきつと。それだ

け私たち対策を積んでいるわけだ。

早速自陣を出発する双方、残ってツルで探索しつつしらみつぶしにする塩崎さんに対し、A組は揃って出発、口田くんの索敵と同時に、保護色で透明となった梅雨ちゃんが前方確認、えーくんが先陣を切って進む。そして……曲がり角で会敵！えーくんに向けて振るわれる穴田くんの増強された太い腕、えーくんはそれをまともに受けて踏みとどまった。あ、穴田くんそれ悪手。えーくん接近戦を挑むならヒットアンドアウェイを繰り返さないよ、そうなるよ。

『よう、穴田ア……！お前から来てくれるとはありがてえこつた』

『くっ……離せない……!?切島氏、恐るべきパワー……』

『穴田っ！』

『フンっ!!』

振るった腕をえーくんが万力の握力で捕まえる。ふりほどこうと腕を振るう穴田くんだけど、全力の握力で締め付けた状態で腕全てを硬化させたえーくんのグラップを外せない。そして、綱引きの状態に持ち込まれる。穴田くんの純粋なパワーはえーくんより圧倒的に上、だけど綱引きの状態なら体を硬化して固定できるえーくんなら張り合えてしまう。

そして穴田くんの背中にいた円場くんはヤバいと判断したらしいらしく、えーくんを覆う透明な壁を出現させる。ただどえーくんは頭突き一発でそれを粉碎して、拳を握りこんだ。硬さ勝負に持ち込んだらえーくんを突破するのは至難だよ。思いつきり拳を引くえーくんに穴田くんは残ったもう片手で攻撃を加えるが、硬化したえーくんはそれを安無嶺過武溜で受けて、そのまま殴りぬいた。

『ぐおおおっ!?!』

『穴田ッ！』

円場くんの壁を幾枚もぶち壊したえーくんの拳が咄嗟のガードの上から捻じ込まれる。防御の上からでも重いダメージが通るえーくんの拳に苦悶の声をあげる穴田くん、それが幾度も繰り返される。そしてそれがまじいと思ったのか鱗くんの声はどこからか響き渡る。

『円場！穴田！一回撤退だ！』

『できたらやっつてる！……………』

『円場氏……!?!』

『おーし！ナイス心操！上鳴、俺ごと行け』

『オツケー！悪いな宍田、円場。50万ボルトだ』

鱗くんの声に返事をした円場くんの意識が落ちる。あれは洗脳を受けた時と合致する。心操くんが付いている物々しいマスク、あれの効果だ。あれはペルソナコード、共鳴プレートの効果を利用して機械を通さずに声を変えられる変声機。機械を通すと効果を失う心操くんの個性を効果的に扱うために心操くんの要望を受けて開発したもののなんだ。実戦使用は今日が初めてだけど問題なく動いてるね！いやー、電気も自動化も使わないサポートアイテムの製作はかなり勝手が違って結構勉強になったよ。

洗脳状態で動けなくなった円場くとえーくんに捕まり綱引きを強要されている宍田くん、踏ん張るえーくんの足元がひび割れているあたりかなりの力で引っ張っているみたいだね。そこで現れたのが両手を帯電させた上鳴くん。彼はえーくんごと巻き込むように数秒放電し、残されたそこには無傷のえーくと完全に気絶した宍田くんと円場くんの姿が。えーくんが個性が解けて縮んだ宍田くんを背負い、円場くんは口田くんが持った。そのまま来た道を逆に進み、二人を牢にいられてしまう。別カメラに写っていた本物の鱗くんは流石に5人そろった状態で襲うのはやばいと判断したらしく、塩崎さんの所に戻っていく。

さてどうするのか、と考えていると今度は全員が全員違う方向に向かう。梅雨ちゃんと上鳴くん、口田くんと心操くん、そしてソロのえーくん。向かうは鱗くんと塩崎さんの居所。えーくん一人の正面突破だ。はつきり言うがえーくんと塩崎さん、鱗くんの相性は最悪だ。えーくん一人だと勝てるビジョンはないだろう。

「切島が特攻だつて?!勝負を捨てたのかい!?!」

「んなわけないでしょ物間。認めなよ、あの宍田を一人で抑えたんだよ?強いよ、切島」

物間くんに突っ込む拳藤さん、そう。えーくんは冗談じゃなく強く

なった。私だつてあの硬さには手を焼く。真正面から打倒するのは骨が折れるし時間がかかるので絶対に選択しない。拘束するしかない。口田さんの個性で居場所を割り出したえーくんが案内されて二人の前にずしやりと立つ。その上で上鳴くんと梅雨ちゃんが細工をしているのが見えた。

上鳴くんに私が作ったサポートアイテム、サンダーロッドには電気を収束して剣にする機能がある。そして、それを限界まで収束すれば超高熱の短剣にすることができる。これはビームサーベルと同じく対物破壊を目的にしたものだけど今二人がやっているのは頭上にある金属パイプ、コンクリ、その他もろもろに切れ込みを入れる作業。そして、えーくんは時間を稼ぐのが役目だろう。

えーくんが安無嶺過武瑠を発動して特攻する。迎撃の構えを取る二人に対して、どこからか無数のハトが入り込む。それに二人は一瞬躊躇した。二人の個性は遠距離に放つて操作するもの、その射線上にハトがいる。ハトを無視して攻撃を放てば解決するが、それはハトを殺すということであつて躊躇わざるを得ない。結果、二人の対応が一瞬おくれた。重戦車のように突き進むえーくんが鱗くんに向かつてタツクル。そのまま背後の壁をぶち破つて消える。えーくんが消えた瞬間を見計らつた梅雨ちゃんが全力でジャンプして、足場にドロツプキックを叩き込んだ。

ガラガラと音を立てて切れ込みを入れた足場が崩れる。舌で上鳴くんを掴んだ梅雨ちゃんが瓦礫に巻き込まれないように飛びのく。塩崎さんはツルで瓦礫を受け止める。その隙に梅雨ちゃんは舌で上鳴くんをぶん投げた。塩崎さんは勿論反応、ツルの壁で上鳴くんを捕縛しようとするが、上鳴くんはサンダーロッドから稲妻の剣を伸ばすとそのままツルの壁を一刀両断、塩崎さんの前につきつける。

『降参してくんね?』

『いいえ、まだ……………』

『かーっ! やっぱ心操えげつねえなあ!』

『そうね、とつても頼もしいわ』

そつか、今度は考えたね心操くん。塩崎さんは上鳴くんに返答した

んだろうけど、上鳴くんの口の動きに合わせて洗脳を発動して喋りかけた心操くんに答えた形になるんだ。よく聞けば口から声が出てないことに気づけたんだろうけど、目まぐるしく変わる戦況に塩崎さんは判断力を失った。人のいい塩崎さんはそれで咄嗟に返事をしてしまつて、心操くんのトラップに引っかかったんだ。

気絶した鱗くんを背負ったえーくんが壁の穴から現れて、心操くんが捕縛布で塩崎さんを拘束。そのまま牢にいられた。5人全員無事で、1戦目はA組の勝利。悔しげなブラドキング先生の宣言で、私たちは歓声を上げるのだった。



## 101話

「じゃ、反省点を述べよ」

「一撃で穴田を戦闘不能にできなかったことっすかね。最悪俺が振り回されて武器にされてたかもしんねえ。もう少しで引つ張り合い負けるところだったっす」

「移動で心操くんに頼りました。機動力のなさが出たと思います……」

「俺は良かったっしょ!?!結構役立ったと思っただんすけど!」

「最後の攻めが強引過ぎたところね。壊すのは最小限にとどめたつもりだったけど、危険な攻め方だったわ」

「結局後ろから出れなかった。守られた戦いでした、悔しいです」

「よし。特に蛙吹の言う通りだ、アレは一步間違えば大崩落につながる可能性がある。今回は蛙吹がきちんと気を付けたから止めなかったが、次回以降闇雲にやるようなら減点だ。あと上鳴!気を緩めるな!今回は切島がいたからいいが、お前が一番足止めに適している。前に出るのを恐れるな!だが、誰も欠けることなく終わらせたのは素晴らしい」

A組VS B組の第一セットが終わり、それぞれがこっちに戻ってきて講習会が開かれる。今回のセットは終始A組のペースでことが運んでいたので、B組としては悔しいかもしれないね。向こう側の司令塔が策を弄することを穢れと呼んで嫌う塩崎さんだったからこそ、索敵と前衛を同時にこなせて身軽な穴田くんとB組の鉄壁ツートップの円場くんを出したのだろうけど、こっちのチームが全員そろって会敵しちゃったから流れが傾いちゃったんだよね。あとえーくんが強かった。うん。私が掴まれたら多分手を切り離してどうにかするくらいしかない。切り離れた瞬間に多分思いつきパンチを貰うだろうけど。

「今回はA組にしてやられたな。塩崎は作戦をきちんと考えるように。穴田は咄嗟の時にパワーに頼りがちだ。頭を使え。この二人のどっちを軸にするかで結果は変わるぞ。次回は精進するように」

え、うそブラドキング先生あんなに怖いのか!? エリちゃんがB組を怒るブラドキング先生の余りの眼力の強さに無言で震えあがつて私によじ登って抱き着きの態勢に入った。相澤先生の理詰めの怖さも震えるけどブラドキング先生のあのド迫力も恐ろしいな……。エリちゃんの背中を叩いてあやしてあげつつ次セットの準備に入る。

心操くんと作戦会議しよーと思ったのだけれど、5セット目でチームになる物間くん先にとられてしまった。うーん、心操くん用のサポートアイテムの案を聞いてもらって採用されそうなら使おうかなと思ってただけだな。でもまあ、私の方がセット遅いし終わった後でいいかな。それよりも次! 百ちゃんたちだ! 同じ創造系として応援するよー! 頑張つてね!

百ちゃんチームは、青山くん、透ちゃんに常闇くんで対するは拳藤さん、小森さん、吹出くんに黒色くん。鉄哲君の話によるとB組のクラス委員長である拳藤さんはかなり頭が切れるらしく、彼女がいなければB組皆が物間くんに呑み込まれてたとのこと。それ物間くん質の悪い深淵か何かじゃない? どれだけA組のこと目の敵にしてるんだらう。何が彼をそこまで駆り立てるのだらう? 不思議でしょうがないや。

陣地に向かう百ちゃんたちを見送って、すぐに気づいた。百ちゃんもう既に始めてるね。個性で生み出してはないけど、頭の中で組み立ての段階に入っている。うわ、ルールの穴を突くえげつない方法やるねえ。百ちゃんもクレバーになったね。そして同じチームには青山くんと透ちゃんがいるし、中距離戦にめっぽう強い常闇くんも一緒。個性伸ばして生まれ変わった百ちゃんのお披露目だね。

『それではガンバレ拳藤第2チーム!』

「偏向実況反対ー!」

ブラドキング先生のなんか偏ってる実況、ひどくない? プレゼントマイク先生呼んできてよ、私たちやりにくいっいたらありやしないんだからもう。それはそうと開始のベルが鳴った瞬間に百ちゃんが一気にドサツ! と山になるほど大量の四角いボックスを生み出した。百ちゃんも習得した超圧縮技術だ。外観から何のアイテムなのかを察

することはできないけど。

それをダークシャドウが全てひつつかんで、偵察に出る。ボックスを四方八方に投げながら偵察を進めるダークシャドウ、一方百ちゃんは新たに超圧縮ボックスを生み出し続け、それを透ちちゃんと青山くんが自陣のいたるところに仕掛けていく。完全に要塞にする気だ。準備を整えてから攻め入る、百ちゃんらしい作戦だと思う。最後にいくつかのボックスを生み出して腰に括りつけて、額を伝う汗をぬぐった。

そして、青山くんと透ちちゃんが揃って離脱、残ったのは百ちゃんと常闇くん。ボックスを全て投げ飛ばし終わったダークシャドウがB組の皆を見つけた。そして、意気軒高に襲い掛かるダークシャドウを迎え撃つのは黒色くん、彼はダークシャドウに入り込んだ。彼の個性は黒いものに入り込んで、それを操ること。ダークシャドウは体の自由を奪われて、引き返していく。

『八百万、かかった!』

『では7番の作戦で行きますわ!』

そこまで予測済みだったらしい百ちゃん、最低でも7つ作戦を考えてたんだね。その瞬間、戻ってきたダークシャドウに向かって常闇くんがボックスを2つ放り込んだ。ダークシャドウを操る黒色くんはそれをダークシャドウの手で振り払おうとするが、その瞬間に超圧縮ボックスの一つが真っ白の球体に姿を変え、もう一つのボックスもろともダークシャドウごと黒色くんを覆ってしまった。なるほど、黒色くんは黒色のものしか入ることができない。白い球体に空いた穴からダークシャドウと繋がってる常闇くんは苦々しい顔で

『すまん、ダークシャドウ』

『後でお好きなお菓子を進呈しますわ』

中で何があつたのか、ダークシャドウは一気に弱まって常闇くんの中に戻ってしまった。息も絶え絶えなダークシャドウを見て何が起こったかを察した。一緒に取り込んだボックス、閃光弾だったんだ。黒色くんを取り込んだ状態でダークシャドウが一気に弱まる。結果何が起こるか、限界まで縮小したダークシャドウの面積が足りず、黒

色くんは吐き出され、白い球体の中に取り残される。流れるようなオペレーションだ。ダークシャドウが黒いからこそ黒色くんはそれに乗り移るかもしれない、けどどしなないかもしれない。しなかった場合はどうしてたんだらうか……？百ちゃん、さすがとしか言いようがないね。

あつさりと黒色くんは無力化され、ボールごと牢にいれられる。百ちゃんの操作で牢の中で玉が割れ、呆然とする黒色くんが残される。百ちゃんは丁寧にダークシャドウに謝っている、ダークシャドウには弱弱しくイイヨ、といっているけどアレはきついなく。ダークシャドウは無敵だけど感情があるから、けど……百ちゃんがあんな合理性のみを追求した作戦を立てるなんて思わなかった。

『さて、葉隠さん！』

『うん！見つけたよ！青山くん！』

『ウィ☆』

一方別ルートで探索していた青山くんと透ちゃん。透ちゃんは顔の部分に物々しいゴーグルをつけている。そして、見つけたと言っているあたり残りのB組を見つけたんだらう。透ちゃんがゴーグルを操作すると、ダークシャドウがばらまいていた圧縮ボックスが一斉に起動し、カメラのレンズのような形に変わる。これもしかして……！

青山くんがネビルレーザーを透ちゃんに向かって発射する。透ちゃんはそれを体で受け取って、軌道を捻じ曲げ、明後日の方向に発射する。やっぱり！透ちゃんの体はレンズの役目を果たすことができる！青山くんのネビルレーザーを自らの体を集光レンズにして捻じ曲げて、軌道を変える。その先にある圧縮ボックスのレンズを経由して、次々と他のレンズにレーザーがパスされ、その先にいた小森さんの足元に命中した！

「これ……！百ちゃん流のオールレンジ攻撃だ……!!」

『希械さんのように自由自在とはいきませんが！私たち全員の力を合わせればそれに近いことくらいはできますわ！』

『連続で行くよ……！』

『名付けてキラメキ☆レーザーカーニバル！』

『青山くんダサイ!』

『ノコツ!?わっ!?あぶなっ!?』

『まずいっ!吹出!』

個性「キノコ」……小森さんの個性はありとあらゆる場所にキノコを生やすことができる個性。百ちゃんなら知っているだろう、キノコ……つまり菌類は人体にも根を張り得るということを。だからまず人間に使ったらどうなるか分からない正体不明の個性を持つ小森さんを標的にした。四方八方、あらゆる場所から襲い掛かるネビルレーザーをタップダンスするように何とか避けていく小森さんを見てまじりと感じた拳藤さんは、大きく前に進みながら後方に待機している吹出くんに指示を出した。

その瞬間、吹出くんの方から建物すべてを横断する超巨大な『ズガガガガン!』というオノマトペが発射された。文字はそのまま建物を巻き込み全てをぶっ壊してちようど百ちゃんとそれ以外という形でA組を分断してしまった。うえっ!?こんな大規模攻撃出来たの!?やばいなオノマトペ、文字っていろんな意味があるから私の天敵になりかねないぞ……?例えば「バラバラ」とかで体中バラバラにされたりとかしたら……怖いな。吹出くんは要注意っど。

『うわわっ!?ごめんヤオモモ!レーザーもうダメだ!あと青山くんも!』

『あとは任せたよレディ……』

『さすが!どこまで予想してたの!?でも、もう考える暇は与えない!』

『ええ、確かにここまで接近できれば私一人では貴方にかないませんわ。なので、近づかれたらどうするかを先に考え終わっておきましたの』

大規模攻撃でネビルレーザーの中継点を粗方破壊された上、青山くんの限界が近いことを察した透ちゃんはゴーグルを投げ捨て、青山くんと分かれB組陣地に向かっていく。そして、青山くんは一旦腹痛を回復させるために後方へ。入れ替わる様に闇を補充した常闇くんが小森さんの個性作用範囲外と思われる場所からダークシャドウを伸

ばして襲い掛かる。それと同時に百ちゃんの所までたどり着いた拳藤さんが巨大化した拳を振るって百ちゃんに襲い掛かる。

百ちゃんは既に仕込みを終えている状態だ。タングステン製の壁をやすやすを折り曲げる拳藤さんのパワーをまともに受けて吹き飛ばされる。やっぱ格闘戦じや拳藤さんに勝てないよね……！吹き飛ばされるまでが策の内と言わんばかりの表情で百ちゃんが笑みを浮かべる。その瞬間、半壊した部屋中に置かれていた超圧縮ボックスが起動、半分はイカれてみたいだけ！それ以外は自動砲台のような形になって一斉に拳藤さんに向かって白い球を吐き出した。

『私を襲うならここを離れた時にするべきでしたわ。ここは既に、私の蜘蛛の巣でしてよ』

『しまっ!?!トリモチ!?!』

『いいえ、蜘蛛の糸ですわ』

ぶら下げていた超圧縮ボックスを解放する百ちゃん、完成したのは私が夏休み中に蜘蛛糸粘液と一緒に見せたウェブシューター！その百ちゃん版だ！拳藤さんは周りから発射される蜘蛛糸粘液弾を手で防御する。だけど、蜘蛛の糸は粘着力ともう一つ、強度が非常に優れている。ケープルほどの細さでも、それは鋼鉄製のワイヤーに匹敵するだろう。両手から文字通り網状の蜘蛛糸を発射した百ちゃんはどう一度近づかれる前に、拳藤さんをぐるぐる巻きにしてしまう。

『こつちを使わないで良かったですわ』

『参考までに聞くけど……ソレナニ?』

『音響手榴弾ですわ。鼓膜程度なら簡単に破れます』

『……そこまでする?』

『私たち、級友があんな目にあってから一つ決めておりますの。光明が見えるなら立ち止まらない、全てを出しきり全力で、ですわ。負ければすべて奪われる、守りたいものも守らなければならぬものも。あんな思いは二度とごめんですわ』

簀巻き状態の拳藤さんの疑問に答える百ちゃん。訓練中の皆、中々に怪我が多いと思ってたらしいことだったんだ……。そうだよね……さつき相澤先生も言ってたけど訓練で全力が出せないなら実

戦でそれ以上が出るわけないんだ……。百ちゃんはあれだね。私に近づいてきたね、私たち創造系の長所は初見殺しを容易に創造できるってことだよ。だから、分かん殺しされた拳藤さんは攻め入らざるを得なかった。まだ残ってる圧縮ボックスが何なのか分からないから、動かす前に仕留めにかかったんだ。

『お、お手柔らかに、ノコ?』

『フミカゲ、気絶サセロツテイツタ!』

『ノコオオオ!?!』

『吹出くんとつた!』

『ん!? んんんんっ!?!』

ダークシャドウだけが近づいて、小森さんを捕まえる。キノコを生やして抵抗する小森さんをダークシャドウは容赦なく壁に叩き付けて気絶させた。何されるか分からない相手は意識を失わせるに限るよね。そしてヒーロースーツを脱ぎ捨てた透ちゃんが背後から吹出くんにチョークスリーパーをかけて、オノマトペを出す暇も許さず絞め落とした。

簀巻きの拳藤さん、気絶した小森さんに吹出くん、檻の中の黒色くん……今回もA組の勝利だ。トイレに急ぐ青山くんを見送りながら私は無意識に片手を握ったことに気づく。私も熱くなっちゃったのかな。エリちゃんはそれをきよんとしながから見つめている。ふふ、武者震いかなあ。

## 102話

「うおー、皆熱いなあ……!」

「かっこいい……!」

「エリちゃんは誰が好き?」

「……えーじろーさん、すごかった!あとあと……!ばくごーさん、かっこいい」

「おお……!!」

ちよつとモテモテじゃんえーくん!あと爆豪くんも。今は5試合目前。エリちゃんが自発的に今までの戦闘訓練の感想をこぼしたので誰がかっこよかったのかなー、と聞いてみるとまずえーくん、とても分かる。かっこよかったので。エリちゃんのセンスは私よりか……?それでもう一人、何と何と爆豪くん。いや確かに、最速で試合を終わらせたからね。

2試合目の後の3試合目、轟くん、飯田くん、障子くん、尾白くんVS鉄哲くん、骨抜くん、回原くん、角取さんの試合は真正面戦闘に見せかけた骨抜くんの活躍によりB組有利で始まった。鉄哲くんを轟くんが赫灼熱拳で攻めたけど、熱耐性が異様に高かったせいで攻めあぐねた。赫灼熱拳は本気で放てば金属をも容易に溶かすことができるけど、私と同じでやり過ぎるとまずいからね。

鉄哲くんに時間を取られ、結局絶凍氷拳と赫灼熱拳を交互に当て続けることにより、温度差を利用することで鉄哲くんの個性を割って、何とか勝利した……鉄哲くんには。骨抜くん、回原くんも気絶させることに成功したが、角取さんが曲者だった。角を4つまで自在に空に飛ばして操ることができる、そう……私のオールレンジ攻撃を素で扱うことができる個性なのだ彼女。結果、骨抜くんと鉄哲くん、回原くんをひっかけて空高くまで逃げられてしまい、時間まで粘られて引き分けに終わった。最後、赫灼熱拳で空を飛んだ轟くんに捕まる寸前で終わったからね、悔しいだろうなあ。

そして4戦目、爆豪くん、響香ちゃん、瀬呂くん、砂藤くんVS取蔭さん、鎌切くん、泡瀬くん、凡戸くんの試合。はつきり言うが圧倒



的だった、完璧という言葉以外でない勝利だった。爆豪くんを中心にしたワンマンチーム、に最初は見せかけていたけど、誰かが危ない時は爆豪くんが助け、爆豪くんが危ない時は他の誰かが助ける。あの爆豪くんが背中を預けたのだ。それさえしてしまえばあとは才能マンの爆豪くん、完璧な指揮で勝利をわがものにしてしまった。アンタ変わりすぎなんだよ、という取蔭さんの叫びにはみんなが頷いたことだろう。

「爆豪くん」

「あ？」

「エリちゃんが、かつこよかつた〜って。サインでもしてあげたら？」

「すごい、かつた！」

「当然だわ！なんだどこだTシャツかあ!？」

自信を深めたような笑みで戻ってきた爆豪くんをエリちゃんと迎える。エリちゃんは爆豪くんの動きに魅了されちゃったみたいで、しきりにすごいすごいと言っている。中身小学生説がA組の中で持ち上がってる爆豪くんはそれにちよつと鼻高々。だけどそうなるのも分かる結果だからね。これはちよつと私も頑張らないとまずいかもねー。心操くんの動き次第だけど、彼主体ということは彼がどれだけ動けるかで私がやることも変わってくるわけで。1回目はほとんど動かなかつたから分かんなくかつたんだよね。

三奈ちゃんにグッドサインを送って、エリちゃんはデクくんとお茶子ちゃんに両手をフリフリ。真横で首を掻っ切っているジエスチャーの爆豪くんは見なかつたことにしよう。さて、新型オーバーガントレットの実戦投入だね。これでクリアするようならナノマシン仕様のガントレットに切り替えが出来そうだ。ふふふ、腕がなるぞー。

5回戦目のチーム分けは、デクくん、お茶子ちゃん、峰田くん、三奈ちゃんVS物間くん、柳さんに小太さん、庄田くんそして心操くん。デクくんが鍵だね、両チームにとって。爆豪くん並みのジョーカーかつ、捉えれば勝負が決するウィークポイントでもある。まあ、デクく

んは強いんだけどもさ。

『え〜ではラストだ！5回戦目！はじめっ！』

「おっ、さっそくデクくん！」

「デクさん……！」

5回戦目が始まった瞬間に、一人だけ空高くに舞い上がった人がいた。ワンフォーオール馬鹿力運動場Yのアスレチックのような迷宮の上に抜け出すデクくん。彼は空中で姿勢を整えると右腕を突き出してそれを左手で支えた。カメラ越しではなくて自分の目の望遠機能でそれを捕らえた私が自動的にされた解析結果に目をむく。初っ端から100%かあ……！

『エアフォース・キャノン！』

右手のガントレットが変形して、デクくんの拳の先までがまるで筒に覆われるような形になる。ワンフォーオールが巻き起こす風圧の収束装置だ。材質はフルガントレットと同様、つまり……50%にもやすやすと耐えうる。そしてデコピンの形に変えられた右手の指が弾かれると、その風圧は収束されて一気に一方方向に飛んでいった。

着弾点にいたのは警戒されているであろう心操くん、ではなく物間くんだった。配管やら何やらを破壊して勢いがそがれてかつ距離が離れていようとワンフォーオールの50%だ。上からのすさまじい風圧で物間くんは地面に叩き付けられる、だけに飽き足らず彼を中心にして小規模なクレーターが出来上がった。なるほど、これがエアフォース……デクくんの新技かあ……！しかも、これ大怪我しない距離だからこそ50%を使ったね？ひどい打撲で終わってる。もしもつと近かったらデクくんは出力を調整して小規模な威力になる様に撃っていただろう。

さらにデクくんは着地点をずらすために背中側に手をやって指を連続で弾いた。着地点がずらされて、デクくんがアスレチックの中に消える。物間くんに対して大きく回り込む形で背後を取ったデクくんが指を構えながら物間くんを確保にかかる。鈍い動きで悪態をつきつつ立ち上がった物間くんはかぶりを振って気付けをしている。

『頭のいい人間は君を警戒する……！けど、想定外だよ……！教え

て欲しいな、恵まれた人間として！そういうった人が世の中をぶち壊すらしいよ？どこかの彼の友人なら教えて欲しいんだけど……平和の象徴を終わらした人間がなぜあんなにヘラヘラ笑ってられるんだい？』

『……っ！』

「ふうん……」

「物間……ごめん、樫。あいつ終わったら絶対謝らせるからさ。煽りでも言っちゃいけないことあるし……」

「うーん、事実だからね。多分私や爆豪くんと関係ない人たちもきつとそう思ってるんじゃないかな。まああれだね。特別戦で物間くん出てくるならお話したいなあ」

デクくんは、煽りだと分かっているのだろう。私もそうだと信じてい、本気で物間くんがそういうことを言う人じゃないって。B組の皆を代表してフォローしてくれる拳藤さんには少し悪いんだけどちよつと私としてもイラつと来てしまった。じゃあ教えてあげようかな。私が失ったものも含めて。どうして私が……火力が過剰だとわかっていられるにもかかわらず、威力の追及を緩めないかも。

後ろの方で三奈ちゃんたちが他のB組チームに襲撃を受けている。けど3人の連携はゆるぎなく、そのまま防いでしまった。心操くん対策なのか、ハンドサインとアイコンタクトだけで。誰かの動きを見てそれをフォローする、インターンにて実戦経験があるお茶子ちゃんの動きに合わせている感じか。

デクくんは煽りだとわかっているけど少し冷静さを欠いているように見える。確保ではなく気絶に切り替えていくつもりのようなのだ。デコピンの構えからシユートスタイルに切り替わる。物間くんも、さすがにまずいと思ったのか口を閉ざして逃げの構えに入った。

「えっ!?なに、あれ……?」

突然だった。デクくんの腕を中心にして黒いエネルギーのひものようなものが渦を巻き始めたのだ。しらない……!私はこんな現象を知らない!ワンフォーオールなの……!?!それともデクくんは無個性じゃなかった?元々あったけど表出してなかった個性が今になっ

て突然？

「おい、なんだよありや……!?!」

「先生ッ！止めてください！おかしいです！」

「相澤君！おかしいぞ！止めるべきだ！」

えーくんの疑問の声が波紋のようにクラス全体に広がっていく。最初は誰にも知らせていなかった新技だと思ってた人たちも、デクくんの必死の表情を見て顔色を変える。デクくんの意思を無視して蠢く黒い触手のようなエネルギーは一気に拡散してありとあらゆるところを傷つけていく。

必死にそれを抑えようとするデクくと心操くんが会敵する。のたうち回りながら逃げるように心操くんと呼びかけるデクくと突然の事態に追いつけずデクくんを見ることしかできない心操くん。拡散する触手はチーム関係なく襲い掛かり、宿主であるデクくんにも牙をむいた。触手の反作用で空中に跳ね飛ばされたデクくんを、危険を顧みず動いたお茶子ちゃんが空中で抱き留める。

『心操くん！洗脳をデクくんにつ!!止めてあげて!!』

お茶子ちゃんの叫びに心操くんが反応する。どうすればデクくんが応えられるか、一度洗脳を破られている心操くんとしては完全に罹かる言葉を探さないとまずいから。だからこそ、心操くんはペルソナコードを外して自分の声で個性を使った。

『緑谷ア！俺と戦おうぜ』

『っ………応っ!!』

かかった！心操くんの個性でデクくんの意識が飛ぶ。その瞬間にあの謎の黒いエネルギーはデクくんの中にすさまじい勢いで吸い込まれるように戻っていった。お茶子ちゃんが地面に着地して個性を消して、デクくんに向かって何発も往復ビンタをしている。え、いたいよアレ。お茶子ちゃん焦ってない？落ち着いて？あ、デクくん起きた。

「とまった……!?!」

「イヤ！物間がまだやるつもりだ！」

先生たちが止める為に訓練場に向かったあと、デクくんが事態を把

握しようとしているときにまだ終わってないとばかりに物間くんが襲い掛かり、それを起点にして大乱戦が始まった。峰田くんのもぎもぎが飛び交ってトラップを形成し、三奈ちゃんが近接戦を庄田くんに仕掛ける。酸で滑るように移動する三奈ちゃんを庄田くんが正拳で迎え撃つけど、三奈ちゃんは地面に対して倒れ込み、身をよじる様にそれを躲して、カポエイラで言うヘリコプテイロと呼ばれる逆立ち回転蹴りを踵で庄田くんの後頭部に叩き込んだ。

うまい、あれ後ろ回し蹴りに並んで威力が高い蹴り技なんだ！打ち込みの意識の隙間を取られた庄田くんは気絶してしまい、これで近接戦闘が苦手であろう小大さんと柳さんが残される。物間くんがまずいと感じたのかデクくんを放置してフオローに向かう、デクくんはお茶子ちゃんに投げられて心操くんを追う。ワンフオーオールがおいしいから個性を使わずに心操くんを追い詰めるデクくんに対して心操くんは捕縛布で天井を崩して対抗する。

「うそっ!？」

「デクさん、すごい」

「チツ……」

爆豪くんが舌打ちするのも分かっちゃう、デクくんは崩された天井をさつき暴走した黒い触手で掴んで無力化したのだ。そして、そのまま捕縛布をひっかけて逃げようとする心操くんにデコピンによる空気弾を叩き込んで動きを止めて拘束してしまった。心操くんが苦笑するようなそれでいてカラツとした笑顔でペルソナコードを外して両手をあげる。なぜかそのタイミングでデクくんの顔に打撃が入ったような動きがあつたけど、デクくんは拘束を緩めなかった。今のもしかして物間くんかな？

対するほかのB組たちは、前線を担う庄田くんが気絶したことにより崩壊してしまっている。峰田くんがもぎもぎを投げまくって小大さんの動きを完全に封じ、柳さんのポルターガイストによる念動力をもぎもぎの吸着力でモノをまとめ上げて持ち上がらないようにすることでお対処。完全に目が危ない方向にいつている峰田くに女子二人は怯えるばかりだ。あれは怖い。

そして物間くんは、無重力で飛んで追いつくお茶子ちゃんに追いつかれて体術で地面に組み伏せられた。最初のワンフオーオールによる空気弾のおかげで物間くんの動きが悪かったからかな？煽ろうとして口を開こうとする物間くんに対して、お茶子ちゃんは口を開かせる前に打撃によって気絶を選択、何も言えず物間くんは沈黙する。

『くっ……！第5セット！結果はA組の勝利！よってこの対抗戦はA組の勝利とする！次は頑張ろうなB組！』

「最後まで偏向実況だ〜」

いつの間にか戻ってきていた先生たち、マイクを掴んだブラドキング先生の宣言でA組の勝利が確定した。……対抗戦だというのなら私がやる特別戦の結果も含めていいんじゃないかなあ？負ける気は全くないんだけど。それはそうと、次は私だね。いやー、待ち遠しかった。折角だし、新技を解禁しよう。外骨格の上をいく私を強化する方法だ。

「エリちゃん、ミッドナイト先生と一緒に見ててくれる？かつこよくはないかもしれないけど、頑張ってくるからね」

「うん。一番応援してる、おかあさん」

「よーしーやる気がみなぎってきたぞー！」

「張り切ってたなア、希械」

そりや勿論ですとも！折角心操くんと共闘できるんだから、私もいい所見せたいじゃない？あ、でも心操くん大丈夫かな？参加できるほど体力残ってるかなあ？

## 103話

不測の事態が満載だったけど、何とか5セット目が終了した。結局デクくんの暴走は何だったんだろうか？不思議でしようがない。ただ、見る限り……特にデクくんそれ自体に問題があるようには見えなかな。うーん……困るなあ。こういう正体不明っていうのが一番面倒くさいんだよ。プログラムのバグじゃないんだからさ、意味不明なのはやめて欲しいなあ。今朝の個性の暴発っていうのがやっぱり関係あったんだろうか？

「えー、とりあえず緑谷。何なんだお前」

「確かになあ。新技にしちやなんか逸脱してないか？超パワーにしちやあ変だ」

「……僕にも、まだはつきり分からないです。力が溢れて抑えられなくて……制御が効かなかった。今まで信じてたものに突然裏切られたみたいで、僕自身すごく怖かったです。でも心操くんと麗日さんが止めてくれたおかげで、ただの力の塊なんだってすぐに気づけました」

デクくんが言うには心操くんが洗脳で止めてくれなかったらどうなるか分からなかったけど、彼のおかげで気づけたのだそうだ。二人にありがとうとお礼を言うデクくんに対して心操くんはブラフじゃなかったのか、という感じだ。いやーそれにしてもデクくんが無事ではよかったよ。

「お茶子ちゃん、すぐびゅーって飛んでったね」

「ねー！がつ、と抱き着いちゃったりして！キヤーツ！」

「か、考えなしに飛びついたのはアレやったかもしれないけど!!でも……何も出来なくて後悔するよりは、良かったかな」

「良い成長をしたな、麗日」

それはそうと、という感じで躊躇することなく暴走の渦中に飛び込んでいったお茶子ちゃんに対して私と三奈ちゃんがつつこんでみるとお茶子ちゃんは今になって自分が何をしていたのか思いだしたらしく真っ赤になってあせあせとすけど、いい判断だと思うよ。三

奈ちゃんには別の意図がありそうだけでも。

「んじゃ、ラスト行くぞ。B組は5人クラス内から自由に選べ。心操、きついなら休めるが、どうする?」

「やります。やらせてください」

「よし、心操くん作戦会議しよう!

「B組!本気でかからないと樫にすべてぶっ壊されるよ!彼女に勝つためにメンバーの選定から始めようか!」

開始は15分後だ、という相沢先生の説明でやっと私の出番かー、と背筋を伸ばして心操くんをブリーフィングに誘った。心操くんはそれにいつも通り首を抑えるポーズで首肯し、ついてきてくれる。B組は本気で私たちにぶつかってくれみたいだね。いやーありがたい。これで私の新形態をお披露目しても大丈夫そうだ。誰が来るのかなー?割と本気で楽しみだ。うんうん。

「なんか、楽しそうだね」

「あ、わかる?B組の人たち人数差があるからって慢心してるわけじゃないっぽいからさ。本気でぶつかってきてくれて嬉しいなーって」

「その人数差があるわけだけど、どうするの?俺、正直樫にとっちゃ足手纏いでしかないんだけど」

「そうかなー?私はそうは思っていないんだけど。何せ心操くんがいれば……無傷完封も夢じゃないからね」

ふへへ、と悪い顔で戦術&戦略を練り始める私に心操くんが若干ドーン引きしてる。いやー、心操くんのおかげで搦め手に幅が出るんだよ。いるだけでコミュニケーションに不和が生じて、味方の声すら信用できなくなる。ふんふふふーんと私は心操くんにもペルソナコードと対になるように設計したゴーグルを手渡した。これは?と聞く心操くんに。

「姿を隠して声だけっていうのもいいんだらうけど、目の前の味方が敵だったら、恐ろしいでしょ?ペルソナコードは本来それとセットで運用する想定だったの。だから、それが正しい姿だね」

「で、これどういう機能があるの?」



「見ててね」

私の周囲に立体映像が折り重なって、見た目が完全に変わる。心操くんの目の前にいる私は今、デクくんの姿になっているだろう。体重は誤魔化せないが、ワールドプロジェクターの応用で身長も、髪も、顔も全て擬態することができる。どうしてゴーグル型なのかっていうのは、内からじゃ投影映像に邪魔されて周囲を見れないからだね。だから視界を補助するゴーグル型になったわけ。

「そのゴーグルは心操くんの目で捉えた相手を記録して体表面に立体映像を作り出し、選択された相手に擬態することができるの。これを使えば、心操くんの個性は初見殺しじゃなくなる。何回でも、機能するようになるよ」

「……ヒーローっぽくないね」

「んー？それ言ったら私なんて戦争に使われる兵器とか戦車だよ？見た目や戦い方にヒーローっぽさを求めてるなら私も再考するけど、一番は……誰かを助けるための力じゃない？心操くんの個性が最大限効くなら、救助対象も敵も無傷で終わらせられるからね」

「……カッコイイなあ、敵わないや」

「心操くんもカッコイイよ。ヒーロー科に負けてない！」

いつも言ってると思うんだけど、私は一生懸命に努力をする人が好きなの。頑張るなら、私は精一杯手伝うし、力の及ぶ限りサポートする。だから私にとっては、出遅れても必死に追いつこうとする心操くんを心底カッコイイと思ってたりするのだ。うんうん、さて、作戦詰めていこうか心操くん？大丈夫、勝てるよ。私たちなら。

『特別戦、A組樫&心操チームVS B組穴田、拳藤、鉄哲、取蔭、物間チーム！試合開始だ！』

「あーら、ブラド先生つたら……わざわざ誰かを教えてくれるなんてありがたいなあ……」

「うわ、悪い顔……どうするの？」

「うん、作戦通りにいこう。私が全員を同時に分断するから、心操くんはそうだな……鉄哲くんを確保して」

「確かに、彼ならすぐかかりそうだ。よし、よろしく楪」

「うん。あ、道中こればらまいといて」

ナニコレ、という心操くんがグレネードを手渡す。何って、宍田くん対策。彼嗅覚で索敵できるから鼻を潰しておこうと思つてさ。ハイ、ぼふつとな。あ、私たちにはほぼ無臭だよ。臭いに敏感な人ほどダメージが来るよ、鼻にツーンとね。苦笑した心操くんが捕縛布を手繰って姿を消す。

さて、セメントス先生曰く……戦闘は自分の得意を押し付けることだそう。なるほど確かに、ただ私の場合はちよつと違つて……相手の得意を封じた上で自分の得意を押し付けるのが私の戦闘だ。ここで数に勝るB組の人たちに対して何をすべきなのか。簡単な話……全員バラバラにして連携を完全に封じればいいんだ。心操くんが鉄哲くんを任せしたのは前衛の要に彼がなり得るからだ。私がまず狙うべきは……予想外を押し付けられかねない物間くん。

腰についてる圧縮ボックスを全て落とす。100を超えるビット兵器が空中に浮かんでそれぞれのルートを辿つて前に進んでいく。外骨格使えつて言われたけど、こんな入り組んだところじゃ逆に不利だ。ハ口の全性能を使って同時にビットで処理するのが望ましい。手にビームライフルを形成。両目の機能を引き上げて、そのまま標的を見つけて打ち込んだ。

実戦仕様のピンクの閃光が鼻を抑えた宍田くんの頭を掠める。ちよつと焦げた体毛に冷や汗をかいた宍田くん、すぐに周囲を警戒しだすB組の面々、そうだよね……私と心操くん相手にわざわざ一対一になる必要はないからね、そりゃあ……固まるに決まつてるよ。だからそれ、ばらさせてもらう。

『うわわわ!?なにこれ!?!』

『楪だー!この量、笑えないね!』

フアング、ライフルビット、シールドビットに追い立てられたB組チームが対処に入ろうとする。けど、今回は数で攻めた。鉄哲くんには熱耐性のおかげでビームが効かないのでフアングを当て続けることでノックバックによる吹き飛ばしでまず戦線を離脱させる。それ

からはビームで追い立ててそれぞれを完全に分離する。ああ、頭が痛くなってきた。あとはハロに任せよう。

「いらっしやい、物間くん」

「ゆ、樫……！」

ビットのビームに追い立てられた物間くんを誘導して私の所に来させた。にっこりと笑う私に対して青ざめる物間くん。そんなラスボスにでも会ったような顔しちやっつて。同期された視覚の一つで心操くんが物間くんの姿で鉄哲くんと接触し、そのまま洗脳にかけてしまった。おー、さすが心操くん、スマートだね。

「いやー、うまくいってよかった。私、物間くんが一番厄介だと思っ  
ててさ。ここで仕留めさせてもらうよ」

「い、いやに買いかぶつてくれるね……！僕は自分一人じゃ何もでき  
ない男だよ？穴田や鉄哲、拳藤に取蔭……！もっと警戒するべきや  
つはいるんじゃないかなあ!？」

「ん？作戦前に誰の個性をコピーしてるか分からないし、何してく  
るか不明なのが一番怖いんだよ。鉄哲くんならいま心操くんがやっ  
てくれたよ。ああそうそう、平和の象徴を終わらせた人の気持ちを知  
りたいんだっけ？」

「そ、それは挑発であって本心じゃないよ。気に障ったなら謝罪す  
る」

「知ってる。でも教えてあげるよ。時代を終わらせちやっつた気持  
ちってやつ。私の感想だけどね……次を担いたいって思ってるから、  
笑って前に進むんだよ。じゃ、やろうか」

ハロに指示出し、鉄哲くんが牢に入った。ブラド先生の実況は状況  
判断の材料になってしまうので回線乗っ取ってシャットアウト。次  
は取蔭さんをやってくれると嬉しいな、いま彼女、ばらけて攪乱しよ  
うとしているから。2,3パーツを撃ち抜いて消耗させておこう。穴田  
くんは今鼻を抑えて必死に逃げているところ。あつ、拳藤さんと合流  
しちやっつた……！うん、これ以上無駄に時間をかける理由はないね。

「アップデート 躯体進化、スタートアップ モード選択、決定。『メリックス MERCURIUS』オールグリー  
ン、実行 行」

ドロリ、と私の両手が銀色の水のようになって崩れ落ちる。地面に落ちた銀色の水はまるでそれが意思を持つているかのよう動き出して、私の周りをうねうねと滞留しだす。私の両腕から流れ出すそれが1トンを超えたあたりで私の腕が形を取り戻す。滑らかに、丸く。いつもの角ばつていてメカメカしい私の腕ではなく、繋ぎ目のない滑らかな腕の形に。物間くんがそれを見て、ゴクリと唾をのんだ。

「参考までに聞かして欲しいんだけど……なにかな、それ」

「ナノマシンと液体金属を組み合わせたものだよ。凄いでしょ」

「そういうのはラスボスのやることであつてヒーローのすることじゃないんだよ！」

「きこえなーいー」

ぶわっ！とすさまじい勢いで液体金属が塊となつて物間くんに襲い掛かる。物間くんは両手を肥大化させて受け止めようとしたみただけど、液体なんだよね、それ。指の隙間をすり抜けて、腕を伝つて物間くんを飲み込んだ液体金属、メリクリウスが物間くんを拘束してしまう。メリクリウスが勝手に移動して物間くんを牢に移動させていく。途中で物間くんが金属に変わつたり獣っぽくなつたり分裂しようとしてたけど、メリクリウスは自在に形を変えて物間くんを拘束し続け、抵抗を許さない。

「心操くん、いまどう？」

『ごめん、取蔭に見破られた！今逃げてる！』

「凄いな取蔭さん、見破つたんだ！心操くん合流しよ！誘導するからこつから正面衝突だ！」

『わかつた！ごめん！』

「へーきへーきー」

流石にメリクリウスを使いながらだと同時に戦況の把握は無理だったので最低限ハロに心操くんを任せてただけかどうかやら取蔭さんに見破られたらしい。何それどうやったんだろう！？勘かな？ハロから再度ビットたちの操作権限を受け取った私が今いる場所に宍田くん、拳藤さん、取蔭さんを誘導する。止まれば攻撃があたり、かといって誘導されてる現状にB組チームは歯噛みしてるみたいだ。

当然だけどね、拳藤さんがやったように、考える暇を与えないように動かしてるんだから。

ハロに誘導された心操くんがB組より先に戻ってくる。B組チームはちよつと遠回りのルートで誘導しているからもうちよつと時間がかかるだろう。息を切らせた心操くんが袖口で額を拭う。ゴーグルを額にあげた心操くんが話しかけてくる。

「ごめん樫、しくじった」

「え、ちゃんと鉄哲くん捕まえたでしょ？成功してるよ。しかも掴まつてないし心操くん」

「何回も守られたよ。その浮いてるやつにさ」

『シンソウ、スゴカッター！ハロノ援護イラナイ！』

「べた褒めじゃんハロ。あとで映像見せてもらおうと」

凄いな、心操くんは苦々しい顔してるけど、ハロがここまで褒めるってないよ。だってハロ、AIだから成功失敗の判定は凄いシビアなの。つまり、ホントにハロの援護なしでも何とか出来たんだよね。心操くん、実戦経験はないけどさっきまでの2戦で自分がどう動けばいいのか、何が出来て何ができないのかを理解し始めたんだね。だからハロのビットによるフォローもこうすればよくなるっていうのとどまつて、援護しなければヤバかったっていうのがなくなつたのか。これはうかうかしてられないなあ、私も。

「ゲッ……やっぱり誘導されてたんだね」

「また何か知らないのがある！注意して二人とも！」

「まさか鼻を潰されるとは思いませんでしたぞ……！」

「ほら、セメントス先生がいつも言ってるでしょ？得意を押し付けるのが戦闘だつて。ここで、終わらせよう」

ビットに追い立てられて私と心操くんのいるちよつと開けた場所に行ってきた3人、取蔭さんはやっぴりか、と苦々しい顔をしている。追いかけてきたビットたちがメリクリウスに飲み込まれてそのままナノマシンによって分解され、メリクリウスの一部となり体積を増やす。ごぼごぼと重低音を出して私の周りを蠢くメリクリウスといつもと違う私の腕を見て拳藤さんが警戒をあらわにした。よーし！い

いとし見せるからね！いくよ！心操くん！

## 104話

「いくよっー!」

私の周りを漂う流体金属、メリクリウスが津波のように襲い掛かる。B組チームは目の前に心操くんがいるからかここからは洗脳を警戒して言葉によるコミュニケーションを捨てるつもりらしい。ハンドサインでやり取りしはじめた。うん、そうすると思ってたし、そうしないとまずいからね。何せ、誰かの声に返事をしたら洗脳されるかもしれないわけだから。

穴田くんは心操くんへ、そして拳藤さんは私へ。取蔭さんは全身をばらけさせて援護するようだ。手数を取蔭さんと、パワーの穴田くん拳藤さんというわけね。なるほど、これもある意味ではオールレンジ攻撃というわけか。まず私が突っ込むことにしよう。片腕を巨大化させた拳藤さんが私に向かって団扇のように振りかぶった手を叩きつけようとする。

対抗しようか!私の腕のメリクリウスが膨張して拳藤さんと同じくらいの大きさに体積を増大する。不定形だからこそ、どんな形にもなれる。慌てた拳藤さんだけど振りかぶった手は戻せない。そのまま腕を掴んで、力比べに入る。押し合いなら当然私が有利だよ!突き飛ばすように私は拳藤さんを押し飛ばした。途中で私の後頭部を狙って取蔭さんの分離された手が飛んできたけど、メリクリウスが自動的に防御してくれる。私が認識していなくてもね。

メリクリウスはナノマシン技術の始まりといってもいい。ナノマシンそのものを大量に操るのが最終目標だけど、今は液体金属にナノマシンを混ぜ込んで媒介として操る方式しか取れない。それでもこれこの通り、自在に形を変え、硬度を変え、不規則に動くメリクリウスは非常に予測しづらい。といっても液体金属なので、突然ビームを撃つたりはできないんだけどね。

「心操くんっ!」

「ああっ!」

「なぬっ!?!」

ギリギリ穴田くんから逃げ回っていた心操くんが私の手が空いたことを察知してくれる。穴田くんの必殺技、ガオンレイジをメリクリウスが受け止め、心操くんが捕縛布でその腕を取る。そのまま私が心操くんから捕縛布を受け取って引つ張り、穴田くんの体勢を崩した。今がチャンス！と心操くんの足元にメリクリウスで足場を作って、そこを駆け上がった心操くんの飛び膝蹴りが穴田くんの顎に直撃する。硬化したメリクリウスで覆われた膝蹴りがいい所に入ったお陰で穴田くんは意識を刈り取られて崩れ落ちる。

「マッズー！」

「もつといくよっー！」

心操くんに繋がった捕縛布を私がさらに引つ張って彼を振り回す形になる。そこから取蔭さんの本体に向かって心操くんを投げた。心操くんは私と繋がる捕縛布を切って、まっすぐに取蔭さんの所に飛んでいく。当然ながら取蔭さんは避ける、ついでにカウンターとして拳を飛ばしてきた。だが心操くんもさるもの、私のビットのおかげで自由自在に飛んでくる何か、っていうのへの対処は頭に入ってるんだよ。

私は空中に浮かべたメリクリウスをいくつか飛ばして心操くんの軌道上にランダム配置する。空中に固定されたメリクリウスを心操くんは蹴り、捕縛布でひっかけ、軌道を変えて取蔭さんに迫り、彼女の本体である胴と頭を捕縛布で捉えた。そのタイミングで結構遠くまで吹っ飛ばした拳藤さんが戻ってくる。道すがら状況を把握していた彼女はまず心操くんの排除にかかった。

「やらせない！」

「くっ!!」

まだ、本体を捕まえたただけなので取蔭さんの切り離された手足は自由に動く。諦めるわけないよね、ヒーロー志望だから！私と相対した拳藤さんは、今度は掌を大きくすることなく素早さを活かした打撃戦を挑んできた。うっわー、考えてるね！そう、私の今の形態はどちらかといえば動き回るわけではなく、じっと動かずに戦闘するように設計してる。要は私の課題である初速の問題はそのままなの。メリク



リウス自体も金属だから咄嗟にどうにかできるほど素早くは動かないし。

ドガガガツと私のガードの上から簡単に木の板を切断する拳藤さんの手刀のラツシュが入る。いたっ！あいたたた！もう！生身の所ばっかり狙ってきて！メリクリウスに気を取られてちゃだめだよ!!じゃこつと私の足が開いて中から閃光弾が発射される。その瞬間私はメリクリウスをドーム状にして私ごと拳藤さんを覆う。あ、まずいやり過ぎた。このままじゃ酷いことになる。

私は青ざめた拳藤さんを抱きしめて目を塞ぎ、さらに耳に耳当てを同時に作って対処。閃光弾の炸裂が終わると同時にそのまま彼女を移動式牢で拘束する。ごめん、熱くなっちゃった。逃げ道潰すだけじゃかったね、脳無とかオーバーホールとかだどこの程度じゃ止まってくれないから確実に行動不能にするのが癖になっちゃってた。訓練なのに鼓膜破裂はすこしね……。

「うわー、 樫と心操のコンビ……えげつなさすぎでしょ」

「お、心操くん取蔭さん捕縛できたんだ！ナイスっ！」

「やりづらいつたらなかったよ。心操、体術あんな動けるなんて思わなかった……」

「さっきは、発揮できなかった。緑谷のパワーだとそういうのって意味ないから」

バシヤ、と音を立てて地面に落ちたメリクリウスの闇が晴れるとすでに心操くんは取蔭さんのありとあらゆるパーツを捕縛布で建材を巻き込みつつぐるぐる巻きにされて拘束されている。やれやれと、ヒーロースーツのマスク越しにため息をついた取蔭さんがこうさーん！と声をあげる。それを聞いた私はマイクの回線ジャックをやめる。マイクが繋がったのが確認できたのか相澤先生の声がスピーカーから聞こえる。

『特別戦は樫、心操チームの勝利とする。講評するからすぐに戻ってこい』

「よし！心操くん勝ったよ！いいい！」

「なんかテンション高いね、樫」

「そりやそうだよ。心操くんと共闘できたんだよ？しかも即席でコンビプレイまでできた！テンションだつて上がるさー！」

「ごぼごぼと音を立てるメリクリウスで心操くんを持ち上げて高い高い、私のこの感じにもいい加減慣れてきたらしい心操くんはソファに座るみたいな態勢でメリクリウスの感触を楽しんでいる。拘束を解かれた取蔭さんも体を元に戻してぶにぶにとメリクリウスを触っている。頑丈な宍田くんも意識を取り戻し、牢屋から鉄哲くんと物間くんも戻ってきた。」

「アハハハ！今回はいいようにやられたけど次はこうはいかないかなな樫！今回の情報でもっとB組は強くなる！」

「受けて立つよー！初見殺しなら山ほど用意してあるからね！I・アイランドの論文全部読み込んで理解するくらいしないと対処できないんじゃないかな？」

「先生方が反則といった理由が分かる気がしますぞ……」  
帰ろうかー、と私は自分も含めてメリクリウスを使い全員を運ぶ。ぶにぶにと不思議な感触をしているメリクリウスは、スライムが這って移動するような感じで運動場Yを抜けて、クラスメイト達の所に戻る。おもちのようなものに乗って現れた私たちを見た相澤先生がため息をつく。これ作るのに個性は必要だけど動かすのに個性は要らないからね、抹消しても動くんだ。

「で、講評だが。B組、戦ってどうだった」

「全部掌の上って感じが拭えないよね。八百万とはまた違う感じの……質の悪い詰め方してくるよ」

「こっちの強み全部潰してきたうえで当然のように自分の強みは押し付けてくるし……やりづらいつたらありやしないわ。しかも何で心操とあんなに息があつてるの」

「まさか物間に化けて洗脳かけてくるたあ思わなかった。何も出来なかったぜ……」

「索敵されるのを予想してこっちの手段を完全に潰されました。心

操氏が動けるのは承知の上でしたが、的確なサポートのおかげで見事に不覚を取りましたぞ」

「ぶっちゃけ反則だね彼女。油断すらしてくれないし。真っ先に僕を潰しに来たあたり見る目はあるんじゃないかなアハハハハ」

「あ、ちなみにですけど最初のチーム発表でブラドキング先生が誰が来るのか教えてくれたので作戦の組み立てが楽でした」

秘密にしとけばもうちよつと梃子摺ってた、というかワンチャン負けてたかもね。例えば物間くんが宍田くんの個性を使つて心操くんの前に立つてたら、投影映像による擬態は効かなかつただろうし、初手で誰がいるのか、という情報を貰えたのは非常に大きい。どうすればいいのかという道筋を立てやすいからさ。

「で、樫。反省を述べろ」

「心操くんをもうちよつと活かせればなあと。結局敵味方無傷では終われませんでしたし。心操くんの個性なら可能なはずでした。取蔭さんを最後に回せばよかつたかなと。分断までは作戦通りでした。あれを初見で見破るあたり改良が必要ですね」

「いや、化けたのが物間じゃなかつたら多分アタシも騙されてたよ。なんて言ったらいいかな……物間の狂気がなかつたからさ」

「え、そうか!?俺は騙されちまつたぜ!?!」

「僕に狂気なんてないけどお!?!」

なるほど、物間くんの狂気かあ……クラスメイトにもそう認識されちゃってるあたり物間くんはそろそろ自分のアレソレを見直す段階に入っているのではないだろうか。反省を述べろ、といわれたけれども今回の戦闘訓練において致命的なミスは犯してないと思う。理想は全員無傷制圧だけど、それは理想論だ。オールマイト先生ですらヴィランを拘束ではなく気絶という感じで場を収めているから。

「爆豪くんほどスマートにはいかなかつたね」

「当然だわ俺がおめーに負けるわけねーんだよカス!」

「爆豪おめー体育祭で樫に負けてるじゃねーかー」

「アホ面てめえ爆発させんぞ!」

「はい黙れ。反省を述べろ、とは言ったが特に俺から申し送るよう

なことはない。ブラド、何かあるか」

「いや……正直言えば予想以上だった。今も出てるそれ、俺の操血に通ずるものがある。今はまだ大雑把かもしれないが使いこなせばさらに上に行けるだろう」

べたほめだー！こんな手放しに褒めてもらえるなんてなかなかいからすっごい嬉しい！確かに自分の血を操ることができる個性のブラドキング先生は液体を操るということでメリクリウスと少し似ている。ブラドキング先生は血液を固めることで捕縛を行うから同じようにメリクリウスで捕獲を行った私と共通点があるのか。ってことはお話聞けばもつと上手にメリクリウスを使えるかも!?

メリクリウスを腕と融合させて体の中に完全にしまい込む。いつもの腕に戻った私が違和感ないな、と腕を確認しているとたたたっ！とエリちゃんが勢いよくえーくんの抱っこから抜け出してこっちにやってくる。私は膝をついて飛び込んでくるエリちゃんを受け止めた。ぎゅーっつと抱き着いてくるエリちゃんは

「おかあさん、かつこよかった!」

「ほんと?嬉しいなー」

「いちばん!」

「爆豪くん、私の勝ちということだ」

「ああ!?!親バカにでもなったかメカ女!上等だ今ここで白黒はつきりつけてやる!」

エリちゃんの裁定は絶対なので爆豪くんは勝利宣言をする。流石の爆豪くんといえどもエリちゃん自体に手を出すわけもなく、私相手にパチパチと両手で小爆発を起こすしかない。エリちゃんの応援があれば私は無限にパワーが湧いてくるので負ける気しないよ。今だったら爆豪くんでも完封できる気がする!それはともかく。

「心操くんの編入試験の結果はどうでした?」

「何だ樫、気づいてたのか」

「え、ここまで露骨にやって気づかれないと思ってたんですか!?!心操くんも気づいてたよね!?!」

「そりゃ、まあ。俺だけ3回だし、樫と組まされるし」

この授業は間違いなく2年次におけるヒーロー科編入の試験だったのだろう。心操くんもそれが分かっているから、何となくいつもより気合が乗ってたんだろうし。私個人としては、ここまでやれて落ちたら流石に抗議をするレベルだ。心操くんの努力は花開いた。洗脳という個性をどう戦闘に生かすか、個人戦闘の時の戦い方は？状況判断は？満点ではないかもしれないが、合格ラインは超えているはずだ。というか超えてなかったら私たちヒーロー科の立つ瀬がない。

「これから改めて審査に入るが……おそらく、いやほぼ確実に2年からヒーロー科に心操は入ってくる！お前ら、中途に張り合われているんじゃないぞ！」

「……ほんとに、ですか」

「そうだ。心操、俺個人はお前を非常に評価している。こんなところで躓くタマじゃないとな。誰かのために個性を使っただろ、今日。お前はできるやつだ、じゃなきゃ引っぱり出さん。楪についていけると判断したから組ませたわけだしな。中途半端なら楪に介護されて終わりだ。共闘、出来たじゃないか」

確かに、と私は心操くんもカツコよかったと拍手を送るエリちゃん  
の頭を撫でながら首肯する。心操くんは、私についてきた。ヒーロー科の訓練でもまれた身体能力に自分の努力だけで追いついてきたんだ。自分に何ができるのか、出来ないのか。できない場合は誰に任せればいいのか。そういったもろもろを含めて……私どころかA組ともB組とも共闘が出来てたわけだ。すっごいじゃん、それ！

私は無言でパンツ、と心操くんの背中をはたく。ちよつと強すぎたのかげほごほと咳き込む心操くんが抗議するような顔で私を見上げる。私はそれに無言ですつと手をグーで出した、心操くんは少し目を丸くした後……満面の苦笑いで私の手に同じくグーにした手を軽くこつん、とぶつけた。頑張ったじゃん？お疲れ様、心操くん。

## 105話

「オラどうしたビビってんのか!」

「あれ?爆豪くんって何時の間にワンフォーオールのこと知ったんですか?」

「ああ、そういえば樗少女には話してなかったね。実は仮免試験の時少年たち喧嘩しただろう?その時に少しね」

「なるほど」

「ちよっ!?まっつかっちゃん!マジで出ないんだって!助けて樗さん!」

現在夜7時、雄英の体育館の一つの中では私の目の前で爆豪くん相手に追い立てられるデクくんの姿があった。私はそれを眺めながらずずーっとオールマイト先生が淹れてくれたお茶を啜る。エリちゃんは私の膝の上ですやすや。夜ご飯前なのに寝ちゃってる……大丈夫かな?天使みたいな寝顔に音声遮断猫耳イヤーマフがとつてもかわいい。エリちゃんは中々体力がつかないね。すぐ眠くなっちゃうみたい。でも、子供らしく元気に歩き回る様になって、私は嬉しい。このまま私を引っ張って連れ回すくらいに元気になってほしいなあ。

目の前で起こる爆発音とニトロが焼ける匂いから目を逸らしつつ、そういえば当然のように爆豪くんがワンフォーオールのことを知ってることに私は驚いていた。デクくん、半分ばらしていたようなもんだったと思うけど、全部まるっと彼が知っていることは初耳で、オールマイト先生はどうやら私に教えるのを忘れてたみたい。ひどくない?これでも結構色々協力してるつもりなんだけどなー?

「あー、いや済まない樗少女。君は最近その、ひどく忙しそうだね。これ以上負担をかけたくなかったのだ」

「まあ、そうかもしれないませんが。実際私もインターン終了してからデクくんとの特訓もしてなかったですし、心操くんともおぎなりになっちゃって」

「仕方がないさ。エリちゃんのことや、私のアレのことも。そして

君自身の鍛錬、はつきり言えばオーバーワークじゃないかな。ちゃんと休めてるかい？」

「頑丈さが取り柄なので。3時間寝ればフルパフォーマンスですよ。8時間睡眠は理想ですねえ」

それは良くないな、とオールマイルト先生が顔をしかめる。私の個性の弊害というか、特徴というか。私、脳みそもちよつとばかし機械が侵食してるので夢を見ることができない代わりにショートスリーパーになっちゃってるんだ。眠るという行為は出来るけど、どっちかといえば休むっていうより電源を落とすっていう感覚に近い。

確かにここ最近、というかインターン後の私はとつても忙しい。忙しいのは望むところだし、全て自分でやるって決めたことだから別につらくとも何ともないんだけど。やっぱり時間は有限なわけで、まず優先順位第1位のエリちゃん、そのあとオールマイルト先生のスーツ作り、その次に私の研究とくれば、すでに師匠がいて私が必須じゃなくなったデクくんや心操くんとのトレーニングの回数は落とさざるを得なかったんだ。申し訳ないんだけど。私がもう3人くらい欲しいなあ。

まるで重爆撃機に襲われているような感じのデクくんを見つつかオールマイルト先生のお話を聞くには、デクくんがワンフオーオールの中で見たヴィジョンで聞き捨てならないことがあったらしい。歴代の所有者の個性が順次強化された状態でこれからデクくんに発現していくのだとか。つまり昼の訓練で見た暴走はその個性の中の一つらしい。

「で、そろそろ止めたほうがいいのでは？デクくん消し炭になっちゃいますよ」

「ちよっ!?!爆豪少年ストップ!そういうんじゃないから!落ち着きなさいブハツ!?!」

「あ、吐血した」

すでに黒焦げになってどっちが前だかわからなくなったデクくんを指し示すと話に集中していたオールマイルト先生が吐血するほど慌てて止めに入る。爆豪くんはどうしてそこまでデクくんを目の敵に

するのかな？複雑な幼馴染関係だなあ、私とえーくんぐらい仲良くすればいいのに。男の子同士なんだから私たちより仲良くなれるんじゃない？

さて、なんでこんなことになってるのかといえば、デクくんのその複数個性が出るのか出ないのか、コントロールできるのかどうかなどを判断する必要があったからだ。それで爆豪くん曰く生命の危機、というか一回殺せば出るだろうというところでも物騒な提案により今に至る。結局出てないからお昼は何だったんだろうって私は両目で解析しながら首を傾げているよ。

「気配が消えた、いや違いますね。扉が閉じたって感じでしょうか」  
「樫少女、つまり？」

「昼のアレは鍵が壊れて扉が解放されたんです。で、一時的にああなったけど今は扉が閉じてるから出ない。でもきつと鍵は開いたままですよ。いずれ出てきます、今は出てこなくても」

「そうだよね……」  
「危機感が足んねえんだよ！もつとボコしやあやべえつつつて出てくんだよこういうのは！んでその状態のためーを越えて俺が一番に」  
「爆豪くんこれ以上デクくんのどこを焦がすの？真つ黒だよ？前と後ろ分かんないよ？」

もー、といいながら私はデクくんに向かって畳んだタオルを投げやる。今ちよつとエリちゃんが膝の上ですやすやしてるから動けないんだよね。真つ白のタオルを真つ黒にしていくデクくんの顔がようやく判別できるぐらいになって、爆豪くんは出ないならつまらないし帰るとそのままご帰還為された。エリちゃんもちょうどむにやむにやといいながら寝ぼけ眼でも起きたので私たちも帰らない？デクくん。

「デクさん、真つ黒」  
「爆豪くんって無駄にみみっちいよねー。無傷なのにこんな焦がすなんて」

「かっちゃんはそのくらへんしつかりしてるからね……樫さんごめんね、付き合ってくれてありがとう」



「気にしないでー。エリちゃん、帰ろっか。ご飯の時間だし」

「ご飯……！」

「今日はビーフオムライスだよ」

エリちゃんは最近、食べることについて積極的になってきた。ご飯についてはもう心配いらないかもね、よく食べてくれるようになったし、来たときに比べれば量も入るようになったと思う。まあそれでも、まだ食は細めかかっていう感覚になっちゃうのだけれど。けして私が大食いつてわけじゃないのだ。うん。ごめんなさい大食いです。皆の3倍くらい食べてます。体が大きいからしょうがないんです。食べるのも好きです……。

シャワーを浴びたデクさんと一緒に寮に帰る。エリちゃんはデクさんと手を繋いで楽しそう。笑顔を取り戻したエリちゃんなんだけど、それでもやっぱり表情の変化は乏しいように思える。ただ、笑う時は笑い、楽しい時は体を揺らす、近いところで言えば轟くんみたいな感情の表し方かな？

寮の玄関を開けて中に入ると、寮の共有スペースはぎゅうぎゅう詰めで、それはなんでかといえばB組の皆もA組の寮に集合しているからだ。なんで？と思うかもしれないけど、実は今日の反省も兼ねて親睦会をしようじゃないかとあの物間くんが提案したのを飯田くんその他が受け入れたからである。小大さんが小さくして持ってきたB組共用スペースの家具や机の上には既にランチラッシュの夜ご飯の残りが乗っかっていた。

「お！帰ってきたな3人とも！夕ご飯はビーフシチューだぞ！」

「ほんと!?飯田くんの好物だね」

「あ、デクくん。私の方もご飯仕上げちゃうからエリちゃんを預かってもらってもいい？」

「うん、いいよ」

「お願いしまーす」

ジャージから着替え終わった私とエリちゃん、デクくんも同じタイ

ミングで部屋から降りてきた。ちょうどいいのでぷらーんと脇の下に手を入れて抱き上げたエリちゃんをデクくんに託し、私は部屋から持ってきたご飯を仕上げてしまおうと共用スペースにあるキッチンに向かう。最近は共用キッチンでご飯作ることの方が多いよね。だって運ぶの楽だし。欠点としては調理しているとほぼ確実に誰かから追加オーダーが入ることだけど。

共用の冷蔵庫の中の私のスペースよりバター、卵、牛乳、生クリームを取り出してランチラッシュが炊いてくれている粒立ちが素晴らしいお米をお皿に盛り付け、昨日の夜から仕込んでお肉がトロトロになったビーフシチューの鍋を暖める。焦がさないようにゆっくりと。それでは、オムレツ！

「樫く飯テロやめてくれ〜！」

「テロなんかしてないよ〜。ランチラッシュの美味しいご飯があるじゃないのさ」

「彼女、毎日こうなの？」

「希械ちゃんは基本的に自炊してるわ。エリちゃんのご飯も一緒に作ってるの。とつてもお料理上手なのよ、ケロ」

熱したフライパンに落としたバターの匂いが換気扇の処理能力を超えてふんわりと香っていく。飯テロだ！と瀬呂くんが盛り上がる中、物間くんはどうやら私が寮内でも自炊しているのかどうか気になっている様子で、それには梅雨ちゃんが答えてくれる。牛乳を混ぜた卵液をよく熱されたフライパンに流し込み、手早く半熟のプレーンオムレツを作っていく。

エリちゃん用の小さなオムレツをご飯の上に乗せて、次は私の分。何倍もあるサイズだけど私にかかればちよちよいのちよい！巨大なオムレツが完成して私の分のお皿の上に盛り付けられる。周りにビーフシチューを流しこんで、アクセントの生クリームを散らし、オムレツの上にはパセリをぱらっと。よし完成！

「ふわ〜」

「うが〜〜〜！うまそうー！」

エリちゃんの前に運んで、オムレツを開いてあげるとトロつとタン

ポポのような半熟のオムライスが完成する。エリちゃんはそれに歓声を上げて、私はそれを微笑ましく見守る。エリちゃんは素直だから実に喜ばせがいがあるのだ。既に夜ご飯を済ませた面々は羨ましそうにそれを見守っている。あ、そうだ。

「冷蔵庫の中のアジの南蛮漬食べちゃっていいよ〜」

「食べる〜!!」

欠食児童かな?とこの一番に声をあげた三奈ちゃんが冷蔵庫にぴゅーんと飛んで行って大きなタツパーの中に敷き詰められたアジの南蛮漬を引つ張り出して来た。訓練後ということもあり、ランチラッシュのご飯だけでは足りなかったらしいみんなが勢いよくそれを分け合っていく。うーん、美味しそうに食べてくれると私としても嬉しいなあ。楽しくてにこにこしちゃう。

「にしてもA組ってさ、ヒーロースーツなんか最新って感じるよね」

「ん」

「確かにな!上鳴が持ってたやつとかすっげーイイ感じじゃんか」  
やいのやいの、と今日の反省点について話し合っていると取蔭さんが唐突に私たちのヒーロースーツについて突っ込みを入れ始めた。そうかなあ?基本的に私含めて提携してるデザイン事務所製だからB組と使われている技術は変わらないはずだ。というかそんなこと言ったら物間くんがA組優遇だって騒ぎかねないぞ……

「そりゃあ、そうだろ。なんせA組には最新技術の塊かつプロライセンス所持者がいるんだぜ?」

「何を隠そう希械ちゃんだー!」

「え!?樫ってサポートアイテムの免許持ってるの!?!」

「あ、うん。I・アイランドで国際免許取ったの。夏休み中に」

ご飯を食べ終わり洗い物をしていた私に驚いたような拳藤さんの質問が飛んでくる。そっか、あまり交流がないからB組の人は私がサポートアイテムのライセンスを持っていることを知らないのか。ぶっちゃけ私はその時先生方に言われるがままに取得した感じに近

いので誇れるかって言われたら違うような……。取っておかなかつたらここまで強くはなれなかつただろうけど。

「つてことはクラスの中にプロがいるんだー。いいなー、サポートアイテムの相談できるんでしょ?」

「イメージ伝えるだけですぐに試作品作ってくれたりするんよ。いやー、助かつとります」

「それは本当に素晴らしいですけど……。普通にデザイン事務所を通せば3日ほどかかりますからな。それで合わなければまた3日かかるわけですから」

ああ、確かに。というか普通だったら3日でもかなり早い方だ。雄英提携のデザイン事務所は優秀極まりないからね。仕事の速さは折り紙付きだ。私も個性という特異性がなければ普通に追いつけないだろう。あれ?なんかB組の皆目が怖くない?あ、デクくんがエリちゃんを退避させちゃった。いやな予感がするぞ……。:

「ねえ、樫さあ……。B組からの依頼も受けてもらえない?強くなりたいたいんだよね、私たち」

「アハハハハ!そうだよね!?プロライセンス持つてる人がまさか偏ったような仕事の割り振りするわけないよね!」

「なにをー!希械ちゃんはその専属なんです!偏って何が悪い!」

「うーん、別に受けてもいいけど……。普通にサポート科に頼んだら?例えば3年生にいるメリッサさんとか私並みかそれ以上だし、明ちゃんも腕は確かだよ。私が唯一勝っているって言えるのは確かに仕事の速さかもしれないけど」

そっか、当然のように私はA組の皆の依頼を受けていたけど、B組の皆からしたらそりゃあ偏ってるなんて言われちゃうよね。うーん、私が受けてもいいかもしれないのだけれど、今ただでさえいろいろ立て込んで時間がないので、こういう時のためのサポート科を紹介するのが吉だろう。というか明ちゃんがいいじゃん。明ちゃんなら喜んで……。興味が向かないとダメだ彼女。

「正直今凄忙しいの。クラスの皆からの依頼も断ってるくらいだ

し……頼ってくれるのは嬉しいんだけど……もう少し私の手が空いてからじゃダメかなあ？」

私は両手を合わせてすいません、とB組のみんなに謝るのだった。できれば受けてあげたいのだけど、今やってるタスクの重要度が高すぎて後回しにできないんだよね。せめてあと2か月は欲しいかな。お願いしますと言ってみるとどうやらダメ元だったらしいB組の皆は普通に苦笑して受け入れてくれた。うん、やっぱり私があと5人は欲しいね！分身でもしようかな？

## 106話

ギユイイイイン!とドリルや工具の音が鳴り響いている。いつもより人がかなりせわしなく動いているこの場所は、サポート科。私はそこでヒーロースーツに身を包み、同じくヒーロースーツ姿のパワーローダー先生を胡乱な目で見降ろしている。ああ、エリちゃんが恋しい。と私は「今日は私が一緒なのさ!」と校長先生に連れ去られてしまったエリちゃんに思いをはせる。どうして……どうして……

「どうして私はここに居るのだろうか」

「くけけ……それは今日が体験入学だからだよ。サポート科の手伝いよろしくね」

「私はヒーロー科なんですう!」

「何言ってるのさ君はもううちの子だよ」

知らないうちに私サポート科に移籍されかけてる!?それはそうと、今日は雄英高校の体験入学の日なのだ。雄英高校はヒーロー育成校、学校なのだ。入学者を確保しないことには始まらない。なので、昨今の情勢を鑑みてもなお、学校としての根幹をなすイベントだけは外せない。なので最近のお気に入りにはエメンタールチーズの校長先生が頑張って今日を迎えたいらしい。ハードチーズがお好みなのか。覚えとこう。

それはそうと、昨日このことを知らされた私は後輩になるかもしれない子たちとトレーニングができるのか、と物凄く楽しみでわくわくさんになっていたのだけれども、当日の今日に朝いきなり寮にやってきたサポート科各位にそれぞれが開発した拘束用サポートアイテムで拘束され、拉致されかけたのだ。いやこれ拉致だよ、という余裕もなかった。

突然のことで目を白黒させていた私と余りの凶行にフリーズするクラスメイト、そしてじわりと目に涙を浮かべたエリちゃん。それが目に入った瞬間私はキレて拘束をぶち破り対物用威力のビーム兵器で本気で迎え撃とうとしたのだけれど、遅れて現れたパワーローダー先生がサポート科全員を鎮圧してとりあえず落ち着いた。身の丈以

上の巨大ビームライフルを振り回す私をクラスのみんなが必死に止めてくれてたらしい。あとから思いだしたけどぶっ放してたら隣のB組寮まで巻き込んで更地になる所だった。また校長先生に怒られちゃう。

そのあとマッド具合に拍車がかかりすぎてちよつとヴィラン寄りになったんじゃないかでお馴染サポート科の全員をこんこんと見下ろして説教をしていた。明ちゃんとメリツサさんはパワーローダー先生と一緒に現れて頭を抱えていた。明ちゃんがそうなるってどうよサポート科3年生？年下にこんな説教されて恥ずかしくないんですか。私は忘れませんかね、ハロを追い回して分解しようとしたこととか。次やったら巨大電子レンジ作って中に放り込みますよ、いいですね？

「なんで私はヒーロー科の方じゃないんですかあ……しかもヒーロースーツでこんなところに」

「しようがないわ。学生で超圧縮を習得してるの、私と貴方くらいだもの。発目さんはもう少しね」

「ヒーロー科は黙っても人が来ますから！私たちは刈り取る必要があるのです！希望者を！」

いや分かるよ。普通科はともかく専門科のサポート科や経営科は素養がないと難しい科だ。だから推薦入学者枠も多いし、ヒーロー科よりも偏差値高かったりする。誤差だけでも。どうやら後輩に興味があります状態の明ちゃんと経験があるらしいメリツサさんはてきぱきと準備を進めていく。

超圧縮技術というやつは曲者で、コツみたいなものを習得しなければうまくできないのだ。要はアレ、物品を原子レベルまで分解してギッチギチに圧縮してるので、その原子レベルまで分解されたパーツをどうパズルしていくかの法則を掴まないと超圧縮技術を習得できたとはいえないの。で、そのパズルの方法ってのが個人差があつてめんどくさいのよねえ。だから、習得できるかどうかはその人の努力にかかってたりする。

いいなあ、きつとヒーロー科の皆はもしかしたら後輩になるかもし

れない人たちと一緒にトレーニングして仲を深めてるんでしょ？私  
もそつち行きたいなあ。別にサポート科嫌いじゃないんだけど、長居  
すると分解されかけるからさ。たまに顔出すぐらいで十分な気がす  
るよ、うん。とりあえずやりますという私にパワーローダー先生は  
「まあ、樫を呼んだのは理由があるんだよ。模擬授業を一コマやる  
からそれを手伝ってほしくてね。サポート科が作ったサポートアイ  
テムVS君という形で」

「ロボインフェルノでも出してくるんですか？」

「あれは君にとつちや木偶の棒だろ。予算の無駄だよ。ヒーロー科  
のアップールをしつつ、サポート科のアップールもできる。一挙両得だと  
は思わないかい？」

「確かに私ほどサポートアイテムを使うヒーロー候補生はいないと  
思いますが。まあもう準備させられてますからね。いいでしょう、や  
りますとも」

「ちなみに報酬は校長が用意してくれたレアメタル詰め合わせだ」  
「物凄くやる気出てきました」

現金なんて言わないで欲しいんだけどレアメタルってマジでレア  
なんだよね。基本的に家電を吸収するだけじゃ微々たる量しか手に  
入らないの。それでいていろんな性質を併せ持ったりしてて量が欲  
しいって時に在庫が、つてなりかねないの。まとまった量手に入るな  
らやらない理由がないんだよ。もう、最初からソレいえば無条件に協  
力したのにもう。私相手にサポートアイテム試すようなことするか  
ら朝みたいになるんだよ。

やる気がみなぎってきた私は何故か最初からあてがわれている結  
構広い展示スペースにでん、でん、でんとゴリアテ、アルビオン、ヘ  
カトンケイルを配置してその前の椅子に座って膝の上にハ口を大き  
くして抱っこしておく。ちらちらとサポート科の人たちの中身気に  
なっているアップールは全部無視だ。うるせえ自分で作れ、朝のこと許  
したわけじゃないんですからね。

今日も元気よく鳴り響くプレゼントマイク先生の放送機器要らず  
の大声を聞きながら、私は意識を切り替えるのだった。一応プロライ



センスを持った技術者の端くれでもあるわけだし、これもお仕事、ヒーロー活動ということにしておこう。だから明ちゃんはその工具を仕舞ってゴリアテの前からどいてね？分解したら怒るよ？ねだるな、勝ち取れ？さすれば与えられん？そのままだと貴方が与えられるのは私のゲンコツになるよ？よろしい。

「か、カッケー……」

「体育祭1位の人だ……」

「デッツツツか……」

「こちらはサポート科の特設コーナーだよ。気になるアイテムがあるなら先輩が懇切丁寧に教えてくれると思うから気軽に話しかけてね」

意外とサポート科、盛況だな。私大体座つてようやく普通の身長の人と目が合う感じなので話しかけやすいのか、それとも後ろの外骨格たちが悪目立ちしてるのか分からないけど……割とよく質問される。抱きかかえてるそれは何ですか？とかサポート科だったんですね、とかね。ヒーロー科だよと訂正してるのだけでも。

「すっげえ……これ先輩が作ったんですか!？」

「そうだよ。中に人が入れる強化外骨格、タイタンシリーズっていうの」

「樫希械先輩ですよ。体育祭みてました。あの、少し質問してもいいですか?」

「うん、いいよ」

私の目の前にやってきたのは中学校の制服に身を包んだ特徴的な二人。浅黒い肌と強いパーマがかかった黒髪の男の子と電気のようなエネルギー質の髪、多分エンデヴァー事務所のバーニンが近い感じの髪をした男の子だ。ヒーロー志望です！と名乗ってくれた吹寄風児さんと三田来人くん。そうか、私ももう先輩になるんだなあ。感慨深いなあ、うんうん。

「先輩の体育祭で使用していたサポートアイテム……全て威力がす

さまじかったと思います。兵器といっても過言ではないほどに。対人で使用できないものを使い続けるのはベターではないと思います。それに、後ろのアイテムも見る限りではそれに拍車がかかっているように見受けられます。小回りが利くものを作ろうとは思わなかったんですか？」

「おまえ、先輩を前にしてなんちゆうことを……！」

「凄いね、ストレートに。小回りが利くものは作ってあるよ。今回は先生から派手なものを出して欲しいって言われてるから、こうなってるだけなの」

「そうなんですか。すみません不躰に。気になってしまっ」

なるほど三田君、面白いタイプだね。タイプとしては障子くんに近いのかな。頭が回って口も回るタイプ。歯に衣着せぬ感じのいい方は入学したての頃の轟くんを思い出すなあ。なんて思いながらちよつといたずら、例えばこんなのだね、といいながら二人の周りにシールドビットをふわふわと浮かべてあげる。いつの間にか包囲されていたことに気づいた二人は周りを見渡して目を白黒。

私はあるまり気にしないけど、三田くんはちよつと対人関係が難しいタイプかもしれないね。相手の欠点をそっくりそのままオブラートに包まずに聞いてくるから腹が立つ人は怒ってしまうかもしれない。まあ爆豪くんに爆発サン太郎とか言わなかったら大概大丈夫じゃないかな？年下の生意気な発言に噛みつく人は恥ずかしいぞ、ってね。

「そういえば、二人はヒーロー科志望なんだっけ？体験授業もうすぐじゃないかな。行かなくて平気？」

「あっ!?やべえ人数制限はいつちまう！すんません先輩！来人が失礼しました！」

「ご丁寧にありがとうございます。勉強になりました。失礼します」

「はーい、楽しんでいってね」

ヒーロー科の体験授業はあっちだよ空間投影で矢印を作って方向を指し示してあげるとどうやら迷ってここにたどり着いたらしい

二人はお礼を言って速足にヒーロー科の方へ去っていった。結構印象に残ったな―あの二人。もしも入ってくるなら面白いことになりそうだけど。むふふ、と私は一人未来に夢をはせるのだった。あ、こんにちは。え？動くのかつて？動くよ、ほら。そんな腰を抜かすほど驚かなくても。

いやー楽しいなあ。サポート科の見学に来る子たちはみんな大なり小なりサポートアイテムに興味がある子たちだから話が合うというか、なんというか。私の元々の気質がそういう技術者寄りだったというのもあるかもしれないので仲間を見つけた感覚だ。何でヒーロー科なのにサポート科の手伝いしてるんですか？って何回も聞かれたけど。私が知りたいよ、私もみんなとヒーロー科の体験授業したいよ全く。

あと私、曲がりなりにも雄英の体育祭優勝してるから他の人よりもかなり、いや大分顔が売れてるんだよね。神野の件はテレビ中継でもオールマイト先生中心で私や爆豪くんはそこまで映ってなかったから気づく人は気づくレベルだろうけど、タイタンシリーズのインパクトが無駄に大きいせいか神野のことを質問してくる人は流石にいない。オールマイト先生がどこにいるか聞いてくる人はいるけど。

「あ、樫。そろそろ準備頼むよ。サポート科のやつらも張り切ってるしね」

「もしかしてこれにかこつけて皆私相手に自慢のサポートアイテムの性能を試そうとしてみませんか？」

「ほぼ10割それだね。ちなみに俺も出してる」

「……遠慮なしに破壊しますけどいいですね？」

「むしろそうしてくれなきゃ困るよ。手加減されたら性能差なんてわかったもんじゃない。知りたいのは限界性能だからね」

薄々気が付いていたけれどもそれが今確信に変わる。なんだかんだってサポート科の皆は勤勉だし真面目だし目的に向かってひじょーにまっすぐに進んでいく。それがマッドな方向、まあ私

も人のことが言える立場かどうかは分からないけど研究者気質なのは間違いない、サポート科の皆どこかしらそうなんだろう。

体験入学のアレソレは全部隠れ蓑でこれをいい機会に大概の無茶を上からどうにかできる私相手に自分の限界、最高のサポートアイテムを試す気にいるんだな？パワーローダー先生含めて。まあ私も気持ちはよくわかる、この前完成した肩掛け式遠隔エネルギー充填型ビームキャノン、仮称サテライトキャノンを上につぶ放した時と同じ感じなのだろうきつと。ごめんなさい校長先生。

まあ、戦闘訓練で動くのは嫌いじゃない、というかむしろ大好きだ。戦闘が好きか嫌いか聞かれたらまあ、あまり好ましくはないのだけれども。誰かを助けるための戦いが必要になるってことはここ一年で物凄く学んだことなので、強くなれるならそりゃーいくらだって動きますとも。それはともかく、メリッサさんと明ちゃんに軽く手を振ってから私はパワーローダー先生と一緒に特設ブースを抜ける。この後運動場で私VSサポートアイテムという形になるので先に準備するためだ。まあ私既にヒーロースーツで戦闘態勢バッチリなんだけど。

「ん？どうしたの三田くんに吹寄くん。そんな気を落としたような感じで。ヒーロー科体験できた？」

「あ、樫先輩……それが」

「人数制限にかかって見学だけで終わってしまった。体験できなかったんです」

「なんですと？」

気落ちしたようにとぼとぼ歩いていた吹寄くと姿勢よく歩く三田くんを見つけた私が声をかけると、彼らは私を見上げながらそんなことを言った。私はそれを聞いて、パワーローダー先生と目を合わせるのがだった。

ヒーロー科の体験入学の定員に溢れてしまった、と気落ちした様子で話す吹寄くん。うーん、残念なんだけど雄英のヒーロー科って日本全国津々浦々のヒーロー科の中でも土傑と並んでナンバーワンの人気と入試倍率を誇っているから体験入学でもそりやあ列整理ぐらいはいっちゃうよね。うおおお、気まずい、気まずいうえにいたたまれない。こ、後輩が困っている……！

ちら、ともう一度パワーローダー先生を見る。パワーローダー先生はうーんと考え込んでいるようだ。困っている人を助けたいからヒーローになったわけで、自分のできる範囲のことならやってあげたいというのが私の思うところ。だってかわいそうじゃない、折角楽しみにやってきたのに見るだけで終わりだなんてさー。もったいないよ。体験入学だよ？体験しなきゃね。

「樫、引き受けられる？」

「いいですよ。傷一つなく守り切りますから」

「その言葉、最高に頼もしいね。じゃあその二人。ヒーロー科じゃないけどヒーロー科の模擬授業、体験させてあげようか？」

「え？…え？」

「その、話がつかめません。どういうことでしょうか？」

目の前で繰り広げられる二人にとっては訳の分からない会話に要点がつかめず頭の上に？マークが付きながら首を傾げる吹寄くんに三田くん。まあそりやそうだよねえ、ようはこれ飛び入りでプログラム変えるからそれに参加しろっていう提案だから。では私が説明することにしませうか。

「二人はヴィラン・アタックっていうアトラクション知ってる？I・アイランドとか個性使用可能地域ならメジャーなアトラクションなんだけど」

「あーはい！知ってるツスー！というかI・アイランドでやったことあります！7秒は流石に超えられませんでしたけどー！」

「あ、それ私の記録。まだ超えられてなかったんだ。私、ヒーロー科

だけどサポート科のお手伝いで今からサポート科の人が作ったサポートアイテムロボットと似たようなことやるんだ。二人が良かったらそれに私と一緒に出てみない？」

「よろしいのですか？それに不公平さが出てしまうと思います。僕たちにとつては願ったりですが……」

「くけけ……それは運が良かったと思っておくんだね。樫が覚えてたから、君たちにチャンスが降ってきたんだ。雄英高校は自由な校風が売り、それは俺たち教師もさ。プルスウルトラ、挑戦してみるかい？」

わー、その言葉懐かしいなあ。入学当初に相澤先生がこれ言って入学式すっ飛ばして個性把握テストやったんだっけ私たち。二人は校風と校訓のダブルコンボを受けて二人の顔が俄然やる気に満ち溢れているものになる。やります、という大声の吹寄るに静かにやらせてくださいという三田くん。対照的な二人だなあ。

「というわけで、この授業はヒーロー科の入試に近いものなんだ。だから一回分予習できたと思うといいんじゃないかな」

「なるほど……しかし来年度は内容が違うのでは？」

「かもねー。私たちまではそれだったみたいだし、来年が一緒だという保証はないよ。私の担任も非合理的だって変えたいみたいだし」

「や、やべえ緊張する……！」

運動場β、市街地を模した場所にてジャージ姿の二人と一緒に準備運動をする。怪我の原因となるものは除くべし、まずルールなんだから彼らは自衛以外の個性使用は禁止。残念ながら体験止まりだからね。実際の戦闘を肌で感じてもらうことが目的だ。当然ながら私には彼らが無傷で返す責任が生じたわけなんだけど、まあ大丈夫でしょう。サポート科の人たちだって殺戮兵器を作ってるわけじゃないんだから。要はこれ、私相手にどれだけ持つか、という話であって私打倒！ではないからさ。

私相手に多少もつなら有事の際に護衛とか任せることができるし、

改善点が見つければそれはそれでよしだ。幸い二人は緊張しているもののしり込みをしている様子はない。さて、どうしたものかなあ。と私はとりあえずの武装で大型銃を一機生み出した。いつものビーム兵器がライフルならこれはマグナム。ビームマグナムと言うべき武装だ。エネルギーパックを一発で一つ使い切る代わりにすさまじい威力を誇る超武装。対ロボくらいでしか使えないんだけど。

「じゃあ、確認ね。全方位から多分来るんだろうけど私の後ろから出ないこと。個性の使用は自衛のみ。不測の事態があつたら私の指示に必ず従うこと。大丈夫?」

「はい!」

「分かりました」

よろしい、と私は頷く。いやー、こんな風に後輩になるかもしれない子とこんなことするなんて思わなかったなー。いいところ見せたいし、やる気を出していこう。ブザーが鳴って始まる。他の人たちはモニターで見ているのだろう。そしてずごくことすさまじい音と地響きがしてビルの間隙から、いつぞやの入試でお世話になったロボインフェルノがこんにちわした。いやー懐かしいなあ。

「うえええええっ!?!」

「でかい……!!」

「あれ、出さないんじゃないかな? まあいいや。ああいうのの対処法なんだけど、1番、上から火力で潰す。2番、弱点をピンポイントで潰す。3番、逃げる……: だいたいこんな感じなんだけど。君たちは如何する?」

「立ち向かう!」

「いったん撤退して対処可能なヒーローに協力を仰ぎます」

「うん、どっちも正解。今回は市街地戦の想定だから、基本的には被害を抑えるほうに行くべきかな。私なら1番」

そういつて私は構えたビームマグナムの狙いを定めてトリガーを引く。通常のビームライフル4発分以上のエネルギーが籠っているピンクを越えて紅の熱線が一瞬はしり、インフェルノの頭部に大穴を穿つ。繋がってる通信から「ああああ自信作の耐熱装甲があああ!」

という声が聞こえた。なるほどそういうことか。膝から崩れ落ちるロボインフェルノを先んじて出していたエスカツシヤンのビームが細かく切り刻んで周辺被害を抑える。

「ええ〜〜……」

「いやここまでやれとは言わないし、やれる人も少数派だからね。それにこんなアホなヴィランはなかなかいないよ。いたら普通にヒーロー集まってくるからね」

「そうですね」

「で、厄介なのがああいうの。数が多くてそれでいて対処に時間がかかるやつ」

二人の背後を指さすとそこにはわらわらと4足歩行の背中にキャノン砲を背負ったトカゲのようなサポートメカが押し寄せてきていた。ばすん、とキャノン砲から野球ボールくらいの球が飛んでくる。エスカツシヤンのビームがそれを貫くと爆発するように周囲に糸を伸ばして蜘蛛の巣のようなものを形成した。迎撃前提の蜘蛛糸粘液を使った捕縛装置か！これ滅茶苦茶厄介だな！二人を抱きかかえて後ろに下がり、そのまま足のスラスターで飛びたつ。一応持つてきていたタイタンシリーズに指令を送ると、ヘカトンケイルの一部、背部腕部が分離して変形、単独飛行し私の背中に結合する。

「うおおっ!?!飛んでる!?!」

「分解自立飛行……!」

「ごめんね、乱暴にして。耳を塞いで!」

飛んでくる蜘蛛糸弾を避けながら二人に指示を出す。素直に指示を聞いてくれた二人を強く抱き寄せ、背中の腕から超圧縮技術で封じていたギガランチャーが展開し、連続して榴弾を発射していく。連爆の華が咲いてトカゲメカはバラバラになって沈黙する。「これも駄目か!」という声が通信から聞こえる。おい、目的変わってるんじゃないの?あんまり危ないと出オチさせるよ?」

「あぶなっ!?!」

ガキヤアアアン!と音を立てて目の前に火花が散る。遠距離からだこれ!辛うじてピンポイントバリアで防がれたそれはまず間違い



なくレールガンだ。おい今の私じゃなかったら見えなかったよ。ちよつと待て、私で兵器の実証実験をするな、お客さんもいるんだぞ。3年生の先輩、見えてるんだからね？ 絢爛崎先輩にビンタされてるのも見えてるからね？ 「ええい、ヒーロー科の楨は化け物か!」 「じゃないんだよ。ヒーローだよ私は、メカだけだ。」

「な、なんも見えなかった……」

「なんですか、今の」

「レールガンだね、初速は抑えられてるからギリギリ対物ライフル程度の威力で済んでるけど。電圧上がってたらヤバかったかも。着地するよ、離れないでね」

私はそのまま地面に降り立ち、山のように挑んでくるサポート科のメカたちを相手にするのだった。とりあえず全部迎撃するけどこれ、体験入学超えてるよね。自衛させないのが前提だけど、怪しくなってきた。パワーローダー先生に後で文句言おう。

「パワーローダー先生くくくく???'」

「いや、すまなかった楨。今回ばかりは俺の責任だよ。とりあえず該当の3年生には校長から何かしらの処罰がある。あと報酬倍プッシュで手を打って欲しい」

「ごめんね希械さん、止められなくて」

「メカは人を助けるためにあるのであって傷つけるためにあるわけではないのです！ 先輩方は反省するべきです！」

「明ちゃんがそれ言うんだね……」

運動場βの片隅にて一応尊敬するパワーローダー先生を掴んで振り回す女の姿があった。というか私だった。何ですかさっきのは、聞いてた話と違うんですけど。反省してないんですか3年生の人は!?! 流石は魔の3年世代と呼ばれてるだけのことはありますね。私一人を想定してたからそうなった？ 私一人でもダメでしょう! はー、もう。

「ごめんね、怖い思いさせちゃって。大丈夫だったかな？」

「いえっ！すっげえ貴重な体験させてもらえました！」

「参考になる動きが沢山ありました。個性戦をあんな間近で見られるチャンスは中々ありません、感謝しています」

「そっかー、よかったー」

凄いなこの二人、ケロっとしてる。吹寄くんは興奮を隠せないって感じだけど三田くんは極めてクール、うーん……興味がないのかな？三田くん、熱がないんだよね。どうしてヒーローになりたいんだろう？なれるからなりたいたい、とかだと入学後に高確率で相澤先生あたりに除籍されると思う。

「三田くん、あまりヒーローに向いてないかもね」

「えっ!?ちよつと先輩流石にそれは俺でもスルー出来ませんよ!」

「あ、ごめん。言い方悪かったね。三田くん、ヒーロー科の体験授業落ちたのに全然残念そうじゃなかったから。なれる個性だからならうとしてるんじゃないかなって。何でヒーローになりたいの?」

「……あれ?どうして、俺ヒーロー科目指してるんだろ……?」

やっぱり、何となく話してて感じてただんだけど三田くん、周りから言われてヒーロー科目指してるタイプだ。そういう人、いるんだよね。私の周りにもいたんだ、明確な目標はないけど個性がヒーロー向きだからヒーロー科目指そうっていう人。別に悪い事じゃないんだけど、あまりお勧めできないかなあ。同じ感じで雄英目指した同級生たちはみんな落ちちゃったし。

根本でヒーロー科を心底望んでいたわけじゃないことを自分で気づいたらしい三田くんは自問自答をしている。正直ちよつとわかるんだよね、私はえーくんに引っ張られてヒーロー科を目指していたけど根本から望んでいたのはサポート科じゃなかったのかって当時悩んでたよ。でも、やっぱり未来のヴィジョンを想像してる時に真っ先に出てきたのはヒーローになってる自分だった。だから私はヒーローになりたい、と判断して今ここに居る。

「三田くん、ちよつと付き合ってもらえる?」

「え、はい」

「吹寄くんは多分向いてないけど、ついてくるなら来てもいいよー」

「え、はい。いきますー!」

私はそのままがしゃがしゃと歩いて二人をとある場所に案内する。その場所は、経営科。実は普通科よりも不人気だったりする科で、経営科の人は素晴らしいほどの作り笑顔で勧誘に励んでいる。芳しくないけど。近くにいた経営科の同級生にちよつとこの二人を入れてやってくれないかとお願いとすると、滅茶苦茶感謝された。そしてそのまま二人は経営科の教室に連れて行かれる。

とりあえず、視点を変えてみたほうがいい気がするんだ。三田くんの場合、何が楽しいのか、もしくは何だったら自分の目標になり得るのか。サポート科でもよかった気がするけど会った時の感じだとサポートメカにはあまり興味がなかったみたいだし、普通科は中学校とあまり変わらない。だから180度違う経営科の体験授業を受けてみてどうか聞いてみようと思う。

そんで校門近くで制服に着替えてエリちゃんと合流して今待っている状態。校長先生の難しい話と毛並みの話がいまいち理解できなかったけどすごいと私にお話ししてくれるエリちゃんを抱っこしながら二人を待っている。頭が爆発したようにふらふらしてる吹寄くと物凄く生き生きしてる三田くんが歩いてきた。二人は私を見つけると駆け寄ってきて、三田くんは頭を下げる。

「先輩、俺経営科目指してみようと思います!経営科、すごく楽しかったです。ありがとうございます!」

「うん、三田くんが目指してみようと思うならそれでいいと思うよ。吹寄くんは平気?」

「いや、話しが難しくって……あと先輩、その女の子は?」

「私の娘?」

「「ええーっ!」」

「ふふ、今日一番大きい声だね。実の娘じゃないけど家族だよ。ね、エリちゃん」

エリちゃんのことを外部の人に説明するのは難しいし繊細なところもあるのもう私の娘扱いが一番いいや。お母さんって呼ばれちゃってるし。でも、三田くんが目標を見つけられてよかったかな。

うんうん、それじゃあまたね未来の後輩。勉強を怠らないようにねー？

## 108話

「わーたーしーがー！説明に来た！」

「オールマイト！」

「オールマイト先生、マッスルフォームとは珍しい」

体験入学を終えた余韻に浸る間もなく忙しい雄英高校。本日のホームルームの担当は相澤先生ではなくオールマイト先生、うわ新鮮だなあ。もうお馴染みとなつてしまったトウルーフォームではなく、筋骨隆々マッスルフォームでのご登場だ。マッスルフォームのオールマイト先生に懐かしさを感じてしまっただなんて、時の流れは残酷だね。それはそうと、説明とはなんだろうな？

「もうすぐ全員が仮免許を持つことになるであろう今！ヒーローとして活躍の場を広げることが出来るある制度が新設されることになった！その名も……」

「チームアップミッション、ですか？」

黒板に表示された名前に私は頭を傾げる。チームアップといえば、ヒーロー同士が現場、もしくはあらかじめチームを組んで協力して事に当たる作業を指す。記憶に新しいのだと死穢八斎會の時がまさにそれだ。オールマイト先生の話を聞いて行くと、これから全国の学校とヒーロー間で行われるチームワークとコミュニケーション能力を高め合うことを目的としていて、プロになったら必ずある現場での見知らぬヒーローとの協力をスムーズに行えるようになるのが最終目標とのこと、なるほど。

「他校との連携も大いにあり得るぞ！」

「ってことは士傑とか傑物の先輩たちとの協力もあるっつー話か！」

「うむ！協力するヒーローの指名が入った場合はそっちが優先されるが、基本はランダムだ！どういった人間とも協調していくように！轟少年と爆豪少年は並行して仮免許もあるから大変だろうけど、プルスウルトラの精神で頑張ってくれ！」

はい！とみんなが返事をする。そういえばもうすぐ爆豪くと轟

くんの仮免許の再試験があるみたいだね。11月の終わりだからもう少しなのかな。いやーこれで晴れて全員仮免許持ちだね。あの二人なら反省すればほぼほぼ間違いなく仮免許を取れるでしょう。なんてったって私たちのクラスの才能マンたちだしーあ、でも……

「私の場合、エリちゃんがいるんですけど……」

「そうだね！エリちゃんには申し訳ないんだが、雄英でお留守番してもらうことになるだろう！まさか現場に連れて行くわけにもいかないからね！」

「ですよね。んー、エリちゃんお留守番できそう？ハロがいれば平気？」

「……おかあさん、戻ってくる？」

「勿論、絶対帰ってくるよ。お土産買ってね。だから、先生たちとい子で待つててね？」

こくり、とエリちゃんが頷く。これからやるインターンとかで私が出る機会も多いだろう。そうなった時に離れられるようにトレーニングはしてきたけど、これが初になるのか。ここ最近、実はエリちゃんの角が誤差レベルではあるんだけど伸び始めていて、個性エネルギーの蓄積も始まっている。それに伴って個性訓練をしなければならないと相澤先生にも通達された。彼女にとっては忌まわしい力かもしれないけど、コントロール出来るようになればうまく力と付き合っていけるだろう。私もそうだったからね、機械の無駄に大きい力をコントロールするために両親から特訓を施されたりしたし。マジでなかったら積み木グシャを人体でやってた可能性が高い、お父さんお母さんありがとう。

「早速だが、実は既に最初のミッションが決まっている！今から配る手紙を見て指定の日時にプロヒーローの元に向かってもらうよ！」

そういつてオールマイイト先生がとりだしたのは紙の手紙、人数分。ちよつとワクワクしてきたぞ、私は誰と組むことになるんだろう？どんなヒーローに教えを乞うことができるんだろう？私は役に立てるだろうか？何でもできる万能マシンを自負する私ではあるけど、ちよつと不安だ。私はドキドキしながら、手紙を受け取るのだった。

「わくわく、してたんだけどな〜」

ちーん、と福岡行きの新幹線の中で私は一人で沈む。一人、そう一人である。誰かと一緒にチームを組んでレッツゴー、と思つたら指定されたのは私一人だったわけだ。ハブられること多いね私最近。しかも手紙には、住所だけ指定されていて、誰が私と組んでくれるヒーローなのか分からないの。不安&不安だよ。

エリちゃんは、私と離れることについて我慢してくれてただけど結局別れる直前になって涙が溢れてきちゃって私の胸はすさまじい罪悪感に締め付けられることになった。あかん、涙が出てきてまう。お茶子ちゃん、関西弁はこんな感じですか？は〜。とにかくミッドナイト先生に慰めてもらって、白ハロと一緒にばいばいと手を振ってくれたエリちゃんに見送られて私は新幹線に乗ったのだ。大丈夫かなあ、長期任務とかじゃないといいのだけれど。

「えー、なん？」

そんな感じで新幹線を降りて指定された住所にたどり着くと、そこには立派なヒーロー事務所が……あるわけもなく。一般的なマンションが佇んでいた。あれー？え、マジでこれなんですか？じゃあこの番号つてもしかして部屋番号？えー？なんか不安になつてきた、ちよつと後悔もし始めている。うーんこの、まあとりあえず勇気を出していってみよう。もしかしたらまともなヒーローかもしれないし、事務所構えるお金がないだけで。その時点でなんか怖いな。

ぴんぽーん、と指定された部屋のインターフォンを押す。うっわー、職場体験やインターンでも味わったけどこの緊張はいつまでたつても慣れないなあ。はーい、と気の抜けた感じの男の人の声がしてガチャリとドアが開く。開いたドアの先にいるのは

「お、来たね。悪いんだけど声を出さずに入ってくれないかな」

ホークス!?!と声を出しそうになって急いで手で口を塞ぎ、玄関をくぐる。彼は私を微笑ましそうに眺めてそのまま引つ込む。ホークス、

下半期ヒーロービルボードチャート2位、速すぎる男と称される新進気鋭のヒーローだ。個性の剛翼の汎用性はいうまでもなく、私のオーレンジ攻撃のヒントになった人物でもある。うっそー、すごいな。でもなんで名前出さなかったんだらう？

「いやーごめんね。実はここ俺の隠れ家でさー。バレるとめんどくさいなって」

「あ、はい。それはそうとホークスとチームアップだなんて光栄です。インターン行くか迷ってたので」

「お、そうなの？俺は歓迎するよー、ついてこれたらね。で、ミッシェンなんだけど」

緩いなー、ホークス。ヒーロースーツのサングラスを額にあげてわざわざコーヒーを淹れてくれるホークスの隠れ家らしい部屋、思った以上に何も無い。L字のソファにテレビ、そして机。全てに使われた形跡がほとんどない。埃の状態からして一回掃除してるみたいだけど、なるほど隠れ家というのは本当らしい。

「君と俺のチームで、一つのヴィラングループを捕まえる。これが任務だ、ちよ〜と厄介だけどね」

「厄介、ですか？」

「飛べるんだよ、全員。飛行個性持ちのヴィラングループなんだ。しかもこれが結構速いらしくて俺にお鉢が回ってきた」

「成程、それで私ですか」

「そゆこと。常闇くんから聞いたけど君飛べるんだって？しかもマツハで。後色々できるらしいじゃん？狙撃とかできると助かるんだけど」

「狙撃ですか、出来はしますけど……」

狙撃、確かに私は飛べるし狙撃もできる。だけどいまだ特化してるとは言いつらい。例えばスナイプ先生や、一昔前の遠距離系最強ヒーロー「レディ・ナガン」のような針の穴を通すような狙撃はまだ不可能だ。当てるだけなら多分できるけど、相手がビームより速くなければ当てられると思う。光速の10%より速いなんてワープぐらいでしかお目にかかれないとは思っただけどね。ただ撃ち落とせ、という



だけなら多分できるはずだ。

「出来るならそれで十分さ。じゃ、さっそく行くよ。ウチのサイドキックがヴィラングループの動向を抑えててね、あと2時間後に取引先に移動を始める。そこを叩く」

「わ、分かりました！」

手際が良すぎる。悪いんだけどすぐに着替えて、といわれて私はいそいそとお風呂場を借りてヒーロースーツに着替える。うわ、今になって物凄く緊張してきた。だって今からNo.2ヒーローと一緒にヒーロー活動するんでしょ？前のエンデヴァーの時のようなお荷物&見学者、というわけではなくサイドキックとして。責任重大だな、というか私あれじゃん……まともにインターン出来てないじゃん。常闇くんに詳しい話聞いておくべきだったなあ。だって、彼インターンもホークスの事務所に行ったわけだし。

隠していた両目を出して、冬仕様のヒーロースーツに身を包む。まあ、特に何か変わるわけじゃないけど。ちよつと生地が防寒仕様になったくらい？じゃらつと腰に圧縮ボックスを懸架して準備完了。空を飛ぶってことはアルビオンを着ればいいのか？でも狙撃って言ってたしなー、普通のままでとりあえず行くか。亜音速くらいまでだったら今のままでも出るし。超音速行こうとすると内臓がオシヤカになるので外骨格が必要なのだけけど。今それを克服すべく鋭意研究中なのだ。

ぐつぱ、と一応個性がちゃんと動くか確認する。調子悪いと困るからね、特に飛行中は個性がエンストすると墜落して酷いことになる。主に道路が。落ちる程度なら多分私は平気、メカです。よし、青メッシュユいれて気合充填完了！よしいくぞー！

「お、きたねー。んじやー作戦開始まで時間あるからちよつと駄弁ろうか。色々話聞かせてよ」

「え、あ、はい？」

出迎えてくれたホークスは、だらけていた。着ていたはずの上着は脱ぎ捨てられて椅子の上に置かれて、サングラスは机の上に。そして寝転がっていた。な、なんかイメージと違うくくく！こんなキャラク

ターだったの？いやビルボードチャートの番組見る限り確かにこんな風になってそう！ファンサービスでいい噂しか聞かないからなんか衝撃的だ。座りなよー、というホークスの声に従って私もソファに腰掛ける。これ雑に扱っていいやつなのかな？

「いやー、実は前から色々聞きたくてね。ちよつと俺個人的にヴィラン連合について調べててさー。接触してるんでしょ？」

「え、ええまあ。といっても私が提供できる情報なんてニュースで流れているのとそう変わりませんよ？」

「そうかもね。けど、生の声ってやつは俺が一番大事にしてるものだ。情報なんかその筆頭、だから聞けるなら聞いておきたいんだよ」

なるほど、と私は納得する。もしかして常闇くんが職場体験の時にホークスになんかプンプンしてたのってUSJの脳無の話とかを洗いざらい聞かれたから？そりゃあ常闇くんいい気しなかったよね、だってアレ普通に聞かれるの嫌な感じの思い出だろうし。じゃあ、最近だと死穢八斎會の件とか君関わってるって聞いたよー、というホークスにインタビューで関わった事件です、と答える。

とりあえず事のあらましは知ってるであろうホークスに何が聞きたいのですか、と尋ねるとまず治崎……オーバーホールについて聞かれた。思想、戦った感じなど……戦闘については強かったとしか言えないけど、USJの脳無ほどではなかったが印象かな。攻撃効かないのは同じだけど消耗はするし。脳無は消耗すらなかったから。思想についてはそうだね、分かり合えそうにはないってところかなあ。少なくともエリちゃん金儲けをしようとしてた時点で私にとっては嫌いなタイプだ。

「ふーん、なるほどね。ありがと、聞かせてくれて」

「あの、私からもいいですか？」

「なにかな？」

「エンデヴァーが倒した脳無……所感ですけどUSJの脳無より強く感じました。勝手な予想ですけどあれエンデヴァーを狙って来たんですよね？」

どうしてそう思うの？と寝転んでたソファから座る態勢になったホークスが鋭く聞いてくる。だって、あまりにも恣意的だから。あの脳無、今までの命令を聞くラジコンみたいな脳無と違って戦いながら考えていた感じがするのだ。プロミネンスバーンで生き残るために頭を千切って投げたりとか、分裂で邪魔が入らないようにしたりとか。あと恣意的だっていうのを決定づけたのは最後の最後に茶毘が姿を現したこと。これで狙ってあの場所に脳無を放ったことが私の中では決定的なものになった。

「普通ならエンデヴァーが現れたら脳無だろうが普通のヴィランは姿を隠します。戦って勝てるにしても非合理的です、倒すのにかかるコストが高すぎる。それでもエンデヴァーを襲ったのはエンデヴァー自身が目的ではないでしょうか？」

「なるほどー。考えてるね樫さん。その考察は参考にさせてもらおうかな。じゃ、いい感じに緊張も解けたところで……仕事に行こうか」

「はい！」

サングラスをかけ、上着を着るホークスに私は勢いよく返事をした。よし！頑張るぞ！

## 109話

「はい、報告頂戴」

「現在目標グループはここより南西10キロ先地点にて出発準備中、時間通りに出発するものと思われませう。事前に調べた飛行ルートはこちらです」

「うわー、これどう思う樫さん」

「綿密に計算されてますね。天気まで勘定に入れて、雲の中に隠れるように移動するつもりじゃないでしょうか」

「さっすが鋭いね。じゃ、迎撃地点にちようどかち合うように出発しようか」

車の中にて私とホークスはサイドキックの人たちから貰った情報を元に作戦を立てていた。どうやらヴィラングループは港の一角から堂々と空を飛んで別ヴィラングループとの取引先である離島まで飛んでいくつもりらしい。生憎だが今日は曇り空で空の上には曇天が広がっている。海上では一雨振るかもしれないし、沖の風は強い。悪天候だ。それに乗じて雲に紛れて秘かに出発するつもりなのだろう。

迎撃地点はどうしようか、というホークスに私は海上での迎撃を提案した。理由は単純、抵抗にあつた場合に非常にやりやすいから。巻き込まれる建造物がなく、人もいない。私の火力に制限がかかりにくい、勿論漁場を荒らすわけにはいかないので海中で爆発物を爆発させるような真似はできないけど。

だが、一応これにもリスクはある。雲と同じ高高度での作戦になるのでヴィランも私たちも墜落死の危険性がある。この場合下がコンクリートか水かの違いだけど雲のある場所から水に落ちればほぼ即死なので変わらないだろう。じゃあ陸にいるうちに叩けば、という話でもあるんだけど……同時進行で離島のヴィランも捕まえるらしい。しかも離島のヴィランはどこにいるか分からない、合流地点を探るために一回出発させて集合場所にヴィランが現れてから同時進行で捕まえるということらしいのだ。

他の飛行可能なヒーローに頼めばいいのではないか、とも思う。具体的にはリューキユウとか。と聞いたら大きすぎて目立つから、とのこと。難しいんだねヒーロー活動って。だから、学生とはいえ私が引つ張り出されたのかな？じゃ、そろそろいこーかね。というホークスは走行中の車のドアを蹴り開けて、そのまま出て行った。えっ!?

「エクスマキナー、行くよー」

「は、はいっ!」

「ホークスをお願いします。あの人適当に見えて結構無茶やるんで……」

苦笑いしたサイドキックの人が車を停めてくれて、私は転がり落ちるように外に出る。最後にサイドキックの人の忠告のようなものに私は一つ頷いてそのままバーニアで飛び立った。迎撃地点は離島の1キロ手前、ヴィランたちがまつすぐ進むなら私たちは斜めに進んで線が交わるところでぶつかり合うこととなる。

「ついてこれる?」

「ついていきます。リフボード、形成開始<sup>レイ</sup>」

確認のようにそういったホークスは私の返事を聞くとにやりと笑ってから大きく翼を広げ羽ばたき、凄まじいスピードで高度をあげつつ海上に繰り出した。私はそれについていきながら足からサーフボードのようなメカを生み出す。リフボード、ホバーバイクでは大きすぎて小回りが利かず、かといってバーニアを使い続けると消耗が激しい。ので折衷案のような形で開発をした新サポートメカだ。

仕組みとしては荷電粒子が並走するときには働く反発力を利用して浮いてるんだけど……超絶簡単に言うんですけどビームのレベルを下に作ってそのビームの上に乗って空を飛ぶサーフボード、かな。銀色のリフボードの上に乗った私が緑色のビームの軌跡を残しながらホークスに追いついた。これの最高速度は時速1200km、ギリギリ音速に届かない速さ。ホークスの瞬間最高速度はメディアを見る限り音速を越えてると思うけど、巡航速度がどうなのかは分からない。

「へー、君びっくり箱かなにか?空飛ぶスケボーは初めて見たよ」

「これは私が開発したものですからね。世界でも私だけしか持って

ません」

「……そりやす〜い」

本気で驚いたような声が返ってきた。彼の後ろにいたのでどんな顔をしているのか分からないけど、純粹に褒めてくれるなら嬉しい。びっくり箱かあ、最近クラスの皆にもよく言われるよね。なんかあるたび知らないもの出してくるって。姿勢制御のため時折バーニアを吹かしつつ、ホークスと一緒に雲海の中に入る。

「うわさむっ」

「そりゃあ、これだけ高ければ酸素も気温も低くなりますよ」

「君は要らないの？酸素マスク」

「必要ないです」

高度が現在2000mほど、うつすらと寒くなってきて酸素も薄くなっていく。激しい戦闘を想定しているからかホークスはサポートアイテムらしい酸素マスクを口につけていた。私は体内に蓄えた水分を個性で分解して血中に直接酸素を供給できるので最悪呼吸できなくなっても平気だ。重水素作るときにいつもやってるし、今更間違うこともない。

「結構普通についてくるんだね。自信失くしちゃうな〜」

「ただまっすぐ飛んでるだけじゃないですか。戦闘機動になったら私もっと雑ですよ。当たる前提で進みますし」

「そりゃよくない。助けてくれたヒーローが傷だらけは安心感激減だぞー？見えてきたね、見えるかい？」

「はい」

先ほどから私の対空レーダーに引つかかる影、8人。それぞれ形が違う。鳥みたいな形、人間そのまま……方向に視界を切り替えた目を向けると眼下には何かを運びながら飛ぶヴィランたちの姿があった。何を運んでいるのだろうか？おそらく生物系、つまり異形型の鳥の翼を持つてるのが4人、他は念力とか、足からのジェット噴射とかで飛んでるっぽい。

「どうだろ、落とせるかな？」

「二発で全員行けます。ただ、墜落します、確実に」

「それは俺が何とかする。できるだけ致命傷を避けてくれ」

「分かりました」

難しいこと言うなー、この人。一撃で全員をノックアウトしつつ、死なないうようにしろと来ましたか。やるけど。私はリフボードの上で片膝立ちになり、圧縮ボックスを二つ開放する。一つはホルスタービット、もう一つはGNスナイパーライフルⅡ、バージョンアップしたビームスナイパーライフルだ。ホルスタービットの内部に収納されているピストルビットにパーツを接続してライフルビットにして引っ張り出す。ビットの数は12、プラス私のGNスナイパーライフルⅡを合わせて13の銃口が8人を狙っている。

「よし、向こうは既に終わらせたみたい。あとはこっちだけだね」

「カウントください、タイミングはお任せします」

「OK、10、9、8、7、6、5、4……」

カウントすると同時に翼をはばたかせたホークスが急降下する。一気に速度が上がり、亜音速まで加速した。彼我の距離は私から約1.5km、ホークスから750mほど。ハロとリンクして最大限集中して8人同時に狙いをつける。当てることならできる、そのために作った装備たちだ。ミリ単位のズレが致命傷になる、動かすな、逸らすな、ホークスの合図を待て。

「3」

トリガーに指をかける。思考トリガーにも同時に起動させ、荷電粒子が銃口に集まりだす。

「2」

深く息を吸い込む。思考がクリアになった。上空の風の音がきえて、ホークスの合図の声だけが聞こえる。

「1……撃てー！」

トリガーを引いた。対人威力まで抑えたビームが13の銃口から同時に発射される。ピンク色の光条はホークスの周りを追い抜くように駆け抜けて……ヴイランたちに過たず命中する。鳥型のヴイランには両翼の付け根を貫くようにして飛行能力を奪い、そのほかのヴイランたちには手や足に当てることで痛みによる個性の強制解除

を狙った。傷口はビームの熱量で焼けているので強制的に止血がすんでいる。

ヒュウ、と通信からホークスが軽く口笛を吹く音が聞こえる。彼は着弾から一瞬おくらせてヴィランたちの元までたどり着き、その背中の剛翼を解放した。ホークス、という痛みに悶えるヴィランの声が通信越しに聞こえる。最低限飛行できるように残された剛翼から分離した羽根たちが傷ついて飛行能力を失ったヴィランたちを拘束しつつ支える。凄いな、いったいどれだけの羽根を同時に操作しているのだろうか？

優に200はくだらない羽根が私の視界を行き来している。それぞれが独立した動きをしていることからホークスはこれらすべての羽根を同時にかつ個別に操作していることが見て取れる。例えば私がかれをオールレンジ攻撃用の兵器でやったらどうなるだろうか、間違ひなく脳みそがパンクしてゆだっている。無理だ、出来っこない。個性だから当人は無意識でできるのだろうけど、私には無理だ。あくまで私のオールレンジ攻撃は個性じゃないから。

私の個性は作り出すところまで、操作をするのは自前の脳みそだ。これだけの量を操ろうと思ったらハロがもう1台絶対いる。それでようやくと見れる程度に動かせるくらいだろう。どれだけすさまじいことをしてるんだこの人は、さすがは現ナンバー2、雲の上にいる人なんだな。ホルスタービットにライフルビットを仕舞って、GNスナイパーライフルIIを手持ちしたまま両腰にホルスタービットをくつつける。

リフボードの上に立った私は波に乗る様に加速をつけてバランスを取ってホークスの所まで急ぐ。思ったよりもすぐに終わってしまった、と思いつつも成功したことにはほっと息をつく。だってワンミスでこれヴィラン殺してたかもしれないし、逃げられてたかもしれない。ホークスに余計な面倒ごとをかけないでよかったくく！そういえば、なんでホークスは私にこんな重要な役回りを任じたのだろうか？おかしくない？狙撃できるって聞かれたからできるって言ったけど流石に信用しすぎなような……？



スコココン、と剛翼の中でもひととき大きな風切り羽根がヴィラン8人の首元を叩いて意識を奪う。あ、完全に確信した。これホークス一人で十分だったやつだ、経験を積ませるために尻拭いも含めてやらせてもらったって感じだこれ。それをここまで私に気取られなかったホークス、すごい。スマート、カッコいい、そしてイケメン。なるほどこれは人気になるわけだね。

「いやー、完璧だね。常闇くんが褒めちぎってただけはあるよ。同時に13の銃で別箇所を狙撃するのはね、正直どこかでミスすると思つて身構えてただけど、全然心配いらなかったわ」

「すいません、わざわざ譲ってもらつて。ホークス一人で十分だったでしょう?」

「否定はしないけど、君のおかげで物凄く楽だった。それにそもそも趣旨がチームアップでの連携を磨くための任務だしね。それにしても相性良いな俺たち、卒業したらウチの事務所来る?」

「あはは、冗談がお上手ですね」

「いやこれ割とマジ。俺についてこれて、滅茶苦茶万能で空飛べて?おまけに1キロ先の動く目標に対して遠距離攻撃ができる。誘わない理由ないよ?」

ホークスの顔、というかサングラス越しの目は物凄く真剣だった。え、これもしかして本気のリクルーティング?うわ、すつつつごく嬉しい!だって、ナンバー2のヒーローに認めてもらえたんだよ!?!そりゃ嬉しいよ!ホークスの事務所かあ……忙しそうだね。仕事がすごく早そう、速すぎる男だけに。

それにしても最近はいろんなところからリクルーティングのお誘いが来るなあ。私はまだ高校1年生だよ?例えばI・アイランドの研究機関とかサポーターアイテム開発会社とか、最近だと携帯に直接エンデヴァーから将来の就職先について聞かれて事務所に来てとまで言われた。向かいの席に轟くんがいたんだけど、その話が出た途端無言で私の携帯を奪つてそのままブチツと切っちゃったんだけど。「焦凍おとおお!!」というエンデヴァーの叫びが途中で切れて私は凄く気まずかった。

えへへ、こんな人気になるだなんて中学校時代の私は考えもつかなかったよ。最近は入学時と比べて度胸も付いてきた気がするし、期待されるなら期待された分頑張りたいなっちゃう。ありがとうございます、とホークスに頭を下げる、彼はからからと笑って口を開く。

「よしミッション終了！腹減ったっしょー？奢るからメシ行く？」

「いいんですか!?わー、こっちの料理どんなのがあるのか楽しみですー！」

これにてミッションは終了、というホークスがご飯に誘ってくれた。このまま離島に降りて、警察にヴィランを引き渡したのちご飯をご馳走してくれるのだそうだ。やったー！ご飯！食は私の大好物なので是非とも！とうきうき気分で行きましょう、とボードを操ろうと体重を傾けた瞬間に、私のリーダーが超々高速でこちらに迫る物体を捕らえた。言葉じゃもう間に合わないくらい接近してる!?!このっ！

「ホークスー！」

「なっ!?!」

咄嗟にボードからバーニアで飛び出し、剛翼を分散してるせいで飛行能力が低下したホークスを突き飛ばす。彼を狙っていた超高速の円錐型の何かは彼のいた場所をすり抜け、代わりに私の右肩に着弾して根元から私の手をもぎ取っていった。バチバチ、と私の肩からショートした電気と油圧のオイルが飛び散る。

「ヴううううう……」

「脳無か……！エクスマキナ！腕は平気か!?!」

「……冗談、きついよ」

ホークスの心配の声に私は返す余裕がない。こちらを唸りながら睨む見慣れた脳みそむき出し真っ黒の造形の脳無……違うところがあるとするば、目が真っ赤で、デジタル表示のようなレティクルがあり、右手が巨大な機械に覆われた歪な銃の形をして……それで、背中から生やした機械のロケットで空を飛んでいる。まるで、制御に失敗したような機械と生き物の混ざりもののような脳無が、そこにいたからだ。私の個性が、そこにあったからだ。

私の平坦な声が耳を叩く。目の前のソレが、どうしても受け入れられなかった。

目の前の光景から目が離せない。もう何回も見たか分からないほどの造形。見慣れたくもない慣れに交じる私との共通点。違うことといえば、共存できていないこと。個性をコピーするつてオールフォーワンは言っていたけど、そういうことだったんだね。右肩から流れる黒いオイルが私のヒーロースーツを汚していく。そこでようやく脳みそが働くようになった私が平静を取り戻した。

「避けろっ！楳さんっ！」

「っ！」

ホークスがヒーローネームで呼ぶことすら投げ出して私に警告をした。カクカクとマリオネットのような動きを見せつつも脳無が右手の肥大化した機械の塊のような銃を私に向けて、そのまま発砲した。爆発音と同時のその右手の銃が波打つように肥大化して、元に戻る。銃口から発射された円錐型の銃弾、いや砲弾がおおよそマツハ2で私に迫る……いい加減、私にも我慢の限界というやつがあるんだよ。

バキイイイツ!!と音がして私の眼前で砲弾がぺったんこに潰れる。展開したピンポイントバリアが砲弾を完全に防いだのだ。同時にごぼごぼと音がして私のなくなつた右腕の断面から銀色の液体が流れ出して、空中に浮かんでいく。左手は作り直すのも惜しいので根元から投棄、そのまま私の両手がメリクリウスに置き換わる。

「成程ねー、腕の中で大量の火薬を爆発させてその圧で弾を打ち出してるんだ。現代の銃をもっと乱暴にかつ原始的にした感じだね。ライフリングもない。お粗末極まりないなあ」

「楳さん、大丈夫か!？」

「すいませんホークス、アレ私に譲ってもらえませんか?その状態じゃ戦闘は厳しいでしょうし」

「ダメだ、一旦逃げたほうがいい」

「無理です。その状態であのふざけた構造の銃は避けられません」

「ヴウウウウっ!!!」

会話の途中でも脳無は待つてくれない。轟音と共に発射される砲弾がまた私に迫る、けど宙に浮くメリクリウスが砲弾を受け止める。衝撃を吸収して変形したメリクリウスが砲弾を包み込んでナノマシン浸食で分解する。ふーん、材質は只の鉄なんだ。ってことはあの銃は一発ごとに壊れてる、私の個性で無理やりもとに戻して運用してるだけ、か。打ったたびに腕から機械が脳無の身体を侵食していつてる。私の個性が体質にあってないから負けて異形化が進んでいる感じだね。

ホークスの撤退宣言を受け入れたいところだけど、無理だこれ。足を変形させてバーニアを増設。狂っている構造の銃の癖に威力だけは一級品だ。私のサポートアイテムたちよりも格段に原始的で、適当な構造の癖に成り立ってしまっている。私の個性のせいで、なり立ってしまっている。メリクリウスにホルスタービットを侵食させて分解し体内に戻す。そのまま背中に大型のビット兵器を作り出した。

「ロングレンジ・フィンファンネル、形成開始<sup>デイ</sup>」

私に身の丈ほどの長い板を2枚重ねたようなビット兵器。今までのビット兵器は動力や推進剤を外部に依存していたのだけど、これの中に融合炉とジェネレーター、推進剤を纏めて封入することで大型化の代償に威力の向上と機動力の増加、さらに継戦時間を手に入れた新兵器だ。バレル開放式のビームキャノンと、大型ビームサーベルの発振装置を内蔵している。

ホークスはヴィラン8人の命を今背負っている。戦闘はできないと考えるべきだ、私がやるしかない。それに、私の個性が悪さをしてるのなら、自分ではじめをつけないければならぬだろう。うん、そうだ。そうせねばいけない。目の前のソレを許すな、その右手の銃が無辜の市民に向けられる前に私がお前を止める。

「ホークス、離れてください。巻き込みかねません」

「許可しないっつってんでしょ」

「背を見せた瞬間にお陀仏ですよ。守りながら撤退する余裕はないです。私はそれほど強くないし……」

「ヴウウウツ!!」

「目の前のアレをほっとけるほど無責任にはなれません」

脳無の背中からいびつな形のミサイルが発射される。即座に対処、メリクリウスで包み込み、全てを飲み込んだ。爆発したミサイルのせいでメリクリウスが一部変形し中から低い音が響いた。解析、誘導装置もないね、火薬と推進装置組み込んだだけだ、まっすぐしか飛ばない。ミサイルというよりもロケットランチャーか。見る限りこの脳無には知性がない。エンデヴァーが戦った明らかに知性がある脳無とは違う、私の個性を全く生かせない。

ホークスの依然厳しい表情、私は心の中で謝りつつも絶対にこの場での脳無を止めることを決めた。バーニアを全力で吹かし、脳無の前に一瞬で躍り出る。空中のメリクリウスと合体して肥大化した私の右手が質量と速度でもって脳無の全身を余すところなく思いつきり殴りつぶした。2トン弱の質量がおおよそ亜音速でぶつかった脳無は一瞬で全身をぐちゃぐちゃにしながら300mほどぶっ飛んで背中へのロケットブースターで何とか止まる。追撃！

「当たれっ！」

肩越しにロングレンジ・フィンファンネルを起動し、威力に制限をかけないビームが脳無の腹を突き破った。わさわさと機械が蠢いてその傷を埋める。ああ、なるほど……これ本能だけで動いてるやつだ。多分、最低限……私が努力も何もせず個性を使い続けたのがこの姿だ。歪で不格好で全く以て合理性のない……人を傷つけるだけの形。

脳無が吠える。背中へのロケットブースターが煙と炎を吐き出す。何を燃やしてるのか知らないが、燃焼効率が悪い。それでもそれなりにスピードが出てるのは強引に出力を上げているからか。右手の機械の腕が不気味に鳴動して歪な形のチェーンソーが飛び出した。がたがたのチェーンソーが回りだして、それが私に振り下ろされる。

ガキイイ、と硬化させたメリクリウスを剣の形に固定して受けた。火花が飛び散り、私と脳無の距離がゼロになる。口から涎を垂らして殺意のみでこちらにチェーンソーを押し付ける脳無、私は左手に持ったメリクリウスの剣を振り上げて、同時に背中からロングレンジ・

フィンファンネルを右手で掴む。振り上げられた剣がチェーンソーを押しつけ、脳無が強制的に距離を取らされる。

ロングレンジ・フィンファンネルのバレルから高出力のビームサーベルが伸びた。私はそのまま叩き付けるようにそれを両手に持ち直して脳無の右手を肩から切断する。脳無は、それを鬱陶しそうにちらりと見て唸っている。痛覚がないのか……いや、脳無なら当然か。再生は、しない。私の個性で補うだけ。だめ、行動不能にできない。拘束しないと……！

ギリ、と私の口から歯ぎしりが響く。嫌にそれが自分の耳に残った。ロングレンジ・フィンファンネルを手放して、メリクリウスを全力で操る。自分の体を補うことに個性を使っていた脳無は迫りくるメリクリウスの波を避けることが出来ず、捕まってしまふ。まるで銀色の巨大なパチンコ玉から首が出ているだけの脳無が出来上がる。拘束終了……このまま移送しよう。

「あ……っ!!」

もうダメだ、と悟ったのか脳無の全身から亀裂が走ってエネルギーが噴出する。体内に抱え込んでいる火薬を全て使って自爆する気なんだ、エネルギーの総量からして爆発半径は相当広い！最後の最後で確実に殺しに来た。仕方ない、爆発させるわけにはいかない、最低限死体を残しておかないと……！証拠にならないから……！ロングレンジ・フィンファンネルが私の前に出て、エネルギーをチャージする。さらに圧縮をかけ、バチバチと開放型バレルから荷電粒子が漏れる。

「ごめん、流石にそれは今の君にはさせてあげられない」

「ホークス!?!」

脳無を殺す、と決めて私が思考トリガーを押そうとした瞬間私の前に躍り出る人がいた。ホークス、その背には半分ほど羽根が戻っている。彼は加速をつけて風切り羽根を握ると、今にも爆発しそうな脳無の首を風切り羽根で刈り取った。上に飛ぶ脳無の頭を幾枚かの剛翼が支える。呆気にとられた私は、咄嗟にロングレンジ・フィンファンネルの銃口を上に向ける。圧縮されきった荷電粒子が極大の照射

ビームとなつて解放される。ビームが出終わってから、咄嗟に後ろを向くと8人のヴィランたちは一纏めにされて浮いていた。

「俺はいつも速すぎる、だなんて言われてたけど今回ばかりは違うな。遅すぎた、君にそれを決意させた時点で最低だ。その一線は、学生のうちに超えないで欲しい」

「……すみません、ホークス。本当だったら私がやらなければいけないことでした……だってその脳無が持つてるの……私の個性だったから……!」

「……事のあらましは報告書で知ってる。だけど、まさか脳無が現れるだなんて思ってもみなかった。いったん戻ろう、詳しくは陸で」

「はっ」

終わってから、どつと冷や汗が噴き出てきた。個性のコピーが現実味を帯びて、いや現実となつて襲い掛かつてきた。知性のない脳無だったからこそここで終わっていたけど、これが例えばエンデヴァーが戦った知性のあるタイプだったらどうなっていたことか。個性の制御も、出てくるアイテムもお粗末極まりないけど、その現実だけが私を打ちのめしていた。私はホークスに従つて呼び戻したりリフボードの上に乗る、近い離島を目指した。

「はい、みんなこれよろしく。悪いんだけどちよつとヤバい感じだから後任せるよ」

ホークスが警察にヴィランを引き渡す。そして私は一応見えないようにメリクリウスで覆っていた脳無を警察の人に見せた。警察は脳無を確認した瞬間に血相を変えてどこかに連絡し始める。私はなんか、力が抜けちゃつて放心状態、いけないな、これ取り調べ受けられるかな。ホークスが携帯電話を取り出してどこかに連絡を入れていく。暫く話したのちにホークスがこちらに浮いてやってきて、携帯を私に手渡した。

「はっ」

『櫟、無事か?すぐ迎えに行く。ホークスの事務所で待っている



「相澤先生……大丈夫です。自分で帰れますから」

『そういうわけにいくか。いいな、待つてろ。よく頑張った』

それだけ言つて、かなり切羽詰まった感じの声をしていた相澤先生の電話が切れる。そりゃ、ホークスだったら雄英の直通の電話番号を知つてもおかしくはないか。ぐるぐると頭の中が回つていく。私はどうすればいいのだろう、私の個性が人を傷つけた場合、私はどう責任を取ればいいんだろう。私があの時、奪われた目玉をそのまま壊していればこんなことにはならなかったはずなのに。

「はい、帰るよ。樫さん、お疲れ様。とりあえず俺の事務所までね。すぐだから、すぐ」

「あ、はい。お世話になります」

上の空の私の返事を聞いたホークスは明るい感じの声色とは裏腹に顔の表情は凄くシリアスだった。気を遣つてもらつて、申し訳ない。ぼっちん、と私は自分の頬をはたいて気分を入れ替える。考えるのは一人でもできる。今は捜査に協力しなきゃ。ぶんぶんを顔を振つてよし！いつもの私！

ホークスはいきなりセルフビンタした私に驚いたみたいだけど、そのまま何も言わずに私を船に乗せた。どうやら海保の船らしく、私とホークスに乗せてそのまま陸の方に向かっていく。思考の海に沈む私は時間を忘れてそのまま波の揺れに身を任せてずっと、座つていた。

特に何も話すこともなく、話されることもなくホークスの事務所に ついて、着替える場所を貸してもらつて制服に戻る。そういえばエリちゃんはどうしてるかな、朝は寂しいって泣いちゃつてたけど、今は学校の先生と笑顔でやっているといいな。ご飯はちゃんと食べられるかな？ランチラッシュのご飯は美味しいから大丈夫だと思うけど。なんだか無性にえーくんに会いたくなつてきたなあ。

「大丈夫か、樫」

「楳少女」

「あ、相澤先生、オールマイト先生。気づかなくてごめんなさい。結構速かったですね?」

「あつたことを聞けば急ぐのは当たり前だ。ホークス、連絡感謝します」

「いやいや、俺こそ頼りなくて申し訳ない。楳さん、今日はいろんな意味でお疲れ様。とにかくゆっくり休んでくれよ、いいね?」

「はい」

近くでデスクワークをしていたホークスがドアを開けて入ってきた相澤先生と何とオールマイト先生に気づいて立ち上がる。私と二人に向かつて頭を下げる彼にぶんぶんと手を振る。今日はありがとうございました、という感じで私は頭を下げて先生方についていこうとすると、ちよい待ち、と呼び止められた。振り向くとホークスが円の中に複雑な編み込みが入り、いくつかの羽根がぶら下がってる何かを私に差し出していた。

「なんですか、これ?」

「あれ?知らないんだージェネレーションギャップ。これ、ドリームキャッチャーっていうアメリカの魔除け。大変なことあったし、悪い夢をどけてくれるよ。部屋の窓に飾っておけばいいからさ」

「なんか、羽根に見覚えがあるんですけど……」

「うん、さつき俺の羽根で作ったからね。効果抜群だよ。抜けた羽根は明日には生えてるから平気さ」

ひっえっ!? 恐れ多いんですけど!? ヤバすぎない?! デクくん知られたらこれ延々と部屋に居座られるやつじゃん?! でも、そんな風に良くしてもらえるようなこと私したかなあ? と、とにかくお礼を言わなければ! 全力で腰を折ってお礼を言う私にひらひらと手を振ったホークスはまた一緒に仕事させてね〜という感じで自分の執務室に戻っていった。

私は物凄く貴重な宝物を扱うようにドリームキャッチャーを対爆ケースに3重に仕舞って、相澤先生とオールマイト先生に促されて車に乗り込むのだった。

## 111話

「あの……みんなは今どうですか？私のことはどう伝わってますか？」

「お前のミッション先で不測の事態が発生したと伝えてある。脳無と……それにお前の個性が使われていたことは話してない」

「よかった……このまま秘密にしてほしいです。正直、知られたくなくて」

「樗少女……」

高速道路を走る車の中でハンドルを握る相澤先生に私は尋ねる。自分の中で、今日あったことがこんなに重たいことになるとは思わなかった。忘れたことはない、目を抜かれる喪失感と痛み、大事なものを失った実感はいまだに私を苛んでいる。私の左目を取り戻して、きちんと茶毘にふす。秘かにできた私の目標の一つだ。ただ、今日その目標にも暗雲が立ち込めてきた。実際にコピーされた個性の実物が出てきた以上、私の目が原型をとどめている可能性は低い。

じゃあ、どうやって誤魔化しましょうか。と私が提案すると、オールマイト先生がかなり真剣な顔で私の顔を覗き込んでくる。いつもの期末試験のような意志の強い瞳が、私を強く貫いている。私とオールマイト先生は座高が近い、というかほとんど一緒だ。だからこそ、その平和の象徴を張り続けた碧玉から目が離せない。

「無理をしないで欲しい。私も相澤君も君の味方だ、絶対に。そんな風に、あんなことがあった後で……笑わないでくれ」

「無理をしているかしていないかといえば、しているのでしよう。でもですね……笑っていたいんです。あんな風に使われた私の個性は人を助けられるんだって胸を張りたいんです。笑ってる人が一番強くて無敵、らしいですよ？」

ぎり、と相澤先生かオールマイト先生の歯がなった。笑い続けて平和の象徴をしていた人間には、これを否定できないでしょう。最悪な使い方だ、だけど……話したくない。この胸の内のざわつきも、荒れ狂う感情も。だからこそ、笑っていたい。帰って来た時に私が私じや

なくなっただけ、皆悲しむ。一昔前のヒーロー特撮のように、涙を笑顔の仮面で隠したい。私なら平気だ。友達がいる、娘のような妹がいる。親友もいる、大切な幼馴染もいる。支えてくれる人がいて、私も支えることができるんなら、私は立つことができる。

それに、今のこの感情の半分が、自分自身への嫌悪だなんて言いたくないに決まってる。あの時は緊急事態だった、確かにそうだ。けど……切り捨てるように私は殺害を選択した。それそのものはホークスが代わりにやってくれて、私は手を汚さずに済んだけど……証明されてしまった。私が、大と小を比べて小を切り捨てられる……人を殺せる選択肢を取れる人間だと。こんな私がヒーローを目指せるのだろうか。こんなぐちゃぐちゃな中身、誰にも言いたくない。

「……………」

「いいんです。どっちにしろいつかこうなるんじゃないかって思っ  
て、覚悟してました。オールフオーワンが言ったことが確かに現実になりました。なら私は、それに負けたくない。踏んだり蹴ったりですよもう、許せません。けどそれでめめめして立ち止まるのは嫌です」

「……高高度作戦中にヴィランの攻撃を受けて墜落、怪我はしなかったものの大事を取って俺たちが行った。これでいいだろう」

「確かに、それならいい感じですね。ありがとうございます」

さっきまで無言を貫いていた相澤先生が運転しながらカバーストーリーを考えてくれる。なるほど、これなら半分くらい本当だし冗談交じりにクラスに報告することができるだろう。私の意志が固いことを理解してくれたのだろう、話すつもりが全くないことも。捜査協力については必ずするけど、今のこの感情については自分の中で決着をつけたい。前に進むためにも、私がどんな人間になるかについても。

結局そのあとは、何か話題が出ることもなく。オールマイト先生は難しそうに黙り込んで、相澤先生は口を閉ざした。私は申し訳なく思いつつも、高速道路の流れる景色を見ながら、離れない考えを振り払えずに、ずっと目を伏せていた。

「ただいまー」

「あー！希械ちゃん帰ってきたー！」

「心配したんだぞー！ミツシヨン先で不測の事態に陥ったと聞いたが、どうしたんだ？」

校門前で先生たちに頭を下げてから別れ、ハイツアライアンスの玄関をくぐる、努めて明るく。何もなかったかのように。既に今日のミツシヨンを完璧に終えてきたらしいみんなは今日あったことを話し合っていたらしい。私に気づいてくれた三奈ちゃんの声でみんなが一斉にバツと玄関を見て、私に視線をやる。クラスを代表して飯田くんが事の仔細を聞いてきたので相澤先生に考えてもらったカバーストーリーを早速説明することにした。

「実はねー、ホークスとチームアップをさせてもらったんだけど高度2000mぐらいで戦ってたら、ヴィランの攻撃で墜落しちゃって。海の上だったから何とでもなったんだけど、先生方が心配して来てくれたの」

「それは……危ないところだったんだな。無事で安心した」

「むしろどうやって生き残ったんだよそれ……」

「パラシュートくらいならノーモーションで作れるからね」

高高度作戦の内容に興味津々なみんなではあるけど、これ以上は守秘義務があるのーと誤魔化す。いつも通りに笑えているかな、私。皆の感じを見るに違和感を持っている人は少なそうだ、良かったー。そういえば、とソファの方を見るとソファの上にはタオルケットがかけられたエリちゃんと、えーくん、そしてデクくんがいた。

「待ってる、っていつて寝ちゃったよ。あとで謝つとけよ希械」

「あー、エリちゃんに悪いことしちゃった。えーくんもデクくんも一緒にいてくれたんだ？ちゃんとご飯食べれたかな？」

「大丈夫だったよ、でも樫さんが一緒がいいって」

うおおおおくくく、ごめんよエリちゃん。そんな可愛いこと言ってたのね……そうだよねー、本当だったら夜ご飯までに戻ってくるはず

だったもんね。えーくんにどいてもらって、私がエリちゃんの隣にぎしりと腰掛けるとその振動でエリちゃんは目を覚まし、眠気眼をぐしぐしと擦ってから、ぼやくくと私を見て、ふわ、と笑った。私の胸を見えない何かが盛大に貫いた音がしたが、コラテラルダメージなので無視をする。ただ一言、かわいい。

「おかあさん、おかえりなさい」

「ただいま、エリちゃん。ごめんねー待たせちゃって。お風呂入って寝ちやおうか」

「うん」

「希械ちゃん、ホンマにお母さんみたいやね」

「おっと、ここにも可愛い娘がいるぞ」

エリちゃんを抱っこして立ち上がった私は私のことを弄ろうとするお茶子ちゃんを片腕で抱き上げる。お茶子ちゃんは真っ赤になっちゃってぷしゅーと湯気を出してフリーズした。抱っこを求める子は誰だ〜？と私が周りを睥睨すると女子の皆は何故かハグ待ちの態勢だった。あれ〜？ここ嫌がって逃げ出すところじゃない？

とりあえず私はお茶子ちゃんを下ろして、エリちゃんを挟むような形でぎゅっぎゅと皆とハグして回る。なおハグ待ち態勢だった峰田くんと上鳴くんは無視した。峰田くんが床を叩いて悔しがっているが知ったこっちゃやない。上鳴くんは響香ちゃんにお仕置きされてる、結構理不尽。お風呂入ろうねーエリちゃん、と私はそのまま部屋に帰って荷物を置き、お風呂セットをもって階下に降りることにした。

「眠れないなあ……」

すやすやと眠るエリちゃんを抱きしめながら寝転がっているけど、私に睡魔が訪れることはなかった。別に寝なくても平気といえば平気だけど、気分的に眠っておきたいのはそうだ。デクくんに滅茶苦茶羨ましがられたホークス製ドリームキャッチャーの効力も試したいところだし、眠らないとダメかなあ？

しようがない、眠れない時の最終手段として個性で電源を落とすような感じで意識を断とう……その前に、ちよつとだけ外の空気が吸い

たいかな。時間外外出になっちゃうから、中庭に出て夜空でも見上げよう、なんだかロマンチックー。気づかれないようにエリちゃんホルルドを外してハ口と白ハ口をお願いする。無音でパタパタと耳を動かして返事をする2体のハ口にお礼を言って、私は共用スペースに降りた。

共用スペースにたどり着いた私は、窓を開けて縁側のような場所に腰掛ける。ぼーっと空を見上げる、雲一つない空の宵闇の中によく見えるまあるいお月様が輝いていた。それ自体は発光していないはずなのに私を照らすほどに輝いている。

「綺麗だなあ」

「だな」

びくう！と私の背が跳ねる。全く気付かなかった、えーくんが私の後ろにいつの間にか立っていた。し、心臓が口から出るかと思ったあ……！えーくんは何も言わずに私の隣に腰を下ろして同じように月を見上げる。無言の間のちにえーくんが口を開いた。

「……なんかあったんだろ、今日。皆に話せねえこと」

「……ないよ？話したことが全部」

「お前さあ、俺相手にあんな嘘通じると思ってたんのかよ。お前はあんな風に笑わねえんだよ。下手な作り笑顔なんかしやがって。皆は誤魔化せても俺は無理だつていい加減分かって」

えーくんはガシガシと頭を掻きながらそんなことを言う。そういえば、えーくんは私が異形型差別を受けた時とか、ちよつと仲間外れにされた時とか、必ず気づいてくれたなあ。私は知られたくなくつて、毎回誤魔化してただけど家に帰ってから夜に窓を開けると大体ばれていた。会話できるくらいに近い部屋の窓を挟んで、私は結局話しちゃうんだつたつけ。そんなこと、高校生になつてなかったから忘れちゃつたよ。

「えーくんには敵わないなあ……話したくないの。だめ？」

「無理に聞くつもりはねえよ、んなの当たり前だろ。でもよ、お前泣きそうな顔で笑うんだからさ。しかもこれ、お前がなんかあった時の癖じゃねえか。ほれ、胸くらい貸してやる、吐き出してみろ」

「……今日ね、脳無にあったの。私の個性持ってた。コピーされたんだと思う……最終的に自爆しようとしたところをホークスがやってくれたけど、ちよつときつくて」

横から息をのむ音が聞こえる。えーくんにはだけは、なんか話せる気がした。思ったよりするつと、口から今日あったことが出てきた。一度話し出してしまうばすぐだった、濁流のように整理されてない言葉がぼろぼろと出てくる、私の嫌なところも、知りたくなかった部分も。

「それでね、脳無が自爆しようとしたとき……私、脳無のこと殺そうとした。脳無の命とホークス、捕まったヴィラン8人の命を天秤にかけた。ホークスには感謝しないといけないね、私……まだ人殺しじゃない」

えーくんは、無言。ああ、ついに愛想をつかされちゃったかな……私、殺すかもしれないと覚悟をして攻撃したことは何度かある。US Jの時の脳無もそう、I・アイランドのウォルフラムもそう……だけど、明確に、確実に命を絶とうとして攻撃したのはあれが初めてだった。確実に殺せる手段を選んで使った。ホークスが手を汚した、汚させてしまったから私はまだこうしていられる。だけど、あの荷電粒子の奔流を脳無に放ってたら、今私はどうしていたのだろう。

「……俺さ、お前のごと尊敬してるよ。いつだって誰かのために前へ飛び出しちまってよ、大切なもん失ってもまだ進もうとしてる。けど……一人で行かないでくれよ。いつか絶対追いつくから、先に立っててくれていいから……俺も隣に立たせてくれ」

「えーくん……」

立ち上がったえーくんが、私の頭を横から抱きしめる。身長差が縮まって、彼に覆いかぶさられるような形になった。あったかいなあ……えーくんにはやっぱり敵わない、そう思っているといつの間にか、ボロボロと私の両目から涙が溢れてきた。止まらない、ぼたぼたと顔を伝って私の服を濡らしていく涙。蓋をしていたはずの本音が、出てきてしまう。

「辛いよっ……どうして私、こんな目にあってるの……!?なんで、私の個性なの……?私の個性で人を傷つけないでよっ……」



「お前は悪くねえ、絶対そうだ。断言してやる」

「返してよ……私の左目、宝物……！お父さんとお母さんがくれて、えーくんが守ってくれたのに……！失くしたくなんかなかったのに！」

「取り返そう。手伝うし、今度は俺が必ず守る。約束だ」

「えーくんっ……！うえ、うえええええん……！」

最終的に言葉にならなくなった私は、えーくんに縋り付いて大泣きする。こんなに泣いたのは、悲しくて悔しくなったのは、神野以来だ。あの病室で目覚めて両親と会った時に襲ってきた申し訳なさと、安堵と、絶望感……感情がない交ぜになって、ごちゃ混ぜになって……制御できなくなつて……整理がつかなくなつて……私の、弱いところが丸裸になった。

どうして私なんだろう、他の人じゃダメだったんだろうか。分かっている、そんなの。ただ運が悪くて、私の個性が強かっただけなのに。私だから、今こうやって生きていられるって分かってるんだ。けど、納得できない。私は、普通にみんなと楽しく学校生活をしたかった。途中終了することなく職場体験をしたかった。ヴィランの襲撃を受けることなく夏合宿を全うしたかった。脳無を殺す決意なんてしなかった。

えーくんにこんな感情をぶつけるのだなんてお門違いに決まってる。それでも私は、彼に縋り付くのをやめることが出来なかった。力いっぱい彼を抱きしめてその胸で大泣きするのをやめられなかった。膨らんでいた風船が弾け飛んだように、制御が効かなくなってしまった。

私の力に締められて苦しいだろうに、それでもえーくんは何も言わずに……私の頭に手を置いて、優しく撫でてくれるのだった。その優しきすら、今の私には辛かった。

## 那歩島編

### 112話

「雄英スペシャル焼きそば一つ！」

「こっちはお好み焼き！」

「バニラアイス〜！」

「はいはいただきます〜！」

「樫さんフルスロットル……」

「デクくん！ほら早くお会計！」

季節は冬なのに常夏の天気、青い海、広い空に雲一つなく照り付ける太陽。そんな中私は……ヒーロースーツで海の家を経営しています！違うんです、理由があるんです。けして、けしてヒーロー志望から料理人志望に進路を変えたわけじゃないんです。確かに私はお料理は好きだし、食べてくれる人の笑顔を見るのもっと好きだけどね？それはそれとして、別にお店を経営するほどのめりこんではないのです。

「おかあさん、はい」

「お、ありがとエリちゃん。あとで一緒に泳ぎに行こうね〜」

「うん、ハロとまってる」

『マツテル！マツテル！』

つつい、と私の鋼鉄の足をこんこんとノックするエリちゃんから瓶のコーラを受け取る。白いワンピースの下に、黄色の水着を着たエリちゃんは実にかわゆい。こんな熱いところにきて熱中症にならないか心配だったけど白ハロについてるエアコン機能で冷風を浴びているからか熱気籠る厨房にいても問題なさそう。おとなしくちよこんと私が作った椅子に座って私が料理する姿をわくわく顔で見るエリちゃんは、ものすごくかわいい。かわいい！

よし、と私はビキィツ！と瓶の口をかみ砕いてコーラを開けて、ガラスを飲み下してからコーラをぐいっと一気に飲み干す。うーん！糖分とカフェイン、エナジードリンクに類似する成分で元気いっぱい

！残りの瓶もバリボリと食べちゃってから改めてごうごうと業務用の超火力がステキな鉄板たちの前に立って、エプロンをぎゅつと締めろ。ソースがちよつとついてるのがご愛敬だけど。

「樫さんごめん、迷子が出たみたいだから僕も探しに行ってくるよ」

「はいはい。それじゃ、がんばろうかえーくん」

「おうさー！いいいらっしやいませええええ!!」

ここは那歩島、日本のはるか南にある南国の島。沖縄よりも緯度がずっと赤道に近いからか、日本特有の四季があまり感じられない島だ。なにせ、もう12月なのに海水浴ができるくらいには夏真っ盛りって感じ。長袖なんかいらなかったねー。うん、私たち雄英高校ヒーロー科1-A組はいま、国家プロジェクトの一つとして実際にヒーロー活動をしています！一昨日到着したんだけどねえ。

始まりは、チームアップミッションで私が脳無に遭遇して少ししたころ。えーくんに思いつきり泣きすぎたからか、私も心の整理がついた。とりあえず自爆の解除手段を研究して、次に私の個性を搭載した脳無が出てきたら自爆させずに拘束してひとつらえてやるんだから！と私が意気込みも新たに訓練に励もうとした矢先に相澤先生から伝えられたのがこれだった。

チームアップミッションの開始もそこそこに伝えられたのはプロヒーロー不在地区における実務的ヒーロー活動推奨プロジェクト。ものすごく長いからわかりやすく言うと、老年で引退するプロヒーローがいるんだけど、そのプロヒーローの後任が来るまでの間、私たち一応セミプロたちが代わりにヒーロー活動しなさい、ということらしい。そのヒーローがいなくなる不在地区っていうのが、ギリギリ日本、この那歩島ってわけ。

で、なんで海の家をやってるかって話なんだけど、ここをやってるおじいさんが腰をいわしちゃったみたいで……明日は息子さんが来てくれるみたいなんだけど、今日は誰も都合がつかない。そして私、えーくん、デクくんが代打としてやっているってわけさっ！呼び込み&接客の二人に、お料理ならどんとお任せあれなわたし。そして癒しのエリちゃん！完璧な布陣だ……！一技術者としては完璧って使い

たくないけど。

なんでエリちゃんがいるのか？という疑問もあるかもしれないけどそれは単純、この島ものすごく平和なの。具体的には引退しちゃうおじいちゃんヒーロー一人で何とかなっちゃうくらい、ここ最近のヴィラン発生率が上がった社会でも不思議なほど平和な島。だからセミプロとはいえ学生の私たちが活動できる地域に選ばれたんだろうけど。

チームアツプミッションだと、任務、つまり大体対ヴィランになるのでエリちゃんを連れて行くのは論外だ。だけど、この島は違う。というか1か月もエリちゃんと離れるのはちよつとまずいのだ。まだちよつと不安定な部分があるから。もちろん回復基調だけど、それが今一番大事な時期。だから、長期にわたって私が離れるわけにはいかない。まあ、自分の義娘すら守れないヒーローなぞ私のヒーロー像ではないので鍛えた科学の粋を尽くす所存です。今ならビームを漏れなく100発同時発射でお贈りしますとも。メリクリウスに続く新兵器も開発できたしねー。

平和な島だからこそ、ヒーローの仕事はあまりない。だけど、ヒーローの本質はヴィランを打倒することではなく誰かを助ける余計なおせっかいのこと。だから私たちは、この島においてはヒーローであると同時にちよつと便利な人たちでもあるの。けど、私たち1-A！元気に！楽しく！責任をもって！ヒーロー活動をやっております！私は今、海の家の人将だけど！

「クソが！ヴィランでねえじゃねえか！」

「いいことでは？」

「爆発さん太郎はストレスが溜まってるとるんだよ」

「アゝアゝアゝアゝ ツ!?ンダツ!?」

「爆豪くんエリちゃんが怖がるから目の吊り上がりおさえて」

「んの…………！メカ女ア…………」

「久々呼ばれたなあ、それ。それ以上やるなら晩御飯抜くよ」

「グヌウ……！」

ふふふ、と笑いながら戦闘が必要な場面がなかったせいで出場をオール拒否した爆豪くんが目を吊り上がらせて手をパチパチさせている。あまりの暴虐顔ぶりにエリちゃんがそつと私の胸に顔をうずめて爆豪くんを怖がったので指先から空気を放った私は爆豪くんにちよつとだけ注意。ふへへ、残念ながら私は那歩島に来てから朝昼晩みんなのご飯とお夜食を作っているからね。この罰が成り立つのだ。

まあ、私が作るのはいいよ。お料理苦手な人いるし、時間ある人は手伝ってくれるし。この旅館借り切つて仮の事務所にしてるから従業員さんもないしね。お掃除とかもゼーんぶ私たちの仕事。そしてプロヒーローも、先生も誰もいない。責任はすべて私たちが負わないといけない。それがむしろいい緊張感を生み出して場を引き締めてくれる。

「あ、上鳴くんバッテリーの件どうだった？」

「おお、問題なかったぞ！つーか、お前がいきや全部スパッと解決だろ」

「それは、そうなんだけど……1か月でいなくなるから作ったものを置いて行つて責任が持てなくて……既製品か充電対応のほうが丸いんだよ」

「委員長長く細かい仕事受けすぎじゃね？」

「そうは言うが、困りごとに優先順位はあるかもしれないが、大きいも小さいもないだろう。オールマイイト先生が言っていた、これもヒーローの仕事だよ」

時刻はもう夕方、日の沈みが遅いからまだ茜色だけど、もう夜と言つてもいい時間帯だ。そろそろ夜ご飯の準備しないとね。実はさつき、この島の村長さんや魚河岸の偉い人、それに漁師さんやビーチのお客さんまで来ているんな差し入れを持ってきてくれた。大きな真鯛が何匹も、そしてなんとマグロが丸ごと！小ぶりだけどね。たくさんの野菜、フルーツ。どれもこれもおいしそう！腕が鳴るなあ！「よし、ご飯作るよ！暇な人手伝つて！」

「では、わたくしが」

「お、俺もやるぜ」

「俺も暇だからよオ。なんか一品作らせてくれ」

「希械ちゃんの料理が毎日食べられるなんて天国だ」

「別に三奈ちゃんは毎日食べてるじゃない」

「ケロ、私もやるわ」

お手伝いに名乗り出てくれたのは、百ちゃんに、瀬呂くん、砂藤くん、そして梅雨ちゃん。三奈ちゃんは昨日やったから賑やかしかない？ しかしいいねえ、いいねえ。腕が鳴るねえ。私の腕は鳴っても機械音だけど、久しぶりのメカジョーク！ さてさて、今日のメニューは、こちらっ！ マグロと鯛の海鮮丼、お野菜の天ぷらに、マグロ出汁のお味噌汁。それとデザートに砂藤くん製フルーツポンチかな？ サクサクっと進めていこう。

料理が趣味の私と砂藤くんは毎日ご飯に出ずっぱりだけどお手伝いはローテーションだ。まず私がサクッとマグロを捌いて、赤身、中トロ、大トロとサクにしちゃう。骨についた中落ちもきれいにこそぎ落として赤身と中トロ少しと混ぜて叩きにしちゃう。それを瀬呂くんが作ってくれた酢飯の上に乗せる。これを量産。もちろんみんな食べ盛りだから大盛り！ ささっとマグロ出汁を取って、お味噌溶いてつと。その間に砂藤くんが真鯛を捌いてくれた！

梅雨ちゃんは手慣れた手つきで天ぷらを量産中。秘密よ、とみんなで見したらすぐおいしかった。揚げたてっていうのもあるけど、サクサクの衣に天つゆが絡んで何とも言えない。これは……あれだね！ と私は砂藤くんアイコンタクト、明日の分にしようと思ってた真鯛をさらに出して、天ぷらにしちゃうことにした。そんな感じでご飯が完成！ ずらーっつと並べてつと。

「ご飯できたよ」

「待ってました！」

「うわっ！ 海鮮丼だ」

「おいしそ」

みんな感想もそこそこにいただきますをして、一口食べたらもう夢

中。にやりと笑う私と砂藤くんはグッドサインを立てあい、同じ厨房に立ったみんなもニツコリ笑顔。エリちゃんもほっぺにご飯粒がつくほど、夢中になってスプーンとお椀をひしつとつかんでいる。これは物がいいからここまでおいしいんだね。いやー、さすがは島だけあって魚介類が美味しいんだよ。代わりに畜産系のもののはちよつとお高いんだけど。

「じゃ、梅雨ちゃん、三奈ちゃん。エリちゃんのことお願いね」

「ええ、お任せして頂戴。でも、いいのかしら？宿直までだなんて」

「そーだよー！希械ちゃん忙しいんだし、夜くらいゆつくり休んでもばちは当たらないってー！」

「んーん、忙しいのは私の事情。お仕事には関係ありません。さき、特別扱いはいらないからゆつくり休んで。エリちゃん、お休み」

「うん、おかあさん。おやすみなさい……」

「明日は一緒に寝ようね」

島のみんなは寝入っても、ヒーローは24時間体制。持ち回りで宿直をすることになっている。むしろ、悪いことは夜の闇に乗じて行われるからね。ほら、サー・ナイトアイも真に賢いヴィランは闇に潜むって言ってたし。まあ、自慢じゃないけど私はおおよそ万能なので大概のトラブルがあっても何とかできますとも。ここ最近、そういう風に自信を持つことにした。エリちゃんが見る私が、入学前のえーくんのうしろに隠れているようなのじゃかつこ悪いから。

「お、爆豪も宿直かあ？まあお前昼なんもしてねえもんな」

「ケッ！」

「あ、デクくん。練習前にちよつと」

「ペツ!?なななななにかな樫さん!？」

「緑谷ー、希械の距離にいい加減慣れるよ。目線合わすためにかがむと近距離になつちまうんだよ」

「そゆこと。はい、デク君。新型のガントレットだよ」

「ええっ!?もうできたの!？」

「出来立てほやほや！名づけてナノガントレット！ナノ技術を世界初！実践投入した私とメリツサさん、明ちゃんの新サポートアイテム！

豪華でしょ〜」

デク君を呼び止めて、視線を合わすために中腰でのぞき込むとぼつちり近距離で目が合ったら彼はどぼんつと後ろにバックステップした。ちよつと傷ついた、同じく宿直のえーくんがフォローを入れてくれるけどいい加減慣れてほしい。わたし、背が高いからみんなを基本見下ろしているんだけど、距離が遠いの。見上げてもらうのも首が痛くなるから私がかがむことにしてるんだけど、デクくんだったらいつでも慣れてくれない。

デクくんは毎日ワンフォーオールの練習をしているし、たぶんこれからもするんだけどやつと完成した私たちの合作を渡してしまいましよう！世界初！超圧縮のその先、ナノテクノロジーを起用した意欲作、ナノガントレット！このガントレットのすごいところは、入学当初デクくんにつってあげたチョバムガントレットをコンセプトとして踏襲し、壊れて中身を守る構造になっていることだ！

壊れたらだめじゃん、ということなんだけど。そうじゃない。ナノガントレットは文字通りナノサイズの粒子が組みあがつて作られるもので、壊れても、一瞬で再構成される！オーバーガントレットは1部位12発だったけど、これを使えばなんと1部位36発、手足含めて144発！それ以上は貯蔵するナノ粒子の関係上持たない。こればかりは技術の進歩かデクくんの進歩待ち。

ちなみにだけど、壊れるのは内圧、つまりワンフォーオールの高まりを感知した時なので、通常の殴る蹴るじゃ金属の固さを持ちつつ柔軟に動く、ガントレットというよりグローブに近い動きを実現した。デクくんに渡した赤い腕輪をキラキラとした目で見てくれるデクくん。これは技術者冥利に尽きるね〜！

「アッアッ!？」

「お、なんだ爆豪羨ましいのか!？」

「俺にも作れやあ……!？」

「やべえ、俺爆豪が素直なの初めて見た……」

「かつちゃん、実はこういうの好きなんだよ……」



## 113話

「あのクソガキイ……」

「もう、昨日のことなのにいつまで根に持つてるの？ かつこわるいよ？」

「うるせえ！ 碌な注意もしねーで無罪放免が通るか！ 場合によっちゃ騒乱罪じゃー！」

「正論なのが逆に腹立つね〜」

ギリギリパチパチと歯ぎしりと小爆発の二重奏を奏でる爆豪くんに私は菜箸で炒めていた朝ごはんのカリカリベーコンを口の中に突っ込んだ。とりあえずこれでギリギリ歯ぎしりはやむでしよう。ほら爆豪くん、暇してたのは知ってるよ？ だからこうやって朝ごはんづくりに君を引っ張ってきてるんだからキビキビ働く！ ほら、激辛ピザトースト作ってあげるから！

まあ昨日のことを考えると爆豪くんがこうなるのも無理ないような、そんな気がするなあ。昨日、宿直をしていた私たち4人、夜のとばりに包まれた那歩島で……ヴィラン出現の報があった。小さな男の子、活真くんだったかな？ が知らせてくれたんだけど……教えてくれた場所に急行した私たちを出迎えたのは……巨大なカマキリのようなヴィラン、の幻影だった。そう、いたずらだったのだ。

その犯人は小さな姉弟、名前を真幌ちゃんと活真くんというんだって。デクくんが昼間迷子になった活真くんを探した時に知り合っただらそう。

活真くんのお姉ちゃんである真幌ちゃんの個性で作られた幻のヴィランだったんだけど、まあ……キレるよね爆豪くんは、そりゃ。私はああいたずらかよかったーぐらいなんだけど、注意はしとこうと思っただけだよりキレた爆豪くんが怖かったのか真幌ちゃんが半泣きになってしまったので慌てて爆豪くんを私が拘束して引っ張って帰ってきたんだけど……

真幌ちゃんと活真くんのフォローはデクくんとえーくんをお願いしちゃったから私たちより後に帰ってきた二人に聞いたらあんまり

聞いてくれなくてそのまま逃げちゃったんだって。一応おうちに帰るのは尾行して確認したみたいだけど……うーん、ヒーローをおちよくって遊んでいるのかなあ？あんまりいいとは言えないかも。前任の時はそうじゃなかったのかなあ？うーん、どうしたもんか。

「もっつ、もがっ……楪てめえ……！」

「歯ぎしりやめたらやめてあげる」

「クソがっ！」

朝ごはんのおかずを歯ぎしりするたびに爆豪くんの口の中に入った私にキレるいつも通りの爆豪くん。まあね、爆豪くんが言わんとすることもわかるよ。個性の無断使用、虚偽の通報……子供のいたずらで済んでるかもしれないけど場合によったら本当に逮捕される。ヴィラン出現の虚偽通報は特に悪質とされるので量刑が別になってくるくらいには社会問題だったり。まあ、次やったら親御さんに連絡を入れるくらいはしないとだめかもね。

目玉焼き、ウインナー、浅漬け、鮭の塩焼きと大方のおかずを爆豪くんに突っ込んだあたりで彼は観念したのか歯ぎしりをやめた。爆豪くんは最近私が料理していると勝手につまんでいたりするんだよね。お返しなのか爆豪くんが作った料理がおいでいかれたりするんだけど。素直に食べたいって言えないあたり爆豪くんもかわいいところがあるねえ。

というか、爆豪くん普通に料理上手なのなんだか笑っちゃう。キャラに合っていないって言ったらいいのかな？まあ、完璧主義的な側面がある彼のことだからあんまり言いすぎるといつかのようにアフロにされちゃうから黙ってよーっと。土鍋で炊き立てつやつやご飯をお茶碗に少しよそって、ちよつとだけしかない鮭のハラス、刻みのり、ワサビ、そして昆布茶を入れてお湯を注げば即席のお茶漬けだ。秘密だよ、と爆豪くんに私が口の前で指をしー、としながら言うとな彼は無言で茶碗を手取るのだった。

朝ごはんを終えても、お昼ご飯を過ぎてても、そして夕方になっても私たちは大忙し。私なんて百ちゃんと同じ感じで万能に近いから指

名で引つ張りだこになつちやう。というか、ただ話したいだけのおじいちゃんおばあちゃんの割合結構高いな？次点で多いのは観光客のトラブル。旅行鞆をなくしたりとか、お財布布落とした、宿の予約を忘れた何とかしてとか。ンな無茶な。

那歩島は島民1000人ほどの小さな島だけど、漁と農業よりも、観光産業で生計を立てている島だ。ふひー、最近島の中で私のことを子育てヒーローだっていう噂が駆け抜けてるんだけど流したの誰？間違つてないんだけど、危ない仕事じゃなかったら大体エリちゃんと一緒にいるからね！話したいおじいちゃんおばあちゃんたちもエリちゃん目当てなどころがあるみたい。なにせ、この島子供あんまりいないからねえ。学校も、全校生徒20人くらいだっけ？私たちとおんなじくらいだね。

「よし、エリちゃんいこつか、デクくんも」

「うん。えっと……」

「新島さんの畑のお手伝い、だね。収穫が大変なんだって」

「コンバイン樫ちゃんの出番だ！なーんてね」

エリちゃんを抱っこして、今日も今日とてヒーロー活動。本日最後私に入っている予約は畑の収穫のお手伝い。うーん、これじゃほんとに何でも屋さんだなあ、ヒーロー活動と言えばそうなんだけど、そうじゃないような。まあ、困っているなら助けましょう！そんなわけで一緒なのはデクくん！エリちゃんに麦わら帽子をぽふつと乗せて4輪のバギーをガチャガチャと作り出し、ブロロロオオン！とエンジンを……あら？

「あ、活真くん。どうしたの？」

「おー、昨日ぶりだね」

「……だれ？」

「昨日、ちよつとね。エリちゃんと同じくらいだから仲良くしてくれろと嬉しいね」

デクくんが私より先に気づいて大きな帽子をかぶった小さな人影に声をかける。慌てて塀の向こう側に隠れてしまったけど、すぐにばれてしまつてバツが悪そうにちよこんと顔を出す。そのあどけない

顔はやっぱり、昨日のいたずらの件で知り合った活真くんだった。お  
ずおずと自信なさげな感じでこちらに歩いてきた活真くんをじつと  
見るエリちゃん、新しくお友達ができるといいね？

「あの、昨日は……ごめんなさい。その……」

「偉いね。謝りに来てくれたんだ？」

「大丈夫だよ、怒ってないから」

「もう二人のヒーローにもごめんなさいって言ってくれる？」

「大丈夫だよ、もう聞いている」

私がベランダを指さすと、活真くんは上を見上げる。そこにはベラ  
ンダの欄干に背を預ける爆豪くんとアイスバーを片手ににかつと  
笑ってこちらに手を振るえーくんの姿が。活真くんはそれを見て  
ばつっと頭を下げる。爆豪くんはノーリアクションだけどえーくん  
は偉いぜ！のグッドサイン。そもそもキレてたのは爆豪くんだけだ  
し、その爆豪くんも道義的な面での怒りが大きいので本気で怒って  
もないしね。

「昨日、ヴィランが出たって言ったならヒーローは怖がって助けに来な  
いってお姉ちゃんが……お姉ちゃん、ヒーロー嫌いだから。だから、  
僕……」

「そっか、僕らが助けに来るって信じてくれたんだね。だから、呼びに  
来てくれたんだ」

「おかあさん、絶対助けてくれるもん。デクさんも、えーじろーさん  
も、ばくごーさんも」

「もちろん。誰のSOSだって見放さないよ。エリちゃんも、活真く  
んも、真幌ちゃんも。だから、何かあったら絶対に来てね？話したい  
とか、遊んでほしいとかでも」

エリちゃんの嬉しい信頼に私は笑顔になってエリちゃんをぎゅつ  
と抱きしめる。エリちゃん、みんなのことが本当に大好きなんだね。  
日頃いろいろ言ってる爆豪くんのこととも疑ってない。爆豪くんは上  
でボソツと当然だわってつぶやいているけど、私には聞こえてるぞ？  
？ちよつとだけあれだね、照れちゃってるね。良かったね、ちゃんと  
エリちゃんが爆豪くんのことを見てて。

「そのバッジ、忍者ヒーローエッジショットのだね。もしかして活真くんもヒーローを目指してるの？」

「う、うん！そう！だけど……僕の個性、ヒーロー向きじゃないし……それに姉ちゃんも危ないからやめてって」

「確かにそうかもね。ヒーローは危ないよ。私たちは、それでもなりたいて思ってるけどね。そう……活真くんがなりたいヒーローってなあに？」

「悪いヴィランをやっつける、強いヒーロー……」

「いいね、ちなみに私はみんなのことを守れるヒーロー。デクくんは？」

「僕は、困ってる人を救けるヒーローになりたいんだ」

デクくんも察したみたいだけど、真幌ちゃんが何となくヒーローに対してあたりが強い理由がわかったような気がする。朝、来てくれた人に二人の事情を聞いたんだけど、二人はこんなに小さいのに二人暮らし、お父さんは日本の本島で出稼ぎに行っているし、お母さんは死別しちやってるのだとか。近所の人も見守ってるみたいだけど……。

つまり、真幌ちゃんはヒーローそのものが嫌いなんじゃないかって、危ないヒーローになるうとしてしている活真くんを止めたいんだ。んー、気持ちはわかるかなあ。と言っても私は両親に心配される側だけ。雄英高校入学してから大怪我ばっかりしてるからね、脳無にやられたりとか、ステインにやられたりとか、茶毘に燃やされたりとか、オールフォーワンに目玉抜かれて全身ズタボロにされたりとか。口が裂けても安全なんて言えないや。

「活真くんがなりたい、ヴィランに勝って人を救うヒーローも、僕の人を救うためにヴィランに勝つヒーローも、根っこは同じ。最高のヒーローだよ」

「活真くんがヒーローになりたいっていうなら、応援しちゃうよ。頑張ろうね、お互い。なりたいたいものになれますように」

「うんっ！」

「でも、できるだけ家族には心配かけない感じで、ね？」

デクくんがしゃがみ込んで視線を合わせて、活真くんとぎゅつと握

手。私は活真くんのエッジショットバッジにちよつとばかり細工をする。きれいなメタリックバッジに変身したそれを嬉しそうに見てくれる活真くん。うん、エリちゃんと一緒に暮らしていてわかるんだけど、小さい年下の子って見てて元気をもらえるね。なんでだろうなあ、守ってあげたくなるし、応援したくなるし。

おどおどとした様子はどこへやら、活真くんは元気に手を振って小さな手で麦わら帽子を押さえながら漁港のほうへ駆けていった。ふふふ、いいねいいね、すっかり真幌ちゃんと話し合えるといいね。個性が戦闘に適しているかどうかは確かに大事だけれど、それ以上に大事なのはヒーローになりたいっていう固い意志だよ。もしも、後輩になれるなら応援しちゃうよ、私も頑張らなくちゃ。

「さっ、元気ももらったし行こうかデクくん！サトウキビを根こそぎ刈り取りに行くよ！」

「あ、安全運転でね？」

「そうだね、安全に……空飛んでいこうか！」

「え？」

「ハロー！エリちゃんを守って！」

私が言うや否やエンジンをふかしていたバギーのタイヤが横向きに倒れ、そこからジェット気流を噴射し浮く。変形機能でチャイルドシートになった白ハロが座席にエリちゃんを固定し、予想外の展開に固まったデクくんを助手席に放り込むと私は一気にアクセルをふかして、目的のサトウキビ畑に向かって道路を無視し、空を飛んで発進するのだった。

「エリちゃん、美味しい？」

「甘くて、おいしい」

「け、結局樫さんがほとんどやっちゃったのに僕ももらってよかったのかな……？」

「もらえるものはもらっておくのがいいよ」

「うん、僕は報告をしてくるよ。樫さんはこれからフリーだよね？」

「そうだね、エリちゃんと一緒に遊んでくるよ」

ちろちろとサトウキビの収穫を手伝ってお礼にともらったサトウキビを両手で持って舐めるエリちゃんにきゅんきゅんする私。たしかに、私が両足を大型コンバインに変えてサトウキビを採りまくったのは事実だけどデクくんも結構頑張ったじゃん？ たまったサトウキビをメカもびっくりな馬力であっちへこっちへ運んだりね。新島さんも大満足だったみたい。ふふん、あなたの隣にいつでも便利！ メカヒーロー・エクスマキナをよろしくお願いしまーすってね。

宿直したしエリちゃんのこともある私はこれから休憩。せっかくだからエリちゃんと一緒にこの島を回ろうと考えてるの。せっかくデクくんからも行つてきなよって言ってもらってるから彼とはここでお別れ。ふりふりと手を振るエリちゃんと大きく手を振るデクくん。私もデクくんにひらりと手を振ってから、えーくんがいるであろう漁港に向かって歩を進める。

「エリちゃんは、今日食べたいものある？」

「ばいなっふる……？」

「おお、いいねパイナップル。ゼリーにしようか！」

「ゼリー……」

口の端からよだれが垂れそうなエリちゃんを微笑ましく見守っていると、突然……電波が切れた。不審に思つて個性で探してみると……どうやら島全体から電波がなくなっている。これはつまり……基地局に何かがあつたの？ まずいな、この基地局は衛星やらネットやらなんやら、すべての通信設備の大本だ。混乱が発生するってレベルじゃないよ。なにか……ききな臭いにおいがする。

## 114話

「エクスマキナよりーA全員へ、基地局が何らかの不具合により停止しています。これより私が中継地として機能するので各自情報共有を」

『こちらフロツピー！海岸よりヴィランが出現！至急応援を求むわ！』

『希械！気づいてくれたか！商店街にもヴィランがいる！救助の手が足りねえ！委員長、頼む！』

『了解した！これよりヴィラン撃退と救助を並行して行う！』

「クリエティ、いるならみんなにトランシーバーを。このまま中継器になってたら私動けないから。エリちゃんの安全を確保してから向かいます」

『わかりましたわ！』

この島全域なら何とか私で中継器の代わりにはなれる。が、いろんな電波が私を通じて混線していくので脳みそがとても疲れる。長くは持たない。中継器直せるかなあ？跡形もなかったらいくら私でもどうしようもないよ？新しく基地局作るのだから難しいし。国が使用してる暗号と物理キーが解けなきゃ本島につなげないから、この島ではどうにもならない。衛星通信も同様。

そんなことを考えつつ事態の把握に努めようと全員にグループ通信の電話を個性でかけると、帰ってきたのはまさかのヴィラン出現の報だった。一気に私の顔がシリアスになるのを見たエリちゃんが不安げな顔をしている。正直のつぴきならぬ事態だ。通報が機能していない、大本の基地局を壊したのも本土に連絡をさせないためだろう。本土からここまで飛行機で軽く3時間以上はかかるし……。なんだったら船ならもつとだ。

「エリちゃん、白ハロと一緒に待っててくれる？私、ヴィランを倒してくるから」

「……うん。お母さん、戻ってきてね？」

「もつちろん！エリちゃんを一人になんてしないから！白ハロ！ギガ



ンテスを起動。エリちゃんを最優先に防御行動、および事務所の防衛  
を行いなさい」

『ギガンテス起動、ミッション受諾』

いつもの返事ではなく戦闘用に切り替わった白ハロが超圧縮技術  
で封入してあったナノマテリアルを開放し、改良型のギガンテスが組  
みあがる。4 mを超す巨軀になったギガンテスの胸がぱかつと開い  
てふかふかのクッションを敷き詰めたエリちゃん専用スペースを晒  
す。エリちゃんに約束、と小指を絡めてからもう一度抱きしめて、そ  
のスペースにエリちゃんを入れる。そうして白ハロが地面を跳ねて  
エリちゃんの膝に収まり、ギガンテスの胸が閉じる。

百ちゃんがトランシーバーを配ってくれたみたいなので中継機能  
をカット。バイザー型のカメラを一瞬光らせたギガンテスがホバー  
クラフトで浮いて滑るように事務所の方に向かっていくのを確認し  
て、私はブーストふかして大ジャンプ。上空100 mから島の全域で  
何が起こっているかを確認する。戦闘位置は……海岸、すでに轟くん  
や飯田くんが現着して異形型らしき男と戦っている。

そしてもう一つ、商店街側……赤い包帯を操る男がえーくんや、上  
鳴くん、峰田くん青山くんと戦っている。赤い包帯が巻き付いても持  
ち前のパワーで強引にちぎってまっすぐ向かうえーくんにミイラ男  
は後ろに下がりながら距離を取り、車やら電柱やらをえーくんにつ  
けだすけど、えーくんの硬化はもうそんなちやちなものじゃ破れな  
い。車は真つ二つ、電柱はつまようじのようにへし折れてもえーくん  
は無傷。

そして、えーくんが腹パンを決めると同時に後ろからやってきた爆  
豪くんが挟み込む形で爆破を決める。爆豪くんが商店街に行ったの  
ならえーくんもいるし私が海岸のほう……いや、ちがう。足りない、  
人数が。集まってくるクラスメイト達のうち一人、デクくんだけ姿が  
見えない。何かに気づいた？連絡網の外にいるんだね？いくらデク  
くんと言えども単独行動は危ない、私が合流しなきゃ。

「デクくん、デクくん、聞こえる？海岸と商店街にヴィランが出ている  
の。今どこ？他にいるかもしれないし、単独行動は危険だよ」

『樫さん、今交戦中なんだ！活真くと真幌ちゃんが襲われてる！このっ！』

「すぐ行く！A組全員へ！デクくんが単独で戦闘中！」

ナノガントレットの通信機能の一部ハックしてデクくん呼びかけると若干の戦闘音とともに慌てた様子の声が返ってきた。同時にナノガントレットの反応があるほうに目を向けた私にも戦闘をしているのが見て取れた。家が……活真くと真幌ちゃんの家が崩れている。すぐに私は足のブーストをふかして移動する。住宅密集地、しかも森の中ときたらビーム兵器は使えない。デクくんが牽制で空気を発射しているのが見える。

「お待たせっ！」

「樫さんっ！」

「増えた、か」

「希械、おねえちゃん……」

デクくんが繰り出したスマッシュに合わせるように、加速して加減抜きで拳をふるった。だけど、中空で私とデクくんの攻撃は止まる。空間障壁!?!いや、違う！大気を圧縮して壁にしているんだ！私とデクくんの攻撃をこうもあっさりを受け止めるなんて！そこで初めて私はヴィランと目を合わせる。無造作に伸ばした白い髪、ジャケツトの下には紫色にうごめく機械、背中には薬品が入ったガラス瓶が背中に突き刺さるように立っている。

「邪魔だ」

「デクくん庇って！ビームシールド形成開始！」デイ

「うんっ！」

ヴィランの5本の指先から紫色の光が収束し、放たれる。間違いのない、私のそれとは仕組みが違うけどビームを発射したんだ。デクくんは活真くと真幌ちゃん二人をかばってもらおうように頼んでから私は自分の大きな体を利用して前が出る。右手の甲に六角形のデバイスを作り出した私はそれを前に掲げる。ビームにはビーム、そこから放出されたビームの盾が放たれたビームを弾いて防御する。その隙に作りだした左手の短距離誘導ミサイルを発射！

「デクくん！いまっ！」

「フルカウル30%！デトロイト、スマッシュ！」

「パワーが、なあっ!？」

ミサイルの防御にまた空気の壁を張った相手、だけどそのおかげで紫色のビームは途切れた。デクくんが今まで使っていた15%から一気に倍にパワーを跳ね上げて私の後ろから飛び出す。加速とパワーを余すところなく注ぎ込んだワンフォーオールのパunchは、相手が張った空気の壁を押し潰してヴィランを後ろに吹き飛ばした。通じ、てないね！無傷だ！硬化したナノガンレットの硬さは私が合成した硬質合金と同等、それなのに亀裂すら入ってない。

「二人とも、今すぐ走って逃げて！」

「わ、わかったわ！」

「その力、その個性……奪う価値がある！」

「奪うだって……!？」

「それは……っ!？」

私とデクくんは、おそらく違う意味で驚いている。ワンフォーオールが効かなかった？違う、私の作ったサポートアイテムより硬い壁？違う。デクくんは、きつと「個性を奪う」この言葉に驚いている。オールフオーワンのように個性を奪って、そして使役する個性なんだ。さつきから空気の壁と爪をビームに変換して発射する個性と関連性のないものが続いている以上、信憑性は高い。

だけど、私はもつと違う方に驚いていた。ジャケットの下にうごめいている機械が鳴動して、まるで機械でできた動物のあごのようなものが背中から現れたのだ。それは……それはっ……私の個性だ！私から奪われた、あの時空で戦った脳無が持っていた、不完全な私の個性！こいつ、ヴィラン連合……？いや、なんでもいい。なんでもいいけど……

「聞かなきゃならないことが増えたよ」

「……楳さん？」

「……そうか、この個性の元の持ち主はお前か。なら、奪わなければなるまい。生身になじまぬ、劣化したこれを完成品にするために！」

「できるものならね。デクくん、詳しいことはあと。今はこいつを止めよう。狙われてるのは、あの子たちのどっちかだよ」

「……わかった!」

絶対に、捕まえなければならぬ。それだけは確かだ、だけど、個性を奪えるという性質は厄介だ、距離を取って弾幕戦……ビーム兵器が使えないのが痛い。住宅地が近すぎる、流れ弾が二次災害を引き起こしかねない。いや、組み立てろ、作り出せ。オールレンジ兵器はこんな入り組んだ森の中じゃ空間をうまく使えないただの的。必要なのはストッピングパワー、威力、そして範囲……合致するのは、これだ。

「ビームショットライフル、形成開始<sup>デ</sup>

「ワンフオーオール、フルカウル……15%シュートスタイル!」

「最後に聞く、どけ」

「断る!」

相手も私たちも同時に動く、機械でできた獣は分裂するように顔を増やし私たちに襲い掛かってくる。デクくんは地面を蹴り、持ち前のフットワークを前面に押し出すシュートスタイルをもつて相手を翻弄しにかかる。私はうって変わってその場から動かずに構えたビームショットライフルを乱射する。収束率を落として射程を極端に短くする代わりに、面攻撃と威力を両立させた急造武装、けど十分!

ライオンの顔のような機械獣たちをビームが貫いていく。デクくんに当てないように暴れる銃口を操りながら、弾幕を張り続ける。相手は複数の個性を備えてはいても、慣れてはいないようだ。同時に扱えるのは空気の壁とビーム、もしくは私の個性の二つ。それ以上、例えば3つ同時にというのは今のところ出していない。それでも連射力が弱い武器だから、接近を許してしまい、銃で殴りつけて対処。だけどこっちも壊れた!

「死ねえ!」

「かっちゃん!」

「爆豪くん!?!他のヴィランは!?!」

「一匹軽く捻ったア!てめえらは眺めてろ!俺がこいつを殺す!」

相変わらずヒーローとは思えない口の悪さだけど、一人制圧を終了したというのは大きい！あとは多分、海岸だけ……！片手のサポートアイテムを喪失したらしい爆豪くんはそれでも確かに闘志みなぎる背中でヴィランに相對している。私は手短に彼に複数個性を使う、オールフオーワンと同じ個性を持つていることを伝える。それだけで彼は脅威度を悟ってくれた。

「……こうか？」

「っ！爆豪くん、デクくん！ああっ!？」

「樫さん！」

「……ツちい！」

やられた、相手は……脳無じゃない！私の個性の使い方を、私を通じて学習した！新たに表れた機械獣の口から、またも紫色のビームが発射される。40を超える熱線がいつぺんに爆豪くんに集中する。爆豪くんを引っ張って私の後ろに放り投げ、ビームシールドで受ける。だけど、キャパオーバーだ、貫通したそれが私の脇腹を貫く。

間髪入れずに今度は空気の壁の個性を応用したらしい衝撃波が飛んでくる。痛みに一瞬硬直した隙をつかれて吹き飛ばされる。なんて威力、ワンフオーオールみたいだ……何本も木をへし折って吹っ飛ばされた私は即座に飛び起き、すぐに戦線に戻る。トランシーバーの会話を聞くに海岸の方もかなり苦戦してるみたいだ。こつちに人は割けない！

「うわあああっ!？」

「がっ……!？」

「二人ともっ!？」

また、別の個性!？今度は青い鉱石と骨を合わせたような竜がヴィランの背中に現れて、爆豪くんを咥え込んで地面にクレーターを作る勢いで衝突した！まずいつ！デクくんも吹き飛ばされた！私は、爆豪くんを救出するためにビームサーベルを抜いて竜を真っ二つに両断する。その隙にデクくんが戻ってきて……50%だ！やばいつ！

「ワイオミングすまっ!？」

「鬱陶しい！」

突如、雷が落ちた。5つ目の個性……っ！しまった、私に高電圧の雷は相性が悪い！対策を施していても結局は私の手は金属で機械！絶縁体で作ってれば別だったかもしれないけど、今は戦闘用の合金の手足だ！二人に超高電圧である雷なんて撃たれたら死んでしまうのでとつさに電磁誘導ですべて私に落とすとした。脳天が真っ白になるほどの痛みと衝撃、手足のあちこちが中身から爆発してボロボロになる……う、うごけ……ないっ……！……！どんなに頑張っても、5分、いや3分は……！

「ネビルレーザーっ☆！」

「待たせた、希械っ！お前、俺の幼馴染をこんなにしやがって！」

「電気は俺の十八番だろうが、捕まえてやる！」

「みん、な……！」

青いレーザーが相手に襲い掛かる。かなり無理して腹痛を堪えている様子の青山君と硬化したえーくんが前に出てくれる。上鳴くんが私に過剰に帯電している電気を自分に移してくれたおかげで私は何とか手足の制御を取り戻した。急速に手足を直しつつ、立ち上がる。後ろでは障子くんと口田くんが真幌ちゃんと活真くんを確保した。

「ぐうっ……！……！……！」

「ナイン！しつかりして！」

「スライス、少年を……！」

「させねえええええっ!!!」

少年、つまり活真くんが狙いか！いきなり皮膚がひび割れ始めた頭を押さえて苦しみだしたナインと呼ばれたヴィランに赤い髪の毛のイスと呼ばれた女がいきなり表れて肩を貸す。

えーくんが活真くんを守ろうと向かって拳を叩きつける。スライスの個性らしい刃物のような髪の毛をすべて弾くが、苦し紛れに出した空気の壁がえーくんを阻んで吹き飛ばす。そしてそれは、私にぶつかった。

同時に、スライスは地面に煙幕手榴弾を投げつけたらしく、あたりに催涙性の煙が蔓延する。私たちがそれぞれ目と呼吸器を守るときに信号弾が飛ぶ。爆豪くんがろっ骨をかばいながら放った爆破が

煙を薙ぎ払うと、そこにはもう、だれもいなかった。

「やられた……！」

「とにかく事務所まで行こう！」

「希械、おぶされ。障子！爆豪と緑谷をたのむっ！口田！真幌と活真を！」

「ああ」

「うんっ」

ぬぐえぬ敗北感が、みんなを包んでいた。

## 115話

「ここまでやられちゃったら、いくら私でも復旧は無理だね」

「樫、それよりお前……腹」

「大丈夫、内臓は傷ついてないし焼けて止血も終わってる。ステープルで無理やり止めるしかないけど」

「……………くそ……………」

改めて私はビームで撃ち抜かれて焼けただれた脇腹をナイフで切開いて形を整えた後ステープルで無理やりバチツと止めて包帯をぐるぐる巻きにした後にみんなと合流した。高電圧でボロボロにされた体中のメカを修復し終えた私は一応平常通りの動きができる、かな？重症と軽症の合間くらいだけでもまあ私は頑丈なので平気だ。それよりも、目の前の状況を何とかしないとイケない。

目の前にあるのは、めちゃくちゃに破壊されてしまった島の基地局。電波の大本だ。幸いトランシーバーで私たち雄英の生徒は連絡が取れるけど、島民の皆さんの携帯電話は使えないし、私たちのスマホも同様。というか私のスマホ壊れた！雷のせいだ！またせっかく今度は百ちゃんとおそろいでそろえたのに！

はつきり言う、電波の回復は不可能だ。基地局の復旧用の物理キーも電子デバイスも、見事に粉々になっている。元の形すらわからない、私でも直せない。徹底的で、手慣れている。こうなれば次善の策だけど……さつきドローンを飛ばして本土に向かわせた。でも、つくまでは時間がかかる。行って救助が来るまで最短で10時間弱、本土が受け取ってくれるのが4時間後くらいだろう。それに撤退していったヴィランはまだこの島の中だ。

夕立がひどくなって降り始めた土砂降りの中、私は基地局の確認に来ていた。一人で行かせるわけないだろと轟くんが一緒に来てくれる。他のみんなは島民のケアに必死だ、休んでいるようで居心地が悪い。何がおおよそ私は万能だ、できないじゃないか。幸いこの雨のおかげで火災は消し止められているらしい。

私のおなかを見た轟君は歯を食いしばって、手を握り締める。彼の



話を聞くに海岸にやってきたヴィランはかなりの強敵だったらしい。異形型、私に近いタイプか。デクくんのようなパワー、炎を吐く特殊能力……轟君の氷結を軽く砕いてしまったのだとか。全部で4人、うち一人はえーくんと爆豪くんが捕まえた。でも、3人逃がした。実質わたしたちの負けだ。

「おかあさつーあ、あうう……」

「エリちゃん、ただいま」

「お、おなか……」

「えへへ、すりむいちゃった。平気だよ。抱っこしようね。百ちゃん、あんまり無理しちゃだめだよ」

「平気ですわ、これくらい。希械さんこそ」

轟くと一緒に帰ってきたのは英雄の仮事務所、ではなく島で一番大きな建物、サトウキビ工場だ。私の帰宅と同時にこちらにやってきたギガンテスが開いて、エリちゃんが顔を見せる。見てくれがボロボロなせいかエリちゃんに少なからずショックを与えてしまったみたいだ。痛みに鈍い体で助かった。普通なら笑顔で取り繕うのは無理かもしれないけど、私なら何とかなる。

「ギガンテス、電力を供給。ナノマテリアル生産、支援物資生成」

『ミッシヨン更新』

「上鳴くん、休んで。百ちゃんも。ギガンテスでやれるだけやるから。無理をするのは、次戦うときに取っておいて」

「次って……」

「はい……上鳴さん、おそろくもう一度ヴィランは来ますわ。狙いが……活真さんだというなら」

ギガンテスのエネルギー炉、核融合炉の電気をバイパスして避難所になっているこの工場に電気を供給し、ナノマテリアルを変換して最低限のサバイバルキットを生産する。炊き出しに参加したかったんだけど、みんなしてけが人は休めっていうものだから轟くんにつき合ってもらって基地局まで行ってきたんだ。私が首を振ると理解した百ちゃんの顔が曇る。増援は絶望的だ。

私が一応平常だっというのはエリちゃんもわかっているみたいだ

けど避難所に漂う暗い空気を察してしまったのか、顔色が優れない。緊張が続いてしまったのか、私に抱かれて安心したのか……少しゆすつて子守唄を歌っているか眠ってしまった。状況整理しよう。まず一つ、確保したヴィランはボイラー室で幽閉中。脳波測定器をつけての尋問でも口は割らなかつた。人道的観点から拷問は却下。当たり前ね。

次、怪我人は私、デクくん、爆豪くんの3人。他のみんなは擦り傷打撲程度。一番重症なのはなんと私、感電と脇腹のあれ。普通の人なら死んでたがそこは私、メカだから頑丈！と言っても予断はあまりよくない。できれば病院で消毒もしくは手術しないと中身から腐っていくと思う。一応傷跡は中身まで洗浄したけど、この後戦闘をするなら少々心もとない。

それで、デクくんと爆豪くんはろっ骨の骨折と切り傷。気絶してしまつてまだ目覚めてない。島のお医者様の個性じゃ傷口をふさぐ程度がせいぜいで骨折なんかの大きなケガは本当の病院か定期的に来る病院船で対処しているとのことだ。絶望的なことに、その船は3日後にしか来ないみたいだけど。

「デクくんと爆豪くんが目覚めたら、作戦会議だね。あのドローンが仕事を果たしてくれるまで、持ちこたえなきや」

「そう、だな……やらなきやなんねえ……俺たちしか、いねえんだからよ」

「上鳴……でも、希械がこんなんじや……」

「戦えるよっ」

「やめてよ、だめだつて……お腹に穴が開いてるクラスメイトを戦わせられないよ……」

上鳴くんが決意を見せてくれる。響香ちゃんは私のことを心配してくれている。雷のおかげで電力網は完全破壊、通信網も同じく。災害のような結果だ。だけど、ヴィランはきつとまだくる。そうなら、私は前線に出る。これは確定事項だ。誰が何と言おうと、私は出なきやいけない。あのナインというヴィランは強い。デクくんのパワーをもものともせず、私の兵器を無視できて、爆豪くんを弄べる。そ

んなヴィラン相手に、私を……いやA組の誰かを欠いた状態で何とかできるわけない。

まだみんなには伝えてないけど、あのヴィランは私の個性の劣化コピーを有している。それが大きな問題だ。私の個性はため込み、作り出す。異形型はほとんどおまけだ。真の効果は百ちやんと同じ、機械なら構造さえ把握してればなんだって作れること。なんでもできかねないというのが、一番怖い。なにせ、何をしてくるかわからないから。

まだ救いなのがナインの言葉を信じると完全に使いこなせていない劣化コピーであるということかな。脳無を経て、ナインを見て確信した。私の個性は、私以外が持つと生身を機械が侵食していく。重いんだ、オールフォーワンが言うことによると。これが本来の持ち主じゃないから起こってるのかそもそも私の形に近づけようとしているのかはわからないけど。

ギガンテスの中にもう一度エリちゃんを寝かしてあげて、ハロと白ハロを配置する。エリちゃんが起きれば、私が急行するから平気だね。さて、それで問題は……まだ目覚めない二人のことだ。精糖工場の休憩室らしい和室では島のお医者さんと三奈ちゃん、えーくんが必死になってけがをした人たちの応急処置をしていた。布団の上で寝かされているデクくんと爆豪くんのところでは、活真くんが何かをやっている。

「どうかな、みんな」

「ああ……おめえも休めよ希械。お前が一番重症なんだ、普通なら起きるのもダメなんだぞ」

「活真くんの個性、細胞の活性化なんだって。だから、爆豪も緑谷もそれで起きてくれたら、いいんだけど」

「すごくいい個性だね。うん、安心したかな。ん？真幌ちゃん、どうしたの？」

「その、痛く、ない？ヴィランの攻撃、おなかに……」

汗を流しながら、必死に集中する活真くんの手が緑に淡く光っている。もしこれで、彼ら二人が復活できるなら希望の目がかかりある

ね。それを見守っていると、座った私の近くに、真幌ちゃんがやってきた。いたずらしたのが負い目になっちゃっているのか、かなり気まぐすそう。まったく気にしてないんだけどなあ。でも、気丈な子だ。こんなに小さいのに弟を一番に考えて、私の心配まで。

「だーいじょーぶ」

「……ほんと？」

「ほんと。こんなのかすり傷、活真くんや真幌ちゃんの怖さに比べたらね。だから、だいじょうぶ」

「……ひぐつ、ぐすつ……」

エリちゃんにいつもやっているように、真幌ちゃんを抱っこする。気丈にふるまっていますが、エリちゃんよりちよつと大きいくらいの女の子。怖いに決まってる。絞り出すように泣き始めた真幌ちゃんを胸の内に抱きしめて、背中を撫でてあげながら私は活真くんを見守る。こっちが見えてないほど集中している彼の横にはえーくんがしっかりとスタンバイしている。えーくんの硬い手は、誰にだって安心感をくれるんだよ。

「ん……」

「うう……」

「起きたか！爆豪！緑谷！」

「切島……おい、ヴィランどうなったア!？」

「そうだ、活真ちゃんと真幌ちゃんは!?!それに樅さんも！」

「デク兄ちゃん！」

「バクゴー！」

「みんな、まずは状況の確認だ！確認されているヴィランは3人、通信、電力の復旧は不可能。僕たちがすべきことは」

「島の皆さんをヴィランから守り抜くことですわ」

「そして、ヴィランの目的は、活真くんの個性。他の二人はともかく僕らが戦ったあのナインってヴィランは町の人に興味はなさそうだっ

た」

「そうだね、活真くんだけに執着している感じ、だとおもう」

1—A全員での対策会議、ロッカールームの中に集まった私たち2人は、各々が持ち合っている情報をすり合わせて、状況を整理し、次はどうするべきかを話し合う。おそろくだけど、ヴィランのリーダーはあのナイン、そして何らかの形でヴィラン連合とかかわりを持っている。複数の個性を操れることと、活真くんの個性を奪うという発言も含めて。

「それと、みんなに共有しておきたいことがあるの。あのナインってヴィラン、私の個性をもってる。だから、何をしてくるかわからないよ。私が船を作っても、遠距離から攻撃されて沈められるかも」

「え、希械あんた、個性使ってたじゃん？奪われたってわけじゃ、ないの？」

「みんな、私がオールフォーワンに目を奪われたの、覚えてるよね？多分そこから、個性をコピーされたんだ。すでに私の個性を持った脳無もでてる」

「笑えねえ冗談だなあおい……ふざけてやがる」

爆豪くんの端的な感想が、その場みんなの気持ちを代弁している。疲れて眠ってしまった活真くんと真幌ちゃんに聞かせる話でもないのここで言ったし、割り切って対応するべきだ。みんなして怒ってくれているのはちよつとだけ、うれしいかな。さて、最低条件を確認しよう。まず最大目標である活真くんの防衛、次に巻き込まれる島の人たちの防衛、そして私たち個人の個性を奪われないようにすること、可能ならば那歩島本島にダメージを与えないこと。重要度はこの順番だ。

「簡単な話だ、次勝てばいいだけなんだよ！おいクソデク！樫！なんか考えてたんだろうが！さっさと話せ」

「う、うん。樫さんと一緒に情報をすりあわせて、作戦を考えてたんだ。多分、これが最善」

「そうだね。デクくんそこらへん頭回るから助かったよ〜。さて、那歩島本島の端っこに城塞の跡があるのはみんな知ってるよね？海

岸の浜が干潮の時につながる島」

地図でここに、と指示しながら私とデクくんが説明を開始する。まず一つ、敵の進行ルートを絞って各個撃破に持ち込める状況を作る。城塞跡は城がそこにあっただけあって地形が防衛向きだ。特にここ、滝と、鍾乳洞、そして岩場……住民の皆さんには城の裏手、断崖絶壁の裏にある洞窟に避難してもらおうのがいいだろう。私が船を作っておけば方が一の時脱出できる。1000人乗せられる船を作るのはかなりきついけどね。

「ナインって呼ばれた個性複数持ちが何で活真くんを狙っているかだけど……多分個性を使いすぎると体に何らかのダメージがあるんだ。だから、活真くんの細胞活性の個性を狙った」

「多分だけどこれがアキレス腱だね。個性を使い続けさせるんだ、私と百ちゃんを中心に遠距離攻撃と物量で波状攻撃を仕掛ける。できるなら、そこでヴィランを3人も分断して各個撃破に持っていきたい」

「でも希械さん、怪我が……」

「接近戦をしなければみんなも心配がすくないでしょ？それに、ここなら私の火力に制限がかからないから……昼みたいな無様は晒さない」

一回活真くんの個性を受けようとしたんだけど、活真くん個性が発現したばかりでうまく操れないみたいなの。デクくと爆豪くんの時は何とかできたんだけど、疲れ切っちゃってる今は個性を出せなかった。だから私の怪我はそのまま、金属のステープルで止まっているだけの状態だ。とにかく作戦が決まったら行動開始だ。夜のうちに、やってしまおう。

## 116話

自動砲台、地雷、その他もろもろの兵器の数々。まるで戦争だ。際限なく生み出されていくそれらの兵器は、自発的に移動し、私と百ちゃんが計算した迎撃位置に収まっていく。私の中の素材ストックは膨大、だった。先ほど生み出したタンカー船を封じた私サイズの超圧縮ボックスのおかげでかなり在庫が減ってしまった。そして、今百ちゃんと一緒に生み出している兵器たちのせいでもっと減る。

「厳しいかな、これは……」

「さすがにこれだけあれば……」

「十分、とは思えないの。こんなおもちゃで何とかできるならデクくと爆豪くんが何とかしてたはずだし」

脂質をほとんど使い果たして倒れる寸前の百ちゃんを支えながら私は厳しい予想を崩せないでいた。秒間20発でレーザーをばらまくタレットも、貫通力が高いビームを照射できる自動砲台も、衝撃波を発する地雷も……あのナインっていうヴィランを確認した後だはどうしてもすべてが玩具に見えてきてならない。

作戦が決まった私たちは、すぐに行動を開始した。島民の皆さんにヴィランから守るためと事情を説明して断崖絶壁の洞窟に避難してもらうことを容認してもらい、万が一の時は超圧縮ボックスに封じたタンカー船で脱出してもらうことも説明済み。透ちゃんと常闇くんが先導してすでに洞窟に向かつて行ってる。

A組の大部分は待ち伏せのために誘導するポイントと今できる最大限のトラップを作成している。デクくと爆豪くんが岩を砕き、持ち上げ、高所に配置する。それを尾白くんがへし折った木で止めて、瀬呂くんのテープで補強する。浜辺近辺の平たんな場所は私の機械で、高所から見下ろせる坂は百ちゃんとほかのみんなによる落石で。それも越えたらいいよ非致死性の兵器から切り替えて攻める予定だ。

多分、これでナインの活動限界まで個性を使わせ続けるというのはできると思う。既に彼らがどこにいるかというのは把握している。

島外れの灯台の中だ、スライスと呼ばれた赤毛の女が3回出入りしたのを空撮ドローンが確認している。現在私とリンクして監視中ではあるけど、いつ出てくるか……。

百ちゃんを横抱きに抱き上げて私は迎撃地点の一番上、山の頂上を目指す。私の視界では配置された兵器がどこにあるのか、どういふものなのかが刻銘に記録されている。その情報をすべてカットし、バーニアをふかして頂上へ戻る。既に頂上には細工を終えたA組の面々が戻ってきている。真つ暗だった空が白んできて、朝日が昇ろうとしていた。

「私のドローンが予定通り進めているのなら、向こうに救援要請が届いているはずだよ。籠城戦と耐久戦……経験はないけど、持ちこたえれば……」

「ああ！島の皆さんを守れる！」

「そうじゃねえ、勝つんだよ」

「うん、勝って守ろう」

「デク兄ちゃん……」

この島で見た何度目かの朝焼け。皮肉なことに、この島に来てから一番美しく思えた。同時に、それを塗りつぶすような黒と紫の人影が、女と異形の男を伴って灯台から出てくる。空撮ドローンの映像では最後に確認できた額のひび割れはない。どうやら、休んだことで万全とはいかないまでも戦闘が可能な程度にまで回復したと考えていいだろう。

来るよ、と私が呟くとクラスメイト達は顔を引き締めて自らの作戦ポイントへ向かう。異形型の男は滝へ誘導し、防御力身体能力で張り合えるえーくんと攻撃力が高い轟くんを中心に攻める。スライスは鍾乳洞まで追い込み、暗闇で強くなるダークシャドウをもつ常闇くんとトリツキーなことができる三奈ちゃんを中心にしていく。

私、爆豪くん、デクくんはもちろんナインを。途中の足止め役は百ちゃん、お茶子ちゃん、瀬呂くん、そして峰田くん青山くん透ちゃん。島民の皆さんの護衛役には砂藤くんを。活真くんと真幌ちゃんには障子くんと響香ちゃんを。同じ場所で私もメカを操作予定だけど場



合によっては、いや……ほぼ確実にデクくん爆豪くんと一緒にナインに挑むことになるだろう。

どこまでやれるか、と私はステープルで止めた脇腹の傷を確認する。活真くんは、個性を使えなかった。いや、不安定がゆえにデクくんたちを回復できたのが奇跡だったというべきか。エリちゃんはギガンテスと一緒に島民の皆さんと一緒にだから私が大怪我してるのはまだ知らない。泣きそうな顔で私に個性をかけようとする活真くんを大丈夫と止めてから、ゆったりと歩いてくるナインたちを映像越しににらみつける。

「青山さん、透さん、ポイント20。チャージを！」

『うん！行くよ青山君！』

『ウイ☆エネルギー充填……！』

「10……5……今だよ！撃って！」

『Can't Stop Twinkling☆スーパーノヴァ！』

『集光、屈折、歪曲！ハイッチーズツ！』

百ちゃんが作ったトランシーバーから一番最前線にいる透ちゃんと青山くんの声が聞こえてくる。双眼鏡を使ってナインたちが迎撃ポイントについたことを確認した百ちゃんの指示で青山くんがネビルレーザーを最大限溜め、私の合図で発射する。飛び出した青山くんのへそからは極太の青いきらめきを伴ったレーザーがほとばしり、さらにその前に構えていた透ちゃんに直撃する。

透ちゃんの体は透明な集光レンズ、レーザー、つまり高出力の光であるネビルレーザーを体内で曲げることができる。そして、発射角度も自由自在。ただでさえ高い収束率を誇るネビルレーザーが、透ちゃんによってさらに収束率を上げられ、貫通力が飛躍的に上がった状態になってナインを襲う。ナインは片手を前に出し、空気の壁でレーザーを防ぐが、足が止まった。

「今ですわ！」

「感知地雷！レーザータレット起動！」

『青山君もつと頑張れる!?!』

『……! プルスウルトラッ!』

『おまけもつけてあげる!!』

カチツと百ちやんがスイツチを押すと、ナインの周りの砂浜が地盤沈下を起こして沈みだす、がナインはネビルレーザーを防ぐことで手いっぱい動けない。それを助けようとするスライスと異形型の男の足元で私が仕掛けた感知式の衝撃波地雷が起爆、大きく二人を吹き飛ばし、さらにその間に地面に埋まっていたレーザータレットがよきつと現れてレーザーの弾幕を張って完全に分断させる。

ナインを釘付けにするために青山くんはさらに力を振り絞ってレーザーを大きくする。透ちやんの手袋が燃えるほどの光量のレーザーに対し、私はダメ押しでさらに仕込んでおいたマイクロミサイルを斉射。30発のマイクロミサイルはナインを覆いつくして大爆発を起こす……そして、煙が紫色のビームに薙ぎ払われ、タレットをすべて引き裂いた。

「防がれましたわ!」

「分断はうまくいったよ! 青山くん透ちやん! 脱出して砂藤くんと合流! 瀬呂くんお茶子ちゃん、出番っ!」

『おう! いくぜウラヴィテイ!』

『まかせて!』

『こちらインゲニウム! 分断に成功した! 交戦に入る!』

『こっちも! 切島! 気張ってよ! 希械ちゃん、またあとで!』

『ああ、行くぜ! 轟イ!』

ナインはどうかやら機械獣を出してあの光量のネビルレーザーから自分を守ったらしい。焼けて溶けた機械片が散乱している。服の袖口が燃え落ちている。貫通したんだ、通用してる! 無敵じゃない! 希望の目は……ある! 次はお茶子ちゃんを中心とした落石、瓦礫の破砕流! 落ちてくる岩の塊を背中からはやした機械獣と指の先から放つビームで相殺していくナイン。

そして、それぞれ分断が成功した先で戦闘を開始する。えーくんと三奈ちゃんの声がトランシーバーから聞こえた後、交戦音が聞こえて

くる。三奈ちゃんのところには常闇くんと私の兵器で仕掛けたトラップがある。えーくんのところには飯田くんや轟くんがいる。大丈夫だ、信じて。それよりも私は牛歩でも着実にこちらに来るナインのことを！

『あかん、効いてへん！』

『いや、あれでいいんだ！使わせ続ける！後につなげ！峰田ア！』

『準備できてるぜ！行けるよな!?!』

『まっかせて！』

ヘルメットを割られた瀬呂くんがお茶子ちゃんをテープで確保しつつ後ろに下がる。同時に私はあらかじめ作っておいたビームライフルを手に持ち、射角が開いたことを確認して撃ち込んだ。対人威力じゃない制限を外した本来の威力のビームライフルはナインが張った空気の壁にぶつかり、すさまじい熱量と圧力を叩きつける。ナインの手が火傷を負う、覆いかぶさった機械獣が溶けて変形する。貫通は無理でも、影響を与えることができるのは確認済み！この程度じゃ死なないでしょ！

さらにそこからのダメ押しにクラスの大多数の人数を動員した最後の手段、落石の雨あられ！お茶子ちゃんが最後の力を振り絞り上限である3トンを超え、目視だけで100はあるがれきがすべて宙に浮き、さらにはその奥の瓦礫も連動して転がるようにナインに向かって行く。ビームライフルで火傷した手を押さえたナインは空気の壁を張って防ぐけど、対応できずに埋もれていく。そして峰田くんのもぎもぎが瓦礫と瓦礫をくつつけてドーム状にした！

『鬱陶しい！』

『チイっ!!行くぞクソデク！』

『うん！かっちゃん！』

『よし、行つてくる！』

『待つて！希械姉ちゃん！』

一瞬で現れた青の鉱石の竜が瓦礫の大山を粉碎する。出てきたナインは、だいぶ消耗させることができたらしく肩で息をしていた。ビームライフルの一撃を受け止め焼け焦げた右手を抑えながら、こち

らに向かつて一歩一歩を進めてくる。ここで最終防衛ポイントを割ったと判断したデクくと爆豪くんが一緒になって飛び出す。当然私も飛び出そうと腰を浮かせたら、活真くんに止められた。

「もう一回、もう一回だけ僕に個性を使わして！絶対に治すから！」

「ダメ、もう時間がない！戦線を維持しないとやられる！」

『受けて！希械ちゃん！』

『お前がなおりや絶対勝てるぜ！それまではオイラたちに任せろ！』

『緑谷、爆豪！俺も混ぜろ！』

「クソデク、ぶちかますぞ構えろ！」

「うん、かつちゃん！活真くん！樫さんをお願い！」

作戦が成功したら撤退するはずだったお茶子ちゃん峰田くん瀬呂くんから通信が入り、デクくんたちの真後ろに姿を現した。それでも、と私は行こうとしたけど、百ちゃんの手と響香ちゃんのイヤホンジャックが私を抑えた。ここまでされたら、受けるしかないよね……！私は活真くんに向かつて一つ頷く。活真くんはすぐに私のおなかに向かつて個性を使う。細胞活性の光が、過たずに灯る。

これなら、と私は包帯を引きちぎってホツチキスの芯のように私の傷を固定するステープルを引き抜いた。活真くんはそれに軽く驚いたようだけどもしる個性の光は強まり目に見える速度で私の傷を修復していく。その間に、デクくと爆豪くんがナインに攻撃を加える。爆豪くんが怒鳴るようにデクくに指示を出し、それにデクくんが応える。滅多に見れない幼馴染同士の協力だ。

デクくんの右足に迸るエネルギーが渦巻いた。100%のスマッシュ、それに合わせるように上空で爆豪くんが爆発で回転を始める。二人して超大技の構え、隙の大きいそれを埋めるのは、ほかのみんな！瀬呂くんのテープと峰田くんのもぎもぎ、さらには粉碎を免れた瓦礫がひとまとめになってナインに襲い掛かる。それを空気壁で受け止めたナインを挟み込むように、大技が迫った。

「100%、セントルイススマッシュ！」

「榴弾砲着弾オ!!」

「ぐううぬ……俺の邪魔をするなあああつ!!」

天変地異もかくやという衝撃と爆炎がナインを包み込む。着弾の瞬間に、機械獣と鉱石竜が覆いかぶさり何重にも重なってナインを守る。衝撃波で瀬呂くんたちが吹き飛ばされていく。その一瞬、大技のスキについてナインはまた個性を使った。私がやられた大出力の落雷、それは丘を粉碎してクレーターに変える。デクくと爆豪くんかなり逸れて。

「なに……!?!」

「きよ、供給過多うえい……!」

「てめえ、やっぱり天候操作の個性かよ。避雷針が役立ったなあオイ」  
「もう一撃い!」

必勝の策だったはずの電撃は、帯電の個性をもつ上鳴くんが引き受けてくれた。その隙に飛び込んだデクくんのナノガンレットに包まれた100%の一撃は多重に張られた空気壁をガラスのように粉碎して余波でナインを吹き飛ばす。今度こそまともに入った!同時にナインの顔にひび割れが現れてマスクが外れる。苦しみだしたナインをよそに、私のおなかの傷が活真くんのおかげでふさがった。

「な、なおった!」

「ありがとう活真くんっ!お待たせっ!二人とも」

「ハッ眠ってたか樫テメエ!んで、セリフが違えんだよ」

「よかった、樫さん!活真くん、ありがとう!」

地面に膝をつき、のたうちまわって苦しむナインを前に私とデクくと爆豪くんが並び立つ。いつも通りの悪態をつく爆豪くんの、セリフが違うという言葉に一瞬首を傾げたけど、そういえばこういうタイミングで言うカツコいいセリフがあるんだった。私たちはみんな、今この場においては那歩島のヒーロー、じゃあ……言わなきゃならないよね!

「かつちゃんからまさかそんな言葉が出るなんてね……僕たちが!」  
「るせえ!いうべき時に言わなくてどうすんだ!……俺があ!」

「全くもってその通り!ナイン!ここであなたを止める!……私たちが!」

「「来た!」」

誰よりも強く優しかった平和の象徴の言葉を、私たちは目の前の  
ヴィランに向かって言い放つてやるのだった。